昭和五年二月廿五日印刷
昭和五年三月一日發行

國譯一切經 本緣部 七

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地一番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地一番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝(二)一一六番
　　　(三)〇四〇番

製本所 兩角製本所

索引

（頁數は通頁を表す）

—ヒ—

—フ—

—ヘ—

—ホ—

—マ—

—ミ—

—ム—

—モ—

—ヤ—

—ラ—

—リ—

—ロ—

——本緣部七索引終——

する能はず。毎日聲を出して自ら娯樂す。其の老比丘已に羅漢を得たり。沙門の功德皆悉く具足す。時に年少の妙音の比丘老沙門の音聲鈍濁するを見自ら好聲を恃みて之を呵して言く「今、汝、長老の聲狗の吠るが如し」と。輕く呵し已竟る。時に老比丘便ち年少を呼ぶやう「汝、我を識るや不や」と。年少答へて言く「我、大いに汝を識る。是迦葉佛の時の比丘なり」と。上座、答へて曰く「我、今已に阿羅漢道を得、沙門の儀式悉く具足せり」と。時に年少の比丘其の說く所を聞き心驚き毛竪ち惶怖れて自ら責め、卽ち其の前に於て過咎を懺悔す。時に老比丘卽ち懺悔を聽す。「其の惡言に由りて五百世中常に狗の身を受け其の出家して淨戒を持つに由るが故に今我に見ゆるを得て解脫を得ることを蒙れり」と。

爾の時、阿難、佛の說き給ふ所を聞き歡喜信受し頂戴奉行せり。

賢愚經（終）

る。衆賈頓に息む。人の看ざる閑靜の時を伺ひその狗便ち衆賈人の肉を盜み取る。時に衆人卽ち瞋恚を懷き便ち共に狗を打つて、其の脚を折り空野を棄て置き之を捨てゝ去る。

時に舍利弗、遙に天眼を以て此の狗身の攣躃して地に在り、飢餓困篤し、命を懸け死に垂んとするを見、衣を著け鉢を持ちし城に入りて乞食し得已り持ちて出て飛びて狗所に至り、慈心憐愍し食を以て施與す。狗其の食を得て餘命を濟活ひ心甚だ歡喜し倍踊躍を加ふ。時に舍利弗、卽ち其の狗の爲めに微妙の法を具足し解說せり。狗卽ち命終し舍衞國の婆羅門の家に生る。時に舍利弗、獨り行きて乞食す。婆羅門見て之に問ふて言く「尊者獨り行き、沙彌無き耶」と。舍利弗言く「我沙彌無し。聞く、卿に子有りと。當に用つて與へらるべし」と。婆羅門、言く「我に一子有り字を均提と曰ふ。年旣に孩幼なれば使命に任へず。比前みて長大せば當に用つて相ひ與ふべし」と。時に舍利弗、彼の語を聞き已り卽ち戢めて心に在り。祇洹に還至る。年七歲に至り、復、來りて之を求む。時に婆羅門卽ち其の兒を以て舍利弗に付し出家せしむ。時に舍利弗、便ち其の兒を受け將ゐて祇洹に至り沙彌と爲るを聽す。漸く爲めに具に種種の妙法を說く。心意開解け阿羅漢を得たり。六通淸徹し功德悉く備はれり。時に均提沙彌始めて道を得已り自ら智力を以て過去の世を觀ず。本何の行を造りて來此の形を受け聖師に遭ふを得て果證を獲たるやと。前身を觀見するに「一つの餓えたる狗と作り我が和上舍利弗の恩を蒙り今人身を得幷びに道果を獲たり」と。欣心內に發りて自ら念言ふらく「我、師恩を蒙り諸の苦を脫するを得たり。今、當に身を盡し須ふる所を供給し永く沙彌と作り大戒を受けざるべし」と。爾の時、阿難、而も佛に白して言さく「不審なり、此の人曩昔の時何の惡行を興し此の狗の身を受け何の善根を造りて解脫を得たるや」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「乃往過去に迦葉佛の時、諸の比丘有りて一處に集在る、時に年少の比丘音聲淸雅善く巧に唄を讚す。人の樂しみて聽く所なり。一人の比丘年高、耆老音聲濁鈍にして經唄

【三】攣躃。手のひきづり足のなへること。

索むるや」と。上座維那、摩摩帝に語るやう「檀越前の時寶を以て僧に施す。汝をして之を擧げしむ、今、僧食盡き當に之を〔三〕裨佐すべし」と。時に摩摩帝、瞋恚りて言く「汝の曹屎を噉へ。此の寶は是我が所有なり。何に緣りて乃ち索むるや」と。時に彼の衆僧摩摩帝の惡意を起すを見已り、即便ち散り去れり。「其れ僧を欺き惡口して罵るに由るが故に身壞し命終り阿鼻獄に墮し身常に沸屎の中に宛轉し九十一劫を歷たり。乃ち獄より出でて今復此の屎尿の池の中に墮ち年歲を經歷し未だ解脫を得ず。所以は何ぞ。過去に佛有り名づけて尸棄と曰ふ。諸の比丘を將ゐ此の坑に臨み過ぎ、諸の弟子に示し爲めに本末を說けり。復、次に佛有り、名づけて〔四〕隨葉と曰ふ亦復、諸の比丘衆を將ゐ從ひ其の所に往到り其の因緣を說き給ふ「此より命終し還び地獄に入り數萬億歲を經歷て其の後命終して復是の中に生る」と。次に復佛有り名づけて拘留孫と曰ふ。亦徒衆と共に圍遶して此の坑に至り諸の比丘に垂示し其本末を說き給ふ。次に拘那含牟尼佛と名づく。亦弟子と共に此の坑に來至り、次に迦葉佛も亦此に來止り、咸弟子の爲めに其の因緣を說き給ふ。次に第七佛我れ釋迦牟尼今汝等に本末因緣を示し其の虫を觀視せり。是の如く一切の賢劫・當來の諸佛各各皆爾なり。諸の弟子を將ゐ其の坑所に到り其の虫を指示し其〔五〕曩昔造る所の因緣を說く」と。

時に諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き心驚き毛竪ち共に相ひ勅厲し身・口・意業を愼み護り、佛語を信受し歡喜奉行せり。

六十九、〔一〕沙彌、均提の品　第六十二

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、尊者、舍利弗、晝夜三時恒に天眼を以て世間を觀視す。誰か度す應き者ぞ輒ち往きて之を度せむと。爾の時、諸の賈客有りて他國に詣らむと欲す。其の諸の商人共に一狗を將ゐ中路に至

【三】裨佐。おぎなふこと。

【四】隨葉。毘舍婆如來のこと。大正本隨葉とあるは誤植か。

【五】曩昔。さきの日。

【一】沙彌、均提品。西本、No. 51.(Dge-tshul kyun-tohi leḥu)。

爾の時、城の邊に一汪水有り。汚泥不淨にして諸の糞穢多く屎尿處を臭はす。國中の人民凡鄙の類恒に瑕穢を以て其の中に投歸す。一大虫有り、其の形像蛇加ふるに四足有り。其の汪水に於て東西馳走し或は沒し或は出て年載を經歷せり。常に其の中に處り苦を受くること量り無し。爾の時、世尊諸の比丘を將ゐ前後圍遶し彼の坑所に至り、諸の比丘に問ひ給ふやう「汝等、頗此の虫の宿緣の造る所の行を識るや不や」と。時に諸の比丘、咸皆思量し能く斯の造る所の行を知ること有る無し。俱に共に佛に白さく「皆云く知らず」と。

時に佛、告げて曰く「汝等當に聽くべし、我、汝等の爲めに斯の造る所の行を說くべし。過去に佛有り毘婆尸と名づけ、世に出現し敎化已に周り神に遷りて涅槃し給ふ。彼の佛法中に十萬の比丘有り、梵行を淨修し閑居し靜を樂しみ、一山に依る。其の山の左右に好き林樹有り華果茂り盛にして蓊欝比無し。其の諸樹の間流泉浴池淸涼にして樂しむ可し。時に諸の比丘依りて慕ひ住止せり。善に遵ひ道を行じ懃修懈らず、悉く初果乃至四果を具し凡夫有ること無し。時に五百の估客有り、共に相ひ合集りて大海に入らむと欲し、徑路を發引し此の山を經由す。諸の比丘の心を剋して精懃するを見、內に欣敬を懷き供を設けむと思欲す。時に諸の賈客共に相ひ合し率ゐ往きて衆僧を請し供養せんことを求索む。(比丘等)諸の檀越に値ひ各各已に請じ日日相ひ次ぎ、理として意に從はず。卽ち衆僧に詣り辭して大海に入らんとし、「設し我等の衆安穩にして來り還らば當に供養を設くべし。願くば哀みて許されよ」と(請ふ)。時に僧默然として請を受く可きを允す。衆賈海に入り大に珍寶を獲平安に還り至り衆僧の所に到る。衆くの妙寶の中最上の價ある者を選び用つて衆僧に施せり。規として飮食を俟つ。若し食多き者は意に隨つて之を用ふ。時に衆僧其の寶物を受け持用つて僧の摩摩帝に付授く、後に於て衆僧食具に盡るに向ひ其れに從つて求索め、爾の時珍寶を用つて當に食を續けんとす。時に摩摩帝、衆僧に答へて言く「賈客前の時自ら我に寶を與ふ。何に緣りて乃ち

【三】汪水。濁れる池。

し聖果を得しめたり。何ぞ況んや今日をや」と。衆會白して言さく「不審なり、先の世度する所云何」と。

尊者、告げて曰く「乃往過去に波羅㮈國に一つの仙山有り、五百の辟支佛其の中に止住し給ふ。時に獼猴有り、日來りて供養し儀容を觀奉る。諸の辟支佛後盡く涅槃し給ふ。復、五百の梵志有り續きて中に在りて止まる。諸の梵志等或は日月に事へ或は復火に事ふ。日月に事ふる者脚を翹げて之に向ひ其の火に事ふる者朝夕之を燃す。時に彼の獼猴其の脚を翹ぐるを見れば便ち取りて挽き下げ、其の火を燃すを見れば便ち取りて之を滅す。獼猴時に端坐思惟す。諸の梵志見て自ら相ひ謂ひて言く、此の獼猴なる者將に我が曹の爲めに茲の威儀を示さむとすと。尋いで各身を整へ眞理を諦察し、心意開解け盡く辟支佛道を得たり。彼の獼猴とは我が身是なり」と。衆會、復白さく「何の因緣を以て獼猴の身を受け給ふや」と。

尊者、告げて曰く「乃往過去九十一劫に毘婆尸佛有りて世に出現し給ふ。諸の比丘有り、波羅㮈の仙山中に在りて住す。時に應眞有り、山の巓に登上り、脚を放にして輕く疾し。一年少の道人有りて是の言を作さく「彼の行くこと飄速にして正に獼猴に似たり」と。此の因緣に由り五百世中常に獼猴と作る。是を以ての故に凡そ四輩に有りては自ら口を護り妄りに言を出すこと勿るべし」と。

尊者、優波毱提、此の法を說くの時一切大會須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者、緣覺の善根を種うる者、大乘心を發し不退に逮る者有り。稱て計ふべからず。其の敎を信受し歡喜奉行せり。

六十八、汪水中の虫の品　第六十一

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閱祇、耆闍崛山中に在しき。

【八】儀容。とりつくろひたるかたち。今は辟支佛の尊容のことなり。

【一】汪水中虫品。西本、No. 50.(Srin-buhi lo-rgyus bstan-pahi leḥu)(虫話の敎の品)。

盡くすも却かしむる能はず。復、帝釋に詣り不淨を除くことを求むるも、帝釋、報へて言く「其、此を作す者斯の人能く捨つ。是れ吾が力の却くるに任ふる所に非ず」と。魔王、復去り廣く諸天に問ひ乃ち梵天に至り、之に向つて喜びて言く「願くば玆の穢を除け」と。各答ふること初の如く「力の辦ずる所に非ず、事已むを獲ざるなり」と。尊者に來詣りて謂言ひて曰く「佛は實に大德にして、慈心無邊なりき。諸の聲聞の輩は誠に凶忌と爲す、何を以て之を驗するか。我乃ち昔日諸の魔兵を將ゐ凡そ十八億なり。菩薩を攻圍し其の道を敗らむと欲す。猶慈悲を懷きて以て怨と爲さず。我、今小しく觸るゝに相ひ困むること乃ち爾なり」と。尊者答へて言く「理、實に是の如し。佛は之れ我に於て百千萬倍なり、喩と爲す可からず。須彌山を彼の芥子に比するが如し。大海水を牛跡に方ぶるが如く、師子王と野干[六]と大小の形を喩ふるも實に相ひ及ばざるが如し」と。尊者、魔に語るやう、「吾、末世に生れて如來を見ず。汝の神力能く佛を化作すと聞く、試に一つの現れを爲せ、我、之を觀むと欲す」と。魔王、答ふるやう「我、今化現するに、愼みて禮を爲す莫れ」と。對へて曰く「禮せず」と。是の時、魔王、身を化して佛と作る。軀體丈六、紫磨金色にして三十二相八十種好あり光明赫奕として日月に踰え倍す。尊者欣悦し便ち前みて稽首す。魔、還び形を復し、尊者に語りて言く「向に云へり、禮せずと、今、禮を作すは何ぞや」と。尊者、答へて言く「我、自ら佛を禮して汝を禮せず」と。魔、復謝して曰く「唯、願くば矜愍みて此の死狗を却けよ」と。尊者、告げて曰く「汝、慈心を起し群生を擁護せば則ち此の死狗變じて寶飾と成り、若し惡意を懷かば則ち狗屍と作らむ」と。魔、畏を以ての故に恒に善き想を發せり。是の時尊者成道已後化する所の衆生の中、四果を得る者一人を一籌[七]とし、籌の長さ四寸なり。此の如きの籌一房に滿つ。房の高さ六丈にして、縱廣亦爾なり。是に於て衆人尊者に白して言さく「尊者の福德實に弘博と爲す。群萌を化度すること稱げて數ふ可からず。尊者、告げて曰く「吾、畜生と爲りし時亦衆生を化

【六】野干(Sigala)。狐の如きものなり。

【七】籌。かずとり。又はくぢに用ゆる竹片なり。

愛せず。而も此に來るは、相ひ憐れむを用つての故に來りて此に到る耳」と。因て爲めに四非常法を宣說せり。「是の身は不淨・苦・空・無我なり。」一一諦かに察せば何をか恃む可き有らむ。愚惑の徒妄りに染想を生ず」と。婬女法を聞き法眼淨に逮べり。優波毱提は阿那含を成ぜり。時に耶世竒、復居士に從ひ此の少年を索め、用つて沙彌と作さんとす。敎を奉じ持つて與ふ。將ゐて精舍に至る。其に十戒を授く。年二十に滿ち便ち具足(戒)を授け[四]白四羯磨竟り、阿羅漢道を得て三明・六通皆悉く滿ち具れり、言辭巧妙にして演ぶる所竆り無し。便ち衆人を集め爲めに說法せむと欲す。時に魔波旬、會處の所に於て而も金錢を雨らす。衆人競ひ拾ひ竟に法を聞かず。第二日に於て復大衆を集む。魔花鬘を雨らし、以て衆心を亂す。第三日に於て復更に大衆を集む。魔王、便ち一大象を化作し紺琉璃色にして、口に六牙有り、其の一つの牙の上に七つの浴池有り、其の浴池の中に七つの蓮花有り。一一の蓮花の上に七玉女有り。斯の諸玉女皆伎樂を作す。其の象優遊徐步し側に會す。衆人目を顧みて情法に在らず。第四日に於て復大衆を集む。魔王、復一女人を化作す。端正美妙にして尊の後に侍立す。衆人、目を注ぎ忽ち法事を忘る。時に尊者、尋いで其の女を化し白骨と作さしむ。衆人見已り乃ち專ら法を聞く。道を得る者衆し。尊者、本來一つの狗の子有り、日日耳に於て竊に爲めに說法す。其の狗命終し第六天に生れ、魔波旬と共に一床に坐す。魔王、思惟ふやう「此の天の大德乃ち我に等し、何より沒して此に來生すと爲すや」と。尋いで觀察し狗身よりと知り、彼の沙門、相ひ辱しむること、乃ち爾なりと、遙に尊者の禪定に入る時を伺ひ一寶冠を持つて其の頭上に著く。既に定より起ち頂に冠有りと覺え、尋いで便ち思察し魔の所爲と知り、卽ち神力を以て魔に感じ來らしめ、其の狗屍を化して[五]髴飾に似せしめ、魔に告げて言く「汝、我に冠を遺る。深く來意を謝す。今、髴飾を以用つて相ひ酬ひ貽らむ」と。魔王、受け已り、便ち天上に還る。而して著くる所を見るに乃ち是れ死せる狗なり。心中厭惡して之を去らむと欲し、其の神力を

【四】白四羯磨。僧中の事務を行ふに授戒の如き重法に就ては僧衆に向て先づ其の事を告白するを白と云ひ、次に三たび其可否を問て其の事を決するを三羯磨と云ふ。

【五】髴飾。女の髮飾。

「大子は外を營み、次子は內を營む。其の家居に於て乃ち興隆す可し」と。情中戀惜し未だ相ひ許すこと能はず。「若し後更に有らば信に當に惠を奉ぜむ」と。此の耶貰犄は是れ阿羅漢なり。三明具足し能く人根を知る。此の二兒を觀るに道と緣無し。亦自ら意を息め慇懃に求めず。時に彼の居士復更に男を生む。顏貌端妙にして形相殊特なり。時に耶貰犄、復往きて從ひ索む。其の父、報へて曰く「兒今猶小なり。未だ奉事する能はず。又復家貧しく以て餉を送る無し。且く之を停めむと欲す。大となるを須ちて與ふべし」と。年、漸く長大し才器益盛なり。父、財物を付し肆に居り販賣せしむ。時に耶貰犄往きて其の邊に到り、爲めに說法し、敎へて繫念せしむ。「白・黑の石子を以用て當に籌算すべし。善念は白を下し惡念は黑を下せよ」と。優波毱提其の敎を奉受し善惡の念に輒ち石子を投ず。初めは黑偏に多く白は甚だ少し。漸漸修習して白・黑正に等し。繫念止まずして更に黑石無く純ら白なる者有り、善念已に盛にして、初果を逮得せり。時に彼の城中に婬女人有り、婢を遣はし錢を持ち往きて從つて花を買ふ。優波毱提、心性質直にして饒く其の花を與へ恨み有らしめず。婢、花を齎らし歸る。婬女甚だ怪しみ、其の婢に問ふて言く「前日花を買ひ錢を用ゆること一種なり。往に何を以て少く今は何を以て多きや。將に前の時には相ひ欺きて減ずること無かりしや」と。婢、之に答へて言く「今日、花主慈仁にして禮を守り平等に相ひ與ふ。饒く獲る所以なり。又、復其の人形體殊妙なり。大家若し見なば復恨有らず」と。婬女之を聞き信を遣はし請喚す。優波毱提自ら仰へて往かず。又、復、延召[三]す。終に命に從はず。時に婬女、王家の兒と共に交通し、其の衣服の衆寶の成す所を貪ぼり、利興り義衰ひ、殺して之を藏す。王家搜し覓めて其の舍に於て得、尋いで婬女を取り手足を斬截し其の耳鼻を劓き高標に懸け竪てゝ塚の間に置けり。此の苦を荷ふと雖も然も未だ命終せず。優波毱提往きて其の所に到る。婬女謂ひて言く「往者は端正にして肯へて相ひ見えず。今日形殘はる。何をか看る所ぞや」と。尋いで卽ち對へて曰く「吾、色を

【三】延召。客を通し面會すること。

佛、是を說くの時歡喜せざるは莫し、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り。緣覺の善根を種えし者、菩薩心を發す者有り、皆佛語を信じ頂戴奉行せり。

六十七、[一]優波毱提の品　第六十

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、此の國に一人の梵志有り。阿巳毱提と字す。聰明にして廣學古を探り今に達す。佛の所に往至り沙門と作ることを求む。因つて復啓白すやう「若し我れ出家して智慧辯才舍利弗と等しからば情則ち甘樂し、若し當に如かざれば便ち自ら家に歸るべし」と。佛、尋いで答へて曰く「卿、如かざるなり」と。時に彼の梵志止めて道を學ばず。其の舍に還歸る。世尊、後に於て衆會に告げて言く「我、滅度し已り一百歲の中此の婆羅門而も當に染化し、六通を逮成し、智慧高遠にして衆生を敎化し其の數塵の如くなるべし」と。佛、涅槃の時、阿難に告げて言く「我、滅度の後一切の經藏悉く汝に付囑す。汝、當に受持し廣く流布せしむべし」と。世尊、旣に滅し阿難法を持つ。阿難後の時復身を捨てむと欲し、弟子[二]耶貰羇に告げて言く「我れ世を去るの後所有典要汝當に護持すべし」と。因つて復告げて曰く「波羅㮈國に居士有り、字を毱提と爲す。此の人に子有り優波毱提と名づく。卿、好く求索めて度し用つて道を爲せ。卿、若し壽終らんとするとき法を以て之に付せよ」と。阿難、滅し已り此の耶貰羇佛法を奉持ち世間を遊化し、度する所甚だ多し。復、波羅㮈に至り、往きて居士に造り、與共に相ひ識り、數々往來す。其の彼の居士一男兒を生む。阿巳毱提と字す。年幼稚に在り。時に耶貰羇、往きて從ひ之を索め、道を爲さしめむと欲す。其の父答へて曰く「始めて一子有り、當に門戶を紹ぐべし。爾る可からず。若し後に更に生るれば便ち用つて相ひ給せむ」と。後復、男を生む。難陀毱提と字す。時に耶貰羇復往きて從ひ索む。其の父報へて言く

【一】優波毱提。(Skt. Upagupta)西本、No.47. (U-pā-kub-tḁhi le-hu)。

【二】耶貰羇。西語に(Yaśes-ka)と音寫す。

比無し。是の時に當り其の家に人有り。海中より來り一つの鳥の卵を齎らし用つて長者に奉る。長者納受し少しの時間を經て其の卵便ち剖く。一つの鳥鶵を出す。毛羽光潤なり。長者之を愛し、子と與に弄れしむ。漸漸長大し互に相ひ懷念す。時に長者の子鳥の背の上に騎る。鳥、便ち擔ひ飛びて處處に遊觀し、情既に滿ち厭ひて其の舍に還歸る。日日此の如くにして多時を經歴たり。其の長者の子他國の王の那羅戲を作すを聞き便ち斯の鳥に乘じ往きて彼の間に至る。來下して觀看る。鳥、樹の上に住む。(長者の子)偶王女を見、情、便ち染愛し、其の時信を遣はし情狀を謄し說き、王女、然なり可しとして、便ち與共に交る。事を作すに密にせず。王の知る所と爲り、人をして推捕へしめて、尋いで時に獲得て其の身を縛束る。而して斬戮に當り長者の子言く「諸君、何すれぞ力を勞して我を殺すや。我が樹に上るを聽せ、自ら投じて死せむ」と。諸人聽許す。便ち起ちて枝に攀ぢて上る。其の鳥に騎乘りて虛を翔りて去る。此の鳥に因るが故に壽命を延すことを得たり。

佛、阿難に告げ給ふやう「彼の時の長者の子とは今の婆世躓是れなり、爾の時の王女とは今の伎家の女是れなり。爾の時の鳥とは則ち目連是れなり。過去世の時色に惑ひ困を致し鳥に因つて濟を得たり。今、復色を貪り當に死亡すべきに垂んとして、目連に由るが故に安穩を得るを致せり。

其の婆世躓說く所、聰辯にして無漏を成ぜしは乃往過去に婆羅㮈國に一人の居士有り、辟支佛の來り從ひ飯を乞ふを見、居士、卽時食を以て施與し因つて復勸請し經法を說かしむ。其の辟支佛辭して能はずと云ひ、鉢を擲ち虛空に騰踊りて逝く。居士、念じて曰く「斯の人神力あり、變化無方なり、然れども其の道化を敷宣する能はず。願くば我れ後に生れ聖尊に遭値うて此の士に勝ること巨億萬倍にして、法義を演敷し無窮無盡ならむ。我身をして亦果證を獲しめむと。此の因緣に由り今世聰明にして羅漢果に逮べり」と。

しむ。彼の家報へて言く「君は是れ大姓にして、我は是れ小人なり。素より[三]儔偶に非ず、何に緣り爾るを得むや」と。其の兒、慇懃に情猶息まず。復更に信を遣はし重ねて從つて之を索む。彼の家、答へて言く「若し能く我の如く種種の術・歌舞・戲笑を習ひ悉く備に知らしめ及び王の前に於て試み中を得せしめよ。然る後乃ち當に共に婚姻を作すべし」と。兒、其の色に惑ひ鄙事を恥ぢず。卽ち彼の家に詣り戲藝を學習す。數時の間に皆已に成就せり。是の時、國王諸の[四]那羅を集め幢に上り窓に投じ空中の索を走る等、是の如き種種衆多の戲事をなさしむ。時に長者の子亦王の邊に往き次いで伎を現はさんとして索に上りて走る。索を走ること既に竟り、王、眈して見ず。復「更に上れ」と勅す。命を奉じ之を爲し、氣力漸く劣へ中道に墮ちむと欲す。心中惶懼し歸依する所無し。尊者目連、虛を陵え邊に至り、之に告げて曰く「卿の今日の如き、寧ろ身命を全くし出家學道するや、寧ろ地に墮ちて彼女を娶ることを爲す耶」と。尋いで之に報へて言く「願くば自ら存濟らへて女を用ひざるなり」と。目連、卽時、虛空の中に於て化して平地と作す。其の人見已り情の怖れ便ち止み、地に因つて下り身首を全くするを得、既に安穩を蒙り喜び自ら勝えず。目連に隨逐つて世尊に往詣り禮拜供養す。佛、是の時に於て廣く妙論を說き給ふ。所謂論とは施論・戒論・生天の論と、欲を不淨となし出要を最も快となすことなり。心意暢解し便ち初果を得たり。因つて復佛に白さく「願くば出家を得て正法を奉修めむ」と。世尊、之を聽し給ふに、鬚髮自ら落ち法衣身に在り便ち沙門比丘となり、專精禪思正業を遵修め諸漏を盡くすを得、阿羅漢と成れり。慧命阿難、前みて佛に白して言さく「婆世躓沙門は往昔の時彼の女子と何の因緣有りて心染み惑著し幾ど危沒を致し、復、目連と共に何の善因を造りて、今其の恩を蒙り寧濟ひを獲たるや、復、何の因緣ありて自ら應眞を致せるや」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『乃往、過去無量の劫に波羅㮈國に大長者有り。初め一子を生む。端正

【三】儔偶。夫婦となる同類。
【四】那羅。俳優のこと。

來九十一劫天上・人中恒に與に倶に生れ福を受け快樂しみ、常に三事有りて餘人に勝る。一には形體端正、二には衆の敬愛する所、三には恒に長壽を得、爾許の時を經るも三塗に墮ちず。今、我が世に遇ひ沐浴清化し諸の塵垢盡き咸應眞に逮べり。爾の時の老母を知らむと欲せば今の蘇曼女是れなり。爾の時の十年少とは今の十羅漢是なり」と。

佛、此を說き給ふの時其の大會に在るもの須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者、大乘の意を發して不退に逮る者有り。佛語を信受し歡喜奉行せり。

六十六、婆世躓の品　第五十九

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閱祇耆闍崛山中に在しき。

時に此の國に豪富の長者有り、尸利躓と名づく。其の家大いに富み七寶盈溢る。其の婦、懷妊し月滿ちて男を生む。形容嚴妙世之に雙ぶもの少し。父母喜慶び深く用つて自ら幸とし、便ち相師を請じ吉凶を占はしむ。其の二親に語るやう「斯の子の福德宗族を榮燿す」と。長者、益歡び情無量に在り。因て復勸請し便ち爲めに字を立てしむ。相師、問ふて曰く「此の兒有りしより何の瑞應有るか」と。長者、報へて曰く「其の母本來口を訥り辭を鈍る。既に此の兒を懷き談語巧妙なること常より踰え倍せり」と。便ち爲めに字を作り婆世躓と號す。年歲已に大なり。聰才群に邈なり。其の等輩と與に遊行觀看し那羅伎の家を見る。一女子有り面貌淸潔にして暉容希有なり。心便ち染著し娉娶を得むと欲す。歸りて父母に啓し爲めに求索めんことを願ふ。父母告げて言く「吾は是れ貴姓なり。彼は是れ凡賤なり。高卑匹に非ず。如何が婚を爲さむ。子の情深く愛して自ら釋く能はず、重ねて更に啓して言く「門戶を問ふこと莫く但其の身を論ぜよ。幸に顧愍を垂れ哀みて我が爲めに求めよ。若し志の如くならずば便ち自ら命を殞とさむ」と。父母之に從ひ人をして往きて求め

【一】婆世躓品。西本、No. 38.(Pa-śi-tsir gyi lehu)。

【二】尸利躓。西名、(Śi-ri-ci)。

ち「佛とは何人ぞや、幸に願くば具に宣べよ」と。母、諸子に告ぐるやう「卿等聞かざるや、迦維羅衛淨飯王の子、形相炳著にして應に聖王と爲るべし、老・病・死を厭ひ出家學道し願行成就して無上果を得給へり。巨身丈六相好比無し。三明・六通・遐鑒外無し。前みては無窮を知り却きては無極を知り三世を觀知すること掌中の珠の如し」と。諸子、之を聞き心の內に欣然とし因て更に母に問ふやう「佛、今、近・遠見る可しと爲すや不や」と。母、便ち答へて言く「今、舍衛に在り」と。諸子、母に啓さく「往きて佛を覩むことを求む」と。母、卽ち之を聽す。諸子同時に共に舍衛に詣る。其の祖須達之を見て情悅び倍愛念を加へ將ゐて祇洹に至り如來を覲奉る。諸子佛の姿好、形貌、前の聞く所を踰ゆること數千萬倍なるを見、五情欣喜し自ら勝ふること能はず。佛、因て緣に隨つて爲めに妙法を說き給ひ、十人俱時に法眼淨を得たり。便ち復佛に白さく「出家を求索む」と。佛、之に問ふて曰く「汝の父母聽すや不や」と。答へて言く「未だ諮らず」と。佛、言く「父母聽さざれば化を染むるを得ず」と。須達、復言く「斯は是れ我が孫なり。我自在を得、我今之を放す。理に於ても亦可なり」と。佛、便ち允然とし聽して道を爲さしむ。鬚髮、自ら落ち法衣身に在り便ち沙門と成る。大業を精懃め盡く羅漢を得たり。斯の十比丘甚だ相欽敬し行けば則ち俱に進み同處に住在す。國中の人民[五]宗戴せざるは莫し。阿難、佛に白さく「此の十比丘は何の福慶有り貴家に生れ容貌奇特にして世尊に遭値ひ奉り苦際を盡せるか」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「乃往、過去九十一劫に毘婆尸佛有り世に出現し教化畢訖りて般涅槃し給ふ。舍利を分布して無量の塔を起せり。時に一塔有り朽ち故りて崩壞せり。一老母有りて之を修治む。年少の十人有り偶行きて覩見、老母に問ふて曰く「何をか施し爲す所ぞ」と。老母語りて言く「斯は是れ尊塔なり。功德彌弘し、是を以て修補し、善果を望むを欲す」と。年少歡喜し助けて共に功を興せり。所作已に竟り誓つて母子と爲る。其の十年少願つて共に同生せり。是れより已

【五】宗戴。宗主として戴くこと。

る。其の女佛に見え情倍欣踊び、好香を得て佛の住室を塗らむと願ふ。斯の女の手の中に賓婆菓有り、佛、從つて之を索め給ふに教を奉じて便ち與ふ。佛、尋いで上に於て香の【二】種稷を書き還び以て之を與へ給ふ。女、其の父と共に城裏に還歸り、便ち行きて種々の妙香を推し買ひ、佛の須え給ふ所の如くなし、持つて祇洹に詣り、躬、自ら擣き磨ること日日是の如し。時に特叉尸利國王、其の一兒を遣はし舍衛に到らしむ。初めて他土に適き廣く行きて觀看り、漸漸展轉して復精舍に至り、蘇曼女の中に在りて香を磨るを見、其の姿容を愛し得て妻と爲さむと欲す。即ち往きて城に入り、波斯匿王に啓して云く「此に女有り、我意に可適ふ。願くば王よ賜はりて我が志に違ふこと勿れ」と。王、之に問ふて曰く「是れは誰の家の女ぞ」と。答へて言く「是れ須達の女なり」と。「卿自ら從ひ索めよ、吾、知る能はず」と。復、重ねて王に啓さく「王若し相ひ聽るさば當に自ら之を求むべし」と。王、言く「爾る可し」と。彼國王の兒、子弟、車乘の衆物を發遣し先に本國に歸へらしめ、唯、一象を留め及び己も後に在り。往きて祇洹に至り蘇曼女を搏へ騎に累ねて去る。須達、之を聞き人をして追ひ逐はしむるも象の走ること駛速く及逮こと能はず。即ち本土に達す。便ち用つて婦と爲す。後遂に懷妊し卵十枚を生む。卵後に開敷するに十の男兒有り、形貌殊に好く人と異り有り。年遂に長大し勇健凡に非ず。然れども【三】敢獵を喜び物の命を傷害す。其の母矜愍れみ教へて爾ること莫らしむ。諸子母に白さく「射獵の事を最も快樂と爲す、母、今相ひ遮るは將に爲に憎まむとするか」と。母、復、告げて言く「吾、汝等を愛す。是を以て相ひ制す。若し當に汝等を憎まば終に此の言無し。所以は何ぞ。夫、殺生の罪は當に地獄に入りて諸の苦惱を受け、數千萬歲常に鹿頭・羊頭・兎頭・諸の禽獸頭と爲り【四】阿傍獄卒の獵射する所となり無央數歲解脫を思ふと雖も其れ何の由あらむ乎」と。諸子母に白さく「母の說く所の如きは自ら心より出でたりと爲すや、他邊より聞くや」と。母、復告げて言く「吾、昔佛より此の如き事を聞けり」と。兒、復母に問ふや

【二】種稷。種類、種々。

【三】敢獵。かり。

【四】阿傍。獄卒の名、牛頭人手兩脚牛蹄なり。

王、即時に崩墜す。頂生自ら念ふやう「我が力是の如し、等しき者有ると無し。今、帝釋と共に坐して何をか爲さむ。之を害するに如かず。獨覇となるを快爲す」と。惡心已に生じて尋いで即ち墮落し、本殿の前に當り委頓し死せむと欲す。諸人來りて問ふやう「若し後世の人頂生王云何か命終すと問はば何を以て之を報へむ」と。王、之に對へて曰く「若し此の問有らば便ち之を答ふ可べし。頂生王は貪に由りて死せり」と。四域を統領すること四十億歲、七日寶を雨らし、及び二天に在りて厭足なき故に墜落を致せり。是の故に比丘よ、夫れ利養を實に大患と爲す。當に遠離を思ひ深く道眞を求むべし」と。阿難、佛に白さく「此の頂生王、宿に何の福を殖えて此の如き量無き大報を獲たるや」と。

佛、之に告げて曰く「乃往、過去不可計劫の時の世に佛有り號して弗沙と曰ふ。其の徒衆と共に世間を遊化し給ふ。時に婆羅門の子適婦を娶らむと欲し、手に大豆を把り當に用つて婦に散せんとす。是れは其の曩の世の俗家の禮なり。道に於て佛に値ひ、心意歡喜び、即ち此の豆を持ち佛に散じ奉る。四粒鉢に入り、一粒頂に住す。此の因緣に由り極み無き福を受け、四粒鉢に入り四天下に王たり、一粒頂に在り二天を受樂す」と。

爾の時、諸の弟子佛の說き給ふ所を聞き初果、二果、三果、及び阿羅漢を得る者有り。稱げて數ふ可からず。佛語を受持し歡喜奉行せり。

六十五、〔一〕蘇曼女十子の品　第五十八

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、須達長者の末下の小女字を蘇曼と曰ふ。面首端正にして、容貌最妙なり。其の父憐愛すること諸子に特れたり。若し遊行する時は每に將ゐて共に去く。是に於て長者將ゐて佛の所に至

〔八〕委頓。挫けつかるゝこと。

〔一〕蘇曼女十子品。西本、No. 46. (Bu-mo sa-mu-naḥi bu bcu-pa leḥu)。

至る可し」と。王、卽ち忿然とし、往きて其の土に遊び、福を食し、樂を受くること十四億歳を經たり。夜叉、復唱ふるやう「北方に國有り　欝單曰[七]と名づく。其の土安かに豐にして、人民熾盛んなり。王、彼に到る可し」と。王、卽ち往詣いて其の中に留止り、上妙の五欲を以て情を極め意を恣にし、十八億歳を經たり。夜叉、復唱ふるやう「四天王の處有り、其の樂量難し。王、之に遊ぶべし」と。王、群臣及び四種の兵と虛に乘じて上る。四天、遙に見て甚だ恐怖を懷き、卽ち兵衆を合せ外に出でて之を拒む。竟に奈何ともなすこと能はずして所止に還歸り、頂生、中に於て優遊して樂を受け、數十億歳を經たり。意中、復念ふやう「忉利に昇らむと欲す」と。卽ち群衆と與に虛を蹈みて登上る。時に五百の仙人有りて、須彌の山腹に住在す。王の象馬の屎尿下落ちて、仙人の身を汚す。諸仙、相ひ問ふやう「何に緣り此れ有るか」と。中に智者有り衆人に告げて言く「吾、聞く、頂生王、三十三天に上らむと欲す。必ず是れ象馬此の不淨を失するなり」と。仙人、忿恨し便ち神呪を結び、頂生王及び其の人衆をして悉く住まりて轉ぜざらしむ。王、復、之を知り卽ち誓願を立つるやう「若し我れに福有らば斯の諸の仙人悉く皆當に來りて所爲を承供すべし」と。王の德弘博にして能く感致有り五百の仙人　盡く王邊に到り、輪を扶け馬を御し、共に天上に至る。未だ至らざるの頃遙に天城の名けて快見と曰ふを覩る。其の色皦白にして高顯殊特なり。此の快見城に千二百門の有り。諸天怖畏れて悉く諸門を閉ぢ、三重の鐵關を著く。頂生の兵衆直ちに趣いて疑はず。王、卽ち貝を取り之を吹き、弓を張り千二百の門を扣彈するに、一時に皆開く。帝釋、尋いで出でて與に共に相ひ見え、因つて請じて宮に入り、與に共に坐を分つ。天帝人王貌類一種にして其の初めて見る者分別すること能はず。唯、視眴の遲疾を以て其の異を知る耳」王、天上に於て五欲の樂を受け、三十六帝を盡す。末後の帝釋は是れ大迦葉なり。時に阿修羅王軍を興し天に上り、帝釋と與に鬪ふ。帝釋如かずして軍を退き城に入る。頂生復出でゝ、貝を吹き弓を扣くに、阿修羅

【七】欝單曰。須彌四州の一、北拘廬州のこと、梵名、(Uttarakuru)、西名、(Byaṅ-gi sgra-mi-sñan)。

きならば當に自然に百味の飲食有り一切を充飽し飢渇無からしむべし」と。願を作し已竟り、尋いで飲食有り。王、更に出遊し諸の人民の紡績・經織するを見、王、復、問ふて言く「此を作り用つて(何を)爲すや」と。諸人、對へて曰く「食已に自然なり。(然れども)以て身を嚴にするもの無し。是の故に紡織し用つて服飾を作る」と。王、復誓を立つるやう「若し我に福有りて王と爲るべきならば當に妙衣自然にして出づる有りて萬民に賑給し窮乏無からしむべし」と。願を作し已竟り、時に應じて諸の樹に悉く種々の異色の妙服を生じ、一切の人民求め得て盡くること無し。王、更に出遊し諸の[四]群黎を見るに樂器を修治む。王、因つて之に問ふやう「此を作り何をか爲す」と。諸人、報いて言く「衣食、既に充つるも、音樂に乏し。此を治する所以は用つて自ら娯むことを欲するなり」と。王、復誓を立つるやう「若し我れ福有りて王と爲るべきならば衆の妙なる樂器當に自然に至るべし」と。願を作し適竟り、時に應じて諸の樹に若干種種の伎樂懸りて其の枝に在り。若し須ふる者有りて取りて之を鼓つに音聲和暢なり。其の聞くこと有る者歡預せざるは無し。王の徳至重にして萬善臻集まる。天七寶を雨らして諸の國界に遍し。王、諸臣に問ふやう「此は誰の徳ぞや」と。諸臣、對へて曰く「此は是れ王の徳なり、亦國民の福なり」と。王、復、誓を立つるやう「若し是れ民の福ならば寶當に普く雨るべし。若し獨り我が徳ならば齊りて宮内に雨れ」と。願を作し適竟るに、餘處には悉く斷ちて、唯、宮裏に雨ること七日七夜なり。其の頂生王、閻浮提に於て五欲を以て自ら娯しみ八萬四千歳を經たり。時に夜叉有りて殿前に踊出でゝ、高聲に唱へて言く「東方に國有り、[五]弗婆提と名づく。其の中豐樂快善にして比無し。大王、往きて彼の界を遊觀すべし」と。王、則ち允可し、意に巡行せむと欲す。金輪復轉じ、虚を躡みて進む。群臣七寶皆悉く隨從す。既に彼の土に至り、諸の小王等盡く來り朝賀す。王、彼の國に於て五欲を以て自ら恣にし八億歳を經たり。夜叉復唱ふるやう「西方に國有り、[六]瞿耶尼と名づく。亦、復快樂なり、王、彼に

【四】群黎。群民に同じ。大正本、黎に作るは誤植。

【五】弗婆提。須彌四洲の一、東勝身州のこと。身形勝るゝが故に勝身と名づく、梵名、(Pūrvavideha)。西名、(Śar-gyi rus)、

【六】瞿耶尼。須彌四州の一、西牛貨州のこと。梵名、(Godāniya)、西語名、(Nub-k, i ba-lan-spyod)。

り」と。爾の時、阿難、長跪叉手し前みて佛に白して言さく「世尊よ、過去に貪に由るが故に便ち墮落し給ふとは其の事云何」と。

世尊、告げて言く『乃往、過去無量無邊不可思議阿僧祇劫に此の閻浮提に一大王有り、【二】瞿薩離と名づく。斯の天下の八萬四千の小國を典り二萬の夫人・婇女・一萬の大臣有り。時に王の頂の上に欻ち一胞を生ず。其の形繭の如し。淨潔・淸徹して亦疼痛せず。後轉轉大にして乃し瓠の如きに至る。便ち劈きて之を看るに、一童子を得たり。甚だ端正と爲す。頭髮紺青にして身は紫金色なり。卽ち相師を召し吉凶を占相せしむ。相師、占ひ已り便ち王に答へて言く「此の兒德有り、雄姿奇特なれば必ず聖王と爲り四域を統臨せむ」と。因りて爲に字を立て丶文陀竭と名づく。（晋に頂生と言ふ）。年、已に長大し英德遂に著はる。王、一國を以用つて封じて之を給ふ。大王、後の時病を被り困篤く、諸の小王の輩皆來りて瞻省るも、自ら免かるゝ能はずして遂に便ち薨背す。諸の【三】附庸の王共に頂生に詣りて咸啓して曰さく「大王、已に崩ぜり。願くば國の位を嗣げ」と。頂生、答へて言く「若し吾に福有りて王と爲るべきならば要ず四天及び尊帝釋をして來り相ひ迎へて授けしめむ。爾らば乃ち祚に登らむ」と。誓を立つること已に竟りて四天卽ち下り各寶瓶を捉へ香湯を盛滿し以て其の頂に灌ぐ。時に天帝釋、復寶冠を持ち來りて爲めに之を著け、然る後に稱揚す。諸王、復「當に大國王所治の處に詣るべし」と勸む。頂生復言く「若し我れ福有りて王と爲るべきならば國當に我に就くべし。我國に就かず」と。誓を立て丶適竟り、大國の中所有宮殿・園林・浴池悉く來りて王に就く。金輪・象馬・玉女・神珠・典藏・典兵悉く亦應じ集る。四天下に君となり轉輪王と爲り、國界を巡行し諸の人民の地を墾き耕し種うるを見、王、臣吏に問ふやう「此の諸の群生は何等をか作さむと欲するや」と。便ち王に答へて言く「形有るの類は食に由つて存するを得、是を以て穀を種え以て命を濟はむと欲するなり」と。王、誓を立て丶言く「若し我れ福有りて王と爲るべ

【二】瞿薩離。西名、(Graa-pa-de)。

【三】附庸王。屬國の王といふに同じ。

爾の時、諸の比丘夏安居竟りて佛の所に往至り禮敬問訊す。佛、慈心を以て慰喩し撫恤し給ふ。「汝等彼に住して苦無きことを得たる耶」と。慈心にして矜篤極めて憐愍を懷き給ふ。阿難、之を見て佛に白して言さく「世尊よ、慈愍して矜を垂れ給ふこと特に隆なり。不審なり、世尊よ、是の如き心を發し給ふ遠近と爲す耶」と。佛、阿難に告げ給ふやう「若し之を知らむと欲せば當に汝の爲めに說くべし。過去久遠稱て計ふ可からざる阿僧祇劫に二人の罪人有り、共に地獄に在り、卒之を驅り、鐵車を挽かしめ其の皮を剝取り用つて車鞅[二]を作り、復、鐵の棒を以て打ちて奔走せしめ。東西に馳騁し休息有ること無し。時に彼の一人筋力拗薄く、獄卒之に逼り、地に躓れて便ち起ち、疲極・困乏し絕えて死し復蘇へる。彼と共に對者其の困苦を見て慈みの心を興發し此の人を憐愍れみ、顧みて獄卒に白ふやう、唯、願くば我をして躬づから是の人に代り獨り此の車を挽くことを聽せと。獄卒、瞋恚りて棒を以て之を打つに、時に應じて卽死し忉利天に生れたり」と。「阿難よ、當に知るべし、爾の時、獄中に慈み心の人とは我が身是れなり。我、乃ち爾の時彼の地獄に於て罪を受くるの時初めて是の如き慈矜の心を發し一切の人に於て未だ曾つて退捨せずして今日に至り、故に修行を樂しみ一切を慈愍せり」と。

爾の時、阿難、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

六十四、頂生王の品[一]　第五十七

是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在し大比丘衆千二百五十人と俱なりき。

爾の時、世尊、諸の比丘を見るに飾好を貪ぼり名利に著し多く畜え盈長・積聚して厭ふこと無し。佛此を見已り貪の利害を說き給ふやう「夫、貪欲は現に身命を損し終に三塗に歸り、苦を受くること量り無し。然る所以は吾自ら過去世を憶念する時貪に由るの故に便ち墮落し諸の苦惱を受けた

【二】車鞅。車のたづな。

【一】頂生王品。西本、No. 46.(Rgyal-po ṅlyi-lo skyes kyi leḥu)(＝頂生の品)。

佛、阿難に告げ給ふやう『乃往、過去無量無數阿僧祇劫に爾の時佛有り毘鉢尸と名づく。世に出現はれ給ひ其の徒衆九萬人と俱なり。彼の時に王有り、名づけて槃頭[三]と曰ふ。一大臣有り佛及び僧を請じて三月供養せむとす。佛、卽ち許可し給ふ。旣に可を蒙むり已り其の家に還至り須ふる所を辦具ふ。時に槃頭王も亦佛及び衆僧を供養せむと欲し佛の所に往至りて佛に白して言さく「願くば如來及び比丘僧に三月供養することを得む」と。佛、槃頭に告げ給ふやう「吾、先に已に彼の大臣の請を受く、大人の法として中に違するは宜しからず」と。王、卽ち宮に還り其の臣に告げて曰く「佛、我が國に處給ふ。吾れ供養せんことを欲す。云く卿已に請ぜりと。今、我を避く可し。我れ供養し訖り卿乃ち之を請ぜよ」と。臣、王に答へて言く「若し大王、我が身命を保ち、復如來を保ちて常に此に住せしめ奉り、復國土をして常に安く災ひ無からしめよ、若し、能く此の諸の事を保たしめなば我乃ち意を息め王の先に請ずるを放にせむ」と。王、自ら念言ふらく「斯の事辦じ叵し」と。復、更に曉して曰く「卿、請ずること一日、我復一日せむ」と。臣、便ち之を可とし、更に互に會を設け各所願を滿せり。爾の時、大臣、彼の如來の爲めに三衣を辦具へ、皆悉く豐足し、復、九萬の諸の比丘衆の爲めに七條衣を作り人に一領を與へたり。

「阿難よ、當に知るべし、爾の時の大臣の衣服を上り佛及び僧に施し之を供養せし者は豈異人ならむや。則ち我が身是れなり。我、乃ち世世福を殖え厭ふこと無し。今、悉く自ら得たり。終に唐しく捐てず」と。

時に阿難等是の說を聞き已り歡喜勸修し諸の福業を造り心に踊躍を懷き、頂戴奉行せり。

六十三、[一]佛、始めて慈心を起す緣品　第五十六

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。

【三】槃頭。西名、(Ban-du)。

【一】佛始起慈心緣品。西本、No. 44.

愚癡を憐愍れみ前の罪を悔ゆるを聽し給へ」と。世尊、弘く慈しみ因つて爲めに四諦の微妙の法を說き給ひ、其の宿緣に隨ひ皆諸果を獲たり。須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢果を得る者有り。無上正眞道意を發す者有り。

是の時、阿難、四部の衆、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

六十二、[一]梵志、佛に納衣を施し受記を得るの品　第五十五

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、世尊、侍者阿難を將ゐ城に入り[二]分衞し給ふ。世尊の身の上に著くる所の衣少しく穿壞有り、將に以て衆生を化應し度せむと欲す。乞食し周ねく訖りて所止に還らむと欲し給ふ。一人の婆羅門有り佛の所に來至り、佛の爲めに禮を作し、佛の容顏を覩たてまつるに光相殊特にして、佛身の衣を見るに少しく破壞有り、心に惠施せんことを存ひ家の中を割省して少しき白氎を得、持用つて佛に施し奉る「唯、願くば如來よ、當に此の氎を持つて、衣を補ひ給へ」と。佛、卽ち之を受け給ふ。時に婆羅門。佛の受け給ふを見已り心情歡喜び。倍踊躍を加ふ。佛、此の人を哀み卽ち授決を與へ給ふやう「當來の世に阿僧祇百劫の中に於て當に佛と作るを得、神通、相好十號具足すべし」と。佛、授記し已り給ひ。(婆羅門)歡喜して去る。國中の豪賢の長者・居士咸此の心を興すやう「云何が世尊は彼の少施を受けて酬ゆるに大報を以てし給ふや」と。是の念を作し已り各如來の爲めに好氎を破損し種々の衣を作り持用つて佛に奉る。阿難、佛に問ひ奉るやう「世尊は、先昔何の善行を造り能く一切をして衣服を奉施せしめ給ふや。願くば佛よ爲めに說いて開解を得しめ給へ」と。世尊、告げて曰く「諦に聽き心に著けよ、當に汝の爲めに過去の因緣を說くべし」と。阿難、曰く「諾し、我、當に善く聽くべし」と。

【一】梵志施佛納衣得受記品。西本、No. 43.(Bram-zes llan-pa phul-paḥi leḥu)(婆羅門、贈りし品)。

【二】分衞。乞食のこと。

ふやう「經書に云へるあり、若し畜獸の身金色の相有るは必ず是れ菩薩大士の人なり。我、今云何が此の人に沓賞せむ。若し賞を與へなば便ち此と共に殺害を爲せしに異ること無し」と。是の時、獵師、素窮くして哀を求む、國王矜愍れみ少しの財物を與へ獵師に問ふて言く「師子死せし時何の瑞應ありしや」と。答へて言く「口に八字を說き、天地普く動き雲無くして雨り、天、諸の花を降らす」と。爾の時、國王是の語を聞き已り悲喜交集り信心益猛し。卽ち、諸臣、耆舊の智人を召し是の義を解かしむ。時に諸の人衆都て解する能はず。空しき林澤の中に一仙人有り　奢摩と字す。(字義倶に閑なり)。仙人聰明にして哲達貫練す。使、還りて王に白す。王、卽ち請じ來らしむ。仙人、時に具に大王の爲めに其の義を解說するやう「耶羅羅の其の義は唯頭を剃り染衣を著け當に生死に於て疾く解脫を得べきことにして、婆奢沙とは頭を剃り染衣を著くる者は皆是れ賢聖の相にして涅槃に近きを云ひ、娑呵とは頭を剃り染衣を著くる者は當に一切諸天世人の爲に敬仰せらるゝ所なりと云ふなり」と。時に仙人是の語を解き已り、提毘、歡喜び卽ち八萬四千の小王を召し悉く一處に集め七寶の高車を作り、師子の皮を張り、一切に表示し悉く共に敬戴し、香を燒き花を散じて以て供養し、忠心を極め盡し後復金を打ちて棺を作り、師子の皮を盛り以用て塔を起し。爾の時、人民是の善心に緣り壽終るの後皆天に生るを得たり。

佛、阿難及び四部衆に告げ給ふやう「爾の時の師子、善心を發し染衣の人に向ふに由り十億萬劫轉輪聖王と作り衆生を給足し廣く福業を植え成佛を得るを致せり。爾の時、蹉迦毘羅と號くるは豈異人ならむ乎、今我が身是れなり。時に國王提毘、師子の皮を供養するに緣るが故に十萬億劫天上・人中尊貴第一にして諸の善本を修む。今の彌勒菩薩 れなり。時に仙人とは今の舍利弗是れなり。時の獵師とは今の提婆達多是れなり」と。爾の時、四衆、佛より過去の因緣を說くを聞き心に歡喜を懷き、深く自ら惋悼悲歎して言く「我等愚癡にして明哲を識らず惡心を生起せり。唯、願くば如來よ、

【七】奢摩。西名、(Ça-ma)。

向へば福を獲ること量り難し」と。佛、阿難に告げ給ふやう「我、往昔、諸の出家の染衣を著るの人に於て深く信心を生じ之を敬戴するに由るが故に成佛を得るを致せり」と。阿難、佛に白して言さく「世尊よ、往昔深心染衣の人を敬ふ其の事云何、願樂くば聞かんことを欲す」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「善く聽け、當に說くべし」と。「唯、然なり世尊よ。願樂くば聞かんことを欲す」と。佛、阿難に告げ給ふやう「古昔、無量阿僧祇劫に此の閻浮提に大國王有り名づけて[三]提毘と曰ふ。總して八萬四千の諸の小國王を領す。世に佛法無し。辟支佛有りて山間林中に在り。坐禪し行道し飛騰し變化して、その福衆生を度す。時に諸の野獸咸來りて親附す。一師子有り、名づけて跋迦羅毘と號す。(晋に堅誓と言ふ)。軀體金色にして光明明顯やき、煥然として明烈なり。果を食し草を噉ひ群生を害せず。是の時、獵師、頭を剃り袈裟を著け內に弓箭を佩び澤の中に行き、師子有るを見て甚だ歡喜を懷いて、心に念言ふやう「我、今大利ありて此の獸を見るを得たり、殺して皮を取り、以て王に上らば貧を脫するを得るに足らむ。」是の時、師子の適睡眠るに値ふ。獵師便ち毒箭を以て之を射る。師子、驚き覺め卽ち馳せて害せむと欲し、袈裟を著くるを見て便ち自ら念言ふやう「此の如きの人は在世久しからずして必ず解脫を得て、諸の苦厄を離れん。所以は何ぞ、此の染衣は過去・未來・現在三世の聖人の標相なればなり。我、若し之を害せば則ち惡心三世の諸の賢聖の人に趣向ふと爲す」と。是の如く思惟して害意、還び息み、毒と箭と兩行りて[四]命在ること久しからず。便ち偈を說きて言く

[五]耶羅羅、　婆奢沙、　娑呵、

此の語を說くの時天地大いに動き、雲無くして雨り、諸天[六]惋惕きて卽ち、天眼を以て世間を下觀し、獵師の菩薩の師子を殺すを見て虛空の中に於て諸天の花を雨らして其の屍を供養す。是の時獵師、師子の皮を剝ぎ家に持ち到り、以て國王提毘の求索めて、賞募するに奉つる。時に王、念言

【三】提毘。西名、(Da-byi)。

【四】命。大正本「令」に作るは誤植。

【五】耶羅羅、婆奢沙、娑呵。西文、(Ya-la-la ba-ça-sa svā-hā)。

【六】惋惕。駭きうれふこと。

佛の說き給ふ所を聞き歡喜踊躍し未曾有と歎じて是の言を作さく「如來の出世は實に奇妙と爲す。法雨を[四]陶演し潤を蒙らざるは莫し。乃ち禽鳥に至るまで猶法の聲を聞き福を獲ること乃ち爾なり。豈、況んや人に於て信心受持し其の果報を計らば彼より過ぎ踰ゆること百千萬倍にして比と爲す可からず」と。佛、阿難に告げ給ふやう「善き哉、善き哉、汝の說く所の如く如來の出世潤益する所多し。普く甘露を雨らし群生を侵潤す。是を以ての故に當に共に一心に佛法を信敬すべし」と。

爾の時、阿難及び諸の衆會佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

六十一、[一]堅誓師子の品　第五十四

是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城、耆闍崛山中に在しき。

爾の時、提婆達多恒に惡心を懷き世尊に向ひ如來を害せむと欲す。自ら稱して佛と爲し、阿闍世に父を害し王と爲れ新佛・新王天下を治理むるも亦快らずやと敎ゆ。王子、信用し便ち其の父を殺し自ら立ちて王と爲れり。是の時世人咸惡心を懷き諸の比丘を惡みて見るを欲せず。時に諸の比丘城に入りて乞食するに人民忿恚りて咸與に語らず。空鉢にして出づ。山中に還り到り世尊に白して言さく「提婆達多、不善の事を作し、諸の四輩をして各惡心を興し沙門に向はしむ」と。爾の時、世尊、阿難に告げて言く「若し衆生有りて惡心を起し諸沙門の[二]染衣を著るの人に向ふは當に知るべし。是の人は則便ち過去の諸佛・辟支佛・阿羅漢に向ひ未來の諸佛・辟支佛・阿羅漢、現在の諸佛・辟支佛・阿羅漢に向ふなり。惡心を發し三世の諸の賢聖に向ふを以ての故に便ち無量の罪業果報を獲るなり。所以は何ぞ、染色の服は皆是れ三世の賢聖の標式なり。其れ衆生有りて鬚髮を剃除し染衣を著る者は當に知るべし。是の人は久しからずして當に一切の諸苦を解脫し。無漏の智を獲て諸の衆生の爲めに大救護を作すことを得べし。若し衆生有り能く信心を發し出家の染衣を著るの人に

【四】陶演。よろこびのべること。

【一】堅誓師子品。西本 No. 49. (Seṅ-ge yi dam-brtan-pa shes-bya-baḥi leḥu)。

【二】著染衣人。西名、(Ṅur-smrig gyon-pa)(渴色衣を著る)比丘のこと。

卷の第十三

六十、[一]五百の鴈、佛法を聞き天に生るの品　第五十三

是の如く我聞きぬ。一時、佛、波羅棕國に在しき。

爾の時、世尊、林澤中に於て天人四輩の類の爲めに妙法を演說し給ふ。時に虛空の中に五百の鴈ありて佛の音聲を聞き深心愛樂し、[二]盤桓迴翔し尋いで來下し世尊の所に至らむと欲す。時に獵師有りて羅網を張り施し五百の群鴈彼の網の中に墮ち、獵師の爲めに殺され忉利天に生れ、父母の膝上に忽然として生長し八歲の兒の如し。身體端嚴にして顏貌比ひ無し。光明明淨にして喩へば金山の若し。便ち自ら念言ふやう「我、何の因を以て此の天中に生るゝや。天人の心聰く神解して卽ち宿命を識り、法の聲を愛するに緣り果報として天に生れたるを知り、當に其の恩を報ずべし」と。卽ち、共に同時に天の花香を持ち、閻浮提波羅棕國に下り世尊の所に至る。天光明曜し猶し寶樹林のごとし。一時に、身を曲げ世尊の足を[三]禮し合掌し白して言さく「我、世尊の說法の音聲を蒙むり妙處に生在せり。願くば重ねて矜愍み道要を開示し給へ」と。爾の時、世尊、便ち爲めに四諦の妙法を演說し天人開悟し須陀洹果を得たり。卽ち、天上に還り三塗に墮ちず、緣に隨つて七生し諸漏を盡すを得たり。爾の時、阿難世尊に白して言さく「昨夜、天有り光明照曜して世尊を禮敬し奉る。其の緣を知らず、願くば告げ示し給へよ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「善く之を思念へ、當に汝の爲めに說くべし。世尊、昨日林澤の中に在り、天と世人四輩の衆の爲めに妙法を敷演す。五百の群鴈有りて法の聲を愛敬し、心に悅び欣慶し、卽ち共に飛び來りて、我が所に至らむと欲し、獵師の網の中に墮つ。時に獵師、卽ち取りて之を殺せり。此の善心に因り忉利天に生れ。自ら宿命を識り故に來りて恩を報じぬ」と。爾の時、阿難、

【一】五百鴈聞佛法生天品。西本、No. 48. (Ṅaṅ-pa lṅa-brgya lhar skyes-paḥi leḥu)(五百鴈生天の品)撰集百緣經、No. 60. (Pāli. Culla-haṁsa Jātaka. 533, Jātaka-mālā, xxii.

【二】盤桓。進みがたき貌。

【三】禮。大正本「體」に作るは誤植。

爾の時、林樹の間に於て一比丘有りて、坐禪・行道す、食後に經行す。爾の誦經の音聲淸雅・妙好にして比無きに因り時に一鳥有りて其の聲を敬愛し、飛びて樹の上に在り其の音響を聽く。時に獵師有り箭を以て射殺す。茲の善心に緣り卽ち第二忉利天中に生れ、父母の膝上に忽然として長大す。八歲の兒の如し。面貌端正殊異なり、光明晒然として倫匹有ること無し。卽ち自ら念言ふやう「我、何の福を以て此の中に生れ天福の果報を得たるか」と便ち宿命を識り故身を觀見し本是れ、禽鳥にして、彼の比丘の誦經の福報を蒙むり此の中に生るを得たるを知り、卽ち天華を持ち閻浮提に詣り比丘の所に到り、禮敬し問訊し、天の華香を以て其の上に供へ散ぜり。比丘、問ふて言く「汝は是れ何の神ぞや」と。答へて言く「我は本是れ鳥なり。尊者の音聲を愛し此に來りて、聽承し、獵師の爲に殺され、此の善心に因りて忉利天に生る」と。比丘、歡喜し卽ち命じて坐せしめ、其の爲めに種々の妙善を說法す。天人開解し須陀洹果を得たり。歡喜踊躍して卽ち天上に還れり。

佛、阿難に告げ給ふやう「如來の出世は饒益甚だ多し、說く所の諸法實に深妙と爲す。乃至飛鳥も法の聲を愛するに緣り福を獲ること量り無し。豈況んや人に於ておや信心堅固にして之を受持する者は獲る所の果報以て比と爲し難し」と。

爾の時、阿難及び諸の大衆佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

十二月を一歲と爲す。彼の焔摩天上の壽は二千歲なり」と。阿難、又問ひ奉るやう「彼に於て命終して當に何處に生るべきや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「當に第四兜率天上に生るべし。此の閻浮提の四百歲を彼の天上の一日一夜と爲す。亦三十日を一月と爲し十二月を一歲と爲す。彼の兜率天の壽は四千歲なり」と。阿難、又問ひ奉るやう「彼に於て命終し當に何處に生るべきや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「當に第五[三]不憍樂天に生るべし。此の閻浮提の八百歲を第五天上の一日一夜と爲す。亦三十日を一月と爲し十二月を一歲と爲す。彼の第五天の壽は八千歲なり」と。阿難、又問ひ奉るやう「彼に於て命終して當に何處に生るべきや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「當に第六化應聲天に生るべし。此の閻浮提の千六百歲を第六天上の一日一夜と爲す。亦三十日を一月と爲し十二月を一歲と爲す。彼の第六天の壽は萬六千歲なり」と。阿難、又問ひ奉るやう「彼に於て命終して復何處に生るべきや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「還び第五天上に生れ、是の如く次第して四王天に至り、上下七返して六欲天中に生れ、自ら恣に福を受け天の壽を極めて、中夭有ること無し」と。阿難、又問ひ奉るやう「六天の壽盡きて當に何處に生るべきや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「當に閻浮提に下り人中に生れ出家學道すべし。前に鳥の時四諦を誦持するに緣り心自ら開解し辟支佛と成り、一は曇摩と名づけ、二に修曇摩と名づく」と。佛、阿難に告げ給ふやう「一切の諸佛、及び衆の賢聖、天人の品類福を受くるの多少皆法に於て、其の善因を種ゆるに由り、其の後各妙果を獲しむるを致せり」と。

爾の時、阿難、及び諸の衆會佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

五十九、[一]鳥、比丘の法を聞き天に生るゝの品　第五十二

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

【三】不憍樂天。樂變化天のこと。

【一】鳥聞比丘說法生天品。西本、欠。

ゆる所に隨つて日日往來し說法敎誨す。須達の家内に二鸚鵡有り、一は律提と名づけ二は賒律提と名づく。稟性黠慧にして能く人の語を知る。諸の比丘の往來するを每に先づ家の内に告げ語る。（家人）聞き知りて敷具を拂ひ整へ歡喜して迎逆ふ。是の時、阿難、其の家に往到り、鳥の聰黠を見て之を愛して心に在り。而して之に語りて言く「汝に法を敎へむと欲す」と。二鳥、歡喜す。四諦の法を授け、敎へて誦習せしめて偈を說きて言く。

豆佉、　三牟提耶、　尼棲陀、　末伽

門前に樹有り、二鳥法を聞き喜悅して誦習し、飛びて樹の上に向ひ、次第に上下し、經由すること七返、受くる所の四諦の妙法を誦讀す。其の暮に樹に宿り野狸の食ふ所となり。此の善心に緣り即ち四天に生る。尊者阿難、明日時到り衣を著け鉢を持ち城に入りて、乞食し、二鸚鵡の狸の爲めに殺さるゝと聞き矜愍の心を生じ還りて佛に白して言さく「須達の家内に二鸚鵡有り、弟子昨日四諦を敎誦し其の夜命終せり。不審なり。識神、生るゝ處何所なるか、唯、願くば如來よ、愍を垂れて示し給へ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「諦かに聽け、諦に聽け、善く心中に著けよ、當に汝の爲めに說き、汝をして歡喜せしめむ。汝、法を授け喜びの心にて受持するにより命終の後四王天に生る。此の閻浮提の五十歲を四王天上の一日一夜と爲す。彼れには亦三十日を一月と爲し十二月を一歲と爲し、彼の四王天の壽は五百歲なり」と。阿難、佛に問ふ奉るやう「彼に於て命終し當に何處に生るべき」と。佛、阿難に告げ給ふやう「當に第二忉利天上に生るべし。此の閻浮提の百歲は忉利天上の一日一夜と爲す。亦三十日を一月と爲し十二月を一歲と爲し、彼の忉利天の壽は千歲なり」と。阿難、復問ひ奉るやう「彼に於て命終し當に何處に生るべきや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「當に第三焰摩天上に生るべし。此の閻浮提の二百歲は焰摩天の一日一夜と爲す。亦三十日を一月と爲し

【三】豆佉、三牟提耶、尼棲陀、末伽。四聖諦それぞれの原語の音譯なり、苦諦(Duk-ha-satya)、集諦(Samudaya-S.)、滅諦(Nirodha-S.)、道諦(Magga-S.)なり。本文には「晋に苦・集・滅・道と言ふ」と註を加ふ。

る」と。王、是の語を聞き倍增欽仰して言く「此の慈定巍々として乃ち爾り、我れ會此の慈三昧を習ふべし」と。是の願を作し已り慈定を志慕す。意甚だ柔軟にして更に害心無し。即時、佛及び比丘僧を請ず。「唯、願くば神を迴らし大國に往至りたまへ」と。佛、即ち日を剋して往くべきことを許可し給ふ。波塞奇王、佛の大王國に往至らんことを欲し給ふと聞き甚だ戀恨を懷き、愁悸して慘る無し、心に自ら念言ふやう「若し當に我をして是の大王ならしめなば如來は則ち常に我が國に住し給ふべし。我れ小なるに由るが故に自在を得ず」と。是の事を念じ已り即ち佛に問ふて言く「諸王の中何者か最大なりや」と。佛、之に告げて曰く「轉輪王大なり」と。波塞奇王、因つて自ら願を作さく「我れ由來佛及び衆僧を供養するところの此の功德を持ち、誓つて願くば將來の世世常に轉輪王と作らむ」と。』

是くの如く阿難よ、爾の時の大王、曇摩留支とは今の彌勒是れなり。始め彼の世に於て此の慈心を發し、此より已來常に彌勒と字す。彼の波塞奇王とは今の祇陀（阿侍多の誤?）是れなり。乃ち彼の中に於て常に轉輪王と作る。是より已來世世恒に作れり。乃至今日功德盡きず。是を以て今日復求索を作せり」と。

時に、穿珠師、是を說き給ふを聞き已り無上正眞道意を發せり。其の餘の會者佛の說き給ふ所を聞き須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢を得る者有り。無上正眞道意を發す者有り。不退地に遷住し得る者有り。各 皆敬戴し歡喜し奉行せり。

五十八、[一]二鸚鵡、四諦を聞くの品　第五十一

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、須達、佛法を敬信し僧の檀越と爲り一切の須ゆる所悉く皆供給す。時に諸の比丘其の須

【一】二鸚鵡聞四諦品。西本、欠。

如き事を白す。佛、王に告げて言く「汝憂慮すること勿れ、但、還び使を遣はし誠を以てせよ告げて曰く「佛、我が國に在し朝夕承事し、是を以て往きて大王を覲ゆるに暇あらざるなり。國内の財物を佛及び僧に供へ遺餘の以て獻貢す可きもの有ること無し」と。波塞奇王、佛の教を得已り即ち還り使に報ずること佛の語りたまふ所の如し。使、到りて王に見え共に其の意を道ふ。大王、之を聞き甚だ盛なる怒を懷き、即ち諸臣を合し共に此の事を詳にせり。諸臣皆言く「彼の王、慠慢なり。横に道理を引く。宜しく兵衆を合し往きて之を攻伐すべし」と。王、即ち之を然りとし、兵を合し躬ら往く。前軍近づき到る。彼の王乃ち知りて心に怖懼を懷き、急ぎ往いて佛に白しぬ。佛、王に告げて言く「憂慮を用ふること莫れ。但、自ら往きて見え宜しく前の語を說くべし」と。波塞奇王、即ち群臣と與に往きて界上に到り、大王に見ゆ。禮し問ひ畢訖り一面に住在まる。大王、責めて問ふやう「汝、何をか恃む所ありて、違慢し常と失し來りて朝覲せざるや」と。波塞奇、言く「佛の世値ひ難し、甚だ覩ること得難し。頃來りて國に在し民物を化導し給ふ。朝夕奉侍するが故に違替せり」と。時に大王、復、更に重ねて責むるやう「正使爾らしむるも何を以て獻を斷ずるや」と。波塞奇言く「佛に徒衆有り、名づけて衆僧と曰ふ。戒德清淨にして世の良き福田なり。國の所有を合せ常に用つて供養す。盈ち長くして以て貢と爲す可きもの有ること無し」と。曇摩留支、此の語を聞き已り告げて言く「且く住せよ、須く佛に見ゆべし。佛を見來り還りて乃ち汝の罪を問はむ」と。即ち、群臣と與に往きて佛の所に至る。是の時、如來の大衆圍遶して各悉く靜然にして、端坐して定に入る。一比丘の慈三昧に入る有り。金光明を放つこと大火聚の如し。曇摩留支、遙に世尊を見奉つる。光明顯赫として明曜日に踰えたり。大衆圍遶して星の中の月の如し。佛の爲めに禮を作し問訊法の如し。此の比丘の光明特に顯るゝを見て即ち世尊に白さく「此の一比丘、何等の定に入りて光曜乃ち爾るや」と。佛、大王に告げ給ふやう「此の比丘は慈等定に入

して三十二相あり、衆好畢く滿つ。光明殊に赫けり。出家學道し最正覺を成ず。廣く衆生の爲めに尊き法輪を轉ず。其の第一大會に九十三億の衆生の類を度し第二大會に九十六億を度し第三大會に九十九億を度す。是の如く比丘よ、三會說法の度を蒙るを得る者は悉く我が遺法に福を種うる衆生なり。或は三寶の中に供養を興す者、出家、在家齊戒を持つ者、燒香、燃燈にて之を禮拜する者、皆彼の三會の中に在るを得るなり。三會我が遺殘の衆生を度し然る後乃ち同緣の徒を化するなり」と。

時に彌勒、佛の此の語を聞き座より起ち長跪して佛に白して言さく「願くば彼の彌勒世尊と作らむ」と。佛、之に告げて曰く「汝の言ふ所の如し。汝、當に彼に生れ彌勒如來と爲るべし。上の如く教化するは悉く是れ汝なり」と。時に會中に一比丘有り、阿侍多と名づく。長跪して佛に白さく「我、願くば彼の轉輪王と作らむ」と。佛、之に告げて曰く「汝、但、長夜、生死を貪り樂しむ、規として出ぜざらむ耶」と。時に會に在る一切の大衆、佛、世尊の彌勒に決を授け當來成佛し猶彌勒と字すると(說き給ふ)を見て各皆疑有りて本末を知らむと欲す。尊者、阿難、即ち起ちて佛に白さく「彌勒、佛と成り復彌勒と字す。不審なり。何により名字を造り起すや」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「諦に聽き意に著けよ。過去、無量阿僧祇劫に此の閻浮提に一大國王有り、曇摩留支と名づく。閻浮提の八萬四千國六萬の山川八十億の聚落二萬の夫人・婇女・一萬の大臣を領す。一小國有りて、豐樂なり。是の中の國王を波塞奇と名づく。時に弗沙佛、初めて世に出でて、此の國中に在りて衆生を化導し給ふ。時に波塞奇、諸の群臣と與に專ら佛及び衆僧を供養す。往きて大王に朝覲し得るの暇あらず。貢獻音信亦悉く斷ち替む。時に大王其の間絕を怪しみ、即ち使者を遣はし、往きて所以を責む。使者到り已り王の言令を宣ぶるやう「比年已來人と信と俱に斷つ。汝、人臣と爲り何を以て常と違ふや、將に異心有りて逆を懷かむとする耶」と。時に波塞奇、大王の教を得て自ら違ひ替むを知り如ともする所を知ること靡し。即ち、往きて佛に見え是の

を得たり。此の上人に値ふ」と。卽ち更に賜與し、拜して大臣と爲せり。
是の如く、諸尊よ、彼の阿涙陀とは卽ち我が身是れなり、我、彼の世に於て少しの稗の糜を以て辟支佛に施し因つて自ら願を求め、是の緣りて以來九十一劫天と人との中に生れて乏少する所無し。三事において挺特ぜり。端正にして稱を受け情欲する所有らば意に隨つて至る。乃至今の身在家の時我れ常に優遊して世務を喜ばず。兄摩訶男、常に怨みの辭有り、我が母語りて言く「我が兒の福德なり」と。摩訶男言く「我、獨り慮を勞し家を理め田業す。(弟は)優閑し、臥して食す。云何んが福德ぞや」と。其の母試みむと欲し、我をして田に至らしめ、種作に臨むを監し食を送らざらしむ。我、食の遲きを怪しみ人を遣はし往きて索めしむるに、母、人を遣はし我に語りて云く「有る所無し」と。我、還び母に白さく「唯、願くば我に與へ送れ、有る所無し」と。時に其の母兒の是の語を聞き卽ち寶案を取り器物を嚴具し樸を以て上を覆ふ、送りて以て我に與へ摩訶男をして遂ろて之を看せしむ。已に我が前に到る。其の樸を發き去るに百味の飲食案の器に悉く滿つ。是の如く餘時に在る所もみな意に應ず。若し四天下に寶を滿つるを得せしむるも劫盡くるの時は理として當に消滅し、復、久しきことを得ざるべし。是の如く我れ少しの糜を以て辟支佛に施し、九十一劫の間、福利未だ減らず、復、斯の德に緣り佛に見えて苦を度せり。是を以ての故に知むぬ。一淨戒の比丘を請じ舍に於て供養し利を得るは彼の四天下の寶より多し』と。時に阿那律、是の語を說き已れり。
時に世尊、外より來り入り阿那律の過去の事を說くを聞き諸の比丘に告げ給ふやう「汝等比丘、過去の事を說く。我、復次に說かむ當來の世、此の閻浮提は土地方正、平坦にして廣博、山川有ること無し。地に軟草を生じ猶し天衣の如し。爾の時、人民の壽八萬四千歲、身長八丈、端正殊妙なり、人性仁和にして具に十善を修む。彼の時當に轉輪聖王有るべし。名づけて[二]勝伽と曰ふ(晋に貝と言ふなり。) 彼の時、當に婆羅門の家に一男兒を生むこと有るべし。字を彌勒と曰ふ。身色紫金に

【二】勝伽。梵名、Saṅkho (Duṅ)。

子救はれず。能く食分を割き以用つて施を見る。當に爲めに變を現じ其をして歡喜せしむべし」と。卽ち虚空に飛び身より水火を出し廣く神足を現ず。還び其の前に住し阿淚吒に語りて言く「何の願を求めむと欲す。恣に汝の意に隨ひ變を見さむ」と。歡喜踊躍し、卽ち前みて至心に自ら誓を立てゝ言く「一切衆生、多種に財を求む。我、願くば世世乏しき所有ること莫れ、情の欲する所有らば意に隨つて至れ、又、願くば將來上士に遇ふことを得て功德汝に勝ること百千萬倍ならむ。我をして彼に於て漏盡の證を得、神足變化汝と異ならざらしめよ」と。願を求め已に訖れり。倍復歡喜す。時に辟支佛、所止に還歸り給へり。時に阿淚吒、卽ち還澤に入り薪を取る。到りて一つの兎を見る。意捕へ取らむと欲し走り逐ふこと轉た近し。鋒を以て遙に擲つ。卽時地に墮つ。適前みて取らむと欲すれば化して死人と爲り、其の背の上に上り急に其頭を抱ふ。力を盡して推し却くも、却かしむる能はず。心に恐怖を懷き惶惶苦惱し、意、城に入りて婦と共に解却けんと欲す。復、人の見ることを恐れて入ることを聽さゞらしむ。留りて日暮を待ち衣を以用つて覆ひ、擔ひ負ふて城に入り往きて其の舍に趣く。已に舍內に到るに自然に地に墮つ。變じて一聚の閻浮檀金と成る。光明晃昱し幷びに比る舍を照す。展轉之を談ず。上、王に徹す。王、卽ち人を遣はし往いて看て實を審にせしむ。使人、到りて觀るに是れを死人と見、尋いで還りて王に白さく「是れ死人耳」と。王、餘人に問へば、猶、「是れ金なり」と言ふ。甚だ所以を怪しみ、重ねて人をして看せしめ。是の如くすること七返、來り言ふに定まらず。王、卽ち自ら往き、親しく往きて之を見るに、死人なり。形漸く臭からむと欲す。卽ち、阿淚吒に問ふやう「汝は是れを何と見るや」と。答へて言く「看よ、實に是れ金なり」と。卽ち少し許を取り用つて王に奉る。王、金色を見、之を敬ふこと未だ有らず、其の所由を問ふ。「何に緣りて此を得たるか」と。時に阿淚吒、具に本末を以て王に向つて說くやう「必ず當に辟支佛に施すに由るが故なるべし」と。王、其の語を聞き歎じて言く「善き哉、汝、快利

ず、未だ幾時を經ざるに求めて共に分異れ、用を喪ふこと度無し。供給すべからず。前後汝に與ふこと六十萬錢汝足るを知らず。復更に來り求む。今、復更に汝に十萬錢を與へむ。能有るも能無きも更に來り索むること勿れ」と。夫婦、操を改め身を謹み用を節し心を家業に懃め、財産日に廣く其の後漸く富む。更に乏短無し。其の兄淚吒連いて衰難に遭ひ、所在破亡し財物迸散し、家理頓に窮し方計有ること無し。往きて弟の邊に到り[九]闕闊する所を說き少錢を求索めて、逮ばざるに供へ足さんとす。其の弟瞋り嫌ひて兄に語りて言く「謂ふに兄の家を望むに貧有るを識らず。云何が復來り我が所より索むるや」と。是の語を作し已りて乃ち食を讓らず。兄、便ち還り去り、而して自ら愕然たり。生死の中何ぞ畏る可き耶、體を析ちし兄弟も恩養を識らず。豈況んや他人をや、當に義理を推して心卽ち世を厭ひ、家を捨て山に入り靜坐して諸法の生滅を思惟し、心卽ち開悟して辟支佛と成れり。威儀觀る可し。城に入り乞食す。後、歲儉しきに値ひ人民飢乏し、時に辟支佛、乏食して得難し。時に弟の阿淚吒も、後轉た貧窮なり。復、歲荒に値ひ食穀繼がず。日に往きて薪を取り、稗子を[一〇]賣糴し家の婦兒と共に以て自ら供活す。一日晨朝早く往きて澤に入る。城門の中に於て辟支佛の威儀觀る可く城に入り乞食し給ふを見る。卽ち往きて薪を取り還り來り門に到り、辟支佛の空鉢にて出で給ふを見、心に自ら念を生ずるやう「此は是れ快士なり。晨に入城を見今乃ち空しく來る。若し今我と共に舍に至らば當に共に食を分ち以て之に施し奉るべし」と。是の念を作し已り此を捨てゝ去る。時に辟支佛、尋いで其の意を知り卽ち其の後に隨ふ。往きて門の中に到る。阿淚吒、之を見て心用つて歡喜し、卽ち爲めに床を敷き請じて坐に入らしめ、其の自らの分の稗子の糜を索め、躬手にて自持ち辟支佛に施す。時に辟支佛、阿淚吒に語りて言く「汝も亦飢渴なり、當に共に分ち噉ふべし」と。阿淚吒、白して言さく「我曹の世俗の食に時節無し。尊は日に一食なり。但願くば受くることを爲せ」と。卽ち、食を受け訖る。其の至心に感じ「斯の歲儉に遭ひ父

【九】闕闊。窮乏のこと。

【一〇】賣糴。うりかひ。

舍に於て供養し利を得ること極めて多きに如かず」と。其の餘の比丘各各方喩を引き其の利を比校し、皆悉く彼より多しと云ふ。

時に阿那律、復自ら說きて言く『正に四天下に滿つる寶を得しむるも其の利猶、復一淸淨沙門を請じ舍に詣り供養し利を得ること殊倍なるに如かず。然る所以は我是れ其の證なり。自ら過去九十一劫の時を念ふに世に佛有り毘婆尸と號す。般涅槃の後經法滅盡す。時に閻浮提に一大國有り。波羅㮈と名づく。爾の時、國中に一薩薄有り。家居乏少しき所無し。二男兒有り、各皆端正なり。長を淚吒と名づけ小を阿淚吒と字す。父、命終に垂んとして二子に告勅すらく「我、必ず免ぬかれず、後世に卽くべし、汝等兄弟相ひ承奉せんことを念ひ、心を合せ力を幷せ愼みて分居すること勿れ、然る所以は譬へば一絲の象を繫ぐに任ざるも多糸を合集すれば能く象を制するが如し。譬へば一つの葦獨り燃ゆる能はず、一把を合し捉ふれば燃して滅す可きが如し、今、汝兄弟も亦復是の如し。共に相ひ依恃せば外人壞らず。內に穆ぎ家に懃めなば則ち財業日に增さむ」と。誡を囑して後氣絕し命終せり。兄弟、敎を奉じ居を合すること數時後、阿淚吒の婦自ら心に念言ふやう「今、共に居止し、難を兄の家に留む。客人、知識を瞻待することを得ず。若し當に分異れて各自努力せば情旣に難きこと無く、家を成すことを得べし」と。是の事を念じ已り具に夫に向つて說く。阿淚吒、婦の言ふ所を聞き以て不可と爲す。婦、復慇懃に廣く道理を引く。阿淚吒情を迴らし事を以て兄に白す。兄、復父の命を垂るゝ言を引き廣く方比不可の理を示す。時に阿淚吒の婦數々夫に勸め、其の夫、意を決し急に分居を求め、兄其の意の盛なるを見て與に家居を分つ。分異の後阿淚吒の夫妻情を恣にし志を放ち、合伴の黨を招き飮噉、奢移し、禮度に順はず。未だ幾年を經ざるに家物耗盡し窮罄し計り無し。兄に詣り之を匃ふ。兄復之を矜み錢十萬を與ふ。用つて盡くし更に索む。是の如くすること六返前後凡そ六十萬錢を與ふ。後復來り求む。兄、復訶責す。「亡父の勸誡を汝承用せ

有り、偶道宕に到り彌勒を見、甚だ敬慕を懷き、卽ち大德に問ふやう「食を得ると爲すや未や」と答へて言く「未だ得ず」と尋いで請じ將ゐて歸り飮食を辦設す。食し已り澡漱し爲めに妙法を說けり。言辭高美、之を聽くに厭無し。時に大長者有り、嫁に欲するの女に値ひ先づ一つの珠を與へむと、僱ふて之を穿たしむ。「若し其れを穿ち訖らば錢十萬を與ふべし」と。時に長者人を遣はし來り索む。珠師、法を聞き五情甘樂し、語りて言く「且く去れ、此後當に穿つべし」と。其の人復語るやう「今、急に之を須ふ、時を念ひて手を著けよ」と。囑し已り還り去れり。具に長者に語る。斯て之を須ゆる頃、重ねて遣はし往きて索めしむ。猶故に法を聽き、未だ之を穿つことを爲さず、還りて長者に語る。長者恨みて言く「旣に重く相ひ屈ふ。唐く倩うて託せず。今乃ち前んで却けて、我が要を稱へざるなり」と。更に重ねて人を遣はし因つて錢を齎らして往く。「若し其れ未だ穿たざれば還び珠を擔ひて來れ」と。使人、到りて問ふ。猶故に法を聽く。未だ珠を穿たざるを知り、急に從つて還た索む。事已むを得ず、卽ち取りて他に還す。穿珠の師、彌勒の前に在り次第に法を聽たて心に厭退無し。其の妻瞋恚し夫を嫌ひ責めて言く「須臾の勞にして當に錢十萬を得以て家中の衣食の乏短に供ふべし、但、沙門浮美の談を聽くのみ、爾許の錢財の利を亡失せり」と。夫、其の言を聞き情に悔恨を懷く。彌勒その意を知りて之に語りて言く「汝、今、能く精舍に至るや不や」と。答へて言く「爾る可し」と。卽時、共に精舍に到り、將ゐて僧中に到る。衆僧に問ふて言く「若し檀越有り、一持戒清淨沙門を請じ舍に就き供養し得る所の盈利と、人有り十萬錢を得ると何如」と。時に憍陳如、尋いで卽ち說いて言く「假使人有り百車の珍寶を得て其の福利を計るも一淨戒の沙門を請じ舍に就き供養し利を得るの弘く多きに如かず」と。舍利弗、言く「設令人有り、一閻浮提の中に滿つる珍寶を得るも猶一淨戒者を請じ舍に就き供養し利を獲ること彌多きに如かず」と。目犍連、言く「正使人有り、二天下の中に滿つる七寶を得るも實に一淸淨沙門を請じ

雖も男子のみ幸有りて獨り見聞するを得たり。我曹の女人恩祐を蒙らずと。佛、其の意を知り卽ち王に語りて言く「今より已後國の男女をして番休、法を聽かしめ、一日にて一更りとなす」と。是より已後度を蒙る甚だ多し。

時に佛の姨母摩訶波闍波提、佛已に出家してより手自ら紡織し預め一端の金色の氎を作りぬ。心を積み想を係け唯、佛を俟てり。既に佛を見るを得て喜び心髓より發し、卽ち此の氎を持ち如來に奉上る。佛、憍曇彌に告げ給ふやう「汝、此の氎を持ち往きて衆僧に奉れよ」と。時に波闍波提、重ねて佛に白して言さく「佛の出家し給へしより心毎に思念ひ、故に手づから紡織り、規として心、佛を俟てり。唯、願くば愍を垂れ我が爲めに之を受けよ」と。佛、之に告げて曰く「母の心を專にして用つて我に施さむと欲するを知る。然れども恩愛の心の福弘廣ならず。若し衆僧に施さば報を獲ること彌多し。我、此の事を知り是を以て相ひ勸む」と。佛、又言ひて曰く「若し檀越有り十六種に於て具足し(八)別請せば福報を得と雖も亦未だ多しと爲さゞるなり。何をか十六と謂ふ、比丘、比丘尼各八輩有り。僧中漫に四人を請ずるに如かず。得る所の功德・福彼よりも多し。十六分中未だ其の一に及ばず。將來末世、法盡きむと欲するに垂むとし正に比丘をして妻を畜へ子を挾ましめ四人以上名字の衆僧應に舍利弗・目犍連等の如く敬視すべし」と。時に波闍波提、心乃ち開解し、卽ち其の衣を以て衆僧に奉施す。僧の中を次いで行き、取ることを欲する者無し。彌勒の前に到る。尋いで爲めに之を受く。後に於て世尊比丘僧と與に波羅㮈に遊び轉た行きて化導し給ふ。

爾の時、彌勒、金色の氎衣を著け身既に端正なり。色紫金の容にして表裏相ひ稱ふ。威儀詳序として波羅㮈城に入る。行きて乞食せむと欲し大陌の上に到り、鉢を擎げて住立す。人民の類其の色相を覩て圍遶し觀看し、厭足こと有ること無し。皆欽敬すと雖も能く食を讓るもの無し。一穿珠師

【八】別請。衆比丘の中にて特に一人を請じて供養すること。

り。波婆梨、聞き已り喜び心に發し、卽ち、坐より起ち長跪合掌して王舍城に向つて自ら誠言を說くやう「生れて聖世に遭ふ。甚だ値遇し難し。尊容を覩て淸化を稟受せむと思ふも年已に老邁にして足の力强からず。誠欵有りと雖も自ら達するに由し靡し。世尊、大慈なり、豫め人の心を知り給ふ。唯、願くば神を屈し來り見て接し濟ひ給へ」と。時に如來遙に其の意を知り臂を屈伸する頃其の前に來り到り給ふ。禮し已りて頭を擧げ、尋いで世尊を見奉り、驚喜踊躍し、禮拜問訊し請じ坐に就かしめ、恭肅して、佛に侍す。佛爲めに說法し給ふ。阿那含に逮ぶ。時に世尊、鷲頭山に還り給ふ。時に淨飯王、佛、道を成じ遊行敎化し多く度する所有るを聞き情に渴仰を懷き、覩覲を得むと思ふ。優陀耶に告ぐるやう「汝、佛の所に往き我が志意を騰げ悉達に白せよ、汝、本要有り道を得なば當に還るべしと、願くば往の言に遵うて、時に來りて相ひ見えよ」と。優陀耶、到り具に王意を宣ぶ、佛尋いで之を可とし、「七日當に往くべし」と。優陀耶、喜び還りて、消息を白す。淨飯王、聞いて諸臣に告げ語るやう「優陀耶來り云ふ。佛當に還るべしと。城內を莊嚴し極めて淸潔ならしめ、街陌を塗汚り遍く幢幡を竪て華香を饒に儲けて當に供養を俟つべし」と。嚴辦已に訖り、諸の群臣と與に四十里の外に世尊を奉迎せり。時に如來大衆と俱なり。八金剛力士八面に住在す。時に四天王各前に在りて導く。時に天帝釋欲界の諸天と與に其の左を侍衞し時に梵天王色界の天とともに其の右を侍衞す。諸の比丘僧、其後に列なり在り。佛、衆中に在り大光明を放ち天地を暉曜せり。威、日月に踰えたり。普く大衆と與に虛に乘じて往き、漸く王に近づかむと欲して下りて人の頭に齊し。王、臣民、夫人、婇女と與に大衆を觀見するに晃朗俱に顯はれ、佛、中央に在し星の中の月の如し。王、大いに歡喜し覺えず下りて禮し、禮し畢りて問訊するやう「與に共に國に還り尼拘盧陀の僧伽藍に住せよ」と。是の時、國法に男女の別有り、王臣民と與に日日法を聽き、法を聞いて開悟し、度を得る者衆し。諸女人の輩各怨恨を懷く。佛、大衆と與に國に還り給ふと

れ佛の弟子なり」と。時に彌勒等各自說いて言く「佛弟子中乃ち是の人有り」と。漸く佛の所に進む。遙に世尊を見るに光明顯照し衆相赫然たり。卽ち其の相を數ふるに其の二を見ず。佛、卽ち其の爲めに舌を出し面を覆ひ、復、神力を以て陰藏を見せしめ給ふ。相の數滿つるを見て益以て歡喜し、卽ち師の勅を奉じ遙に以て心に難ずるやう「我が師の波婆梨は幾相有りと爲すか」と。佛、卽ち遙に答へ給ふやう「汝の師、波婆梨は唯二相有り、一は髮紺靑、二は廣長の舌」と。是の語を聞き已り復更に心に難ず。我が師、波婆梨の年は今幾許ぞや」と。佛、遙に答へて言く「汝の師、波婆梨は年百二十なり」と。既に是を聞き已り復心に難を念ふ。「我が師、波婆梨は是れ何の種姓なりや」と。佛、卽ち遙に答ひ給ふ「汝の師、波婆梨は是れ婆羅門種なり」と。是を聞くことを得已り復更に心に難ずるやう「我が師、波婆梨には幾の弟子有りや」と。佛、卽ち遙に答ひ給ふ「汝の師、波婆梨には五百の弟子有り」と。時に會者、佛の說き給ふ所を聞き、甚だ如來獨り此の語を說き給ふを怪しみ、時に諸の弟子長跪して佛に問ひ奉る「世尊何の故に而も是の言を說き給ふや」と。佛、比丘に告げ給ふやう「波婆梨なるもの有りて、波梨弗多羅國に在り、十六人の弟子を遣り我の所に來り試みに我が相を觀じ、因つて心に難を念ぜしむ。是を以て一一還た以て之に答ふるなり」と。時に彌勒等佛の難を答ひ給ふ事事實の如くにして一も差違無きを聞き、深く敬仰を生じ佛の所に往至り、頭面に禮し訖り却きて一面に坐せり。佛、爲めに法を說き給ひ、其の十六人法眼淨を得、各座より起つて出家を求索む。佛、言く「善く來れり」と。鬚髮自ら墮ち法衣身に在り尋いで沙門と成る。重ねて方便を以て其の爲めに說法し給ふ。其の十五人阿羅漢と成る。時に彌勒等自ら共に議して言く「波婆梨師遠くに在りて遲きを悒ふ。宜しく時に人を遣はし還び消息を白すべし」と。十六人中時一人有り、賓祈奇と字す。是れ波婆梨の姉の子なり。衆人卽ち遣はし、往きて消息を白さしむ。本國の波婆梨の所に還り到り具に聞き見たるところを以て廣く爲めに之を說け

を樂しまず宮を踰え國を出で、六年苦行して、菩提樹下に十八億の魔を破り、後夜の中に於て善く佛の法を具せり。三明、六通、十力、無畏、十八不共悉く皆滿ち備れり。波羅㮈に至り初めて法輪を轉じ阿若憍陳如の五人漏盡きぬ。八萬の諸天法眼淨を得無數の天人大道意を發せり。復、摩竭に到り鬱毘羅丼びに舍利弗、目犍連等を度し千二百五十の比丘を出せり。以て徒類と爲し號して衆僧と曰ふ。功德・智能稱げて計ふ可からず。總じて之を言へば名づけて佛と爲すなり、今、王舍城鷲頭山中に在せり」と。時に波婆梨、佛の德を歎ずるを聞き自ら思惟して言く「必ず當に佛有るべし、我が書に記する所、沸星下に現るれば天地大いに動き當に聖人を生むべしと。今、悉く此れ有り、是に當るに似るなり」と。卽ち、彌勒等十六人に勅するやう「往きて瞿曇に見え、其の相好を看衆相若し備はらば心に念じて之に難ぜよ、我が師、波婆梨は幾相有りと爲すかと、我、今の如きは身に兩相有り、一は髮紺靑、二は廣長舌となり。若し其れ之を識らば復更に心に難ぜよ。我が師波婆梨の年は今幾許ぞと、我が年の如きは今百二十なり。若し其れ之を知らば復更に心に念ぜよ、我が師、波婆梨は是れ何の種姓ぞと、我が種を知らむと欲せば是れ婆羅門なり。若し其の答ふるを識らば復更に心に難ぜよ、我が師、波婆梨には幾の弟子有るかと、我が今の如きは五百の弟子有り、若し答へて數を知らば斯れ必ず是れ佛なり。汝等必ず當に爲めに其の弟子一人を遣はし我に消息を語らしむべし」と。時に彌勒等進みて王舍に趣き、鷲頭山に近づき到りて佛の足跡を見る。千輻輪相、昞然として畫の如し。卽ち、人に問ふて言く「此は是れ誰の跡ぞや」と。人有り答へて言く「斯は是れ佛の跡なり」と。時に彌勒等遂に慕仰を懷き跡の側を徘徊し、豫欽、渴仰す。時に比丘尼、刹羅有り、一つの死せる虫を持ち佛の跡の處に著け彌勒等に示す。「各共に此れを看よ、汝等斯跡を欽羨・歎慕し衆生を蹈み殺す、何の奇有るや」と。彌勒、之等各共に前み看、諦に形相を觀るに是れ自らの死虫なり。卽ち比丘尼に問ふやう「汝は誰の弟子ぞや」と。比丘尼、答へて言く「是

に會を作し其の美を顯揚せむと欲す。一弟子を遣はし波羅㮈に至り「輔相に語り兒の所學を說き、珍寶を索め爲めに會を設けむと欲す」と云はしめんとす。其の弟子中道に往至り、人の佛の無量の德行を說くを聞き思慕して見えむと欲し、卽ち往きて佛に趣き、未だ中間に到らざるに虎の爲に噉はれ、其の善心に乘じて第一四天に生る。波婆梨、自ら所有を竭し財賄を合集め爲めに大會を設け、婆羅門を請じ一切都て集まる。餚饍種種の甘美を供辨す。會を設け已に訖る。大いに[五]噠嚫を施す。一人各五百金錢を得たり。布施し訖竟り財物[六]罄盡く。一婆羅門有り、勞度差と名づく。最も後に於て至り、波婆梨を見、「我、後より來り食を得ずと雖も當に比例の如く我に五百の金錢を與ふべし」と。波婆梨、答へて言く「我が物已に盡きたり。實に汝の所愛有るに從はざるなり」と。勞度差、言く「聞く、汝、施を設け望み有るもの相ひ投ずと、云何が空しく見て施惠を垂れざるや。若し必ず拒逆みて給せずんば汝更に七日にして頭七段に破れむ」と。時に波婆梨、是の語を聞き已り自ら思惟して言く「世に惡呪と及び餘の[七]蠱道有り、事輕んず可からず。儻し能く是有らん。財物悉く盡く。卒に方計無し」と。是を念ひ愁憂し深く以て懼を爲す。前の使の弟子の終に天に生れし者、遙に其の師の愁悴し賴り無きを見、卽ち天より下り其の前に來到り、其の師に問ふて言く「何故に愁憂するや」と。師、具に事を以て廣く因緣を說く。天、其の語を聞き尋いで師に白して言く「勞度差は未だ頂法を識らず、愚癡・迷網にして惡邪の人なり。竟に何の能ふする所ぞ。而して乃し此を憂ふ。今唯、佛有り、最も頂法を解き給ふ。極り無き法王なり、特に歸依す可し」と。時に波婆梨、天の佛と說くを聞き卽ち重ねて之に問ふやう「佛とは是れ何人ぞや」と。天卽ち佛を說くやう「佛は迦毘羅衛の淨飯王の家に生れ給ふ。右脅より生れ、尋いで七步を行き、天人の尊と稱ふ。三十二相八十妙好なり。光天地を照し梵・釋侍御す。三十二瑞振動顯發す。相師、觀じて見て其の兩處を記す。家に在らば當に轉輪聖王と作り、出家せば佛と成るべしと。老・病・死を覩て國位

【五】噠嚫。財施のこと。
【六】罄盡。つくること。
【七】蠱道。呪禁の道。

戴奉行せざるは莫し。

五十七、[一]波婆離の品　第五十

是の如く我聞きぬ。一時、佛、王舍城の鷲頭山中に在し衆弟子千二百五十人と倶なりき。

爾の時、波羅捺王波羅摩達と名づく。王、輔相有り一男子を生む。三十二相衆好備り滿つ、身の色紫金にして姿容挺特す。輔相、子を見て倍增怡悅せり。卽ち、相師を召し之を占相せしむ。相師、披き看て歎じて言く「奇なる哉、相好畢く滿てり、功德殊に備はり智辯通達す。人表に出で踰えたり」と。輔相益喜ぶ。因つて爲に字を立つ。相師、復、問ふやう「生れしより來何の異事か有りしや」と。輔相答へて言く「甚だ異常を怪しむ。其の母、素より性良善なる能はず。懷妊已來苦厄を悲矜し[二]黎元を慈潤し等心護養せり」と。相師、喜びて言く「此は是れ兒の志なり、因りて爲めに字を立て號して彌勒と曰ふ。父母の喜慶ぶ心量り有ること無し。其の兒殊に稱ふ。合土宣べ聞ゆ。國王、之を聞き懼を懷き言ひて曰く「此の小兒を念ふに名相顯美す。儻高德有り必ず我が位を奪はむ。其の未だ長ぜざるに及び當に豫め除滅すべし、久しからば必ず患と爲らむ」と。是の計を作し已り、卽ち、輔相に勅するやう「聞く汝子有り、容相異有りと、汝將來るべし。吾、見ゆるを得むと欲す」と。時に宮内の人兒の暉を問ふを聞き王の欲圖を知り甚だ湯火を懷く。其の兒に舅有り波婆梨と名づく。波梨弗多羅國に在りて彼の國師と爲る。聰明高博智達殊に才あり。五百の弟子恒に逐ふて[三]諮稟す。時に輔相其の子を憐愛し其の害を被るを懼れ復密計を作し、人を遣はし象に乘り之を送り舅に與ふ。舅、彌勒を見其の色好を覩て意を加へて愛養し、敬ひ視て懷ふこと在り。其の年漸く大なり。敎へて學問せしむ。一日諮受するに餘の[四]終年に勝る。學未だ歲を經ざるに經書に通ず。時に波婆梨、其の外甥の兒の學んで既に久しからざるに諸書に通達するを見て爲め

【一】波婆離品。西本、欠。

【二】黎元。人民、庶民。

【三】諮稟。とひ敎をうけること。

【四】終年。一年中。

白す。佛、象護に告げ給ふやう「此の象に因つての故に煩憒有るを致せり。卿、今疾く象を遣り去らしむべし」と。象護、佛に白さく「久しく之を遣らむと欲す。然れども肯て去らず」と。佛、復告げて曰く「汝、之を語る可し、我、今、生分已に盡せり、更に汝を用ひずと、是の如く三に至らば象當に滅すべきなり」と。爾の時、象護、世尊の敎を奉じ象に向つて三たび說けり。「吾、汝を須ひず」と。是の時、金象卽ち地中に入れり。時に諸の比丘咸共に奇怪とし世尊に白して言く「象護比丘は本何の德を修め何の福田に於て此の善根を種え乃ち斯の報の巍巍是の如きを獲たるや」と。

佛、阿難及び諸の比丘に告げ給ふやう「若し衆生有りて三寶の福田の中に於て少少の善を種うるも無極の果を得るなり。乃往過去に迦葉佛の時、彼の世の人壽二萬歲、彼の佛敎化し周く訖り、神遷り【五】泥洹し給ひ。靈骨を分布し多く塔廟を起せり。時に一塔有り。中に菩薩の本兜率天より乘りて來下し母胎に入りし時の象の像あり、彼の時の象身少しく剝破あり。時に一人有り、行きて塔を遶り象の身の破るるを見るに値ふ。便ち自ら念言ふやう「此は是れ菩薩の乘る所の象なり。今は損壞す。我、當に之を治むべし」と。泥を取り用つて補ひ、【六】雌黃を汚塗る因つて誓願を立つるやう「我をして將來尊貴に處り財用乏しきこと無からしめよ」と。彼の人壽終り天上に生れ天の命を盡せり。人間に下生して常に尊豪富樂の家に生る。顏貌端正にして世と異有り、恒に金象有りて時に隨つて侍衞せり』と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時、象を治せし人を知らむと欲せば今の象護是れなり、彼の世に於て象を治せしに由るが故に是より以來天上・人中【七】封受すること自然なり。其の敬心【八】三尊を奉ぜしに緣る故に今我に遭値し妙化を稟受せり、心垢都て盡し阿羅漢に逮べり」と。

慧命、阿難及び諸の衆會佛の說き給ふ所を聞き開解せざるは莫く各其の所を得たり。須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り、無上正眞道意を發す者有り、不退地を證す者有り。歡喜し敬

【五】泥洹。涅槃に同じ。

【六】雌黃。硫黃と砒素との混合物。

【七】封受。福をうくること。

【八】三尊。佛・法・僧の三寶のこと。

行來に堪任ゆれば象も亦是の如し。我に於けると違ふこと無し。我、恒に之に騎り東西遊觀し遲速意に隨ふ、甚だ人の情に適ふ。其の大小便純ら是好金なり」と。時に王子〔三〕阿闍世も亦其の中に在り、象護の說く所を聞き便ち是の念を作さく「若し我れ王と爲らば當に之を奪取すべし」と。既に王と作るを得たり。便ち象護を召す。使をして象を將ゐ共に王所に詣るを敎えしむ。時に象護の父、其の子に語りて曰く「阿闍世王は兇暴無道なり、貪求・慳悋にして、自の父すら尙害す。何ぞ況んや餘人をや、今卿を喚び將に卿の象を貪る。儻能く相ひ奪はむ」と。其の子、答へて曰く「我が此の象は能く刧り得るもの無し。父子卽時共に乘りて王に見ゆ。時に守門人、卽ち入りて王に白さく「象護の父子象に乘り門に在り」と。王、之に告げて曰く「象に乘りて入るを聽せ」と。時に守門者還び出て具に告ぐるやう「象護の父子、象に乘り徑を前めよ」と。既に宮內に達す。爾ば乃ち象より下り王の爲めに跪拜し安否を問訊す。王、大いに歡喜し命令して座に就かしめ、飮食を賜與す。粗略談語す。須臾の頃王を辭し去らむと欲す。王、象護に告ぐるやう「象を留めて此に在らしめ、將ゐて出づること莫かれ」と。象護、欣然敎へを奉じ之を留めて空しく步みて宮を出づ。未だ久しからざるの間象地に沒して門外に踊出す。象護、還び得て之に乘り家に歸る。少しの時を經由て便ち自ら念じて曰く「國王は無道なり、刑罰理に非ず、此の象に因る故に或は能く害せられむ、今、佛、世に在して群生を澤潤し給ふ。家を離れ梵行を遵修するに如かず」と。卽ち父母に白さく「入道を求索む」と。二親聽許す。便ち辭して去る。其の金象に乘り祇洹に往至り、既に世尊に見え稽首し禮を作し本志を陳說く。佛、尋いで許して言く「善く來れり比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法服身に在り便ち沙門と成れり。佛、便ち爲めに四諦の要法を說き給ふに、神心超悟し便ち羅漢に逮べり。每に諸の比丘と與に林間樹下に思惟し道を修む。其の金象は恒に目前に在り。舍衞國の人金象有るを聞き競ひ集り之を觀、〔四〕忽鬧して靜かならず。行道を妨廢す。時に諸の比丘意を以て佛に

【三】阿闍世。(Ajāta-śatru) 西名、(Maskyes-dgra)。

【四】忽鬧。騒がしきこと。

然願ふ所の物功力を加へず皆悉く而も生じ、聖師に遭値し仁等に過踰ゆること百千萬倍にして法を聞き心淨く疾く道果を獲しめよ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の比丘とは今の檀彌離是れなり、其の四比丘を供給するに縁るが故に九十一劫天人の中に生れて豪貴尊嚴にして、貧窮・卑賤の家に處らず。今、我を見るを得て道を獲、世を度れり」と。

爾の時、阿難及び諸の比丘佛の說き給ふ所を聞き各自勸勵し精進し道を修せり。初果乃至四果を得る有り、曠濟の心を發し不退に住する者有り各各喜悅し頂戴し奉行せり。

五十六、象護[一]の品　第四十九

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、摩竭國の中に一人の長者有り一人の男兒を生む。相貌具足し甚だ愛敬す可し。其の生るるの日藏中に自然に一金象を出す。父母歡喜し便ち相師を請じ其の爲めに字を立つ。時に諸の相師兒の福德を見て其の父母に問ふやう「此の兒、生れし日何の瑞應か有りしや」と。即ち之に答へて言く「一つの金象有り兒と倶に生る。瑞に因つて字を立て名づけて象護と曰ふ。兒、漸く長大し象も亦隨つて大なり。既に能く行歩す。象も亦行歩す。出入進止常に相ひ離れず。若し意、用ひざれば便ち住して內に在り。象の大小便は唯好金を出せり。其の象護なる者常に五百の諸の長者の子と共に行きて遊戲し。各各自ら家內の奇事を說く。或は說くもの有りて言く「我が家の舍宅・床榻[二]・坐席悉く是れ七寶なり」と。或は自ら說くもの有り。「我家の屋舍及び園林、與に亦是れ衆寶なり」と。復、說くもの有りて言く「吾が家の庫藏には妙寶恒に滿つ」と。是の如きの比種々衆多なり。是の時、象護、復自ら說きて言く「我、初めて生るゝの日家內に自然に一つの金象を生む。我年長大し

【一】象護品。西本、No. 42. (Gloṅ-po skyoṅ gi leḥu)。

【二】床榻。とこ、こしかけ。

へて言く「我、二兩を須ふ、便ち折りて之を與へよ、多少正に足れり」と。
卽ち、侍從をして先に送り國に歸らしむ。時に王、敬ひ念じて之に語りて言く「汝、當に佛を見るべし」と。彌離、答へて言く「云何が佛と爲す」と。王、曰く「汝、聞かざるや迦維羅衞の淨飯王の子、老・病・死を厭ひ出家學道し道成して佛と號す、三十二相・八十種好あり、神足智慧殊に挺で比無し、人・天中尊き故に號して佛と爲す」と。彌離、聞き已り深く敬心を生じて王に問ふて言く「今、何許に在すや」と。王、之に答へて曰く「王舍城竹園の中に在し止まれり」と。王、去るの後卽ち往きて佛を見奉る。佛の威顏國王の歎する所に過踰ゆること萬倍なるを覩、心に歡喜を懷き頭面に禮を作し、起居を問訊す。佛、爲めに說法し給ふに、須陀洹道を得たり。長跪合掌し出家を求索む。佛、卽ち、聽許し給ふ。「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮便ち墮ち法衣身に著く。重ねて爲めに法を說き給ふ。四諦の眞法苦・集・盡・道なり。心垢都て盡き阿羅漢を成ぜり。爾の時、阿難及び諸の比丘合掌して佛に白し、世尊に問ふて言く「檀彌離比丘は、何の功德有りて人中に生れ天の福祿を受け世樂を樂しまず。出家して未だ久しからず卽ち道果を獲たるや」と。

佛、阿難に語り給ふやう「善く聽けよ、當に說くべし。乃往過去九十一劫の時世に佛有りて毘婆尸と名づく。滅度の後像法の中に於て五比丘有り共に盟要を計り靜處を求覓め當に共に行道すべしと。一つの林澤の泉水清美・淨潔樂しむ可きを見、時に諸の比丘俱に共に聲を同じくして一人を勸請す。此は城を去ること遠し、乞食するに勞苦なり、汝、當に福の爲めに我等を供養すべし」と。爾の時、一人卽便ち許可し人の間に往至し諸の檀越を勸め。日爲に食を送れり。四人の身安く專精に行道し、九十日の中に便ち道果を獲たり。卽ち共に心を同じくして此の比丘に語るやう「汝に緣るが故に我等安穩にして本心の規とする所今已に之を得たり。何の願を求めむと欲するや、恣に汝、之を求めよ」と。時に彼の比丘・心情歡喜びて是の言を作さく「我、をして將來天上・人中富貴自

【九】二兩。兩は四匁。

の小女の輩は復用つて何の爲めぞ」と。彌離、答へて言く「消息を通じ白すなり」と。次いで中門に入る。純紺琉璃なり。門內に女有り、面貌端嚴なり。復、上に勝る。左右侍從するもの前の數の轉た倍なり。進みて內門に入る。純黄金を以てす。門內に女有り、顏貌端正上の者に轉た勝る。金床に坐し金の縷を紡む。左右の侍人復上の數に倍す。王、亦之に問ふやう「此の女人は是れ卿の婦なる耶」と。答へて言く「非なり」と。入りて舍內に到る。琉璃地を見るに淸徹水の如し。屋間種々の獸形及び水虫の像を刻鏤す。風吹きて之を動かすに影地中に現はれ、[五]奕奕動搖す。王、見て疑ひ怖れ、謂ふやう「是れ實に水なり」と。而して之に問ふて言く「餘に更に地無し。殿前に池を作るや」と。彌離、答へて言く「此は水に非ずるなり。是は紺琉璃なり」と。卽ち手指の七寶の[六]環釧を脫し地に擲置すれば、徑に彼の際に到り壁に礙られて乃ち住す。王、見て歡喜し卽ち共に內に入る。七寶殿に昇る。彌離夫人其の殿上に在り、坐する所の床紺琉璃を用ふ、更に妙床有りて王を請じて坐せしむ。彌離夫人、眼より卽ち淚出づ。王、之に問ふて言く「何を以て淚を出すや、相ひ喜ばざるか」と。夫人、答へて言く「王の來り給ふは大いに善し、但、王の衣服に、[七]微かなる烟氣有り、我をして淚出てしむ。是れ相ひ憎むに非らず」と。王、便ち問ふて言く「今、汝の家內火を然さざる耶」と。答へて言く「不なり」と。王、問ふて曰く「何を以て食を煮る」と。答へて曰く「食を欲するの時百味の飮食自然に前に在り」と。王、復、問ふて言く「冥暮の時何を以て明と爲す」と。答へて言く「摩尼珠を用ふ」と。卽便ち戶及び諸の[八]窓牖を閉ぢ摩尼珠を出すに、明かなること晝日に踰えたり。時に檀彌離、跪きて王に白して言さく「大王よ、何の故に勞して尊神を屈し給ふや」と。王、之に告げて曰く「我子瑠璃、病困を被る。篤牛頭栴檀を須ふ。故に來り之を索む」と。彌離、歡喜し將ゐて諸の藏に入り、其の物を指示す。七寶の珍奇、明淨にして日に曜やき、栴檀積聚して稱て計ふ可からず。而して王に語りて言く「須ふれば之を取れ」と。時に王、答

【五】奕奕。光り輝く貌。
【六】環釧。うでわ。
【七】微烟氣。かすかなけぶり。
【八】窓牖。まど。

各道跡を得、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得るもの有り、無上正眞道意を發すもの有り、或は不退地に住する者有り。

衆會、法を聞き咸共に歡喜し頂戴奉行せり。

五十五、[一]檀彌離の品　第四十八

是の如く我聞きぬ。一時、佛、王舍城竹園の中に在しき。

時に拘薩羅國の中に一長者有り、[二]曇摩貰質と字す。豪貴大富なり。子息有ること無く、國中の一切の神祇に禱祀り子有ることを求索む。精誠神に感じ婦卽ち懷妊す。日月期滿ち一男兒を生む。軀體端嚴にして世の希有とする所なり。諸の相師を召し吉凶を占相せしむ。相師、之を占ひ、其の德有るを知り因つて爲めに字を立て檀彌離と名づく。年旣に長大し其の父命終す。時に波斯匿王、卽ち父の爵を以て之に封し、王の封を受け已る。父の時の舍宅變じて七寶と成り、諸の庫藏の中悉く皆盈滿して種々具有す。時に王子、[三]瑠璃、純なる熱病を被り至りて困悴を爲す。諸醫の處藥牛頭栴檀を須ひ用つて其の身を塗らば當に除愈を得べしと。王、卽ち令を出し國中に唱へ語るやう「誰か牛頭栴檀有らば持ちて王家に詣れ。別して[四]雇直し千兩金を與ふべし」と。語をして遍からしむ。持ちて來る者無し。時に一人有り、王に啓白して曰く「拘薩羅國の檀彌離長者の家の內に大いに有り」と。時に王之を聞き車馬の輿に乘り躬自ら往きて求め、檀彌離長者の門前に到る。時に門を守る人卽ち入りて之を白さく「波斯匿王、來り門外に在り」と。長者、歡喜し卽ち出でゝ奉迎す。王を請じて宮に入り、前みて外門を見る。純白銀を以てす。門內に女有り、面首端正にして世に雙有ること無し。銀床に踞り銀の縷を紡む。小女十人左右に侍從す。時に王、便ち問ふやう「是は汝の婦なる耶」と。答へて曰く「非なり。是は門を守る婢なり」と。王、續いて之に問ふやう「是

【一】檀彌離品。西本、No. 41.(Khyim-bdag dan-byi-la shes-bya-baḥi leḥu)(家主、檀彌離の品)。

【二】曇摩貰質(Dharmagreṣṭhi)。西名、(Dam-śi-tsir)と音寫す。

【三】瑠璃。西語、(Vaiḍūrya)。

【四】雇直。買ふこと。

尊よ、摩頭羅瑟質は、何の功德を積み出家して未だ久しからず應眞意を獲得し、須ゆるところ有れば意に隨つて得るや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「汝、往日、師質の請を受けしを憶ふや不や」と。答へて言く「之を憶ふ」と。佛、言く「阿難よ、彼に於て食し還りて空澤の中に至りし時に獮猴有りて汝より鉢を索め、蜜を盛りて佛に施し、佛の爲めに之を受くるを見て、欣悦して起ちて舞ひ、坑に墮ち卽ち死せり。汝、復、憶ふや不や」と。答へて言く「之を憶ふ」と。佛、阿難に語り給ふやう「彼の獮猴とは今の摩頭羅瑟質是れなり。其の佛を見て歡喜し蜜を施すに由り彼の家に生るゝを得、姿貌端正にして、出家學道し速に無漏を成ぜり」と。阿難、長跪し重ねて佛に白して言く「復、何の緣有りて獮猴の中に生れたるか」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『乃往過去、迦葉佛の時年少比丘有りて、他の沙門の[四]渠水を跳び渡るを見て是の言を作さく「彼の人、驃疾熟獮猴に似たり」と。彼の時、沙門、是の語を聞き已り便ち之を問にて曰く「汝、我を識るや不や」と。答へて言く「汝を識る。汝は是れ迦葉佛の沙門なり。何を以て識らざらむや」と時に彼の沙門、復之に語りて言く「汝、我を[五]假名の沙門と呼ぶこと莫れ。沙門の諸果我悉く之を辦ぜり」と。年少、聞き已り衣毛皆竪つ。五體を地に投じ哀を求め懺悔す。「過を悔ゆるに由るが故に地獄の形に墮ちず。羅漢を呰りし故に五百世中恒に獮猴と作れり。前に出家し禁戒を持ちしに由るが故に今我に見ゆるを得たり。沐浴淸化し諸の苦を盡すを得たり』」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の年少の比丘とは今の摩頭羅瑟質是れなり」と。爾の時、阿難及び諸の大衆佛の說き給ふ所を聞き悲喜交懷き咸、是の語を作す。「身・口・意の業護らざる可からず。是の比丘口を護る能はざりしに緣り報を獲ること是の如し」と。佛、阿難に告げ給ふやう「汝の言ふ所の如し」と。因つて四衆の爲めに廣く諸法を說き給へり。身・口・意を淨め心の垢除き淨め

【四】渠水。堀りわりの水。

【五】假名の沙門。西本、「私は名のみの比丘ではない」とあり。

佛、及び衆僧と所止に還歸り給ふ。路に一つの澤有り、中に泉水有り、甚だ清美と爲す。佛、比丘僧と與に便ち住し休息し給ふ。諸の比丘衆各各鉢を洗ふ　一匹の獮猴有り、來りて阿難に從ひ其の鉢を求索む。阿難、その破るを恐れ之を與ふるを欲せず。佛、阿難に告げ給ふやう「速に與へよ、憂ふること勿れ」と。教を奉じて便ち與ふ。獮猴鉢を得て持ちて蜜樹に至り蜜を鉢に滿して來り世尊に奉上る。世尊、告げて曰く「中の不淨を去れ」と。獮猴卽時蜂蟲を拾ひ去り、極めて淨潔ならしむ。佛、便ち告げて言く「水を以て之を和せ」と。語の如く水に著け和調已に竟る。世尊に奉授る。世尊、受け已り分布けて僧に與ふ。咸共に之を飲み、皆悉く周遍す。獮猴、歡喜し、騰踊し起ちて舞ひ、大坑中に墮ち、卽便ち命終り、魂識、師質の家に受胎す。時に師質の婦便ち娠有りと覺え、日月已に足り一人の男兒を生む。面首端正にして世之れに雙少し。生るゝの時に當り家內の器物自然に蜜に滿つ。師質の夫婦喜び自ら勝へず、諸の相師に請ふて其の吉凶を占はしむ。相師、占ひ訖りて之に告げて言く「此の兒德有り、甚だ善く比無し。」因つて爲めに字を作り　摩頭羅瑟質[三]と字す。（晋に蜜勝と言ふ）。其の初め生るゝ日蜜瑞應と爲るを以ての故に因りて名づくなり。兒、年已に大なり、出家を求索む。父母戀惜し肯へて之を放たず。兒、復慇懃に其の父母に白さく「若し必ず違遮し我が願に從はずむば當に命終を取るべし。俗に處る能はず」と。父母議りて言く「昔日、世尊已に豫め之を記せり、云く當に出家すべしと、今、若し固く留めなば或は能く死を取らむ。就きては當に之を聽すべし」と。共に議りて已に決し、兒に告げて言く「汝の志す所に隨はむ」と　兒、大いに欣躍し佛の所に往到り稽首し禮を作し出家を求索む。世尊、告げて言く「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら墮つ法衣身に在り。便ち沙門と成る。因りて爲めに廣く四諦の妙法、種々の諸理を說く。心、開け結盡き阿羅漢を得たり。每に諸の比丘と人の間に遊化す。若し渴乏の時鉢を空中に擲たば自然に蜜を滿す。衆と人共に飲み、咸充足を蒙る。是の時、阿難、佛に白して言さく「世

【三】摩頭羅瑟質。西名、(Sbr-ra -rtsi mchog)と意譯す。

卷の第十二

五十四、[一]師質の子、摩頭羅世質の品　第四十七

是の如く我れ聞きぬ、一時、佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、國中に一婆羅門有り、字を師質と曰ふ。居家大富にして、子息有ること無し。六師の所に詣り其の因緣を問ふ。六師、答へて曰く「汝の相兒無し」と。爾の時、師質、便ち家に還歸り垢膩の衣を著け、愁思して樂しまず。而して自ら念言ふやう「我れに子息無し。一旦、命終らば、居家の財物國王に入るべし」と。是を思惟し已り益增愁惱す。婆羅門の婦、一比丘尼と共に知識と爲る。時に比丘尼、其の舍に到るに値ふ。其の夫主の憂愁憔悴するを見て便ち之に問ふて言く「汝の夫、何故に愁悴して是の如きや」と。婆羅門の婦、卽ち之に答へて曰く「家に子息無し。往きて六師に問ふに、六師、占相して、當に兒無かるべしと云へり。是を以ての故に愁憂して樂しまず」と。時に比丘尼、復、之に語りて言く「六師の徒一切智に非ず。何ぞ能く人の業行の因緣を知らむ。如來世に在り明に諸法に達し給ふ。過去・未來障礙せらるゝ無し。往きて之を問ふ可し、必ず了知すべし」と。比丘尼、去るの後婦便ち夫に白すに向に聞く所の如し。時に夫聞き已り心便ち開悟け更に新しき衣を著け佛の所に往詣り佛の足に稽首し、佛に白して言く「我の[二]相命當に子有るべきや不や」と。世尊、告げて曰く「汝、當に子有るべし。福德具足し生長して已に大となり當に出家を樂しむべし」と。婆羅門、聞きて歡喜すること量無し。而して是の言を作さく「但、兒有らしめよ、學道するは何の苦ぞや」と。時に、因つて佛及び比丘僧を請ず。「明日、舍にて食し給へ」と。是の時世尊、默然として之を許し給ふ。明日、時到り佛、衆僧と與に其の家に往詣り給ふ。衆の坐已に定まる。婆羅門夫婦、心を齊くし志を同じくして敬うやしく飲食を奉り、衆會の食竟り、衆

【一】師質子、摩頭羅世質品。西本、No. 40. B:am-ye śin-tsir gyi leḥu)(婆羅門、師質の品)。

【二】相命。人相の吉凶の運。

財を以てせり」と。

尊者阿難、及び諸の衆會佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

慇懃に我を倩ふ。「意を寄せて王に白せ、何の故なるかを知らず。穴より出づる時は柔軟にして便ち易く還て穴に入る時は妨礙ありて苦痛なり、と。我自ら知らず、何に緣つて是れ有るか」と。王、之に答へて言く「然る所以は穴より出づる時は衆惱有ること無し。心情和柔にして、身も亦是の如し。蛇、外に在り鳥獸の諸の事其の身に觸嬈するに由り瞋恚隆盛にして身も便ち麁大なり。是を以て入る時穴に礙り前むこと難し。卿、之を語る可し、若し汝、外に在り心を持ちて瞋らざれば初め出づる時の如く則ち此の患無し」と。復、王に白して言さく「道に女人を見るに我を倩ふ。「王に白せ、我れ夫の家に在れば父母の舍を念ひ、若し父の舍に在れば復夫の家を念ふ。所以を知らず、何に緣りて乃ち爾るかと」と。王、復、答へて言く「卿之を語る可し、汝邪心に由りて父母の舍に於て更に〔二〕傍婿を畜ふ。汝、夫の家に在りては彼の傍人を念ひ、彼に至り小しく厭ひ還び正婿を念ふ。是を以て爾る耳。卿之を語るべし。汝、若し心を持ちて邪を捨て正に就かば則ち此の患無しと」と。又、王に白して言く「道邊の樹の上に一羽の雉有るを見る。我を倩ふ「王に白せ、我れ餘の樹に在りては鳴聲好からず。若し此の樹に在らば鳴聲哀和なり、其の故を知らず。何に緣りて是の如きかと」と。王、彼の人に告ぐるやう「爾る所以は彼の樹の下に大釜の金有るに由る。是を以て上に於て鳴聲哀好なり。餘處には金無し。是を以て上に住せば音聲好からず」と。王、檀膩羇に告ぐるやう「卿の過多し、吾已に汝を釋けり、汝の家の貧窮、困苦理極れり。樹の下の釜金應に是れ我が有なるべし。就て用つて汝に與ふ。卿、堀りて取る可し」と。王の敎の一一の答報を奉受し、彼の金を堀り取り貿易し田業し一切の須ゆる所皆乏少無く便ち富人と爲り、世を盡して快樂す。』と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の大王、阿婆羅提目佉とは豈異人ならむや、我が身是れなり。爾の時の婆羅門檀膩羇とは今の婆羅門賓頭盧埵闍是れなり。我、往昔の時其の衆厄を免かれしめ施すに珍寶を以てし、其をして快樂ならしむ。吾れ今成佛し復、彼の苦を拔き施すに無盡の法藏の寶

【二】傍婿。おとこめかけ。

る小兒有り、酒を飲み訖るに兒已に命終せり。臣、樂しむ所に非るなり。唯、願くば大王よ、當に恕察せらるべし」と。王、母人に告ぐるやう「汝の舍酒を沽る。衆客猥りに多し。何を以て兒を臥せて坐處に置き覆ふて現はれざらしむるや。汝、今二人倶に過罪有り、汝の兒已に死せり、檀膩𩠍を以て汝の與に婿と作し還び兒有らしめよ。乃ち放し去らしむと。爾の時、母人、便ち頭を叩きて曰く「我が兒已に死せり、聽して各和解せむ。我、此餓えし婆羅門を用つて夫と作すを用ひざるなり」と。是に於て各了し自ら和解を得たり。時に織工の兒、復、前みて王に白さく「此の人、狂暴にして我が公を躡み殺せり」と。王、問ふて言ひて曰く「汝、何を以ての故に他の父を枉殺せしや」と。檀膩𩠍曰く「衆債我に逼り、我、甚だ惶怖れ、牆を越び逃走せんとして偶其の上に墮つ。實に樂しむ所に非ず」と。王、彼の人に語るやう「二倶に是ならず。卿の父已に死せり。檀膩𩠍を以て汝に與ふ、公と作せ」と。其の人、王に白さく「父、已に死し了れり。我、終に此の婆羅門を用以つて父と爲さゞるなり。聽して各共に解けん」と。王、便ち之を聽せり。時に檀膩𩠍、身の事都て了り欣踊ぶこと量無し。故に王の前に在りて、二母人の共に一兒を諍ひ、王に詣りて相ひ言ふを見る。時に王〔一〇〕明黠なり。智を以て計を權り、二母に語りて言く「今、唯、一兒にして、二母之を召す。汝二人に聽す、各一手を挽く。誰か能く得る者、卽ち是れ其の兒なり」と。其の母に非る者は兒に於て慈無く力を盡して頓に牽き、傷損を恐れず。生む所の母は兒に於て慈深く、隨從愛護し挽く挽くに忍びず。王、眞僞を鑒み力を出す者に語るやう「實に汝の子に非ず。強いて他の兒を挽く、今、王の前に於て汝の事實を道へ」と。卽ち、王に向つて首すやう「我、審に虛妄なり。枉げて他兒を名づく。大王は聰聖なり、幸に虛過を恕せ」と。兒、其の母に還り、各爾ち放ち去れり。復、二人有り共に白氎を諍ふ。王に詣りて紛紜す。王、復智を以て上の如く之を斷ぜり。時に檀膩𩠍便ち王に白して言さく「此の諸の債主我を將ゐて來りし時彼の道邊に於て一毒蛇有り、

【一〇】明黠。明らかにさときこと。

肯て我に償はず」と。王、之に問ふて曰く「何ぞ牛を還さゞるや」と。檀膩䩭曰く「我、實に貧困なり、熟穀田に在り、彼れ恩意有り、牛を以て我に借す、我用つて踐み訖る。驅りて還び主に歸せり。主も亦之を見たり。口に付せざりしと雖も牛其の門に在り、我、空しく家に歸れり、知らず。彼の牛竟に云何が失ふやを」と。王、彼の人に語るやう「卿等二人俱に是ならずと爲す。檀膩䩭、口付せざるに由り汝當に其の舌を截るべし。卿牛を見て自ら收攝せざるに由り當に汝の眼を挑るべし」と。彼の人、王に白さく「請ふ、此の牛を棄てむ。眼を剜り他の舌を截るを樂まざるなり」と。卽ち、聽して和解せり。馬吏復言く「彼之無道なり、我が馬の脚を折れり」と。王、便ち爲に檀膩䩭に問ふて言く「此れは王家の馬なり、汝何を以て輒ち打ちて其の脚を折るや」と。跪きて王に白うして言く「債主我を將ゐ道に從つて來る。彼の人我を喚び王の馬を遮らしむ。高奔し御し叵し。手を下し石を得、捉りて之に擲つに誤つて馬の脚を折れり。故に爾るに非ざるなり」と。王、馬吏に語るやう「汝、他を喚ぶに由り當に汝の舌を截るべし。彼、馬を打つに由り其の手を截るべし」と。馬吏、王に白さく「自ら當に馬を備ふべし、刑を行ふことを得る勿れ」と。各共に和解す。木工、復前みて云く「檀膩䩭、我の斲斤を失へり」と。王、卽ち問ふて言く「汝、復、何を以て他の斲斤を失ふや」と。跪きて王に白して言く「我、(河を)渡る處を問ふ。彼れ便ち我に答ふ。口中の斲斤　渠水に失墮ち、求め覓むるも得ず。實に故に爾らず」と。王、木工に語るやう「汝を喚ぶに由る故に當に其の舌を截るべし。物を擔ふの法、禮として手を用ふべし、卿口に銜むに由り水に墮すことを致せり。今、當に汝の前の兩齒を打ち折るべし」と。木工、是を聞き前みて王に白して言く「寧斲斤を棄てむ。此の罰を行ふこと莫れ」と。各共に和解す。是に酒家の母、復牽ゐて王に白す。王、檀膩䩭に問ふやう「何を以て乃ち爾く他兒を扛殺すや」と。跪きて王に白して言さく「債主、我に逼る。加ふるに復、飢渴す。彼に少酒を乞ひ床に上り之を飲む。意はさるに衩の下に臥せ

【九】渠水。深廣の水。

を銜み衣を褰げ垂れて越す。時に檀膩䩭彼の人に問ふて曰く「何處を渡る可きや」と。聲に應じて處を答ひ其の口開き已り斲斤水に墮つ。求め覓むるも得ず。復、來り之を捉ふ。共に將ゐて王に詣る。時に檀膩䩭諸の債主の爲めに催逼られ加ふるに復飢渴し、便ち道次に於て沽酒の家より少しく白酒を乞ふ。床の上にて之を飲む。意はざるに被の下に小兒の臥有り、兒の腹を壓し潰す。爾の時、兒の母復捉へて放たず。「汝、之無道なり。我兒を枉殺せり」と。並に共に持著へて將ゐて王宮に詣らんとし一つの牆の邊に到る。內に自ら思惟ふやう「我、之不幸なり。衆過橫に集まる。若し王の所に至らば儻能く我を殺さむ。我、今逃走せば或は脫るを得可し」と。是の念を作し已り自ら牆を跳躑す。下に織公有り、その上に墮ち(織公)卽死す。時に織公の兒復捉へて之を得、便ち衆人と共に將ゐて王に詣らんとす。次に復前み行き一羽の雉有り樹の上に住在するを見る。雉遙に之を問ふて曰く「汝、檀膩䩭今那に去らむと欲するや」と。卽ち上緣を以て雉に向ひ之を說く。雉、復、報じて言く「汝、彼所に到らば我が爲めに王に白せよ、我、餘の樹に在らば鳴聲快らず、若し此の樹に在らば鳴聲哀好なり。何に緣りて乃ち爾るや。汝、若し王に見えば我が爲めに之を問へ」と。次いで毒蛇を見る。蛇復之に問ふやう「汝、檀膩䩭、今何に至らむと欲するや」と。卽ち上事を以て具に蛇に向つて說く。蛇、復報じて言く「汝、王所に到らば我が爲めに王に白せ、我、常に晨朝初めて穴を出づる時身體柔軟にして衆痛有ること無し。暮て還り入る時身麁强にして痛し。孔に礙り前み難し」と。時に檀膩䩭亦其の囑を受く。復、母人を見る。而して之に問ふて言く「汝、何に趣かむと欲するや」と。復、上事を以て盡く向ひて之を說く。母人、告げて曰く「汝、王所に到らば我が爲めに王に白せ、我、夫家に向ふに父母の舍を思ひ、父母の舍に住せば夫の家を思念す。その何の故なるかを知らず」と。亦、其の囑を受く。時に諸債主、咸共に圍み守り將に王の前に至る。爾の時、牛主、前みて王に白して言く「此の人、我が牛を借りて去り我に從つて牛を索む。

【八】沽酒。酒あきなひ。

に競ひ集る無し。亦復、田の中の熟穀を憂ひず。他牛を借らざれば亡なう憂有ること無し」と。佛、之に告げて曰く「出家を欲するや不や」と。卽ち、佛に白して言く「我、今の如きは家を觀ること冢の如し。婦女の衆緣怨賊と處るが如し。世尊よ慈愍し出家を聽し給はゞ甚だ鄙の願に適ふ」と。佛、卽ち告げて曰く「善く來れり比丘よ」と。鬚髮自ら落ち身著る所の衣變じて袈裟と成る。佛、爲に法を說き給ふに、卽ち、坐處に於て諸垢永く盡く阿羅漢と成る。阿難、之を聞き歎じて言く「善き哉、如來の權導實に思議し難し、此の婆羅門、宿に何の慶を種ゑ衆患を離るゝことを得、玆に善利を獲ること猶し淨氎の染めて色を爲し易きが如きや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「此の婆羅門は但、今日のみ我が恩澤を蒙り苦を離れ安を獲しに非ず。過去の世の時も亦我が恩を賴り衆の厄難を免れ復安快を獲たり」と。阿難、佛に白さく「不審なり。世尊よ、過去世の時云何が免がれ救れ其をして苦を脫せしめしや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「諦に聽け諦に聽け、善く之を思念せよ、吾、當に汝の爲めに廣く分別し說くべし」と。阿難、佛に白さく「諾し、當に善く聽くべし」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『乃往、過去阿僧祇劫に大國王有り、[五]阿波羅提目佉と名づく。（晉に端正と言ふ。）治むるに道化を以てし民物を枉げず。時に王國の中に婆羅門有り、檀膩䩭と名づく。家理空貧なり、食、口に充ず。少しく熟穀有るも之を治むること能はず。他より牛を借り往きて踐治せむとす。穀を踐み已竟る。牛を驅り主に還すに驅りて他門に到る。忘れて囑付せず。是に於て還歸る。牛の主見ると雖も「用未だ竟らず」と謂ひ復、收攝せず。二家相ひ棄てゝ、遂に其の牛を失ふ。後往きて從ひ索む。言く「已に汝に還せり」と。共に相ひ[六]詆謾す。爾の時、牛主、檀膩䩭を將ゐ王に詣り牛を債めんとす。適出でゝ外に到り王家の牧馬の人を値見す。時に馬逸走し檀膩䩭、我が爲に馬を遮れよと喚ぶ。時に檀膩䩭手を下し石を得、持用つて之に擲つ。脚に値り卽ち折る。馬吏、復捉ひ亦共に王に詣らんとす次いで行きて水に到る。渡る處を知らず。一木工に値ふ。口に[七]斲斤

【五】阿波羅提目佉。西名、(Mdses-pa)。

【六】詆謾。そしりあなどること。

【七】斲斤。まさかり。

し。復、我に遇ひ見えて生死を度ることを得たり」と。
爾の時、阿難、及び諸の比丘、王及び臣民一切の會する者、佛、說く所の因緣行報を聞き皆悉く感厲す。四諦を思惟し須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り、辟支佛の善根の本を種うる者有り、無上正眞道意を發す者有り、或は不退轉に住することを得る者有り、皆、身・口を護り心を剋し善に從へり。佛の說く所を聞き歡喜奉行せり。

五十三、[一]檀膩羇の品　第四十六

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。
爾の時、國內に婆羅門、[二]賓頭盧埵闍有り、其の婦醜惡にして兩眼復靑し、純七女有り男子有ること無し。家自ら貧困なり、諸女亦窮し。婦の性弊惡にして恒に其の夫を罵る。女等更に互に來り須ゆる所を求む。比未だ稱給せず。目を瞋らし啼哭す。其の七女の夫其の舍に[三]臻集り承待供給す。其の意を失ふを恐る。田に熟穀有り未だ踐治せられず。他より牛を借り將に往きて之を踐まむとす。牛を守ること謹まず澤に於て亡失ふ。時に婆羅門坐して自ら思惟ふやう「我、何の罪を種ゑ酸毒兼ね至り、內は惡婦の爲めに罵られ七女に切られ、女の夫來集するも以て承當する無し。復他人の牛を失ひ所在を知らず」と。廣く行き推し覓め、形疲れ心勞れ愁悶・惱悴す。偶林の中に到り、如來の樹の下に坐し諸根寂定にして靜然安樂にましますに値ひ見奉る。時に婆羅門、杖を以て頰を拄ひ、久しく住して之を觀便ち此の念を生ず「瞿曇沙門、今、最も安樂なり、惡婦の罵詈・鬬諍、諸女の[四]熬惱貧女の夫等の煩損の愁苦有ること無し。又復田の中熟穀有ること無く他人の牛を借らず。失ふ憂有ること無し」と。佛、其の心を知り便ち之に語りて曰く「汝の念ふ所の如し。我の如きは今靜にして衆患無し。實に惡婦の呪詛罵詈無し。七女の我を熬惱するもの有ること無し。亦女の夫の我家

【一】檀膩羇。西本、No. 39. (Khyim-bdag dbyug-pa-can shes-pahi lehu)「家主、檀膩羇(Daṇḍika ?)の品」とあり。
【二】賓頭盧埵闍。西名、(Phyin-te-lo-śu-śa) 梵名 (Piṇḍola-dvaja)西譯は「埵」を「垂」と見誤り原語を理解するなく音寫したらしく思はる。
【三】臻集。いたり集ること。
【四】熬惱。うれひなやみ。

常に汝を殺すべし。道を得べきに垂むとして猶相ひ置さず」と。是の誓を作すと雖も猶故に之を殺せり」是の如く大王よ、爾の時の仙人の王を知らむと欲せば今の鴦仇摩羅是れなり。爾の時の臣民心を同じくし王を殺す者とは今此の諸人の鴦仇摩羅に殺さるゝ者是れなり、彼より已來常に爲めに殺され、乃至、今日猶此等を害す」と。

時に王、長跪して復、佛に白して言さく「指鬘比丘、此の多人を殺し今已に道を得たり。當に報を受くべきや不や」と。佛、大王に告げ給ふやう「行には必ず報有り、今、此の比丘房中に在り、地獄の火毛孔より出づ。極めて患ひ苦痛なり、酸切言ひ叵し」と。時に如來、衆會をして悪行を作さば必ず罪報有るを知らしめむと欲し一比丘に勅し給ふ「汝、戸排[二九]を持ち指鬘の房に往き戸の孔中に刺せ」と。比丘、即ち往き敎を奉じて之を爲し、排きて戸の内に入る。尋いで時に融消す。比丘、驚愕し還び來り佛に白す。佛、比丘に告ぐらく「行の報是の如し」と。王、及び衆會信解せざるは莫し。爾の時、阿難、長跪して佛に白さく「鴦仇摩羅、宿に何の慶有り身力雄壯、力士の力あり、健捷・輕疾走ること飛鳥に及び復、佛に値ふことを得て生死を越度したるか。唯、願くば哀を垂れ衆會の爲に說き給へ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「汝等、善く聽けよ、過去に迦葉佛の時一比丘有り、僧の爲に執事す。僧、人畜を將ゐ載せて穀米を致せり。道中雨に逢ふ。隱避する處無し。穀米、嚢物悉く澆浸[三〇]を被る。時に彼の比丘、疾り過ぎむと思欲するも力少く行くこと遲し。方に意に從ふこと無し。心悒遲を懷く。即ち、誓を立てゝ言く『願くば我れ後の生、力千人に敵し、身輕く行くこと疾く走ること飛鳥より疾からむ。將來、佛有り釋迦牟尼と云ふ、我をして見ゆることを得、永く生死を脫せしめよ」と』「是の如く阿難よ、爾の時の執事比丘とは今の鴦仇摩羅是れなり。彼の世の時出家・持戒し僧事を營むに因り願を立てしに出るが故是より已來世世端正にして猛力輕疾なり。悉く其の願の如

【二九】戸排。西語、(Lde-mig khyer te)(戸の鍵を持して)とあり。

【三〇】澆浸。水回り流るゝ貌。

人民、主無きを得ず。唯、願くば愍を垂れ、意を顧み臨覆せよ」と。是の如く誠を致し慇懃に求め請ふ。其の意忍びず、遂に與に國に還へる。仙人、少小にして欲事を習はず。既に來り國を治め漸く女色に近づき婬事已に深し、奔逸放蕩、晨夜耽荒自ら制すること能はず。遂に國中に勅し「一切の諸女出でゝ行かむと欲するの時要ず先に我に從へ」爾ば乃ち然る後往きて夫に從ふを聽さん」と、及び諸國中端正の婦女其の意に入る者皆悉く凌辱す。時に一女人道陌の多人衆の中に於て裸形にて立ちて溺す。人、悉く驚き笑ひ來りて共に之を呵す。「汝、何ぞ羞無く乃ち是の如きに至る」と。女、卽ち答へて言く「女、女の中に於て何の羞恥か有らむ。汝等立ちて溺するも既に亦羞ぢず。我と汝と異ならず、何の羞恥か有らむ」と。諸人、答へて言く「是の語何の謂ひぞや」と。女、復、言ひて曰く「唯、王一人男子耳、一國の婦女皆其の辱めを被る。汝等若し男ならば爾らしむべき耶」と。是に於て諸人更に相ひ慚愧し便ち共に談論す。此の女の言の如く實に是れ其の理なり。陰に女の言を持ち轉密に相ひ語り同心に謀を合し共に王を圖らむと欲す。城外の園の中に清涼池有り、王、恒に前後し池に至り洗浴す。諸の臣民の輩園中に安伏し、王の出でゝ洗ふに値ひ、伏兵悉く出で周匝圍遶し、逼り取へて殺さむと欲す。王、乃ち驚きて曰く「何等をか作さむと欲す」と。諸臣、白して言さく「王、政治を違へ婬荒過度なり。常俗を壞亂し諸家を汚辱す。臣等覩見し堪忍すること能はず。故に王を除き更に賢能を求めむと欲す」と。王、聞いて遂に驚き諸臣に語りて言く「我、實に是ならざりき。汝等を負累し請ふ自ら改厲せむ。更に敢て爾らず。願くば寛放せよ。民と與に更に始めむ」と。諸臣、復、語るらく「正に今日天をして黑雪を雨らし頂に毒蛇を生ぜしめむも終に相ひ放たず。奚ぞ多く云ふを須ひむ」と。王、是を聞き已り自ら必ず死するを知り瞋恚感憤し諸臣に語りて言く「我、本山に在りて世事を豫む無し。强いて來り逼り我を以て王と爲す。未だ大失有らず。心を同じくし我を圖る。我、今單弱にして自ら救ふ力無し。誓つて當來の世當に

【二七】臨覆。のぞみかへること。
【二八】少小。少若し。

「是の如く大王よ、爾の時の須陀素彌王を知らむと欲せば今の我が身是れなり。駁足王とは今の鴦仇摩羅是れなり。爾の時、諸人十二年中駁足王の爲めに食噉せらるゝ者とは今此の諸人の鴦仇摩羅の爲めに殺さるゝ者是なり。此の諸人等世世常に鴦仇摩羅の殺害する所と爲る。我、亦世世之を降すに善を以てす。我、過去を念ふに凡夫爲りし時化して殺さゞらしむ。況んや我れ今日、成じて如來と爲る。衆德普く備り諸惡永く息む。豈、復之を降化する能はざらむ耶」と。王、復、佛に白さく「今、此の諸人宿に何の緣有りて乃ち常に世世其の爲めに殺さるゝ」と。

佛、王に告げて曰く「善く諦かに之を聽けよ、乃往、過去〔二五〕久遠劫の中此の閻浮提に一大國有り波羅栋と名づく。時に國王を波羅摩達と名づく。王に二子有り、各雄才有り、端正殊妙なり。王、甚だ愛念す。時に小なる者心に自ら念言ふやう「設我が父崩ずるも兄當に繼治すべし。我、既に年小なり、國位に望みなし。一世に生れ已に王と作らず。世に處する何爲るものぞ。幽靜以て仙道を求むるに如かず」と。是の念を作し已り往きて父の王に白さく「深山を貪慕し仙道を求む。願くば聽し放てよ、所志を遂ぐるを得む」と。是の如く慇懃なり、志、奪ふ可からず。父、便ち之を聽す。卽ち、放に山に入る。去りて數年を經て父王崩亡す。其の兄位を繼ぎ人民を統領す。兄、治めて久しからずして疾に遇ふて命終す。未だ子嗣有らず。更に繼紹無し。諸臣、集り議し歸する所を知る靡し。一臣、有りて言く「王に小子有り、前みて大王に啓し山に入り仙を學べり。當に還び往迎し以て王位を續ぐべし」と。諸臣、喜びて曰く「定むで此の事有り、卽ち相ひ率ゐ合して山に入り請喚す。到りて情狀を以て具に其の意を白す。「唯、願くば憐みを垂れ我が國を〔二六〕撫接せよ」と。仙人、答へて言く「此の事畏る可し、我、此の靜樂は永く憂患無し。世人、兇惡にして好みて相ひ斬戮す。若し我れ王と爲らば儵圖り害せられむ、今、甚だ此を樂しむ。爲すこと能はざるなり」と。諸臣、重ねて白さく「王、崩じ嗣絕つ。更に紹繼無し。唯、大仙有り、是れ王の種なり、國土・

【二五】久遠。大正本「久遊」は誤植。

【二六】撫接。いつくしみ抑れ近づくこと。

無明[三三]實に養ひ、以て樂事と爲す、形に常主無く、神に常家無し、形神倚離る。

豈、國有らむ耶。

時に、須陀素彌、此の偈を說くを聞き義理を思惟し歡喜量り無し。即ち、太子を立て自の代りに王と爲し諸臣と與に別る。「當に還び信に赴くべし」と。諸臣、聲を同じくして王に白して言さく「願くば王よ、但、住し駁足を憂ふること勿れ、臣等思ひ計り備を設け防ぎ慮り鐵を鍛へ舍を爲らむ。王、且く中に在れ、駁足猛しと雖も何ぞ能ふ所ぞ耶」と。王、諸臣及び諸の人民に告ぐるやう「夫、人の世に生る誠信を本と爲す。虛妄、苟くも存せば情未だ許さゞる所なり。寧ろ信に就きて死し妄語を生ぜざらん」と。復、爲めに種々誠信の利を說き、廣く爲めに虛妄の罪を分別す、諸臣、悲咽し一も更に言無し。王、起ちて城を出て一切皆送る。道次に號慕し斷絕し復蘇へる。王、曉喩し訖る。道を渉りて去る。時に駁足王、自ら思惟して言く「須陀素彌、今日應に來るべし。山頂に坐し遙に之を[二四]候望ふ。其の道徑に順うて來り越すを見、已既に到り之を見る。顏色怡悅し歡喜解釋すること舊に踰え過ぎたり。羅刹王、問ふやう「快きかな能く來り到れり。人、世に生れて壽を惜まざる靡し。汝、今死すべくして、歡喜常に倍す。本國に還り到り何の善利を獲たるか」と。須陀素彌、答へて言く「大王、恩に寬にして我に七日を假す。布施して誠言を遂ぐるを得たり。又妙法を聞き心用つて聞き解せり。當に今日の如く志願畢り足る。死に就くべしと雖も情の欣び猶生けるがごとし」と。駁足王、言く「汝、何の法を聞くか、試みに吾が爲めに說け」と。須陀素彌、爲めに本偈を說く。復、更に方便して廣く爲めに法を說く。殺す罪と及び其の惡報を分別し、復、慈心不殺の福を說く。駁足、歡喜、敬戴し禮を爲し其の教を承用し復害心無し。即ち、諸王を放ち各本國に還らしむ。須陀素彌、即ち兵衆を收め還び駁足を將ゐ本國に安置す。前の仙人の誓十二年滿てり。是より已後更に人を噉はず、遂に覇王に還る。民を治むること舊の如し、と。

【三三】實。大正本、寳に作るは誤植。

【二四】候望。うかがひのぞむこと。

純ら諸王を取りて凡細を用ひず、須陀素彌、甚だ高德有り、若し能く得て來らば王の會乃ち好らむ」と。羅刹王、言く「何の高德有りや」と、即時飛騰し往きて之を取らむと欲す。須陀素彌、諸の婇女を將ゐ晨に城を出で園に至り洗浴せむと欲す。道に婆羅門の其れ從り乞匃するを見る。王、婆羅門に語るやう「我、(園にて)洗ひ還るを待て、當に相ひ布施すべし」と。王、既に園に到り池中に入りて洗へり。時に羅刹王、空より飛び來り取り擔ひて山中に到る。須陀素彌、愁憂ひて悲泣く。時に駮足王、之に問ふて曰く「汝、名德殊勝第一と聞く。大丈夫の志當に窮達に任ずべし、云何が特に愁ひ啼くこと小兒の如きや」と。須陀素彌、羅刹王に白さく「我、身を愛せず壽命を貪惜せず。但、生來未だ曾つて妄語せざるを念ず。朝に宮を出でて行くに一道士の車駕の前に當り我に從つて乞匃するを見、我、洗ひ還り當に相ひ施與すべきを許せり。出でて大王我を擔ひ此に至るに値ふ。今、妄語し誠信を違失するを念ひ、是を以ての故に愁ふるにて身を惜むに非ざるなり。願くば哀愍せよ、我に七日假せ彼の道士に施し當に歸りて死に就くべし」と。駮足、是を聞きて之に語りて言く「汝、今、去ることを得ば寧ぞ當に自ら歸り來りて死に就くべきや」と。即ち復言ひて曰く「正に還らざれば我自ら能く得む」と。尋いで放ち去らしむ。王、還び國に到る。道士猶在り、歡喜供養し婆羅門に施せり。時に婆羅門、王の久しからずして還び死に就くを欲し其を懼れ國を戀ふて愁憂有るを見、即ち、其の王の爲めに偈を說きて言く、

劫數の終極、[一七]乾坤・[一八]洞然、須彌と巨海、都て[一九]灰煬爲り。天・龍・人・鬼、中に[二〇]彫喪す、[二一]二儀尙殞つ、國に何の常か有らむ。生・老・病・死、輪轉際無く、事願と違ふ、憂悲害を爲す。欲深く禍重く、[二二]瘡疣外に無し、三界都て苦、國に何の賴か有らむ。有は本は自無、因緣諸のもの成る、盛者は必ず衰、實者必ず虛し。衆生・蠢蠢、都て幻居の如く、三果皆空く、國土も亦如なり。識神形無く、假に四蛇に乘る。

[一七] 乾坤。天と地。
[一八] 洞然。むなしき貌。
[一九] 灰煬。やけて灰となること。
[二〇] 彫喪。おとろへほろぶること。
[二一] 二儀。天と地。
[二二] 瘡疣。きずといぼ。

き、王の出でて洗浴し已り池中に到るとき、伏兵、一時に周匝し四合し、卽ち其の王を圍む。當に之を取り殺すべし、と。王、兵集を見て驚怖して問ふて言く「汝等、何故に而も圍み我に逼るや」と。諸臣、答へて言く「夫、王たる者は民を養ふを事と爲す。方に厨子に臨み人を殺して食と爲す。衆民呼嗟す。情を告ぐるの處無し、苦酷に任ず。故に王を殺さむと欲す」と。王、諸臣に語るやう「我、實に無狀なりき。今より已後更に復爲さず、唯、恕し放てよ。當に自ら[一五]改厲すべし」と。諸臣、語りて曰く「終に相ひ放たず。正に今日天黑雪を雨らしめ汝の頭上に黑き毒蛇を生ぜしめむも、猶、相ひ聽さず、多く云ふを須ひず」と。時に王駮足、臣の語るを聞き已り自ら必ず死し脱るゝを得るに路無きを知り、卽ち、諸臣に語るやう「我を殺すべしと雖も小しく緩めて須臾我を聽し小く住せよ」と。諸臣、緩め置く。王、卽ち、自ら誓ふやう「我身由來、修むる所の善行に依り王と爲り正しく治む。仙人を供養し衆德を合集す。迴して今日我をして變じて飛行の羅刹と成ることを得せしめよ」と。其の語已に訖り語に尋いで成り、卽ち虛空に飛ぶ。諸臣に告げて曰く「汝等力を合せ我を殺さむと欲す。我の大幸に賴り復能く自ら拔く。今より已後汝等の好み忍び愛する所の妻兒を我次いで食すべし」と。語り訖りて飛び去り、山林の間に止り飛行し人を持ち、擔うて以て食と爲す。人民の類恐怖し藏避す。是の如きの後多人を殺し噉ふ。諸の羅刹の輩附して翼從と爲る。徒衆漸く多く害する所轉廣し。後、諸の羅刹、駮足王に白さく「我等奉事し王の翼從と爲る。願くば我曹の爲めに一宴會を作せ」と。時に駮足王、卽ち之を許して言く「當に諸王を取り一千を滿しむべし。汝の曹輩と與に以て宴會を爲さむ」と。之を許し已訖り、一一往きて取り深山に閉著す。已に九百九十九王を得たり。殘り一人少くして其の數未だ足らず。諸王、念言ふやう「我曹窮ること急なり。當に何所に趣くべき。若し其れ[一六]須陀素彌を捕へ得なば、須陀素彌、大方便有りて能く我等を濟はむ」と。是の計を作し已り羅刹王に白さく「王よ、會を作さむと欲せば極めて異有らしめよ。

【一五】改厲。改め勵むこと。

【一六】須陀素彌。西名、(Sut-soma)と寫す。

一日是の間に來らず。誰か汝曹に語らん。但相ひ輕しく試むるが故に復爾る耳、王をして是の後十二年中恒に人肉を食せしめむ」と。是の語を作し竟り飛びて山中に還る。是の後、厨監忘れて肉を辦せず、時に臨みて計り無し。外に出でて肉を求む。死せる小兒の肥えて白く地に在るを見、念ふに且に急に稱ふと。卽ち、頭足を却け擔ひて厨の中に至る。諸の美藥を加へ食と作して王に與ふ。王、得て之を食し、美なること常に倍すと覺ゆ。卽ち、厨監に問ふやう「由來、肉を食するも、未だ斯の美有ちず。此は是何の肉ぞや」と。厨監、惶怖し腹を王前に拍つ。「若し王よ、罪を原さば乃ち敢て實を說かむ」と。王、之に答へて言く「但、實に之を說け、汝の罪を問はず」と。厨監、王に白さく「先日、緣有り肉を覓むるも及ばず。死せる小兒を得たり。以て時要に稱へり、意とせざれ、大王よ、乃ち當に之を覺るべし」と。王、言く「此の肉甚だ美なり、常と異る。今より已往是の如きを求索めよ」と。厨監、王に白さく「前には偶自ら死せる小兒に値へり。更に求むるも得ること叵し。其の食と作らば國法を畏懼る」と。王、又語りて言く、「汝、但密に取れ、設ひ覺る者有るも斷處我に出る」と。厨監、敎を受け密に捕へて之を得たり。日日王に供す。時に城中人民の類各各行きて哭きて云く「小兒を亡ふ」と。展轉相ひ問ふ、「何に出り乃ち爾る」と。諸臣、聚り議るやう「當に試みて微に伺ふべし」と。卽ち街里に於て處處に人を安き。王の厨監の他の小兒を扯ふを見、伺ひ捕へ之を得て縛し將ゐて王に詣り、具に前後亡ふ所の事を以て白す。王、是の語を聞き默然として答へず。三たび重ねて王に白さく「今、賊を捕へ得たり。罪釁彰に露る。事、當に決斷すべし、云何が默然たるや」と。王乃ち答へて言く「是、我が敎ふる所なり」と。諸臣、恨を懷き各自罷み去る。外に於て共に議するやう「王は便ち是れ賊なり。我等の子を食ふ。人を噉ふの王、云何が共に治めむ。當に共に之を除き此の禍害を去るべし」と。一切心を同じくし咸共に謀を齊ふ。城外の園の中に好き池水有り。其の王、日日彼に至り洗浴す。諸臣、兵を儲へ園中に安伏

種なり。時に駁足王、一日城を出で園觀に遊び、二夫人に勅するやう「我が後に隨つて往き、誰か先に到る者と與に一日極めて相ひ娛樂すべし。其後に墮つる者とは吾之に見えず」と。王、去るの後其の二夫人極めて自ら莊飾し車乘に嚴駕し、一時に倶に往く、道中に到りて天祠を見、梵志種なる者車を下り禮を作し禮し已りて、急に進むも獨り墮ちて後に到る。王、本の言に從うて之を前にせず。是に於て夫人瞋恚煩憤し天神を怨み責む。「我、汝を禮するに由り王をして薄んぜしむ。若し天の力有らば何ぞ我を護らずるや」と。恚恨憤惱し密に自ら計を懷く。王、後に宮に還る。意を加へて奉事し、復、還び待遇す。王に從つて求願すらく「我に、國中に於て一日自在なるを聽せ」と。王の偏心に値ひ卽ち聽し之を可とす。外に出て人をして天祠を打ち壞さしめ平かにし、地の如くならしめ、乃ち宮中に還る。天祠を守る神悲苦懊惱し、往きて宮中に至り傷害せむと欲思ふ。王宮の天神、遮りて入るを聽さず。一仙人有り、仙山の中に住す。時に駁足王、恒に常に供養し、日日食時に飛び來りて宮に入る。餚饍を食はず、粗き麁供を食す。偶一日仙人の來らざるに値ふ。天神、之を知り化して其の形と作り來りて宮に入らむと欲す。宮神、猶識り前み入るを聽さず。遙に門外に在り王に白して通ることを求む。王、仙人外に在り現るゝを索むるを聞き其の所以を怪しみ、急に勅して入るを聽す。是の時、宮神、王の敎有るを聞き卽ち休り遮らず。徑前み入るを得たり。仙人の常に坐る處に坐す。常の如く食を辦じ、以用つて供養す。時に化仙人、肯て食に就かず。卽ち王に語りて言く「此の食、麁惡なり。又肉魚無し。云何が噉ふ可けむ」と。王、卽ち白して言さく「大仙、自ら來り恒に食淸素なり、故に肉魚の餚饍を辦ぜざらしむ」と。化仙、又、告ぐるやう「今、自り已後麁供を設くる莫く但肉食と爲せ」と。卽ち、語の如く辦ず。食し已に還り去れり。復、明日に到り舊仙飛び來る爲めに餚饍種々の諸肉を設く。仙人、瞋恚し王を怨み憤る。王、言く「大仙、昨日是の如く作せと勅せり」と。仙人、語りて言く「昨日は患有りて、斷食すること。

こと能はず。是の如く大王よ、爾の時の毒鳥とは今の指鬘是れなり。時の白象王とは今の王の身是れなり」と。

王、復、佛に白さく「鴦仇摩羅、暴害滋甚しく爾所の人を殺し、世尊に降化を賴り蒙り、善を修せり」と。

佛、王に告げて曰く「鴦仇摩羅、但、今日のみ此の多くの人を殺し我が降化を蒙りしにあらず。過去世の時も亦此等を殺し我亦降化せり。乃ち復善を思へり」と。王、重ねて佛に白して言さく「不審なり、此等、先世に害を被り世尊降化し給ふと其の事云何、願くば爲めに解說せよ」と。

佛、王に告げて曰く「善く聽き心を著けよ。過去久遠、阿僧祇劫に此の閻浮提に一つの大國有り、波羅㮈と名づく。時に國王を【二二】波羅摩達と名づく。爾の時國王、四種の兵を將ゐ山林の中に入り。遊行し獵戲す。王、澤の上に到り禽獸を馳逐す。單隻、一人にて乘りて獨り深林に到る。王、時に疲極まり。馬を下りて小く休む。爾の時、林中、䮃師子有り、欲心を懷くこと盛なり。行きて其の偶を求むるも、困みて値ふことを得る能はず。林間に於て王の獨り坐すを見て婬意轉隆なり。王に從はさむと思欲うて其の邊に近づき到る。尾を擧げて背にて住す。王、其の意を知りて自ら思惟ふやう「此は是れ猛獸なり、力能く我を殺す、若し意に從はざれば儻危害を見む」と。王、怖を以ての故に卽ち師子に從ひ、欲事を成じ已る。師子、還り去る。諸兵群從して已に復來り到る。王、人衆と與に卽ち宮城に還る。爾の時、師子、是より懷胎し、日月滿足して便ち一子を生む。形、盡く人に似たり。唯、その足【二三】斑駮なり。師子憶識し是れ王の有なるを知り便ち銜み擔ひて來り、王の前に著く。王亦思惟し自ら前事を憶ひ、是已の兒なるを知り卽ち收め取りて養ふ。足の斑駮を以て字して迦摩沙波陀と爲す。（晉に【二四】駁足と言ふ）之を養ふに漸く大なり。雄才にして志猛し。父の王、崩亡して、斑足、繼ぎ治む。時に駁足王、二夫人有り、一は王者の種にて、二には婆羅門

【二二】波羅摩達。西名、(Bala-ma-dar)と音寫す。

【二三】斑駮。ぶちなること。

【二四】駁足。(Skt. Karmāṣapada)。西名、(Kaṅgta)とす。但し此の西藏語は I. J. Schmidt 氏出版の原典には誤って脫落してゐるのでその翻譯文によりて此に出せり。その原典は此より少し前の文、「師子、還り去る」より以下「此閻浮提一大國有り波羅㮈と名づく、國に國王波羅摩達と名づく、王、二子有り」まで脫落す。

作人に勅し晝夜勤作し一時に都て訖る。塔、極めて高峻なり。衆寶晃昱し莊校【九】雕飾して極めて異觀有り、見已り歡喜し前の過を懺悔す。一つの金鈴を持つて塔の棖の頭に著け、卽ち、自ら願を求むるやう「我が生るゝ所音聲極めて好く一切の衆生樂しみ聞かざること莫らしめむ。將來、佛有り釋迦牟尼と號す。我をして見ゆることを得て生死を度脫せしめむ」と。是の如く大王よ、爾の時の一監、作すこと遲く塔の大を怨む者を知らむと欲せば此の比丘是れなり。彼の恨の言其の塔の大を嫌ふに緣り五百世中常に極めて矬陋なり。後歡喜し鈴を塔の頭に施し好聲を求索め及び我を見むことを願ふに由り五百世の中極めて好き音聲なり、今、復我に見え解脫を得ることを致せり」と。王、是を聞き已り便ち辭して退かむと欲す。佛、大王に問ふやう「何所に至らむと欲するや」と。王、佛に白して言さく「國に惡賊有り、鴦仇摩羅と云ひ、人民を傷殺し暴害を縱橫にす。今、衆を率ゐ往きて之を攻伐せむと欲す」と。佛、王に告げて曰く「鴦仇摩羅當に今の如くむば蟻をも殺すこと能はず。況んや復餘をや」と。王、心に念言ふやう「世尊、已に往き已に之を降伏せり」と。佛、王に告げて言く「指鬘、今、已に出家入道し阿羅漢を得たり。諸惡永く盡く。今、其の房に在り之を見むと欲するや不や」と。王、言く「見むと思ふ」と。卽ち起ち其の房外に到る。指鬘比丘の【一〇】謦欬の聲を聞き其の暴惡にして傷くる所彌廣きを憶ひ【一一】怖躃て斷絕すること良久しくして乃ち甦へり、還び佛の所に到り、事を以て佛に白す、佛、王に告げて言く「但、今日のみ彼の聲を聞き地に墮し斷絕せしにあらず。過去世の時も其の音聲を聞き亦爾く、斷絕せり。善く聽けよ、大王よ、過去、久遠に、此の閻浮提に一大國有り、波羅㮈と名づく。爾の時國中に一毒鳥有り、諸の毒蟲を捕へ恒に以て食と爲す。其の形極めて毒にして觸れ近づく可からず。下を經歷する所の衆生皆死し樹木悉く枯る。爾の時、此の鳥一つの林に過ぎ到り一つの樹の上に住せり。謦欬し鳴かむと欲す。時に彼の林の中に白象の王有り、傍の樹の下に在り毒鳥の聲を聞き地に躃れ斷絕し動搖する

【九】雕飾。ほりかざること。

【一〇】謦欬。せきばらひ、面會を得ること。

【一一】怖躃。おそれたふること。

ふて言く「向に唄音を聞く。清妙和暢なり、情豫み欽慕す。願くば見識ることを得て十萬錢を施さむ」と。佛、之に告げて曰く「先に其の錢を與へ然る後に見る可し。若し已に見れば更に一錢を與ふるを欲せざるの心とならむ」と。即ち將ゐて之を示す。其の形狀を見るに倍復矬陋、之を見るに忍びず。意、一錢を與ふるを欲するの想無し。王、座より起ち長跪して佛に白して言さく「今、此の比丘、形極めて短醜にして其の音深遠、聲徹すること乃ち爾り、宿に何の行を作り斯の報を得るを致すや」と。

佛、王に告げて曰く「善く聽き心を著けよ、過去に佛有り、名づけて迦葉と曰ふ。人を度し周く訖り、便ち、般涅槃し給ふ時に彼の國王を機里毘と名づく。舍利を收取め用つて塔を起さむと欲す。時に四龍王、化して人形と爲り來りて其の王に見え塔を起す事を問ふ「寶を以て作ると爲すや、土を用つて爲る耶」と。王、即ち答へて言く「塔をして大ならしめむと欲す。多寶の物無し。那、成ぜ使むを得む。今、土にて作り方五里、高さ二十五里ならしめ極めて高く顯はし觀る可からしめむと欲す」と。龍王、白して言さく「我は是れ人に非ず。皆是れ龍王なり。王、塔を作るを聞くが故に來り相ひ問ふ。苟も寶を用ひむと欲すれば當に相ひ佐助くべし」と。王、歡喜して言く「能し、爾れば快し」と。龍、復、語りて言く「四城の門外に四大泉有り、城東の泉水を取りて用つて墼を作り紺琉璃と成さむ。城南の泉水を取りて用つて墼を作り其の墼成じ已り皆黃金と成らむ。城西の泉水を取りて用つて墼を作り墼成就し已り變成して銀と爲らむ。城北の泉水を取りて用つて墼を作り其の墼成じ已り變じて白玉と爲らむ」と。王、是の語を聞き倍增踊躍し、即ち、四監を立つ。各一邊を曲る。其の三監作す所の工成ぜむとするに向ふ。一藍、慢怠なり、工獨り就かず。王、往きて看見、便ち理を以て責む。「卿、心を用ひず、當に罰謫を加ふべし」と。其の人、怨を懷き便ち王に白して言さく「此の塔、太大なり。當に何時か成ずべき」と。王、去るの後諸の

【八】 機里毘。(Kṛki, Kiki) 西名(Krikri-byi)と音寫す。

我住まらざる耶」と。佛、卽ち答へて言く「我れ諸根寂定にして自在を得たり、汝は惡師に從ひ邪倒を稟受け汝の心を變易せり。定住を得ず、晝夜殺害し無邊の罪を造る」と。指鬘、之を聞き意欻ち開悟しぬ。刀を投じ遠く棄てゝ遙に禮し自ら歸せり。時に如來、「爾、乃し之を待て」と。還び佛身を現じ給ふ。光明日よりも朗かにして、三十二相炳著し奇妙なり。指鬘、佛の光相の威儀を見て身を以て地に投じ、過を悔ひ自ら責む。佛、粗法を說き給ふに、法眼淨を得て心遂に純信なり。出家を求索む。佛、卽ち之を可とし給ふ。「善く來りぬ。比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法衣身に著きぬ。彼の應ずる所に隨つて重ねて爲めに法を說き給ひ、心垢都て盡し羅漢道を得たり。佛、卽ち、共を將ゐ祇陀林に還り給へり。

爾の時、國中の人民の類指鬘の聲を聞き皆各驚怖す。人畜の懷妊するもの怖れて生むこと能はず。時に一象有り、子を出すこと能はず。佛、指鬘に勅し給ふ「往きて誠を說きて言へ、我生れて已來一人をも殺さずと」と。指鬘、佛に白さく「我、由來殺すこと多し、云何が殺さずと云はんや」と。佛、之に告げて曰く「聖法の中に於て是れを始めて生ると爲す」と。爾の時、指鬘、便ち衣服を整へ教を奉じて往く。說くこと語の如し。尋いで生る。皆安穩を得たり。還び精舍に詣り、一房中に坐す。時に波斯匿王、大いに兵衆を合し躬ら往きて鴦仇摩羅を討たむと欲す。路、祇洹に由り當に往きて攻擊すべし。時に、祇洹の中に一比丘有り、形極めて矬陋、音聲異妙なり。聲を振はし高く唄ふ。音極めて和暢なり。軍衆耳を傾け、厭足有ること無し。象・馬耳を竪て住して肯て行かず。王、怪しみ顧みて御者に問ふや「何を以て乃ち爾るや」と。御者、答へて言く「唄聲を聞くに由る。是れ象と馬とをして足を停め立ちて聽かしむ」と。王、言く「畜生、尙、樂しみて法を聞く、我曹人類何ぞ往きて聽かざらんや」と。卽ち、群衆と與に暫く祇洹に還る。到りて象乘を下り劍を解き蓋を卻け、直に佛の所に進み敬禮問訊す。彼の唄ふ比丘の唄聲已に絕ゆ。王、先問

【七】矬陋。背低きこと。

じ相ひ酬ひむことを思欲す。一つの祕法有り、由來未だ說かず。若し能く成辦せば直に梵天に生れむ」と。無惱、長跪して是に問ふやう「何事ぞや」と。答へて言く「若し七日の中に千人の首を斬りて一指を取り凡そ千指を得て以て鬘の飾と爲して持てよ。爾の時、梵天、便ち自ら來下して命終の後定むで梵天に生れむ」と。無惱、此れを聞き情猶豫を懷く。復、師に白して言さく「此の事應ぜず、衆生を殺害し更に梵天に生ぜんとは」と。師、又告げて言く「汝は我が弟子なり、豈、我が至要の言を信ぜざらんや、若し汝信ぜざれば則ち義絕を爲す。爾の道に隨ひ徑いて復此に住すること莫れ」と。又、更に呪を作し、刀を竪てて地に在り。呪を說き已訖り、惡心轉生ず。師、其の意を知り卽ち刀を授與す。刀を受け外に走り、人を得て便ち殺し、指を取りて鬘と爲す。人、見て便ち[六]鴦仇魔羅と號す。（晋に指鬘と言ふ）。周く行きて斬害し七日の頭に到り、方に九百九十九指を得たり。唯、一指少し。殘り一人を殺さば指數便ち滿つ。人皆藏竄し敢て行く者無し。遍く行きて求め覓むるも、更に得る能はず。七日の中飮食を得ず。其の母憐愍し人を遣はし致さむと爲すも悉く各懼を懷き敢て往く者無し。其母食を持ち、躬自ら往くことを致す。兒、遙に母を見て走り趣いて殺さむと欲す。母、時に語りて言く「咄！不孝の物よ、云何が逆を懷き我を危害せむと欲するや」と。兒、便ち語りて言く「我れ師の敎を受く、七日の中千指を滿し得るを要す。便ち當に梵天に願生するを得べし、日數已に滿つ、更に得ること能はず。事、已むを獲ず。當に母を殺すべし」と。母、又語りて言く「事苟くも當に爾るべきなれば但、我が指を取れ、傷殺を見ること莫れ」と。時に世尊、具に遙に覩見して其の度す可きを知り化して比丘と作さむと彼の邊に行き給ふ。鴦仇摩羅、已に比丘を見母を捨てゝ騰躍し走り趣き殺さむと規る。佛、其の來るを見て徐行し捨てゝ去り給ふ。指鬘力を極めて走るも及ぶこと能はず。便ち遙に喚びて言く「比丘よ、小く住まれ」と。佛、遙に答へて言く「我、常に自ら住まれり、但、汝住まらず」と。指鬘、復、問ふやう「云何か汝住まり

【六】鴦仇魔羅。梵名、(Aṅguli-māla)。

婆羅門の師、内に婦と議るやう「我れ今、當に行きて請を受くること三月なるべし。當に一人を留め後を經紀すべし」と。時に婦、内に喜び密に自ら計を懷き、婆羅門に白さく「是の事應に爾るべし。後、家を理むること重し、宜しく才能を須ふべし、無惱を留め囑すに後事を以てすべし」と。時に婆羅門、卽ち無惱に勅するやう「我、今、彼の檀越の請に赴く。後事總て多し。人を須ひて料理すべし。卿、才能を著し吾が爲めに後を營めよ」と。無惱、敎を受け卽ち住して行かず。師及び徒衆引導して去る。其の婦、怡悅、欣喜量り無し。極めて自ら莊飾し多く姿に媚を作り與に共に談語す。其の意を撓し動かさんとす。無惱の志固く相ひ從ふの心無し。欲心轉盛にして、實意にて之に語るやう「我、相ひ欽愛す。由來素有り、但衆人を避けて懷くこと有るも未だ發せず。汝の師去るに臨み吾故に相ひ留む。今、既に獨りにして靜かなり、我意に從ふべし」と。無惱、謝して語りて曰く「我が梵志の法、師の婦と婬せざるなり、若し當に違犯せば婆羅門に非ず。寧交に死を取るも終に此を爲さず」と。時に師の婦、望重くして心に違え、慚愧・瞋憤して復密計を作る。師、至るに垂むとするの候衣の裳を挽き裂き其の面を攫裂き塵土を身に坌り、憔悴して地に臥し言語する所無し。時に婆羅門の師、徒と俱に到る。師、卽ち內に入り、婦の色狀を見て卽ち其の故を問ふ。「何に緣りて乃し爾る」と。婦、泣を垂れて言く「問ふに足らざるなり」と。時に婆羅門、重ねて更に之に問ふやう「汝、何事有りしや、當に相ひ告げ語るべし、云何が說かざるや」と。婦、啼きて言く「汝、欽美する所の阿覺賊奇、汝去りしより後常に侵凌を見る。我、適從はず、我の衣を挫裂し我身と首を壞る。汝、弟子を畜ふる云何が乃ち爾るや」と。婆羅門聞いて甚だ恚怨を懷き、其の婦に語りて言く「此の無惱は力千人に敵す。輔相の子にして種族强盛なり、之を治めむと欲すと雖も宜しく當に漸を以てすべし。是を談じて謀り已る。往きて無惱に見え宜に隨つて方便し慰諭して言く「我、去るの後苦しみて汝營勞せり。又、汝前後奉事して忠を盡せり。(我)常に汝の意に感

【五】經紀。よく生活を營むこと。

卷の第十一

五十二、無惱、指鬘の品　第四十五

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。

時に國王を波斯匿王と名づく。輔相有り聰明にして巨富なり。其の婦、懷妊し一人の男兒を生む。形貌端正・容體殊に絕る。時に輔相兒を見て歡喜し。即ち相師を召して之を占相せしむ。相師、看見て喜を懷きて言く「是の兒、福相なり、人中に挺特す。聰明智辯人に踰ゆるの德有り」と。父、聞きて遂に喜び勅して爲めに字を作る。相師、問ふて言く「兒、胎を受けて來何の異事有りや」と。輔相、答へて言く「其の母の素性良善なる能はず。懷妊已來倍更に常と異る。心性恭順にして、樂しく人の德を宣ぶ。苦厄を慈矜み過を說くを喜ばず」と。相師、言ひて曰く「此は是れ兒の志なり、當に爲めに字を立て阿毘賊奇と號すべし」と。（晉に無惱と言ふ。）兒、漸く長大して雄壯絕倫力士の力有り。一人千に敵す。騰らば飛鳥に接し走らば奔馬より疾し。其の父の輔相甚だ之を愛念す。是に於て國中に一人の婆羅門有り、聰明博達・多聞廣識なり、五百の弟子有り、追逐して學に隨ふ。

爾の時、輔相、即ち其の子を將ゐ往きて之に囑及して其をして學問せしむ。婆羅門之を可とす。受持し敎授す。阿毘賊奇、夙夜業を勤め一日諸受し餘の年を經しものに勝てり。學未だ久しく經ざるに普く悉く通達す。婆羅門の師、異常に待遇す。行來・進止每に是と俱なり。及び諸の同學意を傾けて瞻仰せり。爾の時、婆羅門の婦、其の端正、才姿挺貌して人表に過れ踰えたり。情色著を懷き愛意を去らず。然れども諸弟子、與に共に周迴して行止獨ならず、與に語るの緣無し。心の遂げざる有りて常に以て歎じ悒ふ。會檀越有り、來りて其の師及び諸の弟子を三月の間請ず。一時、

【一】無惱指鬘品。西本、No. 36.(Mi-gdun-ba sor-ḥphreṅ-can gyi leḥu)（無惱指鬘の品）。

【二】阿毘賊奇。(Ahiṃsaka) 西名、(Migdun-pa)（無惱）と意譯す。

【三】夙夜。朝早くより夜遲くまで。

【四】挺貌。ぬきんでしかたち。

の賢劫中千佛過ぎ去るも猶故に脱せず」と。爾の時、阿難及び衆人佛の説き給ふ所を聞き悵然として樂しまず。悲傷交懐く。咸共に聲を同じくして是の言を作すやう「身・口・意の行愼まざる可からず」と。

時に捕魚人及び牧牛人一時に倶に共に合掌し佛に向ひ出家して梵行を淨修せむことを求索む。佛、即ち言く「可し、善く來れり、比丘よ」と。鬚髪自ら落ち法衣體に在り、便ち沙門と成る。是の時、世尊、爲に妙法を説き給ふ。種々苦切して、漏盡き結解け阿羅漢を成ぜり。復、衆會の爲めに廣く諸法を説き、四諦の苦・集・滅・道を分別し給へり、初果乃至第四果を得る有り。大道意を發す者有り、其の數甚だ多し。

爾の時、四衆、佛の説き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

佛、阿難に告げ給ふやう『諦に聽け諦に聽け、當に汝の爲めに說くべし。昔、迦葉佛の時婆羅門有り、一人の男兒を生む。迦毘梨と字す。(晋に黃頭と言ふ)。聰明博達にして、種類の中に於て多聞第一なり。唯、復、諸の沙門の輩に如かず。其の父終りに臨み慇懃に約して勅するやう「汝、當に愼みて迦葉沙門と道理を議論すること莫れ。所以は何ぞ沙門の智深し、汝必ず如かず」と。父沒するの後其の母問ふて曰く「汝、本より高明なり今、更に汝に勝る者有りや不や」と。答へて言く「沙門、我より殊勝なり」と。母、復問ふて言く「云何が勝ると爲すか」と。答へて言く「我、疑ふ所有り、往きて沙門に問ふに、其の演說する所人をして開解せしむ。彼、若し我に問ふも我答ふること能はず。是を以ての故に自ら如かざるを知る」と。母、復、告げて言く「汝、何を以て往きて其の法を學習せざるや」と。答へて言く「其法を學ばむと欲せば當に沙門と作るべし、我は是れ白衣[二]なり、何に緣りて學ぶを得む」と。母、復、告げて曰く「僞りて沙門と作り學習して已に達せば在家に還り來れよ」と。其の母の教を奉じて沙門と作る。少くの時間を經て三藏を讀誦し義理を綜練す。母、之に問ふて曰く「今、勝つことを得るや未や」と。答へて言く「學問の中勝つも坐禪に如かず。何を以て之を知る、我、彼の人に問ふに悉く能く分別す。彼の人我に問ふも、我、知ること能はず。是の事に因つての故に未だ他(彼)と等しからず」と。母、復、告げて曰く「今、自り已往若し共に談論し儻如ざる時は便ち罵辱す可し」と。迦毘梨、言く「出家、沙門復過罪無し。云何が之を罵らむ」と。答へて言く「但、罵れ、卿當に勝を得べし」と。時に迦毘梨、母に違ふに忍びず。後日、更に論ず、理若し短にして屈す。即便ち罵り言はく「汝等、愚騃にして識別する所無し。畜生より劇し。何法を知曉せんや」と。諸の百獸の頭を皆用つて之に比ぶ。是の如く數數一に非ず二に非ず。是の果報に緣り今、魚身を受けて百頭あり』と。

阿難、佛に問ふやう「何時か此の魚身を脫することを得べしや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「此

【二】白衣。俗人の別稱なり。天竺の婆羅門及び俗人は多く鮮白の衣を服す故なり。

得、長流の結使の大海を遠離せしめたり」と。
爾の時、諸の比丘、皆共に讃嘆す。如來の大悲深妙にして量り無し。咸、勤めて剋勵し佛の說き給ふ所を聞き歡喜奉行せり。

五十一、[一]迦毘梨、百頭の品　第四十四

是の如く我聞きぬ。一時、佛、摩竭國竹園の中に在しき。
爾の時、世尊、諸の比丘と與に毘舍離に向ひ給ふ。梨越河の所に到る。是の時河邊に五百の牧牛人、五百の捕魚人有り。其の捕魚者三種の網を作る。大小同じからず。小なる者は二百人挽き中なる者は三百人挽き、大なる者は五百人挽なり。時に如來河を去ること遠からずして坐し止息し給ひ、及び諸比丘と亦皆共に坐す。時に捕魚の人網に一つの大魚を得たり。五百人にて挽くも、出さしむること能はず。復、牧牛の衆を喚び、合して千人有り、力を幷せ挽き出す。一大魚を得たり。身に百頭有り。若干の種類驢馬・駱駝・虎・狼・猪・狗・猨猴・狐・狸、斯の如くの屬なり。衆人甚だ怪しみ競ひ集り之を看る。是の時、世尊、阿難に告げて曰く「彼こに何事か有りて大衆皆集るや。汝往きて試み看よ」と。阿難、敎を受け卽ち往きて看視、一大魚の身に百頭有るを見、還りて世尊に見る所の事の如く白す。世尊、尋いで時諸の比丘と共に魚の所に往至り、魚に問ふて言く「汝は是れ迦毘梨なるか不や」と。答へて「實に是れなり」と。鄭重に三たび問ひ給ふ「汝は是れ迦毘梨なるや不や」と。答へて言く「實に是れなり」と。復、問ひ給ふやう「敎匠よ、汝は今、何處に在りや」と。答へて言く「阿鼻地獄の中に墮つ」と。爾の時、阿難及び大衆其の緣を知らず。世尊に白して曰く「今は何故に百頭の魚を喚ぶに迦毘梨と爲し給ふか。唯、願くば愍を垂れて告げ示し給へ」と。

【一】迦毘梨百頭品。西本、缺。

して自ら家業を破る」と。是の時に當り、衆くの賈客有り薩薄に勸進すらく「共に海に入らむと欲す」と。卽ち、之に答へて曰く「薩薄の法爲るや當に船具を辦ずべし、我、今窮困し復有る所無し、何に緣りて從ふることを得む」と。衆人、報じて言く「我等衆人凡そ五百有り、意を開き錢を出し用つて船具を辦ぜむ」と。是の語を聞き已り卽便ち許可す。衆人、投合して大いに金寶を獲たり。爾の時、薩薄、三千兩金を以て、千兩船を辦じ千兩、粮を辦じ千兩を用つて船上須ゆる所に俟つ。その餘り故に大なる有り、妻子を給活す。便ち海邊に於て大船を施作す。船に七重有り嚴辦し已訖り、水中に推著け七つの大索を以て岸邊に繫著し、大金鈴を繫け一切に宣令するやう「誰か海に入り大妙寶を得むと欲するや。奇珍の異物用つて盡くる者無し。今、雲集し共に寶所に詣る可し」と。復、之に告げて曰く「其れ誰か父母・妻子・閻浮提の樂、及び身命を愛せざる者は乃ち往く可きのみ。然る所以は大海の中難險衆多なり。迴波・暴風・大魚・惡鬼、是の如く種々具に陳ぶべからず」と。是の語を作し已り卽ち一つの索を斷ず。日日是の如く第七日に至る。索を斷ち都て盡く。船、卽ち馳せ去る。便ち道中に於て卒に暴風に遇ひ其の船を破碎す。衆人救ひを喚ぶ。歸依する所無し。或は能く板、檣、浮囊を得て以て自ら度る者有り、或は水に墮ち溺死する者有り、中に五人有りて共に薩薄に白さく「汝に依りて此に來る。今、當に沒し死すべし。危險至るに垂むとす。願くば救度せられよ」と。薩薄、答へて曰く「吾、聞く大海は死屍を宿さずと。汝等、今、悉く各我を捉へよ、我、汝の爲めの故に當に自ら身を殺し以て爾の厄を濟ひ誓つて作佛を求むべし。後、佛と成るの時當に無上正法の船を以て汝の生死大海の苦を度すべし」と。是の語を作し已り刀を以て自ら刎ぬ。命、斷ずるの後海神風を起し吹きて彼岸に至り大海を度るを得皆安穩を獲たり』と。佛、比丘に告げ給ふやう「爾の時の勸那闍耶を知らむと欲せば今の我が身是れなり。時の五人とは拘隣等是れなり。我、先の世に於て彼の人等の生死の命を濟ひ今は成佛を得て其の五人をして皆最初無漏の正法を

し、城營・村邑の群黨相ひ隨ひ異口同音に稱讃すること量り無きや」と。時に諸の比丘、是の語を聞き已り佛の所に往至り、頭面に足を禮し、前みて佛に白して言さく「今、此の國界の人民の類咸共に集聚り異口同音に世尊の若干の德行と讃詠し及び五人が與に宿に何の慶有りて獨り先に度を蒙るかを讃詠す」と。佛、比丘に告げ給ふやう「獨、今日先に五人を度するに非ず。我、久遠に於ても亦此等を濟へり、身を以て船と爲し彼の沒溺を救ひ其の生命を全くして各安穩を得、彼岸に至るを得せしめぬ。吾れ、今成佛し先に之を拔濟せり」と。時に諸の比丘、即ち佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、先昔の時云何が拔濟し各安穩ならしめ給へしや。唯、願くば世尊よ、當に爲めに之を說くべし」と。

佛、比丘に告げ給ふやう、過去久遠に此の閻浮提に波羅㮈國あり、時に彼の國王を梵摩達と名づく。爾の時、國中に大薩薄有り、勒那闍耶と名づく。外に遊び出でて林樹の間に到る。見るに一人有りて涕泣悲切す。索を以て樹に繫け頭を入れて中に在り、自ら絞死せむと欲す。便ち前みて之に問ふやう「汝、何を以て爾るや、人身は得ること難し。命、復、危脆なり、衰變は無數なり。恒に自ら至ることを恐る」と。種々に曉喩して敎へて索を捨てしむ、人、之に報いて曰く「我は之れ薄福にして貧窮理極り債負盈ち集り甚だ多く計り難し、諸の債主の輩競ひて剝脫す、日夜催切し憂心釋かず。天地寬しと雖も身を容るゝ處無し。今、自ら沒して此の苦を避離れむと欲す。仁、諫及むと雖も存するよりは死するに如かず」と。爾の時、薩薄、即ち之に許して曰く「卿、但、索を釋け、負ふ所の多少悉く汝に代つて償はむ」と。是の語を作し已り彼の人便ち休る。歡喜踊躍し感戴量り無し。薩薄に隨從し倶に市中に至る。一切に宣令して云く「債を償はむと欲す」と。時に諸の債主競ひて共に雲集す。迎へて負ふ所を取らしむ。來る者限り無し。空しく其の財を竭し財貨已に盡く。猶、債を畢らざるに妻子窮凍し乞匃して自活す。宗親、國邑悉く共に呵嫌すらく「此は是れ狂夫に

【三】城營。しろのこと、市といふに同じ。

用ひ俱に共に樹を持つ。象去るの後王の心大いに怒り、象師を苦責めて卽ち之を殺さむと欲す。「卿、象を調へ制度に合はず、今は僅に吾が身を危くせしむるを致せり」と。象師、王に白さく「之を調へしは法の如し。但、今、此の象欲の爲めに惑はされ、欲心調へ難し、臣の咎に非ざるなり、願くば寬恕せられよ、却後三日象必ず自ら還らむ。臣の之を試むることを觀よ、萬死も恨みず」と。卽便ち停め置く。期せしが如く三日にして象還び宮に詣る。爾の時、象師、七つの鐵丸を燒き色をして正に赤かくし象に逼り之を呑ましむ。象敢へて違はず、呑み盡し卽ち死す。王の意開解け、及び諸の群臣未曾有と歎じ、復、之に問ふて曰く「此の如き欲心は誰か能く調ふる者ぞ」と。時に天神有り、象師に感悟し王に答へしめて曰く「佛のみ能く之を調ふ」と。王、是の語を聞き便ち發心して言く「此の如きは〔三〕膠固にして調伏し難き法なり。唯、佛のみ、能く除く」と。卽ち自ら誓願するやう「願くば作佛を求めむ」と、精勤し劫を歷て未だ曾つて休替せず今日に至り果して其の報を獲たりと。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の大國王を知らむと欲せば今の我が身是れなり」と。

爾の時、衆會佛の說き給ふ所を聞き咸無上正眞道意を發し歡喜踊躍し、自ら勝ふること能はず頂受奉行せり。

五十、〔一〕勒那闍耶の品　第四十三

是の如く我聞きぬ。一時、佛、迦毘維衞國の尼拘盧陀僧伽藍に在しき。

爾の時、諸釋、世尊を覲見するに光明神變妙化　闡揚し甚だ奇にして、甚だ特なり。巍巍堂堂能く及ぶ者無し。又、復、憍陳如等を嘆美するやう「宿に何の慶有り、如來世に出で給ひ法鼓初めて震ひて最も先に聞くことを得たる。甘露始めて降りて便ち澤を蒙むり、永く垢穢を離れ心玄要を體

【三】膠固。にかは附の如くかたきこと。

【一】勒那闍耶品。西本、缺。

爾の時、世尊、病に隨つて藥を投じ爲めに妙法を說き給ひ、宿緣の應ずる所、各道跡を得、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り、辟支佛の因緣を種うる者有り、無上正眞道意を發す者有り、各各歡喜し佛の語を奉行せり。佛、阿難に告げ給ふやう「今、此の園地は須達の買ふ所にして林樹・華菓は祇陀の所有なり、二人心を同じくして共に精舍を立つ。應に當に與に太子祇樹給孤獨園と號すべし。名字流布し後世に傳示せん。

爾の時、阿難、及び四部衆、佛の說き給ふ所を聞き頂戴奉行せり。

四十九、[一]大光明、始めて無上心を發すの品　第四十二

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閱祇迦蘭陀竹園に在しき。

爾の時、阿難、林樹の間に在り靜坐思惟し欻ち此の念を生ず。「如來正覺し給ひ諸根具足して功德・慧明・殊妙にして量り無し。世尊、先昔本何の因緣にて此の大乘無上の心を發し何事を修習して是の如き勝妙の利を得給へるか」と。是念を作し已り卽ち禪より起ちて佛の所に往詣り、頭面に禮を作し、前みて佛に白して言さく「諸の世尊の如きは諸の世間人天の中に於て最尊・最妙なり。功德・慧明・巍巍として量り無し。不審なり、世尊よ、先昔、何の因緣を以て此の大乘無上の心を發し給へるか」と。佛、阿難に告げ給ふやう「汝、知らむと欲せば善く之を思念せよ、吾、當に汝の爲めに具に分別し說くべし」と。阿難、佛に白さく「諾し、當に善く聽くべし」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「過去久遠、無量無邊不可思議阿僧祇劫に此の閻浮提に大國王有り、[二]摩訶波羅婆修と名づく。(晋に大光明と言ふ)。五百の小國に主たり。爾の時、大王、諸の群臣と與俱に遊獵に出づ。王、乘る所の象欲心熾盛なり、王を擔ひて馳走し牸象に奔逐し漸く大林に逼り、樹の間に突き入る。象師王に白さく「樹を捉り、自ら立たば全濟を得るに足らむ」と。王、其の言を

【一】大光明始發無上心品。西本、缺、賢愚經、No. 21. 大光明王、始發道心緣品第十六。

【二】摩訶波羅婆修(Mahāprabhāsa)。

對へて曰く「已に見る」と。時に舍利弗、須達に語りて言く「汝、過去毘婆尸佛の時に於ても亦此の地に於て彼の世尊の爲めに精舍を起立せり。而して此の蟻子此の中に在りて生ぜり。尸棄佛の時も、汝彼の佛の爲に亦是の中に於て精舍を造立して此の蟻子亦中に在りて生ぜり。毘舍浮佛の時も汝世尊の爲めに此の地中に於て精舍を起立して此の蟻子亦中に在りて生ぜり。拘留秦佛の時も亦世尊の爲めに此の地中に在りて精舍を起立して是の蟻子も亦此の中に在りて生ぜり。拘那含牟尼佛の時も汝世尊の爲めに此の地中に於て精舍を起立せり。而して此の蟻子亦中に在りて生ぜり。迦葉佛の時も汝亦佛の爲めに此の地中に於て精舍を起立して此の蟻子亦中に在りて生ぜり。乃至今日九十一劫一種の身を受け解脱を得ず。生死長遠なり。唯、福を要と爲す、種えざる可からず」と。是の時、須達、悲怜・愍傷す。地を經ること已竟り、精舍を起立す。佛の爲めに窟を作り妙栴檀を以用つて香泥と爲す。別房千二百人を住止す。凡そ百二十處なり。別に〔二二〕揵椎を打つを施設し已に竟る。往きて佛を請ぜむと欲す、復、自ら思惟ふやう「上に國王有り、應に當に知らしむべし。若し啓白せざれば儻嗔恨有らむ」と。卽ち往きて王に白さく「我、世尊の爲めに已に精舍を起せり、唯、願くば大王よ、使を遣はし佛を請ぜよ」と。時に王聞き已り卽ち使者を遣はし。王舍城に詣り佛及び僧を請ず。「唯、願くば世尊よ、舍衞に〔二三〕臨覆せよ」と。爾の時、世尊、諸の四衆と與に前後圍遶せられ大光明を放ち天地を震動して舍衞國に至る。經る所の客舍悉く中に於て止り、道次人を度すこと限量有ること無し。漸漸舍衞城の邊に來り近づき給ふ。一切の大衆諸の供具を持ち、世尊を迎待す。世尊、國に到り廣博の處に至り。大光明を放ち遍く三千大千世界を照し給ふに、足の指地を按ふれば地皆震動す。城中の伎樂鼓たざるに自ら鳴り、盲は視、聾は聽き、瘂は語り、僂は伸び、〔二四〕癃殘、拘癖皆具足を得たり一切の人民、男女大小斯の瑞應を覩て歡喜踊躍し佛の所に來詣す。十八億の人都て悉く集り聚まる。

【二二】揵椎。梵語、(Ghaṇṭā)、譯、鐘・磬・打木・聲鳴など、打て聲を作すべき物の通稱。

【二三】臨覆。のぞみいたること。

【二四】癃殘。腰曲りせむしの如き病。拘癖、身曲れること。

身を變じて夜叉鬼と作る。形體長大、頭上に火燃え、目赤く血の如く四牙長く利し。口より火を出し騰躍し奔り赴く。時に舍利弗、自ら其の身を化して毘沙門王と作る。夜叉恐怖し卽ち退き走らむと欲す。四面に火起る。去る處有る無し。唯、舍利弗の邊涼冷にして火無し。卽時、屈伏し、五體を地に投じ哀を求め命を脫す。辱心已に生じ火卽ち還滅す。衆、咸唱へて言く「舍利弗、勝てり、勞度差如かず」と、時に舍利弗、身虛空に昇り四威儀を現ず。行・住・坐・臥、身の上より水を出し身の下より火を出す。東に沒し西に踊り、西に沒し東に踊り、北に沒し南に踊り、南に沒し北に踊る。或は大身を現じて虛空の中に滿たし而して復小を現ず。或は一身を分ち百千萬億身と作り還び合して一身と爲る。虛空の中に於て忽然として地に在り地を履むこと水の如く水を履むこと地の如し。是の變を作し已り還び神足を攝め其の本座に坐す。時に會の大衆其の神力を見て咸歡喜を懷く。時に舍利弗、卽ち爲に說法す。其本行の宿福の因緣に隨つて各道迹を得たり。或は須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者あり。六師の徒衆三億の徒衆舍利弗の所に於て出家學道せり。技を校べ訖已り、四衆便ち罷めて各所止に還る。長者須達舍利弗と共に往きて精舍を圖る。須達、手自ら繩の一つの頭を捉り、時に舍利弗、自ら一つの頭を捉りて共に精舍を經る。時に舍利弗、欣然として笑を含む。須達、問ふて言く「尊人、何をか笑ふ」と。答へて言く「汝、始めて此に於て地を經る。六欲天中宮殿已に成ぜり」と。卽ち道眼を借り須達悉く六欲天中の嚴淨の宮殿を見る。舍利弗に問ふやう「是の六欲天は何處か最も樂しきや」と。舍利弗、言く「下の三天の中は色欲深厚なり、上二天中憍逸自恣す。第四天中少欲知足なり、恒に一生補處の菩薩有り其の中に來生し法訓絕えず」と。須達、言ひて曰く「我、正に第四天上に生るべし」と。言を出し已に竟り餘宮悉く滅す。唯、第四天の宮殿のみ湛然たり。復、更に繩に從ふ。時に舍利弗、慘然として憂色あり。卽ち尊者に問ふやう「何故憂色ありや」と。答へて言く「汝、今、此の地中の蟻子を見るやいなや」と。

王、須達に告ぐるやう「汝の師の弟子、校ぶ時已に至る。宜しく來り談論すべし」と。是の時、須達、舍利弗の所に至り長跪し白して言さく「大德よ、大衆已に集る。願くば會に來詣せよ」と。時に舍利弗、禪定より起ち更に衣服を整へ【三〇】尼師壇を以て左の肩上に著け徐庠として歩む。師子王の如く、大衆に往詣す。是の時衆人其の形容を見るに法服異有り。及び諸の六師忽然として起立し風の草に靡くが如く覺えず禮を爲す。時に舍利弗、便ち須達の敷く所の座に昇る。六師の衆中一弟子有り、勞度差と名づく。善く幻術を知る。大衆の前に於て呪して一樹を作る。自然に長大し衆會を蔭覆す。枝葉鬱茂し花果各異る。衆人咸言く「此の變は乃ち是れ勞度差の作るところなり」と。時に舍利弗、便ち神力を以て旋嵐の風を作り樹の根を吹き拔き地に倒著し碎きて微塵と爲す。衆人、皆言く「舍利弗、勝てり、今、勞度差、便ち如ずと爲す」と。又、復、呪して一池を作る。其の池四面に皆七寶を以てす。池水の中に種種の華を生ず。衆人、咸言く「是、勞度差の作る所なり」と。時に舍利弗、一大六牙の白象を化作す。其の一の牙の上に七つの蓮花有り、一一の花の上に七玉女有り、其の象徐庠として池邊に往詣し幷びに其の水を含む。池、卽ち時に滅す。衆人、悉く言く「舍利弗、勝てり、勞度差、如かず」と。復、一山を作る。七寶莊嚴す。泉池の樹木花果茂り盛なり。衆人、咸言く「此は是勞度差の作るところ」と。時に舍利弗、卽便ち金剛力士を化作し、金剛杵を以て遙に用つて之を指す、山卽ち破壞して、遺餘有ること無し、衆會皆言く「舍利弗、勝てり。勞度差如かず」と。復、一龍身を作る。十頭有り虛空の中に於て種々の寶を雨らし。雷電地に振ひ大衆を驚動す。衆人、咸言く「此れ亦勞度差の作るところ」と。時に舍利弗、便ち一金翅鳥王を化作す。【三一】擘裂し之を噉ふ。衆人、皆言く「舍利弗、勝てり、勞度差如かず」と。復、一牛を作る。身體高大にして、肥壯多力なり。麁脚、利角地を跑り大吼す。奔突して前に來る。時に舍利弗、師子王を化作す。分裂して之を食ふ。衆人、言ひて曰く「舍利弗、勝てり、勞度差如かず」と。復、其の

【三〇】尼師壇。坐臥の時地に敷き以て身を護るもの、坐具。

【三一】擘裂。さくこと。

ざるを見て卽ち之に問ふて曰く「何の故に樂しまざるや」と。須達、答へて言く「立つる所の精舍但成らざるを恐る。是の故に愁ふるのみ」と。舍利弗、言く「何事有るの故に成就せざるを畏る」と。答へて言く「今、諸の六師、王に詣り(術を)較ぶることを求む。韋人勝を得れば精舍を立つるを聽し若し其れ如らずば遮り起つを聽さずと。此の六師の輩出家して來久し。精誠素有り、學ぶ所の技術能く及ぶ者無し。我、今、韋人の伎藝を知らず。能く與に捔するや不や」と。舍利弗、言く「正に此の輩の六師の衆をして閻浮提に滿し數竹林の如くならしむるも吾が足の上の一毛をも動かす能はず。何等を捔するを欲するも自ら恣に之を聽さむ」と。須達、歡喜し、更に新衣を著け香湯に沐浴す。卽ち、往きて王に白さく「我、已に之を問へり。六師、捔せむと欲せば恣に其の意に隨はむ」と。國王、是の時、六師に告ぐるやう「今、汝等は沙門と共に捔するを聽す」と。是の時、六師、國人に宣べ語るやう「却後七日、當に城外寬博の處に於て沙門と與に較ぶべし」と。舍衞國の中に十八億の人あり。時に彼の國法鼓を擊ちて衆を會す。若し銅鼓を擊たば八億の人集り、若し銀鼓を打たば十四億集り、若し金鼓を打たば一切皆集る。七日の期滿ち平博の處に至り金鼓を打擊す。一切都て集る。六師の徒衆三億人有り。是の時人民、悉く國王及び其の六師の爲めに高座を敷施す。爾の時、須達、舍利弗の爲めに而も高座を施す。時に舍利弗、一樹の下に在りて、寂然として定に入る。諸根寂默として諸の禪定に遊ぶ。通達すること無礙なり。而して是の念を作さく「此の會の大衆邪を習ひて來久し。憍慢自ら高し。草芥の群生は當に何の德を以つて之を降伏すべき」と。是を思惟し已り、「當に二德を以てすべし」と。卽ち誓を立てゝ言く「若し我無數劫中父母に慈孝、沙門・婆羅門を敬尙せしならば我、初めて會に入るとき一切大衆當に我が爲に禮すべし」と。爾の時、六師、衆已に集り而も舍利弗、獨り未だ來り到らざるを見て便ち王に白して言さく「瞿曇弟子、自ら術無しと知り僞り能を校ぶことを求め。衆會旣に集りて怖畏れて來らず」と。

以て地に布き間を空無からしめば便ち相ひ與ふべし」と。須達、曰く「諾し、聽きて其の價に隨はむ」と。太子、祇陀言く「我れ戲語するのみ」と。須達、白して言く「太子の法爲るや妄語すべからず。妄語、欺詐し云何が紹繼して人民を撫恤せむ」と。即ち太子と共に往きて訟了せむと欲す。時に首陀會天、當に佛の爲めに精舍を起すべきを以ての故に諸の大臣の偏に太子の爲めにするを恐れ即ち化して一人と爲り下りて爲めに評詳し、太子に語りて言く「夫、太子の法は妄語すべからず。已に價を許して決す。宜しく中に悔ゆるべからず。遂に斷じて之に與へよ」と。須達、歡喜し、便ち使人に勅し象をして金を負ふて出でしめ、八十[一八]頃の中須達須臾にして滿さむと欲し、少地殘り有り。須達、思惟ふやう「何の藏の金足りて多からず少からず、當に之を滿足すべきや」と。祇陀問ふて言く「貴を嫌ふて之を置け」と。答へて言く「いななり」と。自ら念ふやう「金藏の何者か足る可く、當に之を補ひ滿すべきか」と。祇陀、念言ふやう「佛、必ず大德ならむ。乃ち斯の人をして寶を輕ずること乃し爾り」と。是を齊り止まらしめ「更に金を出すこと勿れ、園地卿に屬し樹木我に屬す。我、自ら佛に上り共に精舍を立てむ」と。須達、歡喜し即ち之を然りとし可しとす。即便ち家に歸り當に功作を施さんとす。

　六師、之を聞き往きて國王に白すやう「長者須達、祇陀の園を買ひ瞿曇沙門の爲めに精舍を建立せむと欲す。我が徒衆と與に共に術を捔するを聽せ、沙門、勝を得れば便ち起立つることを聽し、若し其如ざれば起つることを得ざらしめ、瞿曇の徒衆は王舍城に住し我等の徒衆當に此に住すべし」と。王、須達を召して之に問ふて言く「今、此の六師云く、卿、祇陀の園を買ひ瞿曇沙門の爲めに精舍を起立せむと欲す。(六師)沙門弟子と共に其伎術を捔せむことを求む。若し勝を得れば精舍を立つることを得、苟くも其如ざれば便ち起つることを得ず」と。須達、家に歸へり[一九]垢膩の衣を著け愁惱して樂しまず。時に舍利弗、明日時到り衣を著け鉢を持ち須達の家に至り其の樂しま

【一八】頃。田百畝の稱。

【一九】垢膩衣。あかあぶらの衣。

て聖教に染り難し」と。須達、佛に白さく「唯、願くば如來よ、神を垂れ屈降して舍衛に[一四]臨履し中の衆生をして邪を除き正に就かしめよ」と。世尊、告げて曰く「出家の法は俗と別あり、處所に住止すること應に異り有るべし。彼に精舍無し、云何が去くを得む」と。須達、佛に白して言さく「弟子、能く起てん、願くば聽許せられよ」と。世尊、默然たり。須達、辭して往き、兒の爲に婦を娶り、竟に佛を辭し家に還へらんとし、因つて佛に白して言さく「還び本國に到り當に精舍を立つべし。[一五]模法を知らず、唯、願くば世尊よ、一弟子をして共に往くことを勅示せしめよ」と。世尊、思惟ひ給ふやう「舍衛城内には婆羅門衆邪倒の見を信ず。餘人往かば必ず辨ずること能はず。唯、舍利弗は、是れ婆羅門種なり、少小にして聰明、神足兼ね備ふ、去かば必ず益有らむ。即便ち之に命じて、須達と共に往かしめ給ふ。須達、問ふて曰く「世尊の足の行き給ふこと日に能く幾里なりや」と。舍利弗、言く「日に半由旬なり。轉輪王の足行の法の如く、世尊も亦爾なり」と。是の時、須達、即ち道次に於て二十里に一客舍を作り、計校し、功作す。錢を出して之を雇ひ使人を安止し、飲食敷具、悉く皆足らしむ。王舍城より舍衞國に至り還りて舍に來り到る。舍利弗と共に諸地を[一六]按行し、何處の平博にして中に精舍を起てむと。按行し周遍するも意とす可き處無し。唯、王太子祇陀の園有り。其の地平正にして其の樹欝茂せり。遠からず近からず正に處所を得。時に舍利弗、須達に告げて言く「今、此の園の中に宜しく精舍を起すべし。若し遠く之を作らば乞食則ち難く、近き處は[一七]憒鬧にして行道を妨廢す」と。

須達、歡喜し太子の所に行き太子に白して言さく「我、今、如來の爲めに精舍を起立てむと欲す。太子の園好し、今、之を買はむと欲す」と。太子、笑ふて言く「我れ乏しき所無し。此の園茂りて盛なり。當に用つて遊戲、逍遙し志を散ずべし」と。須達、慇懃に乃し再三に至る。太子、貪惜す。增倍價を求む。謂らく價貴く呼はゞ當に買はざるべしと。須達に語りて言く「汝、若し能く黃金を

【一四】臨履。のぞみ行くこと。

【一五】模法。設計方法。

【一六】按行。しらべあるくこと。

【一七】憒鬧。さはがしきこと。

友有り、命終りて四王天に生る。其の悔を欲するを見て便ち下りて之に語るやう「居士よ、悔ゆること莫かれ。汝、往きて佛を見れば利を得ること量無し。正に今、百車の珍寶を得しむるも足を轉じて一歩世尊に往趣くに如かず。得る所の利深くして彼よりも過ぎ踰えむ。居士よ、汝去くことを悔ゆること莫れ、正に百象の珍寶を得せしむるも足を擧げて一歩世尊に往趣くに如かず。利、彼より過ぎむ。居士よ、汝、去ることを悔ゆること莫れ、正に、今一閻浮提中に滿す珍寶を得せしむるも足を轉じて一歩世尊の所に至るに如かず。利を得ること弘く多し。居士よ、汝去くを悔ゆること莫れ、正に今、一四天下中に滿つる珍寶を得せしむるも足を擧げて一歩世尊の所に至るに如かず。得る所の盈利彼より踰え過ぐること百千萬倍なり」と。須達、天の此の如く説く語を聞き益增歡喜して、世尊を敬念し、闇卽ち曉に還る。路を尋ね往至きて世尊の所に到る。爾の時、世尊、須達の來るを知り外に出で〻經行す。是の時、須達、遙に世尊を見るに猶金山の如し。相好威容、儼然として炳著なり。護彌の說く所に過ぎ踰ゆること萬倍なり。之を覩て心悅び、禮法を知らず。直に世尊に問ふやう「不審なり、瞿曇よ、起居何如」と。世尊、卽時命じて坐に就かしむ。時に首陀會天、遙に須達の世尊を覩ると雖も禮拜供養の法を知らざるを見て化して四人と爲り行列して來り、世尊の所に到り足に接して禮を作す。長跪して起居の輕利を問訊し右遶三匝し却きて一面に住す。是の時、須達、其の是の如きを見て乃ち爲めに愕然たり、而して自ら念言ふやう「恭敬の法の事應に是の如くなるべし。卽ち起ちて坐を離れ彼の如く禮敬し起居を問訊し右遶三匝して却いて一面に住す。爾の時、世尊、卽ち爲めに四諦微妙、苦・空・無常の法を說き給ふ。法を聞き歡喜し、便ち聖法に染み須陀洹を成ぜり。譬へば淨潔の白氎に染むれば色を爲し易きが如し。長跪合掌して世尊に問ふて言く「舍衞城の中には我が伴輩の如き法を聞き染り易きこと更に我が比の如き有りや不や」と。佛、須達に告げ給ふやう「更に卿の如き者二人有ること無し。舍衞城の中には人多く邪を信じ

自ら勞を執り事務を經理し供具を施設す。王・太子・大臣を請ぜむと欲するが爲めなりや」と。答へて言く「不なり」と。「婚姻・親戚の會を營なまむと欲するや」と。答へて言く「不なり」と。「將に何をか作す所ぞ」と。答へて言く「佛及び比丘僧を請ず」と。時に須達、佛、僧の名を聞き[五]懍然として毛竪ち所得有るが如し。心情悅豫び、重ねて之に問ふて言く「云何が佛と名づくるや。願くば其の義を解けよ」と。長者、答へて言く「汝、聞かざるや、淨飯王の子、厥の名、悉達、其の生るるの日天瑞應を降すこと三十有二、萬神侍衞し、卽ち七步を行じて、手を擧げて言く、天上、天下唯我を尊しと爲すと。身に黄金色にして三十二相八十種好あり、金輪王の四天下を典るに應ず。老病死苦を見て家に在るを樂しまず。出家修道し、六年苦行して一切智を得、[六]結を盡し佛を成ぜり。諸の魔衆を降すこと十八億萬なり。號して能仁と曰ふ。[七]十力、[八]無畏、[九]十八不共、光明照耀し[一〇]三達[一一]遐鑒す。故に佛と號するなり」と。須達、問ふて言く「云何が僧と名づく」と。護彌、答へて言く「佛、成道し已り、梵天妙法輪を轉じ給はんことを勸請し、波羅奈の鹿苑中に至り拘隣五人の爲めに四眞諦を轉じ給ひ、漏盡き結解け、便ち沙門と成り。六通具足し[一二]四意・[一三]七覺・八道悉く練め、上の虛空の中八萬の諸天須陀洹を得、無量の天人無上正眞道意を發せり。次で、欝卑迦葉の兄弟千人を度し給ひ、漏盡き意解くこと其の五人の如し。次第に舍利弗、目連の徒衆五百を度し給ふに、亦應眞を得たり。是の如き之等の人々は神足自在なり。能く衆生の爲めに良祐の福田と作る。故に僧と名づくるなり」と。須達、此の如き妙事を說くを聞き歡喜踊躍し、感念・信敬し企望して曉に至る。「當に往きて佛に見ゆべし」と。誠報ひ神應ひ、地の明曉なるを見て明を尋ね卽ち往く。羅閱城の門は、夜、三時に開く、初夜・中夜・後夜是を三時と謂ふ。中夜、門を出で天祠有るを見て卽ち禮拜を爲し、忽ち佛を念ずることを忘る。心自ら還闇し、便ち自ら念言ふやう「今夜、故に闇し、若し我往かば儻 惡鬼猛獸の爲めに害せられむ、且く還城に入り曉を待ちて往くべし」と。時に親

【五】懍然。おそるゝ貌。
【六】結。煩惱の心を結著するより名づく。
【七】十力。如來の十力なり。一、知覺處非處智力。二、智三世業報智力。三、知諸禪脫三昧智力。四、知他衆生根上下智力。五、知種々解智力。六、知種々界智力。七、智一切至所道智力。八、知天眼無礙智力。九、智宿命無漏智力。十、知永斷習氣智力。
【八】無畏。四無畏のこと、一に一切智無所畏。二に漏盡無所畏。三に說障道無所畏。四に說盡苦道無所畏なり。
【九】十八不共。これ佛に限る十八種の功德法なり。佛に限りて他の二乘菩薩に共同せざれば不共法といふ。
【一〇】三達。羅漢に在て三明と云ふを佛に在て三達といふ。天眼・宿命・漏盡なり。
【一一】遐鑒。はるかにてらすこと。
【一二】四意。四正勤・四正斷・四正勝とも云ふ。三十七科の道品中四念處に次で修する所の行品なり。
【一三】七覺。七覺支のこと。八道は八正道のこと。

むと欲し、兒の爲めに之を求む。卽ち、諸の婆羅門に語りて言く「誰か好き女あり相貌備り足る有らば當に我が兒の爲めに往きて之を求索むべし」と。諸の婆羅門便ち爲めに推し覓む。展轉行乞して王舍城に到る。王舍城の中に一大臣有り、名を護彌と曰ふ。財富量り無く三寶を信敬す。時に、婆羅門その家に到り從つて乞ふ。國法として人に施すには要ず童女をして物を持ち布施せしむ。護彌長者、時に一人の女有り威容端正にして顏色殊妙なり。卽ち食を持ち出し、婆羅門に施す。婆羅門見て心に大いに歡喜し、我が覓むる所の者今日之を見たり」と、卽ち、女に問ふて言く「頗し人有り來りて汝を求索むるや、未や」と。答へて言く「未だしなり」と。問ふて言く「女子よ、汝の父在るや不や」と。其の女言く「在り」と。婆羅門言く「語りて外に出さしめよ、我、之に見え與に共に談語を欲す」と。時に女内に入り其の父に白して言く「外に乞人有り、相ひ見ゆることを得むと欲す」と。父、便ち外に出づ。時に婆羅門、起居の安和・善吉を問訊す。「舍衞國王に一人の大臣有り字を須達と曰ふ。輔相識るや不や」と。答へて言く「未だ見みえず、但其の名を聞くのみ」と。報じて言く「知るやいなや、是の人、彼の舍衞國の中に於て第一の富貴なり。汝、此の間に於て富貴第一なり。須達、兒有り端正殊妙[二]卓略多奇なり。君の女を求めむと欲す。爾る可きと爲すや不や」と。答へて言く「爾る可し」と。估客有りて、舍衞に至らむと欲するに遇ふ。時に婆羅門、書を作り之に因りて送りて須達に與へ、具に其の事を陳ぶ。須達、歡喜し王に詣り假を求むるやう「兒の爲めに婦を娶る」と。王、卽ち之を聽す。大いに珍寶を載せて王舍城に趣むく。其の道次に於て貧乏を賑濟し王舍城に到り護彌の家に至り、兒の爲めに妻を求む。護彌長者、歡喜し[三]迎逆し敷具を安置す。暮れて其の舍に宿る。家内[四]搔搔飲食を辦具す。須達、念ふて言く「今、此の長者大いに供具を設け何等を作さむと欲するや。將に國王・太子・大臣・長者・居士・婚姻親戚を請ぜむとし大會を設くる耶」と。所以を思惟するも了知する能はずして之に問ふて言く「長者よ、今、暮れて躬

【二】卓略。はかりごとひいづること。
【三】迎逆。むかへること。
【四】搔搔。騷々に同じ。

我、汝の心を知るに惡意有ること無し、過去の世の時も亦復是の如し惡意有ること無くして相ひ殺害せり」と。時に、諸の比丘佛の語を聞き已り卽ち共に佛に白さく「不審なり、世尊よ、過去世の時斯人の父子、何の因緣有りて便ち相ひ殺すや」と。

佛、言く「諦かに聽け、吾當に之を說くべし。過去無量阿僧祇劫の時父子二人共に一處に住す。時に父の病極り、時に睡臥す。多くの虻蠅有り、數來りて惱觸す。父、卽ち兒をして其の蠅を遮り逐はしめ安眠を得て以て疲勞を解かむと望む。時に兒急に遮るも蠅遂に數來り、數來りて止まず。兒便ち瞋恚し卽ち大いなる杖を持ち蠅を伺ひ殺すべしと。時に諸の虻蠅競うて父の額に來る。杖を以て之を打ち、卽ち其の父を殺せり。

爾の時に當り亦惡意に非ず、比丘よ、當に知るべし。爾の時の父とは此の沙彌是れり、時に兒の杖を以て父の額を打つは今の彼の死せる比丘是れなり。爾の時に於て惡心有ること無く杖を以て父を打ちて之を殺し、惡意を以つてせざるに由り今還び相ひ報ゆ。亦故に殺せしに非ざるなり」と。

時に、沙彌、漸漸學を修め勤加懈らずして遂に羅漢を得たり。

爾の時、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

四十八、[一]須達、精舍を起すの品　第四十一

是の如く我聞きぬ。一時、佛、王舍城竹園の中に在し止まり給ひき。

爾の時、舍衞國王、波斯匿に一人の大臣有り、名を須達と曰ふ。居家巨富にして、財寶限り無し。好みて布施を喜び貧乏及び諸の孤老を賑濟せり。時に人々その行に因り其の爲めに號を立て丶給孤獨と名づく。爾の時、長者七人の男兒を生み、年、各長大して其の爲めに納娶る次第して六に至る。其の第七の兒端政にして殊異なり。偏心愛念す。當に爲めに妻を娶り極妙の容姿端政有相の女を得

【一】須達起精舍品。西本・缺。

猶毒蟲の爲めに螫されて命を斷つ。惡意を興し、卽ち還、懺悔して誓願を發し、「我をして來世聖師に遭値し、得る所の神足今の者の如くせしめよ」と。云ふに由るが故に今我に値ふことを得て道法を獲るを蒙れり」と。

爾の時、舍利弗、及び衆會、與に佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

四十七、[一]兒、誤りて父を殺すの品　第四十

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、一人の老翁有り、早く其の婦を失ひ獨り兒と與に居る。困みて財寶無し。世の非常を覺り念ふて出家を欲す。卽ち佛の所に往き入道を求索む。時に佛、憐愍みて卽ち出家を聽し給ふ。時に其の父便ち比丘と作り時に兒年小にして卽ち沙彌と爲る。恒に其の父と共に村に入りて乞食し。暮れて所止に還る。時に一つの村有り、最も邊遠と爲す。彼に至りて乞食し、暮に逼り當に還らんとし、其の父年老いて行歩遲緩す。其の兒恐懼し諸の毒獸を畏れ、急に其の父を扶け之を推して路を進む。之を執ること固からず。父を推して地に倒る。時に應じ其の父手を當てゝ死せり。父死して後獨り佛の所に至る。時に諸の比丘沙彌に問ふて言く、「汝、朝に師と與に村に至り乞食す、今、何處にありと爲すや」と。沙彌、答へて言く「我、向に師と與に彼に至りて乞食し、日暮れて還る時師行くこと小か遲し。我、時に恐怖れて故に急に之を推し、之を推すに手急にして、師を撲ちて地に著く、我が師時に卽ち道中に死す」と。時に諸の比丘沙彌を呵責するやう「汝、大惡人なり、父を殺し師を殺す」と。卽ち以て佛に白す。佛、之に告げて曰く「此の師死すと雖も惡意を以てせず」と。卽ち沙彌に問ひ給ふやう「汝、師を殺すや不や」と。沙彌答へて言く「我、實に之を[二]排したり、(然れども)惡意を以て父を殺さゞるなり」と。佛、其の語を可とし「是の如し、沙彌よ、

【一】兒誤殺父品。西本、缺。

【二】排。強く突くこと。

て推問ふに舍衛に至ると云ふ。毒恚に心を煩はし卽ち重募を出す。「誰か能く我が弟の頭を取り得るものぞ當に重賞して金五百兩を與ふべし」と。時に、人有り來りて其の募に應ず「我能く往きて其の頭を取らむ」と。兄、卽ち金を出し用つて其の人を募り相ひ將ゐて倶に進み、舍衛國に到る。彼に到り弟を見るに坐禪思惟す。時に、彼の人欻ち慈心を生じて是の念を作さく「我、當に云何が此の比丘を殺すべき、吾、設し殺さゞれば我が金を奪ふべし、弓を引き射むと欲し弓を挽く時に當り彼の比丘に向ふ。矢を放つに至り乃ち其の兄に中つ。其の兄恚を懷き憤惱して死す。後、更に身を受け毒蛇の形と作る。彼の道人の戸樞の中に生れ毒心未だ歇まず、規として之を害せんとするに當り戸數開閉し身を撥ちて死す。既に死するの後未だ操を改むる能はず、遂に願ふて更に小形の毒蟲と作り彼の道人の屋の間に依りて住し、其の道人の端坐の時を伺ひ屋の間より下り其の頂上に墮つ。悪毒猛熾にして卽ち比丘を殺す。時に舍利弗、斯の事を見已り往きて佛の所に至りて佛に白して言さく「彼の死せる比丘は本何の緣を作して今得道を現じて毒を被りて死するや。唯、願くば世尊よ、當に開示し給へ」と。

佛、舍利弗に告げ給ふやう「善く聽き善く念ぜよ、吾、當に汝の爲めに分別し說くべし」と。『乃往、過去無數の世の中辟支佛有り、世に出現して山林に處在し、修めて其の志を遂ぐ。時に獵師有り、恒に禽獸を捕へ施設し方計し望み伺へば苟くも得、時に辟支佛其の禽獸を驚かし其の獵師をして伺ひ捕るを得ざらしむ。便ち瞋恚を懷き懊惱憤結し。卽ち毒箭を以て辟支佛を射る。時に辟支佛、心に此の人を愍み改悔せしめむと欲し爲に神足を現す。所謂飛行して虚を履み、屈伸・舒戢・出沒自在、神足變現す。時に獵師是の事を見已り心に敬仰を懷き、恐怖して自ら責め、誠に歸し過を謝し哀を求め懺悔す。時に辟支佛其の懺悔を受け、懺悔已に竟り毒を被りて死す。其の人命終りて便ち地獄に墮し、既に地獄を出でて五百世中常に毒を被りて死し今日に至る。阿羅漢道を得ても

【三】舒戢、しづかなること。

時の大長者食を供養する者とは今の阿難是れなり。乃ち過去に是の行を造るに由るが故に今總持を得て忘失有ること無し」と。

爾の時、諸の比丘、是の說を聞き已り歡喜信受し頂戴奉行せり。

四十六、〔一〕優婆斯の兄殺さるゝの品　第三十九

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、羅閱祇國に賈客有り、兄弟二人と共に一處に住す。兄は長者の女を求め以つて婦と爲さむと欲す、其の女年小く未だ出でて適ぐに任ず。時に其の兄、衆賈と與に遠く他國に至り、年歲を經歷し滯りて時に還らず。女、年大に向ひ、嫁ぐべき處に任へたり。而して其の弟に語るらく「卿の兄遠く行き彼に淹して還らず。汝今、宜しく我が女を納取るべし」と。其の弟、答へて言く「何ぞ是の事有らんや、我が兄存在す。敢て違ふこと有らず」と。爾の時、長者數數陳べ說く。其弟、意堅く未だ曾つて迴轉せず。長者已むを得ず詐りて遠き書を作り諸の賈客に託し兄の死亡を說く。弟、兄の死を聞き心乃ち愕然たり。長者復往きて之に告げて曰く「卿の兄已に死せり、女を當に云何がすべき、卿若し取らざれば當に餘の計を思ふべし」と。弟、急逼せられ卽ち其の女を妻とす、數時を經歷し女便ち懷妊す。兄、後に便乃ち他國より還る。時に其の弟、兄の國に還るを聞き心に慚懼を懷き逃げて舍衞に至る。發跡の後諸の親友の輩其の婦の腹を按じて其の胎兒を墮とす。是の如く展轉して佛の前に到る。慚愧に逼られ出家を求索む。佛、度す可きを知り卽時、聽許し給ふ。佛の聽しを蒙り已り便ち沙門と成り、優婆斯と名づけ律行を奉持し精勤して懈らず。時に應じて便ち阿羅漢道を得たり。六通清徹して衆智具足す。

時に兄家に到り弟已に其の婦を娶るを見て嫉の心內に忿り、往いて追ふて殺さむと欲す。求索め

〔一〕優婆斯兄所殺品。四本、缺。

卷の第十

四十五、阿難、總持の品　第三十八

是の如く我聞く。一時、佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、諸の比丘、咸皆疑を生ず、「賢者、阿難、本何の行を造り此の總持を獲たる。佛の說き給ふ所を聞き一言も失はず」と。倶に佛の所に往きて佛に白して言さく「賢者、阿難、本何の福を興して是の如き無量の總持を得たるや。唯、願くば世尊よ、當に開示し給へ」と。

佛、諸の比丘に告げ給ふやう「諦に聽き心に著けよ、斯總持は皆福德に由る。乃往過去阿僧祇劫に爾の時一人の比丘有り一沙彌を畜ふ。恒に嚴勅を以て教へて誦經せしむ。日日の課程其の經足らば便ち以て歡喜し若し其れ足らざれば苦切之を責む。是に於て沙彌、常に懊惱を懷く。誦經を得と雖も食復闕ねからず。若し乞食に行き疾く食を得る時誦經便ち足る。乞食若し遲くして誦すれば則ち充たず。若し經足らざれば當に切責せらるべし。心に愁悶を懷き啼哭して行く。時に長者有り、其の啼哭を見て前み呼び問ふて言く「何を以て懊惱するや」と。沙彌、答へて言く「長者、當に知るべし、我が師、嚴難なり、我に勅し誦經せしめ日日課限る。若し其れ足らば即ち以て歡喜し、若し其れ充さゞれば苦切に責めらる。我、乞食に行きて若し疾く得れば誦經即ち足るも、若し乞うて遲く得れば誦便ち充ず。若し經を得ざれば便ち切責せらる。是の事を以ての故に我用つて愁ふるのみ」と。時に長者卽ち沙彌に語るやう「今從り已往常に我が家に詣れ、當に飮食を供し汝をして憂あらざらしむべし。食已り專心に勤加し誦經せよ」と。時に沙彌是の語を聞き已り卽ち專心に勤加し誦學を得たり。課限減ぜず。日日常に度る。師徒是に於て倶に同じく歡喜す。

佛、比丘に告げ給ふやう「爾の時の師とは　定光佛是れなり、時に沙彌とは今の我が身是れなり、

【一】阿難總持品。西本、缺。

【三】定光佛。梵語、(Dipankara Buddha)、燃燈佛とも譯す。

根を堀る、善求、感佩し之を見るに忍びず。衆を領して家に歸る。樹を伐ち已に竟る。五百の羅刹有り、此の惡求及び衆の賈人を取り皆悉く之を噉ふ。財物と伴侶と一切を喪失す』と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の善求とは今の我が身是れなり、爾の時の父とは今現に我が父淨飯王是れなり。爾の時の母とは今現に我が母摩訶摩耶是れなり。時の惡求とは今の提婆達多是れなり。阿難よ、提婆達多は但、今日のみ不善の事を作すに非ず。利養を貪るの故に世世常に造る。我、往昔に於て常に與に相ひ値ふ、恒に善法を教へて之を用ひず、反つて更に我を以つて怨と爲す」と。

爾の時、阿難、及び四部衆、佛の說き給ふ所を聞き悲喜交集り咸自ら勸勵し、頂戴奉行せり。

て意性柔和なり、月滿ち男を生む。形體端正にして父母愛念す。美饍を施設け、親戚幷びに諸の相師を[三]延請し、共に相ひ娛樂し兒を抱えて衆に示し其の爲めに字を立てしむ。相師、問ふて言く「此の兒、受胎已來何の瑞應有りや」と。其の父、答へて言く「受胎已來其の婦自然に慈心和善なり」と。相師、卽ち爲めに字を立てゝ名を善求と爲す。乳哺長大し好みて諸德を積み衆生を慈愍す。

次いで後に懷妊す。自然に弊惡なり。期滿ちて男を生む。形・體醜陋なり。卽ち相師を請じ其の爲めに字を立つ。相師、問ふて言く「此の兒懷妊して何の感應有りしや」と。答へて言く「兒を懷きて已來受性弊惡なり」と。時に相師、卽ち爲に字を立てゝ、名づけて惡求と曰ふ。乳哺長大し好みて惡事を爲し、恒に貪心を生じ嫉妬の意を懷く。年、各長大し共に賈に行き海に入り寶物を求索めむと欲す。各五百の侍從有り前後して發す。途路[四]懸遠にして中道に糧に乏し。七日を經て死を去ること遠からず。是の時、善求及び諸の賈人咸共に誠心を以て諸の神祇に禱る。飢儉を濟はむと欲す。空澤の中に於て遙に一樹の枝葉欝茂するを見、便卽ち之に趣く。一つの泉水有り。善求及び衆悉く共に誠心に救護を求哀む。誠、神應を感じ。身を現はして之に語るやう「一枝を斫り去れ、須ゆる所當に出づべし」と。諸人歡喜す。便ち一枝を斫る。美しき飮流れ出づ。第二の枝を斫るに、種々の食出でゝ百味具足す。咸共に[五]承接し各飽滿を得たり。第三の枝を斫るに諸の妙衣を出し種々備はり具はる。第四の枝を斫るに、種々の寶物悉く皆具足し、莊嚴悉く備はる。須ゆる所盡く辦ず。惡求、後に到り衆人前の如く、盡く充足を得たり。便ち自ら念言ふやう「今、此の樹枝能く是の如き種々の好物を出す。況んや復其の根をや、今、當に之を伐るべし、極妙の佳好の物を得るに足らむ」と。思惟して心定り人をして之を伐らしむ。是の時、善求是の如き語を聞き憤を懷き懊惱し、惡求に語りて言く「我等飢乏命旦夕に在り、此の樹の恩を蒙り餘命を濟ふを得たり。云何が此の弊惡の心を懷きて之を伐らむと欲す」と。爾の時、惡求其の言を用ひず、卽ち其の

【三】延請。客を招くこと。

【四】懸遠。かけはなれたること。

【五】承接。つゞくこと。

佛、諸の比丘に告げ給ふやう「爾の時の令奴王を知らむと欲せば今現に我が父白淨王是れなり。爾の時の提婆跋提夫人とは今現に我が母〔四〕摩訶摩耶是れなり。爾の時、提婆令奴王とは今我が身是れなり。爾の時の五百の太子とは今此の五百の釋是れなり、我、乃ち爾の時、諸人中に於て最も尊妙と爲す。吾、今成佛し衆相具足す。此の衆中に於て最も奇妙と爲す」と。

時に諸の大會、佛の說き給ふ所を聞き須陀洹を得る者、斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り、辟支佛の因緣を種うる者有り、菩薩心を發し不退心を成ずる者有り。衆坐歡喜し頂戴奉行せり。

四十四、〔一〕善求・惡求の緣の品　第四十九

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、提婆達多復出家すと雖も利養心を蔽ふ。三逆罪を作る。山を推して佛を壓し佛の脚指を傷け、復、縱に黑象を放ち佛を害せしめむと欲し、僧を兩部に別ち、漏盡の比丘尼を殺し以て故に殺生す。後の報を受くるを疑ひ畏れし時六師有り、卽ち往きて之に問ふ。六師、便ち爲めに諸の邪見を說きて言く「惡を爲すも罪無く善を爲すも福無し」と。信敬の心を生じ善根を喪ひ斷ず。是の時、阿難、體を析ち愛重く惋恨の情深し。悲哽・懊惱し世尊に白して言く「調達・愚癡にして不善の業を造る。善根を壞破り釋種の子を辱しむ」と。爾の時、世尊、阿難に告げて言く「提婆達多は但、今世のみ利養の爲めの故に善根を斷破せしに非ず。過去世の時も亦利養を貪り身を喪ひ命を失へり」と。阿難、佛に白して言さく「世尊よ、提婆達多、過去世の時利を貪り身を喪ふ、其の事云何。願樂くば聞かむと欲す」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「善く聽け當に說くべし、往昔、量り無き不可思議阿僧祇劫に此の閻浮提に國有り、波羅㮈と名づく。時に薩薄有り〔二〕摩訶夜移と名づく、其婦、懷妊す。自然に仁善にし

【四】摩訶摩耶。西名、(Lha-mdses)とす。翻譯名義集に(Māyā-devī Lha-mo syyu-ḥphrul ma)とあり。

【一】善求・惡求緣品。西本、No. 32. (Leg-tshol dan ñes-tshol gñis kyi leḥu)(善求と惡求二人の品)とあり。麗本、缺。

【二】摩訶夜移。西名、(Mahā-ya-bi)とす。

雨らしむるに語を始むれば卽ち雨る。問ふ是れ誰の生むところと問へば提婆跋提夫人の生む所なり。十事具足す。諸王・臣民卽ち拜して王と爲す。十五日に至り日初めて出づる時金輪寶有り、東方より來る。輪に千輻あり縱橫一由旬なり。王、卽ち座を下り右膝を地に著け跪きて言つて曰く「若し我が福德應に王者と爲るべきならば輪當に我に稱ふべし。卽ち其の言の如く來りて殿前に在り虛空の中に住す。白象寶は香山より來り、毛の尾珠を貫く。若し王上に乘らば象皆能く飛び朝より午に至りて四天下に遍し。若し足を以て行かば足觸るゝ所の地卽ち金沙と成る。紺馬寶は身紺靑色なり、其の馬の毛尾皆悉く珠色にして皆七寶を雨らす。若し王上に乘らば一食の頃に四天下に遊ぶ。疲れず勞せず。神珠の寶は自然に至る。其の珠の光明晝夜百二十里の內を照す。復能く七寶を雨らし一切を稱給す。玉女寶は自然に至る。端正殊妙にして王の意に稱ひ適す。典藏の臣は王七寶を須ゆるとき隨意に給足し終に乏しく盡くること無し。其の典兵の臣は王若し四種の兵を須ひむと欲する時之を顧視する頃に諸兵悉く集る。陣を行ふこと嚴にして整ふ。威力凡に非ず。七寶旣に具る。坐して自ら思惟ふやう「吾斯の位を享くるは皆前身宿に福業を種うるに由り乃ち之を致す耳。今、當に紹繼し斷絕せざらしめむ」と。卽ち香湯を以て其の身を洗浴し新しき淨衣を著け、手に香爐を執り東方に向ひ跪きて言つて言く「東方の快士來りて我が請を受けよ」と。卽時、便ち二萬の辟支佛有り來りて王宮に至り給ふ。南・西・北方悉く皆之を請ずれば時に六萬の辟支佛有り來りて王の請を受け給ふ。王、諸臣と與に四事を以て供養す。其の八萬四千の諸の小國王家を離れ來ること久し。卽ち大王に啓すやう「辭して國に還らむと欲す」と。王、卽ち之を聽す。因つて王に啓して曰く「此の中、快士共の數甚だ衆し。願くば王よ、愍を垂れ少し許を減し省き臣に與へ供養せしめよ。願くば將來共に斯の福を享けしめよ」と。時に大王、卽ち四方の辟支佛を以て諸の小王に與ふ。時に隨つて供養す。八萬四千歲を經て諸王・臣民命終の後皆天に生ずることを得たり』と。

の兒の福德人中奇尊なるは卽ち父母に依る。而して爲めに字を立てゝ提婆令奴とす。乳哺し長大す。令奴大王、卒に時の病に遇ひ其の命將に終らむとす。諸の小國王と群臣と太子咸來りて病を問ふ。因りて大王に問ふやう「假りに其の終沒には諸王、太子の中、誰をか應に紹嗣とすべき」と。時に王報いて曰く「若し我が諸子能く十の功德を具足する者有らば乃ち立てゝ王と爲せ、何等をか十德となす、一には身は紫金色にして其の髮は紺靑なり。二には兩手の掌中金輪の相有りて具足し缺けず。三には其の右足の底に白象の相あり、四には其の左足の下に馬の形相有り、五には王の衣服を著け身と相ひ大ならず小ならざる可し。六には王の御座に坐し威德巍巍とし其の坐の安穩なり。七には諸王・群臣歡喜敬禮し善を稱すること量り無く後宮に入らば夫人婇女踊躍歡喜し禮を作し恭敬す。八には若し將ゐて天祠に至らば泥天・木像悉く禮を作す。九には福德威力能く七寶を雨らし一切を稱給す。十には其の母是れ誰ぞ、提婆跋提夫人の生む所なり。若し是の十功德を具足するものあらば斯乃ち之を立てゝ用つて大王と作せ」と。敎勅し已竟り、無常對び至り、遂に便ち命終す。諸王・臣民五百子の中其の大なる者より次いで十事を以て其の身を觀相す。此の諸の太子身に金色無く髮に紺靑無し。手の掌輪無く足の底に象馬の相有ること無し。王者の服を著くれば相ひ應當せず。御座に坐せば其の木の師子驚張して起立し、之を搏ち嚙まむと欲す。諸王・臣民悉く敬禮せず。將ゐて宮内に至るに夫人婇女悉く歡喜せず。禮して敬ふ者無し。設ひ天祠に入り自ら天像を禮す。諸餘の泥・木の天像悉く禮を作さず。語りて寶を雨らしむることも亦復能はず。又、復是れ提婆跋提夫人の生む所ならず。乃至五百の諸の大太子十事の中に於て乃ち一事も無し。最下の小子身は紫金色にして其の髮は紺靑なり。其の兩手を看るに輪相具足し、其の脚の底を視るに象形・馬相昞然として畫の如く、王の法服を著くれば身と相ひ可し。御座に坐せば福德巍巍諸王・臣民敬禮せざる無し。後宮に入るに夫人・婇女敬ひ奉じ禮を作す。將ゐて天祠に至るに泥・木の天像皆禮を作す。敎へて寶を

廣布す。彼の少害を被りて豈慈愍せざらむ」と。佛、是を說き已り給ふ。
時に諸の會する者佛の說き給ふを聞き世尊、群生の爲めに劇苦を經涉し而も退廢せざることを感念し未曾有と歎じ、悲・喜 交 懷く。心を刻し志を勵まし、妙法を思惟し、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者、辟支佛の善根を種うる者有り、無上正眞道意を發す者有り、咸共に敬戴し歡喜奉行せり。

四十三、[一]摩訶令奴の緣品　第四十八

是の如く我聞きぬ。一時、佛、迦維羅衛國尼拘盧陀の僧伽藍に在しき。
佛、初めて國に還り給ふ。時に[二]諸釋佛の威儀を觀ずるに相好殊異なり。身體金色にして三十二相あり之を視るに厭くこと無し。各 共に街陌・市里に群聚し異口同音に歎じて如來を說くやう「此の衆中に儔類有ること無し。實に敬ふ可き哉」と。時に諸の比丘、是の論を聞き已り並共に佛に白さく「其の諸人歎詠の詞を說く」と。時に世尊、諸の比丘に告げ給ふやう「汝等、當に知るべし。吾、乃往昔此の衆中に於て最尊最妙なり、但、今日のみにならず」と。時に諸の比丘、各 共に佛に白さく「不審なり、世尊よ、過去世の時此の衆中に於て最尊最妙なりとは其の事云何」と。爾の時、世尊、諸の比丘に告げ給ふやう「諦に聽け諦に聽け、善く心中に著けよ。吾、當に汝の爲めに過去世の事を具足して解釋せむ」と。對へて曰く「唯、然なり、願樂し聞くを欲す」と。
佛、爲に說くらく『過去無量不可思議阿僧祇劫に此の閻浮提に大國王有り、名を令奴と曰ふ。其の王は八萬八千の諸小國王を統領す。一萬の大臣・五百の太子・夫人婇女合せて二萬有り。最大の夫人を[三]提婆跋提と字す。最後に懷妊し一太子を生む。其の兒端正、身は紫金色にして、其の髮は紺青なり。兩手の掌中に千幅輪相あり、其の左足の底に馬の形相有り其の右足の底に白象の相有り。其

【一】摩訶令奴緣品。西本、No. 31. (Rgyal-po Me-loṅ gdoṅ gi leḥu)、麗本、缺。
【二】諸釋。もろもろの釋迦族の人々。
【三】提婆跋提。西本、名を出さず。

の珠を捉り便ち求願に從ふ。「若し實に當に如意珠ならば我が父母の所坐の處に七寶の座有らしめ、頂上に當に七寶の大蓋有らしむべし」と。其の言已に訖り、語の如くして成ず。復、其の珠を捉りて求願に從ふ「我が父母の宮內の諸藏及び諸王・臣の所有る諸藏前に用つて施す所悉く還び滿たしめよ」と。卽時、珠を捉り四向に歷ぎ訖るに一切の諸藏皆還び滿つ。復、諸臣に勅し諸國に告下すらく「迦良那伽梨太子、却後七日、當に七寶を雨らすべし」と。卽時に告下し、悉く皆聞き知る。時に太子、香湯に洗浴し、大幢を竪立し、珠を以て頭に著け、新しき淨衣を著け手に香爐を執り四方に向つて禮し、口に自ら說きて言く「若し其れ實に是れ如意珠ならば便ち普く一切の須ゆる所を雨らすべし」と。求願、已に訖り、四方の雲霧卽ち風有りて來り、吹きて糞穢及び餘の不淨を除き悉く自ら除去す。次いで復水を雨らし用つて塵土を掩ほひ、次に復百味の飲食・種々の美味を雨す。次に五穀を雨し、次に衣服を雨し、次に七寶を雨し天下に積み滿せり。爾の時、人民稱慶すること量り無し。諸の珍寶を視ること猶し瓦石の如し。時に太子廣く宣令を布くやう「汝等、已に一切の須ゆる所を得たり。身に供するの事乏小する所無し。若し能く是の如きの恩を感謝せば當に身・口・意を攝し十善道を修むべし」と。爾の時、一切閻浮提の內太子の極み無きの施を感念し又其令を聞き、其の心を尅勵し十善を奉行し衆惡を犯さず。命終るの後皆天に生るを得たり』と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の迦良那伽梨太子を知らむと欲せば今の我が身是れなり。爾の時の我が父勒那跋彌は今、現に我が父淨飯王是れなり。爾の時の母とは〔三〕摩訶摩耶是れなり。時の梨師跋王とは摩訶迦葉是れにして、爾の時の妻とは今の瞿夷是れなり、爾の時の波婆伽梨とは今の提婆達多是れなり。閻浮提の人、我が恩を蒙る者とは我初めて道を得、八萬の諸天及び我が弟子授記を得る者此の如き等是れなり。阿難よ、我れ爾の時に於て彼の爲めに害せられ辛苦理を極めたり。猶慈心を以つて之を矜愛せり、況んや我れ今日佛道を成することを得たるをや。煩惱都て除き慈悲

〔三〕摩訶摩耶。西名、(Skye-dgu-hi bdag-mo)(Mahāprajāpatī)、大愛道、佛の姨母とす。

子を奉持し、復、五百の侍女の極めて最も端正にして才能巧妙なるを擇取り、種々の寶物にて之を莊飾す。五百の乘車寶物を以て莊挍し、亦極妙ならしめ以つて其の女を送る。梨師跋王、自ら群臣數百千乘と與に亦共に侍して送る。伎樂歌頌、前後を圍遶し稱慶量り無し。道を進み國に還る。爾の時、其の使大王の所に到る。書表を披讀し甚だ喜踊を增す。諸王に告下し。悉く皆來集す。即ち、象馬を嚴にし群臣百官、夫人婇女前後に導從し躬ら太子を迎へ[一九]界宕に到る。爾の時、太子、遙に父の王を見て車を下り歩み進み、頭面に禮拜し父母に問訊す。父母も亦下り便ち共に抱持す。別れて久しく念想し、子と相ひ見え一悲一喜す。諸王・臣民其是の如きを見て欣感の情具説す可からず。談論粗訖り、即ち還び駕乘し、鐘を撾ち鼓を鳴し衆の伎樂を作し、歡喜し善を稱し導從して城に趣き城の門外に到る、太子、王に白さく「波婆伽梨、今、何所にか在る」と。王、之に答へて言く「斯の如き惡人は天下覆はず、吾、見るに忍びず。先に來り幽閉して獄中に在り」と。太子、王に白さく「今、當に還び放つべし」と。王、之に答へて言く「其の罪深重なり、未だ[二〇]撿挍に及ばず。云何が當に出すべき」と。太子、復言く「若し波婆伽梨を放ち出さゞれば終に城に入らず」と。王、即ち勅して放ち語り來り出さしむ。既に脫出を得たり。來りて太子に見ゆ。太子、抱持し其の意を慰撫す。然る後乃ち城に入り宮に至る。爾の時、父母・諸王・臣民・男女・大小、太子の怨家を視ること赤子を視るが如きを見る。波婆伽梨、其の眼を刺すと雖も微恨の大なること毛髮の如きも有ること無し。敬愛・慈惻前より倍加ふ。一切の大衆皆共に歎美し。甚だ奇特と爲す。天上・人中實に比有ること無し。太子、宮に到り波婆伽梨と親欵の情、慈愛舊の如し。徐に其の珠を問ふ。「今、何處に在るや」と。波婆伽梨、太子に答へて言く「來る時道の邊の土中に藏著せり」と。勅して還び往きて取る。求め覓めて得ず。太子共に往き到りて便ち之を見、珠寶を收取し還び共に宮に還り、五百の寶珠を以て諸王に遺り與へ各一を取らしむ。如意珠を殘して自ら之を留む。手に其

【一九】界宕。國境のいはや。

【二〇】撿挍。かんがへはかること。

と爲す」と。女、復、白して言さく「願くば王よ、往きて看よ」と。王、尋いで往きて視るに、審かに是れ太子なり、衣毛悚然たり。愧と懼と交懷き、腹を其の前に拍ち向ひて懺悔して言く「實に相ひ知らず、願くば其の過を恕せ」と。密に太子を將ゐ還び[一八]界上に著け、便ち唱へて露に言く「大王よ、太子迦良那伽梨、大海より還る。施設し辦具せよ」と。象馬を嚴駕し、躬ら群臣と與に自ら往きて之を迎ふ。還り來り國に到る。廣く賓樂を作す。其の女を莊校し「方に始めて女を以用つて配さむと欲す」と云ふ。

爾の時、鴈も還、書を擔ひて國に到る。大王、鴈を見て披き解き看て讀み、始めて消息を得て太子の存在を知り具に其の所と更に辛酸せし諸事を知れり。王、及び夫人、乍ち悲み乍ち喜ぶ。宮閤の内外悲悼せざるは靡し。懊惱、瞋憤す。波婆伽梨を取り、其の身を枷鎖にし幽閉して獄に在き、勅令し梨師跋王に告下すらく「太子、辛苦して爾の國に在り云何が默住し來りて表示せずや。書到る其の時象馬にて侍し送れ、事、若し違ふ事有らば吾當に自ら往くべし」と。使、便ち書を齎らし、徑に其の國に到る。梨師跋王、奉受し披き讀み、是に於て太子、梨師跋王に語るらく「牧牛の人、我に於て恩有り、我、今思念す、之に見えむと欲す。使を遣はし往きて我が爲めに之を喚ぶ可し」と。王、尋いで召し來る。太子、王に語るやう「我、眼刺されて正に此の人を仰ぐ。供給し將ゐ養ふこと我が父母の如し。王、若し念あれば當に我が爲めに報ゆべし」と。王、大いに歡喜し即時名衣・上服・象馬・車乘・園田・舍宅・金銀・寶物・奴婢・僕使を賜遣ひ、幷びに典る所の牛を盡く持つて之に與ふ。其の人歡喜し、其の望む所に非ざるも便ち安樂を得、身を終るまで富貴たり。即ち還び使に報じ因つて事情を表はすやう「太子、此に在り、實に知らざる所なり、辛酸の諸事伏想委曲す、太子、今は已に還び眼を得たり。即ち鄙女を妃し太子の妻と爲す。莊嚴、辦具す。臣、自ら衞り送らむ」と。尋いで勅して五百の白象を嚴具し金銀校飾し極めて殊妙ならしめ。五百人を選び太

【一八】界上、西語、(Lam-srañ gcig)(ある小路)とす。然し界上とは國境のことか。

遣はして喚ぶ。女の言初の如し。志を執りて移さず。時に王愛念し意に違ふこと能はず。就いて丼び將ゐ來りて宮中に著け、便ち交會し夫婦と爲るを成ぜしむ。復、數日を經て婦恒に晝去りて冥に乃ち來り還る。夫、怪み之を問ふやう「汝、我と與に共に夫婦と爲れと言ふ、晨に去り莫て還る。心此に在らず。將に他の志の爲めの故に爾らしむる耶」と。婦、因つて自ら誓ふやう「我、今一心に共に相ひ尊び奉ず、他意の大なること毛髮の如きも有る無し。若し當に實に至誠虛しからざれば汝の一目をして平完故の如くせしめむ」と。誓を言ひ已訖るに一目尋いで復故の如し。復、太子に問ふやう「汝の父母は何の國に在りと爲すや」と。太子、婦に語るやう「汝、大王勒那跋彌の名字を聞くや不や」と。答へて言く「之を聞く」と。「是、我が父なり、彼王の太子迦良那伽梨、汝復、聞くや不や」と。答へて言く「之を聞く」と。「我が身是なり」婦、即ち驚きて問ふやう「汝、復、何の爲めに辛苦是の如きや」と。太子、因つて爲めに其の本末を說く。婦、是の語を聞き深く歎息を懷く。太子に語りて曰く「波婆伽梨、害を汝に懷く。古より今に至るまで未だ此處有らず。汝、若し彼を得ば當に云何が治むべき」と。答へて言く「波婆伽梨、我を害すと雖も我れ其の邊に於て永く愼恨無し」と。婦、復、語りて言く「此の事信じ難し。相ひ困むこと是の如し。奈何が瞋らざる」と。迦良那伽梨、因つて自ら誓つて言く「若し我れ彼の波婆伽梨に於て微恨の大なること毛髮の如きものも有ること無し、我が言至誠にして虛欺ならざれば當に一目をして復、平復を得せしむべし」と。自ら誓已に訖り、眼悉く明淨なり。婦、其の夫を見るに兩目完淨なり、端正の威相未だ曾つて覩ざる所なり、喜び自ら勝ず。往きて其の父に白さく「寶鎧太子、迦良那伽梨を父王識るや不や」と。王、答へて言く「識る」と。女、即ち言ひて曰く「今、見むと欲するや不や」と。王、言く「今、何處に在るや」と。女言く「我が夫は則ち是れ其の人なり」と。王、之を笑ひて曰く「此の女癡狂なり、志亂れ性を失ふ。迦良那伽梨、海に入りて未だ還らず。盲乞兒を見て之を名づけ是

に遊び其の歌聲を識り、卽ち下りて試み看、太子を見るを得たり。鳴聲悲喜す、自ら勝ふる能はず。太子聞き識りて卽ち解きて書を取る。眼見る所無く看て讀むこと能はず。因つて紙と筆とを求め書を作り王に與へ、波婆伽梨、眼を刺すの委曲と更に歷りし所處と辛酸の諸事を說き、鴈の頸に繫く、鴈便ち飛び去れり。

　梨師跋王、時に一人の女有り端政殊妙にして世間に希有なり。王、甚だ愛重し其の意に違はず。時に女、王に辭し出でて園觀に遊ばむとす。王、便ち去るを聽す。女、園の中に至り太子迦良那伽梨を見る。頭亂れ面垢れ目見る所無く弊壞の衣を著け林樹の間に坐す。其の女、觀察し其の色狀を覩るに心情屬向きて其の側を離れず。便ち其の邊に坐し與に共に談し語る。食時、已に到り、王、人を遣はし喚び、女、還び人を遣はし王に白して曰く「願くば食を送りて來れ、此に食に就かむと欲す」と。卽ち、食を送り來る。女、太子に語るやう「我、汝と共に一處に坐して食せむと欲す」と。太子、答へて言く「我は是れ乞匃の人、汝は是れ王女なり、云何が共に食はむ。王、若し聞かば我を罪すること少からず」と。其の女、慇懃に太子に語りて言く「若し汝、肯ぜざれば我便ち食せず」と。是の如く數返し、逼迫りて已まず。便ち共に食す。言遂に欵篤し、意漸く近附き目めて去り離るゝこと無し。日、轉暮れむと欲す。王、人を遣はして女を喚び、女、還び人を遣はし往きて王に白して曰く「我、願くば此の守園の人の婦と爲らん、其餘の國王、太子を用ひず。今、我、專心慇懃是の如し。唯、願くば父の王よ、我が意に違する勿れ」と。使、王の所に到り具に其の事を道ふ。王、是を聞き已り情に違すること能はず。因つて自ら言つて曰く「此の事災異なり、是の女不肖にして、乃ち是の若きに至る。寶鎧大王の第一太子、迦良那伽梨來りて之を求索む。今、此の太子海に入りて未だ還らず。乃ち爲めに是乞兒の婦と作らむと欲す。人の名字を辱むること甚だ少なからずと爲す。我れ當に頭を覆ひ何處に藏著すべきや」と。是の語を作し已り復人を

す。手の力周からず驚かし遮ること能はず。時に園監㮈を擔ひて王に與ふ。其の中好き㮈を鸚鵡啄み壞す。王、見て瞋恚り、刑罰を加へむと欲す。園監、惶怖れて王に向つて自ら陳ぶるやう「家に人の力乏しきが故に爾らしむる耳、唯、寛恕せられ刑罰を原恕せよ、當に守人を索め更に爾らしめざるべし」と。王、便ち恕し置いて、其の罪を問はず。園監、脱することを得て行きて人を求索む。迦良那伽梨、道の邊に匃ふを見、其の形相を觀ずるに是れ忠人に似たり。卽ち、之に語りて曰く「汝、能く我が爲めに園を看守するや不や。汝、若し能くせば當に乏しき所を供すべし」と。太子、答へて言く「我が眼、見ゆる無し、云何が看守せん」と。園監語りて言く「汝、苟も看むと欲すれば復眼無しと雖も當に方便を作すべし。多くの細き繩を作り諸の樹の端に繫け諸の鈴物を以て連り繫け相ひ著け展轉して相ひ索き汝その一つの頭を捉へよ、若し聲有るを聞かば汝便ち繩を頓めよ、鸚鵡、驚怖れて住することを得るに緣無し」と。太子、語るを聞きて之に答へて言く「若し此の事有らば我能く之を爲さむ」と。共に相ひ可とし竟る。卽ち往きて守と爲る。

時に波婆伽梨、父の王の國に到る。王、獨り來るを怪み卽ち消息を問ふ。波婆伽梨、王に語りて言く「我曹、不遇なり、船重くして沈沒せり。迦良那伽梨、幷びに諸の賈人諸の珍寶を合して盡く大海に沒せり。我、力の勵みて浮び、趣きて全く濟ふを得たり」と。王及び夫人、是の語を聞き已り悶絕すること良久しく覺識する所無し。水を以て面に灑ぎ困みて乃ち還び蘇へる。宮閤[16]内外の諸王臣民此の事を聞く者悲悼せざるは莫し。王及び夫人、波婆伽梨に語るやう「迦梨太子、海に沒す。汝、何を以ての故に來るや、何ぞ幷び就きて大海の中に死せざるや」と。合土の人民痛惜せざるは無く朝夕哭戀すること父母を喪ふが如し。太子、宮に在り常に一鴈を愛す。王、其の鴈に告ぐるやう「太子、汝を養ふ、今大海に入り[17]淹沒して還らず。何ぞ往きて看ざるや。其の所在を知らば因つて書の音を作せ」と。以て鴈の項に繫く。鴈、卽ち高く翔り廣く行きて求め覓む。彼の園上

【一六】宮閤。宮殿。

【一七】淹沒。しづみ沒すこと。

基業有ること無し。唯、乳酪を仰ぎ賣りて用つて自ら濟ふのみ」と。太子、自ら念ふやう「我、困厄に遭ひ主人を勞煩はす。恒に我を供養せり、今は瘡差えたり、小らく能く行來し、當に更に宜しく四方に處所を求め易ふるべし」と。是の事を念じ已り因りて主人に語るやう「爾所の時節、共に相ひ勞煩せり。主人に感念す。恩、酬報し難し。我、前み行きて城中に到り展轉行乞して以て自ら供して活きむと欲す」と。時に牛舍の主、太子の言を聞き「其の舍內の妻子奴婢、餘の厭辭有りて太子の耳に聞えしを懼る。若し其れ爾らざれば何に緣て乃ち辭せむ」と。是の念を作し已り先に舍內に問ふやう「汝曹何の稱はざる事有りて貴客をして辭し舍內を辭し去るを索めむを欲せしむるや」と。皆言く「我曹、此の人に於て兄の如く弟の如し。何に緣りて相ひ捨てゝ去るを欲するやを知らず」と。時に舍主、太子に語りて言く「我相ひ承侍し未だ稱はざること有らず。我を捨てゝ轉じ餘の乞に行く可からず」と。時に太子、舍主の語を聞き其の慇懃なるを見て恒に其の意を護り、且つ小く停り住す。復、數時を經て便ち主人に語るやう「汝、我を供待し時に隨つて乏きこと無し。家內の一切我に接すること隆厚し、但、我が意中自ら轉じ行きて前の城中に到らむことを欲す。望むらくは一人を遣はし我を將ゐて共に往け」と。時に牧牛の人其の慇懃なるを見て其の意に違ひ其の心をして愁ひしむるを恐れ、躬自ら將ゐて護り、共に城中に至り已に彼の城に到る。共に別れ「當に還るべし」と。太子、語りて言く「汝、我を哀れまば一琴を買ひ索め我に與へよ、自ら娛まむ」と。時に牧牛の人尋いで買ひ索め與ふ。共に相ひ辭し謝し、是に於て別れ去る。爾の時、太子素り伎能多し。歌頌文辭極めて善く巧妙なり。卽ち[一五]陌宕に於て聲を激して頌を歌へ、琴を彈き以て和す。音、甚だ淸雅なり、城中の人民其の音を聞く者皆樂しみ聽き觀、厭足こと有ること無し。各、飮食を持ち競ひ來り之を與ふ。時に城中に五百の乞兒有り、皆來り依附す。共に賴りて飽足す。梨師跋王に一園監有り、王の爲めに果㮈の園を監守す。㮈の熟する者有り、鸚鵡來り食

【一五】陌宕。陌はまち、宕はほらあなのいへ。

を解き珠を以て之を示す。弟、珠を見るを得、因つて情に懷くやう「我が父の王を念ふに恩慈普からず。偏に我兄を愛す。我れその意に在らず。今、我二人、俱に來り海に入る。兄、異寶を得我獨り空しく歸る。是從り已後當に我を賤遇すべし、我、當に云何がすべき。其の臥寐に因つて陰に兄を殺し其の珠寶を取らむ。歸りて父王に語りて、其兄海に沒すと言はんに、是に於て乃ち當に冀はくば我を愛念すべしと」と。是の念を作し已り密に自ら計を懷き、其の兄に語りて言く「人村漸く近し、我曹兄弟俱に眠るべからず、宜しく更る坐して寶珠を守護り持つべし」と。兄卽ち之を然りとす。常に共に更り守る。「波婆伽梨、次で應に休眠すべし」と。地に臥し時を經て極めて常度を過す。然る後乃ち起つ。兄、復、次いで臥す。坐ること久しきに由る故に睡寐極めて著し。波婆伽梨、起ちて林中に入る。林中に樹有り、其の刺極めて利し。卽ち兩枚を取り、各長さ尺五なり、持つて兄の邊に來り、兄、眠ること甚だ重し。一手に刺を捉へ其の眼宕に當て刺して刺を沒せしめ寶を收めて去る。太子、苦痛にて、高聲に急を喚ぶ。「波婆伽梨、波婆伽梨、此の中賊有り」と。喚ぶこと數返を經るも應ふる者有ること無し。

爾の時、樹神太子に語りて言く「波婆伽梨は、是れ汝の賊なり、汝の眼を刺し竟り汝の珠を持ちて去れり」と。是に於て太子宛轉、辛苦し匍匐して行く。漸く小しく前進し〔一三〕梨師跋陀國に到り、澤の宕に至るに、五百頭の牛來りて其の邊に到る。一牛王有り太子を見て憐・敬兼ね懷き、舌を出して之を舐む。餘牛悉く集り、愕き住し共に視る。時に放牛の人來り前みて試みに看、乃ち太子の臥して地に在るを視、其の眼の中を見るに是長き刺有り、其の形相を觀て又凡に非るを知る。卽ち、爲めに刺を拔き將ゐて住處に至る。常に酥乳を以て其の瘡中に著け飲食供給し、時に隨つて瞻養す。復、數時を經て眼瘡漸く差ゆ。主人、承事し未だ曾つて懈廢せず。爾の時、太子、牧牛の人に問ふらく「汝、此の中に居る、何の〔一四〕基業有りや」と。牧牛人、答ふるやう「我れ此の中に在り、

【一三】梨師跋陀國。西名、(Li-śi-bar-do)。

【一四】基業。基礎となる事業。

と。導師、之に語るらく「此は是れ金山なり」と。金山の下に到り金沙の上に坐す。導師、言つて曰く「我、今、羸劣なり、命、必ず濟はれず」と。方面を示し已り道路に進止す。「汝、是より去れ、前めば當に城有るべし。其城、極めて妙なり。七寶 雜厠す。汝、城門に到り城門若し閉ぢなば其の城門の邊に金剛杵有り、汝、便ち杵を取り以て其の門を撞て、城中當に五百の天女有るべし、各寶珠を齎らす。來り用つて汝に奉らむ。更に一女有り、最特・尊勝にしてその持つ所の寶珠而も紺色なるもの有り旃陀摩尼と名づく。此れは如意珠なり。得れば便ち堅く持つ失脱せしむること勿れ、其の餘の與ふる者も亦之を取る可し。諸根を攝錄し復與に語ること勿れ、我、今、轉極り餘命少少なり。若し命終の後我が恩を念ひ識り我に對して哀を發さば此の沙中に埋めよ」と。導師、語り竟り氣絶し命終す。之に對して悲慟し之の爲めに葬埋す。其の教へし所に隨ひ前進して去り、七寶の城に到る。城門堅く閉づ。金剛杵の其の門邊に在るを見る。語の如く杵を取り以て其の門を撞つ。城門、便ち開いて、五百の天女、各寶珠を持ち來りて太子に奉る。最も前の一女、手に持つ所の珠、語の如く紺色なり。次第に隨ひ攝取す。裹みて衣角に在り。便ち旋りて還り來る。前の太子と別れて後、波婆伽梨、復衆人に語るやう「行來易からず。但、當に多く取るべし」と。衆人、寶を貪り之を取ること度を過ぐ。太子、還び到り其の船已に滿ちたり。船を放ちて還り來る。船、便ち沈沒す。諸の賈人の輩 乍沈み乍浮ぶ。太子、已に如意珠有り、故に身沒溺せず。波婆伽梨、遙に太子を喚び「當に救濟せらるべし、便ち捐棄すること勿れ」と。太子、語を聞き卽ち牽きて共に浮ぶ。力め勵みて相ひ挽く。便ち海を出づることを得たり。海を出づるの後弟、兄に語りて言く「我曹兄弟、父母に辭して來り大海に入る。望み空に歸せざるに際し諧はざるに遇ふて財寶を喪失す。單身空しく到るは甚だ恥とす可きなり」と。迦良那伽梨、天性、忠直にして卽ち弟に語りて言く「我、故に寶を得たり」と。弟、兄に語りて言く「當に用て示されよ」と。卽ち衣の裹

【三】雜厠。まじること。

と。王、此の語を聞きて自ら念言ふやう「令弟、共に嶮厄の中に往く、儻し能く濟ふは要ず他人に勝らむ」と。是の念を作し已り卽ち可とし去るを聽す。爾の時、太子三千兩金を出し千兩を以て糧を辦じ、千兩にて船を辦じ、復千兩を以て諸の須ふる所を辦ぜり、嚴辦已に訖れり、是に於て發せむと欲す。王及び夫人、諸王の臣民啼哭し之を送り路次に別る。是に於て太子諸の同伴と與に道を進みて去る。海邊に到り其の船を牢治し七重に有らしむ。風の時節を候ひ水中に推著け、七つの大索を以て海邊に繫ぐ。鈴を搖がし令を唱へ衆人に語りて言く「汝等皆海中の衆難を聽くや、水浪・迴波・惡龍・羅刹・黑風の廻り覆すこと、海色の山、摩竭大魚、是の如き餘難其の數猶多し、前後海に入り吉にして還る者少し、若し狐疑する者は此に於て還る可し、誰か意を堅くして身命を分捨し父母を顧みず妻子を戀はざるもの當に共に海に入るべし。寶所に至り若し珍寶を得て安穩に還び歸らば子孫七世用つて盡す可からず」と。是の令を作し已り便ち一索を斷ず。日日是の如くして七日に至る。令を唱へ已に訖り、第七索を斷ず。風を望みて帆を擧ぐ。船疾きこと箭の如し。徑に諸人と與に彼寶の渚に到る。太子、聰明にして世典に通達し寶の色相を識る。悉く其の價を知り諸の衆人に諸寶の好醜を示す。衆賈に勅語し隨意に取らしむ。重ねて衆賈に告ぐるやう「多少は中を得せしめよ、多く取らば船重く沈沒の憂有り、少しく取らば行を勞して其の苦に補はず」と。勅誡し已に訖り。

獨り導師と與に別れて小船に乗り衆賈と別る。轉復前進す。導師問ふて言く「此の前に白色の山有るべし。汝、見ると爲すや不や」と。太子言く「見る」と。導師、語りて曰く「此は是れ銀山なり」と。轉復前行す。導師、復、問ふらく「當に紺色の山有るべし、汝、見るや未耶」と。太子、答へて言ヽ「我、已に之を見る」と。導師、語りて言く「是は紺琉璃の山なり」と。轉更に前進す。復、太子に問ふらく「此の中黃色の山有るべし。汝、見ると爲すや未や」と。太子、言く「見る」

す成辦す。迴轉すべからず。若し海に入らしむるも還る理有り。今、其の意に違えば交に人の望を斷たむ。就いて當に之を聽し、故に憂を後に在らしむべし」と。王、夫人と與に相ひ可とし已訖る。倶に共に前に來り各一つの手を捉へ涕涙交流し、因つて之に語りて言く「汝の海に入るを聽す、起ちて還び食す可し」と。時に太子、王の語を聞き已り歡喜して起ち父母を曉諭するやう「我、海に入ると雖も久しからずして當に還るべし。唯、願くば大いに我を憂念すること莫れ」と。爲めに種種の餚饍・飲食を辦じ已訖りて外に出で、廣く行きて令を宣べぬ。「迦良那伽梨今、海に入らむと欲す、誰か往かむと欲する者ぞ、當に共に倶に進むべし」と。爾の時、國中五百の賈客有り、咸皆來集し悉く言く「去かむと欲す」と。是の時、國中に盲ひたる導師有り、前より已に曾つて數返海に入る。太子之を聞き、即ち往きて邊に到り共に向つて慇懃に嘉言し求め曉す。「汝、當に我と與に共に大海に入り我の行來・利害・去就を示すべし」と。導師、答へて言く「我、既に年老いたり、又盲て見ゆる無し、自ら去かむと欲すと雖も私情甚だ難し、王、太子を愛すること隆にして倍常と異り須臾に目を離すも悒遲を懷く有り、今、我と共に大海に入ると聞き、儻し復拒むを見れば我を咎むこと少からざらむ」と。時に、太子是の語を聞き已り即便ち宮に還り自ら父王に白さく「今、此の國中に盲ひたる導師有り、前に已に數返、曾つて大海に到る。願くば王よ、勅し曉して我と共に去かしめよ」と。王、是の語を聞き自ら共の所に往き導師に語りて言く「我が此の太子の志海に入らむと欲す、種々諫め語るも意堅く迴さず、勞を忍びて共に往け」と。爾の時、導師、王の是の語を聞き即ち王に白して言く「恨むらくば我年老ひたり、盲て見る所無し、大王の勅する所豈敢て違ふこと有らむ」と。王、是の語を得て即ち自ら宮に還る。時に、太子、即ち導師と共に發するの日を論定す。還び王の所に到る。王、左右に問ふやう「誰か我を敬愛するものぞ。太子と與に共に往きて寶を採る可し」と。波婆伽梨、即ち王に白して言さく「願くば兒と倶に共に大海を渉らむ」

りて言く「田畝を墾治し寒暑を避けず廣く五穀を種え多財を得可し」と。一人有りて言く「多く六畜を養ひ時に隨つて將ゐ護り時節に蕃息せば多財を得可し」と。一人有りて言く「唯、命を顧ず能く大海に入り龍王の宮に至り如意珠を求めよ、斯事成辦せば最も多財を得む」と。時に太子、衆人の語るを聞きて自ら念言ふやう「估ひに行くこと、田を種うること、六畜を畜養すること、且に我れに宜に非ず、利を得ること幾も無し、唯、大海に入り龍王の宮に詣ること此れ我が意に入れり、當に是の事を勤求むべし」と。是の念を作し已り、往きて父王に白さく「我、海に入り珍寶を求索め衆生に給施せむと欲す。之を用ふるも盡くること無らむ。唯、願くば父母よ、當に聽許せらるべし」と。王及び夫人太子の言を聞き甚だ憂灼を懷き太子に問ふて曰く「汝、何の意有りて海に入らむと欲するや、苟も布施して汝の本志を成ぜむと欲せば我が家の所有藏内の餘殘盡く汝に與ふべし、以用つて布施せよ、何の爲めに自ら棄てゝ海に入らむと欲すと云ふや、又聞く、海中には諸の劇難多しと。黑風・羅刹・水浪・迴波・摩竭大魚・水色の山斯の如き衆難ありて安全なる者少し。百伴共に往き時に一の還る有り、汝、今、何を急ぎ身を危險に沒せんとするや、我及び汝の母憂極らざる無し」と。諸王、臣民皆灼惕の懼を懷き「此の意を念捨し更に紛紜すること勿れ」と。是に於て太子王の此の語を聞くも心大計に在り志拔濟に存す。王、留遮すと雖も意傾動せず。規として身命を盡くし其の事を成辦せむと身を地に布き腹を王の前に拍ち、因つて王に白して言さく「唯、願くば哀を垂れ子の本心を遂げしめよ、若し必ず拒逆し聽許せられずむば身を此の地に伏し終に起ざるなり」と。王、及び夫人内外一切、太子の意迴轉すべからず、自ら誓つて死を畢るまで身を地に伏するを見て皆共に喩を解き曉し謝して起たしめんとするも、其の言初の如くにして志を執りて變ぜず。一日より二日に至り乃ち六日に至る。王及び夫人自ら共に議りて言く「太子、食はざること已に六日を經たり、明七日に到らば命必ず全からず。此の兒前後意にて作す所を欲せば要ず必

く。人の須ゆる所に隨ひ一切悉く給す。爾の時、諸國の沙門・婆羅門・貧窮・孤老・癃殘の疾病、强弱相ひ扶け次第にして至る。衣を須ふるものには衣を與へ食を須ふるものには食を與ふ。金・銀・寶物意に恣にして與ふ。爾の時、人民展轉相ひ語り閻浮提に遍く、皆悉く來り集り王の寶藏を用ふ。三分して二に向ふ。時に典藏の臣、入りて王に白して言く「大王は、五百の小國を典領す。諸國に使命し當に往返有るべし、事、寶物を須ふ還相ひ報じ遣れ、太子布施して王の內藏を用ひ三分の物其の二を用ふに向ふと。王、之を思ふ可し、後悔を見ること勿れ」と。王、是の語を聞きて臣に告げて言く「我、此の太子の意布施を好むこと猛盛なり。迴轉すべからず、若し當に禁遮し儻其の意に違はゞ其をして憂惱せしむべし、當に云何がすべき耶、恣に其の意を分ち違失を得ること莫れ」と。是の如く數時にして太子布施し殘す所の藏物三分二を用ふ。臣、復、王に白さく「前に殘す所の物日日布施し三分の中已に更に二を用ふ。餘殘少し許なり、當に信を遣り俟つべし、盡く用ふ可からず。願くば王よ熟思せよ、後に咎を見ること莫れ」と。王、便ち思惟して臣に告げて曰く「吾、此の子を愛す。特に復餘に倍す。顯露して其の意に違逆するに忍びず、若し來り寶を索めなば小く避けて行來せよ。若し其れ急に索めなば且に復之に與へ、乍に得乍に得ず日月を延ばす可し」と。爾の時、藏臣、王の敎を得已る。太子、後日來りて寶を索むるの時其の臣緣に託して餘處に行來す。或時は索めて得、或時は得ず。一一其の須ゆる所に稱ふこと能はず。太子、之を覺りて自ら念言ふやう「今、此の藏臣何の力能有りて敢て我に違失し相ひ承け用ひざるや、將に是れ王の意の故に爾しむるのみ、又人の子の禮として父母の庫藏を竭し用ひ其を盡せしむるべからざるなり、今、此の藏中に殘る所幾も無し、我、當に云何が財寶を得て一切を給施し乏きこと有る無からしむべき」と。是の念を作し已り、卽ち諸人に問ふやう「今、此の世間、何の事業を作さば多財を得て意に稱ひ之を用ふ可きや」と。一人有りて言く「劇難を避けず遠く出で販賣し多財を得可し」と。一人有

各答へて言く「我、必ずしも樂しまず、祖父、已來此を以て業と爲す。若し此の事を捨てなば以て自ら濟ふ無し」と。太子、此を聞き長歎して去る。轉前みて田に到り、諸の耕す者を見る。地を墾し蟲出づ。蝦蟇拾ひて呑む。復、蛇有り蝦蟇を呑み食ふ、孔雀飛び來りて其の蛇を啄食するを見る。太子、人に問ふやう「此れは何等をか作す」と。耕す者、答へて言く「此は是れ我が業なり、中に於て種を下す。後、穀を得べし、以て自ら食を供し并びに王家に輸る」と。太子、歎じて曰く「人、飲食に由り衆生を殺害す。身を役し力を役す。辛苦乃し爾り」と。轉復前み行き、諸の獵師の群鳥に趣向ひ、弓を挽き射むと欲するを見る。復、網を安き張り施し地に在り、諸の禽獸を見るに其の中に墮在し張に驚き鳴き吼え、脱すること能はざるを見る。太子、問ふて言く「皆何等をか作す」と。咸、皆答へて言く「諸の禽獸を捕へ以て自ら供し濟ふなり」と。太子、此を聞き深く歎じて捨て去り、河、池の邊に到り、捕魚師の網を張り魚を捕へ狼籍地に在り、跳踉・申縮し死者無數たるを見る。太子、復、問ふ。皆各答へて言く「我、此の魚を仰ぎ用つて衣食を供す」と。太子、長歎し群生を愍哀し、「衣食の爲めの故に乃ち當に是の如し。衆生を殺害し身口に供し俟つ。殃罪日に滋し、後の報如何」と。便ち宮に廻り還り憂念樂しまず。往きて父王に白さく「願くば一願を賜へよ」と。王、之に答へて曰く「汝の欲する所を恣にし相ひ違逆せず」と。太子、王に白さく「出行遊觀し彼の群品を視るに、衣食の爲めの故に欺誑・殺害し罪を積むこと日に増す。意甚だ悼愍す。供濟を得むと欲す。願くば王よ、我に王の藏を用ひ、自ら恣に布施し民の乏しき所に充つるを聽し給へ」と。王、太子に於て倍愛念を加へ其の語る所を聞き意に違ふこと能はず。即便ち之を可とす。是に於て太子即時宣下し諸の人民に告ぐるやう「迦良那伽梨太子、窮困・乏短の者に布施し一切を施し給す。皆悉く來り取れ。若し金銀・寶物・衣服・飲食及び諸の須ゆる所を須ひむと欲すること有らば當に之を施與すべし」と。即ち王の藏を開き諸の寶物を出し諸の城門に著け及び市中に置

改異し、人と爲り、慈仁、愚を矜み智を愛す。好みて施惠を修め、意を等しくし護養す」と。相師、此れを聞き讃じて言く「善き哉、此は是れ兒の志にして、情を母に寄するなり」と。便ち爲めに字を立て[七]迦良那伽梨と名づく、(晋に善事と言ふ)。其の第二夫人を[八]弗巴と曰ふ。第二仙人亦復命終して第二夫人の腹の中に生る。日月足ち滿ち便ち男兒を生む。形體・狀貌他と殊異無し。復、相師を召して之を瞻相す。相師、披觀して之に語りて言く「是れ常人耳、福德、智能自ら任ずるに足ると爲す」と。王、復之に勅し其の爲めに字を立つ。相師、復、言く「何の異事か有りしや」と、王、相師に語るやう「此の太子の母素性忠良、人の爲めに慈順にして、樂しみて人の善を宣べしが、懷妊已來返つて更に惡を樂しみ、賢能を嫉妬し善を見て喜ばず」と。相師、復言く「此れは亦兒の志にして、之を母に寄する故に然らしむるのみ」と。因つて卽ち字を立てゝ[九]波婆伽梨と爲す。(晋に惡事と言ふ。) 其の王、爾の時、心を注ぎ迦良那伽梨を愛念し其の意を失はず。卽ち勅して爲めに三時の殿を起す。冬時溫殿に居り春秋中殿に居り夏時涼殿に居る。伎樂を安置して之を娛樂す。太子漸く大なり、聰辯殊異なり、諸の世典を學び十八部の經を誦持通利す。其の義理を善くし後辭して出遊す。王、卽ち之を聽す。勅して[一〇]道陌を治し不淨を除去せしむ。大白象の金銀校餝せるに乘り、千乘萬騎前後に導從す。街の道陌の中一切の人民道の兩邊を挾む。諸の樓閣の上觀る者無數なり。皆言く「太子は熟梵天に似たり、威相、姿貌人中に希有なり」と。

爾の時、太子、諸の乞兒の身體羸瘦し衣被弊れ壞れ、左に破器を捉り右に折れたる杖を持し卑言にて哀を求め、人より乞匃するを見、太子、問ふて曰く「何を以て乃し爾るや」と。群臣、答へて言く「此くの如きの人の輩は或は父母無く孤窮、單獨にして依仰する所無く、[一一]癰疾・狂病役を作す能はず、一錢の儲無し。身口切る所是れ爾ら使むる耳」と。太子、慈愍の心深く增悼む。轉復前行して、諸の屠兒の畜生を殺害し稍割き稱り賣るを見る。太子問ふて言く「何を以て此を作す」と。尋いで

【七】迦良那伽梨 (Kalyāna-kāri)。
【八】弗巴。(Puṣpa)。西本、名を出さず。
【九】波婆伽梨。(Pāpakāri) 西名、(Sdig-don)とす。
【一〇】道陌。みち。
【一一】癰疾。腰曲りてせむしの如くなれる病。

して自ら念言ふやう「我、今、子無し。旦夕に崩亡せば國に紹繼無く天下必ず亂れむ。所以は何ぞ。五百の諸臣相ひ賓伏せず。便ち當に力諍ふべし、强弱相ひ陵し辜無きを枉殺す。國を亡し民を喪ふ。此に由らざるは莫し」と。是の事を念じ已り益〻増、憒惱せり。時に天神有り、王の至意を知り王の夢の中に於て王に語りて言く「城外の林の中に二仙士有り、其の第一の仙は身に金色有り、福德・聰辯・逮及ぶ可からず。汝、苟くも子を須ひなば往きて求請ふべし。「必ず當に意を迴らし王家に來生すべし」と。王、尋いで驚き悟り差喜色有り、卽ち、勅して駕乘し單數人を將ゐ遍く至り推し覓め、便ち之に見ゆるを得たり。卽ち向に哀を求め種々自ら說くやう「國に繼嗣無し。憂深く慮重く大仙を貪屈す。我が家に來生し國嗣を紹繼し我が憂患を去れ、若し恥ずむば唯[四]降顧を垂れよ」と。爾の時、仙人王の殷勤を見て拒逆するに忍びず。卽便ち之を可とす。第二の仙人復王に語りて言く「我、亦、當に往きて王家に生るべし」と。王、大いに歡喜し便ち辭して宮に還る。數時を經歷て金色仙人卽ち命終を取る。王の大夫人名を[五]蘇摩と曰ふ。卽ち娠有りと覺ゆ。聰明の女人能く此の智を得、懷妊する所を知り男女を分別す。便ち、自ら說きて言く「我が懷妊する所必ず當に是れ男なるべし」と。王及び宮內、此の語を聞き已り欣悅量り無し、王、宮內の夫人、婇女に勅し盡く共に承給し其の意を稱悅す。床褥・飮食極めて細軟ならしめ將ゐて進止を護り危險に臨ます。十月已に滿ち其の大夫人便ち男兒を生む。端正絕異なり。身は紫金色、其の髮は紺青人相具足す。王、及び內外之を觀て厭く無し。因つて相師を召し之を占相せしむ。相師、尋いで詣り上下觀相、。歡喜踊躍して王に白して言く「此の兒の相好、人中有り難し聰明・福德逮及ぶべからず」と。王、聞き遂に喜び復相師に告ぐるやう「爲に字を立つべし」と。相師、王に問ふやう「今、此の太子胎を受けて已來何の變異有りや」と。王、卽ち答へて言く「此の太子の母[六]素來妬惡なり、人の過を樂しみ、妄に姦非を擧ぐ。他人の善を見て爲めに心喜ばず、然るに、懷妊已來志性

【四】降顧。したがひかへりみること。

【五】蔱摩。西本、名を出さず。

【六】素。大正本「索」に作るは誤植か。

記を授け給ふ「未來の世に於て阿僧祇を滿し百劫の中當に作佛を得て號して淨身と曰ふべし、十號具足し化する所の衆生限量すべからず」と。

爾の時、阿難、及び諸の四衆佛の說き給ふ所を聞き歡喜量り無し。咸、是の言を作さく「如來出世し利益し給ふ所大なり、是の如きの少施も報を獲ること彌多し」と。佛、阿難に告げ給ふやう「善き哉、善き哉、汝の言ふ所の如し」と。因つて衆會の爲めに廣く妙法を說き給へり。其の法を聞く者道迹を得、往來還らずして應眞に逮る者大道意を發すもの有り、各各歡喜し頂受し奉行せり。

四十二、善事太子、海に入るの品[一]　第三十七

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閱祇耆闍崛山中に大比丘衆と與に在し圍遶せられ說法し給へり。爾の時、賢者、阿難、提婆達多を見るに如來の所に於て常に嫉妬を懷く。飲んで醉えし象を驅り、山を推して佛を鎭め、種々に方便し危害を得むと欲す。然れども佛の慈心常に矜愍有り、羅睺羅、及び提婆達多に於て之を視ること一に等しく差別有る無し。賢者、阿難、其の是の如きを覩て常に怨恨を懷く。思惟して意に在り座より起つて偏に右肩を袒ぎ長跪し合掌して是の事を歎じて說く、佛、阿難に告げ給ふやう「提婆達多は但、今日のみ惡を我に興すにあらず。宿世の時も亦我を傷害せり。然れども我、彼に於て常に之を慈念せり」と。賢者、阿難、卽ち佛に白して言さく「不審なり、宿世、提婆達多亦傷害を爲し、爾の時慈愍し給ふと、其の事云何。願くば具に說示し給へ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「過去久遠、無數無量不可思議阿僧祇劫に此の閻浮提に一國王有り、名を勒那跋彌[二]と曰ふ。(晋に寶鎧と言ふ)。五百の小國王を領し五百の夫人・婇女有り、皆子有ること無し。王、便ち、諸天・日月・山海・樹神に禱祠る。年を經、紀[三]を經て子息を獲ず。王、大いに愁憂

【一】善事太子入海品。西本、No. 33. (Rgyal-bu dge-don gyi leḥu)(太子善事品)とあり。

【二】勒那跋彌。西名、(Rin-po-che go-cha) (Ratnavar-man)。

【三】紀。とし。

卷の第九

四十一、[一]淨居天、佛を請じ洗ふの品　第三十六

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、首陀會天閻浮提に下り世尊の所に至り「佛及び僧を請じ洗浴供養せむ」と請ふ。世尊、默然として已に爲めに許可し給へり。卽ち飲食を設け幷に洗具を辦ぜず。溫室に水を燃め調和し體に適す。酥油・浣草皆悉く備りて有り、施設、已に辦ぜり。世尊に白して曰く「食具已に訖れり。唯、聖よ、時を知れよ」と。是に於て世尊及び諸の比丘其の供を納受す。盡く其に洗浴し、幷に飲食を享く。其の食、甘美なり、世の希有とする所なり、食竟りて澡漱し各本の生所に還る。是の時、阿難、長跪合掌して世尊に白して曰く「此の天、往昔何の功德を作して形體妙好にして咸相奇特、光明顯赫として大寶山の如きや。唯、願くば世尊よ、其の事を敷演し給へ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「諦かに聽き善く持てよ、吾、當に解說すべし」と。『乃往過去は毘婆尸佛の時此の天、彼の世に貧家の子と爲り恒に傭作を行ひ、以つて身口に供ふ。毘婆尸佛より僧を浴せしむるの德を聞き情中欣然たり。供養を設けむと思ひ便ち勤作し務めて少錢と穀とを得たり。用つて洗具と幷びに飲食とを設け佛と衆僧とを請し、而して已に盡く奉れり。此の福行に由り壽終るの後首陀會天に生れ此の光明有り』と。

佛、阿難に告げ給ふやう「而も此の天は但今日のみ佛及び僧を請ずるに非ず。尸棄佛の時も亦世間に來り世尊と及び衆僧を供養せり。乃至迦葉佛の時も亦復是の如し」と。佛、阿難に告げ給ふやう「此の天は但、七佛をのみ承供せしに非ず。當來の世に於て賢劫の中千佛興出し給ふ。亦當に一々の佛と及び僧を洗ひ、猶、今日の如く差別有ること無かるべし」と。爾の時、世尊、因つて天に

【一】淨居天請佛洗緣。西本、缺。

【二】首陀會天。五淨居天のこと。

乃至今日素より自ら時を知れり。阿難、此の三願を得むと欲するは其の意に隨從するなり」と。阿難、此れを聞き歡喜踊躍し、座處從り起ち長跪して佛に白さく「形壽を盡くるまで佛の侍者と爲るべし」と。時に諸の會する者佛の說き給ふ所を聞き大恩を感念し專心剋勵し四諦の諸法の出要を思惟し須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り、辟支佛の善根因緣を種うる者有り、無上正眞道意を發す者有り、不退地に住するを得る者有り、咸、共に歡喜し頂戴奉行せり。

坦の地に至り、卽ち、其の珠を持ち高幢の頭に著け、手に香鑪を執り四方に願を求む。「閻浮提の人貧窮にして辛苦し濟給を得て乏しきこと有ること無からしめむと欲す。若し當に實に是れ旃陀摩尼ならば便ち當に次第に衆の須ゆる所を雨らすべし」と。願を求むること已に訖り、四方の陰雲[27]卽時風を起し諸の不淨・瑕穢・糞掃を吹き皆悉く除き去り、次に微水を雨らし以て塵土を掩ひ、次に飲食の百味の上美を雨らし、次いで五穀を雨らし次いで衣服を雨らし、次いで七寶の種々の奇珍を雨らす、閻浮提の內衆寶積滿す。人民の類自ら恣に取る。上妙の衣食盈ち溢れて餘り有り、諸の珍寶を視ること猶瓦石の如し。爾の時、菩薩、民の充足を觀て卽ち臣吏を四遠に遣はし閻浮提內に告下し咸聞知せしむ。「汝等群民、先に窮乏し衣食及び諸の財寶を求むるに由り更に相ひ欺誑し殺害意を極む。利を見て義を忘る。罪福を惟はず命終して皆三塗の中に墮す。冥より冥に入り罪を受くること多劫なり。常に相ひ悲憐し相ひ濟ふに由無し。故に形苦を忘れ嶮を渉り海に入り此の寶珠を得たり。來り用つて相ひ救へり。汝等、既に已に乏短無し。念ふに自ら剋勵し十善を勤修め身・口・意を攝めよ、慈仁・孝順精進に意を御し放逸を懷く勿れ種々方便し廣く勅み善を奉ぜよ」と。因つて文書を作り諸の王臣に告げ、其の法誨を騰げ咸聞知せしむ。「更に相ひ勸督し妄りに非を爲す勿れ」と。爾の時、一切の閻浮提の內既に大恩の慈澤・霑潤を蒙る。各何の方を思ふも仰いで至德に酬ひ又優敎を蒙り、勅して善を修せしめ、咸、皆義を慕ひ專ら慈敎を習ふ。身・口・意を制し妄りに非を犯さず。命終の後皆天に生ずることを得たり。

「是の如く舍利弗よ、爾の時の父婆羅門尼拘樓陀を知らむと欲せば今現に我が父[28]浄飯王是れなり、爾の時の母とは今、現に我が母[29]摩訶摩耶是れなり。時の大施とは今、我身是れなり。銀城中の龍とは今の舍利弗是れなり、琉璃城中の龍とは今の[30]目犍連是れなり、金城中の龍とは今の阿難是れなり、時の海神とは今の[31]離越是れなり。阿難、龍王と爲るの時我に奉事し善く時宜を知れり、

【二七】　陰雲。あまぐも。

【二八】　淨飯王。梵語、(Śuddhodana)、西名、(Zas-gtsaṅ-ma)。

【二九】　摩訶摩耶。西名、(Lha-madses)とあり、翻譯名義集には(Māyā-devī)を西名(Lha-mo sgyu-ḥphrul ma)と出す。

【三〇】　目連。神通第一、(Man-dgal-gyi bu)。

【三一】　離越。西名、(Ma-ḥgṅgu-pa Revata)、比丘のこと。

て未曾有と歎ず。時に迦毘梨、其の女を莊嚴し、若干種の寶を以て其の身を挍飾し躬らの手に自ら金寶の澡罐を捉り先に自ら手を洗ひ後女の臂を牽き菩薩に授與く。菩薩、爲めに受けぬ。迦毘梨、歡喜し五百の伎女を嚴にし才能の工の伎を爲す者を擇取り、五百の白象に衆寶の莊挍を具へ極めて奇異ならしめ、用つて其の女を送る。菩薩、勅して伴ひ駕乘して路に卽けり。城中の大小送りて道次に到り衆伎樂を作せり。導き從ひて國に還る。

大施の父母、兒と別れてより憂結迷憒し啼哭し哀み過ぎたり。其の目倶に冥く盲て見る所無し。兒、還び國に到り禮拜し問訊す。父母聲を聞き手を以て摩り捫づ。爾の時、審かに大施の國に歸るを知り悲喜交代る。其の子を窮責するやう「汝、實に[二三]無狀なり。我を捨てゝ海に入る。我曹を困苦し微命[二四]趣存するのみ、汝、大海の中何等の物を得たるや」と。菩薩、珠を出し以て父母に授く。父母、手に捉りて自ら言ひて曰く「今、我が藏の中、斯石に比する如きもの亦少からざるなり。何ぞ辛苦し方に乃ち此を得たるや」と。菩薩、珠を取り父母の眼を指す。目欻に明淨、風の雲を除くが如し。既に還び視ることを得たり。心、遂に[二五]欣豫び此の珠德を感ず。嘆じて言く「甚だ奇なり、汝、辛苦すと雖も功唐く捐てず」と。菩薩、復、其の珠を捉りて從つて願を求むるやう、「若し是れ旃陀摩尼ならば、我父母の身の下に自然に七寶の奇妙珍異の床座有り上に嚴淨の七寶の大蓋有らしめよ」と。言、訖り尋いで成ず。一切皆喜ぶ。菩薩、復更に珠を捉り願を求むるやう「我が父母及び王の臣民一切の諸藏皆悉く盈滿せしめよ」と。卽ち、其の珠を以て四向に歷き訖る。語の如く悉く滿ち驚喜せざるは莫し。卽時、人を遣はして八千里を象に乘り閻浮提の一切の人民に告ぐらく「摩訶閻迦樊、海中より吉に還り如意珠を得たり。其の德殊異なり、却後七日其の珠をして一切の珍寶衣食を雨らしむべし、人の須ゆる所に隨ひ自ら恣に取れ、皆各齋戒し[二六]儲偫し以て待てよ」と。下に告げ遍く已る。七日の頭に到り大施菩薩、其の身を沐浴し新しき淨衣を著け平

【二三】無狀。善行なきこと。
【二四】趣存。ちぢまり存すること。
【二五】欣豫。よろこぶこと。
【二六】儲偫。諸物を蓄積し待つこと、たくはふること。

人至心にして作す所有らむと欲せば事辦ぜざる無し。我れ此の寶を得るは當に用つて一切の群生を饒益し此の功德を以用つて佛道を求めんとするなり。我が心、懈らずむば何を以て能はざらむ」と。是の時、[三一]首陀會天、遙に菩薩の一身一意獨り勤勞を執り用つて充濟して一切の我曹を安樂ならしめむと欲するを見、云何が往きて佐助せざらむやと。展轉相ひ語り來りて其の所に至る。菩薩、器を下す。一切諸天盡く天衣を以て水中に淹す。菩薩、器を出す。諸天衣を擧げ餘處に棄著す。一反海を抒めば四十里を減ず。二反之を抒めば八十里を減ず。三反之を抒めば百二十里を減ず。其の龍、惶怖し來りて其の所に到り語りて言く「止めよ、止めよ、更に海を抒むこと莫れ」と。菩薩、尋いで休む。龍來り問ふて言く「汝、此の寶を求め用つて何等をか作すや」と。菩薩、答へて言く「用つて一切の衆生を給濟せむと欲す」と。龍復、問ふて言く「汝の言の如くむば我曹の海中の衆生甚だ多し。何を以て與へず、必ず得て去らむと欲するや」と。菩薩、答へて言く「海中の類も亦是れ衆生なり、然れども劇苦無し。閻浮提の人民の類錢財の爲めの故に殺害し欺誑し、十不善を作し死して三塗に墮す。我、人類を以て法化を解くが故に來りて寶を索む。先に乏しき所を充し後十善を以て之を勸誨す」と。龍、其の語を聞き珠を出して之を還す。爾の時、海神其の精進、强力の所作を見て卽ち誓を作して言く「汝、今、是の如く精進にして休まずむば必ず佛道を成ぜむ。我、願くば爲めに精進の弟子と作らむ」と。

菩薩、珠を得て復更に飛び去り到りて便ち先づ海に入りし同伴の賈客を問ひ、卽ち下りて地に在り。同伴、之を見て驚喜量り無し。皆共に歎じて言く「甚だ奇なり、甚だ特なり」と。轉復前行して放鉢城に到る。迦毘梨婆羅門、菩薩海中より吉に還るを聞き歡喜踊躍し、出でゝ迎へ問訊し幷びに同伴を請ず。爲めに客會を設け種々の餚饍の飲食を辦具す。食し訖り行路の[三二]恤耗を談叙す。是の時、菩薩、其の寶珠を持ち其の家を指麾するに婆羅門の家内の諸藏悉く滿つ。會する者此を視

【三一】首陀會天。梵語、(Śuddhāvāsa deva)、五淨居天のこと。

【三二】恤耗。うれひむなしきこと。

し意を專にし聽受し朝夕問訊し時節を失はず。時に須ゆる所に隨つて龍自ら裁量す。諸龍、夜叉、來りて現れむことを欲求す。進む可きと退く可きと自ら限度を立つ。奉事すること四月なり。善く時宜を知る。四月已に竟る。菩薩、辭去せんとす。爾の時、其の龍卽ち髻の中の如意寶珠を解き用つて之を奉上り因つて誓願を立つるやう「大士の弘誓慈心曠く濟ふ。彼の群生を悲しみ勤勞を憚からず。必ず能く成佛し。[一九]荼蓼を拔濟せむ。願くば侍者と作り總じて弟子を持せむ」と。菩薩、之を許し、復問ふて曰く「施す可き所の珠の力能何如」と。龍王、答へて言く「此の珠は能く八千由旬の七寶須ふる所を雨らす」と。菩薩、歡喜して自ら念言ふやう「閻浮提の地七千由旬なり、此の珠の德我が望む所に副ふ。前後得る所凡そ三珠有り」と。衣の角に繫在し卽ち起ちて城を出づ。諸龍大小送りて城外に到り各悲戀を懷き遂に共に別れ去る。菩薩、前に到り珠を捉り願を求むるやう「若し今、寶に是れ梅陀摩尼ならば、當に我身をして能く虛空を飛ばしむべし」と。願を求め已訖り、卽ち其の身を擧げ便ち能く飛翔し、海の外に出で已に海の難を渡る。小眠りて休息す。是の時海中の諸龍の輩有り、自ら共に議りて言く「我曹の海中唯此の三珠のみ、其の德甚だ大なり、[二〇]般比有ること難し、此人皆能く索め得て持ち去る。此の寶を惜む可し。當に還び擣取すべし」と。言議已に竟り密に解きて持ち去る。菩薩、眠りより覺め珠を看るに在らず。卽ち自ら思惟ふやう、「此の中に人無し、必ず是れ海の龍我が寶を持ち去れるなり。我、此の珠の爲めに遐なる嶮を經渉り今國に還り我が願ふ所を滿すに垂むとす。我が珠を取ると雖も吾れ終に放たず。會當に力を盡し此の海水を抒み心に誓ひ志を剋し命を此に畢るべし。若し珠を得ずむば終に空しく歸らず。思惟已に定り卽ち海邊に行き一龜甲を得、兩手に捉り持し方に海を抒まむと欲す。海神意を知り來り之に問ふて曰く「海水深廣三百三十六萬里なり、正に、一切の人民の類をして盡く來り共に抒ましむるも減らしむること能はず。況んや汝は一身而も之を辦ぜむと欲するや」と。菩薩、答へて言く「若

【一九】荼蓼。荼は穢草、蓼たで辛菜衆生を喩へしもの、宋・元・明本塗炭。

【二〇】般比。擬比、比すべきもの。

復、此れに問ふやう「與ふ所の寶珠の力能云何」と。龍、卽ち答へて言く「此の珠は能く四千由旬の一切の須ゆる所を雨らす」と。菩薩、自ら念ふやう「此の珠、轉勝れたり、復、殊妙と雖も未だ我が意に稱はず。」と。諸龍の大小送りて門外に出づ。各戀恨を懷く。

是に於て別れて後轉更に前進し一つの金城を見る。其の色晃晃として甚だ妙好と爲す。菩薩、往趣むきて、其の城外を見るに亦七重の塹あり、諸の塹の中に亦毒蛇滿つ。菩薩、自ら念ふやう「此の諸の毒蛇は亦前身恚・憎・妬を習ふに由り怒害盛なるが故に此の毒形を受く」と。端坐して慈に入り極めて愛念を加ふ。慈心已に至り蛇の毒皆除けり、便ち前みて登り躡み、上を蹈みて過ぐ。城門に到り亦二つの龍の身を以て城を纒ひ頭を門の閾に交ゆるを見る。已に菩薩を見て頭を仰ぎ愕いて視る。菩薩、法の如く慈定に入り龍の毒を除くことを得たり。頭を低くして視る。卽ち前みて上を躡み度りて城の中に入る。彼の時、城の中に亦龍王有り、寶殿に處し遙に菩薩を見、愕然として自ら念ふやう「我が此の城外には七重の塹有り、中に毒蛇滿つ、餘龍と夜叉とあり能く越す者無し。今、此は何人ぞや、能く來りて此に至る」と。心極めて奇怪とし、尋いで下り迎へ問ひ敬を致し禮を爲し、請じて殿に上らしめ、七寶の床を施し之に讓りて坐せしむ。坐し已りて具に種々の美味を食べしめ、食し已り徐に來りし所以の意を問ふ。菩薩、答へて言く「閻浮提の人は薄德にして窮苦なり、身を勞し思を役し、殺害、欺誑し衣食を爲すの故に十不善を具す。命終るの後復三劇苦の中に墮す。意甚だ愍傷し救濟を思欲す。海の龍王に承はるに如意珠有り。故に遐なる嶮を涉るは唯、此を得るを望むなり」と。龍王、答へて言く「如意寶珠、此は得難き物なり。大士故に來り望む。當に相ひ與ふべし。若し得むと欲せば四月留り住し我が微供を受け幷びに敎誨せよ」と。菩薩、尋いで可とす。龍王、歡喜し日日百味の上味を施設し躬自ら斟酌し甘食を奉進す。亦復勅して種々の伎樂を作す。菩薩、恒に爲めに諸法の名字の本末を分別し廣く其の義を宣ぶ。龍王、敬慕

我れ願くば智慧の弟子と作らむ」と。菩薩、之を可として之に問ふて言く「今、汝の此の珠、何の力能有りや」と。卽ち、之に答へて言く「此の珠は能く二千由旬の一切の須ふる所を雨らす」と。菩薩、自ら念ふやう「此の珠快なりと雖も故らに未だ我が曠く大事を濟ふを辨ぜず」と。諸龍の大小送りて門外に到る。重ねて相ひ辭謝す。

是に於て別れ去り轉復前み行き、遙に一つの城を見る。純青の琉璃其の色淸潔なり。復前みて往趣むくに、其の城の外邊に亦七重の壍あり。諸の壍の中に亦毒蛇を滿す。菩薩、見已り此の諸の蛇を念ずるに「瞋妬の致す所の故に此の中に來りて此の毒形を受くるなり」、端坐し慈に入り極めて哀念を加ふ。慈心已に盛にして毒皆除くことを得たり。徑として其の上を蹈み城門に往趣き。亦、二つの龍の身を以て城を纏ひ頭を門の閫に交ゆるを見る。已に菩薩を見て頭を擧げ怒り視る。菩薩、尋いで時に慈心を思惟し慈の心已に滿ちて其の毒復除こり、便ち復頭を低くす。菩薩、蹈み過ぐ。爾の時、城の中一龍王有り。七寶の殿に坐し遙に菩薩を見、驚き起ちて自ら念ふやう「我、城外を計るに七重の蛇の壍、諸龍、夜叉ありて能く越へる者無し。此れは是れ何人ぞや、能く來りて此に至る」と。尋いで下り迎へ問ひ、恭敬し禮を作し、請じて殿上に詣り七寶の床に坐す。諸の百味を辨じ美しき飮食を盛り、食竟り徐徐に談りて所由を問ふ。菩薩、因つて故に來る意を答ふ「唯、梅陀摩尼を求め乞はんと欲するのみ」と。龍王、白して言さく「梅陀摩尼は甚だ得ること難しと爲す。苟も得むと欲せば願くば我が請を受けよ、二月此に住し幷びに菩薩の行を開示せよ」と。龍王、種々の飮食を供設し諸の伎樂を作して以て供養す。菩薩、具足して其の爲めに四神足の事を分別して二月を經已る。辭して「當に還り去るべし」とて、龍王、卽ち髻の中の寶珠を出し以用つて奉上つる。因つて要誓を立つるやう「大士、慈心を以て群生を悲濟し其の心廣大なり、必ず佛道を至さむ。我れ願くば爲めに神足の弟子と作らむ」と。菩薩、可しと言ひ「汝の願ふ所の如し」と。又、

らしめむ。我、當に接して過ぐべし」と。諸の嶮難に於て即時接り去り、四百由旬を度り乃ち還び地に致つ。是に於て大施、轉自ら前行し、一銀城を見る。白淨皦然として是れ龍宮なるを知り、歡喜して往趣く。其の城の外を見るに七重の塹有り、諸の塹の中には皆毒蛇有りて滿つ。其の毒猛盛なり。之を視るに惡む可し。大施導師、諸の毒蛇を念ずるに皆前身怒害多く盛なるに由るが故に斯の如き惡む可き形を受く、慈を念じ哀愍すること赤子を視るが如し。慈心已に滿ちて、蛇の毒悉く除く。即ち起ちて上を蹈み行きて龍城に詣る。見るに二つの龍有りて身を以て城を遶り、頭門の閾に交る。大施を見て頭を仰ぎ愕いて視る。大施、尋いで時に復慈心に入り龍の毒便ち除こり、頭を低くして視ず。大施、即ち前みて上を躡みて過ぐ。城の中に龍有り、七寶の殿に坐す。遙に菩薩を見て驚き起ちて自ら念ふやう「今、我城の外には七重の塹中に皆毒蛇有り、餘の龍、夜叉、敢て妄りに越すもの無し。斯は是れ何人ぞや、能く來りて此に至る」と。即ち前みて迎へ問ふ。禮を作して恭敬す。請ふて坐に就き、七寶の床に坐せしめて種々の美饍を以用つて供養し、食已り談じ語り其の來意を問ふ。菩薩、答へて言く「閻浮提の人、貧窮にして辛苦す。財寶を求めて衣食に供するの故に殺害し欺誑し、具に衆惡を造り、命終の後には三惡道に墜つ。意甚だ憐愍れみ、救濟を欲するの故に嶮を涉り遠く來る。大王に見えて[一七]梅陀摩尼を求め。往きて用つて救濟せむとす。此の功德を積みて誓つて佛道を求む。若し拒逆せずむば唯給與せよ」と。龍王、答へて言く「梅陀摩尼は得難き寶なり、汝、故に遐なる嶮を涉りて正に來るも此の爲めなり。若し能く意を開き一月を留り住し少しき微供を受け因つて說法を爲せ。梅陀摩尼、爾らば乃ち得可けむ」と。菩薩、之を可とし、龍王、日日百味を供設し諸の伎樂を作し菩薩を供養す。菩薩、便ち爲めに具足して[一八]四念處慧を分別し一月を經竟る。辭して當に還り去るべしと。龍王、歡喜し髻の寶珠を解き以用つて奉上る。因つて言つて曰く「大士、慈心普く濟ふこと及び難し。此の志強猛なれば必ず佛道を至さむ。

【一七】梅陀摩尼(Cintamaṇi)。如意寶珠のことなり。
【一八】四念處。
一、身念處、身は不淨なりと觀ずること。
二、受命念處、受は苦なりと觀ずること。
三、心念處、心は無常なりと觀ずること。
四、法念處、法は無我なりと觀ずること。
此四念處は慧を體とし、慧の力能く身・受・心・法の所觀の處を念ぜしむるが故に念處と云ふ。

限り無し。各共に白して言く「我曹、之等、薩薄に憑頼り、重んずる所を捐捨て嶮を冒して此に至り相ひ因りて全く濟り家に歸らむことを冀望ふ。今は云何がして棄捨て去らむと欲するや」と。大施、答へて言く「我、當に汝の爲めに自ら誓つて願を求め汝の曹等をして安穩に國に還らしむべし」と。諸の賈人聞きて心の怖乃し安むず。大施導師、手に香鑪を執り四方に向つて自ら誓を立つ「我、勞を憚らず海を渉り珍を求め、用つて群生飢乏の困を濟はむとす。此の德を合集し用つて佛道を求む。若し我れ至誠にして願ふ所、當に就るべくんば、此の衆賈と及び船の珍寶と惡難に逢はず安全に國に還らん」と。誓を作すこと已に訖りて衆賈、前みて導師の手足を抱き涕泣し愴恨す。辭し別れて國に還る。索を斷じ帆を擧げ閻浮提に還り皆安穩を蒙り大海を出づることを得たり。

爾の時、大施、衆と別れて後前みて水に入る。水膝に齊しき可りなり。行くこと七日を經て轉復前み行くに、其の水漸く深く岐に齊し。復、七日を經、是の如く前進すること七日にして(水)腰に齊し。七日項に齊し。七日恒に浮び一つの山の邊に到る。兩手に木を捉へ山に刺して上る。七日を經て乃ち山頂に徹る。彼の山の上に於て平かに行くこと七日復還び山を下り、七日にして下に徹り、水邊に到る。水の中には皆金色の蓮花有り、諸の毒蛇有りて其の毒極めて盛なり。悉く其の身を以て蓮花の根に纏ふ。菩薩此を見、卽ち自ら端坐し心を繫け念を攝め慈三昧に入る。諸の毒蛇の本生の時を念ふに皆瞋恚、嫉妬倍盛なるに由るが故に此の中に生じ斯の惡形を受く。極めて慈心を以て矜憐悲念し、慈心已に滿つれば彼の諸の蛇の毒皆自ら除こり歇む。大施、卽ち起ちて花を躡んで行く。復、七日を經て乃ち蛇を度るを得たり。轉、復前行し諸の羅刹を見る。人の香の臭を聞き皆來り求覓む。大施、已に見て心を攝め慈觀す。諸の羅刹の輩敬心自ら生じて、輭語來り問ふやう「何の所に至らむと欲するや」と。大施、具に答ふるやう「如意寶珠を求めむと欲す」と。羅刹、歡喜して自ら念言ふやう「此れは福德の人なり。龍宮を去る其の道猶遠し、云何が此の辛苦を經て涉

見え其の色狀を覩、必ず凡に非るを知り其の金を須ふと聞き一切を許し給し、又、復、左手に金の灌罐を提げ右手に女を捉へ大施に語りて言く「今我が此の女容貌殊に異なり、諸王、使を遣はし各子の爲めに求む。今、薩薄を覩るに端正相ひ似たり。請ふ此の女を以て相ひ奉侍せむ」と。大施、答へて言く「我、今、方に難を涉り海に入らむとす。焉ぞ能く安全に還るを得るや不やを知らむん。君の女を預り受くるは此れ所以に非ず」と。迦毘梨、言く「若し吉に還らしめば當に我が爲めに受くべし」と。是の時大施卽ち之を許可す。時に迦毘梨、歡喜して便ち三千兩金と及び餘の須ゆる所を與ふ。是に於て共に別れ轉前みて海に到る。賈人に勅語し其の船を牢治して七重有らしめ、候風の至るを以て海中に推著し七張の大索を以て岸邊に繫ぐ。便ち鈴を搖がし唱へて衆の賈人に告げしむ。「汝等、皆海中の難を聞け、黑風と羅刹と水浪の[一六]洄澓と惡龍の毒氣と水色の山と、摩竭の大魚の衆難と甚だ多し、百伴ひて海に入り時に一安かに還る。誰か退かむと欲する者は此に於て住す可し、索を斷つの後悔を欲すとも及ぶ無し。若し能く心を堅くし身命を顧ず父母・兄弟・妻子を分ち捨て安穩に際遇う七寶を得て還る者は子孫七世食して用つて盡きず」と。是の令を作し已り便ち一つの索を斷つ。日日是の如く七日復唱へて已に第七の索を斷たしむ。風を望み帆を擧げ船の疾きこと箭の如し。普く衆賈と與に寶所に到る。大施、多聞にして明に諸寶の輕重・貴賤・色貌・好醜を識り諸の賈客に示すやう「是の如き色寶は之を致すに重からず。價貴く取る可し、是の如き輩の寶は重を致して價賤し、各共に取ること莫れ。又、復、約を勅す。寶を取ることの多少當に中を得るべし、多ければ船重く重ければ則ち沈沒す。少ければ船輕しと雖も勞苦に補はれず」と。誡語已に訖り、各勤めて採拾し船の上に積著く。寶足りて裝を嚴にし、便ち還らむことを欲求す。時に大施、船に上るを欲せず。諸人悉く集り其の意の故を問ふ。大施、答へて言く「我、前進し龍王の宮に至り如意珠を求めむと欲す。我れ身命を盡し得ずむば還らず」と。衆賈、此を聞き愁慘すること

【一六】洄澓。めぐり流ること。

險難の事多し、往く者甚だ衆くして來り還る者尠し。我れ子を求めんと念ひ諸天に禱祀り精誠[二]懇惻し遍からざる所靡く、十二年を經て因つて乃ち願に從へり。適、汝、長大し我を捨つることを得むと欲す。念ふに此の志を棄て還び起ちて飮食せよ」と。一日二日より六日に至る。是の如く種々諫喩め曉すことを求むるも其の言初の如く志を執じて廻らさず。父母心懼れ自ら共に議して言く「此の兒、前後に作す所有らむと欲すれば要ず成辦せしむ、未だ曾つて中退せず、就いて海に入らしめば猶、還りの期を望むことを得ん。今、必ず拒遮りて其の七日に到らば交其の禍を見ん。之を爲すこと奈何。宜しく當に去ることを聽し憂を轉じて後に在らしむべし」と。言議りて已に決し、倶に兒の邊に來り各一つの手を捉へて兒に語りて言く「聽して汝の意に隨はむ。起ちて還び食に就け」と。大施、此を聞き卽ち起ちて飯に就く。飯食已に訖る。卽ち起ちて外に出で廣く行きて令を宣ぶ。衆人に告げて語るやう「我、今躬ら海に入り寶を採らむと欲す。誰か往かむと欲する者ぞ、共に倶に進む可し。我、[三]薩薄と爲り自ら行具を辦ぜむ」と。時に國の中に五百人有り是の令を聞き已り僉然命に應ず。卽ち須ゆる所を辦じ定發の日を剋す。日到り駕を裝ひ辭別れて道に趣く。王と群臣と幷びに其の父母と諸王の太子・臣民の類と與に數千萬人送りて路次に到る。各妙寶を贈り道の須ゆる所に供す。啼哭して斷絕す。是に於て別れ去り轉行くこと數日にして曠野に止宿し群賊の來り伺ひ盜まむと欲するに値遇ふ。菩薩憐愍みて卽ち齎らす所を以て盡く匃與へ、轉前みて城に到る。城を[四]放鉢と名づく。城中に婆羅門有り[五]迦毘梨と名づく。時に大施往きて其の所に到り從ひて三千兩金の貸索を欲す。時に婆羅門に一人の妙女有り、身は紫金色にして頭髮は紺青、端正世に絕し、更に儔類無し。八萬四千の諸の小國王皆太子の爲めに求めて悉く許されず。是の時大施、其の門の中に到り迦毘梨に問ふやう「共に相ひ見えむと欲す」と。其の女、內に在り外の語を聞き歡喜して驚起し、父母に語りて言く「外に在る者斯は是れ我が聟なり」と。時に迦毘梨、卽ち出でて

【二】懇惻。ねんごろにいたむこと。

【三】薩薄。西藏語、(Ded-dpon)(Sārthavaha)、隊商主。

【四】放鉢。西名、(Na-ṡu-ba)(Aparanta)のことなり。

【五】迦毘梨。西名、(Ka-byi-li)と寫す。

故に爾らしむる耳、又、人の子の法として父母の藏を空竭し其れを盡さしむるは宜しからざるなり、今、此の藏の中に殘す所幾も無し」と。是の念を作し已り、「我、當に云何がして多く財寶を得て用つて我が意を滿し群生を濟給ふべきや」と。即ち、諸人に問ふやう「今、此の世間には何の事業を作して多財を得、之を用ひて盡し難かる可きや」と。或は人有りて言く「多く五穀を種え園圃を脩治し多財を得可し」と。或は人有りて言く「多く六畜を養ひ時に隨つて【二】蕃息し多財を得べし」と。或は人有りて言く「劇難を避けず、遠く出でて賈に行かば最も多財を得ん」と。或は、人有りて言く「唯、海に入り珍寶を採取ること有れば最も多財を得む」と。大施、此を聞きて自ら言ふて曰く「耕し種え、畜を養ふ、遠く出でて賈に行くとは既に我に宜しきに非ず。利を得るも幾くも無し。唯、海に入ること有るのみ、此の計從ふ可し。我、當に力め勵み此の事を求め辦ずべし」と。是の念を作し已り往きて父母に白さく「今、海に入り多くの珍寶を求めむと欲す。還び用て施給し民の乏しき所を濟はむ。唯、願くば聽し、所志を遂ぐることを得せしめよ」と。父母、語を聞き驚きて問ふて言く「世人海に入るは窮貧計無く、身命を分棄し顧戀する所無ければなり。汝、何事有りて復此を習はむと欲するや。若し布施を欲せば我が家の所有一切の衆物及び藏の中の殘を盡く汝をして用ひしめむ。大海に入ること莫れ。又、復、大海の中には衆難甚だ多し、水浪・迴波・摩竭大魚・惡龍・羅刹・水色の山、是の如き衆嶮經過す可きこと難し。汝、何の急ぐこと有り身を此の難に投ぜんとするや我等の命存する間は終に相ひ聽さず、宜しく汝の意を息む可し、多く紛紜すること勿れ」と。大施、此の願ひの從がはれざるを聞き、心共だ悒慼を懷き、自ら心に念ふやう「我、今、願ふ所は大事を辦ぜむと欲するなり。設し復身を貪りて事何に由りて成ぜむ」と。身を以て地に布き父母の前に伏して自ら言つて曰く「若し必ず顧留めて我が志願に違せば身を地に伏して終に復起たず」と。父母、此れを聞き灼熱を懷き諸の內官と與に前みて譲喩めて曰く「海の道は遼遠なり、

【二】蕃息。蕃殖に同じ。

隨ひ終に相違せず」と。卽ち自ら說きて言く「先日出遊し彼の人民を觀るに衣を求め食を求む。形を勞し思を役す。殺害し欺誑むき諸の惡業を具ふ。意甚だ矜憐む。[九]賑給せんと思欲す。唯、願くば恩を垂れ我に大藏を施し自ら恣に施し衆の乏しき所を濟ふを聽せよ」と。父、之に告げて曰く「我れ財寶を聚むるは盡く汝の爲めの故なり、汝の意爾るを欲せば奈何が相違せむ」と。兒、父の教を得て卽ち勅して一切の人民に宣下す。摩訶闍迦樊、大檀を設けむと欲し「須ゆる所有る者は皆悉く來り取れ」と。令を唱へ已訖れり。沙門・婆羅門・貧窮・負債・孤苦・疾病、のもの諸城の道路より前後して去る。諸の人民の輩、百里・二・三・五百・千里より來る者有り。皆强弱相ひ扶け四方より雲集す。一切に給與し、其の願ふ所を滿す。衣を須ふれば衣を與へ食を須ふれば食を給す。金・銀・七寶・車馬・輦輿・園田・六畜・意に稱つて與ふ。是の如く布施し數時の中を經て諸藏の物三分已に二なり。時に典藏吏、往きて其の父に白すやう「摩訶闍迦樊、自ら布施し來り藏の物三分して已に其の二を施す。諸王の信使、當に往返有るべし。願くば熟思惟し後に責めらるゝこと勿れ」と。父吏の語を聞き自ら思惟して言く「吾、此の子を愛し拒み逆ふこと能はず、寧復藏を空とするも何ぞ能く中斷せむや」と。是の如く布施し復、數時を經て殘りの藏物を用ひ三分して復二なり。吏、復、更に白さく「前に殘す所の物三分の中已に更に二を用ふ。諸王に信使し事を報知すべし、今藏空しくなるに垂むとす。願くば更に重ねて思へよ」と。時に婆羅門、而して吏に語りて言く「吾、此の子を愛し、愛心隆厚にして未だ曾つて違失し其の意を面り折らず、汝、方便して假りに因緣を設け、來りて物を求むる時乍に不在と稱し且く餘殘をして日月を延引せしめよ」と。吏、語を得已り卽ち藏の戶を閉ぢ小く他行す。乞兒、來り集り大施の所に至る。大施、將來り吏に詣り物を求む。其の吏在ず。[一〇]比行きて推し覓め、一時節を經歷て困みて乃ち之を得たり。復、物を得と雖も時の要に稱はず。大施、自ら念ふやう「今、此の小吏自ら力めて何すれぞ敢て我に承受せざるや。將に是れ父の意の

【九】賑給。にぎはしあたふること。

【一〇】比行。ならび行くこと。

問ふて曰く「汝等、何を以て辛苦乃し爾るや」と。或は答へ言ふもの有り「我は父母・兄弟・妻子無し、貧窮孤煢にして恃怙む所無し」と。或は答へて言ふもの有り「我に長き病有り役を作す能はず、自ら活路無し」と。或は答へ言ふもの有り「我の不幸數破亡に遭ひ債負盈集まる、身口切なる所自ら濟ふに方無し、是を以て乞を行ひ、以つて餘命を託す」と。大施、聞き已り酸哽して去る。次に復前に行く。諸の屠兒を見る。畜生を剶剝ぎ削り割きて秤り賣る。大施、見て問ふやう「咄！何等を作す」と。各各言ひて曰く「祖父已來屠殺を業と爲す。若し此の事を捨てなば以つて自ら濟ふ無し」と。大施、嘆息して之を捨てゝ去り、次に耕者を見るに犁を以て地を墾す、虫地より出づるを、蝦蟇拾ひて呑む。復、蛇有り來りて蝦蟇を呑み食ふ。孔雀飛び來り其の蛇を啄み食す。大施、之を問ふ「此は何等をか作す」と。答へて言く「地を墾し中に於て種を下す。復、穀を得、以つて自ら供養し、幷びに復、得て以て王家に輸るべし」と。大施、聞き已り深く歎じて去る。次に復前み行きて諸の獵者を見る。網を張り罝を設け諸の禽獸を捕ふ。諸の禽獸を見るに罝網の中に墮し自ら挽き自ら頓れ脫することを得る能はず。悲鳴相ひ喚び各怖懼を懷く。大施、之を見て「何を以て此を作すや」と問ひ、各共に答へて言く「我等、唯、獵を仰ぎ殺すことを業と爲す。若し之を爲さゞれば存活の路無し」と。其の語を聞き酸傷して去り、次に復、前み行き捕魚師を見るに、羅網を張り設けて得る所甚だ多く、陸地に積著く。趣けば能く動搖す。復、其の故を問ふ「咄！何を以て乃し爾る」と。各前みて答へて言く「祖父已來餘の生業無し、唯、仰ぎて魚を捕へ賣りて衣食に供す」と。大施、見已り甚だ愍悼を懷きて自ら思惟ふやう「是の諸の衆生皆貧窮にして衣食に乏しきに由るが故に此の惡業を爲し衆生を殺害す。歡喜して意を極め壽終るの後當に三塗に歸すべし。冥より冥に入る。何ぞ其れ怪き哉」と。是の念を作し已り駕を廻らし宮に還り、是の事を思憶うて愁憂して樂しまず。往きて其の父に見え一つの願を求索む。父、大施に語るやう「汝の求むる所に

【八】孤煢。ひとりのこと。

と。卽ち情事を以て婆羅門に白す。婆羅門歡喜し倍增悅び躍る。卽ち家內の夫人婇女に勅し來りて共に擁護す。夫人の進止・飮食・床蓐を極めて細軟ならしむ。調ひ適し稱へ給し、其の意に違する莫し。十月已に滿ちて便ち男兒を生む。身は紫金色にして頭髮は紺靑、端正超異す。人相有ること難し。婆羅門見て喜び自ら勝えず。卽ち相師を召し來りて共に之を相せしむ。相師、披觀し未曾有と嘆じ、「此の兒の相好福德弘く廣し。天下瞻る所子の母に賴るが如し」と。其の父、歡喜し勅して字を立つ。天竺字を作るは二種に依る。或は星宿に依り或は變異に依る。相師、便ち問ふやう「懷妊以來何の變異有りや」と。其の父、答へて言く、「此の兒の母素より來忌み惡くみ慈順少なし。（然るに）懷妊より來心性改異し苦厄を矜憐むこと母の子を愛するが如し。志布施を好み貪り惜むこと有ること無し」と。相師之を聞き歡喜して言く「是は此の兒の志の故に然らしむるところなり」と。當に爲めに字を立て摩訶闍迦樊と號すべし。（晋に大施と言ふ。）其の兒漸く大なり、父、甚だ愛念し別に爲めに宮を作り、三時殿を立つ。冬は溫く夏は涼し、春秋中に居り諸の妓侍を安き、以て之を娛樂しむ。其の兒聰明にして學問を好樂み、俗典を誦持す。十八部の書文旣に通利し幷に其の義を善くす。諸の技術を學び通ぜざる所靡し。其の後、大施其の父に白して言く「久しく深宮に在り出遊を思欲す」と。父、此の語を聞き卽ち臣吏に勅するやう「我が子大施出でて遊行せむと欲す。街陌を掃灑し諸の不淨を除き諸の幢幡を竪て華を散じ香を燒き道路を莊嚴し極めて淨潔ならしめよ」と。施設し辦じ已る。大施、是に於て大白象に乘り七寶を以て挍飾し鍾[七]を撾ち鼓を鳴らし倡伎の樂を作し、千乘萬騎前後に導從し大御道を行き城門に往詣る、時に國中の人民の類樓閣の上に於て道の兩邊を挾み競ひて共に觀看し厭足ること有ること無し、皆各言ひて曰く「甚だ奇なり、甚だ妙なり、共の威相を觀るに猶梵天の如し」と。轉、復前に行き、諸の乞兒を見る。弊壞の衣を著け破れたる器を執持ち卑言にて哀を求む「我に少し許を匃へよ」と。大施、之を見て之に

【七】鍾。樂器。

佛、此を聞き已り舍利弗等諸の弟子等に告げ給ふやう「阿難、我が故衣を著ざることを求索むる所以は阿難長く慮り諸の弟子の嫉妬を懷く者を恐れて此の心を生ずるなり。國王・臣民、諸の檀越の輩佛に、貴價細軟の衣を施す。阿難此を貪り故に給事を求むと。復、索めて我が殘食を噉はざるは諸の弟子の復此の心を生ずるを慮るなり。如來の鉢中食ふ所の餘り甘美百味なり、世に此食無し。阿難、嗜むが故に側に來り近づくと。阿難の索めて自ら時節の進現を裁量する所以は諸の弟子及び外道の衆來りて進現を求め難問する所有り時節を知らず儵相ひ惱觸するを慮かるなり。又侍者と爲り當に時節を候ひ飲食宜しき所身を便じ體を益す。一々の制度過を慮かり及ぶを見る。是を以て先に預め此の三願を索むるなり。又、復阿難は、但、今日のみ自ら時を知るを索めず、過去世の時我に奉侍し善く時宜を知れり」と。時に舍利弗、重ねて佛に白して言さく「不審なり、過去に佛に奉事し善く時宜を知るとは其の事云何」と。佛、舍利弗に告げ給ふやう「汝、聞かむと欲せば諦に聽き心に著けよ、當に汝の爲に說くべし」と。「唯、然なり、世尊よ、諸、當に善く聽くべし」と。

佛、舍利弗に告げ給ふやう「乃往過去無數無量阿僧祇劫に大國王有り閻浮提の八萬四千の小國、八十億の聚落を領す。王住する所の城を婆樓施舍[二]と名づく。是の城の中に於て一婆羅門有り尼拘樓陀[三]と號す。聰明博達・天才殊邈[四]なり、王甚だ宗戴[五]じ師として之に事ふ。八萬四千の諸の小國王悉く遙に敬慕し所在を瞻仰す。四遠貢を獻じ、使を遣はし諮承す。略して之を言はゞ大王に奉ずるが如し、是に於て婆羅門富て王家に敵す。但、子息の以て詔繼すべき無し。出入、坐臥每に此の愁を懷く。何に方に以て子を得べきかを知らず。卽ち梵天に禱祀り、天帝・四王・摩醯跋羅[六]及び餘の諸天・日月・星宿・山河樹神に種々禱祀り、遍からざる所無し。誠を刻し報を積むこと十二年を經たり。其の大夫人便ち娠有りと覺ゆ。聰明の女人能く此を知り得。自ら懷く所を知り、必ず是れ男兒なり

【二】婆樓施舍。西名、(Ba-ru-te)とす。
【三】尼拘樓陀。西名、(Nya-gro-dha)とす。
【四】殊邈。殊に遠く遙かなる貌。
【五】宗戴。宗主として戴くこと。
【六】摩醯跋羅。梵語、(Ma-heśvara)、大自在天と譯す。色界の頂にありて三千界の主たり。

爾の時、世尊、念ひ給ふやう「侍者を須ふべし」と。諸の尊弟子憍陳如等各共に觀察し佛の念ふ所を知る。時に憍陳如坐より起ち偏に右肩を袒ぎ合掌長跪して佛に白さく「侍近し奉ることを貪り得む。衣を捉へ鉢を持たむ。唯、願くば愍を垂れ教を賜ひ聽許せよ」と。佛、之に告げて曰く「汝、年老邁なり、自ら給侍すべし。何ぞ汝をして供事を見せしむるに忍びむや」と。時に憍陳如、佛の聽し給はざるを知り禮し已りて還り坐す。摩訶迦葉・舍利弗・目犍連、及び諸の弟子五百人等次第に佛に白し皆給侍し奉らんことを求む。佛、皆聽さず。時に阿那律、佛の意を試み觀じて佛の志趣を見るに心阿難に在り。日の東に在り舍宅を照し光東の牖より直に西の壁に至るが如く、世尊の志意も亦復是の如し。諸大弟子も皆亦觀じて知る。時に舍利弗及び目犍連坐處より阿難の前に到り阿難に語りて言く「世尊の志意、仁を得て以て侍者と爲さむと欲す。仁、善利有り獨り稱可を蒙らむ。宜しく速に往き佛の侍者爲らむと白し求むべし」と。

時に賢者阿難、諸の上座の來りて其の前に到るを見、又其の語を聞き、尋いで起ちて合掌して上座に白して言さく「世尊は德重し、智慧深遠なり、以ふに我れ常に近く親侍し奉事せば罪尤を招き、自ら殃患を遺さむことを懼る」と。舍利弗等復之に語りて言く「今、世尊を觀ずるに專注して意を致し、仁を得て以て侍者と爲さむと欲し給ふ。日の初め出でて室宅を照し光の東の牖より直ちに西の壁を照すが如し。世尊の心を注ぎ給ふこと亦復是の如し、又、復世尊、人情を究め能く仁の堪任を知る。是を以て意を留め給ふ。宜しく時に速に白し求めて侍者と爲るべし」と。賢者阿難、重ねて是の語を得是の事を思惟し、所如を知る靡し。復、更に合掌し諸の上座に白さく「若し今世尊我に三願を賜はらば我乃ち堪忍して佛の侍者と爲らむ。何をか三と爲すと謂ふ、世尊の故衣を我に與へて著すること勿れ、世尊の殘食を我に噉はしむる莫れ、時節の進現我が裁量に隨へ、此の三願を得ば乃ち能く佛に侍せむ」と。舍利弗等是の語を聞き已り具に其の事を以て往きて世尊に白す。

爾の時、阿難、復、佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の中刹羅伽利轉輪聖王、何の因縁を以て是の如き等の無量功德を獲たるや。初め母胎に入り寶蓋隨ひ覆ふや」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「乃ち復、過去久遠無量阿僧祇劫に此の閻浮提の波羅㮈國仙人山中に辟支佛有り、恒に山中に於て止住す。時に辟支佛、身を患ひ調はず。往きて藥師に問ふ。藥師、語りて曰く「汝、風病有り、當に乳を服むべし」と。時に彼の國の中に一人の[六]薩薄有り、名を阿梨耶蜜羅と曰ふ。（晉に聖友と言ふ）。時に辟支佛、往きて其の家に告げ病の出る所を陳べ其より乳を乞ふ。薩薄、歡喜し便ち請じて供養し日其の乳を給す。三月を經たり。三月已に竟り身の病差ゆることを得たり。其の善意に感じ主人をして大利益を得しめむと欲し、踊つて空中に在り坐・臥・行立し、身より水火を出す。或は大身を現じ虛空の中に滿し、又、復、小を現じて秋毫の裏に入る。是の如く種々十八變を現ず。是に於て聖友極めて歡喜を懷く。復空より下り重ねて其の供を受け數時を經て乃ち涅槃に入れり。薩薄、悲悼し追念すること量無し。其の身を[七]闍維し舍利を收取め盛るに寶瓶を以てす。[八]鍮婆を起し香花・伎樂種々の妙物を持用つて供養す。捉る所の大蓋を以つて其の上に置く。其の形壽を盡すまで此の塔を供養せり」と。

一辟支佛を供養し四事供養するに由り此の福報に因つて、無量世の中或は天上に生れ或は人中に處り尊豪[九]挺特し世に雙少し。又、阿難に告げ給ふやう「一切の衆生、在家・出家皆福を修むべし。生生の中是の如く利を獲」と。

爾の時、阿難、及び諸の會衆佛の說く所を聞き歡喜し奉行せり。

四十、[一]大施、海を抒むの品　第三十五

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閱祇耆闍崛山中尊弟子千二百五十人と俱に在しき。

【六】薩薄。商隊主。阿梨耶蜜羅(Ariyamitra)。

【七】闍維。梵語、(Jhāpita)、荼毘のこと。

【八】鍮婆。梵語、(Stūpa)、塔のこと。

【九】挺特。ぬきんずること。

【一】大施、抒海品。西本、No. 30.

り、謂ふやう是れは梵天なりと。到りて相ひ問訊し、一處に對坐し兩國土を談じ水を索むる事を論ず。蓋事、報いて曰く「我が國の人民の欲する所自然なり。亦、貲輪[四]、王役の勞無し」と。言ふ所未だ訖らざるに食時已に至る。蓋事の王軍鼓を鳴らし食を欲す。時に梵天王、甚だ以て惶懼れ、謂ふやう「牽攝して取りて之を殺さむと欲するなり」と。怖れて自ら寧むぜず。起ちて己の過を謝し、手足を四布し腹を前地に拍つ。蓋事、自ら起ち曉して還び坐せしめ、復、之に語りて曰く「大王よ、何を以て恐怖是の如きや、我が軍、食の時に恒に自ら鼓を鳴らすなり。爾る所以は是れ我が食する時我が時の食を用ふれば皆百味上饌の供を獲るためなり」と。時に王梵天、復起ちて合掌し蓋事に白して曰く「唯、願くば大王よ、普く臨覆せられよ、我れ及び國人、悉く願くば降附し諸の民庶をして悉く恩澤を蒙らしめよ」と。是に於て蓋事、閻浮提を典り一切の人民盡く安樂を獲たり。位に登るの後正殿に處し群僚・百官・宿衞[五]侍立し、日初めて出づる時金輪寶有り東方より來る。王、遙に之を見る。即ち御座を下り右膝を地に著け輪の所に向ひ。手を以て三たび招くに、輪已に來至る。千輻具足し、光色晒きて著し。王、之に告げて曰く「若し我應に轉輪王と作るべきならば法の如き住處に、汝便ち中に住せよ」と。是に於て輪寶當に王の前に在り虛空の中に住す。其の輪地を去ること。七多羅樹なり。象寶・神珠・玉女・典兵、典藏の寶次第に來至り、時に蓋事王の七寶具足す。四天下を典り一切の衆生王の恩德を蒙り欲する所自ら恣にす。王、悉く教へて十善を修行せしむ。壽終るの後皆天に生るゝを得たり。と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の刹羅伽梨王とは豈異人ならむや、我が身是れなり。爾の時の父王罰闍達提とは今現に我が父淨飯王是れなり、爾の時の母とは我が母摩訶摩耶是れなり。我、往昔、衆生を慈愍するに因り恒に財法を以て之を攝取す。是の因緣により自ら成佛を致せり。三界獨り尊く與に等しき者無し。此の義を以ての故に一切衆生皆大慈を修習し潤益すべし」と。

【四】貲輪。財產。

【五】宿衞。護衞の兵士。

人民の各各競ひて共に諸の樂器を作るを見、王、復、臣に問ふて曰く「我が國の人民、何を以ての故に爾く勞煩執作するや」と。臣、王に白して言さく「此の諸人等大王の恩を蒙り衣食自然にして、各安穩を獲たり。事須く伎樂を用つて自ら娛樂すべし。是を以て今者伎樂の器を治むるなり」と。王、便ち言ひて曰く「若し我が福有りて應に王と爲るべきならば我が國中の一切の樹の上に皆種々の樂器、鼓・貝・琴瑟・琵琶・箜篌有り、一切の須ゆる所意に稱へて悉く有らしめむ」と。又數時を經て諸王、臣民悉く來り拜賀す。王の食時に値ふ。時に王卽ち請し、留めて飮食を與ふ。爾の時、諸臣、王の飮食の百味具足せるを得て咸共に白して言さく「臣等の家の食、其の味薄く少し。今、王食を得るに美味凡に非ず。王、之に告げて曰く「卿等、臣民若し常に我が食の如きを得むと欲せば吾が食の時を用つて食すれば皆是の如きの食を得む」と。卽ち司官に「吾が食時到らば恒に大鼓を鳴らし諸の人民をして悉く聞知を得せしめよ、我が時の食を用ひなば當に百味上妙の供を得べし」と勅す。是より已後食の時には、便ち鼓を鳴らし、一切の人民音を承け食を念ひ、百味の上饌自然に前に在り、人民優樂し具さに陳ぶべからず。

時に王梵天、使を遣はし蓋事の王國に來至り。蓋事に語りて言く「汝の父在りし時我が河水を以用つて汝の父に與へぬ、汝の父已に終る。宜しく當に我に還すべし」と。時に蓋事王、彼の使に報いて曰く「我が今の境土と及以び河水とは、亦我が力に非ず。强いて汝より得たり。然れども我れ王と爲り民物を勞さず、此れ蓋し小事なり、宜く停り後に在るべし、我面り汝の王と相ひ見え、乃ち當に國土の要を備に宣ぶべし」と。使、國に還り到りて一一王に白す。王、其の意を然りとし、日を剋して共に期し、期日已に滿ち二王倶に進み軍衆圍遶す。甚だ多く無數なり。各大營を安むじ河の一邊に在り。二王船に乗じ河中に相ひ見ゆ。時に王梵天、初めて蓋事を見るに、身色晃曜して紫金の山の如し。頭髮　奕奕として紺琉璃の如し。其の日は廣く長く人中に有り難し。敬心内に發

【三】奕々。光り輝く貌。

即ち相師に告ぐるやう「其の爲に字を立てよ」と。爾の時、國法二つの事に依りて爲めに字を作る。一には瑞應、二には星宿なり。相師、王に白さく「今、此の太子胎に入りて已來何等の瑞有りしや」と。王　之に答へて曰く「七寶の蓋有りて恒に其の上に在り」と便ち爲めに字を刹羅伽梨と作す。（晋に蓋事と言ふ　。衆の妙供を以て時に隨つて承奉す。年、成人に至り父便ち命終し、葬送し畢訖りて、諸の小王・臣、共に蓋事を立てて用て大王と爲す。治政數年なり、外に出でゝ遊觀し、諸の人民の耕し種えて勞苦するを見、左右に問ふて曰く「我國の人衆は何を以て此の種々の役使を作すや」と。臣、王に答へて言く「國は民を以て本と爲す。民は穀を以て命と爲す。若し其れ爾らざれば臣の命存せず。民の命存せざれば國則ち滅ぶるなり」と。王、便ち言ひて曰く「若し我福、王と爲るに相應ならば、我が民衆をして自然の穀を獲て、復此を作ること莫らしめよ」と。言を發し已竟るに、一切の人民の倉箒自ら滿ち種々の雜穀意に隨つて悉く有り。又、數時を經て復外に出てゝ遊び其の國人の薪を採り水を汲み舂き磨き役を作すを見、又、臣に問ふて言く「今、諸の人衆　故に復勞苦す。何を以て爾る耶」と。臣、王に白して言く「王の恩澤を蒙り自然の穀を獲たるも穀食を生じ叵し。事成熟を須ふ。是を以て庶民食を辦作し調ふるなり」と。王、復、言ひて曰く「若し我が福德應に王と爲るべきならば吾が國内の一切人民をして若し食を欲すれば自然の食有り恒に其の前に在らしめむ」と。言を發し已訖り合境皆自然の食を獲たり。又復、時を經て王更に出てゝ遊觀し、衆人の怱怱として　各　所務を執り、紡織裁縫して衣を辦具し調ふを見、王、臣に問ふて言く「此の諸の人等何を以ての故に爾く辛苦し執作するや」と。臣、王に白して言く「大王の恩を蒙り自然の食を獲たり。今者役を作して衣裳を辦具ふ」と。王、復、言つて曰く「若し我が福德應に王と爲るべきならば吾の國の一切樹木をして自然の衣を出さしめよ」と。適此の語を發するに國中の諸樹皆妙衣を出し、極めて　細輭と爲す。靑・黃・赤・白人の好む所に隨ふ。又、數時を經て王、復、出遊し

【二】細輭。大正本、需に作るは誤植か。

赴き救はむ。若し其得ずむば便ち力を以て逼りて之を奪取すべし」と。是の念を作し已り、諸大臣を召し共に此の事を議る。諸臣咸言く「今は正に是の時なり」と。卽ち驛使を遣はし梵天國に至り、具に王意を以て梵王に宣示す。梵王、此を聞き復自ら思惟ふやう「我が國は豐實にして人衆も亦多し、又此の國界は父王の所有なり、轉じて用つて我に授く。力諍に至りては我彼に下らず」と。是の念を作し已り、彼の使に報いて言く「今、此の國土、我の得る所に非ず。乃ち是れ父の王の轉じて用て授けらるゝところなり。我、今者の如きは力汝より減ぜず。汝、力にて決せむと欲するも我相ひ畏れず」と。使、本國に還り具に以て王に聞ゆ。王、卽ち軍を合し梵天國を攻む。共に戰ひを一交して、梵天の軍壞え背くに乘じ追躡して城の邊に經至る。衆人怖縮れて、更に敢て出でず。諸臣相將ひ悉く共に集會り梵王の所に詣り咸皆心を同じくして大王に白して言さく「他國の兵强く我國儜弱し 一つの河水を惜み今此の敗を致せり。是の如くして久しからず恐らく國を失ふを懼る。唯、願くば意を開き一つの河水を以て之に與へて共に親厚を爲せ、安全を得るに足らむ」と。王、心便ち開け衆臣の意を可とす。卽時、使を遣はし彼の軍中に至り其の王に白して言さく「我曹、比國と何を用つて惡を作さんや、索むる所の河水は今、以つて相ひ與へむ。我、當に女を以て汝の夫人と爲し、國に異物有り更に相ひ貢ぎ贈り、急難、危險、共に相ひ赴き救ふべし」と。時に金剛聚、其の來意に從ひ卽ち其の女を迎へ拜して夫人と爲す。各共に和解す。軍を迴らし國に還る。數時を經て其の王夫人便ち胎有りと覺ぼゆ。懷妊の後恒に自然に七寶の大蓋有りて、常に身の上に有り坐・臥・行・立終に遠離せず。十月を滿すに至り一人の男兒を生む。身は紫金色にして頭髮は紺青なり光相明著き、世に雙少し。兒出胎れて蓋、其の上に在り。諸の相師を召して此の兒を相せしむ。相師、披き看て、手を擧げ唱へて言く「善き哉、善き哉」と、異口同音に大王に白して言さく「今、太子を觀るに德力比無し人相具足す。世の希有とするところなり」と。王、及び群臣、喜び自ら勝えず。

巻の第八

三十九、[一]蓋事、因緣品 第三十四

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閱祇竹林精舍に在しき。慧命阿難、竹林中に坐し、心に自ら思惟ふやう「如來の出世は甚だ奇、甚だ特なり、今、諸の弟子佛の恩澤を蒙り四つの供養に於て乏少き所無し。各安穩を獲、苦際を盡すを得たり。一切世間諸王の臣民亦大利を得たり。三寶に遭値うて人民安樂なり、思ふに悉く世尊の威力の致す所なり」と。是の念を作し已り坐處より起ち佛の所に來詣る。爾の時、世尊、四部衆の爲めに廣く妙法を說き給ふ。慧命阿難前みて衣服を整へ偏に右の肩を袒ぎ右膝を地に著け長跪合掌して佛に向つて自ら林の中にて念ず所を說けり。

佛、阿難に告げ給ふやう「汝の言ふ所の如く如來の出世は實に復奇特なり、一切の衆生をして皆利益を獲しむ」復、次に「阿難よ、如來の正覺は但、今日のみ衆生を祐利せしに非ず。過去の世の時も亦復利益せり」と。阿難、佛に白さく「不審なり、世尊よ、過去の世の中衆生を饒益する其の事云何」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「過去久遠阿僧祇劫に此の閻浮提に四つの河水と二大國王有り、一王の名は婆羅提婆と曰ひ、(晋に梵天と言ふ)。獨り三河に據り人民熾盛なり。然れども復儜弱なり。一王は名を罰闍達提と曰ひ、(晋に金剛衆と言ふ)。唯一河を得て人民亦少し。然れども其の國人悉く皆勇健なり。時に金剛衆正殿に處り獨り坐して思惟ふやう「我、今の如きは兵衆勇悍なり。而も獲る所の水少し。彼の國は儜弱なれども獨り三河に霸たり。今、當に使を遣はし和して一河を求むべし。若し我に與へなば共に親厚を爲し國に好物有り更に相ひ貢き贈らむ。若し艱難有らば共に相ひ

【一】蓋事因緣品。西本、缺。

が肉を食する者は今の憍陳如等五比丘是れなり。其の諸の人民の後に肉を食する者は今の八萬の諸天及び諸の弟子の度を得る者是れなり。我、爾の時に於て先に身の肉を以て彼の五人に充て濟活を得せしむ。是の故に今日最初に說法して彼の五人を度せり。我が法身の少分の肉を以て彼の三毒飢乏の苦を除けり」と。

賢者、阿難、及び諸の會者佛の說き給ふ所を聞き且つ悲み且つ喜び頂戴し奉行せり。

し、今此の變有り、當に之を如何むとすべき」と。王、是の語を聞き甚だ大いに憂愁し「若し此の災有らば民物を奈何せむ、民の命濟はれず、復國土無し」と。卽ち群臣を合して共に之を議る。衆臣、咸曰く「當に(令を)諸國に下し現(時)の民口を計り復〔二〕倉篅の現穀を算數へしめ斛斗を定め、十二年中一人が幾許を得るかを知らしむべし」と。王、其の議に從ひ卽時宣令し、急に勅して之を算し、都て計算し竟る。一切の人民日に一升を得て猶尙足らず。是より已後人民飢餓して死亡する者衆し。王、自ら念じて曰く「當に何等の計を設けて人民を濟活ふべきや」と。因つて夫人婇女と與に園觀に出でゝ遊び、到りて各休息す。王、衆の眠り寐るを伺ひ卽ち座より起ち四方に向つて禮す。因つて誓を立てゝ言く「今、此の國人〔三〕飢羸せて食無し。我が此の身を捨てゝ願くば大魚と爲り我が身の肉を以て一切を充し濟はむ」と。卽ち樹の端に上り自ら地に投じ、卽時に命終りて大河の中に於て爲めに化して魚と生る。其の身長大にして五百由旬なり。

爾の時、國中に木工五人有り、各斤斧を齎らし河邊に往至り、材木を規り斫り、彼の魚を見已る。卽ち人の語を作して之に告げて曰く「汝等、若し飢えて食を須ひむと欲せば來りて我が肉を取れ、若し復食飽かば齎持して去る可し、汝、今、先づ我が肉を食して充飽を得よ、後、成佛の時に當に法の食を以て汝等を濟脫ふべし、汝、幷びに國人の大小に告ぐ可し、食を須ゆる者有らば悉く各來りて取れよ」と。五人歡喜し諍いで各斫り取り食飽きて齎らし歸る。因つて其の事を以て具に國人に語る。是に於て人民展轉して相ひ語り閻浮提に遍く、悉く皆來り集り、其の肉を噉食へ一つの脇肉盡きて、卽ち自ら身を轉し、復一つの脇を取る。皆復食ひ盡くす。故の處還び生ず。復、身を轉じて之に與ふ。是の如く飜覆して、恒に身の肉を以て一切を給濟し十二年を經たり。其の諸の衆生其の肉を食する者皆慈の心を生じ、命、終りて後天上に生るゝを得たり。

「阿難よ、爾の時の設頭羅健寧王を知らむと欲せば則ち我が身是れなり。時の五人の木工の先に我

〔二〕倉篅。倉はくら、篅は穀を盛る圓きざる。

〔三〕飢羸。うゑくるしむこと。

時に諸の軍衆、佛の說き給ふ所を聞き恚心便ち息みて是の言を作さく「大王、刑する所適之を爲すに非ず。此の人自ら種えて今其の報を受く、一つの牛を殺すに由り猶尙是の如し。波斯匿王は是れ我曹の主なり、云何が惡を懷きて危害することを欲せむ」と。卽ち、[一六]器仗を除き自ら王の前に投じ、哀を求め過を請ふ。王も亦釋然として、其の罪を問はず。爾の時、世尊因つて四衆の爲めに廣く諸法を說き、善業は應に修むべし、惡行は應に離るべしと、[一七]四諦の妙法を敷演し分別し給へり。

衆會の聞く者皆道證を得て佛教を受持し歡喜し奉行せり。

三十八、[一]設頭羅健寧の品　第三十三

是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、羅閱祇竹園中に在しき。

爾の時、賢者阿難座より起ち衣服を整へ長跪叉手して前みて佛に白して言く「阿若憍陳如の伴黨五人宿に何の慶有り何の因緣に緣りて如來世に出で法鼓初めて震ひて獨り先に聞くを得たるか。甘露の法味特に先に嘗むるを得たるか。唯、願くば哀を垂れて、具に解說を爲し給へ」と。時に世尊、阿難に告げ給ふやう「此の五人は先世の時先に我が肉を食ひ安穩を得るを致せり、是の故に今日先に法の食を得て用つて解脫を致せり」と。

爾の時、阿難、重ねて佛に白して言さく「先世我肉を食するとは何の因緣有りや、願くば具に開示し給へ」と。佛、之に告げて曰く「過去久遠、無量無數阿僧祇劫に此の閻浮提に大國王有り、名を設頭羅健寧と曰ふ。閻浮提の八萬四千國・六萬の山川・八十億の聚落・二萬の夫人婇女を領す。王、慈悲有り一切を憐念す。人民の類蒙賴せざるは靡し。爾の時國中に火星現るゝこと有り、相師、尋いで見えて王に白して言さく「若し火星現るゝこと有らば當に旱し雨らざること十二年を經るべ

【一六】器仗。ほこ。

【一七】四諦。四聖諦とも四眞諦とも云ふ、聖者所見の眞理なる故なり。
一、苦諦、三界六趣の苦報なり、是れ迷の果なり。
二、集諦、貪瞋等の煩惱及び善惡の諸業、此二能く三界六趣の苦報を集起する故なり。
三、滅諦、涅槃なり、涅槃は惑業を滅し生死の苦を離れて眞空寂滅なれば滅と名く、是れ悟の果なり。
四、諦道、八正道なり是れ能く涅槃に通ずれば道と名く是れ悟りの因なり。

【一】設頭羅健寧。西本、No. 26. (Sud-to-lag-gar-ni) と音寫す。

佛、阿難に告げ給ふやう「乃往過去久遠の世の時此の三十二人共に親友と爲る。相ひ與に言り議りて他の一牛を盜む。彼の時、國中に一人の老母有り子息有ること無し。單り窮し困厄せり。時に諸の傖兒其の舍に往詣り共に牛を殺さむと欲す。老母歡喜し爲めに薪・水・煮熟の具を辨ず、刀を下さむと臨む時牛跪き命を乞ふ。諸人意盛にして、必ず之を殺さむと欲す、牛、便ち誓を結ぶやう「汝、今我を殺す、將來の世我れ汝を置さず。正に道を得しむるも猶相ひ放たず」と。誓を立て已竟りて便ち爲めに殺さる。諸人燒き煮、競うて共に之を噉ふ。老母因つて次いで亦飽滿を得たり、欣悅んで言く「由來客を安き今日最も善し」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の牛とは波斯匿王是れなり、爾の時、牛を盜む人とは今の毘舍離の三十二子是れなり、爾の時の老母とは今の毘舍離是れなり。此の果報に由り五百世中常に爲めに殺されて乃ち今に至る。彼の時老母、助け喜ぶに由るが故に五百世中常に爲めに母と作り、極めて懊惱を懷く。今、我に値ふの時始めて道證を獲たり」と。

阿難、合掌し重ねて佛に白して言さく「復、何の福を修し豪富猛健なりや」と。佛、阿難に告げ給ふやう、乃往過去に迦葉佛の時一人の老母有りて三寶を信敬す。其の家大いに富み、衆香を合集し油を以て之に和し、往きて塔に塗らむと欲す、其の中路に於て三十二人に逢ふ。因つて之に勸むるやう「我、油を以て塔に塗らむと欲す、相ひ助佐けよ、當に福德を得て世世生まるゝ所端正多力なるべし」と。時に三十二人歡喜して共に去る。塔を塗り已竟り各是の言を作さく「是の老母に由るが故に我等をして福業を種ゆるを得しむ、願くば所生の處尊榮富貴にして恒に我が母と爲り、我等子と爲り、常に相離る莫れ、佛を見奉り法を聞き疾く道果を得む」と。老母、喜悅びて便ち之を許可す。「是より已來五百世中恒に尊貴に生る。爾の時の老母は今の毘舍離是れなり。爾の時の三十二人は今の三十二子是れなり」と。

を賜はらむ。一者諸の病比丘に【一四】湯藥を給足し病に隨つて飲食せしむ、二には看病比丘にも亦其の食を給す、三には遠來の比丘は先に之に供養す。四には遠行の比丘に糧餉を給辦す。所以は何ぞや、諸の病比丘は湯藥好飲食無きに由り其の病差え難く或は復命を沒す。瞻病の比丘食無きに由るが故に當に捨てゝ乞食す。早晩時無く病人の須ゆる所と或は能く差錯す。心に違へ恚怒り、病則ち愈え難し。是を以ての故に當に其の食を施すべし。時に他方の遠來の比丘あり、初めて異土に到り未だ知識有らず、若しは行乞して食し或は惡狗に値ひ或は【一五】弊人に逢うて儻し能く瞋恚して傷損毀辱す。是を以ての故に當に先に食を與ふべし。遠く去るの比丘伴侶を須ふべし、糧餉無きに由り或は伴に逮ばず、道路遐險にして諸の毒獸多く設し當に獨り涉り或は危難を致すべし。我、是れを以ての故に當に之を供給すべし」と。爾の時、世尊、毘舍離の此の四願を求むを聞き讃じて言く「善き哉、善き哉、汝の願ふ所の如きは其の德弘大にして佛に供すると異り無し」と。即ち衆僧と與に還りて祇洹に到り給ふ。世尊、去るの後函を開いて之を視るに三十二頭、悉く函の中に在り愛斷つに由る故懊惱に至らず但、是の言を作す、「痛ましき哉、悲しき哉、人生死有り長久を得ずして五道を驅馳す。何ぞ苦の乃し爾るや」と。三十二兒の婦家親族此の事理を聞き極めて瞋恚を懷き、咸共に唱へて言く「大王、無道にして善人を枉殺す、と、共に兵馬を合し爲に仇を報ひむと欲し、軍衆雲集し王宮を圍遶す。時に王恐怖し退きて佛の所に向ふ。諸人之を聞き即ち軍馬を引ゐ往きて祇洹を圍む。爾の時阿難、波斯匿王、毘舍離の三十二子を殺し婦家の宗黨爲めに仇を報せむと欲するを聞き長跪合掌して世尊に白して言さく「何の因緣有りて三十二兒王の爲めに殺さるゝや」と。世尊、告げて曰く、「毘舍離の子、三十二人但今日のみ王の爲めに殺されて三十二人一時に頓死せしに非ず。汝、今、善く聽け、之を持ちて心に在めよ、當に汝の爲めに說くべし」と。阿難、曰く「諾」と。

【一四】湯藥。せんじぐすり。
【一五】弊人。困苦の人。

り、橋の中に相ひ逢ふ。各豪姓を恃み相ひ開避せず。毘舍離の兒便ち瞋恚を懷き象の上に就き身を低くし下向き輔相の子、并びに其の車乘を捉へ塹中に擲置す。身體傷破し百節皆痛み啼哭して歸り、其の父に白して言さく「毘舍離の兒、横に毀辱し、我が身體を傷つけ苦痛斯の如し」と。其の父之を聞き甚だ用て懊惱し其の子を愍みて言く「彼の人の力壯なり、又是れ國親、與に爭ひて勝つこと難し、當に思ふに密に計を以て此の怨を報ゆべし」と。卽ち七寶を以て合して馬の鞭を爲ること三十二枚なり、好純の剛きを用ひて刀を作り中に內る。三十二人に各一枚を遺りて之に語りて言く「汝等年少なり、體性自ら嬉まむ。故に此鞭を作りて用つて相ひ贈る。幸に之を納むべし。恒に捉りて手に在れ」と。諸人歡慶し便ち爲めに之を受く。是の時、國法王に見ゆる時禮として刀を帶びず。是に於て輔相已に納受して常に秉執るを見、便ち國王に向ひ深く之を譖讒す。云く「毘舍離の三十子、年盛んにして力壯なり、一人千に敵す。今、異計を懷き謀りて王を害さむと欲す」と。王、之を聞くと雖も情猶未だ信ぜず。復、更に王に白さく「事、審かにして虛ならず。現に證驗有り、各利刀を作り馬鞭の中に置く、此を以て之を推して事を明にするに足るなり」と。王、卽ち索めて看る。果して言ふ所の如し。王の意便ち信ず。謂く「必ず然りと爲す」と。力士を選擇し宮內に安在し一々召喚し裏に於て之を殺す。三十二頭を以て一つの函に盛り著け繫縛し封印して其の妹に送與す。是の日に當り其の毘舍離、佛及び僧を請し家に就き供養す。王、函を送るを見て謂らく「供を致し來り相ひ助辦を爲すなり」と。便ち開き看むと欲す。世尊、告げて曰く「且く住し解くこと勿れ、食竟るを待つべし」と。食飮已に訖り便ち命じて坐せしめ、其の爲めに說法し給ふ「此の身は無常・苦・無我、多く危懼を生じ久しく立つことを得ず。衆惱纒縛し辛酸計り難し。恩愛別離互に相ひ悲戀し唐しく身識を困む。道に於て益無し。唯智者有り能く此の要を解く」と。時に毘舍離、[三]霍然として情悟り阿那含道を得たり。歡喜合掌して世尊に白して言さく「唯、矜愍を垂れ四願

【三】 霍然。釋くる貌。

其の計に從ひ尋いで時に之を試む。果して言ふ所の如し。了了に識別して、彼の使に告げて曰く「是は雄、是は雌なり」と。使、尋いで報じて曰く「審かに爾なり、虛ならず」と。王、甚だ慶悅し大いに財寶を賜へり。復、一木を送る。長さ一丈に滿つ。根、杪正に等し、節・目・刀斧の迹有ること無し。而して之に語りて曰く「若し能く此の木の上下を識別せば亦大いに快善なり、甚だ量る可からず」と。王、及び諸臣、能く識る者無し。時に梨耆彌、復、兒の婦に問ふ。兒の婦、答へて曰く「此の事、易き耳、但、其の木を取り用つて水の中に著けよ。根は自ら沈沒し頭浮びて上に在らむ」と。長者、聞き已り復往きて王に白す。王、其の語を用ひて便ち之を試む。果して其の計の如し。沈、浮各殊なり、彼の使に語りて言く「浮くは是れ頭にして、沈む處は是れ根なり」と。時に使答へて言く「信に論ずる所の如し」と。王、益歡喜し重ねて賞賜を與ふ。彼使、國に還り具に因緣を白しぬ。其の王、之を聞き心より用つて信伏し、更に使命を遣はし兼ねて珍寶を獻ず。因つて復、語りて曰く「大王の國中實に賢達有り、今より以後當に義好を修むべし」と。波斯匿王情倍踊躍す。梨耆彌を召して之に問ふて曰く「頃來の諸事、卿、何に由りて知る」と。梨耆彌言く「臣、達する所に非ず。是は臣の兒婦の智辯耳」と。國王、聞き已り深く欣敬を加へ其の兒の婦を拜して用つて王妹と爲す。

復、少時を經て兒の婦懷妊す。日月已に滿ち三十二卵を生む。其の一卵の中一人の男兒を出す。形體、顏貌端嚴挺特す。年遂に長大し勇健雙ひ無し。一人の力千夫に敵す。父母愛念し合國敬畏す。後、納娶を爲し、各已に備り畢る。純、是れ國中の豪賢の女なり。時に[三]毘舍離、信心開解し佛及び僧を請ず。舍に於て供養す、佛、說法を爲し合家の眷屬須陀洹を得たり。唯末の小兒未だ道迹を獲ず。時に白象に乘り出でゝ遊戲せむと欲す。門外に壍有り、旣に深く且つ廣し。其の壍の上に於て大木の橋有り、時に此の年少、適、橋の宕に到る。爾の時、復、輔相の子有り車に乘り外に來

【三】毘舍離。西名、(Lha-htshams-ma)。

時に梨耆彌、家に歸りて問ふて曰く「前に稻米を種ゆ。實を獲と爲すや不や、得て王に與へ夫人の病を治さむと欲す」と。兒の婦、答へて言く「家の內に豐多なり、若し用つて藥を作らば周く一國に足らむ。一人を濟はざらむや」と。時に梨耆彌、卽ち送りて王に與ふ。尋いで用つて食と作し以て夫人に與ふ。夫人、食し已り病除愈を得たり。王、甚だ歡喜し大いに賞賜を與へり。

時に特叉尸利と舍衞の二國共に相ひ嫌隙し常に和順ならず。時に特叉尸利王、舍衞に聖智有るや不やを試みむと欲す。一人の使者を遣はし舍衞國に至り牸馬二匹を送る。而して是の母子形狀、毛色一類にして異り無し。能く別て識る者實に大善と爲す。王及び群臣分別すること能はず、時に梨耆彌、宮より家に歸る。兒の婦、問ふて言く「何の消息有りや」と。尒、卽ち答へて向に見る所の如く言ふ。兒の婦白して言さく「此の事知り易し、何ぞ憂と爲すに足らむ。但、好草を取り頭を並べて與へよ、其の是の母なる者は草を推して之に與ふ。其の是の子なる者は(一)推擣して之を食はむ」と。時に梨耆彌、尋いで往きて王に白す。王、其の語の如くし草を以て之を試む。果して其の策の如く、母子を區別す。卽ち、使者に語るやう「斯は是れ馬の母、彼は是れ其の駒なり」と。時に使、答へて言く「審かに來り語るが如く差錯有ること無し」と。王、大いに歡喜し倍爵賞を加ふ。時に彼の來りし使本國に還歸り具に諸の理を白す。

時に特叉尸利の王、便ち更に使を遣はし二蛇を送り、麁細長短相ひ似て一の如し。能く雌雄を別つ者斯も亦大善なりと。波斯匿王及び諸の群臣能く識る者無し。時に梨耆彌、歸りて兒の婦に問ふ。此、復、「云何」と。兒の婦、答へて言く「一端の細氎を以て地に敷置し此の二蛇を取り用つて氎上に著け、若し是れ雌ならば靜然として動かず、其の是れ雄なる者は搔擾して寧からず。何を以て之を知るか、女の性は細滑を愛著し軟を得て染を生じ動搖を欲せず。男子の性は剛にして轉側して安からず、此を以て之を推し知るに足る可きなり」と。長者、聞き已り、卽ち往きて王に白す。王、

【一】推擣。引きとること。

らず朝に早く起き堂舎を灑掃し炊煮已に竟る。先に妐、姑及び諸の男女に飯はし後に奴婢・僮僕の使人に飯はす。各各處を分ち作業に赴趣かしめ、然る後自ら食す。是を以て常と爲す。妐【九】忠恪凡と同じからざるを見、前の母の囑而も之を用ひざるを怪む。便ち之に問ふて曰く「汝、前に來る時母の教勅を被る。好衣、美食して日明鏡に照せと。其の事云何ぞ、卿、之を說く可し」と。兒の婦、長跪し具に事狀を答ふるやう「我が母の約する所好衣を著くるとは體の上の大衣教へて愛護せしめ恒に淨潔ならしむ。時を間て客會あり鮮妙を得可きなり。勅する所の美食とは甘肥を謂ふに非ず、教へて晩く飯しめ飢虛食を得ば麁細盡く美なり。其の明鏡とは銅鐵の鏡に非ず。教へて早く起き內外を灑掃し、床席を端整し務めて淨潔ならしむ。我が母の囑する所の其の事は是の如し」と。時に、妐之を聞き妙才有るを知り、情待遇を存し甚だ前より倍す。家中の衆物悉く以て之を委す。歡喜、泰然たり。復、憂慮無し。

時に群鴈有り飛びて海の渚に入り粳米を食噉し之を食して既に、飽き、穟【一〇】を銜み翔り來りて王宮の上に當り殿前に失墮す。諸人、之を見て取りて用つて王に奉る。王、見て奇好とす。「必ず藥を作るに中てよ、勅して種を留めしめ衆散を得る莫れ」と。諸臣に賦與し各之を植えしむ。時に、梨者彌も亦少許を得て持つて家に至る。教へて之を種えしむ。兒の婦、奉じて取り奴僕を驅率し佳田を調和し中に於て種を下す。後、生じ滋茂り大いに子實を獲たり。諸人の種は消息え度を失して悉く皆生ぜず。時に王夫人欻ち篤疾を得たり。諸醫を召して病を治する所由を問ふ、中に醫有りて言く「當に海の渚の粳米を須ひて食と作し之を食すべし、爾れば乃ち差ゆ可し」と。王、自ら憶念ふやう「昔、其の種を得て人に賦ち懇に植えぬ。今、當に有りと爲すか無しと爲すかを推校すべし」と。卽ち、諸臣を召して之に問ふて言く「前に勅して稻を種ゆ成熟せりと爲すや不や、今日、急に用ひて困病を治すべし」と。諸臣、各各自ら本末を說く。或は云く「生ぜず」と。或は云く「鼠、噉へり」と。

【九】忠恪。つゝしみ深きこと。

【一〇】穟。いねの穗秀れしもの。

特叉尸利國に往く。漸く近づき到らむと欲し先づ使を遣はして往く。時に曇摩訶羨、善く敬待を加ふ。即ち、賓會を設け女を以て之を娉す。諸事畢竟る。當に舍衞に還らむとす。時に此の女の母衆人の前に於て其の女を囑して言く「今より已後常に好衣を著け恒に美食を食し、日日鏡に照し斷絕せしむること莫れ」と。女、即ち長跪し敎勅を奉受す。梨耆彌、聞き陰に用つて恨と爲す。人生の一世苦樂定り無し、好衣・美食如何が常恒に得む。明鏡に照す、斯亦理に非ず。此の念有りと雖も難じて之を問はず。客・主相辭し是に於て別れ去る。大小の徒侶路を進みて國に歸る。道の中間に於て一客舍有り四面軒を垂る。極めて清涼と爲す。其の先に到る者下に在りて休息す。兒の婦後より至る。忪に啓白して言く「此に住す可らず、速に出でて外に向へ」と。忪、之に違はず出でゝ露處に向ふ。左右の數人肯へて出で去らず。時に象馬有り、身體癢痒し、身を以て柱に揩へり。屋、即ち崩壞し下の人を塡み殺しぬ。時に梨耆彌、是の念言を作さく「我、今、死を脫するは此の兒の婦に由る」と。敬ひ遇ずるの心倍益隆厚なり。即便ち駕乘し路を進みて歸へる。一大澗[七]の草茂り水美しきに到る。衆人駕を息め澗の側にて住す。兒の婦、後に到り便ち之に語りて言く「此に住するは快からず。速に岸の上に出でよ」と。即ち、其の言を用ふ。澗を遠くして休息す。須臾の間に便ち雲の起る有り、雷を震ひ降雨す。滂沛として下り澗に溢れ流れ來る。時に梨耆彌、復、重ねて念うて曰く「吾等、今日再び死より脫す。此の兒の婦に由り、身命を全くするを得たり」と。復、勅して嚴駕し道を涉りて前に進み旣に本國に達せり。中表[八]の親里悉く來り慶び問ふ。長者、欣悅す。即ち供具を設け共に相ひ娛樂し終に一日を竟る。賓客旣に罷む。是の時、長者、諸の兒の婦を召し、之に告げて曰く「吾、今年高し、衆の事務を厭ふ。家居・器物、付託有らむと欲す。卿等、諸人誰か能く我が爲めに藏を知り鑰を執るか」と。六大兒の婦、盡く辭し「堪えず」と。其の第七なる者自ら言く「能く任ず」と。時に長者、諸藏の鑰を以て悉く以て之に付す。既に以て命を受く。勤謹懈た

【七】大澗。大きなる谷。

【八】中表。中國の意。

女、答へて曰く「疑有らば便ち問へ」と。婆羅門、言く「向者に諸女水に入る時に當り盡く革屣を脱ぐ、汝、獨り脱せず何の意の有る故なるか」と。時に女答へて言く「汝の癡何ぞ甚だしきや。屣を作る所以は正に用つて脚を護るなり。陸地の事眼見る所有り、荊棘、瓦石之を避くるを得べし、水底の隱匿は眼の覩ざる所なり。儻ゝ棘刺及び諸の毒虫人の脚を傷害する有り、是を以て脱がず」と。時に婆羅門、復更に問ふて言く「何事を以ての故に衣を幷せて水に入るや」と。時に女答へて言く「女人の身相には好惡有り、衣を褰げ水に入らば人の爲めに見らる。相好ければ可し、好からざれば嗤笑ふ。是の事を以ての故に之を褰げず」と。時に婆羅門、復更に問ふて言く「何の縁を以ての故に獨り樹に上らざるや」と。女、便ち答へて言く「若し樹に上るに當り、樹の枝儻ゝ折れなば人の身を危害する所なり、是の事を以ての故に上らざる耳」と。此の女は卽ち是れ波斯匿王の弟[四]曇摩訶羨の女なり。羨、昔、罪に因つて彼の國に逃奔す。便ち共の土に於て家を安んじ納娶りて斯の女を生む。[五]毘舍利と字す。時に婆羅門、女の說く所を聞き必ず賢能なるを知る。而して女に問ふて言く「汝の父母在すや不や」と。女、答へて曰く「在り」と。遂に逐ふて門に到る。共に相ひ見ゆることを求む。女入りて父に白さく「外、婆羅門有り、大人を見むと欲す」と。時に曇摩訶羨、便ち出でて之に見え問訊し已竟り、之に語りて言く「向者女子は是れ君の女なるや不や」と。答へて言く「是なり」と。「主有りと爲すや、未だしなりや」と。答へて言く「未しなり」と。婆羅門、言く「舍衛國中一大臣有り、梨耆彌と字す。君之を識るや不や」と。答へて言く「舊、識れり」と。婆羅門言く「是、梨耆彌、最下の小兒端政にして聰明なり、君の女を求め共に婚姻を爲さむと欲す、爾るを得可きことや不や」と。曇摩訶羨、言く「彼は是れ豪姓にして本より匹偶たり、苟めにも得むと欲せば情違ふこと無きに在り」と。已に許可を蒙り便ち共に日を剋す。爾の時、伴有り舍衛國に往く。時に婆羅門、卽ち[六]書疏を作り梨耆彌に與へ、事狀を陳說す。長者、聞き已り娉物を辦具し車馬騎乘して

【四】曇摩訶羨。西名、(Stobs-kyi grogs-po)。

【五】毘舍利。西名、(Lha-ḥtshams-ma)。

【六】書疏。書面の義、大正本跡に作る、誤植。

て誓願を發し「當來の世、富貴・長壽、佛の出世に値ひ法を聞き證を獲む」と、行報遺すこと無く皆果成ぜり。佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の長者の子比丘とは今の金地王、摩訶劫賓寧是れなり。諸の人民の道化を受けし者は今の萬八千の諸王是れなり」と。

佛、是の法を說き給ひ衆會の聞く者道を證り發心して不退を逮得せり、至敎を受持し歡喜し奉行せり。

三十七、[一]梨耆彌、七子の品　第三十二

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、波斯匿王に一大臣有り、梨耆彌と名づく。家居大富なり、七人の男兒を生む。其の爲めに妻を娶ること已に六たびに至る。第七子を殘す。當に爲に婦を求むべくして、自ら思惟して言く「吾年、[二]衰邁す。唯餘の一兒の爲に婦を納る。要ず殊勝ならしめむ。時に此の長者一人の親厚の婆羅門有り、來り共に相ひ見ゆ。因つて議り語りて曰く「今、我れ小兒の爲めに婚を求めむと欲す。未だ處を知る能はず。卿は昔より來り、諸國を遊行す。今、君を煩はし我が爲めに推し覓むることを欲す。若し女の端政にして賢智あり性命相ひ宜しく我が子の意に適ふもの有るを見なば乃ち之を求むべし」と。時に婆羅門、即便ち「然り可し」と。遍く行きて覓め、[三]特叉尸利國に到る。五百の童女有り群行遊戲し好花を採取り用つて拂の飾を作るを見隨逐して之を觀る。轉復前み行く。當に少水を渡る。諸の女子の輩皆革屣を脫く。中に一女有りて獨り脫せず革屣にて水に入る。轉復前行す。續いて更に河有り衆女衣を褰げ爾して乃ち水に入る。唯、此の一女獨り衣を幷せて入る。林の間に前み行き、諸女各各樹に上り花を採る。時に此の一女自ら樹に上らず他より之を索む。花を得ること甚だ多し。時に婆羅門、此女に問ふて言く「我、少しく疑あり、相ひ問ふを得むと欲す」と。其

【一】梨耆彌七子品。西本、No, 23.(Blon-po. Ri-dwags)(Mrga ?)(kyi bu-bdun)(大臣、梨耆彌の七子)。

【二】衰邁。おとろへ行くこと。

【三】特叉尸利。梵語、(Taksasila)、西本、(Ciritta)と寫す。

に復、箭を取り弓を彎きて射る。手を離すの後化して五發と爲る。其の諸の箭の頭各各皆無數の光明を出す。其の光明の頭皆蓮花有り、大きさ車輪の如し。一一の花の上に各各皆一轉輪王有り七寶具足す。光明を奮演し普く三千大千世界を照す。五道の衆生蒙頼せざるは莫し。諸天の境界其の光明を見、及び説法を聞き、身心清淨、道果の第一・第二・第三道を得る者有り、人道の衆生佛の光明を見、及び説く所を聞き心踊躍を生じ、其の中、一道・二道・三道を得る者、出家して要に入り應眞を得る者有り、無上正眞道意を發し不退地を得る有り、稱て計ふ可からず。餓鬼の中の者佛の光明を見及び説く所を聞き皆飽滿を得、身心清淨にして諸の熱惱無し。皆慈心を生じ佛を恭敬し即ち解脱を得。人・天中に生る。畜生中の者佛の光明を見て貪欲・瞋毒、皆消除を得、癡心朦冥尋いで醒悟を得皆悉く歡喜す。佛を信敬し即ち解脱を得て人天の中に生る。地獄中の者佛の光明を見て寒ければ則ち溫煖、熱ければ則ち清涼、苦痛の處即ち休息を得たり。身心踊躍し佛を慈敬す。即ち解脱を得て人天の中に生ぜり。

爾の時、摩訶劫賓寧王、金地の諸王斯の變を見已り其の心信伏す。塵を遠ざけ垢を離れ法眼淨を得たり。萬八千の王一時に皆然なり。臾く須きの頃佛神力を攝め本形に還復し給ひ、諸の比丘僧前後に圍遶す。金地王の衆、出家を求索む。佛、即ち聽許し給ひ、鬚髮自ら墮ち袈裟體に在り、妙法を思惟し盡く阿羅漢果を得たり。阿難、佛に白さく「此の金地王、宿に何の德を種え豪尊に生在れ功德巍巍たり。佛の世に遭値し無漏を逮成ぜしか」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「衆生は行に由つて其の果報を受く。乃往過去に迦葉佛有り、般涅槃の後一人の長者有り爲めに塔廟を起し堂閣を造作し、四の供養具はる。歲月漸く久しくして塔崩落す。床、褥衣食亦復斷絶す。其の主の長者の子比丘となり、便ち行きて人民の類を勸化し各減割し用つて斯の塔を治めしむ。又、飲食、床臥の具を設く。諸人心を同じくし咸共に供へ承ぐ。因つ

し汝の國界を破るべし」と。波斯匿、聞きて深く用て驚惶し、即ち佛に往詣し具に斯の事を白す。佛、王に告げて言く「王よ、還りて使に語りて云へ、我、大ならず。更に大王有り」と。王、佛の教を奉じ彼の使に告げて言く「世に聖王有り、近く此の間に在り卿その邊に到り汝の王命を傳ふ可し」と。使、即時祇洹に往詣す。時に世尊、自ら其の身を變じ轉輪王と作り目連をして典兵の臣と作し、七寶の侍從皆悉く備有り、又、祇洹を化して寶城と作らしめ、四邊に遶らすに七重の塹有り、其の間皆七寶の行樹、雜色の蓮花有り稱て計ふ可らず。光明晃晃・照然赫發す。城の中の宮殿も亦是れ衆寶なり。王、殿上に在り尊嚴畏る可し。是に於て彼の使前みて化城に入り既に大王を覩、情甚だ驚悚す。自ら念ふやう「我君、無狀にして禍を招く」と。然れども已むを得ず書を以て之を示す。化王、書を得て脚下に蹋著り、彼の使に告げて言く「吾を大王と爲す。四域に臨統す。汝の王頑迷にして敢て違拒す、汝速に國に歸り吾が教を宣ぶることを致せ。信至るの日馳奔し來覲せよ、臥して聞かば當に起き、坐して聞かば立つべし、立ちて我が令を聞かば便ち當に道を涉るべし、七日を剋期し[六]稽遲するを得ず。敢へて斯の制に違はゞ[七]罪不請に在り」と。使、教を受け竟り還りて本國に詣る。具に聞見を以て金地王に白す。王、斯の間を承け深く自ら咎責し、領ぶる所の諸小王輩を合率し車馬を嚴辦し、大王に朝せむと欲す。然れども疑ふ所有り、未だ便ち路に即かず。先づ一使を遣はし大王に白して言く「臣、總べ秉る所三萬六千あり、王に都て去るべしと爲すか、半を將ゐて去るべしと爲す耶」と。大王、還び報じ半留り住するを聽す、「但、半を將ゐて來れ」と。時に金地王、萬八千の小王を將ゐ同時に來り到る。既に化王に見え謁拜し畢已り、心に是の念を作さく「大王の形貌は復我に勝ると雖も力必ず如かず。」化王、時に典兵の臣に勅し弓を以て之に與ふ。金地國王、手勝る能はず、化王還び取り指を以て弓を張る。復、持つて之に與ふ。勅して引き挽かしむ。金地國王、殊に挽くこと能はず。化王、復取りて之を彈扣す。三千世界皆爲めに振動す。次

【六】稽遲。とゞまりてゆかぬこと。

【七】罪不請。西譯によれば(Khrims-dnisbyor-ro)とあり、法律に照す程の意。

巻の第七

三十六、大劫賓寧[一]の品　第三十一

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、國王を波斯匿[二]と名づく。時に南方に國有り名を金地[三]と爲す。其の王を劫賓寧と字す。王、太子有り摩訶劫賓寧と名づく。其の父崩背し太子位に嗣ぐ、體・性聰明大力勇健なり。統ぶる所の國土三萬六千、兵衆殷熾能く敵する者無し。威風遠く振ひ摧伏せざるは莫し。然るに中國[四]と相ひ交通せず。後に商客有り、往きて金地に到り四端の細氎を以て彼の王に奉上る。王、納受し已り、商客に問ふて言く「此の物甚だ好し。何處に出すと爲すや」と。商客、答へて曰く「中國より出づ」と。王、復、問ふて言く「其の中國とは名字云何」と。商客、啓白し「羅悦祇[五]と名づけ、又舍衛と名く、其數衆多なり、具說すること能はず」と。王、復、問ふて言く「中國の諸王は何等の故を以て我に來り獻ぜざるや」と。商客、啓白すやう「各自土に覇たり、威名相ひ齊し、是を以ての故に來り奉ぜざる耳」と。王、自ら思惟ふやう「今、我が力勢能く總て一切天下を威攝す。何に縁りて諸王來り貢を承げざるか。今、當に威を加へ彼を率伏せしむべし」と。復、商客に問ふやう「中國の諸王何者か最大なるや」と。商主、白して言く「舍衛國王、最大一と爲す」と。時に金地王、卽便ち使を遣はし舍衛國に詣る。書を持ちて示敎す。其理委しく備る。其の王波斯匿に告げ語りて言く「我の威風閻浮提に遍し、卿恃む所を爲して使命を斷絕す。今故に使を遣はし卿と共に相ひ聞かむ。卿若し臥する時我が聲を聞かば尋いで起ちて坐すべし。若し坐して聞かば尋いで時に立つべし。若し食して聲を聞かば應に哺むを吐くべし。若し沐して聲を聞かば應に卽ち髮を握れ、若し住する時聞かば卽ち相ひ趣くべし。却後七日我と相見えよ、設し是の如くせざれば吾當に兵を興

【一】大劫賓寧品。西本、No. 24.(Ka-byin chenpo)(Maha-kapphina)、撰集百緣經。No. 88.

【二】波斯匿(Pāsenādi)。西名、(Gsal-rgyal)、舍衛國の王名、和悦又は月光と譯し玄奘は勝軍と義淨は勝光と譯す、西藏譯者又勝光の意に譯す、梵授王の子なり佛と同日に生る。

【三】金地。西名、(Gsel gyi sa)(Suvarna-bhumi)。

【四】中國。西名、(Yul-dbus)(Madhya-deśa)。

【五】羅悦祇。西名、(Rgyal-pohi khab)(Skt. Rājagrha)摩訶陀國の首都。

戒論・生天の論・欲不淨想・出要を樂と爲すとなり。

爾の時、大會、佛の說き給ふ所を聞き各道證を獲て信受奉行せり。

王國の中の極賤の人にして我已に化度し阿羅漢を得たり。大王故に來り斯義を問はむと欲するか」と。王、佛語を聞き慢心卽ち除こり、欣悦すること量り無し。因りて王に告げて曰く「凡そ人の世に處する尊卑・貴賤・貧富・苦樂、皆宿行に由る。而も斯の果を致す。仁慈謙順長を敬ひ小を愛すれば貴人と爲り凶惡〔六〕強梁憍恣自ら大なれば則ち賤人と爲る」と。波斯匿王、世尊に白して言さく「大聖、世に出て潤濟する所多し。此の如き〔七〕凡陋下賤の人其の苦毒を拔き常に安樂ならしむ。此の尼提は何の因緣有り賤處に生れ、復、何の德を種ゑ聖尊に遇ふを得て仙化を稟受し尋いで應眞を成じたるや。唯、願くば世尊よ、敷演分別し給へ」と。

佛、王に告げて曰く「諦かに聽き善く持てよ。吾、當に解說し汝を解悟せしむべし乃往過去に迦葉如來世間に出現し滅度の後比丘僧凡そ十萬人有り、中に一沙門有り僧自在と作す。身に疾患有らば服藥して自ら下し、憍慠にして勢を恃み出でて便利せず。金銀の澡槃を以て中に就きて尿を盛り一弟子をして擔ひ往きて之を棄てしむ。然るに其の弟子是れ須陀洹なり。彼世に在り謙順なること能はずして自ら多財を恃み僧事を秉り捉ふ。暫く微患有れば懶くして自ら起たず聖人を驅役し糞穢を除かしむ。是の因緣を以て生死に流浪し恒に下賤と爲り五百世中人の爲めに糞を除く。乃至今に於て其の出家持戒の功德に由り今我が世に値ひ法を聞き道を得たり。佛、大王に告げ給ふやう「爾の時の僧自在なる者を知らむと欲せば今の尼提比丘是れなり」と。

波斯匿王、世尊に白して言く「如來の出世實に奇特と爲す、無量の苦惱の衆生を利益し給ふ」と。佛、大王に告げ給ふやう「善き哉、善き哉、汝の言ふ所の如し」と。佛、又告げて曰く「三界輪轉し、定品有ること無し、積善・仁和なるは豪尊に生れ、習惡放恣なるは便ち卑賤に生る」と。王、大いに歡喜し慢心有ること無し。卽ち起ちて長跪し尼提の足を執りて作禮を爲し、懺悔自ら謝す。「願くば罪咎を除け」と。世尊、爾の時因りて爲めに廣く微妙の義を說法し給ふ。所謂、論とは施論・

【六】強梁。多力の貌。
【七】凡陋。いやしきこと。

なり。弘廣無邊にして貧・富・貴賤、男と女と與に能く修するもの有らば皆諸欲を盡す」と。是の時、尼提、佛の說く所を聞き信心卽ち生じ出家を得むと欲す。佛、阿難をして將ゐて城外の大河水の邊に出でしめ其身を洗浴す。已に淨潔を得たり。將ゐて祇洹に詣り爲めに經法を說き給ふ「苦切の理、生死畏る可く、涅槃永く安かなり」と。(四)霍然として意解け、初果の證を獲たり。合掌して佛に向ひ沙門と作るを求む。佛、卽ち告げて曰く「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法衣身に在り。佛、重ねて四諦の要法を解說し給ひ、諸漏盡くるを得て阿羅漢を成ぜり。三明、六通皆悉く具足す。爾の時、國人、尼提出家するを聞き咸怨心を懷きて是の言を作さく「云何が世尊、此の賤人に出家學道を聽し給ふや我等如何んが其の禮拜を爲さむ。設ひ供養を作し佛及び僧を請ずるも斯の人若し來らば床席を汚さむ」と。展轉し相ひ語り乃ち王に聞ゆ。王、聞きて亦怨恨し情用つて反側し、卽ち羽寶の車に乘り諸の侍從と與に祇洹に往詣し如來に疑ふ所の事を問はむと欲す。既に門前に到り且つ小さか祇洹の門外に停息す。一大石有り。尼提比丘、石岩に坐し故衣を縫ひ補ふ。七百の天人有り各華香を持つて之を供養し右遶敬禮す。時に王、覩見し深く用つて歡喜す。比丘の所に到りて之に語りて言く「我、佛に見えむと欲す。願くば爲めに通じ白せよ」と。比丘、卽時身を石中に沒し内に踊り出で。世尊に白して曰く「波斯匿王、今者外に在り來入し、(五)觀省し諸問を得むと欲す」と。佛、尼提に告げ給ふやう「汝、本の道より往きて語り前ましめよ」と。尼提、尋いで時に還び石より出づ。水より出づるに似るが如し、罣礙有ること無し。卽ち王に語りて言く「佛に白すこと已に訖りぬ。王、進前するを可とす」と。王、此の念を作さく「向に疑ふ所の事且く當に之を置くべし。先に當に請問すべし、此の比丘は何の福行有りて神力乃ち爾る」と。入りて佛に見え佛の足を稽首し右遶三匝し却きて一面に坐す。世尊に白して言く「向には比丘神力及び難し、石に入ること水の如く石より出づると孔無し。姓字何等とす。願くば告示し給へ」と。世尊、告げて曰く「是

【四】霍然。はやき貌。

【五】觀省。まみゆること。

人を興立し勸合して衆僧を供養するに由り罪を償ふこと已に畢れり。復、我が世に遭ひ過度を得ることを蒙れり、今、此の國中化を受くるの人皆是れ往昔勸助の衆なり。是の果報に緣り皆度脱を得たり」と。

阿難の等及び衆會と與に佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

三十五、[一]尼提、度するの緣品　第三十

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、舍衞城中、人民衆多にして、居止[二]隘迮し[三]厠溷尠少なれば、大小便利(の時は)多く往いて城より出づ。或は豪尊にして去る能はざる者有れば便利、器に在る中、人を雇ふて之を除く。時に一人有り名を尼提と曰ふ。極貧至賤にして趣向する所無し。客を仰ふぎ除糞を作し價を得て自ら濟へり。

爾の時、世尊、卽ち其の度すべきを知り獨り阿難を將ゐて城内に入り、之を拔濟せむと欲し給ふ。一里の頭に到り正に尼提に值ふ。一つの瓦器を持ち不淨を盛滿し往きて之を棄てむと欲す。遙に世尊を見て極めて鄙愧を懷き、退いて異道に從ひ隱屛し去らむと欲す。當に里に出づるに垂むとして復、世尊を見奉る。倍用つて鄙恥し餘道に廻り趣き、復、避けて去らむと欲す。心意忽忙瓶を以つて壁に打つ。瓶卽ち破壞し屎尿身を澆る。深く慚愧を生じ佛を見るに忍びず。是の時、世尊、其所に就き到りて尼提に語りて言く「出家を欲するや不や」と。尼提、語りて曰く「如來は尊重なり、金輪王の種なり、翼從するところの弟子は悉く是れ貴人なり、我、下賤弊惡の極みなり。云何が彼と同じくして出家を得む」と。世尊、告げて曰く「我法は淸妙なり、猶淨水の如し。悉く能く一切の垢穢を洗除す。亦大火の能く諸物を燒き大小の好惡皆能く之を焚くが如く、我が法も亦爾

【一】尼提度緣品。麗本、西本缺。
【二】隘迮。せまきこと。
【三】厠溷。かはや。

に富那奇、遙に佛の來り給ひ、天地を光曜し大衆虛に轉ずるを見、兄羨那に語るやう「世尊及び大衆今始めて來至り給ふ」とし、佛其の國に到り給ふ。羨那、歡喜し即ち香華及び衆の妓樂を以て供養し畢訖り、共に會所に至る。佛、其の舍に到り法の如く坐に就き給ふ。羨那の合家甘饍を供辦し、自ら行きて水を澡ぎ敬意食を奉る。佛、[二二]噠嚫の爲めに食訖り澡漱ぎ、其の國を擧げて合家の大小の爲めに妙法を演說し給ふ。合家の一切須陀洹を得、二道、三、四果を具ふる者有り。復、大乘に趣かむと發意する者有り。復、不退地に堅く住する者有り。佛、法を說き訖り給ひ國を擧ぐるの男女度を得る者衆く、稱げて計ふ可からず。阿難、長跪し叉手合掌す。前みて佛に白して言く「不審なり、世尊よ、此の富那奇、過去世の中何の惡行を作り人の下賤と爲り他に屬して奴と爲り、復、何の福有りて佛に遇ひ度を得たるや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「之を知らむと欲せば明に聽き善く思へよ。當に汝の爲めに說くべし」と。對へて曰く「唯、然なり、願くば具に開示せよ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『乃往、過去の迦葉佛の時一人の長者有り、財富無數なり、佛と衆僧の爲めに僧伽藍を興し衣服、飲食、病瘦の醫藥、四事供辦す一切を供給し乏短有ること無し。爾の時、長者疾に遇ひ命終す。其の後一兒出家し學道を學び、其の父の死後[二三]佛圖の供具皆悉く轉た少し、衆僧罷めて散じ其の寺荒壞し人の住止する無し。其の兒比丘勤力めて檀越、知識を招き合せ錢財を積聚し缺落を修補す。復、衆僧を合し還び供養を繼ぐ。時に多衆其の寺に住在し勤精專修す。諸道を具する者あり。時に彼の道人僧の自在を作す。時に羅漢道の人有り。次いで日直を知り草土を掃除し中庭に積在きて、時に除棄せず。時に比丘、惡心にて呵叱すらく「今、此の比丘奴の如く異ることなし、地を掃くを知ると雖も除棄すること能はずと」と。』

「阿難よ、當に知るべし、彼の時の比丘、大自在なる者今の富那奇比丘是れなり、其の惡心にて得道の人を呵し之を比するに奴と爲すに由り、此の一言に由り五百世の中恒に奴の身と爲る。復、衆

【二二】噠嚫。布施の意味にて、今は食後の法施のこと。

【二三】佛圖。梵語、(Buddha)(佛陀)の音譯。

下して地を蹋み給ふ。是の故を以て天地大いに動く」と。爾の時、世尊、始めて精舍を出で、外に住在し給ふ。八[一九]金剛神、八面に住す。時に[二〇]四天王、前に在りて道を導く。時に天帝釋、諸の欲界の天子百千萬衆を從へ左面を侍衞し、大梵天王色界諸天無央數と與に右面に住在す。弟子阿難、佛後に住在し大衆圍遶せり。光明を放演し天地を照曜す。虛空を飛昇し放鉢國に趣むき給ふ。其の中道に於て五百の作人の千の犁を具ふる牛を以て隴畝を墾治するに逢ふ。諸牛、佛、空に乘じて過ぎ身より金色の光を放ち普く世界を照し給ふを見、諸の牛至心に世尊を仰ぎ視て心に篤敬を存し、隴に住して行かず。作人、牛の向ひ仰ぎ觀瞻するを見て所以を驚き怪しみ、亦佛を視見、即ち各跪いて白さく「咸、歸誠を興す。唯、願くば如來よ、當に哀愍し暫く下りて度を開き生死を離れしめ給へ」と。佛、悲心を以て其の度す可きを知り即ち下りて爲めに種々の妙法を說き給ひ、五百の作人心意開悟し、二十億[二一]洞然の惡を斷ち須陀洹を成ぜり。時に牛命終り、盡く天上に生れ、普く皆歡喜す。時に如來即ち復發引し、到り前むこと未だ遠からざるに五百の童女有り共に曠野に遊ぶ。地の金色を見て其の變を仰ぎ視、虛に乘りて行き給ふを見、咸歡喜を懷き、叉手して白して言く「唯、願くば天尊よ、心に矜愍を垂れ暫く濟度し給へ」と。佛、其の宿行の應に度化すべきを知り即ち所願を稱へ、其の所に往至り堪能に應ずるに隨ひ爲めに諸法を說き給ふに、信受し開解して須陀洹を成ぜり。變を感ずること已に竟り、遂に步みて至る。復、五百の仙人有り、林澤に處在し光地を普く照し悉く金色なるを見、仰いで如來諸の大衆と與に遊行し虛に乘じ給ふを觀、心に踊躍を懷き敬心倍隆なり。仰ぎて佛を請じて言く「唯、願くば大聖よ、暫く神形を勞し因つて過度し道次に在るを聽し給へ」と。佛、其の本緣を覩て之を度す應きを知り、尋いで下りて前に在す。沙門と作るを求む。佛、即ち之を聽し給ふ。「善く來りぬ。比丘よ」と。便ち沙門と成る。因りて爲めに說法し給ふに、心淨く開解し諸漏永く盡き阿羅漢と成り、佛の後に隨從し空に乘じて至れり。時

【一九】金剛神。金剛杵を執りて佛法を護る神祇。

【二〇】四天王。帝釋の外將なり、持國天・增長天・廣目天・多聞天等なり。

【二一】洞然。ふかき貌。

を以て樹の兩邊を夾さみ、種々の妙寶を以つて道の側を界し、中に於て經行し、漸く其の國に至る。羨那、問ふて曰く「是は汝の師か不や」と。答へて曰く「非なり、是は佛の弟子にて名を沙門二十億と曰ふ。比丘中に於て精進第一なり。」華香・妓樂を以て供養し畢訖り、卽便ち過ぎ去れり。

次に後復大劫賓寧有り、七寶の樹を化作し、樹上に復種々の華果有り、樹下に皆七寶の高座有り其の座上に處り大光明を放ち、虛に乘じ來至る。羨那、問ふて曰く「是は汝の師か不や」と。答へて曰く「非なり、是は佛の弟子にして劫賓寧と名づく。勇猛に[一七]挺特し、端正第一なり」と。羨那、聞き已り歡喜し華香・妓樂を供養し供養已に訖りて卽ち自ら過ぎ去れり。

次に弟子有り、賓頭盧埵闍と名づく。寶蓮華に坐し、項佩の日光千光明を放ち天地に暉赫し、虛空を飛昇し其の國に來至る。羨那、問ふて曰く「是は汝の師か不や」と。答へて曰く「非なり、是は師の弟子にして賓頭盧埵闍と名づけ、善く能く定に入り坐禪第一なり」と。卽ち香華を以て供養し畢訖り、卽ち自ら過ぎ去れり。

次いで羅睺羅、尋いで後に趣引く、自ら其の身を化して轉輪王と作り、千子、七寶皆悉く具足す。前後に導き從ひ、其の國に來至る。羨那、問ふて曰く「是は汝の師か不や」と。答へて曰く「非なり、是は佛の子にして、名を羅睺羅と曰ふ。設し家に在らば四天下を領し七寶自ら至り、[一八]兵仗を用ひずして自然に降附せむ。今此の位を捨て出家學道して阿羅漢を得たり。六通清徹し罣礙ぐる所無し。今、故に身を變じて是の形位を作す」と。羨那、聞き已り香華・供養し、卽ち自ら過ぎ去れり。五百の神足の弟子各各變を現じ稱げて計ふべからず。

爾の時、世尊、諸弟子盡く彼の國に適くを知り大光明を放ち天地を照曜す。普く皆金色なり。時に富那奇、其の兄に語りて曰く「今者、世尊、始めて意を發して此に來らむと欲し給ふ。故に先づ光を放ち是の瑞應を作す」と。爾の時、世尊、始めて座上に於いて足を下し、地を蹋み給ふ、時に應じて天地六反震動す。時に富那奇、其の兄に語りて曰く「今者、世尊、始めて座上に於て足を

【一七】挺特。ぬきんでること。

【一八】兵仗。武器。

く「非なり、是れは師の弟子なり、阿那律提は是の大衆に於て天眼第一なり」と。羨那、之を聞き歡喜恭敬し華香供養す。卽ち自ら過ぎ去れり。

次いで後復、佛の弟難陀有り、千馬を化作し七寶の車に駕す。車の上に復七寶の大蓋有り光明を放演し四出照曜す。虛に乘じて馳至し放鉢國に詣る。羨那之を見て富那奇に問ふやう「是は汝の師か不や」と。答へて言く「非なり、是れは世尊の弟にして名を難陀と曰ふ。衆相具足し德行純備なり」と。羨那、卽ち香華・妓樂を以て供養畢訖り、卽ち自ら過ぎ去れり。

時に須菩提、次いで後復來りて七寶の山を作る。瑠璃の窟に坐し身より種々雜色の光明を放ち、天地を照曜し其の國に來至す。羨那、問ふて曰く「是は汝の師か不や」と。答へて言く「非なり、是は師の弟子にして、須菩提と名づけ、廣智多聞、解空第一なり」と。卽ち華香を以て供養し畢訖り。卽ち自ら過ぎ去れり。

次に分耨文陀尼子有り一千の迦樓羅王を化作し身を結び座と爲す。四向に頭を羅ね口に衆寶を含み哀和の音を發す。復、其の上に於て大寶座を施して其の上に坐し、虛に乘じて來至る。羨那、問ふて曰く「是は汝の師か不や」と。答へて言く「非なり、是は我と同師にして、名を分耨文陀尼子と曰ふ。辯才應適し最も第一と爲す」と。卽ち華香を以て供養し訖已る。便ち自ら過ぎ去れり。

次に復、弟子を優婆離と名づく。千の鴈を化作し身を聚めて相ひ結ぶ。頭口聲を出し哀鳴相和す。口に衆寶を含み虛空を飛翔す。其の身の上に於て衆寶の座を敷き大光明を放ち四遠を照曜す、身、其の上に坐し馳奔して來至る。羨那、問ふて曰く「是は汝の師か不や」と。答へて曰く「非なり、是は師の弟子優波離と名づく、衆比丘に於て持律第一なり」と。羨那、聞き已り卽ち華香を持つて供養し畢訖り、卽ち復過ぎ去れり。

次いで復、復、沙門二十億有り、行樹を虛空の中に化作し紺瑠璃を以て經行道を作り、復、七寶

し罣礙ぐる所無し。羨那、說くを聞き倍恭敬を加ひ、香・華・妓樂悉く以て供養す、供養已に訖り卽便ち過ぎ去る。

次いで後に復摩訶迦葉有り七寶の講堂を化作し、七寶莊校し、身より光明を奮ひ、晃昱四布し其の國に往至る。羨那、之を見、富那奇に問ふやう「是は汝の師か不や」と。答へて曰く「非なり、是れは師の弟子、摩訶迦葉なり、淸儉知足常に[一二]頭陀を行じ、諸の[一三]斷賤を愍み貧乏を賑濟す」と。羨那、卽ち香・華・妓樂を以て供養し畢訖る。卽時、過ぎ去る。

時に舍利弗、次いで後に千の師子に乘り[一四]槃身して座と爲す、頭皆四出し、口、七寶を雨らし雷吼え咆哮し天地を震動す。復、其の上に於て大寶床を敷き莊校嚴飾す、而して其の上に處る。身より光明を出し普く四域を照し虛空を飛騰し[一五]翺翔して至る。羨那、問ふて曰く「是れは汝の師か不や」と。答へて曰く「非なり、今、乘り來る者は是れ師の大弟子にして廣博大智、舍利弗と名く」と。羨那、聞き已り倍增歡喜し、卽ち華・香・妓樂を以て供養す。供養し訖已り、卽ち以て過ぎ去れり。

時に大目連尋いで後に發し、千象を化作し頭を羅ね四出す。其の諸象の口に皆六牙あり、其の一つの牙の頭に七つの浴池水有り、一々池中に七蓮華有り、其の一つの華の上に七玉女有り、種々に變現し其種量り無し。大光明を放ち四隣を感動す。復、其の上に於て寶座を安置し自ら其の上に坐し、虛に乘じ徑に至る。羨那、問ふて曰く「是れは汝の師か不や」と。答へて言く「非なり、是は師の弟子大目連と名づく。神足第一にして、德行純備なり」と。羨那、說くを聞き歡喜戴仰し香華・妓樂を以て供養す。供養し已り卽便ち過ぎ去る。

次いで後に復、阿那律提有りて自ら七寶の浴池を化作す。浴池の中に復金色の蓮華を生ず。蓮臺は皆是れ七寶の合成なり。其の華の上に處し結跏趺坐す。[一六]項佩の日光天下を照曜し、光に照さるゝ處皆是れ金色なり。虛に乘じて國に至る。羨那、復、問ふやう「是は汝の師か不や」と。答へて言

【一二】頭陀。衣服・飮食・住處の三種の貪着を抖擻ふ行法を云ふ。
【一三】斷賤。こものや賤民。
【一四】槃身。身をわだかまらすこと。
【一五】翺翔。とび廻ること。
【一六】項佩。うなじのところ。

やう「誰ぞ煙と水を放つぞ」と。佛、阿難に告げ給ふやう「此は富那奇羅漢比丘、放鉢國に於て兄の羨那を勸め佛及び僧を請ずるが故に煙・水を放ち以て信請を爲すなり」と。因つて阿難に勅し給ふやう、「僧中に往至り、籌を行ひ神足の比丘に告げ語り、明日悉く來り往きて羨那の請に應じ、因つて變化を現はし以て彼の國に遊ばしめよ」と。時に諸の比丘各各籌を受く。阿難、命を奉じ僧を合せて籌を行ふ。「神足有る者明、請を受くべし」と。明日の晨旦、僧に食を作る人奇虔直奇と名づく、(此に續生と言ふ)、其の人已に阿那含道を得たり。恒に一切衆僧に供給す。結跏趺坐し身光明を放つ。四出し照曜す。食具を引作し、瓢と杓と〔一〇〕健支と百斛の大釜と其の後に隨ひ虛に乘じて飛行し、其の國に趣向く。羨那、問ふて曰く「是れは汝の師か不や」と。答へて言く「非なり、是れは諸の比丘の食を作る人なり、故に來り相佐け飲食を辦具す」と。是に於て羨那、卽ち華香・伎樂を以て供養す。供養畢竟りて卽便ち過ぎ去る。

次いで後復十六の沙彌均提の等有り、各神足を以て樹林を變作し華を採り果を採り種々に變現し、身光明を演べ天地を晃曜す。虛を凌ぎ〔一一〕繼邁す駱驛として到る。羨那、復問ふやう「是、汝の師か不や」と。答へて曰く「非なり、斯の諸人等先づ前に來る者なり。乃ち是れ我等の同師の弟子なり。年始めて七歲羅漢道を得たり。諸漏永く盡き神足純ら備はり、今、故に先に來り華を採り果を具ふと。卽ち華香を以て具足し供養す。供養し訖已る。各各過ぎ去れり。

次に復耆年の大阿羅漢化して千龍と作り身を結び座を爲る。頭皆四出す。雷吼え天を震はす。其の諸の龍口より悉く七寶を雨らす。復、其の上に於て大寶座を施す。虛空に飛昇し身より光明を放ち天下を照曜し而して彼に來至る。羨那、復、問ふやう「是れは汝の師か不や」と。答へて曰く「非なり、是れは師の弟子なり、憍陳如と名づく、佛、初め道を得て鹿野苑に在り、初めて法輪を轉じ廣く衆生を度し給ふに、斯等の五人最も先に化を受く。弟子の中に於て第一の上首なり、神足具足

【一〇】健支。淺き鐵鉢。

【一一】繼邁。つゞきすゝむこと。

極めて手を撾打す。比丘、歡喜し顏色變らず。時に婆羅門、此の比丘を觀るに毀られ害を被り苦困死に垂むとして怨色無く瞋恨を生ぜず。便ち自ら悔責し己の過を懺謝す。時に富那奇、彼の國中に於て勤修懈らず諸の結使を盡し心忽ち開解し、無漏の證を獲安居已に竟れり。便ち檀越を辭し、其の兄に囑及す「愼みて海に入ること勿れ、大海中の難、甚だ多く無數なり、兄の財寶七世に用ふるに足る」と。囑及已に竟り還び佛の所に往き稽首し問訊す。問訊訖竟りて隨意に住止せり。

時に兄羨那、其の勅を惟はず、諸の衆賈有り、羨那に來歸し種々曉し「共に大海に入らむ」と喚ぶ。羨那逆はず「卽ち共に去る可し」と。海の渚の上に至り隨意に自ら重くす。唯、羨那有り多く牛頭栴檀の香木を取り船に滿して還る。龍、性慳悋にして其の香木を惜み、卽ち道中に於て其の船舫を捉へ帆を擧げ風を【七】羅んで過ぐるを得ること能はず。一切の衆客定むで計り死を恐る。羨那、一心に富那奇を稱するやう「今、苦厄に遭ふ。願くば拔濟せよ」と。時に舍衞國の祇洹精舍に在り坐禪して思惟す。遙に天耳を以て兄羨那の危厄に處在り至心に自ら陳べ悲酸に一心に富那奇と稱するを聞く。卽ち羅漢の神足を以て猶健夫の臂を屈伸するが如き頃に身を變じて金翅鳥王に化作し大海に至り其の龍を【八】恐懼す。龍、鳥の形を見て怖れて海底に入る。衆賈是に於て安穩にして家に還る。時に富那奇、其の兄を敎化し世尊の爲めに一小堂を立てしむ。堂を覆ふ材木純なる栴檀を以てし、其の堂已に成り其の兄を敎化し佛を請ぜしむ。羨那、答へて言く「佛を請ずるには、何等の物を以て宜しとし、能く世尊を屈せむや」と。時に富那奇、俱に其の兄と供養を辦足し、各香爐を持ち共に高樓に登り遙かに祇洹に向ひ燒香し佛及び聖僧に歸命す。唯、願くば明日鄙國に臨顧し愚朦の盲冥の衆生を開悟せよ」と。願を作し已訖る。香煙意の如く虛に乘じて世尊の頂上に往至り、相ひ結び合ひ聚りて一煙の蓋と作る。後、遙に水を以て世尊の足を洗ふに水も亦虛に從ひ猶【九】釵股の如く、意の如く世尊の足の上に徑到る。爾の時、阿難、是の事を覩見し怪しみて佛に問ふ

【七】羅。はらむ。

【八】恐懼。恐ろしくせまること。

【九】釵股。かんざしのまた。

す。因つて其に佛に白さく「出家を求索む」と。佛、即ち許可し、聽して入道せしむ。讃えて言く「善く來れり」と。便ち沙門と成る。佛、爲めに種々苦切し說法し給ひ、五百の比丘心意開解し諸の苦際を盡し阿羅漢を成ぜり。唯、富那奇、結使深重なり、佛、爲めに法を說き給ふも未だ能く暢達する能はず。精誠、困篤し始めて初果に入り、勤精、修習し休懈有ること無し。時に諸の比丘安居の日近づく。佛、各各隨意安居するを聽し給ふ。時に富那奇、往きて佛に白して言さく「弟子、放鉢國に往至き三月安居せんと欲す、唯、願くば聽し給へ」と。時に世尊富那奇に告げ給ふやう「彼の國人惡信、邪倒の見なり、汝、今初めて初學、佛法の中に於て未だ佛法の聖行を具足する能はず。設し彼の人の爲めに毀辱せらるれば當に之を奈何せんとするか」と。富那奇曰く「設令人極めて理として毀辱せらるゝも但、害せらること莫し」と。世尊、又告げ給ふやう「彼の人極めて惡にして設し害を被むる時は當に復、云何」と。富那奇曰く「世尊よ、當に知るべし。正に彼の人をして毀辱し害を加へしむるも我が命を斷つこと莫し。猶其の恩を戢む」と。佛、又告げて曰はく「汝、彼に往至り、忽ち惡人に遭ひ汝の命を殘害せば益汝に無し、當に之れ如何」と。富那奇言く「世尊當に知るべし、一切萬物形有らば無に歸す。彼れ若し我を殺さば分として其の死を受けむ」と。時に世尊、富那奇に告げ給ふやう「彼の諸の惡人毀辱し害を加へ及び未だ命を斷たざるも汝當に瞋るべきや不や」と。富那奇、曰く「不なり世尊よ、正に彼の人をして無根にて謗られ毀辱し極めて世に不軌の事をせしむるも、設ひ刀杖を加へ打害し次いで殺すも、復、未だ殘戮せず當に命を斷つに臨むも終に一念恚の心を生起せず」と。佛、即ち讃じて言く「善き哉、善き哉、弟子の行ふ所唯是れ快と爲す」と。時に富那奇、衣鉢を攝持し佛を禮して辭退し放鉢國に至る。明日、晨旦城に入り乞食し一人の大富の婆羅門の家に至る。時に婆羅門、是の比丘を見て即ち惡心を懷き來りて罵り逐ふ。比丘、即ち異家に往き乞食す。其の明日自り其の舍に續げで乞食す。時に婆羅門復、

數倍なり。

爾の時、復、五百の賈客有り相與に要を結び大海に入らむと欲す。富那奇を喚び共に伴侶と爲す。富那奇、兄に白すやう「求めて共に寶を採らむ」と。兄、卽ち之を聽し、其の須ゆる所を給す。伴とともに大海に往至り、意の如く寶を取り自ら重ねて還る。中道に嶮難の處に來至り、衆人咸閻浮提の内三日現るゝこと有るを見、怪しみて導師に問ふやう「今、三日出づ、是れ何の[五]瑞應ぞや」と。導師、答へて言く「汝等、當に知るべし。一は是正しく日なり、二は是れ魚の眼なり、其の間白きは此れは是れ魚の齒なり、今、水の投ぜらるゝ黒冥の處は是れ魚口なり。最も畏る可しと爲す。我等、今活路無し、魚口に臨み至る。定むで討るに死に垂むとす」と。一賢者有り佛道を敬信し、衆賈に告げて語るやう「唯、當に虔心南無佛と稱ふべし、三界の德大にして佛に過ぐる者無し、厄を救ひ急に赴き、一切を矜濟ひ給ふ。最も能く苦厄の衆生を覆護す。唯、佛のみ神聖なり、願くば危險を救ひ此の諸人の毫釐の命を濟へ給へ」と。時に摩竭魚佛名を稱するを聞き卽ち還び口を閉じ海底に[六]沈竄せり、衆賈是に於て安穩に國に歸へりぬ。時に富那奇、大金の案を取り諸の妙寶と、摩尼珠等を以て莊累ね積滿し、兄の羨那に奉り長跪仰望し大兄に白して言く「我已に兄の爲めに財寶を畜ひ積み舍宅所有一切具足す。子孫七世食するも用つて盡きず。唯、願くば大兄よ、我に出家を聽せ」と。羨那、答へて曰く「吾、相ひ違はず、但、卿少年くして未だ人倫に達せず。佛法要ず重し。之を持つこと甚だ難し。更に數年に比び乃ち意を遂ぐべし」と。富那奇、曰く「大兄よ、當に知るべし、人命無常なり、斯れ保し難かるべし、前に大海に在り、摩竭魚の船を吸ひ口に趣くに値ふ、命危くして死に垂むとす。佛の神恩を蒙り餘命を濟ふを得たり。唯、念ふに許しを垂れ道次に在るを聽せ」と。兄、卽ち之を聽す。

時に富那奇、其の五百の寶を採るの衆と與に咸信心を以て舍衞國に至り佛の所に到り禮敬し問訊

【五】瑞應。大正本、端に作るは誤植か。

【六】沈竄。しずみかくること。

飲食を與へよ」と。「手中錢無し食を索むも得ること叵し」と。小兒瞋恚り、往きて其の母に語るやう「今、富那奇、懷情、普からず、伯父の兒を見れば意に隨つて給し稱ふも、我れ從ひ食を索むるも獨り與へず」と。母、兒の言を聞き恨心便ち生ず、云く「此の婢の子、敢て偏心を懷く」と。勝軍家に還る。其の婦、及び兒、忿心未だ息まず。具に上事を以て勝軍に向つて說けり。勝軍、之を聞き倍憤怒を懷く。「此の婢子の奴、敢て我が敎に違ひ我が兒を薄賤す。吾當に之を殺すべし」と。懷情已に定まり兄に分居を求む。兄、父の勅を敬ひ即時に不可とす。勝軍懊惱し數求めて止まず。兄、意の盛なるを見て其の規する所を察し弟の瞋恚を知り意已むことを得ず即ち其の言を可とし、各分居す。弟、一切の所有家財養生の園宅を以用つて一分を作し、富那奇を以用つて一分と作し、此の二分を以て兄の之を取るを恣にす。謂く兄、財を取り、規として自ら富那奇を取りて之を殺さむと欲すと。兄、勝軍の心、富那奇を害するを知り慈心憐愍し富那奇を取り空しく妻子を將ゐ單り來り出で餘の家に依つて住す。時に富那奇、其の嫂に問ふて曰く「我に少錢を與へよ、用て薪を買はむと欲す」と。兄嫂答へて曰く「唯、五錢有り」と。即ち解ち用つて與ふ。時に富那奇、此の五錢を持ち、市に詣りて薪を買ふ。一束の薪賣るに五錢を索むるを見、時に富那奇、即ち其の薪を買ひ雇ふに五錢を以てす。尋いで牛頭栴檀の香木、薪束の中に在るを見て意甚だ歡喜し、薪を持ちて家に歸り、此の香木を取り分ちて十段と爲す。

　王夫人の熱病の極に値ふ。當に牛頭栴檀の香木を須ひ摩して以て身に塗らば以て其の病を除くべしと。國を擧げて推し覓め之を求むるも得叵し。即ち國內に令し「誰か、香木一兩有らば當に黃金千兩を與ふべし」と。時に富那奇、往きて王の募に應じ、一小段を持ち用て王家に奉る。王、本令の如く千兩金に償ふ。是の如く展轉し十段の香木悉く皆售り盡し金萬兩を得たり。因つて用て起居せり。園田・舍宅・象馬・車乘・奴婢・畜生・家事是に於て豐富具足すること前より過ぎ踰え居を合するに

み篤し、數諸醫を召し其の病を瞻養し看視し醫師甘饍盡く供す。醫、利養を貪り殘病を遣らむと欲し逆に姦詐を懷き、更に餘藥を與へ病をして瘥えざらしむ。時に一婢有り長者を供養し飮食湯藥恒に時宜を知る。長者に白して言く「今より以去此の諸の醫師を更に喚ぶに足らず。惡意相ひ誤り病更に瘥えず。今、我、自ら當に前の法度の如く病に隨ひ須ふる所あるべし。更に醫を喚ぶこと莫れ」と。婢、便ち看養す、長者瘥ゆるを得たり。是に於て其の婢長者に白して言く「大家よ、我、大家を看、瞻視し供養して病除き瘥ゆるを得たり、唯、當に愍を垂れ我に一願を賜ふべし」と。長者、告げて曰く「卿、何等を求む」と。時に婢便ち言く「大家我と共に通ずることを得むと欲す。若し違を見ざれば當に我が志に從ふべし」と。長者逆はず。卽ち其の願を遂げ交通已に竟り、便ち身有るを覺えて時に婢懷妊す。十月已に滿ち一男兒を生み、其の願滿足す。故に因りて其の兒に字し富那奇と名づく。(此に滿願と言ふ)。端正福德錢財を宜しくし善く能く【二】估販す。種々治生し倍利を獲て盈す。至る所到る處不吉有ること無し。復、長者の遺體を稟受すと雖も才藝智量人表に出過せり。然れども是は斯れ賤しき婢使の生む所なれば兒の次に及ばず名奴例に在り。

爾の時、長者復、痼疾に嬰り困篤床に著く。將に死するに久しからざらむとす。遺言し慇懃なり。其の二子に告ぐるやう「吾、設し沒する後愼みて分居すること勿れ」と。長者、病を被り醫藥を服すと雖も救濟すること能はず。奄に命終を致せり。爾の時、二子父の教を承け用つて共に一處に居、【三】年載を經歷す。時に緣有るに値ひ他國に至り治生を【四】賈作せむと欲す。各家居の婦兒を以て富那奇に付囑し「我が爲めに斯等大小及び家の餘事を看視せよ、悉く用て相ひ累はさむ。正に爾らば別れ去らむ」と。時に富那奇、卽ち其の教を受け家事を營理す。時に二兄の子數其の所に往き飮食及び餘の須ふる所を求索む。時に富那奇其の意に稱へ給し其の求むる所に隨ふ。買ひ索め之に與ふ。卒に一日錢を持ち行くこと無きに値ふ。勝軍小兒、富那奇に白さく「我、今、飢渴せり、我に

【二】估販。あきなふこと。

【三】年載。大正本、戴に作るも誤植か。

【四】賈作。あきなふこと。

く、嶮路を經由し大山谷中極めて黑闇と爲す。時に諸の商人迷悶し愁憂す。財物を失するを恐る。此の處賊多くして復怖畏れ。咸共に心を同じくして天地・日・月・山海一切の神祇に向ひ啼哭し哀を求む。時に[五]薩薄主、諸の商客の迷悶の苦を愍み便ち告げて言曰く「汝等、怖るゝこと莫れ。各自意を安むぜよ、吾當に汝の爲めに大照明と作らむ」と。是の時薩薄卽ち白氎を以て自ら兩臂に纒ひ酥油を之に灌ぎ然して以つて炬に當て諸商人を將ゐ七日を經て乃ち此の闇を越せり、時に諸の賈客其の恩を感戴し慈敬すること量り無し。各安穩を獲て喜び自ら勝へず。

佛、阿難に告げ給ふやう。「爾の時の薩薄とは豈異人ならむや。我身是れなり、我、昔より來國城・妻子・及び肉血を以て恒に衆生に施せり。是を以ての故に今特尊を致せり。爾の時の五百の諸の賈客とは豈異人ならむ乎、今此の五百比丘是れなり。過去世の時生死の力を以て其の光明を施し、今成佛を得て亦無漏の慧眼を施せり」と。

爾の時、衆會佛の說き給ふ所を聞き須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る有り、辟支佛の善根を種うる有り、或は無上道意を發し度する者甚だ多し。慧命阿難、及び諸の衆會佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

三十四、[一]富那奇の緣品　第二十九

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、放鉢國に一人の長者有り曇摩羨と名づく。（此に法軍と言ふ）。彼の國中に於て巨富第一なり、時に長者の妻、一男兒を生む。（王の）出軍し餘國を征伐するに値ひ、因りて其の兒を字し號して羨那と曰ふ。（此に軍と言ふ）。後、復兒を生む。王、出軍し征討して勝を得るに値ふ。復、其兒を比耆陀羨那と字す。（此に勝軍と言ふ）。二子長大し各爲めに妻を娶る。爾の時、長者疾に遇ひ困

【五】薩薄主。隊商主。

【一】富那奇緣品。麗本、西本欠。

前に在りて導く。將ゐて摩竭國に至り、諸の盲人を棄てゝ澤中に置く。是の時盲人所在を知らず「是れ何の國と爲すや」と互に相ひ手を捉へ他の田を經行し苗穀を傷破る。時に値、長者有り來つて田に行き五百人の[四]苗稼を踐蹋り、傷壞甚だ多きを見、瞋り憤怒り盛んにして、勅して痛手を與ふ。乞兒哀みを求め具に上事を宣ぶ。長者之を愍れみ一人の使人をして將ゐて舍衞に詣らしむ。適彼の國に達す。又、聞く「世尊、已に復、摩竭提國に來向き給ふ」と。是の時使人復還び將來ひて摩竭國に向ふ。時に諸の盲人佛を欽仰し心を係けて見むと欲し、肉眼閉づと雖も心眼已に覩る。歡喜中に發り疲勞を覺へず。已に摩竭に至り、復「世尊已に舍衞に還り給ふ」と聞き。是の如く追ひ逐ふこと凡そ七返を經たり。爾の時、如來諸の盲人を觀るに善根已に熟し、敬信純固なり。舍衞國に於て便ち之に住持りたまふ。使、盲人を將ゐ漸く佛の所に到る。佛の光、身に觸れ驚喜量り無し。卽時兩目卽ち開明を得たり。乃ち如來を見るに四衆圍遶し身色晃昱紫金の山の如し。感戴し殊に澤ふ。喜び自ら勝へず。前みて佛の所に詣り五體を地に投げ佛の爲めに禮を作す。禮を作し畢訖りて、異口同音に共に佛に白して言さく「唯、願くば矜を垂れ道次に在るを聽せ」と。時に佛告げて曰く「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら墮ち法衣身に在り重ねて爲めに法を說き給ふに、阿羅漢を得たり。爾の時阿難諸の盲人を見るに肉眼明淨にして又諸漏を盡し阿羅漢を成ぜり。長跪合掌し前みて佛に白して言く「世尊の出世實に復奇特なり、爲す所の善事不可思議なり、又此の諸の盲人特に殊澤を蒙り肉眼既に明かなり。復慧眼を獲たり。世尊の出世は正に此等の爲めなり」と。佛、阿難に告げ給ふやう「我れ但、今日のみ其の冥闇を除くに非ず、乃往久遠無量劫の時も亦此等の爲めに大黑闇を除けり」と。阿難佛に白さく「不審なり、世尊よ、過去世の中此の爲めに闇を除く共の事云何」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『乃昔久遠無量無數の阿僧祇劫に此の閻浮提に五百の賈客共に曠野を行

【四】苗稼。いねのなへ。

今の調達是れなり。時に我が眼を乞ひし婆羅門とは今此の會中の盲の婆羅門にて道を得し者是れなり。先世の時我其の眼を與ふ。乃至今日我を見るに由るが故に既に肉眼を得、復、慧眼を得たり。我、汝曹の爲めに世世苦行し功を積み徳を累ね今日佛を致せり。汝等應に當に出要を勤求すべし」と。佛、是の語を説くの時諸の會に在る者佛恩を感念し內身克厲し須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り、無上道意を發す者有り。賢者、阿難、及び諸の會者佛の説く所を聞き歡喜奉行せり。

三十三、[一]五百の盲兒、往返して佛を逐ふ縁の品　第二十八

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住しき。

爾の時、毘舍離國に五百盲人有り、乞匃して自活す。時に人の言を聞く「如來出世し給ふこと甚だ奇、甚だ特なり。其の衆生有りて之を覩見奉る者[二]癃殘の百病皆除愈す。盲は視え聾は聽き瘂は語り僂は伸ぶ。[三]拘躄の手足、狂亂は正しきを得、貧は衣食を施し愁憂苦厄悉く能く解き免る」と。時に諸の盲人此の語を聞き已り還び共に議りて言く「我曹罪積り苦毒特に兼ねたり。若し當に佛に遇はゞ必ず救濟せられむ」と。便ち人に問ふて言く「世尊今者は何國に在すと爲すや」と。人、之に報へて曰く「舍衛國に在す」と。此の語を聞き已り共に路の側に於て言を卑くし哀を求むるやう「誰か慈悲有り我等を愍む者ぞ。願くば將ゐ導き、舍衛國に到り佛の所に至れ」と。喚び倩ひ時を經るも應ずる者有ること無し。時に五百人復共に議りて曰く「空手にて人を倩ふも人應ずる者無し。今、共に行乞し人人各金錢一枚を得、以用つて人を雇はむ。彼に達することを得るに足らむ」と。各各行乞し數時を經て人人一錢を獲たり。凡そ五百有り錢を合すること已に竟れり。左右に人を喚び「誰か我等を將ゐ舍衛に到る者ぞ金錢五百にて其の勞苦を雇はむ」と。時に一人有り來りて共に相ひ可とす。相ひ可とすること已に定まり錢を以て之に與ふ。諸の盲人に勅し展轉して相ひ牽ゐ自ら

【一】五百盲兒往返逐佛緣。麗本、西本欠、衆經撰雜譬喩No. 32.
【二】癃殘。腰曲りてせむしの如くなれる病。
【三】拘躄。まがり兩足たゝざること。

虛からずば此の婆羅門我が眼を得て用つて便ち當に視るべし」と。復、一眼を安を尋いで用つて視ることを得たり。

爾の時に當り天地震動し諸天の宮殿も亦動搖す。時に諸の天人愕然として驚懼し、尋いで菩薩の目を剜り布施するを見、咸皆飛び來り虛空に側塞ぎ諸の華香を散じて用つて供養し、讃へて言く「善き哉、大王の作す所甚だ奇、甚だ特なり」と。天帝、前みて問ふやう「實に奇特と爲す。能く是の事を作す。何の報を求めむと欲するや」と。王、答へて曰く「魔・梵・四王・帝釋・轉輪聖王等の三界の樂を求めず。此の功德を以て誓つて佛道を求め衆生を度脫し涅槃の樂みに至らむ」と。天帝、復、問ふやう「汝、今眼を剜り苦痛是の如し。頗る悔退有り瞋恚するや不や」と。王、言く「悔いず、亦瞋り恨みず」と。天帝、復言く「我、今汝を觀るに、血出で流離し形體戰悼す。悔恨せずと言ふも此の事信じ難し」と。王、卽ち自ら誓ふやう「我、眼を剜り施し悔恨の意無く用つて佛道を求む。會當に成ずるを得 審かに虛ならずば我が兩眼をして平復し故の如くならしめよ」と。王の誓ひ已に訖り、兩眼平完し明淨徹視す。倍 前より勝る。諸天人民一切の大會慶と稱ひ喜び踊り自ら勝ふること能はず。王、婆羅門に語るやう「今、汝に眼を與ふ。汝をして視ることを得せしむ。後、佛を成ずるの時復當に汝をして慧眼にて見ることを得せしむべし」と。婆羅門を將ゐ寶藏の中に入り「恣に一擔を取れよ」と、發遣し本國に還り到らしむ。波羅陀跋彌、自ら出でて之を迎ひ、已に見え先づ問ふやう「眼を得たるや不耶」と。答へて言く「眼を得たり、我、今用つて視る」と。復、問ふて言曰く「彼の王、今者存すと爲すや亡しと爲すや」と。答へて言く「諸天來下し、尋いで卽ち誓願し眼還び平復す。眼前よりも好し」と。波羅陀跋彌、以つて此の語を聞き、懊悶憤結し心裂けて死せり。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の須提羅王を知らむと欲せば今我が身是れなり、波羅陀跋彌は

り高く斬刺の血四海に倍す。而して母の乳を飮むこと四大江に過ぐ。別離の悲涙四海より多し。地獄の中に破壞の身を燒き煮、斫り、刺し眼を棄つること無數なり。餓鬼の中に若干の形を受け、火、身より出で還び自ら焦然す。是の如くして眼を破壞することも亦無數なり。畜生の中に更に相ひ食噉し種々死傷すること復計る可からず。人間に身を受け壽多く中夭す。或は色欲を爭ひ還び相ひ圖謀り共に相ひ傷殺し、死一徹に非ず。是の如く〔三〇〕無央數の眼を破壞す。正に生天せしむるも命亦久しからず本を計つて以來亦多形を受く。此の三界に於て五道を廻波し貪・恚・癡の爲めに身を碎くこと塵の數の如し。未だ曾つて給施し用つて佛道を求めず。此の如き臭眼は危脆の物なり是の如きは久しからずして自ら爛壞すべし。今、用つて施すことを得ん。應ぜず與へざらむよりは今此の眼を持つて布施し佛の無上一切の智眼を求めむ。若し我が願成らば當に汝等に清淨の慧眼を與ふべし。汝、我が無上道意を遮ること莫れ」と。其の會に在る者默然として言無し。正に左右に語るやう「我が眼を挑る可し」と。左右の諸臣咸各言ひて曰く「寧ろ我が身を破ること猶〔三一〕芥子の如きも、手を擧げて大王の眼に向ふこと能はず」と。王、諸臣に語るやう「汝等、其の色正に黑く下を諦め視る者を推覓めて便ち將來れよ」と。諸臣求め得て將來り王に與ふ。王、卽ち刀を授け勅語し刳らしむ。刳りて一眼を得たり。王の掌中に著く。王、便ち立つて誓ふやう「我れ此の眼を以て布施し誓つて佛道を求めむ。若し審かに當に佛道を成ずるを得ば此の婆羅門我が此の眼を得て用つて卽ち當に視るべし」と。是の誓ひを作り已り王卽ち眼を以て婆羅門の〔三二〕眼匡の中に安く尋で得て用て見るに、王の身と及び餘の衆會とを見ることを得たり。歡喜踊躍し自ら勝ふる能はず。卽ち王に白して言さく「王の一眼を得て我用つて視るに足る。願くば一眼を留め、王自ら用つて視よ」と。王、復、答へて言く「我、已に言うて決せり、兩眼を與ふることを許せり。言に違ふ應らず」と。便ち更に一眼を刳り復掌中に著け重ねて復誓を立つ。「我、眼を持つて施し佛道を求む。審かに能く成佛し至誠

【三〇】無央數。數つくることなきこと。

【三一】芥子。からしな、又なたね。

【三二】眼匡。眼のはこ。

り殿前に徑り至る。高聲に唱へて言く「我れ他國に在りて王の名德を承る。一切を布施して人意に逆はずと。故に遠くを涉り來る。乞匃を欲望す」と。王、是の語を聞き卽ち下りて問訊す。「遐道を步み涉り疲倦すること無きを得たるや。若し得る所を欲せば一切の須ふる所の國土、珍寶・車馬・輦輿・衣被・飮食、病に隨ふ醫藥一切の須ふる所皆給與すべし。婆羅門言く「外物の布施は福德妙ならず、內身の布施は果報乃ち大なり。我、久しく眼を失し、長夜冥しとする處なり、大王を承り聞くが故に意を發し來り、王の眼を乞はむと欲す」と。王、聞きて歡喜し婆羅門に語るやう「若し眼を得むと欲せば我當に相ひ與ふべし」と。婆羅門言く「我に與へむと欲せば何時能く與ふるか」と。王、之に語りて曰く「却後七日便ち當に汝に與ふべし」と。王、卽ち八萬四千の小國に宣下すらく「須提羅王、却後七日當に其の目を剜り婆羅門に施すべし。諸の來らむと欲する者は悉く皆時に集れ」と。諸王の人民、斯の令を聞き已り普く來り奔り詣る。大王の所に於て八萬四千の諸王の臣民身を以て地に投じ、腹を王前に拍ち啼涙交流れて王に白して言く「我等の等類、閻浮提の人大王に[二九]蒙賴し以て蔭覆と爲す、若し當に眼を剜り婆羅門に施さば一切の人民何をか恃怙すべき。唯、願くば意を廻らし一人の爲めにして一切を捨つること勿れ」と、一萬の大臣も亦皆地に投じ仰ぎて王に白して言く「何ぞ我曹等を哀み憐愍せざるや。一人の意の爲めに我等を捨棄するや。唯、願くば意を廻らし其の眼を與ふること莫れ」と。二萬の夫人頭腦を地に打ち腹を王の前に拍ち亦皆求め請ふやう「唯、願くば大王よ、意を廻らし志を易へ眼を以て施すこと莫く我等を安慰せよ」と。五百の太子も王の前に涕哭す「唯、願くば天父よ、當に具に矜憐し眼を以て施すこと莫れ、我等を撫養せよ」と。時に戒賢太子重ねて王に白して言さく「願くば我が眼を剜り以つて父の王に代へむ。然る所以は我身死すと雖も國に損益無し。大王眼無ければ海內恃むこと靡し」と。時に快目王、諸王・臣・夫人・太子に告ぐるやう「我、身を受けしより來生死長く久し、設し身の骨を積まば須彌よ

【二九】蒙賴。たよりからむること。

發し當に汝の國に集るべし、汝、快く晏然[27]として安坐する耶」と。波羅陀跋彌、是の消息を聞き愁悶迷憒し如ともする所を知る莫し。垢の黑衣を著け黑闇の所に坐す。輔相の婆羅門有り其の所に來至り其の意故を問ふ「王は何の憂有りや、願くば示し語れ」と。波羅陀跋彌王曰く「卿、聞かざる耶、前の勞陀達、逃突して彼の快目王の邊に至り、因つて相ひ發起し快目王をして悉く八萬四千の諸國の兵衆を發し來り我を攻めむと欲せしむ。若し當に來らば便ち我が國を滅さむ。其の輔相曰く「當に群臣をして試みに共に之を議せしむべし」と。卽ち合し共に議す。各各異計す。其の輔相言く「我聞く、快目王は自ら誓つて布施し、唯、父母を除きて施さゞる耳、其に餘の一切來意に逆はずと。今、此の國中に盲の婆羅門有り、當に之を勸勉し往きて王の眼を乞はしむべし、若し能く得なば軍兵を却くるに足らん」と。王、是の語を聞き卽ち然りとし之を可とす。尋いで輔相を遣し往きて求め之を曉す。輔相、卽時人を遣し往喚す。尋いで使來りて之に告げて曰く「今、國事有り、相ひ勞苦せむと欲す、願くば留意を垂れ、共に相ひ佐け辨ぜよ」と。婆羅門言く「我れ今盲冥なり、竟に何をか能くする所にて相ひ佐け辨ぜむ」と。輔相又曰く「須提羅王、兵衆を合し來りて我が國を伐たむと欲す。若し當に來らば我等强壯能く逃避すと雖も猶殘戮を憂ふるなり。況んや汝目無く能く脫るゝことを得む耶、彼の王に誓有り一切の布施人の須ふ所に隨ひ人意に逆はず。往きて從つて眼を乞へ、庶はゞ必ず之を得む。若し其の眼を得ば兵衆息むべし。此の事苟も辨せば當に汝を重く募るべし」と。婆羅門言く「今、我、見ゆること無し、此の事云何」と。王、重しく勸勉す。我、當に人を遣はし將ゐて汝を護り往かしめむ」と。卽ち、道の糧、行道の須ゆる所を給し路を引いて去る。時に、快目王の國種種の災怪悉く皆興り現はる、空中に崩るゝ聲あり、電曳き星落ち、陰霧・霹靂、地の處處裂け、飛鳥の類悲鳴感切し其の身を挫戻[28]し自ら羽翼を拔く。虎・狼・師子の走獸の屬人の間に鳴き吼え地に宛轉す。國王・臣民其の所以を怪しむ。時に婆羅門漸く大城に到

【二七】晏然。やすらかなる貌。

【二八】挫戻。くじきねじること。

「王、受性倉卒にして思慮に於て少なし、事大いに當らず必ず後悔を致さむ。王、色欲を耽荒し國事を理めず外に[一五]枉滯有り理情處無し。國に忠賢あるも諸亶を往さずば則ち慮り未然の事を防がず。邊土の民[一六]役調煩劇ならば則ち思ひ違背し他國に賓屬せむ。商賈の稅奪ふこと常度より違せば[一七]惡憚行はれ來り[一八]寶貨は猛貴す。此の五事有らば亡國の兆なり。願くば王よ、操を易へ民と與に更に始めよ。須提羅王、恩慈廣く普し。閻浮提の人咸慧澤を蒙る。我曹の此の國獨り恭順せず、幽遐の民其の潤を蒙らず。願くば王よ、意を降し還び相ひ承奉せよ。便ち子孫の食祿長久かるべし」と。波羅陀跋彌、此の臣の語を聞き心恚り色を作し、其の言に從はず。臣、勞陀達、益瞋憒を生じ能く自ら心に念ふやう「我れ王の治政を見るに[一九]匡化周からず、忠誠を[二〇]表貢し相ひ扶輔せんことを望むも反つて更に怒り盛にして我が言に從はず。言既に用ひられず、儻し復殺さるゝならば當に就いて之を除き、民の爲めに患を去るべし」と。謀未だ就くに及ばざるに事已に發露し、王、兵衆を合し誅討に往かむと欲す。時に勞陀達、王收ふを欲すと知り卽便ち疾馬に乘り逃走して去る。兵衆尋いで逐ふ。彼の勞陀達、素射術を善くす。又人の身[二一]著射して死す應き所凡そ十八有るを知る。兵衆逮ぶと雖も敢て能く近かず。遥を得て富迦羅拔國に徹到り、快目王に見え拜して問訊し訖り、王と共に談對す。事事理を得たり。王、卽ち之を善とし立てゝ大臣と爲す。漸く親近を得て具に來事を以て啓聞す。王、是を聞き已り群臣に問ふて言く「彼の國土は我に屬せざる耶」と。群臣、答へて曰く「悉く、大王に屬す。但、遐遠を恃みて來りて[二二]賓附せず」と。勞陀達曰く「彼の波羅陀跋彌[二三]頑嚚・凶闇・[二四]縱逸・荒迷にして禮度を識らず。遠きを憑み謬を守り、王の命を承けず。彼の民惡厭し之を視ること怨の如し。臣に兵馬を與へなば自ら往きて降伏せしめむ」と。王、其の語を聞き卽ち然りとし、之を可とす。下の諸國に告げ兵衆を選擇し[二五]剋日して都て集め、彼の波羅陀跋彌王の國に往く。爾の時、波羅陀跋彌、[二六]比國の王人を遣はし之に語るやう「閻浮提內都て勅して兵を

【一五】枉滯。不正ととゞこほり。
【一六】役調。使役の賦課。
【一七】惡憚。おそれにくむこと。
【一八】寶貨猛貴。物價の高くなること。
【一九】匡化。正しき敎化。
【二〇】表貢、あらはしつぐること。
【二一】著射。弓引きあたること。
【二二】賓附。したがふこと。
【二三】頑嚚。かたくなにておろかなること。
【二四】縱逸。ほしいまゝなること。
【二五】剋日。日を期すること。
【二六】比國。近國。

ふ。閻浮提の八萬四千國・六萬の山川・八十億の聚落あり、王、二萬の夫人婇女、一萬の大臣、五百の太子、其の第一の太子尸羅拔陀提と名づく。[七]（晋に戒賢と言ふ）。王に慈悲有り一切を愍念し民物を養育す。猶慈父の如し。化導に善を以てし民其の度に從ひ、風時雨順ひ[八]四氣和適し、其の國豐樂にして群生蒙賴す。爾の時、其の王退きて自ら思惟ふやう「我れ宿福に因りて今人主と爲る。財寶五欲富四海に有り、言を發し下を化す、風の草を靡かすが如し。今世、會用つて更に[九]紹續すること無ければ恐く我が來世窮苦を是れ分とせむ。譬へば耕夫の如し。春日多く種ゆれば秋・夏收入所得必ず廣し。復、春時に遭ひ若し當に懶惰なれば秋來るも穀に於て何をか望むべき。是を以て我今諸の福田に於て時に及びて廣く種えむ。宜しく懈怠すべからず」と。卽ち群臣に告ぐるやう「我が庫藏の金・銀・珍寶・衣被・飮食・所須の具を出し諸の城門に著け及び市中に積み偏に行きて宣令せよ。一切の人民乏しき所有る者は皆悉く來りて取れと、幷びに復下八萬四千の國に告げ亦藏を開きて一切を施給せしむ」と。時に諸の群臣奉じて王敎を受く。卽ち金幢を竪て大金鼓を擊ち王の慈敎を贍す。閻浮提に遍し。閻浮提の人、沙門・婆羅門・孤貧・困厄・年老・疾病のもの得むと欲する所有らば意に稱へて與ふ。一切の人情王の慈澤に賴り安快・自娛し復憂慮無し。歌頌讃嘆して、皆王德を稱ふ。

爾の時、邊裔に一小國有り、其の王の名を波羅陀跋彌と曰ふ。遠きを恃み傲慢にして王化に賓はず。又其の治政五事度無し。受性[一〇]倉卒にして思慮に於て少なく、色欲を[一一]耽荒す、國政を理めず國に忠賢あるも[一二]諸稟を往さず、[一三]邊境の土に役使し煩倍す。商賈國に到れば稅を奪ふこと常に過ぎたり。彼の王に臣有り勞陀達と名づく。聰明智略あり明に道理を識り其の度に違ふを覩、前みて王を諫めて曰く「王、五事有らば國を安ずること能はず。必ず禍患を招くこと恐く是れ久しからず。儻し[一四]忌諱せずば臣之を說くを聽せよ」と。王、曰く「便ち道へ」と。尋いで長跪して王に白さく

【七】晋。明本、此に作る。
【八】四氣。四季（春・夏・秋・冬）といふに同じ。
【九】紹續。たすけつゞけること。
【一〇】倉卒。あわてること。
【一一】耽荒。ふけりすさぶこと。
【一二】諸稟。君より相談をうけ又命を受くること。
【一三】邊境。大正本、鏡に作るは誤植か。
【一四】忌諱。いみきらふこと。

烏聲とは其の人の受性恩養を識らず志廉潔ならず。三尺烏聲とは受性兇暴にして樂を傷害と爲し慈順に於て少し。其の破聲とは男、女の聲を作し女、男の聲を作す。其の人薄德にして貧窮下賤なり。其の鴈聲とは志性[三]懃了にして、親友を多く將ゐて四遠に接す。其の鼓聲とは言辭[四]辯捷なり、道理を解釋し必ず國師と爲る。其の雷聲とは智慧深遠、法性を散析し化を天下に任ず。金鈴聲とは巨財饒財にして其の人必ず千億兩金を積む。其の梵聲とは福德彌高く若し家に在らば轉輪聖王と作り、出家學道せば必ず成佛を得む。時に婆羅門行路の人に語るらく「我、能く人の語聲を識別す。若し實に是れ佛ならば梵音有るべし。汝、我を將ゐて其の所に往至るべし、當に試み之を聽くべし、審に是れ佛なるや不や」と。時に行路の人因つて牽將ゐて往く。漸く佛の所に近づき、佛の說法を聞くに梵音具足し、深遠流暢なり。歡喜踊躍し、兩目開くことを得て便ち佛を見るを得たり。紫磨金色、三十二相明朗日の如し。卽時佛を禮し喜慶量り無し、佛、說法を爲し給ひ志心聽受す。卽ち二十億の惡を破し須陀洹を得、已に慧眼を得たり。便ち出家を求む。佛、言く「善く來れり」と。便ち沙門と成る。佛、重ねて方便し廣く說法を爲し給ひ、卽ち復尋いで阿羅漢果を得たり。一切の衆會奇怪とせざるは莫し。賢者、阿難、座より起ち長跪叉手して佛に白して言く「世尊の出世實に饒益多く盲冥を拔濟す。恩極めて稱ること難し。此の婆羅門一時の中肉眼旣に開き慧眼淸淨なり。佛、此の人に於て恩何ぞ隆厚なるや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「吾、其の眼を與ふる但今日のみならず、過去世の時も亦復眼を與ふ」と。阿難、重ねて白さく「不審なり、世尊よ、過去に眼を與ふる其の事云何。唯、願くば哀を垂れ具に解說を爲せよ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『過去久遠無量無數不可思議阿僧祇劫に此の閻浮提に一大城有り、富迦羅拔と名づく。時に國王有り、須提羅と名づく、[五]（晋に[六]快目と言ふ）。之を名づけて快目と爲す所以は其の目明淨にして淸妙比無く、墻壁を徹覩し四十里を視る。是を以て字を立て號して快目と曰

【三】懃了。ねぎらふこと。
【四】辯捷。口前さわやかなり。
【五】晋。明本、此に作る。
【六】快目。元本、央目に作る。

時に婆羅門道を進みて去る。人、見れば便ち責め食を給する者無し。飢餓委に悴れ困苦極めて理りなり。道中に人有り。因つて消息を問ひ、毘摩羨王、已に復命終するを知り望む所を失ひ懊惱し憒憒し心七分に裂け血を吐きて死せり。毘摩羨王及び勞度差命終し皆[四五]阿鼻泥犁に墮す。其の餘の臣民王恩を思念ひ死を感結する者皆生天を得たり』と。

是の如く阿難よ、爾の時の月光王を知らむと欲せば今我が身是れなり。毘摩羨王とは今の[四六]波旬是なり。時の勞度差婆羅門とは今の調達是れなり。時の樹神とは今の目連是れなり。時の大月大臣とは今の舍利弗是れなり。爾の時に當り我が死を見るに忍びずして我に先ち前に死せり」と。

佛、是を說き已り賢者阿難及び諸の弟子佛の說き給ふ所を聞き悲喜交懷き異口同音に咸共に嗟嘆す。如來の功德奇特の行咸共に專修し四道果を得る者有り、無上正眞道意を發す者有り。皆大いに歡喜し敬戴奉行せり。

三十二、[一]快目王、眼を施す緣の品　第二十七

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、世尊、大衆に圍遶せられて爲めに法を說き給へり。城中の人民の聽法を樂しむ者佛の所に往至り前後相次ぐ。時に城中に盲の婆羅門有り、街の道の邊に坐し多くの人衆の行步駛疾するを聞き、卽ち行人に問ふやう「此の多人衆、何の所に至らむと欲するや」と。行人、答へて曰く「汝知らず耶、如來の出世此れ値遇し難し。今此の國に在り道化を敷演し給ふ。我等往きて其の說法を聽かむと欲するなり」と。此の婆羅門に一術有り、衆生の中の八種の聲有り、悉く能く別識し、其の[二]相祿を知る。何をか八種と謂ふ。一には曰く烏聲、二には曰く三尺烏聲、三には曰く破聲、四には曰く鳫聲、五には曰く鼓聲、六には曰く雷聲、七には曰く金鈴聲、八には曰く梵聲なり。其の

【四五】阿鼻泥犁。無間地獄のこと。

【四六】波旬。惡魔の名、殺者、惡者と譯す。

【一】快目王眼施緣品。此品、麗本、西本共に缺。

【二】相祿。さいはひをみること。

みに遭はば儻復還び悔む。汝の頭髮を取り堅く樹に繫在げ。爾ば乃ち然る後に能く斫り取る耳」と。時に王この語を用つて一つの壯樹の枝葉欝茂するを求め堅固に繫けむと欲す。樹に向つて長跪し髮を以つて樹に繫け、婆羅門に語るやう「汝、我が頭を斫り我が手の中に墮せよ。後に我が手の中に於て取り去れ、今、我れ頭を以て汝に施さむ。是の功德を持ち魔・梵・及び天帝釋、轉輪聖王の三界の樂みを求めず。用つて無上正眞の道を求む。誓つて群生を濟ひ涅槃の樂に至らむ。時に婆羅門、手を擧げ斫らむと欲す。樹神此を見て甚だ大いに懊惱す。此の如きの人を云何が殺さむと欲するや。卽ち手を以て婆羅門の耳を摶つ。其の項反り向き手脚【四三】繚戾し刀を失し地に在り、動搖すこと能はず。爾の時、大王、卽ち樹神に語るやう「我、過去已來、此の樹下に於て曾つて九百九十九頭を以用つて布施せり。今、此の頭を施せば便ち千に滿つべし。此の頭を捨て已り檀便ち滿ち具はる。汝、我が無上道心を遮ること莫れ」と。爾の時、樹神、王の是の語を聞き還び婆羅門をして平復故の如くならしむ。時に婆羅門、便ち地より起ち還び更に刀を取り便ち王の頭を斫る。頭手の中に墮つ。爾の時天地六反震動し、諸天の宮殿搖動して安すからず各恐怖を懷き其の所以を怪しみ、尋いで菩薩一切の爲めの故に頭を捨て布施するを見たり。皆悉く來り下り、其の奇特を感じ、悲淚雨の如し。因つて共に讃じて言く「月光大王、頭を以て布施せり。檀波羅蜜に於て今便ち滿すを得たり」と。是の時の音聲天下に普遍せり。彼の毘摩羨王、此の語を聞き已り喜踊驚愕し心【四四】擗裂けて死せり。時に婆羅門、王の頭を擔ひ去れり。諸王・臣民・夫人・太子、已に王頭を見て自ら地に投じ同聲にて悲叫し絕えて復甦へる。或は悲結し血を吐きて死する者有り、或は愕いて住し識る所無き者有り、或は自ら其の頭髮を剪拔く者、或は復其の衣裳を劚裂く者、或は兩手にて面を劚裂く者有り。啼哭し縱橫に地に宛轉す。時に婆羅門、王の頭臭きを嫌ひ卽便ち地に擲ち脚蹋り去る。或は復人有り婆羅門に語るやう「汝は之れ酷毒、劇甚乃ち爾る。旣に用ふるに中らず何ぞ乃ち之を索むるや」と。

【四三】繚戾。ねぢけもとること。

【四四】擗裂。胸うちさけること。

【四一】陰覆を垂れよ、若し頭を以て施さば我等何をか恬まむ」と。五百の太子、王の前に啼哭す、「我等、孩幼なり何の所にか歸すべき。願くば愍念せられよ。頭を以て施すこと莫れ、我等を長養し人倫に及ぶを得よ」と。是に於て大王、諸の臣民、夫人、太子に告ぐるやう「我、本より計るに身を受けて已來生死に涉歷し由來長く久し。若し地獄に在らば一日の中生れて輒ち死す。身を棄つること無數なり、【四二】灰河・鐵床・沸屎・火車・炭坑及び餘の地獄を經歷す。是の如き等の身燒き、刺し、煮、炙り棄てゝ復棄つ。永く福報無し。若し畜生に在らば更に相ひ食噉し或は人に殺され身を衆口に供し、破壞、消爛す、亦復無數なり。空しく此の身を棄てゝ、亦福報無し。或は餓鬼に墮さば火身より出づ。或は飛輪有り來りて其の頭を截る。斷ちて復生れ是の如く無數なり。是の如く身を殺し亦福報無し。若し人間に生るれば財色を諍ひ目を瞋らし怒り盛んなり。共に相ひ殺害す。或は軍を興し對陣し更に相ひ斫截す。是の如く身を殺すこと亦復無數なり。貪・恚・癡の爲めに恒に多身を殺し未だ曾つて福を爲さず。而して此の命を捨つ。今我が此の身種々不淨なり。捐捨すべきに會ふ。久しく得ること能はず。此の危脆穢惡の頭を捨て用つて大利と貿ふ。何ぞ與へざるを得むや。我れ此の頭を持ち婆羅門に施さむ。是の功德を持つて誓つて佛道を求めむ。若し佛道を成ぜば功德具足せむ。當に方便を以て汝等の苦を度すべし。今、我、施心成滿を欲すに垂むとす。愼みて我の無上道意を遮ること莫れ」と。一切の諸王・臣民・夫人・太子王の語を聞き已り默然として言無し。

爾の時、大王、婆羅門に語るやう「頭を取らむと欲せば今正に是の時なり」と。婆羅門言く「今、王の臣民大衆圍遶す。我、獨り一身にて、力勢單弱なり、此の中にて王の頭を斫るに堪えず。我に與へむと欲せば後園に至るべし」と。爾の時、大王、諸の小王・太子・臣民に告ぐるやう「汝等若し苟くも我を愛敬せば愼しみ此の婆羅門を傷害すること莫れ」と。此の語を作し已り婆羅門と共に後園に入る。時に婆羅門、又王に語りて言く「汝の身、盛壯にして力士の力あり。若し斫りて痛

【四一】陰覆。かげ、おほひとなること。

【四二】灰河。西名、(Thal-chu)

に城門の神便ち休り遮らず。大月大臣、即ち自ら思惟ふやう「若し此の婆羅門必ず王の頭を乞はゞ當に七寶の頭を作ること各五百枚用つて之と貿易すべし」と。即ち勅して作らしむ。時に婆羅門、往きて殿前に至り高聲に唱へて言く「我、遐方に在り、王の功德一切布施し人の意に逆はざるを聞き、故に遠くを涉り來る。得る所有らむと欲す」と。王、聞き歡喜んで迎へ為めに禮を作し問訊ぬるやう、「行道疲極せざる耶、汝の願ふ所に隨ひ國・城・妻子・珍寶・車乘・輦輿・象馬・七寶・奴婢・僕使、所有得んと欲するもの皆之を與ふべし」と。婆羅門言く「一切の外物を用つて布施すと雖も福德の報未だ弘廣為らず、身肉の布施其の福乃ち妙なり。我故に遠くより來る。王の頭を得むと欲す、若し辜逆はずむば當に施與せらるべし」と。王、是の語を聞き踊躍量り無し。婆羅門言はく「若し我に頭を施さば何時與ふべきや」と。王、言く「却後七日當に汝に頭を與ふべし」と。爾の時、大月大臣七寶の頭を擔ひ來り用つて曉し謝し腹を其の前に拍ち婆羅門に語りて言く「此の王の頭は骨肉の血と合して不淨の物なり、何を用つて此を索むるや。今、持ち來れる爾所の七寶の頭以用つて貿易せむ。汝、之を取る可し、轉易へて終身の富を得るに足らむ」と。婆羅門言く「我れ、此を用ひず。王の頭を得て我が所志に合せむと欲す」と。時に大月大臣、種々諫め曉すと雖も永く迴轉せず。即時、憤感し心七分に裂け王の前に死す。時に其の王、臣下に勅語し八千里を象に乘り遍く諸國に告げて言はしむ「月光王、却後、七日當に其の頭を持つて婆羅門に施すべし。若し來らむと欲せば速時馳せ詣れ」と。爾の時、八萬四千の諸王絡繹として至る。咸大王に見え腹を王の前にて拍ち「閻浮提の人みな王の恩澤に賴り各豐樂を得歡娛して患無し、云何んが一旦一人の為めの故に永く衆庶を捨てゝ更に矜憐せざるや。唯、願くば慈を垂れ頭を以て施す莫れ」と。一萬の大臣皆身を地に投じ腹を王の前に拍ち「唯、我等を哀愍矜恤せられ頭を以て施し永く棄捐せらるゝこと莫れ」と。二萬の夫人、亦身を地に投じ仰ぎて王に白して言さく「忘捨せらるゝこと莫れ、唯、

羅門、是の語を說くを聞き各自ら言ひて曰く「彼の月光王、慈恩惠澤なり、潤一切に及び窮厄を悲濟し民の父母の如し。我等何の心にて此の惡謀に從はむ。寧自ら身を殺さむ。此を爲すこと能はず」と。卽ち各罷めて散ぜり。毘摩斯那、益增[三三]愁憒す。卽ち出でゝ廣く募り周遍して令を宣べぬ。「誰か能く我が爲に月光王の頭を得るものぞ共に國を半に分ちて治め女を以て之に妻にせむ」と。爾の時、山の脇に婆羅門有り、名を[三四]勞度差と曰ふ。王の宣令を聞き來りて王の募に應ず。王、甚だ歡喜び、重ねて之に語りて言く「苟くも能く成辦せば信誓を違へず。若し能く去らば當に何の日を以てすべきや」と。婆羅門曰く「我が行道の糧食須ふる所を辦じ却後七日便ち發引すべし」と。時に婆羅門、呪を作し自ら護り七日已に滿ちたり。便ち來り王に辭す。王、須ふる所を供給し路を進みて去る。時に月光王、王國に豫て種々の變怪興り現るゝこと有り、地の處々[三五]裂拖し電星落ち陰る。雷電霹靂、諸の飛鳥の輩、虚空の中に於て悲鳴、感切し自ら羽翼を拔く。虎・豹・豺・狼の禽獸の屬自ら投じ自ら擲ち[三六]跳踉・鳴叫す。八萬四千の諸の小國王は皆大王の金幢卒に折れ金鼓卒に裂くと夢み、[三七]大月大臣は鬼、王の金冠を奪ふと夢み、各愁憂を懷き自ら寧むずること能はず。

時に城門の神、婆羅門の王の頭を乞ふと欲するを知り亦用つて[三八]憒憒し遮して入るを聽さず。時に婆羅門城門を遶り數匝にして前むこと得る能はず。[三九]首陀會天月光王の此の頭を以て施し[四〇]檀に於て滿すを得と知り、便ち夢の中に於て王に語りて言く「汝、誓つて布施し、衆心に逆はざれ、乞者門に在り、前むを得るに由し無し。施主爲るを欲するも事然らざる所なり」と。王、覺めて愕然たり。卽ち大月大臣に勅すらく「汝、諸門に往き勅して人を遮ること勿ならしめよ」と。大月大臣、城門に往到る。時に城門の神、卽ち自ら形を現じ大月に白して言さく「婆羅門、有り他國より來り惡心を懷き挾さみ王の頭を乞はむと欲す。是を以て聽さず」と。大臣、答へて言く「若し此の事有らば是れ大災と爲す。然るに王の敎有り、理として違ふことを得ず當に之を奈何がすべき」と。時

【三三】愁憒。うれひみだること。
【三四】勞度差。西名、(Lohu-te-tsa)。
【三五】裂拖。さけすべること。
【三六】跳踉。おどりはねること。
【三七】大月(Zla-ba chen-po)(Skt. Mahā-candra)として大臣名をあぐ。
【三八】憒々。みだること。
【三九】首陀會天。西本、(Gnas-gtsaṅ maḥi ris)(Śuddha-vāsakāyika)淨居天のこと。
【四〇】檀。布施のこと。

念を生ず「夫れ人の世に處し尊榮豪貴にして、天下敬瞻し言を發すること違ふこと無く、珍妙の五欲意に應じて至るところの、斯の果報は皆積德修福の致す所に由る。譬へば農夫の春に由り廣く種え秋夏豐收するが如し。春時復到り若し勤めて種えずんば秋夏何をか望まむ。吾、今、是の如く先の修福に由りて今の妙果を獲たり。今、復種えずんば後亦望み無し」と。是の念を作し已り、諸の群臣に告ぐるやう「今、我、珍妙寶藏を出し諸の城門に置き、及び市中に著け大檀施を設けむ。其の衆生の一切須ふる所に隨つて盡く之を給與せむと欲す。幷びに復八萬四千の諸小國土に告下し悉く藏を開き一切を給施せしめむ」と。衆臣、曰く「善し」と。敬ひて王の教の如くす。卽ち金幢を竪て金鼓を撃ち廣く布き令を宣べ王の慈詔を謄す。遠近内外をして咸聞き知らしむ。時に國中の沙門・婆羅門・貧窮の孤老、乏短有る者强弱相ひ扶け雲と起り雨と集る。衣を須ふれば衣を與へ食を須ふれば食を與ふ。金・銀・寶物・病に隨ふ醫藥一切の須ふる所意に稱ひ之を與ふ。閻浮提の内一切の臣民王の恩澤を蒙り快樂極り無し。歌頌讃嘆す。衢路に盈ち善名遐に宣ぐ。四方に流布して欽仰せざるは無く、王の恩化を慕ふ。時に邊表に一つの小國有り、其の王の名を毘摩斯那と曰ふ。月光王の美稱高大なるを聞き心に嫉妬を懷き寢て席安からず。卽ち自ら思惟ふやう「月光を除かずむば我が名出でず。當に方便を設け諸の道士を請じ諸人を募求り用つて斯の事を辦ずべし」と。是を思惟ひ已り卽ち勅して國内の梵士を請喚し餚饍百味の飲食を供養し恭敬し奉事せり。其の意を失せず三月を經已れり。諸の梵志に告ぐるやう「我、今憂有り我が心に纒綿す。夙夜反側す。何ぞ方に能く釋かむ。汝の曹道士是れ我が奉ずる所なり、當に方便を思ひ我を佐け除滅すべし」と。諸の婆羅門共に王に白して言く「王よ、何の憂有りや、當に示し語らるべし」と。王、卽ち言ひて曰く「彼の月光王の名德遠く著き四遠風を承く。但、我れ獨り卑陋にして此の美稱無し、情志の願ふ所は之を除くことを得むと欲するなり。何の方便を作し能く此の事を辦ぜんか」と。諸の婆

---

hod）(Skt. Candra-prabhā)。
【二四】 須摩檀。西名、(Me-tog abyin-pa) (Skt. Pusya-dāna ?)。
【二五】 摩旃陀。梵名、(Mahā-candra) であるが、西譯には大臣名を出さず第二夫人の名を出す。卽ち(Spyan chen-po) (Skt. Mahā-netra 大目)、西譯者が漢譯大月を大目と見違ひ譯したりと速斷し得ず、何んとなれば一は大臣名、一は第二夫人名にして西譯原典と相違なるを知り得る。
【二六】 尸羅跋陀。西名、(Tshul-khrims bryan-po) (Skt. Çīlabhadra)。
【二七】 跋陀耆婆。西名、(Htsho-ba bryan-po) (Skt. Bhadra-jīva)。
【二八】 街陌。町、みち。
【二九】 里巷。むらざと。
【三〇】 毘摩斯那。西名、(Byi-ma-se-na)。
【三一】 夙夜。朝早くより夜遲くまでのこと。
【三二】 反側。ねがへりすること。

と。勅す。夜叉教を受け尋いで取り還る。積みて大積と爲し（舍利弗の）身を安んじ上に在き、酥油を以て灌ぎ、火を放ち[二二]耶旬し、禮を作し供養し、各自ら還り去る。火滅するの後沙彌均提師の舍利を收め鉢の中に盛著り其の三衣を攝め、擔ひて佛の所に至り、佛の爲めに禮を作し、長跪して佛に白さく「我が和上舍利弗、已に般涅槃せり。此は是れ舍利、此は是れ衣鉢なり」と。時に賢者阿難、是の語を說くを聞き悲悼、憒悶し益 感切を增せり。而して佛に白して言さく「今は此の尊者、法の大將軍、已に滅度を取る。我、何にか憑怙せん」と。佛、之に告げて曰はく「此の舍利弗、復滅度すと雖も其の戒・定・慧・解脫・解脫知見、是の如き法身は亦滅せざるなり。又、舍利弗、但、今日のみ我が般涅槃を取るを見るに忍びずして先に滅度せしにあらず。過去世の時も亦我が死を見るに堪忍えずして我に先ち前に死せり」と。賢者阿難、合掌し佛に白さく「不審なり、世尊よ、往昔、先前に死を取る。其の事云何、願くば爲めに解說せよ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「過去久遠無量無數不可思議阿僧祇劫に、此の閻浮提に一大國王有り[二三]栴陀婆羅脾と名づく。（晉に月光と言ふ）。閻浮提の八萬四千國、六萬の山川八十億の聚落を統ぶ。王に、二萬の夫人婇女有り、其の第一の夫人を[二四]須摩檀、（晉に花施と言ふ）。と云ひ一萬の大臣ありて、其の第一を[二五]摩旃陀と名づく。（晉に大月と言ふ）。王に五百の太子有り、其の最大の太子名を[二六]尸羅跋陀（晉に戒賢）と言ふ。王住する所の城を[二七]跋陀耆婆と名づく。（晉に賢壽と言ふ）。其の城の縱廣四百由旬、金・銀・琉璃・頗梨の成ずる所なり。四邊に凡そ百二十門有り、[二八]街陌・[二九]里巷齊整相當す。又其の國中に四行樹有り、亦、金・銀・琉璃・頗梨の成ずる所なり、或は金枝銀葉、或は銀枝金葉、或は琉璃枝頗梨葉、或は頗梨枝琉璃葉なり。諸の寶池有り、亦、金・銀・琉璃・頗梨の成ずる所なり。其の池の底の沙も亦是れ四寶なり。其の王の內宮の周四十里、純ら金・銀・琉璃・頗梨を以てす。其の國豐潤なり。人民快樂し珍奇異妙稱て計ふ可からず。爾の時、其の王正殿に坐し忽ち此の

の境界のみ、知もなく解もなし。心、空無邊と相應すれば名づく。

【一四】識無邊處。行人、更に前の外の空を厭ひ其の虛空を捨てゝ內識を緣じ心識無邊の解を爲す。心識無邊と相應すれば識無邊處定と名づく。

【一五】不用處。無所有處處と普通云ふ。行人更に其識を厭ひて心識所有なしと觀ず。心無所有と相應すれば無所有處定と名づく。

【一六】非有想非無想定。前の識處は是れ有想、無所有處は無想なり、此の兩者の何れにも非ず、行者此に於て癡の如く醉の如く眠の如く暗の如く愛樂すべきなし、故にかく名づく。

【一七】滅盡定。六識の心心所をして滅盡し起らしめざる禪定なり、不還果以上の聖者假に涅槃に入る想を爲して此定に入る。

【一八】閘。大正本、開きに作るは誤植。

【一九】酥油。ちゝのあぶら。

【二〇】號咷、さけびなくこと。

【二一】牛頭栴檀。栴檀は香樹の名、牛頭山より出せば牛頭栴檀といふ。

【二二】耶旬。梵語、(Thāpita)、焚燒すること。

【二三】栴陀婆羅脾。西名、(Zla-

賢の檀越の四輩均提の語を聞き皆慘悼を懷き、異口同音に是の語を說くやう「尊者舍利弗は、法の大將なり、衆生の類の親仰する所なり。今般涅槃を仰ぐ、一に何ぞ疾き哉。各自馳奔し其の所に來至り。前みて爲めに禮を作し問訊し已竟る。承り聞く「尊者、身命を捨て涅槃に至らむと欲すと。我曹、之等恃怙を失ふ」と。時に舍利弗、衆人に告げて言く「一切は無常なり。生るゝ者は皆終る。三界は皆苦なり、誰か安を得る者ぞ。汝等の宿慶なり、生れて佛の世に値ひぬ。經法聞き難く人身得ること難し、福業を念懃し生死を求めて度せよ」と。是の如く種々若干に方便して廣く諸人の爲めに病に隨ひ藥を投ぜり。爾の時、衆會其の說く所を聞き初果乃至三果を得る有り。或は出家し阿羅漢を成ずる者有り、復、心に誓つて佛道を求むる者有り、說法を聞き已り禮を作して去れり。時に舍利弗、其の後夜に於て身を正しくし意を正しくし心を繫けて前に在らしめ、前みて[九]初禪に入る。初禪より起ちて第二禪に入り、[一〇]第二禪より起ちて　[一一]第三禪に入り、第三禪より起ちて　[一二]第四禪に入る。第四禪より起ちて　[一三]空處定に入り空處より起ちて[一四]識處に入り、識處より起ちて　[一五]不用處に入り、不用處より起ちて　[一六]非有想非無想處に入り、非有想非無想處より起ちて[一七]滅盡定に入り、滅盡定より起ちて般涅槃せり。時に天帝釋、舍利弗の已に滅度を取れるを知り、多くの天衆百千の眷屬と與に各　華香供養の具を齎し來りて其の所に至る。側に虛空を塞ぎ咸各悲叫す。涙盛なる雨の如し。普く諸の華を散じ積りて膝に至る。復、各言ひて曰く「尊者の智慧は巨海の若く、捷辯機に應ず。音、涌泉の若く戒・定・慧を具ふる法の大將軍なり、當に如來を逐ひ廣く法輪を轉ずべし。其の涅槃を取ることの何ぞ其速なる哉」と。城・聚の內外舍利弗已に滅度を取るを　[一八]聞き悉く　[一九]酥油、香華供具を齎らし馳走し悉く集まり、悲哀、痛戀し自ら勝ふる能はず。各　香華を持て供養す。時に天・帝釋、毘首羯磨に勅し衆寶を合集し高車を莊嚴し舍利弗を安んじ高車の上に在り。諸天・龍・鬼・國王・臣民侍し送り　[二〇]號咷し、平博の地に至る。時に天帝釋、諸の夜叉に「大海に往き　[二一]牛頭栴檀を取れよ」

【九】初禪。惡・不善の法を捨離し疎き覺と觀の心作用有り遠離より生ずる樂に侵る定、此時十功德卽、空・明・定・智・善心・柔輭・喜・樂・解脫・境界相應なるを具足す。

【一〇】二禪。前の疎き覺・觀の作用止み心境透徹し集中し定より生ずる喜樂に侵る定。

【一一】三禪。前の喜樂を離れ捨念に住し正心正念に身に悦樂溢るゝ定。

【一二】四禪。以前の喜愛一切を離れ苦樂共に無き清淨なる捨念に住する定。

【一三】空無邊處定。色想を捨てゝ無邊の虛空を緣じ、此定に加行根本の二あり、空無邊の知解あるは加行定の分なり、根本定を發得すれば只空無邊

の念を作し已り甚だ用つて戰懼し佛の所に來至り、佛の爲めに禮を作す。而して佛に白して言さく「我、向に夢る所の斯の如きの事將に世尊般涅槃を欲すること無からむとするや」と。佛、阿難、に告げ給ふやう「汝言ふ所の如く吾、後三月當に般涅槃すべし。我向に汝に問ふ、若し四神足を得る者有らば能く壽に住すること一劫なり。吾、四神足あり、極めて能く善く修む。如來、今日能く壽幾何なりやと是の如く三たび滿ちて而も汝對えず。汝、去るの後魔來り我に涅槃を取るべきを勸む。吾、已に之を許せり」と。阿難、之を聞き[六]悲慟・迷荒・悶惱・[七]惆寒し自ら持すること能はず。其の諸の弟子、展轉相ひ語り各悲悼を懷き來りて佛の所に至る。爾の時、世尊、阿難及び諸の弟子に告げ給ふやう「一切は無常なり、誰か常存を得む。我、汝等の爲めに作す應きは已に作せり。說く應きは已に說けり、汝等、但懃精し修習すべし。何ぞ憂慼を爲し補ひ無く行無むや」と。

時に舍利弗、世尊の般涅槃し給ふべきを聞き深く歎感を懷き、因つて說いて曰く「如來の涅槃一に何ぞ疾き耶、世間の眼滅す。永く[八]恃怙を失ふ」と。又、佛に白して言く「我、今、世尊の滅度を取り給ふを見るを忍びず。今、前に在りて涅槃に入らむと欲す。唯、願くば世尊よ、聽許し給へ」と。是の如きこと三たびに至る。世尊、告げて曰く「宜しく是の時を知るべし、一切の賢聖皆當に寂滅すべし」と。時に舍利弗、佛の可を得已り、卽ち衣服を整へ長跪し膝行し、佛を遶ること百匝にして佛の前に來至り若干の偈を以て佛を讚嘆し已る。佛の兩足を捉へ頂上に敬戴す。是の如きこと三を滿し合掌して佛に侍る。困しみて言ふて曰く「我、今最後に世尊を見る」と。叉手し敬肅し却き行きて去れり。沙彌、均提を將ゐ羅悅祇に詣り本生地に至る。到り已り卽ち沙彌均提に勅すらく「汝、往きて城に入り及び聚落に至り國王・大臣・舊故の知識、諸の檀越の輩に來つて共に別を取れと告げよ」と。爾の時、均提、師の足を禮し已り遍く行きて宣告す。「我が和上舍利弗、今來りて此に在り般涅槃を欲せり、諸の見むと欲する者は宜しく時に行くべし」と。爾の時、阿闍世王及び國の豪

【六】悲慟。かなしみなげくこと。
【七】惆寒。くらくふさがること。
【八】恃怙。たのみたのむこと。

巻の第六

三十一、月光王、頭を施すの品[1]　第三十

是の如く我聞きぬ。一時、佛、毘舍離菴羅樹園の中に在しき。

爾の時、世尊、賢者阿難に告げ給ふやう「其、四神足[2]を得る者は能く壽に住すること一劫なり。吾、四神足を極めて能く善く修む。如來は今者當に壽幾許ぞや」と。是の如く三たびに至る。時に阿難魔の爲めに迷はされて世尊の教を聞き默然として對えず。又、阿難に告げ給ふやう「汝、起ち去りて靜處に思惟をなす可し」と。賢者阿難、坐より起ち往きて林の中に至る。阿難、去りて後の時魔波旬來りて佛の所に詣り佛に白して言さく「世尊、世に處し教化已に久し、人を度すること周く訖る。生死を脱することを蒙むる數恒沙の如し。時に又年老い給へり。涅槃に入り給ふべし」と。時に世尊、地の少土を取り爪の(土の)上に著けて魔に告げて言く「地の土多しと爲すや、爪の上多しとなす耶」と。魔、佛に荅へて言く「地の土極めて多く爪の上の土に非ざるなり」と。佛、又告げて言く「度する所の衆生は爪の上の土の如く、餘殘の未だ度せざるものは大地の土の如し」と。又魔に告げて言く「却後三月當に般涅槃すべし」と。時に波旬是の說を聞き已り歡喜して去りぬ。

爾の時、阿難、林の中に於て坐し忽然として眠睡る。夢に大樹虛空に普覆し枝葉蓊欝し茂りて盛なり、一切の群萠[3]蒙賴[4]せざるは靡し。其の樹の功德種々奇妙にして稱げて數ふ可からず。旋風卒に起り其の樹を吹くこと激しく枝葉壞碎し猶微塵の如し。力士[5]の住する所の地に滅す。一切の群生悲悼せざるは莫しと見る。阿難、驚き覺めて怖れて自ら寧むぜず。又自ら思惟ふやう「夢る所の樹とは殊妙量り難し、一切天下咸其の恩に賴る。何の緣にて風に遇ひ碎壞すること是の如きや、而して今、世尊一切を覆育すること猶大樹の如し。世尊、般涅槃を欲すること無らむとするや」と。是

【一】月光王、頭施品。西本、No. 22.

【二】四神足。梵語、(Catvāra riddhi-pāda)、第一、根定神足・欲如意神心、第二、力觀神足・念如意足、第三、定覺神足・精進如意足、第四、正定神足・思惟如意足。

【三】群萠。衆生のこと。

【四】蒙賴。お陰をかうむること。

【五】力士。末羅の人々のこと。

音、[九]美音長者是なり。爾の時五百食を作すの人とは今此五百阿羅漢是なり」と。

爾の時、祇陀及び衆會の者其の神變を覩て佛の功德を感じ、剋心精勤し初果及び第四果を得る者有り、復、快士の行を專修する者有り、復、心を興し佛道を求む者有り、各々精勤し本心を遂ぐるを求めぬ。歡喜踊躍し頂戴奉行せり。

【九】美音長者。倶師羅長者、(Ghosita)のことなり。

や、更に千人有り亦供を設けむと欲す。能く辨ずるに足るや不や」と。其の藏監言く「典る所の穀食想ふに必ず足れり、若し供を設けむと欲せば宜しく時に請すべし」と。時に長者、卽便ち之を請す。五百の使人を差び飮食を供設す。時に諸の使人食具を執作り、年歳を經積し厭心便ち生し、並に是の說を作さく「我等諸人辛苦する所以は皆此の諸の乞兒の等に由る」と。爾の時、長者、恒に一人をして時の到るを知らしめ白さしむ。時に此の使人一つの狗の子を養ふ。若し往きて白す時には狗子逐ひ往くこと日日是の如し。爾の時、使人卒に一日忘れて往きて白さゞるに値ふ。狗子時到り獨り常處に往き諸の大士に向ひ高聲にして吠ゆ。諸辟支佛、其の狗の吠ゆるを聞き卽ち來り請ずるを知り便ち其の家に至り、法の如く食を受く。因つて長者に白さく「天今、當に雨るべし。宜しく種を植うべし」と。長者言の如く卽ち諸の作人をして作器を齎持し勤力めて耕し種えしむ。大麥・小麥一切の食穀悉く皆之を種え數時間を經て種うる所の物盡く變じて瓠と爲る。長者見已り怪みて之に問ふ。諸の大士、曰く「此事苦無し。但、勤めて功を加へ時に隨つて漑灌せよ」と。言の如く勤めて灌ぐ。其の後成熟し諸瓠皆大なり。加ふるに復繁り盛んなり。卽ち劈り之を看る。種うる所の物に隨ひ淨好を成じ治め麥其の中に滿つ。長者歡喜し家を合げて藏積し、其の家に滿ち溢る。復、親族に分つ。合國の一切咸恩澤を蒙むる。是の時五百の食を作すの人念言ふやう「斯の獲る所の果實の報將に斯等大士の恩に由れり。我等、云何ぞ惡言し彼に向へしや」と。卽ち其の所に往き「請ふ、改悔を求む。大士よ之を聽せよ」と。過を悔ゆること已に竟れり。復、誓を立てゝ言く「願くば我等をして將來の世に於て賢聖に遭値し解脫を蒙ることを得しめよ」と。此に由るが故に五百世の中常に乞兒と作る。其の改悔し誓を立つるに因るが故に今我世に遭ひ過度を蒙むり得たり。太子よ、知るべし、爾の時の大富散檀寧とは豈異人ならむや、我が身是れなり。是の藏臣とは今の須達是れなり。日日往きて時到るを白す人とは優塡王是れなり、時の狗子とは其吠ゆるに由り世々好

德思議す可きこと難し。此の諸の乞兒此の國中に於て最も下賤と爲す。今日、乃ち淸化を稟受くることを得たり。最も洪潤[六]を蒙むる。既に現世の安樂身福を受く。復、永く世の　無爲[七]の樂みを獲たり。如來今日、出世の所以は但此の輩の爲めにして更に餘に存せず。又、復、世尊よ、不審なり、此の徒往古の世の時、何の善行を種え何の功德を修し今世尊の特別の殊潤を蒙るに値ふや、復、何の咎を造り生れてより已來乞匃して自活し困苦乃ち爾るや、世尊よ、慈愍し幸に開示せられよ」と。佛、之に告げて曰く「若し知らむと欲せば宜しく善く之を聽くべし。吾、當に汝の爲めに具足して是の如き本末を解說し給へ」と。「諾なり、善く聽くべし」と。

爾の時、世尊、便ち祇陀に告げ給ふやう『過去久遠、無量無數不可思議の阿僧祇劫に此の閻浮提に一大國有り、波羅㮈と名く。國に一山有り名を利師と曰ふ。(晋に仙山といふ。)古昔の諸佛多く其の中に住し給ふ。若しは佛無き時は辟支佛有り、其に依つて住止し給ふ。假使復辟支佛無き時は諸の五通學仙の徒有り、復依りて止住す。終に空廢無し。爾の時山中に辟支佛有り二千餘人恒に其の中に止る。時に於て彼の國に火星の現はるゝこと有り、是れ其の惡災なり、此の星已に現はれ十二年中國乾旱し天雨ること有る無きに當り種植を得ず國必ず破る。

是の時國内に一人の長者有り　散陀寧[八]と名づく。其の家巨富あり、財穀量り無く恒に供具を設け諸の道士に給す。時に千の快士其の家に往至り、供養を求索めて是の言を作さく「我等諸人彼の山に住在し國の枯旱に値ふ。食を乞ふこと得叵し。長者若し能く我に食を供さば當に此に住すべし。若し與へずむば餘方に至るべし」と。長者、時に卽ち藏監に問ふやう「今、我が藏中の所有穀米此の諸の大士に食を供するに足るや不や。吾、之を請ぜむと欲す」と。藏監、對へて曰く「唯、願くば時に請ぜよ、所有穀食饒多供するに足る」と。長者、卽ち千辟支佛を請じ飲食供養す。彼の殘りの千人復其の家に詣り亦供養を求む。長者復其の藏監に問ふて曰く「卿、典る所の藏穀食多少なり

【六】洪潤。大なるうるほし。
【七】無爲。爲は造作の義、因緣の造作なきこと卽ち眞如といふに同じ。
【八】散陀寧。西名、(Sandana) (Ba-dums-byed)とす。

衣身に在り沙門の形相是に於て具足せり。佛、爲めに說法し給ふに、心開け意解け卽ち、諸漏を盡し阿羅漢と成れり。時に國中の諸豪長者庶民之等諸の乞兒に、佛入道を聽し給ふを聞き皆慢心を興して是の言を作さく「云何が如來、此の乞匃下賤の人に衆僧の次に在るを聽すや、我等諸人儻し福業を修めて佛、衆僧を請じ食を供養するの時奈何ぞ此の下賤の徒をして我が床席に坐し我が食器を捉らしめんや」と。

爾の時、太子名を祇陀と曰ふ。供具を施設し佛及び僧を請ず。使を遣はし佛に白さく「唯、願くば世尊よ、明、我が請を比丘僧と與に受けよ」と。因つて佛に白さしむ「度する所の乞兒比丘と作る者は我之を請ぜず、愼みて將來たること勿れ」と。佛、便ち請を受け給ふ。明日、食時、佛及び衆僧請に應ずべき時に當り諸の乞兒比丘に告げ給ふやう「吾等、請を受く、汝、[二]例に及ばざれば今、[三]欝多羅越に往至り自然の成熟せる[四]粳米を取り還りて其の家に至り隨意に次に坐し自ら粳米を食すべし」と。時に諸の比丘、命の如く卽ち羅漢の神足を以て彼の世界に往き各各自ら取り、鉢に滿し還り來り威儀を攝持す。自ら次第に隨ひ虛に乘じて來る。鴈王の飛ぶが如し。祇陀の家に至り隨意に次に隨つて坐し、各各自ら食す。時に於て太子衆比丘の威儀進止と神足の福德とを覩、敬心歡喜し未曾有と歎じて佛に白して言く「不審なり、世尊よ、此の諸賢の大德の衆威神巍巍とし衆相具足す。何方より此に來ると爲すや、甚だ欽敬すべし。唯、願くば如來よ、今、當に我が爲めに其の徒衆の本末因緣を說くべし」と。佛、祇陀に告げ給ふやう「汝、若し知らむと欲せば善く思ひ之を聽け、當に汝の爲めに說くべし。此の諸の比丘は正に是れ昨日(汝の)請せざる所の者なり、吾及び衆僧向者來り太子の請に應ぜむと欲し、此の諸の比丘は請せられざるの以ての故に欝多羅越に往き自然の粳米を取りて自ら之を食せり」と。爾の時、祇陀是の語を說き給ふを聞き極めて慚愧を懷き懊惱自[五]責す。「我、何ぞ愚蔽にして、明・闇を別たざりしや」と。又、復言つて言く「世尊の功

【二】例。西本、(Khyod ni yon-bdag gis ma bos kyis)(汝は家主により招待されなかつたから……)とあり、例といふを招待の意に讀む。然し例の意は如何。

【三】欝多羅越。梵語、(Uttarakuru)、須彌山の四方にある四大州の中北方の州名。

【四】粳米。うるち。

【五】責。大正本、嘖に作るは誤植。

佛に一錢を施すに由り九十一劫恒に錢財に富み今世に至る。二家の父母須ふる所を供給す。不殺戒を受くる故に大水に墮ち魚呑みて死せず。三自歸を受くるの故に今我が世に値ひ沐浴淸化し羅漢道を得たり。

爾の時、阿難及び大衆と佛の說き給ふ所を聞き善行を遵修し佛敎を敬重せり。歡喜信受し頂戴奉行せり。

三十、散檀寧の品　第二十九

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。爾の時、世尊、諸弟子千二百五十人と俱なりき。

爾の時、國中に五百の乞兒有り、常に如來に依り衆僧に隨逐し乞匃し自活す。年歲を經歷し厭心內に發りて、是の言を作さく「我等諸人、僧の福を蒙り餘命を延することを得と雖も苦事猶多し。」と。咸、是の念を作さく「我等、今者、寧ろ佛より出家を求索むべし」と。共に佛の所に詣る。是に於て衆人卽ち共に佛に白さく「如來の出世甚だ遇ひ難しと爲す。我等諸人生れ下賤に在り、尊の遺恩を蒙り身命を濟活う既に殊養を受く、出家を貪得んと欲す。不審なり、世尊よ、寧ろ得可きや不や」と。爾の時、世尊、諸の乞兒に告げ給ふやう「我が法淸淨なり、貴賤有ること無し。譬へば淨水の諸の不淨を洗ひ若しは貴、若しは賤、若しは好、若しは醜、若しは男、若しは女、水の洗ふ所不淨なる者無きが如し。復、火の至る處山・河・石・壁、天地の所有大と無く小と無く一切の萬物其の燒かるべき者は燋燒せざるは無きが如し。復我法は猶虛空の如し。男女・大小・貧富・貴賤、中に入る者有らば隨意に自ら恣にせよ」と。時に諸の乞兒佛の說く所を聞き普く皆歡喜し信心倍隆なり。誠に歸し佛に向ひ入道を求索む。世尊、告げて曰はく「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら墮ち法

【一】散檀寧品。西本、No.34.

は紛紜として了らざるなり。」王に詣り斷を求む。是に於て二家各道理を引く。其の兒の父母說くやう「是れは我が兒なり、我れ、某時に於て河中に失在ふ」と。而して彼の長者復自ら說きて言く「我れ河中の魚腹に於て之を得たり、此れは實に我が子なり、君の生む所に非ず」と。王、其の說を聞き[六]如とする所を知る靡し。即ち二家と此の事を評詳するやう「卿、二長者各此の兒を認む。今、若し一に與へなば理に於て不可なり、更に互に共に養へ、兒長大するに至り各、爲めに婦を娶り家業を安置し二處居を異にせよ。此の婦兒を生めば即ち此の家に屬し彼の婦兒を生めば即ち彼の家に屬せよ」と。時に二長者各王敎に隨ふ。兒年長大し倶に爲に婦を娶る。所須を供給し乏短有ること無し。時に其の兒二父母に白して言く「我、生れて以來苦難に遭罹し水に墮ちて魚呑む。死に垂んとして濟を得たり。今、我が志意出家を得むと欲す。唯、願くば父母よ、聽許せよ時に二父母の心此の兒を愛し拒逆むこと能はず。即便ち聽許す。其の兒即ち辭して佛の所に往至り。佛の足を稽首し道に入らんことを求索む。佛、即ち之を聽す。讚じて言く「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち即ち沙門と成る。字を[七]重姓と曰ふ。佛、爲に說法し諸の苦を盡すを得たり。即ち座の上に於て阿羅漢を成ぜり。阿難、佛に白さく「不審なり、世尊よ、此の重姓比丘、本何の行を造り何の善根を種えて今、世に出でゝ水に墮ち魚呑み、而も故に死せず」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「汝、且く之を聽け、吾當に說くことを爲すべし、過去久遠に佛世尊有り、毘婆尸と號す。諸の大衆を集め爲めに妙法を說き給へり。時に長者有り會中に來至り其の如來の廣く大法布施の福、持戒の福を說き給ふを聞けり。聞き已つて歡喜し信心猛烈なり。即ち彼の佛に從ひ[八]三自歸を受け不殺戒を受けたり。復、一錢を以て彼の佛に布施す。是に由るの故に世世福を受く、財寶自ら恣にし乏短有ること無し。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の長者の子を知らむと欲せば今の重姓比丘是れなり、其の爾時、

【六】如。眞實の義。

【七】重姓（Bakula, Bakkula）。薄拘羅。

【八】三自歸。歸依佛・歸依法・歸依僧をいふ。

り。

二十九、重姓[一]の品 第二十八

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、國中に豪長者有り。財富量り無く唯子息無し。每に[二]悒遲を懷き神祇に禱祀り、一子を求索め、精誠[三]款篤す。婦、便ち懷妊し日月滿足して一人の男兒を生む。其の兒端正にして世の希有とする所なり。父母の宗親時に讌會に值ふ。共に相ひ合集す。大江の邊に詣り酒を飮みて自ら娛しむ。父母兒を持ち共の會所に詣る。父、此の兒を愛し坐に順ひ擔ひて舞ふ。父の舞已に竟る。母復之を擔ふ。坐を歷て擎げ騰げ歡娛自ら樂しむ。河邊に臨み到り意卒に散亂し、之を執ること固からず、兒を失して水に墮とす。尋いで時に[四]搏撮せんとして竟に得ること能はず。時に父母此の兒を憐念し愛著し傷み懷く。絕して復甦へる。其の兒福德あり、竟に復死せず、河水の中に至り水に隨つて沈浮す。時に一魚有り。此の小兒を吞む。魚腹に在りと雖も猶復死せず。時に小村有りて下流に在り。一富豪有りて亦子息無し。種々求索め困みて得ること能はず。而して彼の富豪恒に一奴をして魚を捕り販賣せしむ。僕大家に輸る。其の奴日日魚を捕るを業と爲す。時に小兒を吞む魚を捕得するに值ふ。腹を剖き之を看て一小兒を得たり。面貌端正なり。得已りて歡喜し、大家に抱へ與ふ。大家觀看て自ら慶んで言く「我家、由來神祇を禱祠り子息を求索め、精誠に報應するが故に天我に與ふるなり。」卽便ち[五]摩捫し乳哺し之を養ふ。時に彼の上村の父母、下の村の長者が魚腹中より兒を得たるを聞き卽ち其の所に往き、追ひて之を求索めて之に語りて言く「此は是れ我が兒なり。我れ彼の河に於て是の子を失ふ。今、汝之を得たり。願くば以て還せよ」と。時に彼の長者之に答へて言く「我が家、由來禱祠りて子を求む。今、神報應して我に一兒を賜ふ。君の亡兒の所在

【一】重姓品。西本、No. 21.
【二】悒遲。心安かざること。
【三】款篤。まことあつし。
【四】搏撮。にぎりとること。大正本、博に作るは誤植。
【五】摩捫。撫でること。

草蓐に坐臥し衣形を蓋はず。家に升斗無し。何ぞ其れ苦なる耶。爾の時、富と財寶と量り無しと雖も斯等の聖衆の僧に遭はず。今、既に値ふことを得れば錢の供養すべき無し」と。是れを思惟し已り愴然として啼く。懊惱し涙を墮し、婦の臂の上に墮す。婦、夫の涕を見て之に問ふて言く「何ぞ適はざること有りて、懊惱是の如きや」と。壻、婦に答へて言く「汝、知らざる耶、今、衆僧、適此の村を過ぐる有り。豪賢の居士咸供養を興す、我が家貧乏にして獨り升斗無し、此の衆僧に於て善緣を種えずむば今者の貧困來世に又劇しからん。我、此を惟ひ已り是の故に泣く耳」と。婦、壻に答へて言く「今當に如何すべき、正に供養を欲すも財寶有ること無し。空く意有りと雖も其の願を遂げず」。婦、壻に語りて言く「今、汝、本の舍の中に往至り、故藏の內に於て財寶を推し覓むべし、若し苟に之を得ば當に用つて供養すべし」と。時に夫、言の如く故藏の中に至り遍く行きて推し覓めて一金錢を得たり。持ちて婦の所に至る。時に其の婦一つの明鏡有り、卽ち共に心を合し「用つて布施すべし」と。一つの新しき瓶を買ひ淨水を盛滿し此の金錢を以て瓶の水の中に著け鏡を以て上に著け、持つて僧所に至り、到り已り至心に用つて僧に布施す。時に衆僧卽ち爲めに之を受く。各各水を取り而して用つて鉢を洗ふ。復、水を取つて之を飮む者有り。時に彼の夫婦、歡喜し情悅び福を作し已竟り、疾に遇ひ命終り忉利天に生れり。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の貧人一つの瓶の水を持ち僧に布施する者は今此の金天夫婦是れなり、其の前世に此の一つの金錢及び一つの瓶水幷びに明鏡を持ち衆僧に施すに由るが故世世端正なり、身體金色容儀晃昱殊に妙にして比無し。九十一劫恒に常に是くの如し。爾の時に敬信有るに由り、故に生死を離るゝことを得、應眞を逮得しぬ。阿難よ、當に知るべし、一切の福德作さざる可からず。彼の貧人の如く少施を以ての故に乃ち是の如く無量の福報を獲たり」と。

爾の時、阿難及び諸の衆會、佛の說き給ふ所を聞き咸施心を興し勸めて福業を加へ歡喜し奉行せ

む。[四]脩跋那婆蘇と字す。(晋に金光明と言ふ)。端正凡に非ず。身體金色晃昱として人を照す。細滑の光澤あり、初生の日亦自然に八尺の井水有り、其井亦能く種々の珍寶衣服飲食を出す。人情に稱適ふ。時に彼の長者亦自ら念言ふやう「我が女、端正にして、人中英妙なり、要ず賢士の形色光暉我が女に比する如きを得て乃ち當に嫁がしめ、與共に婚姻を爲すべし。」と。爾の時、女の名遠く舍衞に布く。金天の名稱復女の家に聞ゆ。時に二長者各歡喜を懷き卽ち各相ひ詣り婚姻を爲さむことを求む。婦を娶り已竟り、舍衞に還至る。時に金天の家便ち上供を設け佛及び僧を請ず。供養の一日、佛、其の請を受け、舍に往至りて食し。食已り鉢を攝め具に長者金天夫妻の爲めに廣く妙法を演べ、其の心を開解し給ふ。金天夫妻及び其の父母卽時二十億[五]洞然の惡を破壞し心情開解して須陀洹果を獲たり。

爾の時、世尊、便ち精舍に還へり給ふ。是に於て金天・金光明と與に俱に父母に白さく「出家を求索む」と。父母、卽ち聽許す。俱に佛の所に往き佛の足を稽首し禮を作し遶り竟り、入道に入らんことを求索む。佛尋いで聽し可とし、讃じて「善く來れり、比丘よ」と言ふ。鬚髪自ら落ち法衣を身に著け便ち沙門と成る。是に於て金天、比丘衆に在り、金光明比丘尼、大愛道に付す。漸漸教化し悉く羅漢を成ぜり、三明・六通・八解脫を具へ一切の功德悉く皆具足す。阿難、佛に白して言く「不審なり、世尊よ、金天夫妻、本何の行を造り生れてより以來多財・饒寶身體金色端正第一にして此の一つの井を得て能く一切を出すや。唯、願くば如來よ、當に具さに宣示し給へ」と。

佛、阿難に告げ給はく『乃往、過去九十一劫の時世に佛有り、毘鉢尸と號す。佛、既に滅度し遺法世に在り。後に諸の比丘有り遊行し敎化す。一つの村落に到る、諸の人民有り。豪賢の長者衆僧至るを見て各供を競ひ衣被飲食を設け、乏短有ること無し。時に夫妻二人有り、貧餓困乏す。每に自ら思念ふやう「我が父在りし時財寶積滿し富溢れ量り難し。今者、我が身、貧困極めて甚だし。

【四】修跋那婆蘇。西本、(Gsel-gyi 'ho.l)(Suvarṇa-bhāsvān ?)とす。

【五】洞然。空しき貌。

を借り故身の生天の因緣が迦旃延に由るを觀る。卽ち五百の天子を將ゐ寒林に來至り。散花し燒香し死屍を供養す。諸天の光明村の林を照曜す。大家、變を見て其の所由を怪しみ、告げて遠近をして林に詣り觀看せしむ。諸の天子此の屍を供養するを見、卽ち天に問ふて曰く「此の婢醜穢なり、生存の時人猶見るを惡む。況んや今已に死す、何故に諸天は而も供養を加ふるや」と。彼の時、天子、具に本末生天の因緣を說く。卽ち皆迴りて迦旃延の所に詣る。時に迦旃延、諸の天人の爲めに廣く諸法を說く。所謂、施論・戒論・生天の論、欲不淨の法より出離するを樂と爲すと。

爾の時、彼の天及び五百の天子、塵を遠ざけ垢を離れ法眼淨を得たり。天宮に飛還す。時に諸の會衆此の法を聞き已り各道跡乃至四果を獲たり。歡喜せざるは莫く頂戴し奉行し敬禮して去れり。

二十八、[一]金天の品　第二十七

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に此の國中に一人の長者有り、其の家大富にして財寶無數なり、一人の男兒を生む。身體金色なり、長者欣慶し卽ち施會を設く。諸の相師を請じ吉凶を占はしむ。時に諸の相師、兒を抱き看省す。其の奇相を見て喜び自ら勝ず。卽ち爲めに字を立て[二]修越那提婆と字す。(晋に金天と言ふ)。此の兒の福德極めて純厚と爲す。其の生るゝの日家中自然に一つの井水を出す。縱と廣さ八尺、深さ亦是の如し。其の水汲み用ふれば能く人の意に稱ふ。衣を須くれば衣を出し食を須くれば食を出す。金・銀・珍寶一切の須ふる所これを取らんと願を作せば意の如く卽ち得るなり。兒の年轉大なり、才藝博通し長者之を愛す。未だ敢へて意に逆はず。而して是の念を作さく「我子端正なり、容貌倫無し。要ず當に名女の形容・色狀、殊に姿群を越え金容の妙體我兒に類する者を選擇し推求む。當に往きて之を求むべし。卽ち諸賈を募り周遍して之を求む。時に[三]閻波國に大長者有りて、一女を生

【一】金天品。西本、No. 20.

【二】修越那提婆。西名、(G-sol-cha)(Skt. Suvarṇa-deva)

【三】閻波國。西名、(Tsam-pa)、中印度、瞻波國(Campā)のことか。

る」と。母言く「貧那ぞ賣ることを得む、誰ぞ貧を買ふべしや」と。迦旃延、言く「貧、實に賣るべし」と。是の如きこと三たびに至る。女人白して言く「苟くも貧賣る可ければ我宜しく方を問ふべし」と。即ち言く「大德よ、貧云何が賣るや」と。迦旃延言く「審し賣らむと欲せば一に我が語に隨へ」と。答へて言く「唯諾」と。告げて言く「汝先に洗浴せよ」と。洗ひ已り告げて言く「汝、當に布施すべし」と。白して言く「尊者よ、我、極めて貧困なり、如今我が身手に完納を許すもの無し、此の瓶有りと雖も是れ大家の許なり。當に何を以て施すべきや」と。(迦旃延)即ち鉢を授け與へ「汝、此の鉢を持ち少しく淨水を取れ」と。敎の如く取り來り迦旃延に奉る。迦旃延受けて尋いで呪願を爲す。次いで齋を受くしむ。後、佛の種々の功德を念ずるを敎ふ。即ち問ふやう「汝、住止の處有りや不や」と。答へて言く「無きなり、若し其の磨る時は即ち磨の下に臥し、舂炊[四]の作使には即ち是の中に臥す。或る時には作無く糞堆に止宿す」と。迦旃延言く「汝、好く心を持ち恭勤に走り使し嫌恨を生ずること莫れ、自ら大家の一切臥し竟るを伺ひ密に其の戶を開き戶の曲內に於て淨草の座を敷き思惟し佛を觀じ惡念を生ずること莫れ」と。爾の時、老母敎を奉じて歸り勅の如くに施行す。後夜の中に於て即便ち命終り忉利天に生る。大家、早く起き婢の命終を見て恚つて言ひて曰く「此の婢、恒に常に舍に入ることを聽さず、今日の暮に何故に乃ち此に於て死するや」と。即便ち人をして草を索め脚を繋り寒林の中に拽て置かしむ。時に彼の天中に一天子有り、五百の天人有りて以て眷屬と爲す。宮殿、嚴麗す。

爾の時、天子福盡き命終し、此の老母人即ち其處に代る。生天の法として其の利根者は自ら來緣を知り、[五]鈍根の生れの者は但受樂を知る。爾の時、此女、既に天中に生れ五百の天子と與に娛樂し樂みを受け生緣を知らず。時に舍利弗、忉利天に在り此天子の生天の因緣を知り、問ふて言く「天子よ、汝、何の福に因りて此の天中に生るや」と。答へて言く「知らず」と。時に舍利弗の其の道眼

【四】舂炊。うすづくとかしぐこと。

【五】鈍根。大正本、純に作るは誤植。

此の氎を持ち來れ」と。比丘、佛に授く。佛、自ら此の氎の垢汚なるを受け給ふ、時に王の會衆、微心佛の此の垢けたる氎を受け給ふを嫌ふ。佛、衆の心を知りて之に告げて言はく「我、此の會の清淨の大施を觀る。此の氎を以て施す者より過ぐるもの無し」と。大衆聞き已り悚然とせざるは莫し。夫人歡喜し卽ち己が身に著る所の嚴飾の瓔珞寶衣を脫し檀膩伽に送與る。王も亦喜悅し身の衣服を脫し其の夫に送與る。命じて會に詣らしむ。毘婆尸佛、廣く大衆の爲に微妙の法を說き給ひ時に會の大衆度を得る者衆し。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の貧窮の女人檀膩伽とは今の叔離比丘尼是れなり。爾の時に於て清淨の心を以て氎を布施するに由るが故に九十一劫所生の處常に氎と與なり、乏少しき所無し。意に隨つて悉く得。彼の佛に緣り深妙の法を聞き解脫を願ふが故に今我に遇ふことを得、阿羅漢を成ぜり。是の故に汝等應に勤めて精進し聞法し布施すべし」と。佛、是を說き給ふの時道を得る者衆く、歡喜せざるは莫く頂戴奉行せり。

二十七、[一]迦旃延、老母を敎へ貧を賣るの品　第二十六

是の如く我聞きぬ。一時、佛、[二]阿梨提國に在しき。

時に彼の國中に一人の長者有り、多財・饒寶なり、慳貪・暴惡、慈心有ること無し。時に一人の婢有り、晨夜走り使し寧き處を得ず。小し違失有らば便ち[三]鞭捶を受け衣形を蔽はず、食體に充たず。年老いて困悴し死を思ひて得ず。時に適瓶を持ち河に詣り水を取る。是の苦を思惟うて聲を擧げて大いに哭く。時に迦旃延、其の所に來至り問ふて言く「老母よ、何を以て悲泣し懊惱すること乃ち爾るや」と。白して言く「尊者よ、我、既に年老ゆ、恒に苦役を執る、加へて復貧窮なり、衣食充さず、死を思ひて得ず、故を以て哭く耳」と。迦旃延、言く「汝、若し貧なれば何ぞ貧を賣らざ

【一】迦旃延敎老母賣貧品。西本、No. 19.
【二】阿梨提國。西名、(A-bade-na)、漢音の寫しと相違す。阿梨提は阿槃提の寫誤なり。
【三】鞭捶。むちうつこと。

を度し給ふ時に王と臣民と多く供養を設け般遮于瑟[六]を作す。一比丘有り恒に勸化を行じ佛の所に詣り法を聽き布施せしむ。時に女人有り、檀膩伽[七]と名づく。極めて貧窮なり。夫婦共に一氎有り、若し夫出て行かば則ち被ふて行き、婦、便ち裸にて住し草を敷きて坐す。若し婦氎を被て外に出て求索むるときは夫は則ち裸にて草の蓐に坐す。勸化の比丘次いで其の家に至る、是の女人を見て因つて之に勸めて言く「佛の世に値ひ難く經法聞き難し、人身得ること難し。汝當に法を聽くべし、汝布施すべし」と。廣く慳貪、布施の報を說く。女人、白して言く「大德よ、小し住せよ」と。還び舍の中に入り其の夫に語りて言く「外に沙門有り、我に佛に見え法を聽き布施することを勸む。我等先の世布施せざるが故に此の貧窮を致せり、今、當に何を以て後世の資と爲すべきや」と。夫、之に答へて言く「我が家貧困是の如く、心有りと雖も當に何を以て施すべきや」と。婦言く「前世に施さずして今是の困を致せり、今復種えずんば後何に趣かむと欲するや。汝、但我に聽せ、我決して施さむと欲す」と。夫、心に自ら念ふやう「此の婦或は能く少しく私產有り、我當に之を聽すべし」と。卽ち之を可として言く「施さむと欲せば便ち施せ」と。尋いで曰く「我が意、此の氎を以て布施せむと欲するなり」と。夫、言く「我、汝と與にたゞ此の一氎にて出入して求索め以て自ら存活す。今、若し用つて施さば俱に當に死を守るべし、何の計を作さむと欲するや」と。婦言く「人生死有り、今、施與せざるも會ず死に歸すべし、寧ろ施して死せば後世望み有り施さずして死せば後遂に劇しかるべし」と。夫、歡喜して言く「分死[八]して用つて施さむ」と。婦、卽ち還び出でて比丘に白して言さく「大德よ、屋の下に止るべし。我當に布施すべし」と。比丘答へて言く「若し施を欲せば汝當に面りに施すべし、汝の爲めに呪願すべし」と。叔離、白して言さく「唯、此の被る氎あり、內に異なる衣無し。女形に穢惡たり、此に脫するは宜しからず。卽ち還び內に入り遙かに下に向つて身上の氎を脫し比丘に授與す。比丘呪願し持ちて佛の所に至る。佛、言く「比丘よ、

【六】般遮于瑟。梵語、(Pañ-cavārṣika)、直譯すれば五年會なり、五年每に設くる大齋會なり、義譯して無遮會といふ、一切の人を容受して遮遣せざるが故なり。

【七】檀膩伽。(Dhanika.)西名、(Hdini-ke)とす。

【八】分死。自ら死を期すること。

二十六、[一]貧人の夫婦、氎を施し現報を得るの品　第二十五

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國祇樹給孤獨園祇園精舍に大比丘衆と與に在し圍遶せられて説法し給へり。

爾の時、國中に一人の長者有り。其の婦懷妊し月滿ちて女を生む。端正殊に妙なり、容貌雙少し。其の初め生れし時細軟の白氎身を裹みて生る。父母之を怪しみ師を召し占相せしむ。師曰く「甚だ吉なり」、大福德有り因りて爲めに字を作し、名を叔離と曰ふ。[二](秦に言ふ白なり)叔離、長大し、氎も身の大なるに隨ふ。此の女、瑰瑋なり。[三]國內の遠近競ひ來り娉し求む。父母、念言ふやう「女、年已に大なり、宜しく嫁處しむべし」と。卽ち工師をして爲めに瓔珞を作らしむ。叔離、父に問ふやう「是の金銀を鍛へ用つて何等を作る」と。父、之に告げて言く「汝、年已に大なり、汝を嫁處しめんと欲するが故に[四]環玔を作る」と。女、父に白して言く「我れ出家を欲す、嫁ぎ去るを樂しまず」と。父母、愛念して其の志に違はず、尋いで氎を出し[五]五衣を作らむと欲す。女見て復問ふやう「何等をか作らむと欲す」と。告げて言はく「汝の爲めに衣を作らむとす」と。父母に白して言く「我、此の著る所のもの悉く已に具足す。更に作るを須ひず。唯、願くば我を聽して時に佛の所に往かしめよ」と。父母、卽ち將ゐて佛の所に往詣り、頭面に禮を作し出家を求索む。佛、言く「善く來れり」と。頭髮自ら墮ち著る所の白氎尋いで五衣を成す、大愛道に付し比丘尼と爲る。精進久しからずして、阿羅漢道を成ぜり。阿難、佛に白して言さく「叔離比丘尼、本何の功德を種え長者の家に生れ、生れて氎と俱に出で、出家して久しからず阿羅漢道を得たるや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「諦かに聽き善く思へよ。吾、今之を說かむ」と。阿難、言く「唯然なり」と。

佛、言く『過去久遠に佛の世に出で給ひしこと有り、毘婆尸と名づく、諸の弟子と與に廣く一切

【一】貧人夫婦氎施得現報品。西本、No. 18. 選集百緣經、No. 73. 白淨比丘尼衣裹身生緣。

【二】秦。宋・元・本晉に作る。白は西語、Dkar-mo (Skt. Çukla)。

【三】瑰瑋。すぐれたること。

【四】環玔。背輪・腕輪の類、玔は釧と同意か。

【五】五衣。比丘は三衣なるが比丘尼は五　なり、三衣の外に祇支と覆肩とを加ふ。

有らば財の付する所無し。(又)若し是の語に從はゞ今は則ち人の爲に信用せられず將來は當に無量の苦惱を受け迫蹙已まざるべし」と。卽便ち之を可とす。其の婦歡喜し估客に語りて言く「長者、已に許せり」と。估客、之を聞き欣悅して家に還り、一つの大象を嚴にし衆寶莊校し大寶衣を著け象に乘りて市に入る。長者の子見て心喜び念言ふやう「是の人必ず富めり、服乘乃ち爾なり。我、財を得るなり」と。卽ち往きて語りて曰く「薩薄[二]よ、當に知るべし、先に負ふ所の錢今宜しく償ふべし」と。估客驚きて言く「我、都て憶せず。何の時、君に負ふや、若し相ひ負はゞ明人は是れ誰ぞや」と。長者の子言く「若干の日月、我が父及び我、手づから汝に錢を付せり、平事を我が明人と爲す、何に緣りてか不と言ふや」と。估客の子言く「我れ今念はず。苟くも事實有らば當に還へし相ひ償ふべし」と。尋いで共に相ひ將ゐて平事の所に至る。長者の子言く「此の人往日親しく我が父より若干の錢を擧げたり、伯、明人と爲る。我も時に亦見たり。事、爾りと爲すや不や」と。答へて言く「知らず」と。其の姪驚いて曰く「伯父は爾の時、審かに、見聞せざりしや又是の語を作さゞりしや。「此の事爾る可し」と、手足を以て是の財を指さゞりしや」と。答へて曰く「爾らず」と。姪子、恚りて曰く「伯、忠良を以て王、平事となさしめ。國人信用す。我親弟の子の非法猶爾なり、況んや外人に於てをや、枉者[三]豈少からむや。此の虛實後の世自ら知れむ」と。』

佛、長者に告ぐらく「爾の時の平時の長者を知らむと欲せば今の曼慈毘梨(卽ち)耳・目有ること無き渾沌是れなり。爾の時の一つの妄語に由るが故に大地獄に墮し多く苦毒を受く。地獄より出でて五百世中常に渾沌の身を受く。爾の時、布施を好むに由るが故に常に豪富に生れ財主と爲るを得たり。善惡の報久しと雖も敗れず、是の故に汝等當に勤めて精進し身・口・意を攝むべし。妄りに惡を造くること莫れ」と。時に諸の大衆、佛の說き給ふ所を聞き初果を得、四果に至る者有り、無上菩提心を發す者有り、歡喜せざるは莫く頂戴し奉行せり。

【二】薩薄(Satthavāha)。商主。

【三】枉者。寃罪を受くるもの。

を嚴り、衆寶を服飾、寶衣（を著）馬に乘りて市に入る。長者の子服乘是の如きを見て心に念ふやう「此の人還び財有るに似たり、當に從ひ責むことを試むべし」と。卽ち人を遣はし語りて言く「汝、我に錢を負ふ。今、償ふ可し」と。答へて言く「爾り、當に思うて宜しく了すべし」と。佑客自ら念ふやう、「擧ぐる所頓に大なり、重ねて【一〇】累息を生む。畢るべきに由し無し。當に一策を作りて、乃ち了す可き耳」と。卽ち、一つの寶珠を持ち平事の婦の所に到り白して言さく「夫人よ、我、本尸羅世質より少しく錢財を擧ぐ。其の子來り我に從つて責む。今、一の珠の價直十萬なるを上る。若し我に從つて責めて平事に囑し明人と爲ること莫かるべし」と、其の婦、答へて言く「長者は誠信なり、必ず肯ぜざるのみ、爲めに試みて語るべし」と。卽ち其の珠を受く。平事、暮れて歸る。婦、便ち具に白す。長者答へて言く「何ぞ是の事有るや、我は忠信にして妄語せざるを以ての故に王我を立てゝ國の平事と爲す。若し一とたび妄語せば此の事不可なり」と。時に佑客來る。具に情狀を告げ卽ち其の珠を還へす。時に佑客の子更に一の珠の價直二十萬なるを上り復往きて白して言く「願くば便ち囑及せよ、此れ既に小事なり、但一つの言を作せば、二十萬を得るなり、彼若し勝を得るも復【一一】姪兒たりと雖も一錢の分つ無かるべし。此の理通ずべし」と。爾の時、女人寶珠を貪愛し卽ち爲めに之を受く。暮れて更に夫に白さく「昨日白す所の事亦通ずべし。願くば必ず意に在れ」と。長者、答へて言く「絕へて此の理無し。我は信ず可きを以て平事と爲るを得たり。若し一とたび妄語せば現世當に世、信ぜざる所と爲り。後世當に無量劫の苦を受くべし」と。爾の時、長者一男兒有り、猶未だ行むこと能はず。其の婦、泣きて曰く「我、今、汝と與に共に夫婦と爲る。若し死事有るも猶望みに違せず。（我れ）此の小事を囑す、直に一言を作すべきのみ、而して相ひ從はず。我れ活きて以て何をかせん。若し隨はずんば我れ先に兒を殺し然る後自殺せむ」と。長者此（の言）を聞き譬へば人噎びて既に咽むことを得ず亦吐くことを得ざるが如し。自ら念ふやう「我れ唯此の一子有り、若し其の死するこ

【一〇】累息。利子のこと。

【一一】姪兒。をひ。

たり。是の義を以ての故に諸女有りと雖も一男に如かず。是の故に爾る耳」と。長者、聞き已り其の是くの如きを怪み卽ち其の女と與に佛所に往至き、白して言さく「世尊よ、彼の長者の子、何の因縁を以て眼・耳・舌及び手足有ること無くして富家に生れ此の財主と爲りしや」と。佛、長者に告げ給ふやう「善き哉、問や、諦に聽き善く思へよ、當に汝の爲めに說くべし。唯、然れば聞くことを樂しめよ」と。

佛、長者に告げ給ふやう「乃往過去に大長者の兄弟二人有り、兄を[四]檀若世質を名づけ弟は尸羅世質と名づく。其の兄少小にして、忠信・誠實常に布施を好み[五]貧乏を賑救す。其の信善を以て國を擧げて稱美す。王、此の人を任じて國の[六]平事と爲す。諍訟・曲直[七]之に由つて決を取る。是の時國法貸を擧げ與へしを取る[八]劵疏有ること無し。悉く平事に詣る。檀若世質を以て[九]時人の明と爲る。時に賈客有り、將ゐて海に入らむと欲す。弟の尸羅世質、多くの錢財を擧げ以て所須に供す。時に弟の長者に唯一子有り、其の年幼小なり。(尸羅世質)卽ち其の子幷びに出す所の錢を將て平事の所に到り白して言さく「大兄よ、是の估客子、我より錢を擧げ海に入り來り還らば爾許を得べし、兄を明人と爲す。我若し終亡せば證とし子をして得せしめよ」と。平事の長者指して言く「是の如し」と。其の弟の長者久しからずして命終す。時に賈客の子船に乘り海に入る。風波浪を起し船壞れて喪失ふ。時に賈客の子板を捉へて全きを得、其の本國に還へる。時に長者の子、其の船壞れて空しく歸るを聞き、唯此人に見え、便ち自ら念言ふやう「此の人我に負ふと雖も今は空しくして窮す。何に由り得可き、償ふべきもの有るを須む」と。時に此の賈客に見え長者復餘を與へ擧げ假しぬ。續いて又海に入り大珍寶を獲たり。安穩に吉に還へる。心に自ら念言ふやう「彼の長者の子、前に我を見ると雖も我を責むることに從はず、我、錢を擧ぐる時此人幼稚なり、或は能く(記)憶せさらむか。或は我前に窮するを以ての故に責めざる耶。今、當に之を試むべし」と。卽ち、好き馬

【四】檀若世質。西名、Sbyin-pa (dāna)とし、尸羅世質、西名、Tshul-khri ms (śīla)とす。西譯世質の語に當るなし。

【五】賑給。にぎはし救ふこと。

【六】平事。西本、(Shal-che-pa)とあり、裁判官のこと。

【七】曲直。大正本、典に作るは誤植。

【八】劵疏。わりふだ。

【九】時人之明。その當時の最も明智者。

二十五、長者、耳・目・舌無きの品　第二十四

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇陀精舍に諸の大比丘衆と與に在して法を說き給へり。爾の時、大長者有り、財富量り無し。金・銀・七寶・象・馬・牛・羊・奴・婢・人民倉庫盈ち溢る。男兒有ること無く唯五女のみ有り。端正聰達なり、其の婦、懷妊して長者命終る。時に彼の國法若し其の命終り家に男兒無ければ所有の財物悉く官に入るべしとなり。王、大臣を遣はし其の財を攝錄す。官に入るべきに垂んとして其の女心に念ふやう「我が母懷妊す、未だ男女を知らず。若し續いて是れ女ならば財官に屬すべし。若し其れ是れ男ならば財主と爲るべし」と。念已り往きて王に白して言く「我が父命終し男無きを以ての故に財王に入るべし、然れども今我が母懷妊す。身を分つを待つべし。若し苟くも是れ女ならば財を入ること遲からず。若し或は是れ男ならば財主と爲るべし」と。時に波斯匿王、法の平整に住し、即ち白す所を可とし聽すに其の言の如くす。其の母久しからずして月滿ち兒を生む。其の身渾沌なり、復耳目無し、口有りて舌無し。又手足無し。然るに男根有り。即ち爲めに字を作り曼慈毘梨と名く。爾の時、是の女具に是の事を以て往きて王に問ふ。王、是を聞き已り其の義を思惟す。眼・耳・鼻・舌・手・足等を以て而も財主と爲さず、乃ち男を以ての故に財主と爲すを得るなり。兒に男根有り應に父の財を得べし。即ち諸女に告ぐるやう「財、汝の弟に屬す、吾取らざる也」と。爾の時、大女他家に往適ぎ、夫主に奉給し謙卑恭謹なり。床褥を拂ひ拭ひて飲食を供設す。來るを迎へ去るを送る。拜起し問訊す。譬へば婢の大家に事ふるが如し。比近の長者其の是くの如きを視て怪しみて問ふて言く「夫婦の道家家皆有り、汝、獨り何の爲に操を改め茲の若きや」と。女子、對へて曰く「我父、終り沒し家財量り無し。五女有りと雖も猶王に入るべし、會母分身し我が一弟を生む。眼・耳・舌及び手足有る無し。但男根有りて財主と爲るを得

【一】長者無耳目舌品。西本、No. 17.

【二】住法平整。西文、(Chos kyi srid htsho l-ba)(法を正しく裁決し)。

【三】曼慈毘梨。西名、(Man-dsi-pyi-la)。

心を改易めず。方便して房に入り自ら身命を捨てたり。我が穢形を以て淨器を壞らんと欲せり。[二三]罪釁斯の若し、故に我樂しまず」と。父、女の言を聞き心驚懼無し。何を以ての故に、結使の法として爾るを知るが故なり。卽ち、女に告げて言く「一切諸法皆悉く無常なり。汝、憂懼すること莫れ」と。卽ち房內に入り沙彌の身を見る。血皆汚れて赤し。栴檀の[二四]机の如し。卽ち前みて禮を作し讃して言ふやう「善き哉、佛戒を護持ち能く身命を捨つ」と。時に彼の國法若し沙門白衣の舍に死すること有れば當に金錢一千を罰して官に入らしむと。時に優婆塞、一千の金錢を以て銅盤の上に置き載せて王宮に至る。白して言さく「大王よ、我れに罰謫有り、王に入るべし。願くば當に之を受くべし」と。王、之に答へて言く「汝、我國に於て三寶を敬信し忠正に道を守り言行違ふこと無し。唯、汝、一人當に何の過有りて而も罰を輸すべき耶」と。時に優婆塞、具に上の緣を陳ぶ。自ら其の女を殺り、沙彌持戒の功德を讃嘆す。王、情事を聞き心驚き悚然たり。篤信增隆す。而して之に告げて言く「沙彌、戒を護り自ら身命を捨つ、汝、[二五]辜咎無し、那ぞ罰有るを得むや。但持つて舍に還れ、吾、今躬自ら汝の家に至り沙門を供養せむと欲す。卽ち金鼓を擊ち國人に宣令し前後導從し其の家に往至る。王、自ら內に入り沙彌の身を見る。赤きこと栴檀の如し。前みて爲めに禮を作し。其の功德を讃し種々の寶を以て高車を莊嚴し死せる沙彌を載せ平坦の地に至り衆の香木を積み[二六]闍毘して供養す。是の女を嚴飾す、極めて世に殊れたり。高き顯處に置く。普く時の會の一切をして皆見せしむ。衆人に語りて言く「是の女は殊妙なり、容暉乃ち爾り。未だ欲を離れざる者誰か染心無からむ。而して此の沙彌、既に未だ道を得ず生死の身を以て戒を奉じ命を捨てり、甚だ奇なり希有なり」と。王、卽ち人を遣はし命じて其の師を請ず、廣く大衆の爲めに微妙の法を說かしむ。時に會の一切是の事を見聞し出家して淨戒を持たむと求むる者有り、無上菩提心を發す者有り。歡喜せざるは莫し。頂戴し奉行せり。

【二三】罪釁。罪ちぬること。

【二四】机、宋本、祕、元・明本、杌に作る。西本、赤栴檀とあり。

【二五】辜咎。つみとが。

【二六】闍毘。梵語、(Thāpita)、茶毗、梵燒と譯す。

上座に投けて海に沒して死せり。是の如き諸人獨り佛弟子にして能く禁戒を持てり。我、弟子に非るも持つこと能はざらむ耶。如來世尊獨り彼の爲めの師にして我が師に非らむ耶。瞻蔔華と胡麻とを幷べ油を壓するが如し。瞻蔔香、若し臭花と合せば油も亦隨つて臭し。我、今、已に善知識に遇ふことを得たり。云何が今日惡法を作るべきや。寧ろ身命を捨てむ。終に戒を破り佛・法・僧・父母・師長を汚さゞらむ」と。又、復思惟ふやう「我、若し逃突なば女の欲心盛なるが故に慚愧を捨てゝ外に走り牽捉へて我を誹謗らむ。街陌の人見て汚辱を離れず。我、今定んで當に此に於て命を捨つべし」と。方便し語りて言く「牢く門戸を閉ぢよ、我一房に入り作す應き所を作さむ、爾乃ち相ひ就け」と。女、卽ち門を閉す。沙彌、房に入り橝の門戸を開き一剃刀を得、心甚だ歡喜せり。身の衣服を脫し架上に[二〇]置き、合掌して跪き拘尸那城の佛涅槃の處に向ひ自ら誓願を立つるやう「我、今、佛・法・衆僧を捨てず。和上[二一]阿闍梨を捨てず、亦戒を捨てず、正に持戒を爲し此の身命を捨てむ。願くば往生する所にて出家學道し梵行を淨く修め漏を盡し道を成ぜむ」と。卽ち頸を刎ねて死す。血流れ[二二]滂沛し身體を汚染せり。時に女遲を怪み戸に趣き之を看る。戸の開かざるを見て喚ぶに應ずる聲無し。方便して戸を開く。其の已に死し本の容色を失ふを見て欲心尋いで息む。結を慚ぢ懊惱す。自ら頭髮を搣き面目を分裂く。灰土の中に宛轉し悲嘷泣淚し迷悶斷絕す。其の父會還りて門を打ち女を喚ぶ。女默して應へず。父、其の靜なるを怪み人をして踰えて入らしむ。門を開きて之を視る。女の是の如きを見る。卽ち女に問ふて言く「汝、何を以て爾る。人有りて汝を侵し汝を汚辱せし耶」と。女、默して答へず。心自ら思惟ふやう「我、今若し實を以て對へなば甚だ慚愧づ可し。若し沙彌我を毁辱しむと言はゞ則ち良善を誹り當に地獄に墮し罪を受くること極り無かるべし。欺誑を應へず卽ち實を以て答へむ」と。「我、此に獨り守り、沙彌來至りて、師の爲めに食を索む。我、欲心盛にして、沙彌を嬈さむことを求め、我が心に從ふことを冀へり。而も彼れ戒を守り

【二〇】置。大正本、罪に作るは誤植。
【二一】阿闍梨。梵語、(Ācārya) 教授正行と譯す。弟子の行爲を矯正し其の軌則師範となるべき高僧の敬稱。
【二二】滂沛。盛んに流るゝ貌。

人）封を呈して乃ち入次す。是の梵志印無くして入らむと欲す。典事、語りて言く「汝、印有るや不や」と。答へて言く、「我れに有りしかも甜を以ての故に舐め盡せり」と。語りて言く「汝、今是の如くなれば已に足る。便ち前むことを得ざれ」と。復、小甜を貪りて四月中の廿香の美味及び竟に[一五]達嚫と種々の珍寶を失へり。汝、今、是の如く小事を貪り淨戒の印を破し人天中の五欲の美味及び諸の無漏の三十七品、涅槃安樂の無量の法寶を失ふこと莫れ。汝、三世の佛戒を毀破り三寶父母師長を污染すこと莫れ』と。沙彌、教を受け足を禮して去る。其の家に往到り門を打ちて聲を作す。女、問ふやう「是、誰ぞや」と。答へて言く「沙彌なり、師の爲に食を迎ふ」と。女、心歡喜び我が願遂たり。即ち與に門を開く。是の女、端正にして容貌殊に妙なり。年始めて十六、婬欲の火に燒かる。沙彌の前に於て諸の妖媚を作す。眉を搖し影を顧て深く欲相を現ず。沙彌、見已り念言ふやう「此の女、風病・[一六]癲狂病・[一七]羊癇病有りと爲す耶、是の女、將に欲結の使ふ所となりて、我が清淨の行を嬈毀せんと欲すること無からむとする耶」と。堅く威儀を攝め顏色變ぜず。時に女、即便ち五體を地に投じ沙彌に白して言く「我、常に願ふ者今已に時至れり。我恒に汝に於て陳ぶる所有らむと欲せり。未だ[一八]靜便を得ざりき。汝を想ひ我に於て亦常に心有り。我が願を與ふべし。我此の舍の中には多くの珍寶・金銀の倉庫有り、毘沙門天宮の寶藏の如し。而して主有ること無し。汝、意を屈して此の舍主と爲る可し。我れ、汝の婦と爲り[一九]使令を供給せむ。必ず違を見ること莫く我が願ふところを滿せよ」と。沙彌、心に念ふやう「我、何の罪有りてか此の惡緣に遇ふや。我、今、寧當に此の身命を捨つべし。三世諸佛の制する所の禁戒を毀破るべからず。昔日、比丘婬女の家に至り寧ろ火坑に投ずるも婬を犯さず。又諸の比丘、賊に劫奪せられ草を以て繫縛せらる風吹き日曝す。諸の蟲唼食す、戒を護るを以ての故に草を絕ちて去らず。如しは鵝珠を吞み比丘見ると雖も持戒を以ての故に極めて苦しくも說かず。如しは海船壞れ下座の比丘戒を守るを以ての故に板を

【一五】達嚫。噠嚫、財施の義。
【一六】癲狂。きちがひ。
【一七】羊癇。ひきつる病。
【一八】靜便。西本、(Skabhus)、(棧會)と譯せり。靜かなる機會。
【一九】使令。いひつくること。

よ哀納し濟度せよ。若し受くること能はざれば當に將ゐて家に還へるべし」と。爾の時、比丘、道眼を以て觀るに、此の人出家して能く淨戒を持ち佛法を增長せむ。卽便ち之を受け度して沙彌と爲す。時に優婆塞に一人の親善の居士有り、優婆塞と及び其の妻子の合家の奴婢を請ず。明日、客會す。時に優婆塞晨朝に念言ふやう「今、當に會に就くべし、誰か後に舍を守らむ。我、若し强力して課して一人を留めなば分を得べき所我れ則ち他に負ふなり。若し自ら能く意を開きて住する者あらば我會の還りに於て當に別に報を投るべし」と。優婆塞の女、卽ち父に白して言はく「唯、願くば父母よ、諸の[七]僮使を從へ但行きて請に應ぜよ、我、後の守りに堪えむ」と。其の父喜びて曰く「甚だ善し、甚だ善し、今、汝、住して守れ、我汝と母と與に正に等しくして異ること無し。家の損益に於て心に疑慮無し」と。是に於て家を合し悉く往きて請を受く。女、便ち門戶を牢閉ぢ獨り家の內に住す。時に優婆塞、是の日怱々として忘れて食を送らず。爾の時、尊者、心に自ら念言ふやう「日時、晩に向ふ。俗人多事なり、或は忘れて食を送らず。我、今、寧ろ人を遣はし迎ふ可きや不や」と。卽ち、沙彌に告ぐるやう『汝、往きて食を取れ、善く威儀を攝め佛の說きたまふ所の如く、村に入り食を乞へ。貪著を生ずること莫く蜂の華を採り但其の味を取りて色香を損せざるが如し。汝、今亦爾なり、家に至り食を取り[八]根門を[九]收攝め色・聲・香・味・觸を貪ること莫れ。若し禁戒を持てば必ず能く道を取らむ。提婆達多の如く多く經を誦すと雖も惡を造り戒を毀つを以て阿鼻獄に墮す。[一〇]瞿迦利の如く誹謗し戒を破るも亦地獄に入る。[一一]周利槃特一偈を誦すと雖も戒を持つを以ての故に阿羅漢を得たり。又戒は卽ち涅槃に入るの門にて快樂を受くるの因と爲す。譬へば婆羅門の法の如きに若し長齋を設くること三月・四月ならば諸の高明・持戒・梵行の諸の婆羅門を請じ[一二]簡擇して請ず、普きを得ざるを以ての故に。仇留めて請ずる者の[一三]腕に封印を爲す。一人の婆羅門ありて復[一四]高經と雖も性淸廉ならず繇甜を貪るの故に封を舐めて都て盡せり。明日會所に至る。(業

【七】僮使。めしつかひ。

【八】根門。眼門・耳門・鼻門・舌門・身門・意門の五根門のこと。

【九】收攝。をさめとること。

【一〇】瞿迦利。西名、(Ko-ka-li-ka)。

【一一】周利槃特。西名、(Tsu-hu-ba-n-t-tagkt. Çuddhi-panthaka)、之を見るも西譯の漢譯よりなるを知り得る。

【一二】簡擇。選擇すること。

【一三】腕、大正本惋に作り、明本椀に作る。西本、(Lag-pa'i mkrig-ma (腕の頸)とあれば今は腕と訂正す。

【一四】高經。西本、(Yon-tan dan-ldan)(功德あること)とあればその意に解すべきか。

爾の時、安陀國に優婆塞有り三寶を敬信し五戒を受持す。殺さず、盜まず、邪婬せず、妄語せず、飮酒せず。布施し德を修め名國邑に遍し。卽ち、是の乞食の比丘を請じ身を終るまで供養す。供養の福田に隨つて報を受く。若し衆僧を請じ舍に就き供養せば則ち行道を妨廢す。道路の寒暑に勞苦し後に報を受くるの時要ず思慮を勞す。出行し求めて遂に乃ち能く之を得。若し就往て供養を奉らば後福報を受くるの時便ち坐して受くること自然なり。是の優婆塞信心淳厚く種々の色香の美食を辦具へ人を遣し往いて送る。日日是の如し。沙門四種の好惡明にし難し。菴羅果の生熟知り難しが如し。或る比丘威儀庠序として徐行し諦視す。而して內に貪欲・恚・癡・破戒・非法を具足すること菴羅果の外熟して內生なるが如し。或は比丘、外行麁踈にして儀式に順せず而も內に沙門の德行・禪定・智慧を具足するもの有り、菴羅果の內に熟して外生なるが如し。或は比丘威儀[五]麁獷にして破戒造惡、內も亦貪欲・恚・癡・慳貪・嫉妬を具有する有り。菴羅果の內外倶に生なるが如し。或は比丘、威儀庠審にして戒を持つて自ら守り而も沙門の德行・戒・定・慧解具足する有り、菴羅果の內外倶に熟するが如し。彼の乞食比丘の內外具足すること亦復是の如し。德行滿つるが故に人の宗敬する所なり。

爾の時、國中に一人の長者有り、三寶を信敬し、一人の男兒有り、心に自ら思惟ふやう「出家せしめ當に善師を求めて之に付託せんことを欲す。爾る所以は善知識に近けば則ち善法を增し惡知識に近けば便ち惡法を起す。譬へば風性空と雖も栴檀林若しは蒲萄林に由り香を吹きて來らば妙香有り。若し糞穢・臭死を經て來らば其風便ち臭きが如し。又淨衣を[六]香篋に置きその衣を出さば衣香ひ、若し臭處に置かば衣も亦隨つて臭きが如し。善友に親近すれば則ち善日に隆なり、惡友に親附せば則ち惡增長す。是の故に我、今當に此の兒を以て此の尊者に與へ其をして出家せしむべし」と。念じ已り卽ち往く。比丘に白して言はく「我、此の一子を今、出家せしめむ。唯、願くば大德

【五】麁獷。あらあらしく惡しき貌。

【六】香篋。にほひはこ。

卷の第五

二十四、沙彌[1]、戒を守り自殺する品　第二十三

是の如く我聞きぬ。一時、佛、安陀國[2]に在しき。爾の時、世尊、慇懃に持戒の禁戒を護るを讃歎し給ふ。寧ろ身命を捨つるも終に毀犯せざれ。何を以ての故に戒は道に入るの初基、漏を盡すの妙趣・涅槃安樂の平途と爲す。其の功德を計れば無量無邊なり。譬へば大海の無量無邊なるが如く戒も亦是の如し。猶大海には多く阿修羅、黿、鼉、水性の摩竭魚等の大衆生の居る有り。戒の海も亦爾なり。多く三乘の大衆生居ること有り。譬へば大海には諸の金・銀・琉璃等の寶多きが如く戒の海も亦爾なり、多く善法を出す、四非常[3]、三十七品[4]、諸禪三昧是の如き等の寶有り。大海は金剛を底と爲し金剛山圍み四江・大河其の中に流注し增さず減ぜざるが如く戒の海も亦爾なり。毘尼を底と爲し阿毘曇山を以て圍遶を爲し、四阿含の河流注して中に入り湛然として常に爾なり。增さず減ぜず。何を以ての故に注入して增さず減ぜざるか。下阿鼻の火、上の大海を衝いて海水消涸す、故を以て增さず。常に流入するの故を以て減ぜず。是の故に當に知るべし佛法の戒の海に不放逸の上に增さず。功德を具ふるが故に減ぜず。是の故に當に知るべし。能く戒を持する者其の德甚だ多し。

佛、涅槃の後安陀國土に爾の時一人の乞食の比丘有り、獨り靜處を樂しむ。威儀具足す。乞食の比丘は佛の讃嘆する所なり、衆に住するに非る者なればなり。何を以ての故に、乞食の比丘は少欲知足し儲畜、積聚まず。次第に乞食し敷に隨つて露坐す。一食、三衣是の如き等の事尊む可く尙ぶべし。僧に在るの比丘は多欲にして貯聚・儲畜を厭ふこと無く貪り求めて悋惜み、嫉妬・愛著す。故を以て大名聞を得ること能はず。彼の乞食の比丘、德行淳備し沙門果、六通、三明を具へ八解脫に住す。威儀庠序として名聞流布す。

【一】沙彌守戒自殺品。西本、No. 16. 沙彌戒を守る品。

【二】安陀國。國名、(A-na-ta, Skt. Andhra)。

【三】四非常。四無常のこと。無常・苦・空・無我を云ふ。

【四】三十七品。三十七道品のこと。道は能道の義、涅槃に到る道路の資糧三十七種あり。四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八正道となり。

の如く、實に是の如く汝今已に生死の苦を離れ涅槃の樂を得一切の人天の供養を受くべし。比丘の作すべき所の事汝已に具足せり」と。年少の比丘、佛の是の語を聞き深く憂悔を懷けり。「是の如きは智慧賢善の人なり、我等無智にして惡心の刺にて持ぶ。我等、云何が此の罪報を受けむ」と。時に諸の比丘、卽ち坐より起ち福增の所に至り五體を地に投げて是の言を作さく「諸の善人生るゝや悲と倶に生ず。大德、今生る。亦大悲と倶に生るべし。唯、願くば我々に於て憐愍の心を生じ我悔過を受けよ」と。福增、答へて言く「我、諸人に於て不善の心無し。爾悔過すべし」と。尸利苾提、諸の年少の心に恐怖を懷くを見て卽ち說法を爲しぬ。諸の比丘、聞きて生死の法を厭ひ精勤し修集す。結を斷じ漏を盡し阿羅漢道を得たり。福增の因緣、善き名流布し王舍城に遍し。諸人、咸言く「甚だ奇なり甚だ特なり、此の長老は此の城中に於て老耄し施無し。今、佛法に於て出家し成道し是の如き希有の妙法を顯說す。時に城中の人多く淨心を發す。或は男女・奴婢・人民を聽し放ち出家せしむる者あり、或は自ら出家する者有り、歡喜し相ひ勸めて出家せざる莫し。是の因緣を以ての故に出家の功德無量無邊なり。福增百歲にして方に乃ち出家し是の如く諸の大功德を成就せり。況んや諸の盛年妙勝の大果報を求めむと欲する者應に法を勤修し出家し道を學ぶべしと。歡喜し奉行せり。

五百の賈客有り海に入りて寶を採り、魚口を張るに値ひ船行きて、駛疾し魚の口に投趣す。賈人恐怖し聲を擧げて大いに哭く。各是の言を作さく「我等、今日決定して死すべし」と。各敬ふ所に隨ひ或は佛、及び法、衆僧を稱ふる有り、或は諸天・山河・鬼神・父母・妻子・兄弟・眷屬を稱ふ。並びに是の言を作さく「我等、今日、是れ最後に閻浮提を見ると爲す。更に永く見ず」と。爾の時、摩竭魚の口に入るに垂んとし一時に同聲に南無佛と稱へり。時に、魚、南無佛と稱へし聲を聞き卽時口を閉づ。海水停止し、諸の賈客の輩、死より活くるを得たり。此の魚飢逼りて卽便ち命終り、王舍城の中に生る。夜叉、羅刹卽ち其の身を出して此の海邊に置く。日曝し雨洗ひ、肉消し骨在り。骨山是れなり「福增よ、當に知るべし。爾の時の法增王とは汝の身是れなり。人を殺すに緣るが故に大海の中に墮し摩竭魚と爲る。汝、今、既に已に還び人の身を得て生死を厭はず。若し此に於て死せば當に地獄に墮すべし。出でむと欲するも甚だ難し」と。

時に尸利苾提、既に故身を見、是の說を聞き已りて生死を畏る。修むるところの法に於て次第に憶念し心を繫け意を注ぐ。故身を觀見し法の無常を解し生死を厭離す。諸の結漏を盡し羅漢道を得たり。目連、歡喜し告げて言く「法子よ、汝、今、作すべき所のものは皆已に作し竟れり、汝の此に來り向へるは我が力に因りて來れるなり。汝、今、自らの神力を以て去るべし」と。爾の時、目連、虛空に飛昇し、尸利苾提、和上の後に隨ふ。鳥の子の母に從ふが如し。還りて竹林に至る。時に諸の年少未だ道を得しを知らず。前の如く激刺す、尸利苾提、心已に調順し威儀、安詳默して陳ぶる所無し。佛、此の事を知り諸の比丘を護り惡業を起さゞるを欲し給ふの故に又此の老比丘の德を顯はさむと欲し大衆中に於て福增を呼びて言く「汝、來れ、福增よ、汝、今日大海の邊に往きし耶」と。福增、白して言さく「實に往けり、世尊よ」と。「汝見し所のもの今之を說く可し、」福增比丘、具に世尊に白すに見し所の事の如し。佛、言く「善き哉、善き哉、福增比丘よ、汝見し所の事

る。白して言はく「和上よ、願くば我今者心未だ裂けざるの頃時に我が爲めに本末因緣を說けよ」と。

目連、告げて言く「生死輪轉し邊際有ること無し。而して善惡の業終に朽敗すること無し。必ず其の報を受く。若干の業を造るも行に隨つて報を受く」と。

目連、又言はく『過去世の時此の閻浮提一國王有り名を曇摩苾提と曰ふ。[三五](秦に法增と言ふ)。布施・持戒・聞法を好喜み慈悲の心有り性暴惡ならず。物の命を傷けず、王相を具ふ。正法によりて國を治むること二十年を滿す。事、閑暇を簡び人と共に[三六]博戲す。時に一人法を犯して人を殺すもの有り。諸臣、王に白さく「外に、一人有り王法を犯す。云何が罪を治めむ」と。王、時に戲を慕ひ脫して之に答へて言く「國法に隨つて治せよ」と。卽ち、限律を案ずるに「人を殺さば應に死すべし」と。尋いで此の人を殺す。王、博戲し已り諸臣に問ふて言く「向の罪人今何の所に在る、我、斷決せむと欲す」と。臣、王に白して言さく「國法に隨つて治す。今、已に殺し竟る」と。王、是の語を聞き悶絕し地に躃る。諸臣左右冷水にて面を灑ぐ。良久しくして乃ち蘇へり。泣を垂れて言く「宮人・妓女・象・馬・七寶・悉く此に於て住す。唯、我れ一人獨り地獄の中諸の苦痛を受く。我、本未だ王と爲らざるの時而も此の宮中に亦王治有り、我久しからずして死すも此の中亦當に續きて王治有るべし。我、名は王と爲り而して人の命を害す。當に知るべし、便ち是れ栴陀羅の王なり。知らず、世々當に何の所に趣くべきか。我、今決定し王と爲るべからず。卽ち王の位を捨て山に入り自ら守らむ」と。時に王命終り大海の中に生じ[三七]摩竭魚と作る。其の身長大にして七百由旬なり。諸王・大臣、自ら勢力を恃み抂げて百姓を尅し人民を離別し衆生を剝脫し命終りて多く摩竭大魚と作る。多く諸蟲有りて其の身を唼身す。譬へば[三八]毾㲪と茸とを拘執するが如く身に著く諸蟲も亦復是の如し。身[三九]瘙痒するの故に頗梨山に揩ひて諸蟲を碎殺す。血流れて海を汚し、百里皆赤し、此の罪の緣を以て是に於て命終りて大地獄に墮す。時に摩竭魚の一眠百歲なり、覺め已りて飢渴し。卽便ち口を張る。海水流入して大河の注ぐが如し。爾の時、適

【三五】法增。西名、(Chos-kyi hphags-pa)とす。

【三六】博戲。ばくち。

【三七】摩竭魚。鯨魚・巨鼇。

【三八】毾㲪。よき毛氈。

【三九】瘙痒。かゆきこと。

自ら[二八]陌頭に於て房を起し安止す。自ら種々の香美の飲食を辨ぜり。時到り婢をして食を送り供養せしむ。婢、屛處に至り好美の者を選び自ら取りて之を食ひ餘を比丘に與ふ。大家、婢の顏色悅澤し飲食の相有るを覺り問ふて言く「汝、比丘の食を汚こと無きを得たるや」と。答へて言く「大家よ。我も亦信有り、邪見の人に非ず、何の緣にて先に食せむ。比丘食し已り殘り有りて我に與ふ。我、乃ち之を食しぬ。若し我先に食さば我をして世々自ら身肉を食せしめよ」と。是の因緣を以ての故に先づ[二九]輕く花報を繫ぐところの罪を受け命終し當に大地獄中に墮し正しく果報を受け苦毒無量なるべし。

福增、白して言さく「見る所の大身諸蟲唼食し大いなる惡聲を發するは、復、是れ誰なる乎」と。告げて言く「福增よ、是れ[三〇]瀨利吒、營事の比丘なり、自在を以ての故に僧祇の花果、飮食を用つて送りて白衣に與へ此の花報を受け此に於て命終し大地獄に墮す。身を諸蟲に唼せらるゝは即ち是れ爾の時の物を得るの人なり。

福增、白して言さく「和上よ、彼の聲を擧げて哭き衆箭競射し[三一]洞身火燃ゆるは復是れ何人ぞや」目連、告げて言く「此の人前身、大獵師と爲り多く禽獸を害す。是の罪を以ての故に斯の苦毒を受く。此に於て命終し大地獄に墮す。久しきを經て出づること難し。

又問ふ「和上よ、彼大山に於て自ら投じて來下し刀劍、[三二]矛矟に其の身を刺害し、投じ已り復上るは此れは是れ何人ぞや」と。目連告げて言く「是れは王舍城の[三三]中の大健鬪將なり、猛勇を以ての故に身[三四]前鋒に處し或は刀劍矛矟を以て物の命を傷尅するの故に此の報を受く。是に於て死し已り大地獄に墮し苦を受くること長く久し。

福增、又白さく「今、此の骨山は復是れ誰とか爲す」と。目連、告げて言はく「汝、知らむと欲せば此れ即ち是れ汝の故身の骨なり」と。尸利苾提是の語を聞き已り心驚き毛竪つ。惶怖し汗水とな

【二八】陌頭。みちばた。

【二九】輕繫花報之罪。花報は果報に對し、現在受くる報を花報と云ひ未來生に於て受くる報を果報といふ、茲に先づ現在既にその結果を受けてといふ義なり。

【三〇】瀨利吒。西名、(Lita)とす。西譯の原典漢譯には「瀨」字脫落せしなるべし。

【三一】洞身。はらのなか。全身といふに同じ。

【三二】矛矟。短いほこと長いほこ。

【三三】麗本王に作るも、中宜しきが如し。

【三四】前鋒。前は箭に同し、箭や鋒の前に立つの義。

れは酢なり、此れは美にして消し易し。汝、强いて食す可し」と。便ち恚の心を起す「我をして何時も眼に食を見ざらしむ」と。爾の時、命終し餓鬼の中に生る。若し人愚癡にして三寶を信ぜず誹謗し道を毀らば畜生に墮すべし。病の爲めに困められ唯伏臥を得て〔二六〕偃側し得ず。善言を喜ばず。左右定んで此の人必ず死するを知り便ち逼り勸めて言く「汝、當に法を聽き齋を受け戒を受くべし。汝、當に佛像を見比丘僧を見るべし。汝、當に布施すべし」と。其の人の心意都て喜樂せず。强く〔二七〕敎喩を爲さば便ち惡念を增す「願くば我一に三寶の善名を聞かざるの處を得ば快言ふ可からず」と。爾の時、命終し畜生の中に生る。若し善を修し人天の因を種うる有らば此の人大病の困しむ所と爲らず。命終るの時に臨み心錯亂せず。親しき所の左右其の將に死せむとするを知り各之に勸めて言く「法を聞くを樂しむや不や、像を見むと欲するや不や、比丘を見て經偈を聽くを欲するや不や、汝、喜んで齋戒を受くることを得むと欲するや不や、財物を得て佛像を施すを欲するや不や」と。悉く答へて言く「好し」と。復、說を與へて言く「佛の形像に施せば佛道を成ずることを得、法を供養すれば所生の處に在りて深く智慧を得法相を達解る。若し衆僧に施さば所生の處大いなる珍寶を得、意に隨つて乏しきこと無し」と。病人聞き已り歡喜し願つて言く「我が生るゝ所をして常に三寶に遇ひ聞法し開悟せしめよ」と。爾の時、命終し人中に生るゝことを得るなり。若し人廣く生天の善因を種え淸淨戒を施し樂しく經法を聽き十善を修持せば其の人將に終らむとして安隱に仰臥し佛の形像・天宮の婇女を見及び天樂を聞き顏色和悅し手を擧げて上に向ふ。爾の時、命終して卽ち天中に生る。此の薩薄の婦は、自ら身を愛著し命終して還び故身に生る。蟲と作り此の蟲身を捨てゝ大地獄に墮し苦を受くること量り無し。

尸利苾提、白して言さく「和上よ、自ら肉を食ふ者是れ何の婦人ぞや」と。目連、告げて曰く「是は舍衞國の優婆夷の姊なり、彼の優婆夷、一人の淸淨持戒の比丘を請じ夏九十日奉給し供養せり。

〔二六〕偃側。よりかゝりてふすこと。

〔二七〕敎喩。ねんごろにさとすこと。

で自ら思惟ふやう「我、今、和上に既に已に事無し。我、寧ろ向の來事を問ふ可きや不や」と。念ひ已り白して言さく「唯、願くば和上よ、我が爲めに向に見し所の事を解說せよ」と。目連、告げて言く「今、正に是の時なり」と。卽ち白さく「和上よ、先に見し所の者は是れ何の女人ぞや」と。目連、答へて言く「汝、知らむと欲せば是れ舍衞城の[19]大薩薄の婦なり。容貌端正にして夫甚だ愛敬せり。爾の時、薩薄、大海に入らむと欲し此の婦を貪戀し捨離すること能はず。卽ち將ゐて海に入り五百の賈客と與に船に上り海に入る。時に婦常に[20]三奇木の頭を以て鏡を擎げ面を照し、自ら端正なるを覩て便ち憍慢を起し深く愛著を生ず。時に一つの大いなる龜有り、脚を以て船を蹋ぐ。船破れて海に沒す。薩薄及び婦、五百の賈客一切皆死す。大海の法として死屍を受けず。若しは水波を迴らし若しは夜叉、羅刹岸上に出し置く。衆生命終し愛念する所に隨つて死して卽ち中に生ず。或るものは難じて言ふもの有り。「愛著する所に隨ひ便ち往生せば誰か地獄を愛せむ。而して地獄に入る者衆し」と。答へて曰く「若し衆生有り三尊の財及び父母の物を盜み乃至人を殺す。是の如き大罪は熾火地獄に墮すべし。是の人、風寒、冷病の爲に逼られ便ち火を思念ひ。中に入ることを得むと欲し念じ已り命終し便ち是の獄に墮す。若し人佛の燈明、及び物を盜み、或は僧祇の燈燭、薪草を盜み、若しは僧祇の房舍、講堂を破壞し、[21]撥撤し、若しは冬の寒時人の衣を剝脫き、若くは力勢を以て氷寒の時を以て水を奴婢及び餘人とに灌ぎ、若しは抄掠の時人の衣裳を剝ぐ。是の如き罪報は寒氷地獄に墮すべし。是の人は熱病の逼る所と爲り常に寒氷の處を思ふ。念想ふ時便ち此の獄に墮す。優鉢羅・鉢頭摩・拘物頭・分陀利地獄も亦復是の如し。寒氷地獄の中罪を受くるの人、身肉[22]氷燥し[23]燋豆の散るが如く腦髓白く爆け頭骨碎破し百千萬分なり。身骨[24]劈裂し[25]箭括を剳るが如し。若し人慳貪にして衆生を斷餓し時に隨ひ飲食せしめざれば餓鬼に墮すべし。逆氣の病を得て食を下すこと能はず。病を瞻て知識り種々の食を以て強いて之を勸めて言く「是れは甜し、是

【一九】大薩薄。西名、(Sar-pl̥ng chen-po)とす。梵名を高楠博士は(Sat-pati ?)にあてられてゐるが然し、西譯者が譯した時は(Ded-dpon)としその梵語は(Sārthavaha)となるらしい。商主、何れにしても西譯者は漢譯によりしことは確實である。

【二〇】三奇木。三本の木といふに同じ。

【二一】撥撤。のぞき去ること。

【二二】氷燥。こほりかわくこと。

【二三】燋豆。こげし豆。

【二四】劈裂。つんざくさけること。

【二五】箭括。やとひばし。

を銜み虚空を飛騰するが如く目連の神足も亦復是の如し。身、虚空に昇り臂を屈伸するの頃大海の邊に至る。海邊一つの新しく死せる女人有り、面貌端正にして身容殊に妙なり。相好具足す。一蟲有るを見る。其の虫口より出でゝ還び鼻より入る。復、眼より出で耳從りして入る。目連、立ちて觀じ、觀じ已りて捨て去る。尸利苾提、白して言さく「和上よ、此は如何なる女人にして、狀相是の如きや」と。目連、告げて言く「時到らば當に說くべし」と。小しく復前み行く一人の女人を見る。自ら[一七]銅鑊を負ひ鑊を擔へ水に著く、火を然し之を吹く、既に沸き衣を脫して自ら鑊中に入る。髮・爪先づ脫し肉熟れ骨離る。沸き吹きて骨出でゝ外に在り。風吹きて尋いで還び人と成る。自ら其の肉を取りて之を食噉ふ。福增見已り心驚き毛竪つ。白して言さく「和上よ、自ら肉を食ふ者は是れ何人と爲すや」と。目連、告げて曰く「時到らば當に說くべし」と。次いで小しく前に行く。一つの大身を見る。多く諸蟲有り其の身を圍み咬け乃ち支節に至る。空處の針の頭許の如きも有ること無し。時に大聲有り叫喚・啼哭す、遠近に震動し地獄の聲の如し、白して言さく「和上よ、此の大なる惡聲あるもの是れ何人と爲すや」と。目連、告げて言く「時、到らば當に說くべし」と。次に復、一人の大男子有るを見る。周匝に多く獸頭、人身の諸の惡鬼神有り。手に弓弩・三叉・毒箭を執り鐵皆火に燃たり。競うて共に之を射る。身皆燋燃す。白して言さく「和上よ、此は是れ何人ぞや、この苦毒を受け逃走の所無きや」と。師、言く「且く住めよ時到らば說くべし」と。次いで前み久しきを經て一つの大山を見る。下に刀劍を安んず。一人有るを見る。上より投下す。刀・戟・劍・矟、其の身を壞り刺す。即ち自ら收め拔き還び本處に竪つ。復、還び山に上り前の如くにして息まず。見已り師に白さく「此は復何人にして斯の苦を受くるや」と。告げて言く「且く止めよ、時至らば說くべし」と。次いで前みて一つの大骨山有るを見る。高さ七百由旬なり、能く日を[一八]障蔽し海をして陰黑ならしむ。爾の時、目連、此の骨の山の一大肋上に於て來往し經行し弟子隨ひ行く。尋い

【一七】銅鑊。銅のにくなべ。

【一八】障蔽。おほひかくすこと。

く「我、今、寧ろ死せむ」と。時に彼の林の邊に大河水有り既に深く且つ駛る。尋いで岸の邊に往き身の袈裟を脱し樹の枝の上に置き、長跪して衣に向ひ啼泣し涙を墮し、自ら誓を立てゝ言く「我今、佛・法・衆僧を捨てず。唯、命を捨てむと欲す。我が此の身の上の衣よ、布施し持戒し精進し誦經して、設し報あらば願くば我が身を捨てゝ、富樂の家に生れ眷屬調順し我が善法に於て留難を作さざれ、常に三寶に遇ひ出家の道を修め善師に遭値し涅槃を示悟せむ」と。誓已り、河深くして駛り迴り波の覆涌するの處に於て其の中に投ぜむと欲す。爾の時、目連、天眼を以て我が老弟子何事を作さむとするかを觀じ尋いで弟子の身を放ち水に投ぜむとするを見、未だ水に至らざるの頃神通力を以て岸の上に接置す。問ふて言く「法子、汝、何をか作す所ぞ」と、尸利苾提、甚だ大いに慚愧し卽ち自ら思惟ふやう「當に何を以て答ふべきや、我、今、應に妄語し師を誑かすべからず。設し師を誑かさば世々罪を獲む。當に舌根[一四]無かるべし。又我が和上、神通[一五]玄鑒し我、縱に妄語するも亦自ら之を知らむ。世々人有り、智慧明達し性實、質直ならば諸天敬ふべし。若し又智慧有れば[一六]諂誑を懷くも人師と爲り、人、恭敬し供養すべし。又若し智慧無きも質直有れば物を兼ずと雖も行足り自ら濟はむ。若し人愚癡にして心に諂誑を懷かば一切の衆中惡賤下劣なり、設ひ說く所有るも人悉く之を知る。皆言く、此の人諂欺にして實無しと。假令實を說くも捨てゝ信用せず。是の故に我、若し和上を欺誑するは此れ我が宜きに非ず。當に實の如く說くべし」と。卽ち師に白して言く「我、家を厭ひ出家し休息を求めむと欲す。今、復、樂しまず。故に命を捨てむと欲す」と。目連、聞き已り卽ち是の念を作さく「此の人、設し當に、生死恐畏の事を以て而も之を怖れざらば出家の利に於て空しく獲る所無し」と。卽ち之に告げて言く「汝、今、至心に我が衣の角を捉へ中にて放捨つこと莫れ」と。卽ち、師の敎を奉ず。譬へば風の性輕擧にして吹く所の塵草の如く上りて虛空を銜き神足空に遊ぶ。若し一毛を捉らば意の所至に隨ふ。爾の時、目連、猶、猛鷹の小鳥

【一四】無。大正本、爲に作るは誤植。
【一五】玄鑒。見透すこと。
【一六】諂誑。へつらひたぶらかす。

難行し頭を破り眼を挑り髓・腦・血・肉・皮・骨・手・足・耳・鼻の布施をなせしに非ず。舍利弗は身を餓虎に投じ、火坑に入り、身に千釘を琢ち身に千燈を剜りしに非ず。舍利弗は、國城・妻子・奴婢・象馬・七寶を施與せしに非ず。舍利弗は、初阿僧祇劫八萬八千の諸佛を供養し中阿僧祇劫九萬九千の諸佛を供養し、後阿僧祇劫十萬諸佛を供養し出家持戒し尸波羅蜜を具足せしに非ず。舍利弗は、法に於て自在に非ず。何ぞ制言を得む。此の人出家に應じ、此の人應ぜずと。唯、我一人、法に於て自在なり。唯、我獨り六度の寶車に乘り忍辱の鎧を被り菩提樹下に於て金剛座に坐し魔王の怨を降し獨り佛道を得、我と等しきもの無し。汝、來りて我に隨へ、我、當に汝に出家を與ふべし」と。是くの如く世尊種々に慰喩し給ふ。福增憂惱卽ち除き心大いに歡喜び、便ち佛の後に隨ひ佛の精舍に入る。大目犍連に告げ給ふやう「出家を與へしめよ。何を以ての故に衆生緣に隨つて度を得るなり。或は佛に於て緣有るあらば、餘人は則ち度すること能はず。舍利弗に於て緣有らば目連・迦葉・阿那律・金毘羅等の一切弟子は則ち度せざる所なり。是くの如く展轉し其の緣有るに隨つて餘人は度せず」と。爾の時、目連亦思ふやう「此の人、年高く老耄し誦經・坐禪・衆事を佐助することの三事悉く缺く。然れども佛は法王なり勅して出家せしむ。理違ふ可からず」と。卽ち出家を與し〔三〕具足戒を受けたり。此の人、前世已に得度の因緣を種え以て法鉤を呑むこと魚鉤を呑むが如し。必ず出づること疑はざるなり、已に曾つて諸の善功德を修め集む。晝夜精勤し修多羅・毘尼・阿毘曇を修習し讀誦す。廣く經藏に通ず。年老を以ての故に時に隨つて恭敬し迎送し上座を禮問すること能はず。諸の年少の比丘、先に出家するを以て上座と爲すの故に常に苦言し剋切なり。「此の老耄比丘自ら年高を恃み誦經し學問す。憍慢にして自ら大なり。相ひ敬承せず」と。時に、老比丘、便ち自ら思惟ふやう「我、家に在りし時家の大小の刺し惱さるゝ所と爲り今來り出家し休息を得むと望めり。而して復此の年少輩の激切する所と爲る。何の罪にて乃ち爾る」と。益增苦惱す。又、是の念を作さ

〔三〕具足戒。比丘・比丘尼の當に受くべき戒。比丘は二百五十戒、比丘尼は五百戒なり。

尊在らず。次に尊者舍利弗に向ふ」と。又問ふ「彼何の說く所ぞ」と。答へて言く「彼、我に告げて言く、汝老いて年過ぎ出家することを得ず」と。諸の比丘言く「彼の舍利弗、智慧第一なり、尙、汝を聽さず。我等も亦復汝を聽さず。譬へば良醫の善く病を瞻ることを知り捨てゝ療治せず。餘の諸小醫も亦悉く手を拱くが如し。當に知るべし、是の人必ず死相有り」と。舍利弗の大智を以て聽るさず。其の餘の比丘も亦聽るさず。尸利苾提、諸の比丘に求めて出家を得ず。還び竹園を出て門閫の上に住し悲泣し懊惱し聲を擧げて大に哭く「我、生れしより大過有ること無し。何の故に特に我に出家を聽さず、優波離の如き剃髮の賤人、尼提、下穢の糞を除く人、鴦掘摩羅の無量の人を殺し及び[三]陀塞羇の大賊惡人、是の如き等の人倘出家を得たり。我、何の罪有り出家を得ざるや」と。是の語を作す時世尊卽ち其の前に於て踊出し大光明を放ち給ふ。相好莊嚴、譬へば忉利天王、帝釋の七寶の高車の如し。佛、福增に問ひ給ふやう「汝、何故に哭くや」と。爾の時、長者、佛の梵音を聞き心に喜踊を懷き子の父を見るが如し。五體を地に投じ佛の爲めに禮を作す。泣きて佛に白して言さく「一切衆生、人を殺し、賊と作り、妄語誹謗し下賤等の人皆出家を得たり。我、獨り何の罪ありて特に我に佛法の出家を聽さゞるや。我が家の大小我が老耄を以て復我を用ひず。今、佛法に於て出家を得ず。今、設し家に還らば必ず前むこと能はず。我、當に何の所にか趣むべき。我、今、定んで當に此に於て命を捨つべし」と。爾の時、佛、尸利苾提に告ぐらく「誰か能く手を虛空の中に擧げて定んで說くことを作す。是は應に出家すべし、此の人應ぜず、是れ老なり」と。長者、佛に白して言さく「世尊の法轉輪王の第一智子、佛に次ぎ第二の世間の導師たる舍利弗なる者なり。此の人、我の佛法の出家を聽さず」と。爾の時、世尊、大慈悲を以て福增を慰喩し給ふ。譬へば慈父の孝子を慰喩するが如し。而して之に告げて言く「汝、憂惱すること莫れ、我今、當に汝をして出家を得せしむべし。舍利弗は、三阿僧祇劫精進苦行し百劫修福せしに非ず。舍利弗は、世々

【三】陀塞羇。西名(Ae-ka)、とす。

ること無し。譬へば迦留樓醯尼藥極めて苦毒と爲し若しは【五】斤兩に等しき【六】石蜜に比するが如く彼の善惡の報も亦復是の如し。人の出家を聽し若しは自ら出家すれば功德最も大なり。出家の人【七】修多羅を以て水と爲し結使の垢を洗ひ能く生死の苦を滅除し涅槃の因と爲す。【八】毘尼を以て足と爲し淨戒の地を踐む。【九】阿毘曇を目と爲し世の善惡を視る。意を恣にし【一〇】八正の路を遊歩し涅槃の妙城に至ることを以てす。是の義を以ての故に人を放ち出家せしめ若しは自ら出家せば若しくは老、若しは少其の福最勝なり。

爾の時、世尊、王舍城迦蘭陀竹園に在しき。

時に王舍城に一人の長者有り、尸利苾提【一一】（秦福增と言ふ。）其の年百歲なり。出家の功德是の如く無量なるを聞き便ち自ら思惟ふやう「我れ今何ぞ佛法の中に於て出家修道せざらむや」と。即ち、妻子奴婢大小に辭し「我れ出家を欲す」と。其の人老耄し家中の大小厭恔ざるは莫く。其の言を輕賤しめ從用ゆる者無し。出家せむと欲するを聞き咸各喜びて言く「汝、早く去るべし、何を以て遲晩き、今、正に是れ時なり」と。尸利苾提、即ち其の家を出て竹林に往趣き、世尊に見え出家の法を求めむと欲し竹林に到り已る。諸の比丘に問ふやう「佛、世尊、大仙、大悲にして天・人を廣く利する者今何所にか在ます」と。比丘、答へて言く「如來、世尊、餘(處)に教化利益を行うて在まさず」と。尸利苾提、又問ふ「佛、大師に次いで智慧の上足なるもの更に復是れ誰ぞや」と。比丘、彼の尊者舍利弗を指示し「是れなり」と。即ち、杖を柱とし舍利弗の所に至る。杖を捨て禮を作し白して言さく「尊者よ、我に出家を聽せよ」と。時に舍利弗、是の人を視已りて此人の老たるを念ひ三事皆缺く、學問・坐禪・衆事を佐助すること能はず。告げて言く「汝、去れ、汝老ひて年過ぎたり。出家することを得ず」と。次に摩訶迦葉・優波離・阿㝹樓陀等次第に五百の大阿羅漢に向ふ。彼に皆問ふて言く「汝、先に餘人に向ひしや、未や」と。答へて言く「我、先に已に世尊に向ふ。世

【五】斤兩。斤は百八十匁、兩は四匁。
【六】石蜜。氷砂糖のこと。
【七】修多羅。梵語、(Sūtra)、經のこと。
【八】毘尼。梵語、(Vinaya)、律のこと。
【九】阿毘曇。梵語、(Abhidharma)、對法と譯し論のこと。
【一〇】八正。八正道のこと。正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八聖道。
【一一】秦。宋・元・晉に作る。福增、西名、(Dpal skyes)(Śrīsiddhi ?)とす。

爾の時、世尊、出家の功德因緣其の福甚だ多きを讃嘆し給ふ。若しは男女を放ち若しは奴婢を放ち若しは人民を聽し若しは自己身出家し道に入らば功德量り無し。布施の報、十世に福を受け[二]六天・人中往返十たび到る。猶故に人を放ちて出家せしめ及び自ら出家する功德を勝と爲すに如かず。何を以ての故に布施の報福に限極有り、出家の福は無量無邊なり。又、特に戒の果報は[三]五通・神仙、天の福報を受け極めて[四]梵世に至る。佛法の中に於て出家の果報思議すべからず。乃ち涅槃に至る。福の故に盡きず。假使人有り七寶の塔を起し高さ三十三天に至るも得る所の功德出家に如かず。何を以ての故に、七寶の塔を貪惡の愚人能く壞破するの故に、出家の法は毀壞有ること無し。善法を求めむと欲して佛法を除いては更に勝あること無きの故なり。百の盲人あるも一明醫有らば能く其の目を治し一時に明に見えしむ、又百人有りその罪、眼を挑るべきも、一人力有りて能く其の罪を救ひ目を失はざらしむが如し。此の二人の福復量り無しと雖も猶亦人の出家を聽し及び自ら出家し其の福弘大なるに如かず。何を以ての故に能く二種の目を施すと雖も此の人唯各一世の利を獲るなり。又肉眼の性、性として敗壞有り、人の出家を聽し、若しは自ら出家せば展轉して衆生に永劫、無上の慧眼を示導しその慧眼の性、劫を歷るも壞すること無し。何を以ての故に、福人中の中に報ひ意を恣にし樂を受くること窮り無く盡くること無し。畢りて佛道を成す。所以は何んぞ。出家の法に由らば魔の眷屬を滅ぼし佛種を增益し惡法を摧滅す。善法を長養し、罪垢を滅除し無上の福業を興さむ。是の故に佛出家の功德を、須彌より高く大海より深く虛空より廣しと說き給ふなり。若し人有りて出家を爲す者に諸の留難を作し志に從はざらしめなば其の罪甚だ重し。夜の黑闇覩見する所無きが如く是の人の罪報亦復是の如く、深く地獄に入り黑闇にして目無し。譬へば大海の江河の百流悉く其の中に投ずるが如く此の人の罪報も亦復是の如く一切の諸惡皆其の身に集る。須彌山の劫火燒かれて、遺餘有ること無きが如く此の人も亦爾なり。地獄の火燒き窮り已むこと有

【二】六天。欲界に六天あり。一に四王天、二に忉利天、三に夜摩天、四に兜率天、五に樂變化天、六に他化自在天なり。

【三】五通。五神通のこと。不思議を神と云ひ、自在を通といふ。不思議自在の用に五種あり。一に天眼通、二に天耳通、三に他心通、四に宿命通、五に神足通なり。

【四】梵世。色界の諸天を總じて梵世界といふ。婬欲を離れたる梵天の住處なればなり。

く。爾の時、舍の神水を以て瘡を洗ひ藥を以て之に塗る。平復して故の如し。時に優波斯那、卽ち起ちて床より下り手に金瓶を執り。自ら澡水を行ひ種々の食を下す。色・香・味、具り佛食し已り、手を澡ぎ鉢を洗ひ摩訶斯那の爲に微妙の法を說き給ふ。所謂、布施・持戒は人・天の果報、生死の過患は貪欲の害を爲す、滅の樂を出離し〔一八〕十二因緣輪轉して息まず」と。時に優波斯那、佛の說く所を聞き慳嫉を斷つことを得て阿那含道を成ぜり。家内眷屬悉く五戒を受く。其の婆羅門邪見を捨離し三寶を信敬し優婆塞の戒を受けぬ。時に會の四衆須陀洹を得る者有り、斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り、大道心を發す者有り、一切大小歡喜せざる莫し。時に衆人の生死を畏る者有り、各是の念を作さく「今此の女人、乃ち能く是の如く自ら身肉を割き以て沙門に供ふ。甚だ奇特と爲す。我等、若し聚落・田宅を捨つるも豈難しと爲すに足らむ」と。便ち、各聚落・家屬を棄捨し出家し道を求め、勤修精進し諸の結漏を斷ち阿羅漢道を成ぜり。

時に此の聚落、佛法信行し廣闡し流布す。是の緣を以ての故に强き志の者有り乃至女人經法を讀誦し身の肉を惜まず。諸の道果を得たり。況んや丈夫の心を以て道業に勤むるに於て當に成ぜざるべき者あらむや。「是の因緣の故に諸の善男子當に善法を勸め生死を畏るべし。結使をして微薄ならしめ生死を離るゝことを得しめよ。此の末法の中に於て得度すること能はずと雖も此の功德に緣り當に人・天に於て無窮の福を受くべし。彌勒世尊、久しからず五十六億七千萬歲にして此に來り成佛し當に汝等の爲めに廣く妙法を說くべし。願ひ求むる所に隨ひ三乘道を成じ悉く解脫を得む」と。頂戴し奉行せり。

二十三、〔一〕出家の功德、尸利苾提の品、第二十二

是の如く我聞きぬ。一時、佛、摩伽陀國の王舍城迦蘭陀竹園中に在しき。

【一八】十二因緣。梵語、(Dvādaśāṅga Pratītyasamutpāda) 十二緣起ともいひ、是れ衆生が三世に涉りて六道に輪廻する次第因緣を說きしもの。無明と行の二は惑業の二にして過去世の因・識・名色・六處・觸・受の五は過去の惑業の因に緣りて受けし現在の果、是れ過去、現在一重の因果なり。愛・取の二は現在の惑にして有の一は現在の業なり。此の惑業の現在の因に緣て未來の生と老死の果を感ず。是れ現未一重の因果なり。之を三世兩重の因果と云ふ。

【一】出家功德尸利苾提品。西本、No. 15.

言く「若し能く我の爲めに佛及び僧を請ぜよ。明日此に來り供養を設けなば甚だ善し。若し其能はざれば我當に命を捨つべし。我れ、乃ち自ら身の肉を以て人に施す。汝、何の悔有りて乃ち是の事を起すや」と。此の婆羅門妻三寶に於て信敬の心無きも妻の是の語を聞き其の妻を以ての故に林に入り佛に趣き、佛の所に至り已り卽ち言さく「瞿曇沙門及び諸の弟子、我が請ずる明日の舍食を受くべし」と。佛、默然として受け給ふ、時に婆羅門、佛の請を受け給ふを知り家に還り妻に語るやう「沙門瞿曇已に汝の請を受けたり」と。時に優婆夷、卽ち家内に勅し種々の食・香・花・坐具を辦ず。明日時到り人を林中に遣はし。往きて世尊に白さく「食具已に辦ぜり。唯、聖よ時を知り給へ」と。佛、比丘と與に衣を著け鉢を持ち其の家に往至り。座に就きて坐し、坐し已り婆羅門に問ひ給ふやう「摩訶斯那、今何の所にか在るや」と。答へて言く「病みて、某房に在り」と。佛言く「喚び來れよ」と。時に婆羅門、卽ち往きて告げて言く「汝の師、汝を呼ぶ」と。卽ち曰く「我、摩訶斯那、佛・法・僧の足を禮す。我に病苦有り、起居に任ず」と。其の夫、往きて佛に言さく「優波斯那、佛・法・僧の足を禮す。我に病苦有り起ちて往くに任へず」と。佛、阿難に告げ給ふやう「汝、往きて優波斯那に告げよ、汝、起ちて佛を見よ」と。阿難、卽ち往き優波斯那に告ぐるやう「世尊、汝を呼ぶ、汝往きて見る可し」と。時に優波斯那、卽ち、臥より起き合掌して白して言さく「我、今、佛・法・僧を禮す。世尊を見むと思ふこと飢えて食を須ふるが如く渴して飮を須ふるが如く、寒くして溫を思ふが如く熱して涼を思ふが如く、道を失して導を思ふが如し。我佛を見むと思ふこと亦・復是の如し。心往かむと欲すと雖も身肯て隨はず」と。阿難、還りて佛に白すに優波斯那說く所の如し。佛、阿難に勅すらく「床を幷べ輿にて來れ」と。阿難、敎を奉じ人をして輿にて來らしむ。佛の前に到る。爾の時、如來大光明を放ち給ふに諸の佛の光其の身に觸るゝに遇ふ者狂者は正を得、亂者は定を得、病者は愈ゆることを得たり。時に、優波斯那、佛の光に遇ひ已り苦痛卽ち除

の婢を隱屛處に召し問ふて言く「我の婦何の由にて疾有りや」と。婢、實を以て答ふ「大家當に知るべし。病比丘の爲めの故に肉を割き之を飴とす」と。夫、是を聞き已り、佛・法・僧に於て恚害の心を生じ便ち街巷に於て高聲に唱へて言く「沙門、釋子人肉を食噉ぶ、[一七]班足王の如し」と。爾の時篤信の優婆塞、婆羅門の佛・法・僧を罵るを聞き憂愁して樂しまず。世尊の所に往き頭面に足を禮す。世尊、告げて曰く「汝等、何の故に愁慘して樂しまざるや」と。白して言さく「世尊よ、一婆羅門有り。多人の處に於て高聲に唱言へて佛・法・僧を罵る。昔、班足王、人肉を食噉ぶ、今の沙門釋子も人肉を食噉ぶ、亦復是くの如しと。願くば佛、世尊よ、諸の比丘に勅し人肉を食べしむること莫れ」と。爾の時世尊、是の事を以ての故に比丘僧を集め病比丘を呼ぶ。時に病比丘、世尊の敎を聞き心に喜踊を懷く。「世尊、大慈乃ち流れて我に及ぶ」と身、羸瘦すと雖も自ら力めて來る。到り已り足を禮し却きて一面に坐す。佛言く「貴子、汝何をか患ふ所ぞ」と。比丘白して言さく「病の爲に惱む所なり。今、世尊を見奉り小瘳え降ることを得たり」と。世尊、又問ふらく「今日、汝、何をか食ふ所ぞ」と。答へて言く「今日、肉汁の食を食せり」と。佛、言く「食ふ所是れ新しき肉なりや又乾肉と爲す乎」と。答へて言く「新しき肉なり」と。「天竺國熱肉宿を經ざるも食ふ所なり、若しは新、若しは乾、善男子よ、汝、肉を食する時爲めに淨・不・淨を問ひしや不や」と。答へて言く「世尊よ、我が病困むこと久し。便ち之を食すことを得て實に問はざるなり」と。佛言く「汝云何が乃ち不淨食を受けしや。比丘の法、檀越食を與ふるに應に先に之を問ふべし。此は是れ何の肉ぞやと。檀越、若し此は是れ淨肉と言ふも重ねて觀察すべし。信じて應に食す可し。若し信ず可らざれば便ち食すべからず。若し見・聞・疑の三不淨肉は亦食す應らず。是の如く應・不應食を分別せよ」と。時に優婆夷、佛、世尊正に我に由る故に諸の比丘を制し肉を食することを得ざるを聞き大いなる苦惱を生ず。已を緣とするを以て永く比丘をして肉を食せざらしむる故に、即ち夫に語りて

【一七】班。宋・元・明本駮に作る。班足王の物語賢愚經 No. 552. を見よ。

憂惱して言く「汝、金錢を持ち重さと等しきを買ひ索めよ」と。爾の時、使人、金錢を持ち勅の如く推求むと雖も而も諸の屠者其利を貪ると雖も王法嚴重にして命根を失ふを懼れ敢て與ふる者無し。是の如く往返し了りて得ること能はず。時に優婆夷、倍增憂惱し病比丘を念ふ。「已に我請を受く。而して我設し當に所須を供せざれば或は能く命を失ふべし。便ち是れ我が咎なり。當に何計を施すべき」と。是念を作し已り重ねて自ら思惟すらく「往昔、菩薩一羽の鴿を以ての故に猶自ら屠割し身命を惜まず。況んや此れは比丘なり。鴿に於て降ること有らむや、我、寧ろ自己の身の肉を愛して而も彼を濟はるは不可なり」と。是の念を作し已り、一に信ず可き常に使ふ所の人を將ゐ却きて靜室に入る。自らを淨くし身を洗ひ床上に踞坐し使人に勅して言く「汝、今、我が股の裏の肉を割き取れ」と。爾の時、使人敎の如く卽ち利刀を以て割き取る。肉を割く時に當り苦痛逼切し悶絕し地に躄す。時に婢卽ち、[一六]白氎を以て纏裹みぬ。既に肉を取り已る。諸の藥草を合し煮て以て臛と爲し疾の比丘に送る。比丘、是の信心の檀越送る所の食を受け已り疾卽ち除愈る。夫の婆羅門、時に在らず、行きて還る。問ふて言く「摩訶斯那、何の所に在りと爲す」と。答ふ「某房の中に在り」と。其の夫往きて見る。顏色變異りて常と同じからず。卽便ち問ふて言く「汝、今、何に緣つて憔悴乃ち爾る」と。對へて白く「我、今病の爲めに侵さる」と。其の夫憂愁し尋いで諸の醫を集め其の患ふる所を診る。醫、集り問ふて言く「汝、何の疾有りや疾の發動する所其來ること久しく、休間有ろ如きや不や」と。「我が病、一切の時痛み今の疼苦の如く復休間無し」と。時に醫、脈を察し疾む所を知らず。默然として還り出づ。其の夫泣を垂れて妻に問ふて言く「汝、何の疾む所ぞ情を以て見、語れ」と。妻、之に答へて曰く「明醫も知らず、我、焉ぞ能く知らむ」と。時に婆羅門、家内の人に問ふやう「汝等、能く摩訶斯那の苦患する所を知るや不や」と。時に諸の使人白して言さく「大家よ、我等知らず。當に信ず可き親近せらるる者に問ふべし」と。時に婆羅門、卽ち彼

【一六】白氎。白い細毛の布。

る。優婆夷言く「尊者、告ぐる所實に甚だ善しと爲す。尊者去る後に當に所供を辦ずべし。以て世尊を待たむ」と。

是の如くして世尊是の林に至り給ふ。摩訶斯那、甚だ大いに歡喜び卽ち諸の優婆夷を集め、尋いで其の暮に於て佛の所に往至り、遙に世尊の光明殊に妙なるを見て[一一]五情悅豫し善踊量り無し。到り已りて禮を作す。種々の香華佛を供養し畢り、卻きて一面に坐す。佛、爲めに施論・戒論・生天・斷欲・涅槃の論を說法し給ふ。說法を聞き已り將ゐて家に還らむと欲す。合掌して佛に白さく「我が此の村の人普く皆邪見なり。佛法を識らず、佛德を知らず、布施を好まず。故に沙門、婆羅門をして此の村に入り乞ふて常に我が家に至らしむ。唯、願くば世尊よ、我に隨ひ幾時も此の村邑に住し佛及び弟子常に我が請ずるの四事の供養を受け給へ」と。白し已り足を禮して退き、次第に諸の比丘の止宿の處の所を觀る。最後、一病比丘[一二]草窟の中に臥す有るを見る。卽ち、大德に問ふやう「何の苦患する所ありや」と。比丘、答へて言く「道路行み來り[一三]四大調はず、困苦し賴み少し」と。優婆夷、言く「大德、患ふ所便ち宜しく何を食とすべき」と。答へて言く「[一四]醫處は當に新しき熱き肉汁を服むべし」と。優婆夷言く「復、餘に求むること莫れ、我れ明日當に送るべし」と。答へて言く「可し」と。爾の時、優婆夷、足を禮し家に還り自ら思惟して言く「我、大利を得たり」と。佛、世尊、及び舍利弗等の諸大尊者を見て深く喜慶を加ふ。然るに明十五日を憶念はず。時に彼の國法、其の十五日は一切殺さず、殺す者の命を奪ふなり。明日晨朝、勅して使をして錢を持ち新しき熱肉を買はしめ、使人、敎を受け市に詣り遍く求むるも、得ずして空しく還る。大家に白して言さく「今、十五日市に屠殺無し」と。時に優婆夷、使人に告げて言く「汝、千錢を持ち百錢の肉を買へ、利を求むる者有らば或は能く汝に與へむ」と。使人錢を持ち又往きて推し覓む。王、[一五]限重の故に敢て與ふる者無し。使人還りて白さく「具に事情の如し」と。時に優婆夷、是の事を聞き已り心

【一一】五情。眼・耳等の五根なり。根能く情識を有すれば情といふ。
【一二】草窟。草の集つてゐる所。
【一三】四大。地・水・火・風の四大、この四大により我等の身體なる。
【一四】醫處。醫者に同じ。
【一五】限重。きびしく重し。

住して聽く耳、天寶を以て相遺らむと欲して而も汝の宜しき所に非ず。今、善言を以て汝に贈らむ」と。我卽ち、問ふて言く「何をか告ぐる所を欲す」と。卽ち言く「尊者、舍利弗・目犍連、明日某林に至るべし。汝、請來し舍に於て供養すべし。呪願の時我が名を念稱ふべし」と。我れ卽ち之に問ふやう「汝の名稱を稱し何の利益か有るや」と。彼れ卽ち我れに答ふるに具に上の事を以てす。是の因緣を以て我今之を稱す』と。

舍利弗、言く「實に奇特と爲す。汝は人、彼は天なり、而して能く意を屈し汝と與に言語る。云く是れ姉妹」と。優婆夷、言く「我れに又更に奇特の事有り、此の舍に神有り、我と親厚あり、女人有り共に相ひ往來するが如し。我布施する時此の神我に語る。此は阿羅漢、此は阿那含、此は斯陀含、此は須陀洹、此は凡夫、此は持戒、此は破戒、此は智慧、此は愚癡と。我、此の説を聞くと雖も意等くして二無し、凡夫、犯戒等に於ても阿羅漢の如し」と。舍利弗、言く「汝、實に奇特なり。能く此の中に於て平等の心を生ず」と。摩訶斯那、言く「我、復奇特の好き事有り、我は女人の身加ふるに復在家なり、而して能く二十【九】身見を除滅し須陀洹を得たり」と。舍利弗、言く「姉妹、汝、甚だ奇特なり、能く女身に於て須陀洹を成ぜり」と。優婆夷言く「我れ又更に希有奇特のこと有り、我に四子有り皆惡邪見、我が夫惡邪又亦尤も甚し。佛・法・僧に於て識らず敬はず。我、若し三寶を供養し及び貧窮に給せば便ち嫉恚を生ず。咸言く「我等家業に勞勤む。而して乃ち此の無益の用を作す」と。此の説有りと雖も我れ道心に於て善を修し布施し終に退縮無し。亦恚恨まず」と。舍利弗言く「婦人の法は一切の時の中常に自在ならず、【一〇】少小は則ち父母護り、壯時は則ち其の夫護り、老ゆる時は則ち子護る。而も汝は夫子の爲めに制せられず意に隨つて善を修す。姉妹よ、我、今、汝を誨へむ。善く心に著く可し。何者の好事ぞや。謂く、「佛、世尊、是の暮、當に毘紐乾特林に至るべし。我、是の事を用つて以て相ひ報じ遣すなり」と。語り已り辭して所至に還

【九】身見。身に於て實我を執ずる邪見なり。

【一〇】少小。年わかし。

到る」と。卽ち曰く「何の好教有りしや、時に之を說くべし」と。具に五施を以て爲めに之を說く。時に優婆夷歡喜すること前に踰えたり。譬へば蓮花の日を見て卽便ち開敷くが如し。時に彼の開解すること亦復是の如し。卽ち自ら頸の衆寶瓔珞を解き重ねて以て之を賜ふ。使者、白して言さく「大家よ、時なり起きよ、手を洗ひ飲食供養を辦具せよ、我、向に輒ち大家の言敎を持つて二尊者及び五百の弟子を請ぜり。今日來り食せん。願くば時に供辦せよ」と。是の語を聞き已り益復踊躍し、言く「我が作さむと欲する所已に我が爲めに作せり。快く言ふ可からず、我、今、汝を放たむ。更に我に屬せず。汝の善好きが如く在家・出家・聚落・城邑處に隨つて光を好めよ」と。

時に優波斯那、卽ち起ちて手を洗ひ家屬及び諸の隣比に告げ語るやう「汝、食を作すべし。汝、火を燃すべし、汝、水を取るべし、汝席を敷くべし「汝花を取るべし」と。是の如く種々に部を分ち訖已り、卽ち自ら藥を取り、搗末搗和供ふる所已に辦ぜり。卽ち、是の人を遣はし還び時到るを白さしむ「食具、已に辦ぜり。唯、願くば時を知れ」と。時に二尊者、諸の比丘と與に衣を著け鉢を持ち其の家に往詣り座に就きて坐す。時に、優波斯那、手自ら水を行り種々の食を下す。色・香・味一切の諸行、業に隨つて報を受く。好色の食施し好顏色を得、食に好香有り遠く名稱を得、其の味具足して意の欲する所に隨ふを得、食の報を以て大いなる筋力を得たり。衆僧、食已りぬ。尊者舍利弗、卽ち之に呪願を與ふ。其の呪願の時、優波斯那白して言さく「尊者よ、願くば當に彼の毘沙門天の名を稱ふべし」と。時に舍利弗、呪願已に訖る。尋いで便ち問ふて言く「汝、毘沙門天王に於て何の因緣か有りて其の名を稱す」と。白して言く『尊者よ、希有の事有り、我、昨夜法句を誦するを以ての故に彼の天王をして空中に住せしむ。我が經を誦するを聽き讚言すらく「善き哉、善き哉、姉妹よ、善く妙法を說く」と。我卽ち仰ぎて問ふ「汝は是れ誰とか爲す、身形を視ず、但聲のみ有る耶」と。彼れ我に答ふて言く「我は是れ鬼王毘沙門身なり。汝の經を誦するを聽く故に

【八】搗末搗和。搗末和雜、と宋・元・明本作る。

く「佛の百劫に於て精勤し苦行し給ふも唯我が爲めのみ、佛恩を以ての故に乃ち鬼王をして我が姉妹と爲さしむ」と。便ち寢寐[七]ねず。天、曉を欲するに垂んとして方に少しく眠ることを得たり。時に彼の家の中、常に使人をして林に入り薪を取らしむ。是の時、使人早く起きて林に入り樹に上りて薪を採る。遙に尊者、舍利弗、目連等五百の比丘此の林の中に在るを見る。其の精勤なる者は坐禪誦經し其の懶惰なる者は少しの草上に臥す。時に彼の使人本大家に隨ひ舍衞國に到る。是の故に遙に見て二尊者を識る。便ち自ら念言うやう「我等の大家、尊敬する所の者今此の林に在り、大家知らず。若し、我徐に薪を取り已り乃ち還りて白さば或は餘人有り、脫して先に請じ去らむ。我れ則ち過有り、事に於て折減し先づ斯の要を辦じ後乃ち薪を取らむ。事に於て苦無し」と。卽便ち樹を下り尊者の所に往き頭面に足を禮し白して言さく「尊者よ、我が大家、優波斯那、足を禮し問訊す」と。尊者答へて言く「優波斯那をして安穩樂を受け生死を解脫せしめむ」と。白して言さく「尊者よ、我が大家優波斯那、今日の食を請ず。唯、願くば屈して臨めよ」と。尊者答へて言く「汝、還び家に歸り優波斯那に告げよ、善き哉、優婆夷、時を知り宜しきを知れ、佛、五施の福を得ること無量なるを讃し給ひ、所謂遠く來る者に施す、遠く去る者に施す。病瘦の者に施す。飢餓の時に於て飲食を施す。法を知る人に施すとなり。是の如き五施は現世に福を獲」と。使者敎を受け禮して退き林を出でて急ぎ疾く家に歸れり。到り已り姉に大家在る所を問ふ。答へて言く「彼の高屋の上に初夜、中夜睡眠を得ず。今、方に始めて眠る」と。使、曰く「喚び覺せよ」と。姉言く「敢て白さず」と。「汝、若し能はざれば我自ら覺すべし」と。咸言く「意に隨へ」と。使、前みて屋に上り彈指して覺ましむ。覺め已り問ふて言く「何の白す所あらむと欲するや」と。白して言さく「大家よ、尊者舍利弗、目犍連等其の林の中に在り」と。優波斯那、甚だ大いに喜躍す。卽便ち、耳の二金鐶を取りて以て之を賞す。尋いで更に白して言さく「尊者、好き言敎有り大家の邊に

【七】寢寐。ねる。

命を失ふも終に毀犯さず。飢人食を惜み渇者水を愛するが如く、病者命を護るが如く我の禁戒を護る。亦復是の如し」と。時に佛、即ち五戒の法を與授け五戒を得已りぬ。白して言さく「世尊よ、我が住む處所[四]偏僻迥遠なり。所止に還るべし。願くば少物を賜れ、當に之を敬奉すべし」と。「過去の諸佛恒河沙の如く盡く法句を說き、未來の諸佛恒河沙の如く亦是經を說く」と。爾の時、世尊、法句經を以て優波斯那に與へ、諷じ奉行せしむ。得已り禮を作し佛を遶ること三匝にして去り本の聚落に還る。佛、與ふる所の經を思惟し憶念す。是の時中夜高屋の上に於て佛の功德を思ひ法句を讀誦す。時に[五]毘沙門天王、南方[六]毘樓勒叉の所に至らむと欲し千夜叉を將ゐ優波斯那の上を過ぐ。誦經の聲を聞き尋いで皆空に住す、其の誦する所を聽き讚言すらく「善き哉、善き哉、姉妹よ、善く法要を說く。今、我、若し天寶を以て相ひ遺るも爾宜き所に非ず。我、今、一善言を以て相ひ贈らむ。謂く、尊者舍利弗、大目犍連舍衞より來り當に此の林に止るべし。汝、明、往き舍に請じ供養せよ。彼の呪願の時幷に我が名を稱せよ」と。優波斯那、此の語を聞き已り仰ぎて空中を視るも其の形を見ず。盲眼の人夜黑闇に於て都て見る所無き如し。即ち、問ふて曰く「汝は是れ誰とか爲す、其の形を見ずして但聲のみ有り」と。空中に答へて言く「我、是れ鬼王毘沙門天なり、聽法の爲めの故に此に住する耳」と。優婆夷、言く「天に謬語無し。汝は天、我は人なり、絕へて因由無し。何が故に我を稱して姉妹と爲す耶」と。天王、答へて言く「佛、是れ法王なり、亦人天の父なり。我、優婆塞と爲り。汝、優婆夷と爲る。同一法味の故に姉妹と言ふ」と。時に優婆夷、心に歡喜を生じ、問ふて言く「天王よ、我、供養する時汝の名字を稱するは何の利有り耶」と。天王、答へて言く「我は天王爲り、天耳、遠く聞ゆ。我が名を稱せば我悉く之を聞く。我を稱するを以ての故に我が勢力威德眷屬を增す。我、亦復神力を以て鬼神に勅し是の人を護念し。其の福祿を增し衰患を離れしむ」と。是の語を說き已り尋いで便ち過ぎ去る。時に優婆夷歡喜踊躍し自ら思惟して言

【四】偏僻迥遠。かたよりはるか遠きこと。

【五】毘沙門天王。梵語、(Vaiśravaṇa)、四天王中毘沙門天の王なり。護法の天神と施福の神性とを兼ぬ。

【六】毘樓勒叉。普通增長天といふ梵語の音譯なり。四王天中南方天の名。

卷の第四

二十二、[一]摩訶斯那、優婆夷品　第二十一

是の如く、我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇洹精舍に大比丘衆と與に在し、(大衆)圍遶し恭敬せり。

爾の時、佛、智慧を讃え給ふやう「行者よ、佛道を成ぜむと欲せば當に經法の讀誦演說を樂しむべし。正に[二]白衣をして說法せしむるも諸天鬼神悉く來りて聽受す。況んや出家人をや。出家の人乃至路を行くも經を誦し偈を說け、常に諸天有り隨つて聽受す。是の故に應に勤めて經法を誦說すべし。何を以ての故に知るや、佛、初め祇洹精舍に至り、功德流布し聞知せざる莫し。時に諸の善人佛の名の德を聞き歡喜量り無し。稱揚し讃嘆す。所以は何ぞや。

世間の惡人、善人の名を聞き心に憎嫉を生じ惡を聞きて歡喜ぶ。賢善の人は惡を遏め善を揚げ廣く聞かしめむと欲す。人の惡を作すを見て結使を知り憐愍し[三]原恕す。是の如き善人は佛の出世を聞き稱揚流布し諸國に遍からしむ」と。

時に、波斯匿王に、邊小國有り、毘紐乾と名づく。時に、此の聚落の中の人邪見多く佛・法・僧無し。時に此の村落に一女人有り、摩訶優波斯那と名づく。時に事緣有り舍衞國の波斯匿王の所に至る。緣事畢訖る。諸の篤信の優婆塞の邊より佛の功德を聞き、佛に見ゆることを得んと欲す。即ち祇洹に往く。佛の相好莊嚴殊に特れ給へるを覩て頭面に足を禮す。却きて一面に在り。爾の時、世尊、諸の大衆の爲に五戒法を說く。所謂不殺は長壽を得、不盜は大富を得、不邪淫人の敬愛念を得、不妄語は言信用せらるゝを得、不飮酒は聰明・了達を得ると。時に、優波斯那、此の法を聞き已り甚だ大に歡喜す。前みて佛に白して言さく「唯願くば世尊よ。我、當に壽を盡し清淨に奉持し奪ろ身

【一】摩訶斯那、優婆夷品。西本、缺。

【二】白衣。俗人の別稱なり。天竺の婆羅門及び俗人は多く鮮白の衣を服すればなり。之に對して沙門を緇衣又は染衣といふ。

【三】原恕。ゆるすこと。

きを知り、卽ち神力を作し象師をして跪き王に答へしめて言く「大王よ、我は唯能く象の身を調ふ。心を調ふこと能はず」と。王、卽ち問ふて言く「頗、復人有り、亦能く身を調へ兼ねて心を調ふるや不や」と白して言さく「大王よ。佛、世尊有り、旣に能く身を調ひ、亦能く心を調へ給ふ」と。時に光明王、佛の名を聞き已り心驚き毛竪ち、告げて言く「散闍よ、言ふ所の佛とは何の種性の生なりや」と。散闍、答へて言く「佛、世尊とは二つの種性の生なり。一には智慧、二には大悲なり。六事を勤行し給ふ所謂六波羅蜜なり。功德智慧悉く具足へ已り給ふ。之を號して佛と爲す。旣に自ら能く調へ亦衆生を調へ給ふ」と。王、是を聞き已り、悚然として踊躍し、卽ち起ちて宮に入り香湯に洗浴みし、更に新しき衣を著け、高閣の上に上り四方に向つて禮を作し、一切衆生に於て大悲心を起し燒香して誓願すらく「願くば所有る功德を佛道に廻向し、我、佛と成り已り自ら其の心を調へ亦一切衆生を調伏すべし。若し一衆生を以ての故に〔一〇〕阿鼻地獄に在り一劫を住經るとも益する所有らば當に是の獄に入り、終に菩提の心を捨てさるべし」と。是の誓を作し已り(大地)六種に震動す。諸山大海〔一一〕距蹴踊沒す。虛空の中に自然に樂の聲あり、無量の諸天、天の伎樂を作し菩薩を歌歎す。而して是の言を作さく「汝の作し給ふ所の如くんば久しからずして佛となることを得給はん、佛道を成じ已り給はば願くば我等を度し給へ、我等此の淸淨法會に於て亦應に分有るべし」と。」

佛、諸の比丘に告げ給はく「爾の時、白象鐵丸を吞む者を知らむと欲せば難陀是れなり。時の象師とは舍利弗是れなり。光明王とは我身是れなり。我、爾の時に於て是の象の調順を見るが故に始めて道心を發し佛道を求めぬ」と。爾の時、大會佛の苦行の是くの如きを聞き四道果を得る者有り、大道心を發す者有り、出家修道する者有り、歡喜して、頂戴奉行せざるは莫し。

是の因緣を以て强き志勇の故に小因緣に由り能く大事を辦じ、懶惰懈怠ならば大緣に遇ふと雖も能く成ずる所無し。是故に行者當に勤めて精進し佛道に趣向すべし。

【一〇】阿鼻地獄。此の地下の最底にあり、餘の大地獄は其上に重疊す。無間地獄と譯し苦受くること間斷なき故なり。
【一一】距蹴。おどりふずぶる貌。

之を視よ」と。王言く「我、汝を須ひず、亦象を須ひず」と。散闍、王に啓す「王、若し我と及び象を須ひざれば唯、願くば我が調象の方を觀よ」と。王、卽ち地を平坦ならしめ坐處を敷置く。時に國中の人、此の象師の大王に調象の法を示さむと欲するを聞き普く皆雲集る。時に王、宮を出でて、大衆を導き從ふ。座に詣りて坐す。象師散闍、象を將ゐて會に至る。尋いで工師をして七の鐵丸を作らしめ燒いて極めて赤からしむ。作り已り念言ふやう「象此の丸を呑まば決定して當に死すべし、王、後に或は悔ひむ」と。白して言さく「大王よ此の白象は寶なり、唯、轉輪王のみ乃ち之を得るのみ、今、小さき過有るも喪失ふべからず」と。王、之に告げて言く「象若し調はざれば吾をして之に乘らしむべからざるなり。若し其れ調適するも事豈斯の如し。今、汝を須ひず亦象をも須ひず」と。象師又言く「我を須ひずと雖も象は甚だ惜むべし」と。王怒り隆盛にして告げて言く「遠く去れ」と。散闍起ち已り泣涙きて言く「王、親疎無く其の心毒の如し」と。詐りて甜言を出す。時に會の大小聞き已り涙を墮し、諦かに象を視る。象師、卽便ち相を作し象に告ぐるやう「此の鐵丸を呑め。若し呑まざれば常に鐵の鉤を以て汝の腦を斵[九]裂かむ」と。象、其の心を知り卽ち自ら思惟ふやう「我、寧ろ此の熱丸を呑みて死せむ。實に鐵鉤の死を被ること堪忍ぶべからず。人の倶に死せむと寧ろ絞死を受け燒殺を樂しまざるが如し」と。膝を屈し王に向ひ、涙を垂れ救ひを望みぬ。王の意怒り盛にして覩已りて餘視る。散闍、象に告ぐるやう「汝、今、何を以て此の丸を呑まざるや」と。時に象四顧し念ふやう「是の衆の中に乃し能く我が命を救ふ者有ること無し」と手を以て丸を取り口に置き之を呑み、腹に入り、焦爛し直ちに過ぎて死せり。金剛杵の玻瓈の山を打つが如く鐵丸地に墮つ。猶、故に熱くして赤し。時に會る(者)見已り悲泣せざるは莫し。王、此の事を見て驚怖し愕然たり。乃ち悔心生ず。卽ち散闍を召して告げて言く「汝の象、調順乃し爾り、何が故に林に在りて之を制する能はざりしや」と。時に淨居天、光明王の無上菩提の心を發すべ

【九】斵裂。けづりさく。

めよ」と。散闍教を奉じ久しからずして調順し、衆寶にて四交絡す。往きて王に白して言さく「我調ふる所の象、今已に五調良す。願くば王よ試を觀よ」と。王、聞きて心喜こび、遲ち之を見んと欲す。即ち金鼓を撃ち諸の臣下を會し象を試みさしむ。大衆、既に集り王是の象に乘る。譬へば日初めて山に出でて光明照曜するが如し。王初めて象に乘るや亦復是の如し。諸の臣民と與に城を出て遊戲す。將に試所に至らむとす。時に象の氣壯なり。群象有りて、蓮華池に於て蓮華の根を食するを見る。見已りて欲發り奔りて六牸象を逐ふ。遂に深林に至る。時に王、冠・服悉く皆墮落ち衣を壞り身を破る。血を出し髮を牽く。王、時に七眩睊し、自惟へらく「必ず死せむ」と。極めて恐怖を懷く。即ち象師に問ふらく「吾、寧ろ當に餘命有るべきや不や」と。散闍、王に白さく「林中の諸樹捉ふ可き者有り、願くば王よ、八搏捉へよ、乃ち全きことを得べし」と。王、樹の枝を持り、象去りて王住まり、樹より下り地に坐し、自ら視るに復衣冠無し。身體傷き破れ大に苦惱を生じ、迷悶して林を出づるも、從者の在る所を知らず。象師、小しく前み樹を捉へ住するを得て、還りて求めて王の愁惱し獨り坐すを見る。象師、叩頭して王に白さく「願くば王よ、大に憂苦すること莫れ、此の象、正に婬心息むべし。穢れたる草を厭惡ひ濁れる水を甘しとせず宮(殿)の清淨肥美の飮食を思ひ、是くの如くして自ら還らむ」と。王、即ち告げて曰く「吾、今、復、汝と及び象を思はず。此の象を以ての故に吾が命を失ふに幾し」と。爾の時、群臣、咸各念を生ず。謂へらく「王、已に狂象の害する所と爲る」と。路を尋ねて處處に推求め、或るものは天冠と衣服を得、或ものは落血を見、遂に乃ち王を見る。駕して餘象に乘り還り來り城に入る。城中の人民悉く大王の是の如き苦を受くるを見て憂惱せざる莫し。爾の時、狂象野澤の中に在りて諸の惡草を食し濁穢の水を飮みて婬欲の意息み、即ち王宮の清涼の甘饍を思ひ、行くこと疾風の如く本の止處に詣る。象師見已りて往きて王に白して言さく「大王よ、當に知るべし、先の失ふ所の象今還り來至る。願くば王よ、

【四】交絡。まとふこと。

【五】調良。のりならして善良なること。

【六】牸象。めすの象。

【七】眩睊。目くるめくこと。大正本、睊に作るは睊の誤植にあらざるか。

【八】搏捉。にぎりとること。

二十一、[一]大光明王、始めて道心を發す縁の品　第十六

智慧巧便の人有らば小緣を以ての故に能く大心を發し佛道に趣向す。懈怠懶惰の人に大緣有りと雖も猶意趣を發して佛道に向はず。是の故に、行者應に心を強くし志を立て勇猛善緣なるべし。何を以て然るを知るか。

爾の時、世尊、舍衞國祇樹給孤獨園に諸の四衆と與に在しき。諸王と臣民と前後圍遶して供養し恭敬す。是に於て衆中多く疑ふ者有り「世尊、本何の因緣を以ての故に初めて無上菩提の心を發し自ら成佛を致し、利益し給ふ所多きや。我等も亦當に發心し成道して衆生を利安すべし」と。尊者阿難、衆の念ふ所を知り即ち坐より起ち衣服を整へ前みて白して言さく「今、此の大衆、咸皆疑ひ有り、世尊、本昔何の因緣より大道心を發し給ふや、唯、願くば之を說き廣く一切を利し給へ」と。佛、阿難に告げ給ふやう「善き哉、善き哉、汝問ふ所のもの饒益する所多し。諦に聽き善く思へよ。當に汝の爲めに說くべし」と。時に大會、寂靜として聲無し。風・河・江水・百鳥・走獸皆寂として聲無し。是に於て大衆・天・龍・鬼神・悚然として聞くことを樂しみ一心に佛を觀たてまつる。

佛、阿難に言はく『過去久遠無量無數阿僧祇劫に此の閻浮提に一大王有り、大光明と名づく。大福德有り、聰明にして、勇猛の王相を具足す。爾の時邊境に一人の國王有り、與に親厚を爲す。彼の國の乏しき所大光明王時に隨つて贈與す。彼國の珍とする所も亦復光明王に奉獻す。時に、彼の國王大山に遊獵し二つの象の子を得たり。端正にして殊に妙なり、白くして玻瓈の山の如し。[二]七支にて地を柱ふ甚だ敬愛すべし。心に喜び念言やう「我れ、今當に以て光明王に與へむ」と。念ひ已り[三]莊校す。金銀雜寶砌めて世の珍なり。人を遣はし往きて送る。時に光明王、此の象を見已り心大いに欣悅ぶ。時に象師有り名を散闍と曰ふ。王、即ち告げて言く「汝、此の象を敎へ瞻養し調へし

十、佛世尊、梵に(Buddha-lokanātha)、佛陀は知者又覺者と譯す、世尊とは世に尊重せらるゝ義なり。

【一】大光明王始發道心緣品。麗本、西本缺、賢愚經、No. 49.

【二】七支。四肢と鼻と兩方か。

【三】莊校。おごそかにかざること。

(晉に聖友と言ふ)。三月中を保ち燈の檀越と作る。日日城に入り諸の長者・居士・人民に詣り、酥油[八]・燈炷[九]の具を求索む。時に王に女有り、名を牟尼と曰ふ。高樓に登り此の比丘の日に行きて城に入り須ふる所を經營するを見て心に敬愍を生じ、人を遣はし往きて問ふやう「尊人、恒に爾勞苦す。何の營理する所ぞ」と。比丘、報へて言く「我、今三月佛と及び僧との與に燈の檀越と作るなり。城に入り諸賢者に詣る所以は酥油・燈炷の具を求索むるなり」と。使、還りて命を報ず。王女歡喜び、又、聖友に語るやう「今自り已往復行乞する莫れ、我、當に汝に作燈の具を給すべし」と。比丘、之を可とす。是より已後常に酥油・燈炷の具を送り精舍に詣る。聖友比丘、日日經營し燃燈供養す。意を發し廣く濟はむと誠心[一〇]欵篤す。佛、其に記を授け給ふ「汝、來世阿僧祇劫に於て佛と作るを得べし。名を定光と曰ふ。[一一]十號具足す」と。王女牟尼、聖友比丘の記を受け佛と作ると聞き心に自ら念言ふやう「佛燈の物悉く是れ我が有なり、比丘經營し今已に記を得たり。我、獨り得ず」と。是の念を作し已り佛の所に往詣し自ら懷く所を陳べぬ。佛、復、記を授け、牟尼に告げて曰く「汝、來世二阿僧祇九十一劫に於て佛と作るを得べし。釋迦牟尼と名づく。十號具足す」と。是に於て王女佛の授記を聞き歡喜中に發り化して男子と成る。重ねて佛の足を禮し沙門と爲るを求む。佛、便ち之を聽し給ふ。精進勇猛し勤修して息ず』と。佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の比丘、阿梨蜜とは豈異人ならむや、乃往過去の定光佛是れなり。王女牟尼とは豈異人ならむや、我身是れなり。昔日燈明の布施に因由り是より已來無數劫の中天上世間に福を受くること自然なり。身體殊に異り餘人に超絶す。今、成佛に至る。故に此の諸の燈明の報を受けぬ」と。

時に、諸大會、佛の說き給ふ所を聞き初果乃至四果を得る者有り、無上正眞道の意を發す者有り。慧命阿難及び諸の衆會咸共に頂戴し踊躍奉行せり。

【八】酥油。ちゝのあぶら。

【九】燈炷。燈心。

【一〇】欵篤。まことあつきこと。

【一一】十號。

一、如來、梵に(Gathāgata)、如實の道に乘じて來り正覺を成ずる故に。

二、應供、梵に(Arhat)、人天の供養に應ずべきが故に。

三、正等覺、梵に(Samyaksambuddha)、正しく等しく一切法を覺るが故に。

四、明行足、梵に(Vidyā-caraṇa-sampanna)、三明の行具足する故に。

五、善逝、梵に(Sugata)、一切智を以て大車とし、八正道を行じて涅槃に入るが故に。

六、世間解、梵に(Lokavid)、世間の有情非情のことを能く解するが故に。

七、無上士、梵に(Anuttara)一切衆生の中に於て佛無上なるが故に。

八、調御丈夫、梵に(Puruṣa-damaya-sārathi)、佛或る時は柔軟語を以て、或る時は苦切語を以て能く丈夫を調御し善道に入らしむる故。

九、天人師、梵に(Śāstā-devamanuṣyāṇām)、佛は人及び天の導師にして能く其の應作不應作を教示するが故に天人師と名く。

給ふを嫌へ、便ち復言ひて曰く「世尊よ、云何が我が供を受けず、乃ち先に彼の乞人の請に應したまふや」と。其の惡言を以て賢聖を輕忽せり。是より以來、五百世中恒に貧賤乞匃の家に生る。其の彼の日如來及び衆僧を供養し敬心歡喜せしに由り今佛の世に値ひ出家して記を受け、國を合し欽仰す』と。

爾の時、衆會、佛の之を說き給ふを聞き已り皆大に歡喜す。國王・臣民、此の貧女の一燈を奉上り記を受け佛と作るといふを聞き皆欽仰を發す。並に各上妙の衣服を施與し四事乏しきこと無し。國を合して男女、尊卑大小競うて共に諸の香油と燈とを設作け持つて祇洹に詣り、佛を供養す。衆人猥りに多し。燈祇洹に滿つ。諸の樹林の中に四匝し彌滿し猶し衆星の空の中に列び在るが如し。日日是の如くして七夜を經たり。爾の時、阿難、甚だ用つて歡喜し如來の若干の德行を嗟嘆す。前みて佛に白うして言さく「不審なり。世尊よ、過去世の中、何の善根を作り斯極み無き燈供の果報を致し給ふや」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『過去久遠二阿僧祇九十一劫に此の閻浮提に大國王有り、[五]波塞奇と名づく。此の世界の八萬四千の諸の小國土に王たり。王の大夫人一太子を生む。身、紫金色にして三十二相八十種好其の頂上に當り自然の寶有り、衆相晃朗し人目を光曜す。卽ち相師を召し吉凶を占相し、因つて爲めに字を作す。相師、披き看て其の奇妙を見る。手を擧げ唱へて言く「善き哉、善き哉、今、此の太子諸の世間天人の中に於て與に等しき者無し。若し其れ家に在らば轉輪聖王と作り、若し其れ出家せば自然に佛を成ぜむ」と。相師、王に白さく「太子生れし時何の異事有りしや」と。王、之に答へて言く「頂上の明寶、自然に隨つて出づ。」便ち爲めに字を立て、[六]勒那識祇と字す。(晉に寶髻と言ふ)。年、漸く長大し出家して道を學ぶ。成じて佛と爲るを得たり。人民を教化し度する者甚だ多し。爾の時、父の王、佛及び僧を請じ三月供養す。一比丘有り[七]阿梨蜜羅と字す。

【五】波塞奇。西名、(Bsi-li)(P. 248) 音譯と思はるゝが、漢譯名と異る。

【六】勒那識祇。西名、(Rin-chen gtsug-phud.)(Skt. Ratnaçikhi)と譯。

【七】阿梨蜜羅。西名、(Hphags-pahi bçes-gñen) (Ariyamitra)と譯。

を以て之に語る。油主、憐愍れみ倍々増して油を與ふ。得已りて歡喜ぶ。一燈を作るに足る。擔ひて精舍に向ひ世尊に奉上り、佛前の衆燈の中に置き自ら誓願を立つ。「我、今、貧窮なり、是の小燈を用つて佛に供養す。此の功德を以つて我をして來世智慧の照しを得て一切衆生の垢闇を滅除せしめよ」と。是の誓を作し已り佛を禮して去る。乃ち夜の竟りに至り諸燈盡く滅す。唯此のみ燃たり。是の時、目連、日直に次當り天已に曉を察し燈を收めて【二】摒擋す。此の一燈の獨り燃えて明かに好く、膏炷未だ損せず新しき燃燈の如きを見て心に便ち念を生ぜり。「白日に燈を燃すは時に用ふるも益無し」と。取りて之を滅し、暮に規として還び燃やさんと欲す。即時、手を擧げ扇ぎて此の燈を滅せんとするも燈焰故の如し。虧滅有ること無し。復、衣を以て扇ぐ、燈明損せず。佛、目連の此の燈を滅せむと欲するを見て目連に語りて曰く「今、此の燈は汝等聲聞の能く傾動する所に非ず。正に汝をして四大海水を注ぎ用つて之に灌ぎ嵐風に隨つて吹くも亦滅すること能はず。爾る所以は此は是廣く濟ふ大心を發す人の施す所の物なるが故なり」と。佛、是を說き已る。

難陀女人復、佛に來詣し頭面に禮を作す。時に世尊、即ち其の記を授け給ふ「汝、來世二阿僧祇百劫の中當に佛と作るを得べし。名を燈光と曰ふ。十號具足す」と。是に於て難陀記を得て歡喜し長跪して佛に白さく「出家を求索む」と。佛、卽ち之を聽し、比丘尼と作し給ふ。【三】慧命阿難・目連、貧女人の苦厄を免れ出家し受記を得たるを見て長跪合掌し前みて佛に白して言さく「難陀女人、宿に何の行有り爾許時を經て貧乞して自活し、復、何の行に因りて佛に値ひ出家し【四】四輩欽仰し諍いて供養せんことを求む」と。

佛、言く『阿難よ、過去に佛有り、名を迦葉と曰ふ。爾の時、世の中に居士の婦有り、躬ら往きて佛及び比丘僧を請ず。然るに佛、先に已に一貧女に可とし、其の供養を受け給ふ。此の女已に阿那含道を得たり。時に長者の婦、自らの財富を以て貧者を輕忽して、佛、世尊の先に其の請を受け

【二】摒擋。おほひかくすこと。

【三】慧命。尊者といふに同じ。

【四】四輩。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷のこと。

る。其の二姉の爲めに具に意狀を說く、云く「彼の大姉五百の子を生み身輕く安穩にして不祥有ること無し」と。時に分那奇、其の二姉の平安の消息を聞き心用つて歡喜び復、差摩に問ふやう「汝の字は何ぞ」と。婦人、答へて曰く「我が字は差摩なり」と。其の鬼、答へて言く「汝の字は安穩、復我が姉の平安の消息を傳ふ。倍何ぞ快なる耶」と。卽ち、差摩に語りて言く「我が此の住處に金の一つの釜有り、用つて卿に遺らむ。來る時念じ取れよ」と。辭して別れ已竟り路を引きて去る。故處を憶識へ彼の人の所に至り食を與へ已訖る。本處に還り來り金の三つの釜を取り持つて其の家に至る。復、王家より賞金千兩を得たり。其の家、是に於て貧を拔き卽ち富めり。國中の庶民其の家內の財寶饒多を見て各各慕及へ、樂み[九]營從し其の家に來至り、使令を承給す。王、是の人の福德是の如きを聞き卽ち召して宮に至らしめ、拜して大臣と爲す。既に王の祿を蒙り其の家又富む。信心誠に篤く廣く福業を殖へ、佛及び僧を請じ大檀を施設く。佛、徒衆と與に悉く其の請を受け給ふ。飲食已に訖りて佛、說法を爲し給ふ。心意開解け須陀洹を成ぜり。

時に、諸の會者、阿難之等佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

二十、[一]貧女難陀の品　第二十

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、國中に一人の女人有り難陀と曰ふ。貧窮孤獨なり。乞匃し自活す。諸國の王、臣民大小各各佛及び衆僧を供養するを見て心に自ら思惟ふやう「我れ宿罪に依りて生るゝ處貧賤なり。福田に遭ふと雖も種子有ること無し」と、酸切し感傷し深く自ら咎め悔ゆ。「便ち行きて乞匃し以て微供を俟たむ」と、日を竟りて休まず唯一錢を得たり。持つて油家に詣り用つて油を買はんと欲す。油家問ふて曰く「一錢油を買ふも少くして逮ぶ所無し、用つて何等をか作す」と。難陀、具に懷く所

【九】營從。種々のいとなみに加はること。

【一】貧女難陀品。西本、No. 37.

れ、若し達し來り還らば吾定んで當に汝に金千兩を與ふべし」と。差摩、即時、勅の如く擔ひ往き至心に齋を持ち缺失有ること無し。道に順うて行く、城を出て漸く遠し。一羅刹に逢ふ。名を[六]藍婆と曰ふ。彼の鬼、是の時、五百の子を生み、初めて生み已に竟る。極めて飢渴を懷く。差摩の來るを見て望んで以て食と爲さむとす。然るに彼の差摩、齋を持ちて缺くること無し。羅刹、之を見て逆に怖畏を懷く。飢餓に逼られ身を現はして從ひ擔ふ所の食を乞ふ。「少を持つて我に施せ」と。差摩逆はず少を以て之に與ふ。施す所少しと雖も鬼の神力の故に而も用つて飽滿す。時に羅刹差摩に問ふて言く「汝の字は何等とす」と。女人、答へて言く「我、差摩(安穩)と字す」と。羅刹歡喜び差摩に語りて言く「今、我、身を分ちて安穩を得たり。卿に由りて活命し我を繇すること少なからず。我、既に活を蒙むる。復好き字を聞く。我が往く處に一つの釜に金有り、我用つて卿に報ゆ。來る時念じ取れよ」と。又之に問ふて曰く「汝、何に至らむと欲する」と。差摩答へて言く「此の食を持つて往いて彼の人に與へむと欲す」と。藍婆又言く「我に女妹有り、前に在りて住止す。阿藍婆と字す。卿若し之に見えなば吾が爲に問訊ねて云へ。我、身を分ち五百の子を生む。身體安穩なりと、具に我が情を瞻し消息を知らしめよ」と。差摩言の如く道に順して去り[七]阿藍婆を見る。即ち出てゝ問訊す。其の藍婆の情事の委曲を說く「五百の子を生み皆悉く安穩なり」と。時に阿藍婆之を聞き歡喜す。婦人に問ふて曰く「今、汝の字は何ぞや」と。女人答へて言く「我は差摩と字す」と。羅刹之を聞き亦用つて歡悅す。「我が姉分身し復安穩を得たり、汝の字復好し、何ぞ其れ善なるや、今、此の住處に一つの釜に金有り、我用つて卿に賜らむ。來る時念じ取れよ」と。又、之に問ふて言く「汝、何に至らむと欲す」と。差摩、答へて言く「王の爲に食を擔ひ彼人の所に至る」と。阿藍婆曰く「我れに一人の弟有り、[八]分那奇と字す。前の路に住在す。吾が爲めに問訊し因つて姉の意を瞻へよ」と。即ち、復共に辭し道に順うて進む。前みて到るに意の如く分那奇を見

【六】藍婆。西本、名欠く。

【七】阿藍婆。西名、(A-lam-ba)とす。

【八】分那奇。西本、弟の名を欠く。

等の行を作し人をして現世其の福を[三]蒙頼せしむるや」と。人有り答へて言く「汝、知らざるや。今、佛、出世し衆生を度し一切を福利し、(濟)度を得ざるもの無し。如來に復四人の尊弟子有り、摩訶迦葉・大目犍連・舍利弗・阿那律等斯の四賢士毎に貧乏を哀み常に行じ苦厄の衆生を福利す。汝、今、若し能く信敬の心を以て食を設け此の諸賢士を供養すれば則ち現世に汝の所願を稱ふべし」と。時に婆羅門、諸人の說ところの是の如き事を聞き已り心に歡喜を懷き其の國中に往き、遍く行き自ら衒ひ其の身を作役し少しの財物を得て其の家に擔ひ至る。飲食を施設け諸の賢聖を請ず、供養すること一日心を剋し精勤し現世の報を望みぬ。

婆羅門の婦、字を[四]差摩と曰ふ。(晉に安穩と言ふ。)僧に飯すること已に訖る。諸の尊弟子、差摩を勸請し八關齋を受く。齋を受くること已に訖り各精舍に還る。時に瓶沙王、林澤に値遊び還り來りて城に向ふ。道に一人を見る。王に重罪を犯し標頭に縛著り竪てゝ道邊に在り、王を見て悲哀み少食を求索む。王、情に愍傷み、卽ち可し、「與ふべし」と。正に爾して別れ去りぬ。時に、王、日を竟り忽ち前の事を忘れ夜卒に自ら念ふ「我、已に先に彼の罪人の食を許す。云何が欻ち忘る。卽時、人を遣はし食を致し往きて與へむとす。宮の內外を擧げて往くことを欲する者無し。咸是の說を作す。「今、是れ夜半なり。道路恐く猛獸・惡鬼・羅刹有り禍難衆多し、寧ろ此に死せむ。去くこと能はざるなり」と。爾の時、國王彼の人の苦を念ひ身心煩惱み極めて憐愍を懷く。卽ち國の中に令し「誰か能く食を致し彼の人の所に至らば金千兩を賞せむ」と。國中の人民募を受くる者無し。時に差摩、常に人の說を聞く「若し世に人有り[五]八關齋法を受持てば衆邪の惡鬼毒獸の類一切の惡災能く傷害ふこと無し」と。差摩、之を聞き便ち此の心を興す、「我家貧窮なり、加へて復齋を受く。今、王募る所我に爲さむと欲する耳、我、今、當に往きて其の募に直るべし」と。思惟已に定り往きて王の募に應ず。爾の時、國王又差摩に語るらく「吾が爲めに食を擔ひ彼の人の所に至

【三】蒙頼。かうむらしめること。

【四】差摩。西名。(Bde-ba, Kṣemā, Khemā)。

【五】八關齋。八齋戒の異名、關は禁なり、八戒齋は殺盜等の八罪を禁閉して犯さしめざる法なれば關と名く。

むと欲し毒を吐くに當るに臨み復自ら思惟すらく「此の人、我が爲めに福を作す。未だ恩に報ること有らず」と。是の如く再三還び自ら奮ち伏す。「此の人我に於て已に大恩有り、復、罪を作すと雖も事宜しく之を忍ぶべし。」前みて空處に到り蛇其の人に語るやう「我を下して地に著けよ、窮責極めて切なり」と。戒を囑ぐるに法を以てす。其の人是に於て便ち自ら悔責し、謙下の心を生じ矜を一切に垂る。蛇重ねて【一〇】囑及し「更に爾ること莫れ」と。其の人、蛇を擔ひ僧伽藍に至り衆僧の前に著く。時に衆僧食時已に到り【一一】作行して立つ。蛇、彼の人をして次第に香を付せしむ。自ら信心を以て香を受くる者を視る。是の如く底を盡くす。熟く看て移らず。衆僧、【一二】行を引き塔を遶り周匝す。其の人、水を捉り衆僧の手を洗ふ。蛇、敬の意を懷き手を洗ふ人を觀る。厭心有ること無し。衆僧食訖り重ねて其の蛇の爲めに廣く說法を爲す。蛇、倍〻歡喜び更に施心を增し、僧【一三】維那を將ゐて本の金所に到り殘りの金瓶を盡く用つて僧に施し福を作し已に訖る。便ち命終を取り、其の福德に由り忉利天に生れぬ』と。

佛、阿難に告ぐらく「爾の時の蛇を擔ふ人を知らむと欲せば豈異人ならむ乎、則ち我身是れなり。爾の時の毒蛇とは今の舍利弗是れなり。我、乃ち往日蛇を擔ふの時蛇の爲めに責られ慚愧して誓を立て謙下の心を生じ一切を等視し未だ曾つて中退せず乃ち今日に至れり」と。

時に、諸の比丘、阿難、之等佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

十九、【一】差摩、現報の品　第十九

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閱祇竹林精舍に尊弟子無央數の衆と與に住し給ひき。

爾の時、國中に一婆羅門有り、居貧窮にして困しく錢、穀乏しく勤加して懈らず。【二】福衰ふること遂に甚し。方に宜しく理を盡すべし。衣食供へず、便ち行きて人に問ふやう「今、此の世間、何

【一〇】囑及。たのみこと。
【一一】作行。食時の作行のこと。
【一二】引行。食時作行終ること。
【一三】僧侶の世話をなす人、前出。

【一】差摩現報品。西本、No. 29.
【二】福。大正本、禍に作るは誤植。

心復生じ自ら由來を計り是の金の瓶の爲めに、惡形を受け休み已ること有る無し。今は當に用つて快き福田の中に施すべし。我をして世世其の福報を蒙らしめむと。思惟の計定り道邊に往至き身を草の中に竄す。身を匿して看る。「設し人有り來らば我當に之に語るべし」と。爾の時、毒蛇一人有りて道に順つて過ぐるを見る。蛇、便ち之を呼ぶ。人喚聲を聞きて左右を顧望る。人有るを見ず。但、其の聲を聞くのみ。道に復つて行く。蛇形を現し喚んで言く「咄！人よ來りて我に近づくべし」と。人、蛇に答へて言く「汝の身毒惡なり我を喚んで用と爲すや。我、若し汝に近かば儵傷害を爲さむ。」と。蛇、人に答へて言く「我、苟も惡を懷かば設ひ汝來らざるも亦能く害を作さむ」と。其の人、恐懼れて其の所に往至く。蛇、人に語りて言く「吾今、此處に一つの瓶金有り、用つて相ひ託し供養して福を作さむと欲す。能く之を爲すや不や。若し爲さざれば我汝を害すべし」と。其の人、蛇に答ふるやう「我、能く之を爲す」と。時に蛇、人を將ゐて共に金の所に至り、金を出し之を與ふ。又、之に告げて曰く「卿、此の金を持ち衆僧に供養せよ。食を設くるの日好く念じて一[四]阿翰提を持ち來れ、我を取り舁ぎ去れよ」と。其の人、金を擔ひ僧伽藍に至り僧[五]維那に付し具に上の事を以て僧に向ひ之を說く。云く「其の毒蛇、供養を設けむと欲す。食日を[六]刻作めよ」と。僧、其の金を受け爲に美饍を設く。食を爲すの日至る。其の人一つの小阿翰提を持し蛇の所に往至く、蛇其の人を見て心に歡喜を懷き慰喩し問訊す。即ち其の身を盤し阿翰提に上る。是に於て其の人氈を以て上を覆ひ擔ひて[七]佛圖に向ひぬ。道に一人に逢ふ。蛇を擔ふ人に問ふやう「汝、何より來る。體、[八]履佳なるや不や」と。其の人默然として彼の問に答へず。再三之を問ふも一言も出さず。持ちはこばるゝ毒蛇即便ち瞋恚り毒を含むこと熾盛なり、其の人を殺さむと欲す。還び自ら[九]遏折む。復自ら思惟ふやう「云何が此の人時宜を知らず。他の好意を以て進止を問訊ね鄭重に三たび問ふに一言の答無し。何ぞ癡なる可き耶」と。是の念を作し已り毒心復興り隆猛內に發る。復、之を害せ

【四】阿翰提。西本、(Gye-va)とあり、入れ籠のことか。
【五】維那。梵語、(Karma-dāna)、禪家キノといふ、寺中の事務を司る役、次第、授事。知事等に云ふ。
【六】刻作。必ずと約すこと。
【七】佛圖。(Buddha)の音寫なるべし、寺のこと。
【八】履佳。調子よきこと。
【九】遏折。とゞまること。

十八、[一]七瓶の金を施すの品　第十八

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、諸の比丘、各異國に處り隨意に安居し九十日を經たり。安居已に竟り各佛の所に詣り[二]聖教を諮受す。爾の時、世尊、諸の比丘と隔別り久しきを經て慈心愍傷み給ひ、即ち、千輻相輪の神手を擧げて之を慰勞し意を下し問訊し給ふやう「汝等諸人、僻遠に住在み飲食供養乏しきこと無きを得たる耶」と。如來の功德は世に[三]儔類無し。今、乃ち意を下して諸の比丘を瞻給ふに特に謙敬を懷き給ふ。阿難、之を見て甚だ所以を怪しみ、即ち佛に白して言さく「世尊の出世は最も殊特と爲す。功德智慧世に之れ希有なり、今、乃ち意を下し諸の比丘衆を慰諭し問訊し給ふ。何ぞ其れ善なる耶。不審なり、世尊よ、是の如き謙卑の言を興發し給ふ。遠近と爲す耶」と。

世尊、告げて曰く「知らむと欲するや不や。明に聽き善く思へよ。當に汝の爲めに說くべし、敎を奉じ善く聽けよ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『過去久遠、無數無量不可思議阿僧祇劫に此の閻浮提に一つの大國有り波羅㮈と名く。時に一人有り好く家業を修め意偏に金を愛す、勤力め積聚み其の身を作役し四方に治生す。得る所の錢財盡く用つて金を買ふ。因つて一つの瓶を得たり。其の舍內に於て地を掘り之を藏す。是の如く種々に身を懃め體を苦しめ年歲を經積て終に衣食せず。之を聚めて休まず乃ち七つの瓶を得悉く取りて之を埋めぬ。其の人後の時疾に遇ひ命終る。其の金を愛するに由り身を轉じて一つの毒蛇の身と作り其の舍內に還りて此の金の瓶を守る。年歲を經積て其の舍摩滅し人の住止する無し。蛇、金の瓶を守り壽命年歲あり已に復盡くるに向ひ其の身を捨て已る。愛心息まず復本形を受け自ら其の身を以て諸の金の瓶に纒ふ。是の如く展轉し數萬歲を經たり、最後身を受け厭

【一】七瓶金施品、四本、No. 28.

【二】諮受。問ふて敎をうけること。

【三】儔類。なかま。

共に閻浮提の一切國土を領し三寶を興顯せむ。廣く供養を設け舍利を分布し閻浮提に遍くし當に我が爲めに八萬四千の塔を起さむ」と。阿難、歡喜び重ねて佛に白して言さく「如來、先昔何の功德を造り而して乃ち此の多塔の報有り給ふや」と。

佛、言く「阿難よ、專心に善く聽け、過去久遠、阿僧祇劫に、大國王有り[三]波塞奇と名づけ閻浮提八萬四千の國を典る。時に世に、佛有り、名を[四]弗沙と曰ふ。波塞奇王、諸の臣民と與に佛及び比丘僧を供養し四事供養す。敬慕すること量りなし。爾の時、其の王心に自ら念言ふやう「今、此の大國の人民の類常に佛を見て禮拜供養するを得、其の餘の小國各邊僻に處る人民の類福を修むるに由無し。就ては當に佛の形像を圖畫し諸國に布與して咸供養せしむべし」と。是の念を作し已り、即ち畫師を召し勅して圖畫せしむ。時に、諸の畫師來りて佛の邊に至り佛の相好を看て之を畫くことを得むと欲す。適一つの處を畫けば餘の處を忘失る。重ねて更に觀看て復次に手を下す。一を忘れ一を畫く。成ぜしむること能はず。時に弗沙佛、衆彩を調和し手自ら畫くことを爲し以て模法を爲し、畫いて一像を立つ。是に於て畫師、乃ち能く都て盡く八萬四千の像を圖畫す。極めて淨妙ならしめ端正佛の如し。諸國に布與し一國に一を與ふ。又、告下を作し勅して人民をして花・香を辦具し以用て供養せしむ。諸の國王臣民如來の像を得て歡喜び敬奉し佛身を視るが如し。

「是の如く、阿難よ波塞奇王とは今の我が身是れなり。彼の世に於て八萬四千の如來の像を畫き諸國に布與し人をして供養せしむるに緣り此の功德に緣り世世福を受く。天上、人中恒に帝王と爲り受くる所の生處端正殊に妙なり。三十二相、八十種好なり。是の功德に緣り自ら成佛を致せり。涅槃の後當に復此の八萬四千の諸塔の果報を得べし」と。

賢者、阿難及び諸の會者佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

【三】波塞奇。西名、(Gsal-thub)(光明ある大人の意)とす。
【四】弗沙(Phusan)。

此を患ふ。復、竟に已むこと無し。殃福是の如し。朽敗有ること無し。
爾の時、五百の貴姓の比丘尼、是の法を說くを聞き心意悚然たり。欲の本を觀ずること猶熾んなる火の如く。貪欲の心永く復生ぜず。在家の苦牢獄よりも甚だし諸の垢消盡し一時に定に入り、阿羅漢道を〔二〇〕成ぜり。各共に心を齊くし微妙に白して曰く「我等、婬欲に纏綿し繫著して自ら拔くこと能はず。今、仁恩の導きを蒙り生死を度すことを得たり」と。時に、佛歎じて曰く「快き哉、微妙、夫道を爲す者は能く法を以て敎へ轉相ひ敎誡す。佛子と謂つべし」と。
衆會、說くを說き歡喜ばざる莫し。稽首し奉行せり。

十七、〔一〕阿輸迦、土を施すの品　第十七

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。
爾の時、世尊、晨に阿難と與に城に入り乞食し給ふ。群がる小兒道の中に於て戲るゝを見る。各地土を聚め用つて宮舍を作り及び倉藏の財寶五穀を作る。一人の小兒有り遙に佛の來るを見、佛の光相を見て敬の心內に發し、歡喜踊躍し布施の心を生ず。卽ち倉の中の名けて穀と爲す者を取り卽ち手を以つて掬ひ用つて佛に施さむと欲す。身小にして逮ばず、一小兒に語り「我汝の上に登りて穀を以て布施せむ」と。小兒歡喜び報へて言く「爾る可し」と。卽ち肩の上を蹈み土を以て佛に奉ず。佛、卽ち鉢を下し頭を低くし土を受け給ふ。之を受け已訖りて阿難に授與へ語りてのたまふやう「此を持ち我が房を塗汚れ」と。乞食し既に得て還りて祇洹に詣り給ふ。阿難、土を以て佛の房地を塗る。齊しく一邊を汚し其の土便ち盡く。汚し已り衣服を整へ具に以て佛に白す。佛、阿難に告げ給ふやう「向者小兒歡喜して土を施す。土、佛房の一邊を塗汚るゝに足れり。斯の功德に緣り我が般涅槃百歲の後、當に國王と作り〔二〕阿輸迦と字すべし。其の次の小兒大臣と作るべし、

〔二〇〕成。大正本、或に作るは誤植。

〔一〕阿輸迦施土品。西本、No. 27. 王阿育品(Açoka)とす。

〔二〕阿輸迦王。梵名(Asoka) 阿育王のこと。

けよ」と。微妙答へて曰く「汝等、靜に聽け、乃往過去に一人の長者有り財富無數にして子息有る無し。更に小婦を取る。小家の女と雖も端正雙少し。夫甚だ愛念す。遂に便ち娠有り。十月を已に滿し一人の男兒を生む。夫妻敬重す。之を視て厭ふこと無し。大婦自ら念へらく「我、貴族と雖も現に子息の以て繼嗣すべき無し。今、此小兒、若し其長大せば門戶を領すべし。田財の諸物盡く攝持すべし。我、唐に勞苦し財產を積聚し自在を得ず。妬心卽ち生じ早く殺すに如かずとし、內計已に定り卽ち鐵針を取り兒の〔一七〕顖上に刺し沒して現れざらしむ。兒、漸く〔一八〕瘠瘦し旬日の間に遂に便ち命終る。小婦、懊惱し氣絕し復蘇へる。疑ふらく「是れ大婦、我が子を妬み殺せり」と。卽ち大婦に問ふやう「汝、之無狀なり、我が子を怨み殺せり」と。大婦、卽時、自ら呪ひ誓つて曰く「若し汝の子を殺さば我が世々の夫をして毒蛇の爲に殺す所とならしめ兒子有らば水に漂ひ狼食ひ、身現に生埋となり、自ら其の子を噉ふ、父母大小失火して死せむ。何が爲めに我を謗る。何爲ぞ我を謗るや」と。』

爾の時に當り謂ふに罪福反報の殃無く前に呪誓する所今悉く之を受く。相ひ代る者無し。爾の時の大婦を知らむと欲せば則ち我が身是なり」と。

諸の比丘尼、重ねて復問ふて曰く「復、何の慶有り如來を覩て就ひ之を迎ふを得たるや、道堂に在りて生死を免るゝを得たる」と。微妙答へて曰く『昔、波羅㮈國に一つの大山有り、名を仙山と曰ふ。其中恒に辟支佛・聲聞・外道・神仙有りて空缺有ること無し。彼の時、〔一九〕緣覺城に入り乞食し給ふ。長者の婦有り之を觀て歡喜び卽ち之を供養す。緣覺食し已り飛びて虛空に昇り身より水火を出し空中に坐臥す。婦、時に之を見て卽ち誓を發して言く「我をして後世道を得ること是の如くならしめよ」と。』爾の時の婦とは則ち我が身是れなり。是に緣るの故に如來を見ることを得て心意開解し羅漢道を成じぬ。今日我が身羅漢を得と雖も恒に熱鐵針頂上より入り足の下に於て出づ。晝夜

【一七】顖。腦蓋、

【一八】瘠瘦。頭いたみやせること。

【一九】緣覺。梵語、(Pratyeka-buddha)、辟支佛のこと。一は十二因緣の理を觀じて斷惑證理し、一は飛花落葉の外緣に因て自ら無常を覺悟して斷惑證理するを云ふ。

て言く「汝、是何人ぞや、獨り道邊に坐す」と。我、事の如く說く。復、我に語りて言く「今、汝と與に彼園觀に入らむと欲す、寧ろ爾る可きや不や」と。我、便ち之を可とす。遂に夫妻と爲り數日を經る。時に長者の子病を得て救はれず。[一二]奄忽壽終る。時に彼の國法若し生時愛重せらるゝもの有らば葬に臨むの日幷に塚の中に埋めらる。我、埋めらるゝと雖も命故に未だ絕えず。時に群賊有り來りて其塚を開く。爾の時、賊帥我が端正を見て卽ち用つて婦と爲す。數旬の中復劫盜に出て主の爲めに覺られ卽ち其の頭を斷らる。賊の下の徒衆卽ち死屍を持ち來りて我に還す。便ち共に之を埋む。國の俗法の如くし。我を以て幷び埋む。時に塚の中に在ること三日を經て諸の狼・狐・狗、復來り塚を開き、死人を噉はむと欲す。我、復、出づるを得て重ねて自ら[一三]剋責む。「宿に何の殃有りて旬日の間に斯の罪苦に遇ひ、死して復生きるや。當に何の奉ずる所あり餘命を全くすることを得む」と。卽ち自ら念言ふやう「我、昔常に聞く。釋氏の子、家を棄てゝ道を學び道成つて佛と號し去來を逹知すと。寧ろ往詣いて身心自ら歸すべし」と。卽便ち徑を往きて祇洹に馳せ趣く。遙に如來を見奉るに樹の花の茂り、(又は)星中の月の如し。爾の時、世尊、無漏の[一四]三逹を以て我が度すべきを察して來り我を迎へ給ふ。我、時に形露れ用つて自ら蔽ふ無し。卽便ち地に坐し、手を以て乳を覆ふ。佛、阿難に告げ給ふやう「汝、衣を持ち往きて彼の女人を覆へ」と。我、時に衣を得て卽便ち世尊の足の下に稽首み具に罪厄を陳べ、「願くば愍を垂れ、我に道を爲すを聽し給へ」と。佛、阿難に告げ給ふやう「此の女人を將ゐ憍曇彌に付し戒法を授けしめよ」と。時に[一五]大愛道、卽便ち我を受け比丘尼と作す。卽ち我が爲めに四諦の要、苦・空・非常を說く。我、是の法を聞き心に剋ち精進して自ら[一六]應眞を致せり。去・來を逹知す。今、我が現世受くる所の勤苦具陳す可きこと難し。宿、造くる所の如く毫分も差はず。

時に、諸比丘尼、重ねて復啓白すやう「宿に何の咎ありて斯殃を獲たるや。唯、願くば之を說

【一二】奄忽。たちまち。

【一三】剋責。はげしく責むと。

【一四】三逹。阿羅漢に在て三明と云ふを佛に在て三逹といふ。天眼・宿命・漏盡のこと。

【一五】大愛道。梵名(Mahāprajāpatī)、摩訶波闍波提、佛の姨母、比丘尼の初の人なり。大愛道と翻し、又憍曇彌と號す。

【一六】應眞。阿羅漢のこと。人天の供養を受く應き眞人。

起つ。往きて夫の手を牽く、蛇毒を被り身體腫爛れ支節解散るを知る。我、時に此を見て即便ち悶絕す。時に我が大兒父已に死するを見て聲を失し號叫す。我、兒の聲を聞きて【一〇】即時に還び蘇へり、便ち大兒を取り頸の上に擔著け小兒に之を抱え涕泣して路を進む。道復曠く險しく絕えて人民無し。中路に至りて一つの大河有り、既に深く且つ廣し。即ち大兒を留め河の邊に著け、先づ小兒を擔ひ彼岸に度りて著く、還りて大者を迎ふ。兒遙に我を見て即ち來り水に入り、水便ち漂はし去る。我尋いで之を追ふに力救ふこと能はず。浮沒して去る。我時に即ち還り小兒に趣かんと欲すれば狼已に噉ひ訖る。但、其の血流離れて地に在るを見る。我、復、斷絕す。良久しくして乃ち蘇へり。遂に前路を進み一人の梵志に逢ふ。是れ父の親友なり。即ち我に問ふて言く「汝、何より來り困悴乃ち爾る」と。我、即ち具に更る所の苦毒の事を以て之に告ぐ。爾の時、梵志我孤苦を憐み相ひ對して涕哭す。我、梵志に問ふやう「父母親里盡く平安なりや不や」と。梵志、答へて言く「汝の家の父母大小近日失火し一時に死し盡く」と。我、時に之を聞き即ち復悶絕す。良久しくして乃ち蘇へる。梵志我を憐み我を將ゐて家に歸る。供給し乏しきこと無し。看視ること子の如し。時に餘の梵志我が端正なるを見て我を求めて婦と爲す。即ち相ひ許可し適共に室と爲す。我、復妊娠む。日月已に滿つ。時に夫外に出で他舍に酒を飲み日暮に來り歸る。我、時に產を欲し獨り閉ぢて內に在り。時に產未だ竟らざるに梵志門を打ち大いに喚ぶ。人の往きて開くもの無し。梵志瞋恚り門を破りて來り入る。即ち見て撾打つ。我、事の如く說くに、梵志遂に怒り即ち兒を取りて殺し酥を以て【一一】熬煎り、我に逼りて食はしむ。我甚だ愁惱み之を食ふに忍びず。復、撾打たる兒を食べての後、心中酸結し自ら惟ふやう「福盡きて乃ち斯の人に值ふ」と。即便ち亡げ去る。波羅柰に至り城外に在りて樹下に坐し息ふ。時に彼の國中に長者の子有り、適初めて婦を喪ふ。乃ち城外の園の中に於て之を埋め其の婦を戀慕ふ。日に往きて城を出て塚の上に涕哭く。彼、時に我を見、即ち我に問ふ

【一〇】即時。大正本、卽持に作るは誤植。

【一一】熬煎。いること。

得ず。願くば開悟せられよ」と。時に倫羅難陀、心に自ら念言ふやう「我、今、當に教へて其(等)をして戒に反かしむべし。吾、衣鉢を攝むるも亦快ならずや」と。卽ち之に語りて曰く「汝等、尊貴大姓にして[四]田業・七寶・象・馬・奴婢須ふる所乏しからず。何の爲めに之を捨てゝ佛の[五]禁戒を持ち比丘尼と作り辛苦是の如きや。家に還るに如かず。夫妻男女、共に相ひ娛樂しみ意を恣にし布施さば一世に榮ゆべし」と。諸の比丘尼、是の語を說くを聞き心用つて[六]惆然たり。卽ち各涕泣し之を捨てゝ去る。復、微妙比丘尼の所に至る。前みて爲めに禮を作す。問訊すること法の如し。卽ち各啓白すらく「我等、家に在り俗に習ひ迷ふこと久し。今、出家すと雖も心意蕩逸、情欲熾燃自ら解すること能はず。願くば憐愍れみて我が爲めに說法し罪蓋を開釋せよ」と。爾の時、微妙、卽ち之に告げて曰く「汝、三世に於て何等をか問はむと欲するや」と。諸の比丘尼言く「去、來且く置き願くば現在を說きて我が疑結を說け」と。微妙告げて曰く「夫、婬欲とは譬ば盛なる火の山澤を燒くが如し。蔓莚すること滋甚だし。傷くる所彌廣し。人、婬欲に坐せば更に相ひ、賊害ひ日月に滋長じ、三塗に墮すを致し出づる期有ること無し。夫、家を樂む者は合會を貪り恩愛・榮樂の因緣・生・老・病・死の離別、[七]縣官の惱、轉相ひ哭戀し心肝を傷壞り、絕えて復蘇へり家に在りて[八]深固にして心意纏縛すること牢獄よりも甚だし。我、本生、梵志の家に生れ我が父尊貴なること國中第一なり。爾の時、梵志の子有り、聰明にして智慧あり、我の端正を聞き卽ち媒禮を遣し我を娉して婦と爲す。遂に[九]室家と成り後子息を生む。夫の家の父母轉復終に亡ふ。我時に妊娠みて夫に語りて言く「今、我、娠む有り、穢汚れて淨らならず、日月滿つるに向ひ儻危頓有らむ。當に我が家に還り我が父母を見るべし」と。夫、卽ち言く「善し」と。遂に便ち遺歸る。道の半ばに至り、身體轉痛く、一樹の下に止まる。時に夫、別に臥す。我時に夜產みて汚露、大に出づ。毒蛇臭を聞き卽ち來り夫を殺す。我、時に夜喚び數反つて聲無し。天、轉曉に向ふ。我、自ら力めて

【四】田業。西本にて之に當るは(Melod-pahi yo-byad)(供物の必需品)なり。田業の意、これに當るか。

【五】禁戒。佛の制定せる法律にて非を禁じ惡を戒めしもの、三藏中の律藏之を明す。

【六】惆然。心うつとりする貌。

【七】縣官。州縣の吏の壓迫の惱みを云ふ。

【八】深固。かたくなゝこと。

【九】室家。うちわのもの、妻のこと。

動搖せず。分ちて身を以て施し彼の中に死す。時に諸の蝿蟻、菩薩の身を食ふに縁り、命終りて後皆天に生るゝを得たり。爾の時、獵師皮を擔ひ國に到り王に奉上る。王見て歡喜び之れ未だ有らざるを奇とし、其の細軟を喜び常に用つて敷きて臥し、心乃ち安穩、情用つて快樂む』と。

「是の如く阿難よ、爾の時の獸鋸陀を知らむと欲せば今の我が身是れなり。彼の梵摩達王は今の提婆達(多)是なり。八萬の諸虫とは我、初めて成佛し始めて法輪を轉ずるに上の八萬の諸天道を得る者是れなり。此の提婆達(多)、彼の世の時に於て我を傷害し乃至今日猶善心無し。長夜害せむと思ひ相ひ中傷せむと欲す。」と。

賢者、阿難、及び諸の會者佛の說き給ふ所を聞き、〔〇〕悲悵、兼ね懷き各自感勵し法要を懃求む。須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り、辟支佛の因緣を種うる者有り、無上佛道意を發す者有り、不退地に住する者有り。咸各歡喜び敬戴奉行せり。

十六、〔一〕微妙比丘尼の品　第十六

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇陀精舍に在しき。

〔二〕波斯匿王、崩背の後、太子瑠璃、攝政王と爲り暴虐無道なり。醉象を驅逐して人民を蹋殺し稱て計ふ可らず。時に、諸の貴姓の婦女其の是の如きを見て心の中に摧悴き俗を樂しまず。卽ち共に出家して比丘尼と爲る。國中の人民、諸の女人を見るに或は是れ釋種、或は是れ王種、尊貴端正にして國中第一なり、悉く諸欲を捨て出家の道を爲す、凡そ五百人嘆美せざるは莫し。競うて共に供養す。諸の比丘尼、自ら相謂うて言く「吾等、今出家と名づくと雖も未だ法の藥を服み婬・怒・癡を消さず。寧、共に偸羅難陀比丘尼の所に詣り經法を諮受すべし。冀くば〔三〕曉らしめらるゝことを獲む」と。卽ち其の所に往き禮を作し問訊し各自陳べて言く「我等、復、道を爲すと雖も未だ甘露を

〔〇〕悲悵。かなしみなげくこと。

〔一〕微妙比丘尼品。西本、No. 25. 微妙は(Paṭācārā)比丘尼のことなり、上座尼偈一一二—一二六註にも出づ。

〔二〕波斯匿王。舍衞國の王。

〔三〕本文剋とあり、宋・元・明共に曉とあり、今曉を取る。

の具を辦じ險を涉りて去る。行くこと已に久しきを經て身羸れ力弊る。天時盛暑にして熱沙の道に到る。脣乾き渇乏し鬱蒸して死せむとす。酸苦の切を窮め悲悴みて言く「誰か慈悲我を矜愍む者ぞ當に拯濟ひ我が身命を救ふべし」と。時に山澤の中に一つの野獸有り名を鋸陀と曰ふ。身の毛金色にして、毛の頭に光明あり、遙に其の語を聞き甚だ之を憐愍み。身冷泉に入り其の所に來至り身を以て裹み抱へ、小(時)して還び力有り、將ゐて水の所に至り、其の爲めに洗浴せしめ行きて菓蓏を拾ひ來りて與ふ。之を食し體既に平復す。而して自ら念言ふやう「此の奇獸を覩るに毛の色に光明あり。是れ我が大王の須ふ所の者なり。然れども我れ死に垂むとして其に賴りて命を濟ふ。其の恩を感識り未だ酬報ること能はず。何ぞ能く此を害すべき心を生ぜむ。若し復獲ざれば彼の諸の獵師の宗黨徒類誅戮せらるべし」と。是の事を念ひ已り悲しみ自ら勝へず。鋸陀、問ふて言く「何を以て樂まざるや」泣を垂れて心に懷く所の事を說く。鋸陀語りて言く「此の事憂ること莫れ、我が皮を得ること易し。我が前世を計るに身を捨つること無數なれども未だ曾つて福の爲めに能く壽を捨てず。今、身の皮を以て彼の衆くの命を濟はむ。心に歡喜を懷く。獲るところ有るが如し、但だ皮のみ剝ぎ取つて命を絕たしむること莫れ。我、已に汝に施こし終に悔と恨と無し」と。爾の時、獵師卽ち徐に皮を剝ぐ。爾の時、鋸陀、卽ち自ら願を立つらく「今、我皮を以用つて此の人に施こし、彼の衆く人の愛する所の命を救はむ。此の功德を持つて衆生に施し用つて佛道無上正眞を成じ、普く一切生死の苦を度し涅槃永樂の處に安著せしめむ」と。此の願を作し已り三千の國土六反震動す。諸天の宮殿動搖して寧らならず。各驚愕き、其の相を推尋ね、菩薩の皮を剝ぎ布施したまふを見、卽ち天より下り來り其の所に到り、花を供養し、涕涙雨の如し。皮を剝ぎ去るの後、身の肉赤裸にして血出で流離れて看覩る可からず。復、八萬の蠅蟻の屬有り其の身の上に集まり、同時に[九]喫食ふ。時に穴に趣むかむと欲するも、復(他を)傷害せんことを恐れ痛みを忍び自ら持ち。身を

【九】 喫食。すゝり食ふ。

するのみにあらず。過去世の時も亦常に惡心をもつて我を殺害す」と。阿難、佛に白さく「過去傷害の事、審かならず、因緣云何」と。

佛、言はく「善く聽けよ、當に汝の爲めに說くべし」と。「唯然なり、一心に聽くべし」と。佛、阿難に告げたまうやう『過去久遠、計り數ふ可らざる阿僧祇劫に、此の閻浮提に一つの大城有り、波羅㮈と名く。爾の時、國王を梵摩達と名づく。兇暴にして慈み無く奢婬にして樂を好む。每に惡忌を懷き好みて傷害を爲す。爾の時、其の王、欻ち夢の中に於て一獸有るを見る。身の毛金色にして其の諸の毛端に金の光明を出して左右を照す。皆亦金色なり。覺め已り自ら念へらく「我が夢みる所の如き世必ず此れ有らむ、當に獵者に勅して其の皮を求覓むべし」と。是の念を作し已り諸の獵師を召して之に告げて言く「我が夢に獸有り、身毛金色にして毛の頭に光を出す。殊に妙にして晃朗かなり、想ふに今國界に此の物有らむ。汝等輩を仰ぐ、廣く行きて求め捕へよ。若し其の皮を得ば當に重き賜を與ふべし、汝の子孫をして食(を與へ)、用つて七世ならしめむ。若し心を用ひず、求めて得ざれば當に倶に汝等の族黨を誅滅すべし」と。時に諸の獵師、王の敎を得已り憂愁し[六]憒憒し復方計無し。一處に聚會り共に此の事を議る。「王の夢る所の獸生れて未だ曾つて覩ず。當に何の所に於て此を求覓むべき。若し得ざれば王法犯し難し。我が曹徒類永く活路無けむ」と。此の事を論じ已り益增悶惱す。又復、言ふもの有り「此の山澤中、毒虫、惡獸亦甚だ衆多し、遠く行き求覓むるも得ること能はず。交當に身を喪ふべし。困みて林野に死せむ。且く私に一人を募り行きて之を求めしめむ」と。衆人言く「善し」と。更に相ひ[七]簡練び一人を曉し勸むるやう「汝、力を盡して廣く行きて求覓むべし、若し汝、吉にして還らば我曹物を合せ當に重く汝を賞すべし。設令山澤に害に遇ひ還らざるも亦當に物を以つて汝の妻子に與ふべし」と。其の人、此を聞き心に自ら念言ふやう「此の衆人の爲めに[八]分として身命を棄てむ」と。內計已に定まり行に當つ可き道路

【六】憒憒。おもひみだるゝ貌。
【七】簡練。えらび拔くこと。
【八】分。本分、役目の義。

十五、鋸陀[一]、身を施すの品　第十五

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閲祇耆闍崛山の中に在しき。

爾の時、世尊、身に風患有り、祇域[二]醫王、爲めに藥酥[三]を合し、三十二種の諸藥を用つて、雜合せ、佛をして日に三十二兩[四]を服ませたてまつる。時に、提婆達(多)、常に嫉妬を懷き、心自ら高大り佛と齊しきを望む。佛、世尊の藥酥を服みたまふを聞き情の中に貪慕し、佛と同じく服まむと欲す。復、祇域に勅すらく「當に我が與めに合すべし」と。爾の時祇域、復與に之を合す。因つて之に語りて言く「日に四兩を服めよ」と。提婆達(多)、問ふらく「佛は幾兩を服みたまふや」と。祇域答へて言く「日に三十二を(服み給ふ)」と。提婆達(多)言く「我も亦當に三十二兩を服むべし」と。祇域答へて言く「如來の身は汝と同じからず、汝、若し多く服まば必ず更に患を爲さむ」と。提婆達言く「我、若し之を服まば自ら能く消すに足らむ。我身と佛身と何の差別有らむ。但、我に與へよ、服まむ」と。卽ち皆佛に效ふ。日日亦三十二兩を服む。藥體中に在りて諸脈に流注す。身力微弱にして消し轉ずること能はず。身を擧ぐるに支節極めて苦痛を患ふ。呻吟し喚呼し、煩憒[五]し宛轉す。世尊、憐愍み、卽ち遙に手を申べ以て其の頭を摩し給ふに。藥、卽時に消えて痛患卽ち除く。病既に愈ゆることを得たり。佛の手を看て識り因りて言つて曰く「悉達(多)の餘術、世承け用ひず。(よりて)復、醫道を學ぶ。善く能く知らしめよ」と。時に阿難、此の語を說くを聞き情悵恨み長跪して佛に白さく「提婆達多、恩養を識らず、世尊、慈矜みて之が爲めに患を除きたまふに、方に更に此の不善の言を吐く。何の情を懷くこと有りて能く此の心を生じ、長夜に嫉を思ひ佛、世尊に向ふや」と。佛、阿難に告げ給ふやう「提婆達(多)は但今日不善の心を懷き我を中傷せむと欲

【一】鋸陀身施品。西本、No. 14. 肉食獸，鋸陀(Kun-tas)身施品とあり。
【二】耆域。梵名、(Jivaka, Jiva)、耆婆とも寫す。王舍城の良醫の名。
【三】酥。ちゝざけ。
【四】兩。藥種にて四匁を云ふ。
【五】煩憒。心亂るゝ貌。

すに縁り我が病差ゆことを得たり。今、汝夫妻、何の願を求めむと欲す。汝の求む所を恣にせよ、悉く得せしむべし」と。夫妻、歡喜し長跪して願を立つ。「我が夫婦所生の處天上・人中一切意に從はしめよ」と」。

「是の如く大王よ、爾の時、油を賣る人を知らむと欲せば多羅睺梍是なり。是の時、油師の婦とは多羅睺梍婦是なり、爾の時に於て辟支佛を見て株杌に似手脚軸の如しと言ふに縁り油滓を施すと雖も瞋色語に與ふ。是因縁に由り所生の處初め形甚だ醜し、前の惡言の如きなり。後懺悔し喜んで好油を施すに縁り所生の處還び端正を得ぬ。油を以て施すに縁り常に多力を得數千萬衆敢て當る者無し。福德報ゆる故に轉輪王と作り福を四域に食み五欲心に從ひ善惡の業其報朽ちざるなり。是故に一切當に道要を念じ身に意を愼み道行を遵修すべし」と。

佛、是を說くの時洴沙王等諸王、臣民、[七二]四輩の衆・天・龍・鬼神、佛の說く所を聞き須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得る者有り、辟支佛の善根の本を種ふる者有り、無上大道心を發す者有り。或は不退地に遷住する者有り。一切歡喜し禮敬奉行せり。

【七二】四輩。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆のこと。

る」と。

佛、復、王に告ぐらく「皆、因緣有り、」と。『乃往、過去無量計り難き阿僧祇劫、此閻浮提に一大國有り波羅捺と名づく。國仙山有り名を律師と曰ふ。時に仙山中一辟支佛有り、身風患有り當に油を服むべし、油師の家に至る。其從り乞索す。油師瞋恚、逆ふて之を呵責すらく「頭、株杌の如く手足軸の如く肯て生活せず。他家に候伺し規として錢をもつて買はず、但、唐に得むと欲す」と。瞋呵責すと雖も然れども油滓を與へぬ。辟支佛、心甚だ敬仰す。受け已り適復、擔ひ去る。其油師の婦、外從りして來り辟支佛を見る。心甚だ敬仰し問ふて言く「快士よ、何從りして來り此油滓を持し用つて何等をか作す」と。時に辟支佛、實の如く之を語る、婦、便ち恨還び喚びて將ゐ來る。卽ち其鉢を取り鉢に油を與へ滿しぬ。夫を怨責して言く「汝、實に是ならず、云何が乃ち油滓を以て之を與ふ。還懺悔し汝の口の過を除かしめよ」と。油師、心悔ひ粗還び[六八]辭謝す。夫婦、心を同じくし辟支佛に白さく「若し更に油を須ひなば日々來り取れよ」と。後、辟支佛、數返り油を取る。其恩力に感じ油師の前に於て神足力を現じ虛空に飛昇す。身水火を出し身體を分合し種種變を現ず。油師の夫婦其神變を見て倍用つて歡喜し甚だ敬仰を增す。夫、是を見已り便ち婦に語りて言く「汝、施す所の油共に福を同じくし果報を受く時共に夫妻と爲るべし」と。婦、夫に語りて言く「汝、惡言を興し快士に向ひ方に[六九]油滓を施す、淨心有ること無ければ所生の處當に極めて醜惡となるべし、云何が汝と共に夫婦と作る耶」と。夫、復、答へて言く「我、常に辛苦し油具を積聚す。云何が獨施さむや、我と共にならずば終に汝を聽さず。要らず夫婦と作れ」と。妻、復言ひて曰く「若し汝の妻と爲り汝の形の醜を見なば夜汝を棄てゝ亡げむ」と。夫、之に答へて曰く「正に汝をして亡げしめむ。我、當に汝を逐ひ要ず得て止むべし」と。夫婦、語り竟り辟支佛に向つて身心自ら歸し[七〇]款誠して過を悔ひぬ。時に、辟支佛、油師の夫妻に語るらく「汝、油を施

【六八】辭謝。あやまること。

【六九】油滓。大正本、由に作るは誤植。

【七〇】款誠。誠心といふに同じ。

此物に觸るゝこと莫れ、我夫、若し來らば儻相ひ傷損せむ」と。尋いで婦に語りて言く「我、是汝の夫なり」と。婦、殊に信ぜずして之に語りて言く「我夫、極めて醜し、汝の形端正なり。汝是何人ぞ、是を我が夫に說かむ」と。夫、卽ち珠を却く、還び故形を示す、婦、乃ち驚喜す。「云何が、乃ち爾る」と。夫卽ち具に悉く珠を得たる意を說く。婦、是自り後其夫を敬愛す。株杌の名是より滅除す。便ち更に之を稱して須陀羅扇と名づく。後自ら念を生ずらく「當に兵衆を率ゐ更に宮城を起すべし」と。卽ち出でゝ平博の處を觀行し諸人衆に勅し是中に作る可しと。四龍王有り、人形にて來り問ふらく「城を作らむと欲せば何物を用ふと爲すや」と。須陀羅扇言く「當に土を用ひて作るべし」と。龍、復白して言さく「何か寶を用ひざるや」と。答へて言く「城、大那、多寶を得む」と。龍、復白して言さく「我、當に相ひ與ふべし」と。尋いで四邊を化し四大泉を作りて之に語りて言く「東の泉水を用ひて塹を作らば便ち琉璃を成じ、南泉水を用ひて塹を作らば金と成爲るべし。西泉水を用ひて塹を作らば銀と成爲る可く、北泉水を用ひて塹を作らば頗梨と成るべし」と。尋いで時に勅して作るに語の如く寶と成り便ち城を作らしめぬ。方四百里なり。復、勅して宮を作る。方四十里なり。宮城・〔六六〕街陌・樓觀・舍宅・樹林・浴池、悉く是れ四寶、嚴淨・顯妙略天上の如し。宮城旣に竟り、七寶來り應ず。四域を總攝し民を化し善を修しぬ』と。

「是の如く大王よ、爾の時の摩訶釋仇梨を知らむと欲せば今現に我父淨飯王是なり。爾の時の母とは今現に我が母摩訶摩耶是なり。彼多羅睺柁、醜王子とは今我身是なり、彼の時の婦とは今の〔六七〕瞿夷是なり。彼婦の翁とは今の摩訶迦葉是なり。彼六國王、兵力を以て女を逼求せむと欲する者は今の六師是なり。彼世の時に於て我と色を諍ふ。我、彼を傷害し兵衆を奪取す。乃至今日名利を嫉む故に我と試を求む。術心と稱ふ無く水に投じて死せり。我、徒類九億人衆を攝し我が弟子と爲る」と。

時に、洴沙王、復、佛に白して言さく「多羅睺柁、本、何行を作し福德の力强く形是の如く醜な

【六六】　街陌。まち。

【六七】　瞿夷。西本、(Skyo-dgu-hi-bdag-mo)とあり、梵名(Mahāprajāpati)、佛の姨母、普通摩訶波闍波提と寫し、憍曇彌と別に號す。

り、若し汝、晝見なば汝をして驚かしむるに足る、株杌の婦聞き之を憶して心に在り、豫て一燈を掩ひ藏して屏處に著く。夫の臥し訖るを伺ひ燈を發し來著して其形體を見て甚だ用つて恐怖す。卽夜嚴駕し本國に還至す。夫、明乃ち覺め甚だ以て悒慼す。弓を捉り貝を持し跡を尋ねて逐ひ往く。其の國中に到り一臣に依りて住す。後、六國王、律師跋蹉、律師跋蹉は絶妙の女有るを聞き各貪り得むと欲す。兵を興し衆を集め競ひ共に來り索む。時に律師跋蹉、甚だ用つて慣慨す。諸の群臣をして博く其事を議せしむ。「正に一に與へむと欲せば其餘は則ち恨む。何の方便を作して此兇敵を却けむ」と。一臣有りて言く「當に此女を分ち用つて六分と作し一軍に一を與へよ、其意息むべし」と。或は臣有りて言く「且く重募を出し能く軍を卻くもの有らば女を以て之に妻し國を分ちて共に治せ、重く賞賜を加へよ」と。王、卽ち之を然りとし便ち行きて募を宣ぶ。時に多羅睺柁卽ち、弓・貝を持し城を出て賊に趣く。貝を吹き弓を叩く、六軍驚駭し怖れ動くこと能はず。卽ち軍中に入り六王の首を斬り冠飾を奪取し其衆を攝錄す。律師跋蹉、甚だ以て歡喜し女を以て之に貢ぎ奉じて大王と爲す。七國を領攝す。一切の軍兵、諸士衆を將ゐ婦と國に還る。父王、聞き來り往きて界に出て迎ふ。子、領する所軍衆極めて盛んなるを見、國を以て子に讓る。勸めて大王と作す。其子肯んぜず、云く「父、猶在す、理として爾るべからず」と。還りて宮中に到り其婦を窮責すらく「汝、前に何を以て夜我を棄てゝ亡ぐ」と、其婦、答へて言く「君の身、極めて醜し。初めて見て驚怖し是人に非ずと謂へり」と。多羅睺柁、鏡を捉り自ら照し乃ち身首を見る。熟する株杌の如し、其身を患厭し自ら見るを喜ばず、便ち林間に至り乃ち自殺せんと欲す。帝釋、遙に知り、卽ち下り邊に到り所由の緣を問ひ其意を慰喻す。一寶珠を與へて之に告げて言く「常に此珠を以て汝の頂上に著けよ、殊異、我が如く端政を受くべし」と。尋いで喜び受け奉り其頂上に安んず、身倍異なるを覺ゆ。宮中に還至し自ら弓貝を取り外に至りて戲れむと欲す。婦、見るも識らず、尋ね之に語りて曰く「汝、是何人ぞ、

り」と。復、問ふらく「前草、今者在りや不や」と。答へて曰く「猶在り、尋いで勅して乳を取り、更に用つて重ねて煎ず。持して夫人に與ふ。夫人、便ち服む。之を服みて數日亦娠有りと覺ゆ。諸の小夫人月滿ち各生む。皆是男兒、端政殊に異なり。王、諸子を見て歡喜踊躍す。遲きを悒ひ大夫人を念想す。夫人月滿ち亦一男を生む。面貌極めて醜く形[六二]株杌の如し。父母之を見て情歡喜せず、因つて共に之を號して[六三]多羅除柁と爲す、(晋に株杌と言ふ。)勅して養育せしむ。年、漸く長大す。其餘の諸兄皆已に納娶す。唯、株杌有り以て意に在らず、後、邊國兵を興し界に入るに會ふ。五百の王子、兵を領し往きて拒みぬ。始めて戰ひ軍敗れ退き來り城に趣く。株杌王子、諸兄に問ふて言く「何を以て退き走る。恐怖狀の如し」と。兄輩、語りて言く「往きて鬪ひ利あらず、他軍に逐はれ是を以て走り退く」と。株杌言ひて曰く「斯の如きの軍賊敢へて[六四]侵凌せらる。我が先祖の天寺の中に大弓貝を取り來れ、我往きて擊たむと欲す」と。其先祖は是轉輪王なり、即ち多人を遣し往きて取り舁いで來り、而して之を授與す。弓を取り舒し張る。弓聲雷の如く、弓を彈くの音、四十里に聞ゆ。弓を持し貝を捉り便ち獨り往きて擊つ。到りて先づ貝を吹く。聲霹靂の如し。彼軍聲を聞き驚怖して散走す。敵、退き乃ち還る。父王異遇す。爾れば乃ち愛待す。深思し方便して婚娶を爲さむと欲す。時に一國王有り、律師跋蹉と名づく。其の女有りて端政世に絕するを聞く。王、即ち使を遣はし往きて求婚を告ぐ、其の一兒の綽狀を指し之を示して言く「此の兒と爲す。卿の女を求索む」と。使、敎を奉じて到り具に王の辭を騰ぐ。[六五]律師跋蹉、即ち婚を爲すを許す。使、還り王に白す。王、大に歡喜し尋いで車馬を遣し往き迎へて將來す。自ら株杌に勅すらく「晝婦を見ること莫れ、今より以後常に日暮を以て乃ち交會せられよ」と。時に諸子の婦、後に共に談語す。各其夫の種々才德を歎ず。時に株杌の婦、亦夫を歎じて言く「我夫、猛健力士の力、身又細軟なり、甚だ愛敬すべし」と。餘婦、語りて曰く「汝、言ふ須からず、汝の夫の狀貌正に株杌に似た

【六二】株杌。株は木のきりかぶ、杌、枝なき樹。
【六三】多羅除柁。西名、(Sdon dum)と意譯す。
【六四】侵凌。おかすこと。大正本、凌を稜に作るは誤植。
【六五】律師跋蹉。西名、(Li-tsi-bai-tsa)とす。

しむるに緣り、是を以て今日是足下に千福輪相を得たり」と。

時に洴沙王、復、佛に白して言さく「六師の群、迷ひて自ら度量せず利養に貪著し嫉妬心を生す、世尊と與に神力を觸試を求む。言はく一佛、一を作さば我當に二を作すべし」と。佛、神變を現じ妙にして思議し難し。六師、窮縮し乃ち一術無し、形を慚ぢ影を愧ぢ水に投じて死す。徒類散解し自ら殃患を遺す。其の迷惑を念ふに何ぞ劇の甚だし」と。佛、大王に告げ給ふやう「但、今日のみ六師の徒名利を諍ふ故に我と決を求め自ら喪なひ衆を失ふにあらず。過去世の時も亦我と共に諍ひ我亦彼を傷け其の人の衆を奪ふ」と。王、卽ち長跪し尋いで佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の時六師と鬪ひ其徒衆を奪ふ、其の事云何、願くば具に說示せよ」と。

佛、王に告げて曰く「善く心を著けて聽け」と。「乃往過去無數無量阿僧祇劫に此の閻浮提に一國王有り、【六〇】摩訶賒仇利と名づく。五百の小國王を領し五百の夫人有り。太子の以て繼嗣とすべきこと有る無し。王、自ら念言ふやう「吾が年、轉大なり、一子以て國位を續くもの有ること無し。若し。一旦崩亡の後諸王臣民相ひ承受せず。便ち兵を興し民の命を【六一】枉害すべし。國、將に亂れんとするなり、何ぞ苦の劇しき」と。是の事を念ひ已り心憂海に沒す。時に天帝釋、遙に王憂を知り卽ち天從り下り化して一醫と作り王の所に來詣し王に憂意を問ふ。王、卽ち事の如く宣示して醫に語る。化醫、王に白さく「復、憂慮する莫れ、我、當に王と爲り往きて雪山に入り合衆の藥を採り夫人に與へ服ますべし。服藥の後皆娠有るべし」と。王、是の語を聞き差用つて憂を釋く。卽ち醫に語りて言く「爾を能ふはゞ善し」と。是の時、化醫、卽ち雪山に往き諸藥草を取り王宮に擔ひ還る。乳を以て之を煎じ大夫人に與ふ。夫人臭を嫌ふ。情又信ぜず。化醫天に歸る。後、肯て服せず。餘小夫人盡く共に分けて服む。服み未だ久しきを經ず尋いで娠有りと覺ゆ。各情事を以て大夫人に白す。夫人、聞き已り情乃ち憂悔す。乃ち服む所の餘殘有るや不やを問ふ。答へて言く「已に盡きた

【六〇】 摩訶賒仇利。西本、(Ma-ha-śa-ku-li)、と寫す。

【六一】 枉害。大正本、抂に作るは誤植。

ふ。推讓して誰に與へむ」と。太子、答へて言く「世人惡を行ず。必ず順を執らず、若しは刑罰を加ふ。罪、我に少からず。若し能く民を率ゐ普く十善を行はゞ我乃ち國事を領受し堪任せむ」と。諸臣、言く「善し、唯、願くば殿に昇り十善の道勅して行はしむべし」と。太子、爾の時、尋いで王位に登り下人民に告ぐらく「普く十善を行じ一切、敬順し心を改め操を易へよ」と。魔王、妬忌し王化を敗らむと欲し密に封書を作り諸國に告下す、「前に勅し善を行ず。既に利驗無く唐らに自ら勞苦し無益の事を修す。今自り以往民に聽す、心を恣にし十惡事を作し更に憚り惰する勿れ」と。諸王、書を得て此異詔を怪む。何に緣り理を越えて人に勸むるに惡に從へと。各親信を遣し重ねて所由を問ふ。王、是語を聞き愕然として驚きて曰く「我、是令無し。何に緣りて乃ち爾る」と。卽ち勅して嚴駕し躬ら諸國を行く。親しく臣民を見て改めて異化を宣ぶ。魔、道邊に於て化して一人と作る。身大火に處し盛炎熾然なり。中に於て哭き叫び聲悲しく酸切す。王、卽ち前みて問はく「汝、何を以て爾る」と。人、王に白して言さく「我、生前の時人に十善を勸め今、此苦を受く。痛毒忍び難し」と。王、重ねて答へて曰く「何ぞ是事有らむ、人に勸めて善を修し反つて更に苦を受く」と。又、復問ふて言く「十善を行ふを勸め汝をして苦を受けしむ。前に勸めを受くる人十善を行はゞ善報を得くるや不や」と。答へて言く「前の人善福を得る耳、但、他に敎ふる故に獨り此苦を受く」と。王、聞きて歡喜して答へて言く「但、前人をして善福を得せしめば甘受して苦を受け、以て恨みと爲さず」と。魔、是の語を聞き卽ち形を隱して去る。遍く諸國に行き十善の行を宣ぶ。人民化に服し身口意を愼しみ正に化して[五八]彌布す。一切欽崇し王德隆赫たり。嘉瑞ありて降る。金輪先に應じ七寶[五九]具臻る。四域を遊化し善に導くを務と爲す』と。「是の如きの大王爾の時の施陀尼彌王を知らむと欲せば今現に我父淨飯王是れなり。爾の時の母とは今現に我母摩訶摩耶是なり。彼の惠光王十善にて民を化する者今我身是なり。我、彼世自ら十善を行ひ又以つて民に勸め十善を行は

して毛髮立つ程驚く」とあり。

【五四】施陀尼彌。西名、(Sin-rta-ni-ro)とす。

【五五】須梨波羅滿。(Tib. Su-li-ba-la)とす。

【五六】委相。大正本、恣に作るは誤植。

【五七】那波羅滿。西名、(Śes-rab ḥod)(Jñāpa-prabhā?)とす。

【五八】彌布。あまねくしくこと。

【五九】具臻。そなはりいたること。

を發し不退に住する者有り。果を得て天に生る。稱て數ふ可らず。地獄の衆生佛を見て法を聞くに緣り心敬仰を生じ皆遙に自歸す。終に皆天上・人中に生るゝを得たり。時に洴沙王、長跪して佛に白さく「世尊の奇相三十有二、身手の諸相猶曾つて見るを得たり。未だ如來の足下の輪相を覩ず。願くば衆に見示せよ」と。佛、即ち脚を出し普く衆會に示す。一切、佛の足底の輪相を見る。端嚴・昞著し文理畫の如し。分別顯了し之を覩て厭くこと無し。王、益歡喜し重ねて佛に白して言さく「不審なり、世尊よ、本何の德を作りて乃ち此輪相の妙を致す」と。佛、即ち王に告ぐらく「我、過去自ら十善を修し復以て人を教ふるに由る。故に斯相明に顯はれ是の如きを得たり」と。王、又佛に白さく「不審なり、世尊よ、自ら十善を修し復以て人を教ふる其事云何、願くば開示せられよ」と。佛、王に告げて曰く「善く聽き心に著せよ。乃往無數阿僧祇劫、此閻浮提に大國王有り、[五四]施陀尼彌と名づく。八萬四千國、八萬億聚落一萬大臣有り、王二萬夫人有り、皆子有ること無し。王、甚だ憂愁し國嗣を絕つを懼る。即ち廣く禱祀し諸天に祈願す。王の第一夫人[五五]須梨波羅滿と名づく。數時間を經て便ち娠有りと覺ゆ。懷妊して自り後心性聰了・仁慈・矜哀人に勸むるに善を以てす。日月滿足して一男兒を生む。端政超異し[五六]姿相顯美なり。身の諸毛孔皆光明有り。王甚だ欣慶す。之を覩るに厭くこと無し。即ち、相師を召し其吉か否かを占ふ。相師、披見して歎じて言く「奇なる哉、是兒の相挺特し殊倫なり、德四域に綏んじ天下敬ひ戴かむ」と。王、益歡喜し勅して爲に字を立つ。相師、王に白さく「何の異瑞有りしや」と。王言く「此兒懷妊已來、其母聰慧・仁慈善を勸む。餘瑞衆しと雖も甚だ此異を怪しむ」と。相師、驚喜して王に白して言さく「母豫て辯慧なり。自身光明あり、當に爲に字を立て[五七]那波羅滿と名くべし」と。(晉に惠光と言ふ。)太子長大し智慧人に殊る。父王薨薨し葬送し畢り訖る。諸王臣集り勸めて位に嗣かしむ。太子固辭して云く「當る能はず」と。諸臣、答へて曰く「大王、已に崩ず。唯、太子有り、更に兄弟無し。今、肯むぜずと言

する天神の通稱。
【四六】了々。賢き貌。
【四七】慈三昧。慈定といふに同じ、三昧は梵語(Samādhi)の音譯、心を一處に定めて動かざれば定と譯し、又一般に息慮凝心と云ふ。慈(悲)のみに心をとゞめ一切を掩ふを慈三昧といふ。
【四八】兩奇。二つといふに同じ。
【四九】振朗。ほがらかに打ちふるふこと。
【五〇】殊妙。妙を「大正」沙に作るは誤植。
【五一】雜厠。まじり合ふこと。
【五二】十八地獄。一に光就去、人此中に居れば相見て即ち鬪はんと欲す。地獄中兵なし、而して自ら兵ありて相ひ殺傷すること歲數なく又死せず。その人長大且つ人壽の百三十五億歲の命あり。二に居虛倅略、此中一苦は前の二十に當り、其の人火中に入て身を赤くし出でゝ相ひ鬪ふ。其の壽二萬歲、三、桑居都、四、樓、五、房卒、六、草烏卑次、七、都盧難且、八、不盧半呼、九、烏竟都、一〇、泥盧都、一一、烏略、一二、烏滿、一三、烏籍、一四、烏呼、一五、須健居、一六、末都乾直呼、一七、區逋途、一八、陳莫。
【五三】衣毛驚悚。西本「恐怖

退に住する者有り、果を得て天に生ず。亦甚だ衆多なり。

第十二日、質多居士佛を請じて供養す。佛、此日に於て[四七]慈三昧に入る。金色の光を出し遍く大千(世界)を照す。光衆生に觸れて三毒心息み自然に慈興る。衆生を等しく視ること父の如く母の如し。兄の如く弟の如し。愛潤の心都て増減無し。然る後、爲に若干妙法を説く。亦、大心を發し不退地に住す。果を得て天に生れぬ。稱て量る可きこと難し。

第十三日、屯眞陀羅王、次いで復佛を請ず。施設し供養す。佛、是の日に於て身高座に昇り臍光を放つ。分れて[四八]兩奇と作り身を離ること七仭なり。頭に各華有り上に化佛有り佛の如く異なる無し。化佛の臍中復光明を出す。亦、兩奇に分れ身を離るゝこと七仭頭に蓮華有り上に化佛有り。是の如く轉じ大千國土に遍し。一切瞻覩る、愕然として驚喜す。佛、爲に時に應じ意に隨つて説法す。亦大心を發し不退に住する者果を得天に生れぬ。數甚だ衆多なり。

第十四日、優塡王佛を請ず。時に優塡王、華佛上に散ず。佛、卽ち時に應じて其散ずる所の華を變じて千二百五十七の寶の高車を作る。高さ梵天に至り晃金山を踰え。雜寶の衆色、曜麗しく相照し赫然たり。金光[四九]振朗し[五〇]殊妙量り難し。神珠・瓔珞其間に[五一]雜廁し諸高車の中皆佛身有り大光明を放ち三千土に遍し。衆會變を覩て喜敬交懷す。佛、卽ち説法し、病に應じて藥を投ず。皆大心を發し或は不退に住す。道を得て天に生る、數、復甚だ多し。

第十五日、洴沙王、佛を請ず。佛、豫て王に勅す。唯食具のみ須ひよ。王但器物を嚴辦し極めて饒多ならしむ。食時、已に到り諸器悉く滿つ。甘饍百味種々異美なり。普く衆會をして飽足し餘り有らしむ。食已り身心自然に安樂なり。時に世尊、手を以て地を指す。[五二]十八地獄一切都て現はる。無量塵數の諸の罪を受くる人各々自ら説く、「我、本時に於て是の如き惡を作り今此苦を受く」と。一切衆會具に悉く聞見す。甚だ悲愍を懷き[五三]衣毛竪悚す。佛、便ち説法を爲す。其意に應適し大心

と顯了なれば明といひ、一に宿命明、自身他身の宿世の生死の相を知る。二に天眼明、自身他身の未來世の生死の相を知る。三に漏盡明、現在の苦相を知りて一切の煩惱を斷ずる智なり。

【三九】六通。一に神境智證通、二に天眼智證通、三に天耳智證通、四に他心智證通、五に宿命智證通、六に漏盡智證通の六なり。

【四〇】六度。六波羅蜜のこと。一に布施、慈心物を施すなり。二に持戒、佛戒を持して身・口・意の惡を愼むなり。三に忍辱、一切の苦痛を耐忍して心動かざるなり。四精進、勇猛に一切の善を勵み一切の惡を伏すなり。五に禪定、心を一處に止めて妄念を拂ふなり。六に智慧、眞理を分別するなり。前五は福行、後一は智行相俟ちて斷惑證理して生死を渡る故六度といふ。

【四一】四等。慈・悲・喜・捨の四無量心をいふ。

【四二】五陰。五蘊に同じ。色・受・想・行・識あり、衆生この五により障害を受くなり。

【四三】肅恭。つゝしみうやうやしきこと。

【四四】挽拽。ひきづること。

【四五】金剛密迹。金剛杵を執り大威勢を現じて佛法を擁護

計り數ふること難し。

又、第八日帝釋の請を受く。佛の爲めに師子座を作る。如來、座に昇る。帝釋左に侍し梵王右に侍す。衆會の一切靜然として坐定る。佛、徐に臂を申し手を以て座を接す。欻ち大聲有り、象の鳴き吼ゆるが如し。時に應じて五大神鬼有り、六師の高座を摧滅し[四四]挽拽す。[四五]金剛密迹、金剛杵を捉り杵頭火を出し擧げて六師に擬す。六師、驚怖し奔突して走る。此重辱を慚ぢ河に投じて死せり。六師の徒類九億の人衆皆來り佛に歸し弟子と爲るを求む。佛言く「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法衣身に在り、皆沙門と成る。佛、說法を爲す。其法要を示すに漏盡き結解く。悉く羅漢を得たり。是に於て如來八萬の毛孔從り皆光明を放ち虛空に遍滿す。一一光の頭大蓮華有り一一華上皆化佛有り。諸大衆與に圍遶し說法す。衆會茲無上の化を覩て信敬の心倍益隆盛なり。佛、即ち說くことを爲せり。其所應に隨つて大心を發し果々得て天に生るゝ有り。福を進め善を增す。數甚だ衆多なり。

第九日到り梵王、佛を請ず。佛、自ら身を化し高さ梵天に至る。威嚴高く顯れ巍々極め難し。大光明を放ち天地に暉赫す。一切仰ぎ瞻る。皆其語を聞かむとす。佛、爲に種々法要を顯示す。亦多衆をして發心し佛を求めしむ。果を得て天に生ず。數亦計り難し。

第十日に到り四天王佛を請ず。爾の時、世尊、普く大衆をして佛の色身を見せしむ。諸天中に遍く四天王從り色究竟(天)に至る。皆佛身を見る。大光明を放ち各大衆の爲に微妙の法を說く。咸、遙に仰ぎ視る。[四六]了々之を視る。一切の衆會甚だ敬仰を增す。佛、說法を爲す。其意に隨つて皆大心を發し不退地に住し果を得て天に生れ稱て計るべからず。

第十一日、須達、佛を請ず。佛、是日に高座の上に於て自ら其身を隱す。寂滅して現ぜず、但、光明を放ち柔軟の音を出す。諸法の要を分別し演暢す。在會の人法を聞き解悟しぬ。大心を發し不

に喜覺支、心に善法を得て歡喜を生ずるなり。四に輕安覺支、身心の麁重を斷除して身心をして輕利安適ならしむるなり。五に念覺支、常に定慧を明記して忘れず之をして均等ならしむるなり。六に定覺支、心を一境に住して散亂せしめざるなり。七に行捨覺支、諸の妄謬をすて一切の法を捨て平心坦懷更に追憶せざるなり。此の七事を以て無學果を證するを得るなり。

【三七】八道。八正道・八正道分、八聖道支といふ。これ聖者の道なり。一に正見、苦集滅道の四諦の理を見て分明なるを云ふ。無漏の慧を體とす。二に正思惟、四諦の理を見て尚思惟し眞智增長するをいふ。三、正語、一切非理の語をなさゞるをいふ。四、正業、眞智を以て一切の身の邪業をはなるゝを云ふ。五、正命、身・口・意の三業を清淨にし正法に順ひて五種の邪活法をすてゝ生活するを云ふ。六、正精進、眞智を發用し强め涅槃に進むをいふ。七、正念、眞智を以て正道を憶念し邪念なきをいふ。八、正定、眞智を以て無漏清淨の定に入るをいふ。此の八法邪非を離るれば正といひ能く通じて涅槃に至れば道と云ふ。

【三八】三明。智の法を知ると

明焰炎す。其池中の水[三二]八德具足す。水底七寶の沙ヶ遍滿す。八種の蓮華大なること車輪の如し。靑・黃・赤・白・紅・綠・紫・雜なり、香氣芬馥し馨四遠に徹す。蓮華の色に隨つて各光明を發す。光明顯照し天地を暉曜す。大會此の寶池の奇妙を覩て歡喜し佛の無量の德を稱歎す。佛、因つて觀察す。衆人の心に隨つて方便說法しぬ。各開解して無上心を發さしむ。果を得て天に生れり。盡く福業を增す、數多くして計り難し。

第四日に到り因陀婆彌王・佛を請ず。佛、是の日に於て其の寶池をして四面自然に八[三三]渠流有らしむ。還び相ひ灌注し自然に迴轉す。水流聲有り其の聲淸妙にして皆諸法を說く。[三四]五根・[三五]五力・[三六]七覺・[三七]八道・[三八]三明・[三九]六通・[四〇]六度・[四一]四等大慈大悲勸發し開導して種々の法を說く。一切聞き覩て心皆開解し、發心して佛を求め果を得て天に生れ、福慧を增積せり。數、甚だ衆多なり。

次に第五日梵摩達王、佛を請じ供養す。佛、是の日に於て口中光を發す。金色赫奕し大千土に遍し。光明觸るゝ所の一切の衆生三毒[四二]五陰皆自然に息む。身心快樂す。譬へば比丘の第三禪を得るが如し。衆會歎じ怪しみ佛德を志慕す。爲めに便ち法を說き給ふ。各開解を得、大道心を發し果を得て天に生れぬ。福を進め慧を修す。數、甚だ多し。

第六日中、諸の律昌の輩、次いで復、佛を請ず。佛是の日に於て普く大會の一切衆生をして心々相ひ知らしむ。各々一人、一切心の念ずる所の善惡の志趣、業行を知る。咸自ら驚喜し佛德を欽羨す。佛、便ち爲に若干の妙法を說く。皆開解を得。誓つて佛を求むる者は果を得て天に生れぬ。數甚だ衆多なり。

第七日に到り、釋種、佛を請ず、佛、是の日に於て諸の會者を化す。悉く自ら轉輪王と爲り。七寶(と)千子とを見せしむ。諸王・臣民[四三]肅恭して承け已る。侍仰減る無し。各自、驚き怪む。喜慶量り無し。佛、即ち說法を爲す。其意に投適し亦無上正覺の心を發し果を得て天に生れり。甚だ

【三二】八德。一、澄淨、二、淸冷、三、甘美、四、輕軟、五、潤澤、六、安和、七、飮時飢渴等無量の過患を除く、八、飮み已て定て能く諸根を長養し四大增益す。

【三三】渠流。みぞ。

【三四】五根。一、信根、三寶四諦を信ずること。二、精進根、勇猛に善法を修すること。三、念根、正法を憶念すること。四、定根、心を一境に止めて散失せしめざること。五、慧根、眞理を思惟すること。此五法能く他の一切の善法を生ずる本となれば五根と名づく。

【三五】五力。信・精進・勤念・定・慧の五根增長して五障を治する力を有するもの一に信力、二に精進力、三に念力、四に定力、五に慧力の五なり。

【三六】七覺。七菩提分・七覺支・七等覺支といふ。覺とは覺る覺察の義なり。心の定慧に據るを明かに見分けて偏に一方にかたよらしめず定慧均等ならしむる法なり、七とは一に擇法覺支、智慧を以て法の眞僞を簡擇するなり、二に精進覺支、勇猛の心を以て邪行を離れ眞法を行ずるなり、三

王と力能を捔試する」と。六師、[二四]凶凶として言氣遂に高し。波斯匿王、既に往きて佛に見え白して言さく、「六師、慇懃乃ち爾る。唯、願くば世尊よ、神を垂れ化伏し普く一切をして僞を別ち眞を識らしめよ」と。佛、王に告げて言く「我、自ら時を知る」と。波斯匿王、尋いで臣吏に勅し場地を平治し多く香花を積み床座を敷設し諸の幢幡を竪て嚴辦し已に訖りぬ。大衆都て集る。

[二五]臘月一日佛試場に至る。波斯匿王、是の日食を設け、淸身躬ら手にて佛に楊枝を授く。佛、受け嚼み竟る。殘を擲ち地に著く、地に墮ち便ち生ず、[二六]蓊欝として起り根莖踊り出づ。高さ五百由旬枝葉雲布す。周匝亦爾り。漸く復華を生ず大きく車輪の如し。遂に復菓有り、大なること五斗の瓶なり。根莖枝葉純なる是れ七寶なり、若干の種色映燿麗妙なり、色に隨つて光を發し日月を掩蔽す。其の菓を食ふ者美しく甘露に逾ゆ。香氣四塞し聞く者情悅ぶ。香風吹き來り更に相ひ[二七]振觸す、枝葉皆和雅の音を出し法要を暢演し聞く者厭ふこと無し。一切の人民茲の樹變を覩て敬信の心倍益純厚なり。佛、乃ち說法す。其意に應適し心皆開解す。佛を志求する者果を得て天に生るもの數甚だ衆多し。

次に第二日優塡王、佛を請ず。時に如來其兩邊を化し兩寶山と成す。嚴顯覩る可し。衆寶雜合し五色暉曜し光焰[二八]煒曄す。若干種の樹山上に行列し華果茂り盛にして微妙の音を出す。其一山頂成熟の[二九]粳米有り滑美にして百味甘香口に附く、人民の類自ら恣に食す。其一山上柔軟の草有り、肥脆甘美以て畜生を俟つ、須つ者住み噉ふ、飽き已つて情歡ぶ。一切の衆會山異顯るゝを覩る、食已り悅を懷き仰慕遂に深し。佛、更に[三〇]稱適す。爲に妙法を說く。各開解を得無上心を發し果を得て天に生れぬ。其の數亦衆し。

第三日に到り屯眞陀羅、佛を請じ供養す。佛に淨水を奉る。俟ちて以て[三一]澡漱す。佛、水を吐きて棄つ、化して寶池と成る。周匝四邊各二百里なり。純七寶を以て共に相ひ間雜す。衆色相ひ照し光

【二四】凶凶。あら〳〵しき貌。
【二五】臘月。陰曆十二月の異名。
【二六】蓊欝。盛んなる貌。
【二七】振觸。ふれ合ふこと。
【二八】煒曄。かゞやく貌。
【二九】粳米。うるち。
【三〇】稱適。かなへかなふこと。
【三一】澡漱。口をそゝぎ洗ふこと。

人民と與に悉く共に往詣し越祇國に集まる。六師、王に見え廣く自ら陳べ說くらく「當に瞿曇をして我と共に試ましむべし」と。屯眞陀羅、復往きて佛に白す。佛、猶答へて言く「佛、自ら時を知る」と。王亦嚴辦す。會の日至るに垂んとす。佛衆僧と與に卽ち[三一]特叉尸利に向ふ。此國中の王[三二]因陀婆彌と名づく。諸臣民と與に亦來り奉迎す。屯眞陀羅五億人・洴沙王等諸王臣民と與に亦皆佛を逐ひ特叉尸利に向ふ。六師已に到り因陀婆彌に白す。極めて自ら[三三]譸張し高談大語す。「瞿曇と神力を捔試せむことを聽せよ」と。因陀婆彌復往きて佛に白す。佛、故に答へて言く「我、自ら時を知る」と。嚴辦の日到る。佛、復、捨て去り諸衆僧と與に婆羅㮈に至る。婆羅㮈王梵摩達と名く、亦人衆と與に躬ら來り佛を迎ふ。特叉尸利人民明日乃ち佛の去るを知る。六師 追ひ逐ふ。跡を尋ねて馳せ行く。因陀婆彌六億衆、洴沙王等と與に一切隨逐す。六師、既に到り前の如く王に白す。王前辭の如く往きて佛に白す。佛亦答へて言く「我、自ら時を知る」と。嚴辦の日到る。佛、復捨て去る。比丘僧と迦毘羅衛國に往く。迦毘羅衛の諸釋種の輩 諸の大衆を率ゐ皆來り佛を迎ふ。波羅㮈人明日乃ち知る。六師の徒衆續きて復馳逐す。梵摩達王八億人・洴沙諸王六國の人民と與に皆悉く前後し佛に隨逐して往く。六師、既に到る。諸釋種に向ひ紛紜自ら說く。廣く術能を引き「瞿曇と與に共に神力を決せむことを聽せ」と。釋種復往きて佛に白し具に其事を宣ぶ。佛、又告げて言く「我、自ら時を知る」と。嚴治し設辦す。日を剋して至るに垂んとす。佛、衆僧と與に舍衞國に往く。舍衞國王波斯匿と名づく。諸臣民と與に皆來り佛を迎へぬ。釋種明日乃ち佛の去るを知る。六師徒を率ゐ後從之を追ふ。釋種九億の人衆を將ゐ領す。洴沙王等諸國の人民川を亘り野に滿つ。逐ふて舍衞に趣く。六師等到り波斯匿に見え具に自ら本末の情事を陳說し「瞿曇と神力を決捔せむと欲し期に臨み要勒すべからず。今、大衆と與に逐ふて王國に至る。大王よ、我等と決せしむべし」と。波斯匿王、亦用て笑を爲す。說くらく「佛の殊變思議すべからず、云何、汝の卑陋凡細を以て大法

【三一】特叉尸利。梵名(Takṣaśilā)、西名(Tiki-tan-śi-li)とす。
【三二】因陀婆彌。西名、(Indra-bumi)とす。
【三三】譸張。いつはり。

皆來り奉迎す。諸人後日佛を求めて在らず、實を問ひ乃ち毘舍離に至り給ふと知る。六師の徒[一四]興張し唱言すらく「久しくして瞿曇の智術單淺を知る。諸人猶豫す。我が言を信ぜずば期を刻し術を捔す、自らを省て歴然逃げ去り毘舍離に至る」と。諸の六師の輩、貢高、轉盛なり。各共に相ひ率ゐ「當に必ず追窮すべし」と。時に、洴沙王、供具を辦具へ五百の乘車に滿し王群臣十四億衆と與に各糧食を辦じ悉く佛に隨つて往く。前後[一五]絡繹して毘舍離に集る。六師、復往きて諸の律昌に白さく「我曹等此の瞿曇と神力を捔試し實性を談講するを聽せ。若し聽されなば來る七日を期せよ」と。時に諸の律昌復往きて佛に白さく「六師の群、迷うて自ら道有りと謂ひ如來と共に神力を捔せむと求む。唯願くば世尊よ、神を垂れ降伏せよ」と。佛、又告げて曰く「我、自ら時を知る」と。諸の律昌臣民を合率して嚴治し設辦す。洴沙王に比が如し。皆悉く企慕ひぬ。望むに明日に在り。佛、衆僧と拘睒彌に至り給ふ。拘睒彌王名を[一六]優塡と曰ふ。諸の群臣を將ゐ亦來り奉迎す。毘舍離の人明晨佛を問ふ、云く「佛已に拘睒彌國に往き給ふ」と。六師、是を聞き高心遂に盛なり。徒を合し衆を聚め規として必ず窮逼せむ、諸の律昌輩、供具を辦致へ五百の車載用つて供養を俟つ。將ゐて國人七億の衆を領べ幷びに洴沙王と拘睒彌に集る。佛と六師と共に神力を捔するを觀むと前後道に滿ち絡繹として至る。六師、既に到り、優塡王に見え事情を騰說し上の辭の如し、「沙門、自ら省み內に顧恃無ければ屢々逃避し[一七]要勒すべからず。王、[一八]尅定して我と試ましむべし」と。優塡王佛に白し六師の辭を說き「世尊よ、寧ろ與に之と捔すべきや不や」と。佛、復告げて言く「我、自ら時を知る」と。優塡王、佛の其の國に在りて試み給ふを望み、嚴治し設辦す。洴沙王の比の如し。日、會とすべきに到る。佛、復捨てゝ去り給ふ。比丘僧と與に[一九]越祇國に至る。越祇國王[二〇]屯眞陀羅諸の人民を將ゐ來りて世尊を迎ふ。拘睒彌人明日乃ち問ふ。云く「佛已に去り越祇に向い給ふ」と。六師の徒衆尋いで其の後を逐ふ。時に優塡王、八億衆幷びに洴沙等諸國

【一四】興張。勢盛んに主張すること。
【一五】絡繹。往來の絕えざる貌。
【一六】優塡王(Udayana)。優陀延、拘睒彌國(Kauśāmbī)の王。
【一七】要勒。おさへること。
【一八】尅定。必ずと約し定めること。
【一九】越祇國。西本、(Yar-gyi)とあり、跋耆(Pali. Vajji)國のこと。
【二〇】屯眞陀羅。西名、(Śun-tsin-las)。

恚を懷き各閑靜に至り奇術を求學す。天魔〔九〕波旬其の情法を懼れ惡邪の毒を宣布すること能はず、卽ち下りて六師の形を化作し一人の前に於て五人の術を現ず。空中を飛行し、身水火を出し、身を分て體を散じ百種に現じ變ず。愚癡の徒、更に相ひ恃賴す。前に辱しめられ供養を亡失するを忿り六師悉く集る。各共に議して言く「我曹技能翟曇に減ぜず前の一辱に緣り衆心離散す。比來、衆師神術變を顯はし今奇妙を祭するに彼を任伏するに足らむ。當に國王に詣り勝負を決せむと求むべし」と。議を作し已り定まる。卽ち王の所に詣り自ら智能・神化・靈術を說き「願くば沙門と共に奇變を〔一〇〕講格せむ、之を對試するの後、可・否自ら現はれむ」と。王之を笑ひて曰く「汝等何の癡ぞ、佛德、廣大、神足礙り無し、螢の火を以て日と光を諍ひ、牛跡の水巨海と大を比し、〔一一〕野干の微師子と猛を捔し、蟻垤の堆須彌と高さを等とせんと欲すなり。大小の形昭然として別有り、迷惑して高き企なり、何の愚の劇しきや」と。六師復、言く「事を驗すは後に在り、大王、未だ我等の殊變を見ず、是偏心にして謂しめ彼の大を望むなり。試を決すの後巨・細自ら定まらむ」と。王、又告げて曰く「試みを欲せば試む可し。但、恐くは汝等自ら毀辱を招かむ、正に佛と神足を捔かしめば當に我曹をして具さに異變を覩せしむべし」と。六師、言ひて言く「後七日を期し願くば王よ、講試の場を平治せよ」と。六師去りし後王卽ち嚴駕して佛所に往至り事を以て佛に白さく「六師、〔一二〕紛紜し講術を得むと欲す。理を以て呵語するも其の意息まず唯願くば世尊よ、其の神力を奮ひ邪惡を化伏せよ。爾らば乃ち善に從がはむ。因りて我曹をして其の變を覩ることを得せしめ給へ」と。佛、洴沙に告げ給ふやう「我、自ら時を知る」と。洴沙、謂く「佛よ、共に神を捔すべし」と。卽ち臣吏に勅し博處を平治じ床座を安施し諸の幢幡を竪て莊嚴し交絡す。極めて麗妙ならしむ。其の會日に當り一切の企望みぬ。

時に、如來及び衆僧王舍城より毘舍離に往き給ふ。毘舍離中の諸の〔一三〕律昌の輩諸の人民と與に

【九】波旬。梵語(Pāpīman)、惡魔の名、殺者・惡者と譯す。

【一〇】講格。きはめあふこと。

【一一】野干。狐の異名。

【一二】紛紜。みだるゝ貌。

【一三】律昌。西本、(Li-tsa-byi)とあり(Licchavi)の音譯なり、普通に離車とうつし、毘舍離の刹帝利種の稱なり。

して瞿曇を請ぜよと云ふ。今爲めに會を設く。日時至らむと欲し如何にして來らず」と。王、弟に告げて言く「汝、躬自ら往請すること能はずと雖も一人を遣はし時の到るを白すべし」と。王弟教を受け人を遣はし白す。時に佛、大衆と與に會所に來至り給ふ。諸の六師先に上座に坐す。佛、衆僧と與に次第して坐し、佛、神足を以て此の六師をして其の徒類と合し忽ち下に行いて在らしめ給ふ。六師、情恥ぢ各起つて坐を移す。坐定り自ら見るに還び其の下に在り、是の如く再三坐を移し上に就く。猶自ら身を見るに、乃ち下末に在り。更に力能無し。俛仰して坐す。檀越水を行す、上座の前に至る。佛、施主に語るらく「先に汝の師に與へよ」と。水を持ち師の前に往く。卽ち甖を擧ぐ、甖の口自ら閉ぢ其の水下らず。還び佛前に往く。佛より次と作す。爾れば乃ち水出でて、咸手を洗ふことを得たり。手を洗ふこと既に竟る。次に當に呪願すべし。檀越食を捉り上座の前に在り、佛、檀越に語り給ふやう「本我が爲にせず、汝の師の前に往き自ら呪願せしめよ。」教を受け尋いで往き、六師の所に至る。六師口噤み言を出すを得ず。但、各手を擧げ遙に佛を指す。佛、便ち呪願し給ふに梵音の聲暢ぶ。呪願既に竟る。次に食を行ふべし。上座に隨つて次と作し之を付へむと欲す。佛、又告げて言く「汝の師に與へよ」と。卽便ち食を持ち六師に從ひ付ふ。食皆忽ち上りて虛空の中に住す。各其の上に當り取り得べからず。食を行し佛幷びに僧と遍く訖り、食乃ち還び下り各其の前に在り。佛、衆僧と一切の食訖り澡漱ぎ還び坐す。次に說法すべきなり。佛、檀越に語り給ふやう「汝の師をして說かしめよ」と。尋いで六師を請ず。六師、復噤む。但各同時に手を擧げ佛を指す。是に於て如來廣く衆會の爲に柔軟の音を出し法性を暢演し義理を分別し衆情に應適せしめ給ふ。佛の說法を聞き咸開解を得。洴沙王の弟法眼淨を得其の餘の衆人或は初果を得第三果に至る。出家し漏を盡し無上心を發し不退地に住す。心の慕ふ所に隨ひ悉く其の願を得、各乃ち眞を識り三寶を信敬す。六師を蔑賤し捨てゝ供を承げず。是に於て六師甚だ惱

著け、五熱身を炙り苦行を以て道となすもの。五、迦羅鳩馱迦旃延(Kakuda katyāyana)、諸法は亦相あり亦相なしと計し、物に應じて見を起すもの、若し人問て有なりやと言へば無と答へ、無なりやと言へば有と答ふ。六、尼犍陀若提子(Nirgranta J'atiputra)、苦樂罪福盡く前世に由る、必ず當に償ふべし今道を行ふも能く斷ずる所に非ずと計するもの。已上の六師は佛と世を同じくす。

【五】先素。以前と云ふに同じ。

【六】瞿曇。梵語(Gautama)釋種の姓。以て釋尊の呼名とす。

【七】俛仰。うつぶくこと。

【八】澡漱。うがひすること。

り。時に五夜叉各自器を持ち來りて血を承け飲む。血を飲み飽滿し咸王恩に賴る。欣喜量り無し。王、復告げて曰く「汝、若し充足せば十善を念修せよ、我、今身血を以て汝の飢渴を濟ひ安穩を得しむ。後、成佛の時、當に法身を戒・定・慧の血を以て汝の三毒諸欲の飢渴を除き涅槃の安穩の處に安置すべし」と』。

阿難よ、爾の時の慈力王を知らむと欲せば今の我が身是れなり。五夜叉とは今の憍陳如等五比丘是れなり。我世世誓願し先度すべきを許しぬ。是の故に我が初めの說法を聞き便ち解脫しぬ。

時に、尊者阿難及び諸の衆會佛の說き給ふ所を聞き咸敬仰を增し歡喜し奉行せり。

十四、[一]六師を降すの品、第十四

是の如く我聞きぬ。一時、佛、王舍城の竹園の中に在し千二百五十の比丘と倶なりき。

時に、[二]洴沙王、已に初果を得、信敬の心復隆厚なり。常に上妙の[三]四事の須ゆる所を設け佛及び比丘僧を供養す。人と善を同じくして樂しみ志勸導を兼ぬ。國に[四]六師有り富蘭那等[五]先素に世に出で邪見・倒說し民庶を誑惑す。迷冥の徒邪教に信服す。衆類廣布し惡黨遍滿す。時に王の弟有り、六師を敬奉し邪倒に信惑す。謂く「其の道有り」と。家の貨を竭し供給し之を與へたり。佛日初て出で慧流鑒て潤ふ。心の拔擢無き(所に)は重網に沒在す。兄王洴沙甚だ之を愛重し慇懃に方便し曉して佛を奉ぜしむ。弟、邪理に執じ王教に從がはず。數數勅して佛を請じ供養せしむ。弟、兄の王に白さく「我、自ら師有り、復往きて[六]瞿曇に奉事する能はず、然れども王の教理有り違ふこと有る無し。當に大會を設け來衆を限らざるべし。若し其れ自ら至らば我當に食を與ふべし」と。王に許ふの後供具を辨設し饒く床坐を敷く。事訖り會を設く。人を遣はし往喚す。六師の徒尋いで皆來集し上位に坐す。佛及び僧自ら來至せざるを怪しむ。卽ち往きて王に白さく「王、前に數數勅

【一】降六師品。西今、No.13.
【二】洴沙王。梵名(Bimbisāra)、頻婆沙羅王のこと。佛在世摩竭陀國王の名。
【三】四事。衣服・飲食・臥具・湯藥或は房舍・衣服・飲食・湯藥となり。
【四】六師。一、富蘭那迦葉(Pūraṇa kāśyapa)、一切法は斷滅性空にして、君臣父子忠孝の道なしと立つるもの。二、末伽梨拘賒梨子(Maskari Gośālīputra)、衆生の苦樂は因緣に由らず自ら然るのみと計するもの。三、刪闍夜毗羅胝子(Sañjaya vairaṭṭiputra)、道を求めざるも生死の劫數を經る間自ら苦際を盡すと計す。四、阿耆多翅舍欽婆羅(Ajita-keśakambala)、身に弊衣を

時に、諸の比丘、佛の說き給ふ所を聞き未曾有と歎じ歡喜し奉行せり。

十三、[一]慈力王、血施すの品、第十三

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇洹中に在し止まりき。

爾の時、阿難、中食の後に於て林間に坐禪す。而して自ら思惟ふやう「如來世に興り甚だ奇特と爲す。衆生の類皆安樂を蒙むる」と。又思惟ふやう「憍陳如等の五尊比丘何の善本を種え何の因緣に依り法門初めて開け而して先に入ることを得、法鼓始めて振ひ獨り先に聞くを得、甘露の法降り特に先に潤ひを蒙るや」と。是の事を念じ已り坐處より起ち佛所に往至き、具に所念を以用て佛に白す。佛、之に告げて曰く「憍陳如等先世我に於て實に因緣有り。過去世の時、我れ身血を以て其の飢渴に充て、安穩を得しむ。是の故に今身先に我が法を得て用て解脫を致せり」と。賢者・阿難、重ねて佛に白して言さく「過去血を以て其飢乏を濟ふとは其の事云何、願くば具に開示し幷に衆會咸解了を得せしめ給へ」と。

佛之に告げて曰く『過去久遠阿僧祇劫に此の閻浮提に大國王有り、[二]彌佉羅拔羅と名づく（晉に慈力と言ふ。）閻浮提の八萬四千の小國王を領す。二萬の夫人、一萬の大臣有り、王慈悲有りて[三]四等心を具へ恒に一切を愍み未だ曾つて懈厭せず。常に[四]十善を以て民庶を教誨す。四方王の化治する所を欽慕す。國土安樂にして慶賴せざるは莫し。諸の疫鬼の輩恒に人の血氣を噉ひ用て自ら濟活す。爾の時の人民身・口・意を攝め敎く十善に從ひ衆邪、惡疫敢て侵近する能はず。[五]飢羸・困乏し瘦悴して力無し。時に五夜叉王の所に來至り「我等の徒輩人の血氣を仰ぎ身命を全くし得るなり。王の敎導に由り咸十善を持つ。我等是より復飮食無し。飢渴頓乏し活を求むるに路無し。大王、慈悲豈矜愍せざらむや」と。王、是の語を聞き甚だ哀傷を懷く。卽ち自ら脈を放ち身を刺すこと五處な

【一】慈力王血施品。西本、No. 12. Jātaka-mālā viii.

【二】彌佉羅拔羅。西譯(Byams-pahi stobs)(Skt. Maitri-bala, Mitra-bala.)。

【三】四等心。慈・悲・喜・捨の四無量心を云ひ、平等に此の心を起す故に四等心と云ふ。

【四】十善。一、不殺生、二、不偸盜、三、不邪淫、四、不妄語、五、不兩舌、六、不惡口、七、不綺語、八、不貪欲、九、不瞋恚、一〇、不邪見の十を云ふ。

【五】飢羸。うえつかるゝこと。

「忍辱を修行す」と。王、卽ち劍を拔きて之に語りて言く「若し當に忍辱ならば我汝を試み、能く忍ぶや不やを知らんと欲す」と。卽ち其の兩手を割く。而して仙人に問ふ。「猶忍辱と言ふ」。復、其の兩脚を斷つ。復、之に問ふ。言く故に忍辱と言ふ。次に其の耳・鼻を截る。顏色變ぜず、猶忍辱と稱ふ。爾の時、天地六種に震動し。時に仙人の五百の弟子虛空を飛びて師に問ふて言く「是の如き苦を被り忍辱の心忘失せざるや」と。其の師答へて言く「心、未だ變易せず」と。王、乃ち驚愕し、復、更に問ふて言く「汝、忍辱と云ふ、何を以て證と爲す」と。仙人、答へて曰く「我、若し實に忍ならば至誠虛しからず、血當に乳と爲り、身當に還復すべし」と。其の言已に訖り血尋いで乳と成り平完すること故の如し。王、忍證を見て倍恐怖を懷く。「咄！我無狀大仙を毀辱す。唯、哀を垂れ我が懺悔を受けられよ」と。仙人告げて曰く「汝、女色を以て刀にて我が形を截る。吾、忍ぶこと地の如し、我後佛と成り先に慧刀を以て汝の〔八〕三毒を斷たむ」と。爾の時、山中の諸龍・鬼神・迦梨王が忍辱仙人を〔九〕枉ぐるを見て各懊惱を懷き大雲霧を興し雷電霹靂し彼の王と及び其眷屬を害せむと欲す。時に仙人仰いで語るやう「若し我が爲めになすならば傷害を造す莫れ」と。時に迦梨國王懺悔の後常に仙人を請じ宮に就きて供養す。爾の時、異梵志の徒衆千人有り、王、羼提波梨を敬待するを見て甚だ妬忌を懷き其の屛處に於て坐し塵土糞穢を以て之を坌る。爾の時、仙人、其の是の如きを見て卽時誓を立つ。我、今、忍を修し〔一〇〕群生の爲めにす。行を積み休まず後會、成佛せむ。若し佛道を成ぜば先づ法水を以て汝の塵垢を洗ひ汝の欲穢を除き永く清淨ならしめむ」と』

佛比丘に告げ給ふやう「爾の時の羼提波梨を知らむと欲せば則ち我が身是れにして、時の王迦梨及び四大臣とは今の憍陳如等五比丘是れなり。時の千梵志我に塵坌せし者は今の鬱毘羅等千比丘是れなり。我、爾の時に於て彼の忍辱に依りて先に度すべきを誓ひしに緣る。是の故に道成り此等の衆先に度苦を得たり。

【八】三毒。貪欲・瞋恚・愚癡の三つの煩惱のこと。

【九】枉。大正本「狂」に作るは誤植。

【一〇】群生。衆生といふに同じ。

爾の時、世尊、初始て道を得、[二]阿若憍陳如等を度し、次いで鬱毘羅迦葉兄弟千人を度し給ひぬ。人を度すること漸く廣く脫を蒙る者衆し。時に於て羅閱祇の人欣戴量り無し。讃嘆せざるは莫し。「如來の出世は甚だ奇特と爲す。衆生の類咸度苦を蒙る」と。又、復、憍陳如等及び鬱毘羅衆を歎美す。「諸の比丘大德、宿に如來と何の因緣有り法鼓初めて震ひ特に先に聞くを得、甘露の法味獨り先に服し甞む」と。時に諸の比丘諸の人民の稱宣する所を聞き卽ち具に事を以て往きて世尊に白す。佛、之に告げ給ふやう「乃往過去此の衆の輩と共に大誓願有り。若し我が道成ぜば當に先に之を度すべし」と。諸の比丘聞き已り復、佛に白して言さく「久しく共に誓願す。其の事云何 唯、哀愍を垂れ願くば解說を爲し給へ」と。

佛、諸の比丘に告げ給ふやう『諦かに聽け、諦かに聽け善く之を思念へよ、乃往久遠無量無邊阿僧祇劫に此の閻浮提に一大國有り、波羅㮈と名づく。當時の國王、名を迦梨と爲す。爾の時、國中に一大仙士有り[三]羼提波梨と名づく。五百の弟子と與に山林に處り忍辱を修行す。時に國王、諸の群臣・夫人・婇女と與に山に入り遊觀す。王、時に[四]疲懈れ、因つて臥し休息す。諸の婇女の輩王を捨て遊行し諸の花林を觀、羼提波梨、端坐思惟するを見て敬心內に生じ、卽ち衆花を以て其の上に散ず。因つて其の前に坐し說く所の法を聽く。王、覺めて顧望するに諸女を見ず。四大臣と與に行き共に之を求め、諸の女の輩仙人の前に坐するを見る。尋いで卽ち問ふて曰く「汝、[五]四空定に於て悉く得と爲すや未(得と爲す)や」と。答へて言く「未だ得ず」と。又復問ふて曰く「[六]四無量心、汝復得たるや、未(得なる)や」と。答へて曰く「未だ得ず」と。王、又問ふて曰く「四[七]禪事に於て汝得と爲すや未(得なる)や」と。猶、答へていふ「未だ得ず」と。王、卽ち怒りて曰く「爾所の功德に於て皆未だ有らずと言ふ。汝は是れ凡夫なり、獨り諸女と與に此の屛處に在り、云何が信ずべき」と。又、復問ふて曰く「汝、常に此に在る。是れ何人と爲す。何事を修設する」と。仙人、答へて曰く

【二】 阿若憍陳如。西名(Kaunti-nya)梵名(Aj ata kaundi-nya)、初轉法輪により得道せし五比丘の上首。

【三】 羼提波梨。西名(Bryod-pa-can)。

【四】 疲懈。つかれおこたること。

【五】 四空定。又四無色定と云ふ。一に空無邊處定、二に識無邊處定、三に無所有處定、四に非想非々想處定を云ふ。

【六】 四無量心。一に慈無量心、二、悲、三、喜、四、捨無量心なり。此四心普く無量の衆生を緣じ、無量の福を引けばかく名づく。

【七】 四禪事。三種禪中の第二出世間禪の四種なり。一に觀禪、二、練、三、薰、四、修禪の四を云ふ。

天七寶を雨らし。我が家内を滿す」と。相師、答へて曰く「是の兒の福德、當に爲めに號を立て勒那提婆と字すべし。(晉に寶天と言ふ)と。兒、年轉大なり、才藝博通なり。佛の神聖を聞くに奇德雙び少し。心に渴仰を懷き出家を貪欲す。卽ち父母に辭ひ佛の所に往詣き頭面に禮を作し佛に白して言さく「唯、願くば世尊よ、我に出家を聽し給へ」と。佛、卽ち聽許し給ふ「善く來れり、比丘よ」と。鬚髮自ら墮ち法衣身に在り。佛爲めに法を說き卽ち羅漢を得たり。阿難佛に白さく「不審なり、世尊よ、此の寶天比丘、本何の福を作し生るゝ時に當り天は衆寶を雨らす。衣食自然に乏短有ること無しや」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「過去世の時、毘婆尸佛世に出現し衆生を度脫し給ふ。計り數ふ可らず。爾の時、衆僧村落を遊行す。時に彼の村中諸の居士有り。共に衆僧を請じ種々に供養す。時に貧人有り。喜心を懷くと雖も家に財寶供養の具無し。便ち一把の白石〔三〕圓珠を以用つて衆僧に散じ大誓願を發しぬ』と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の貧人珠を供養する者は今此の寶天比丘是れなり。其の過去に信敬の心を用つての故に華を採り僧に散じ至心求願することに由り九十一劫所生の處身體端政、意に須ゆる所有れば飲食、床臥の具を得むと欲し尋むる時念の如く自然にして至る。斯の福に緣り自ら得道を致せり。是の故に阿難、一切の衆生小施を輕んじ以て福無きを爲すこと莫れ。猶し、華天の如く今悉く自ら得たり」と。

爾の時、阿難及び諸衆會佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

十二、〔一〕羼提波梨の品、第十二

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閱祇竹園林中に在し止まりき。

〔二〕勒那提婆。西名(Lhahi rin-chen)(Skt. Devaratna)。

〔三〕圓珠。宋・元・明本による。まるいたま。

〔一〕羼提波梨品。西本No.11 (Pāli. Khanti-vādi-jātaka. 313. Jātaka-mālā. xxviii.)。

遂修し羅漢を逮得せり。爾の時、阿難、斯の事を見已り佛の所に往至り長跪して白して言さく「世尊よ。是の華天比丘、本何の福を植えて是の如く自然に天華を得又能く床座飲食を化作するや。世尊よ、當に此の疑ひを決散し給へ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「知らむと欲せば善く聽けよ。」と『過去に佛有り毘婆尸と名け世に出現し衆生を度脫し給ふ。時に諸の衆僧聚落に遊行し諸の豪族に到る。皆悉く供養す。時に一人有り貧しく錢財無し。僧を見て歡喜し、供養するもの無きを恨む。卽ち野澤に於て衆の草華を採り用つて衆僧に散じ、至心に敬禮し、是に於て去る』と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の貧人僧に華を散ずる者今此の華天比丘是れなり。其の過去に信敬の心を用つての故に華を採り僧に散じ至心に求願するに由り九十一劫所生の處身體端政なり。意に須ゆる所有り飲食・床臥の具を得むと欲せば尋むる時念の如し。自然にして至る。斯の福に緣り自ら得道を致せり。是故に阿難、小施を輕んじ以て福無きを爲すこと莫れ。猶天華の如く今悉く自ら得たり」と。

爾の時、阿難、及び諸の衆會佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

十一、[一]寶天　因縁品、第十一

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、長者有り、一人の男子を生む。爾の時に當り天七寶を雨らす。其の家内に遍く皆積滿せしむ。卽ち相師を召し此の兒を占相せしむ。相師覩已り其の奇相を見、長者に答へて曰く「相を見るに殊に特る」と。長者聞き已り心に歡喜を懷き、卽ち相師に語るやう「當に爲めに字を立つべし」と。相師、問ふて曰く「此の兒生れし時何の瑞應有りしや」と。長者答へて曰く「此の兒生れし時

【一】寶天因縁品。西本、No. 10.

て[五]道を得ざらしむるも未來の果報亦復量り無し。是の故に阿難よ、皆布施を精勤し業と爲すべし」と。爾の時、阿難、及び衆會の者佛の說き給ふ所を聞き皆悉く信解す。須陀洹果を得る者、斯陀含を得るもの、阿那含を得るもの、阿羅漢を得る者有り、無上正眞道意を發す者有り。復、不退地に住することを得る者有り。

一切の衆會、佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

十、[一]華天、因緣の品、第十

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在し、大比丘衆千二百五十人と倶なりき。

爾の時、國內に豪富の長者有り、一人の男兒を生む。面首端政にして其の兒生み已りて、家內に自然に天、衆華を雨らし舍內に積滿す。卽ち此の兒に字し[二]弗波提婆と名づく。(晉に花天と言ふ)。兒の年轉た大なり。佛の所に往至き、佛の顏容相妙比ひ無きを見、見已つて歡喜し、心に自ら思惟ふやう「我生れて世に處し聖尊に値ふことを得たり。今、當に佛及び諸の衆僧を請すべし」と。卽ち前みて佛に白して言さく「唯、願くば世尊よ、衆僧と明日意を屈し鄙家に[三]臨適し少蔬食を受け給へ、因つて福慶を見む」と。佛、其の[四]根を知り卽時請を受け給ふ。時に華天、還りて其の家に至り、明日、食時に佛、衆僧と其の家に往至り給ふ。華天、卽ち寶の床座を化作し其の舍內に遍くし整設し嚴飾す。佛及び衆僧卽ち其の座に坐す。華天、須ひむと欲する種々の飲食其の人の福德に依りて自然にして辦ず。佛、衆僧と食し已り鉢を攝め、廣く華天の爲めに具に諸法を說き給ふ、華天の合家須陀洹を得たり。時に華天卽ち父母に辭ひ出家し佛弟子と爲らむと求索む。父母之を聽す。卽ち、佛の所に至り佛の足を稽首し比丘と作り佛教を稟受せんことを求む。佛、道に入るを聽し、讃えて言く「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら墮ち袈裟を身に著け卽ち沙門と成る。佛教を

【五】道。西本「阿羅漢を得ざるも……」とあり。道果の意。

【一】華天因緣品。西本 No. 9.

【二】弗波提婆。西名(Lh hi metog.)(Skt. Devapuspa)、漢譯弗波は弗沙の誤りか。

【三】臨適。行きのぞむこと。

【四】根。機根のこと。心だて。

りと。卽ち兒の兩手を披き其の相好を觀る。二つの金錢兒の兩手に在るを見たり。父母歡喜し卽便ち收め取る。取り已りて故の處に續いで復更に生ず。尋いで更に之を取る。復生ずること故の如し。是の如く懃に金錢を取り藏に滿つ。其の兒の手中未だ曾つて盡くること有らず。兒、年轉た大なり。卽ち父母に白して出家を求索む。父母逆はず、卽便ち之を聽す。爾の時、金財、佛の所に往至き頭面に禮を作して佛に白して言さく「唯、願くば世尊よ、當に憐愍みて我に出家を聽し、道次に在るを得せしめ給へ」と。佛、金財に告げ給ふやう「汝に出家を聽さむ」と。佛の可を蒙り已る。時に於て金財、鬚髮を剃り身の袈裟を著け便ち〔二〕沙彌と成る。年已に滿足し大戒を受くるに任ず。卽ち、衆僧をして當に〔三〕具足を受けしむ。壇に臨み衆僧に次第に禮を爲す。其の禮を作す時兩手地に拍つ。手拍つ處に當り二つの金錢有り、是の如く次第に一切に禮を爲す。禮する所に隨ひ皆金錢有り、戒を受け已竟る。精懃し修習して羅漢道を得たり。阿難、佛に白さく「不審なり、世尊よ、此の金財比丘本何の福を造り生れて已來手金錢を把る。唯、願くば世尊よ、當に開示し給へ」と。

佛、阿難に告げ給ふやう「汝、當に善く思すべし、我、今、之を說かむ」と。阿難、對へて曰く「是の如く諾ふ、當に善く聽くべし」と。佛、言く「乃往過去九十一劫の時世に佛有り〔四〕毘婆尸と名づく、世に出現し政法敎化し衆生を度脫すること稱て數ふ可らず。佛、衆僧と國界を遊行し給ふ。時に諸の豪富長者の子等飯食を施設し彼佛及び弟子衆を供養す。爾の時、一人の貧人有り財貨に乏しく常に野澤に於て薪を取り之を賣る。値ふ時薪を取り賣りて兩錢を得たり。佛及び僧の王家の請を受け給ふを見て歡喜し敬心せり。卽ち兩錢を以て佛及び僧に施し、佛、此の人を愍み卽ち爲めに之を受け給ひぬ』と。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時、貧人此の二錢を以て佛及び僧に施すの故に九十一劫恒に金錢を把り財寶自ら恣にす。窮盡有ること無し。爾の時の貧人とは金財比丘是れなり。正に其の人をし

【二】沙彌。梵語(Srāmaṇera)勤策男と譯す。大僧の爲に勤めて策勵せらるればなり。男子の出家にして十戒を受けしもの丶通稱。

【三】具足。此處では具足戒のこと。比丘・比丘尼の當に受くべき戒にて別解脫戒中の至極なり。比丘は二百五十戒、比丘尼は五百戒なり。

【四】毘婆尸。梵名(Vipaśyin)過去七佛の第一、勝觀と譯す。

れ憎むべきこと乃し、是の如きに至る」と。時に辟支佛、數其の家に至り其の供養を受け給ひ、世に在ること久しきを經て涅槃に入らむと欲し、其の檀越の爲めに種々の變を作し、虚空に飛騰し身より水火を出し、東に踊り西に沒し、西に踊り東に沒す。南に踊り北に沒し、北に踊り南に沒す。虚空に坐臥し種々に變現す。咸彼の家をして神足を覩見せしむ。卽ち空より來り還りて其の家に至る。長者見已り倍歡喜を懷く。其の女卽時過を悔ひ自責すらく「唯、願くば尊者よ、當に原恕〔一〇〕し給へ。我れ前に惡心にして罪釁〔一一〕厚に過ぐ。幸に懷くこと在らず、罪有らしむる勿れ」と。時に、辟支佛、其の懺悔を聽し給ふ。

佛、大王に告げ給ふやう「爾の時の女とは今の王女是れなり。其れ爾の時、惡不善の心にて賢聖の辟支佛を毀呰するに由るが故に自ら口の過を造る。是に於て以來常に醜形を受く。後に神變を見て自ら悔を改むるが故に還び端正を得、英才群を越え能く及ぶ者無し。辟支佛を供養するに由るが故に世々富貴にして緣りて解脱を得たり。是の如く大王よ、一切の衆生有形の類は身口を護るべし、妄りに非と爲し人を輕呵する勿れ」と。爾の時、王波斯匿及び諸の群臣、一切の大衆、佛の說き給ふ所の因緣果報を聞き皆信敬を生じ自ら佛の前に感じ是の信心を以て初果を得（る者あり、）四果に至る者有り、無上平等意を發す者有り、復、不退轉に住することを得る者有り。咸渇仰を懷き敬ひ佛教を奉じ、歡喜し遵承して皆共に奉行せり。

九、〔一〕金財、因緣品、第九

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在し、尊き弟子千二百五十人與倶なりき。
爾の時、城中に、大長者有り、長者の夫人一人の男兒を生む名を金財と曰ふ。其の兒端政にして殊に特れ、世、之に雙ぶもの少し。是の兒、宿世拳手して生る。父母驚き怪み謂らく、之れ不詳な

〔一〇〕原恕。ゆるしゆるすこと。
〔一一〕罪釁。罪をちぬること。
〔一〕金財因緣品。西本No.8 撰集百緣經、No.83 寶手比丘の緣。

ぬ。時に、彼の五人戸を開き内に入り、婦の端正殊に特れ雙ぶもの少きを見て自ら相謂ひて言く「我、此の人を將來し往かざるを怪む。其婦端正乃至是の如し」と。親視已竟り還りて門戸を閉し其の戸鑰を持ち彼の人の所に還り本の帶に繫著す。其の人醒悟し會罷み家に至る。門に入りて婦を見る。端正奇妙なり。容貌挺持て人の中に有ること難し。見已りて欣然たり。問ふやう「是、何人ぞや」と。女、夫に答へて言く「我は是れ汝の婦なり」と。夫、婦に問ふて言く「汝、前に極めて醜なり、今者何に緣りて端正乃ち爾る」と。其の婦具に上事を以て夫に答ふ「我れ、佛に緣るが故に是の如き身を受けたり」と。婦復夫に白さく「我、今意に王と相見ゆるを欲す。汝當に我が爲めに其の意を通ずべし」と。夫、其の言を受け卽ち往きて王に白すやう「女郎、今者來り相見えんと欲す」と。王、女婿に答ふるやう「此の事を道ふ勿れ、急ぎ牢閉すべし、愼しみ出さしむる勿れ」と。女夫、王に答ふらく「何を以て乃ち爾るや。女郎今者、佛の神恩を蒙り已に端政を得天女と異ること無し」と。王、是を聞き已り女婿に答へて言く「審かに是の如くならば速かに往きて將ゐ來れ」と。卽時、嚴車にて女を迎へ宮に入る。王、女身の端政殊に特れたるを見て歡喜踊躍し自ら勝ふる能はず。卽ち勅して駕を嚴にし王及び夫人と女と幷びに女の夫と共に佛の所に至り佛を禮し畢訖り、却きて一面に住す。時に波斯匿王、跪づき佛に白して言さく「不審なり。此の女宿に何の福を植え乃ち豪貴富樂の家に生るや。復、何の咎を造り醜陋の形を受け皮毛麁强、劇しく畜生の如きや。唯、願くば世尊よ、當に開示し給へ」と。

佛、大王に告げ給はく「夫人、世に處し端政と醜陋と皆、宿行の罪福の報に由る。乃往過去久遠の世の時、時に大國有り沙羅㮈と名づく。時に彼の國中大長者有り、財富量り無く家を擧げて恒に共に一辟支佛を供養す。身體麁惡、形狀醜陋、憔悴看ること叵し。時に彼の長者に一人の小女有り、日々彼の辟支佛の來るを見て惡心輕慢なり、呵罵し毀言す。「面貌・醜陋・身皮麁惡なり、何ぞ其

【八】挺持。ぬきんづること。

【九】呵罵。嚴しくのゝしること。

り。王、財貨、一切の須ゆる所を出し女婿に供給し乏短無からしむ。王卽ち拜授して以て大臣と爲す。其の人所有財寶饒益し諸の豪族と共に【六】讌會を爲す。月々更り爲しぬ。會同の時夫婦倶に詣り男女雜會す。共に相ひ娛樂す。諸人來會し悉く皆婦を將ゆ。唯、彼の大臣のみ恒に常に獨り詣る。衆人疑ひ怪しみ、彼の人の婦は儻し能く端正暉赫・曜絶せるか、或は能く極めて醜く顯現すべからざるか。是を以て彼の人故に將ゐ來らず。今、當に計を設け往きて彼の婦を觀るべし」と。卽ち各心を同じくし密に共に相ひ語り酒を以て之を勸め其をして醉臥せしめ。門鑰を解き取りて便ち五人して往きて其の家に至り其の門戸を開かしむ。

爾の時に當り彼の女の心惱み自ら罪咎を責めて是の言を作さく「我、何の罪を種ゑ夫の爲に憎まれ恒に幽閉せらるゝや。闇室に處在り日月と及び衆人とを覩ず」と。復、自ら念言ふやう「今、佛世に在り、衆生を潤益し苦厄に遭ふ者は皆過度を蒙むる」と。卽便ち至心に遙に世尊を禮し「唯、願くば愍みを垂れ我が前に到り暫し敎訓せられよ」と。其の女、精誠、敬心、純篤なり。佛、其の志を知り卽ち其の家に到り其の女の前に於て地中より踊り出で、紺髮の相を現じ女をして之を見せしめ給ふ。其の女頭を擧げ佛髮の相を見、歡喜の情の故に敬心極めて深し。其の女の頭髮自然に細軟にして紺靑の色の如し。佛、復面を現し給ふ。女、之を見るを得たり。見已りて歡喜し。面復端正なり。惡相の麁皮自然に化して滅す。佛、復身を現し給ふ。【七】齊腰以上金色晃昱し女をして之を見せしむ。女、佛身を見て益増歡喜し。歡喜を用つての故に惡相卽ち滅し、身體端嚴にして猶し天女の如し。奇姿世を蓋ひ能く及ぶ者無し。佛、女を愍むの故に盡く其の身を現し給ふ。其の女諦察し目曾つて眴せせず、歡喜踊躍し自ら勝ふること能はず。其の女盡く身亦皆端正にして、相好凡に非ず。世に之れ希有とするところなり。惡相悉く滅し遺餘有ること無し。佛爲めに法を說き給ひ、卽ち諸惡を盡し時に應じて須陀洹道を逮得したり。女、已に道を得て佛、便ち滅し去り給ひ

【六】讌會。酒もりのあつまり。

【七】齊腰。ひとしくとゝのへる腰（こし）。

卷の第二

八、波斯匿王の女金剛の品、第八【一】

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、波斯匿王の最大夫人名を摩利と曰ふ。時に一人の女を生む。波闍羅【二】と字す。（晋に金剛と言ふ）。其の女の面貌極めて醜惡と爲す。肌、體麁澁にして猶駝皮の如く頭髮の麁强猶し馬の尾の如し。王、此の女を觀て一つも喜ぶ心無し。便ち宮內に勅すらく「意を懃にし守護し外人をして之を見ることを得しむる勿れ。所以は何ぞ。此の女の醜形人に似ずと雖も然も是れ末利夫人の生む所なり。此れ醜惡と雖も密に人を遣はして之を護養すべし」と。女、轉大なり。當に嫁くべき處に任す。時に王愁憂し餘の方計無し。便ち、吏臣に告ぐるやう「卿、往きて本是れ豪姓・居士種なる者今若くして貧乏・錢財無き者を推求め便ち將ゐ來るべし」と。吏、卽ち敎の如く、卽ち往きて推覓め一人の貧窮の豪姓の子を得たり。吏、便ち之を喚び將ゐて王所に至る。王、此の人を得共に屛處【三】に至り具さに情狀を以て彼の人に向つて說くやう「我に一女有り面狀醜惡なり、嫁する處を求むと欲して未だ儔類【四】有らず。聞く、卿豪族なりと。今者貧と雖も當に相ひ供給すべし、幸に卿逆はず當に之を納受すべし」と。時に長者の子、長跪して白して言さく「當に王勅を奉ずべし、正に大王狗を以て賜らむるも我亦當に受くべし、何ぞ況んや遺體の女、今設し賜はらば命を奉じて之を納れむ。」王、卽ち女を以て彼の貧人に妻す。爲めに宮殿・舍宅・門閤【五】を起し七重に有らしむ。王、女夫に勅するやう「自ら戶鑰を捉り若し出で行かむと欲すも而も自ら之を閉ぢよ我女醜惡世に未だ有らざる所なり。外人をして面狀を覩見せしむること勿れ」と。常に門戶を牢し幽閉して內に在

【一】波斯匿王女金剛品。西本、No. 7 撰集百緣經、No. 79 雜寶藏經、No. 21。
【二】波闍羅、西名(Rdo-rje) (Skt. Vajira)。
【三】屛處。物蔭のこと。
【四】儔類。なかま、同類。
【五】閤。くゞりど。

る者、〔一〇〕阿那含を得るもの〔一一〕阿羅漢を得る者有り。無上正眞道を發す者有り〔一二〕不退地に住する者有り。

一切の衆會皆大に歡喜し頂戴奉行せり。

【一〇】阿那含。梵語(Anāgāmi)不來・不還と譯し再び欲界に還來せざる位なり。
【一一】阿羅漢。梵語(Arhat)殺賊・應供・不生と譯す、一切の思惑を斷じ盡せる聲聞乘の極果なり。
【一二】不退地。菩薩初地の位。

つて之を施す。即ち復化して師子・虎・狼と作り、來り之を噉はむと欲す。其の兒自ら念ふやう「此の諸の禽獸我を食はむと欲せば我が身の餘殘の骨肉・髓・腦悉く以て之を施さん」と。心に歡喜を生じ悔恨有ること無し。爾の時、天帝、其の志を執じ心移轉ざるを見て復釋身に還りて其の兒の前に住して之に語りて曰く「汝の慈孝の如きに能く身の肉を以つて父母に供養す。是の功德を以用つて何等を求むる。天帝、魔王、梵天王なる耶」と。兒、即ち答へて言く「我、三界の快樂を願求せず。此の功德持用つて佛道を求め一切無量の衆生を度せむと願ふ」と。天帝、復言く「汝、能く身を以て父母に供養し父母に悔恨無きを得る耶」と。其の兒答へて言く「我、今、至誠に父母に供養し悔恨の大なること毛髮の如きことも有ること無し」と。天帝、復言く「我、今、汝を見るに身の肉已に盡き悔恨ざることを言ふ。是の事信じ難し」と。其兒答へて言く「若し悔恨無く我が願ひ成佛すべきにあらば我が身體をして平復故の如くならしめよ」と。言誓ひ已に竟り、身即ち平復しぬ。時に、天帝釋及び餘の諸天異口同音に讃えて言く「善き哉」と。其の兒の父母及び國中の人皆兒の所に到り未曾有と歎ず。時に、彼國王其の太子の作す所の奇特を見て倍恭敬を加へ歡喜量り無し。其の父母及び其の太子を將ゐ宮に入り供養し極めて恭敬を爲し、此の太子を哀む。時に彼の國王躬ら軍馬を將ゐ善住王及び須闍提太子と共に還りて本國に至り羅睺を誅滅す。立ちて大王と作り父子相ひ繼ぐ。其國豐樂にして遂に太平を致せり』と。

佛、阿難に語る給ふやう「爾の時の善住王とは今現に我が父白淨王是れなり。爾の時の母とは現に我が母摩訶摩耶是れなり。爾の時の須闍提太子とは今の我が身是れなり」と。佛、阿難に語り給ふやう「過去世に慈心孝順にして父母に供養し以て身の肉を持つて父母の厄を濟ふ。是の功德に緣り天上・人中常に豪尊に生れ、福を受くること量り無し。是の功德に緣り自ら作佛を致せり」と。爾の時、會する者皆各悲歎し佛の奇特の慈孝の行を感ず。其の中須陀洹を得る者、斯陀含を得

【八】須陀洹。梵語(Srotāpanna)、凡夫を去て初めて聖道の法流に入る位、即ち三界の見惑を斷じ盡せる位なり。預流と譯す。

【九】斯陀含。梵語(Sakṛdāgāmi)、一來と譯し、思惑未だつきず欲界の人間と天界とに一度往來する故なり。

さく「願くば隨待を得む、孤棄せらるゝ莫れ」と。時に王、即便ち婦を將ゐ兒を抱き相ひ將ゐて去る。他國に至らむと欲す。時に二道有り一道は七日、一道は十四日なり。初め惶懼に發し唯、七日の糧を作り調ふ。規として一人を俟つ而已、旣に已に城を出づ。其の心憒亂し乃ち十四日の道を涉る。已に數日を經て糧食乏しく盡き飢餓し[七]迷荒す。餘の方計無し。其の子を憐愛み其の婦を殺し、自らを濟ひ幷びに用て兒を活さむと欲す。婦をして前に在り兒を擔ひて行かしむ。後に於て刀を拔き其の婦を殺さむと欲す。時に兒、迴顧す。父、刀を拔き其の母を殺さむと欲すを見る。兒、便ち叉手し父王を曉して言く「唯、願くば大王よ寧ろ我が身を殺し我が母を害すること莫れ」慇懃に父を諫む。其の母の命を救ひて父に語りて言く「我れを絕殺すること莫れ、稍之を割き食へ、數日を經べし。若し我が命を斷たば肉便ち臭爛し、久しきを經べからず」と。是に於て父母兒の肉を割かむと欲し啼哭懊惱して之を割き食ふ。日々割き食ひ其の肉稍に盡く。唯、骨に在る有るのみ。未だ他國に至らず。飢荒遂に甚だし。父、復刀を捉り其の節に於て解き次第に之を剝ぎて少しく肉を得たり。是に於て父母棄て去るべきに臨み兒自ら思惟ふやう「我が命少く在り、唯願くば父母よ。向に所有肉少し許を以てす、還び用つて施しを見るべし」と。父母違とせず。卽ち三分と作し二分自ら食し餘一分有り、幷びに殘りの肌の肉・眼・舌等悉く以て之を施す。是に於て別れ去りぬ。兒、便ち願を立つるやう「我れ今、身の肉を以て父母を供養す。是の功德を持用つて佛道を求め普く十方一切の衆生を濟ひ衆苦を離れ涅槃の樂みに至らしめむ」と。是の願を發せし時三千世界六反震動し色・欲の諸天而も皆愕然たり。何の故に宮殿動搖するを知らず。卽ち天眼を以て世間を觀じて菩薩身の肉を以て父母に供養し佛道を成じ誓つて衆生を度せむと願ふを見ぬ。是を以つての故に天地大に動く。是に於て諸天皆悉く來り下り、虛空に側塞ぎ、悲泣して淚を墮す。猶し盛なる雨の如し。時に天帝釋來り之を試みむと欲し、化して乞兒と作り、來りて其より乞ふ。手の中の肉を持ち復用

【七】迷荒。まよひすさむこと。

白して言さく「不審なり、世尊よ、過去世の時父母に慈孝し身命を惜まず能く身肉を以て父母の危險の命を濟救す。其の事云何」と。

佛、阿難に告げ給はく「諦かに聽き善く念へよ、我當に之を說くべし」と。阿難「唯然なり、之を善く聽くべし」と。佛、阿難に告げ給ふやう『乃往過去無量無數阿僧祇劫に此の閻浮提に一大國有り特叉尸利と名づく。爾の時、王有り、名を提婆と曰ふ。時に彼の國王に十太子有り各諸國を領す。最小の太子を修婆羅提致と字す。(晋に善住と言ふ)。領する所の國土人民觀望するに最も豐樂と爲す。時に父王の邊、一大臣有り名を羅睺と曰ふ。每に兇逆を懷き反して大王を殺す。大王、已に死し[三]攝正し王と爲る。即ち兵衆を遣はし諸國に往詣し諸の太子を殺す。此の最小なる者鬼神の敬ふ所なり。時に園中に入り行きて觀看せむと欲す。一夜叉有り、地より出て長跪して白して言さく「羅睺大臣、反して父王を殺し諸の兵衆を遣はし汝の諸兄を殺す。今、復、人を遣はし來りて汝を殺さむと欲す。王よ、思ひ計り其の禍難を避く可し」と。時に王之を聞き心用て惶怖れ其の夜に到り、便ち思ひ[四]計校す、而して突き去らむと欲す。時に一兒有り須闍提と字す。(晋に善生と言ふ)。年七歲に至る。端正[五]聰黠にして甚だ愛す可しと爲す。其の王愛念し出でゝ復來り還りて此の兒を抱く、悲泣し歎息す。其の婦、王の入出に惶怖を見、即ち而して之に問ふやう「何ぞ[六]怱々して以て恐怖狀の如きや」と。其の夫答へて曰く「卿の知る所に非ず」と。婦復、之を牽き「我、今、汝と與に身命共に幷び危險相ひ隨ふ。捐捨て給ふことなかれ。今、何事か有りや。當に以て告示し給ふべし」と。其の王答へて言く「我、近く園に入り夜叉鬼有り地より出でゝ長跪し我に白す。羅睺大臣、今惡逆を興し已に父王を殺す。諸の兵衆を遣はし汝の諸兄を殺しぬ。今、亦兵を遣はし當に來り王を殺すべし、宜しく之を避くべし」と。我、是の語を聞き心に恐怖を懷き但、兵衆を恐る。是の如くして來到す。是故に急疾に去ることを得むと欲する耳」と。其の婦長跪即ち王に白して言

【三】攝正。攝政のこと。君に代りて政權を行ふこと。

【四】計校。計(はかりごと)を考へること。

【五】聰黠。さときこと。

【六】怱怱。せわしき貌。

大臣、之を見て欣然量り無し。便ち誓願を立つ「吾が恩に由る故に命全く濟ふことを得たり。我をして世世富貴・長壽・殊勝奇特なること數千萬倍ならしめよ。我をして智德相ひ與共に等しからしめよ』と。

佛、王に告げて曰く「時に彼の大臣一人を救活し道を得しむる者は今の恒伽達是なり。是の因緣に出り所生の處にて命中夭せず。今我に値ふの時[九]應眞を逮致しぬ」と。

佛、此を說き已りて諸の會に在る者信敬し、歡喜し頂受奉行せり。

七、[一]須闍提の品　第七

是の如く我聞きぬ。一時、佛、羅閱祇竹園の精舍に在しき。

爾の時、世尊、而も阿難と與に衣を著け鉢を持ち城に入り乞食す。時に老翁、老母有り、兩目既に盲ひ、貧窮・孤苦・止住する處無く門下に止宿す。唯、一子有るのみ、年始めて七歲なり、常に乞食を行ひ以て父母を養ふ。餘殘酸澁、臭穢惡き者便ち自ら之を食ふ。爾の時、阿難、此の小兒年小爲りと雖も恭敬孝順なるを見て心に愛念を懷く。佛、乞食し已り還りて精舍に到る。爾の時、世尊、諸の大衆の爲めに經法を演說し給へり。阿難、時に長跪叉手し前みて佛に白して言さく「向に世尊と與に城に入り[二]分衞し、一小兒を見ぬ。慈心孝順、盲の父母と共に城の門下に住し東西を乞食し得る所の物、飯食・菓果其の美好なる者先づ以て其の老父母に供養し破敗・臭穢極めて好からざる者は便ち自ら之を食ふ。日々是の如く甚だ愛敬すべし」と。佛、阿難に語るやう「出家・在家・慈心・孝順にして父母を供養するは其の功德を計るに殊勝なること量り難し。所以は何ぞや、我自ら過去世の時を憶念するに慈心孝順にして父母を供養し乃至身肉を以て父母の危急の厄を濟救す。是の功德を以て上は天帝と爲り下は聖主と爲れり。乃至成佛し三界特尊なり、皆斯の福に由る」と。阿難、

【九】應眞。阿羅漢のこと。人天の供養を受くべき眞人。

【一】須闍提品。西本、缺。

【二】分衞。分れて（乞食を）いとなむこと。

む。王今害を加ふ。復傷つくる能はず。事情是の如し。何ぞ酷の甚だしき、願くば顧愍せられ我が道を爲すことを聽せ」と。王、尋いで告げて曰く「汝の出家し聖道を修學することを聽さむ」と。因つて復、之を將ゐ共に佛所に到り世尊に啓白すこと向の事の如し。時に如來、沙門と爲るを聽し給ひぬ。法衣體に在り、便ち比丘と成る。佛、爲めに法を說き給ひ、心、意開暢け羅漢道を成じ三明・六通・八解脫を具す。阿闍世王、尋いで佛に白して言さく「此の恒伽達は先世の時何の善根を種え山に投じて死せず、水に墮して溺れず、毒を食して苦無く、箭射て傷つくること無し。加ふるに聖尊に遇ひ生死を度すことを得たるや」と。

佛、王に告げて曰く『乃往過去無數世の時、一大國有り 波羅榛[六]と名づく。其の王を 梵摩達[七]と名づく。諸の宮人を將ゐ林中に遊戲す。諸の婇女の輩聲を激して歌ふ。外に一人有り高聲に之に和す。王、其の聲を聞き便ち瞋妬を生じ人を遣はし捕へ來る。勅して之を殺さしむ。時に大臣有り外邊從り來り、此の一人の囚執はるゝを見て便ち左右に問ふやう「何に緣り乃し爾る」と。其の傍の諸人具に事狀を列す。臣曰く「且く停れよ、我の王に見ゆるを待て」と。大臣、進み入り王に啓白して言さく「彼の人の罪深重に至らず。何を以て之を殺す。其の音を和すと雖も而も形を見ず。既に交通し奸婬の事無し。幸に願くば矜みを垂れ其の生命を匃へよ」と。王、違ふこと能はず、赦して刑戮せず。其の人脫することを得て大臣に奉事し懃謹替ること無し。是の如く承給して多年を經歷しぬ。便ち自ら思惟ふやう「婬欲人を傷け、刀劍を利す。我、今、困厄するは皆欲に由る故なり」と。卽ち大臣に語るやう「我の出家して道業を遵修するを聽せよ」と。大臣、答へて曰く「敢て相違せず。學若し道を成ぜば還び來り相ひ見えよ」と。卽ち山澤に詣り、專ら妙理を思ひ精神開悟し辟支佛[八]と成れり。城邑に還り來り、大臣の家に造る。大臣歡喜し、請じて之を供養す。甘饍妙服四事乏しきこと無し。時に辟支佛、虛空の中に於て神變化を現じ身より水火を出し大光明を放ちぬ。

【六】波羅榛。西名（Bā-ra-na-se）とす。
【七】梵摩達。西名（Jshaing-byin)(Skt. Brahmadatta)。
【八】辟支佛。梵語（Pratyokabuddhu）、緣覺・獨覺と譯す、內外の緣を觀じて聖果を悟りし聖者のこと。

む。帝釋、告げて曰く「卿命終るに垂とす。彼の輔相の家に願生すべし」と。天子答へて言く「意、出家し正行を奉修せむと欲す。若し尊榮に生れなば俗を離るゝこと則ち難し、中流に在らむと欲す。冀くば所志を遂げむ」と。帝釋、復曰く「但往きて彼に生れよ、若し學道を欲せば吾、當に相ひ佐くべし」と。天子命終す。降神し輔相の家に受胎す。即ち生れて外に出でたり。形貌端正なり、即ち相師を召し其の字を立つることを爲す。相師、問ふて曰く「本何の處に於て此の兒を求め得たる」と。輔相答へて曰く「昔、恒河の天神より之を求めたり」と。因つて爲に字と作り、恒伽達と爲しぬ。年、漸く長大し志道法に在り、便ち父母に啓して出家を求索めぬ。父母告げて曰く「吾、今富貴なり、產業弘く廣し。唯、汝一子のみ、當に門戸を嗣ぐべし。吾が存活に遭ひ終に相ひ聽さず」と。兒、志に從がはず、深く自ら惆悵す。便ち身を捨て更に[五]凡處を求めむと欲す、中に於て出づることを求めなば必ず極めて易きなり。是に於て密に去る。自ら高巖より墜つ、既に墮して地に在り、傷損する所無し。復、河邊に至り身を水中に投ず。水還りて漂出し亦苦しむ所無し。復毒藥を取りて之を呑噉むも、毒氣行かず死を致すに由無し。復、是の念を作さく「當に官法を犯し王の爲めに殺す所となるべし」と。王夫人及び諸婇女の宮を出てゝ園地の中に到り洗浴し皆衣服を脱し林樹の間に置く。時に恒伽達、密に林の中に入り其服飾を取り抱持して出づ。門監之を見て將ゐて往き阿闍世に白しぬ。王、此の事を聞き瞋恚隆盛なり。便ち弓箭を取り自ら手にて之を射る。而して箭還び返る。正に王身に向ふ。是の如く三たびに至る。中らしむること能はず。王怖れて弓を投ず。彼の人に問ふて言く「卿は是れ天・龍・鬼神なる乎」と。恒伽達曰く「我に一願を賜らば乃ち敢て自ら陳べむ」と。王、曰く「與ふべし」と。恒伽達曰く「我は是れ天に非ず亦龍鬼に非ず。是れ王舍國の輔相の兒なり。我、出家を欲す。父母聽さず。故に自殺して更に餘處に生れむと欲し、巖に投じ、河に赴く。毒を飲みて死せず。故に王法を犯し命を危くすることを得んと望

【五】凡處。西本により知るに、中流の家柄のこと。

弟子と爲り清化を稟受せむ」と。佛、尋いで之を可とす。「善く來りぬ、比丘よ」と。鬚髮自ら落ち法衣身に在り。佛、爲めに說法し、其の情に應適し給ふ。即時、開悟し諸欲都て淨く阿羅漢を得たり。

時に、諸の會する者佛の說き給ふ所を聞き皆大いに歡喜し頂戴奉行せり。

六、[一]恒伽達の品　第六

是の如く我聞きぬ。一時、佛、[二]羅閱祇竹園精舍に在しき。

是の時、國中に一人輔相有り、其の家大富なり、然れども兒子無し。時に恒河の邊[三]摩尼跋羅天の祠有り、合土の人民皆悉く敬ひ奉ず。時に此の輔相祠所に往詣して之に禱りて言く「我、子息無し、承け聞くに天神、功德量り無く群生を救護し能く其の願ひを與ふと。今故に自ら歸す、若し所願を蒙り願くば一子を賜らば當に金銀を以て天身を校飾り及び名香を以て神室を塗治すべし。如し其れ驗無くば當に汝の廟を壞し屎を汝の身に塗るべし」と。天神、聞き已り自ら思惟して言く「此の人豪富、力勢強盛なり。是れ凡品の其の子を爲り得ること非ず。我が德尠少なり、願を與ふること能はず。願若し果さざれば必ず毀辱せられむ。廟神、便ち復往きて摩尼跋羅に白す。摩尼跋羅其の力辨ぜず、自ら[四]毘沙門王に詣り此の事を啓白す。毘沙門言く「亦、我が力子有らしめ能ふことに非ず。當に天帝に詣り從つて斯の願を求むべし」と。即時天に上り帝釋に啓して曰く『我が一臣摩尼跋羅有り、近日見え語りて云く、「王舍城に一輔相有り、其より子を求め重誓を結立す。若し願を遂げ得ば倍供養を加へむ。所願若し違はゞ當に我が廟を破りて之を毀辱すべしと。彼の人豪兇なり必ず能く是の如くせむ」と。幸に望む大王よ、其をして子有らしめよ』と。帝釋答へて曰く「斯の事至難なり、當に因緣を覓むべし」と。時に一天有り、五德身を離れ命盡きむと欲するに臨

【一】恒伽達品。西本、No. 6. 天子(Gaṅ-gā-da-ta) 撰集百緣經、No. 98.
【二】羅閱祇。梵名(Rājagṛha)、摩訶陀國王舍城の梵名。
【三】摩尼跋羅天。梵名(Maṇibhadra)、夜叉八大將の一、譯、寶賢・滿賢。
【四】毘沙門王。四王天の一、護法の天神と福德の神性とを兼ねたり。

き者有るや無しや」と。賢者答へて曰く「愚癡の人有り、心性弊惡・慳貪・嫉妬にして布施を知らず、死して餓鬼に墮す、身大にして山の如く、咽、針鼻の如し。頭髮長く亂れ形體黑く痩せたり。數千萬歳水穀を識らず。是の如き形復汝より劇し」と。海神船を放ち沒して現れず。船行くこと數里。海神、復化して更に一人と作り、極めて端正と爲る。復來りて船を牽き諸の商客に問ふやう「人の美妙なる我と等しき者有るや無しや」と。賢者答へて曰く「乃ち汝に勝ること百千萬倍なるもの有り」と海神、復問ふやう「誰か勝る者と爲す」と。賢者答へて曰く「世に智人有り、諸善を奉行し身口意業を恒に清淨ならしめ三寶を信敬す。時に隨つて供養せば其の人命終し天上に生る。形貌皎(六)潔端正雙ひ無し。汝より殊勝なること數千萬倍なり。汝を以て之に方れば瞎の獼猴(七)を彼の妙女に比するが如し」と。海神水を取り一掬ひして之に問ふて曰く「中に掬む水多きや海の水多き耶」と。賢者答へて曰く「中に掬む水多く海水多きに非ざるなり」と。海神、重ねて問ふらく「汝、今、說く所至誠と爲すや不や」と。賢者答へて曰く「此の言眞諦なり、虛妄ならざるなり。何を以て之を明すや、海水多しと雖も必ず枯竭有り、劫盡きむと欲する時兩日竝び出でて泉の源、池の流れ、悉く皆旱涸す。三日出づる時、諸の小河水悉く皆枯乾す。四日出づる時諸大江海悉く皆枯竭す。五日出づる時大海稍減じ六日出づる時三分の二を減じ七日出づる時海水都て盡き須彌崩壞す。下は金剛の地際に至るまで皆悉く燋燃す。若し復、人有り能く信心を以て一掬水を以て佛に供養し、或は用つて僧に施し、或は父母に奉じ、或は貧窮に匃へ、禽獸に給與せば此の功德劫を歷て盡きじ、此を以て之を言ふ。海少しと爲し掬水多しと爲すを知る」と。海神、歡喜す。即ち珍寶を以用つて賢者に贈り、兼ねて妙寶を寄せ佛及び僧に施す。時に諸の賈客、即ち賢者に與へて寶を採り已に足り、本國に還歸りぬ。是の時、賢者、五百の賈客咸佛の所に詣り佛足を稽首し禮を作し畢已る。各寶物と幷びに海神の寄する所を持つて佛及び僧に奉る。悉く皆長跪し叉手して佛に白すやう「願くば

【六】皎潔。白くして清らかなること。
【七】瞎獼猴。めつかちの大ざる。

妻を娶らむと欲する耶」と。答へて曰く「不なり」と。豪姓又問ふらく「金を用つて何をか爲す」と。答へて曰く「用つて佛及び聖僧に飯を奉らむと欲す」と。豪姓告げて曰く「若し佛を請ぜむと欲せば吾金を與へ幷に經營を爲し我舍を會とすべし」と。貧者〔三〕唯諾す。便ち餚饍を設け佛及び僧を請ぜり。此の因緣に由り命終の後生れて長者の家に在り、今復佛を請じ聞法し道を得たり』と。

佛、阿難に告げ給ふやう「往昔の貧人とは今の長者の子の沙門是なり」と。

佛、是を說き給ふ時、一切の衆會歡喜せざる莫し、頂戴し奉行せり。

五、〔一〕海神、船人に難問するの品　第五

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、此の國に五百の賈客有り。海に入り寶を採り自ら共に議して言く「當に明人を求め用つて導師と作すべし」と。便ち一人の五戒の〔二〕優婆塞を請じて共に大海に入り既に海中に到る。海神身を變じて一〔三〕夜叉と作る。形體醜惡なり、其の色青黑く、口に長牙を出し、頭上火燃せり。來りて其の船を索き賈客に問ふて曰く「世間、畏るべきこと我に過ぐる者有りや無しや」と。賢者、對へて曰く「更に畏る可き汝より劇しきこと數倍なるもの有り」と。海神、復、問ふやう「何者か是なる耶」と。答へて曰く「世に愚かの人有り、諸の不善を作す、殺生・盜竊・婬妷、度り無く、妄言・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見に沒在す。死して地獄に入り苦を受くること萬端なり。獄卒、〔四〕阿傍、諸の罪人を取り種々之を治む。或は刀を以て斫り、或は復之を磨く。刀山・劍樹、火の車、鑊る湯、寒氷、沸屎、一切備り受く。此の如く苦を荷ひ、數千萬歲を經たり。此は之畏る可し。汝より劇しきこと甚だ多し」と。海神、之を放ち形を隱して去る。船進むこと數里にして海神更に一人に化作す。形體、〔五〕痟瘦し筋骨相ひ連る。復來りて船を牽き、諸人に問ふて曰く「世間、羸瘦し我より劇し

〔三〕唯諾。うけがふこと。

〔一〕海神難問船人品。西本、No. 5.

〔二〕優婆塞。梵語(Upāsaka)總て五戒を受けたる男子の稱。

〔三〕夜叉(Yakṣa)。譯、能噉鬼・捷疾鬼。

〔四〕阿傍。阿防羅刹、手頭人身牛蹄の獄卒のことなるべし。西藏譯(Dmyal-baḥi srung-ma)(獄卒)とのみあり。

〔五〕痟瘦。やせいたむこと。

四、【一】波羅㮈の人、身貧しく供養するの品　第四

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

是の時、國中に大長者有り、一男兒を生む。面首端正なり、旣に生るゝこと數日、復能く言語す。其の父母に問ふやう「世尊、在すや不や」と。答へて曰く「故に在り」と。復、更に問ふて曰く「尊者、舍利弗・阿難等悉く在りと爲すや不や」と。答へて曰く「悉く在り」と。父母、子生れて便ち能く言ふを見て謂らく「其れ人に非るか、深く所以を怪しむ。」便ち往きて佛に問ふ。佛言く「此の兒福有り、疑ふに足らず」と。父母歡喜し、其の家に還歸りぬ。兒又啓白すやう「唯、願くば二親よ、我が爲めに佛及び比丘僧を請ぜよ」と。父母告げて曰く「佛、及び僧を請ぜば當に供具を須ふべし。卒に辦ずべきに非るなり」と。兒又、啓白すやう「但、堂舍を掃灑し、床席を莊嚴し三高座を施せば百味飮食當に自然に至るべし。又我が先身の母今猶存在し波羅㮈國に居る。我が爲めに之を喚べ」と。父母語に隨つて人をして象に乘らしめ馳奔り召し來らしむ。三高座を作る所以は一は如來の爲め、二には本生母の爲め、三には今の身の母の爲めなり。佛、衆僧と與に旣に其の舍に入り次第して坐定まる。甘饍美味、自在に豐足せり。佛、說法を爲し給ふ。父及び二母の合家の大小、法を聞き歡喜し盡く初果を得たり。此の兒、轉た長じ出家を辭ひ正業を精懃し羅漢を致すを獲たり。阿難、佛に白さく「此の沙門は宿に何の德を種え豪貴に生れ小くして能く言ひ、又復、學道を學んで神通を逮得せしや」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『此の人、前身、波羅㮈に生れ長者の子と爲る。父、亡沒の後家業衰耗し漸く貧窮を致せり。佛の世に値ふと雖も以て供養するもの無し。此を念うて悅ばず。情自ら釋けず。便ち豪姓を捨てて以て【二】客作と爲りぬ。一歲を經竟り金千兩を索めたり。豪姓問ふて曰く「卿

【一】波羅㮈人身貧供養品。西本 No. 4.

【二】客作。勞働者。

意を騰げて云へ、「吾と及び王と、本是れ親友なり。乃ち昔世に在り倶に梵志と爲り共に八齋を受く。各所願を求めぬ。汝は戒完具して人王と爲るを得たり。吾、戒全からずして龍中に生れり、今、齋法を奉修せむと欲し、此の身を捨てむことを求む。願くば八關齋法を索め用つて我に遣れ。若し共に相違せば吾汝の國を覆へし用つて大海と作さむと」と。園監是に於て果を王に奉る。因つて龍囑する所の變を說きぬ。王、此を聞き已り甚だ用つて樂しまず。所以は何ぞ、時に世に佛法無し、又八關齋文を滅盡し今得べからざればなり。若し之を稱へざれば恐くは危害せられむ。此の理りを惟ひ念うて是の故に愁悒す。大臣有り最も敬重する所なり、王臣に告げて曰く「龍神、我より齋法を求索む。卿を仰ぎ之を得て用つて寄與すべし」と。大臣、對へて曰く「今世法無し云何が得べけむ」と。王、又告げて言く「汝、今、獲ざれば吾當に卿を殺すべし」と。大臣此を聞き甚だ惆悵し自らの舍に往至る。此の臣に父有り年【八】耆舊に在り、每に外より來り和顏悅色以て父の意を慰む。是の時に當り父其の子を見るに面色常と改まる。卽便ち之に問ふやう「何に由りて乃し爾る」と。時に於て大臣便ち其の父に向ひ委曲自ら說く、其の父答へて曰く「吾家の堂柱、每に光明を現ず試みに破りて之を看よ。儻異物有らんか」と。父の言教を奉じ他をして柁き伐らしめ取りて斬析く。經二卷を得たり。一は是れ十二因緣經、二は是れ八關齋文なり。大臣、卽ち持ち王に奉上す。王得て歡喜び自ら勝ふる能はず、便ち、此の經を以て金盤の上に著け自ら龍に送與る。龍此の經を獲、大いに用つて欣慶び便ち好寶を用つて王に贈遣れり。八齋を受持し懃めて奉行し、命終の後天宮に生れ。人王も亦復齋法を修奉し壽盡きて天に生れぬ。共に同一の處なり。昨夜、倶に來り法化を【九】諮稟し、時に應じて尋ね【一〇】須陀洹果を得たり。永く【一一】三塗を息め人・天道に遊び是より已往、畢りに涅槃を得べし」と。』

佛、是を說き給ふ時一切の衆會歡喜し奉行せり。

【八】耆舊。老齡。

【九】諮稟。問ひて命をうくること。

【一〇】須陀洹果。聲聞乘四果の第一、正しく三界の見惑を斷じ盡したる果位なり。

【一一】三塗。塗は途の義、一に火途、地獄趣の猛火に燒かるゝ處、二に血途、畜生趣の互に相食む處、三に刀途、餓鬼趣の刀劍杖を以て逼迫せらるゝ處。

其の一人は生天を求願し、其の第二は國王と作らむと求む。其の第一は其の家に還歸る。婦、共に食はむと呼ぶ。夫、婦に答へて言く「向に佛の齋を受く、中を過ぎては食せず」と。婦、復語りて曰く「君は是れ梵志なり、自ら戒法あり、何に緣りてか異道の齋を受く。今、若し相違して我と共に飯はざれば當に斯の事を以て諸の梵志に語り汝を[四]驅擯して會同を與にせざらしむべし」と。此の語を聞き已り深く恐怖を懷き便ち其の婦と非時にして食す。二人壽の長短に隨つて各命終を取れり。王と作ると願ふ者持齋し完具し王家に生るゝを得たり。生天を願ふ者破齋に由る故に乃ち龍の中に生ず。時に一人有り、王の爲めに園を守り、日々種種の[五]果蓏を奉送す。此の人後の時、泉水の中に於て一異[六]㮈を得たり。色香甚だ美なり。便ち是の念を作さく「我、每に出入し門監の爲めに前却けらる。當に以て之を與ふべし」と。念の如く門監に與ふ。(門監)受け已り、復自ら思惟ふやう「我、事を通ぜむとする時每に[七]黃門の爲めに挫縮せらる。當に以て之を與ふべし」と。便ち斯の㮈を用つて黃門に奉貢す。黃門、納め竟り、轉じて夫人に上る。夫人㮈を得て復以て王に獻ず。王、此の㮈を食す。甚だ甘美を覺ゆ。便ち夫人に問ふやう「何處より得たる」と。夫人卽時實の如く對ふ。展轉相推し園監に到る。王復、召喚して之に問ふて曰く「吾園の中此の美果有り、何ぞ奉らずして、乃ち他人に與ふるや」と。園監、是に於て本末を自陳ぶ。王、復、告げて言く「今より以後、常に斯の㮈を送り斷絕せしむる莫れ」と。園監啓白すやう「此の㮈種無し泉の中より得たり、勅して常に送らしめむとするも辦すべき由無し」と。王、復告げて言く「若し得ること能はずんば當に汝の身を斬るべし」と。園監、還りて出て彼の園中に至り憂愁懊惱し聲を擧げて大いに哭す。時に一龍有り、其の哭音を聞き身を變じて人と爲り來りて之に問ふて言く「汝、何事か有りて悲哭乃し爾る」と。是の事、園監具に自ら宣說く。龍還りて水に入り、多くの美果を以て金盤上に著け用つて此の人に與ふ。因つて之に告げて言く「此の果を持以つて汝の王に奉るべし、幷に吾が

【四】驅擯。追ひしりぞけること。
【五】果蓏。くだものと瓜類。
【六】㮈(Āmra)。卽ちマンゴー果のこと。
【七】黃門。官の名、我國にて中納言の異稱。

と。父母、報いて言く「汝、大慈を行じ矜み一切に及ぶ。我を捨てゝ終りを取る。吾が心汝を念じ荒塞し寸絶す、我が苦計り難し、汝、大慈を修し那ぞ是の如きを得たる」と。時に天人復、種種の妙善き偈句を以て父母に報謝す。父母、是に於て小しく惺悟を得たり。七寶の函を作り骨を盛りて中に著き、葬埋し畢訖り、上に於て塔を起す。天即ち王と及び大衆とを化して去り。還び自ら宮に歸る。

佛、阿難に告げ給ふやう「爾の時の大王、摩訶檀那とは豈異人ならむ乎、今、我が父の王閲頭檀是れなり、時の王夫人とは我母摩訶摩耶是れにして、爾の時の摩訶富那寧とは今の彌勒是れ、第二の太子摩訶提婆とは今の婆修蜜多羅是れ。爾の時の太子摩訶薩埵とは豈異人ならむ乎、我身、是なり。爾の時の虎の母は、今の此の老母是れにして爾の時の二子は今の二人是れなり。我、久遠に於て其の急厄危頓の命を濟ひ安全を得しめ。吾、今成佛しても亦彼の厄を濟ひ其をして永く生死の大苦を離れしめぬ」と。

爾の時、阿難、一切の衆會佛の說き給ふ所を聞き歡喜し奉行せり。

三、二梵志[一]、齋を受くるの品　第三

是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、初夜に二天有り、佛の所に來詣す。天人の身光祇洹を照曜す、皆金色の如し。佛、即ち宜きに隨つて妙法を演暢す。心意開悟き、倶に道跡を得て頭面に佛を禮し天上に還歸れり。明日の清朝、阿難、佛に白さく「昨夜の二天、來りて世尊を覩る。威相晒著し淨光赫奕たり。昔、何の德を種え斯の妙果を獲たるや」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『迦葉如來[二]滅度の後、遺法末に垂る。二人の婆羅門有り、八齋[三]を受持し、

【一】二梵志受齋品。四ノ、No. 3. 撰集百緣經、No. 59.

【二】迦葉如來。過去七佛中第六位、現世界に人壽二萬歲の時に出世し正覺を成ぜり。

【三】八齋。八支齋の略にて即ち八戒のこと。

得たり。其の口乃ち開き即ち身肉を噉ふ。二兒之を待ち久しきを經て還らず。迹を尋ね推し覓む。其の先心を憶ひ必ず能く彼に至り餓虎に餧はしめむ。追ふて岸の邊に到り摩訶薩埵の死して虎の前に在り。虎已に之を食す。血肉塗り漫すを見、自ら撲ち地に墮し、氣絶して死し、久しき時を經て乃ち還び穌へり泣く。啼哭し[一三]宛轉し、[一四]迷憒し悶絶して復還び穌へる。

夫人、睡眠し夢に三つの鴿有り、共に林野に戲る。鷹卒に其の小なる者を捉へて得て食す。覺め已り驚怖る、王に向つて之を説く「我れ聞く、諺に言く、鴿は子孫なる者なりと。今小鴿を亡ふ。我愛する所の兒必ず不祥有らむ、即時人を遣はし四出して求め覓む。未だ久しからずしてその間に二兒已に到る。父母問ふて言く「我愛する所の子今何所に在りと爲すや」と。二兒[一五]哽噎く[一六]隔塞し斷絶して聲を出すこと能はず。久しき時を經て乃ち復言を出すやう「虎已に之を食ふ」と。父母、此を聞き地に躃れ悶絶して覺ゆる所無し、良久しくして乃ち蘇へりぬ。即ち二兒・夫人・婇女と與に馳奔り彼の死屍の處に至る。爾の時、餓虎肉を食し已り盡す。唯、骸骨のみ有り、狼籍地に在り。母其の頭を扶け父其の手を捉へ哀號し悶絶す。絶へて復穌へる。是の如く久しき時を經て摩訶薩埵命終の後兜率天に生る。即ち自ら念を生ずらく「我、何の行に因つて來りて此の報を受くるや」と。天眼徹視し遍く[一七]五趣を觀ず。前の死屍を見る、故に山間に在り、父母悲み悼む。纏綿し痛毒す。其の愚惑にして啼泣し過ぐること甚だしく、或は能く此に於て身命を喪失はむことを憐れみ、「我、今當に往きて彼の意を諫諭すべし」と。即ち天より下り空中に住し、種種の言辭にて父母を解諫す。父母仰ぎて問うやう「汝、是れ何の神なるか、願くば告示げよ」と。天、尋いで報じて曰く「我、是れ王子摩訶薩埵なり。我、捨身して虎の餓乏を濟ふに由り、兜率天に生れぬ。大王よ、當に知るべし、法有れば無に歸し、生あれば必ず終有り。惡は地獄に墮し、善を爲せば天に生るゝなり、生死常の塗たり。今者何ぞ獨り憂愁煩惱の海に沒し、自ら覺悟り衆善を懃修めざるや」

【一三】宛轉。玉のころがる貌。
【一四】迷憒。まどひみだるゝこと。
【一五】哽噎。むせびなく。
【一六】隔塞。へだゝりむせぶこと。
【一七】五趣。五道のこと、地獄・餓鬼・畜生・人・天の世界。

涅槃の安きを獲たるや。一身の中特に利益を蒙むる、何ぞ其れ快なる哉」と。佛、阿難に告げ給ふやう、此の三人は但、今日のみ我によりて活くることを得ることを蒙りしに非ず、乃往過去亦我が恩を蒙りて濟活を得たり」と。阿難、佛に白さく「不審なり、世尊よ、過去の中に三人を濟活ひ給ふ。其の事云何」と。

佛、阿難に告げ給ふやう『乃往久遠阿僧祇劫に此の閻浮提に大國王有り、名を[八]摩訶羅檀那と曰ふ。(秦に大賓と言ふ)、小國を典領す。凡そ五千有り。王に三子有り、其の第一は[九]摩訶富那寧と名づけ、次に摩訶提婆と名け。(秦は大天と言ふ)。次は摩訶薩埵と名づく。此の小子は少小にして慈を行ひ一切を矜愍み猶赤子の如し。爾の時、大王、諸の群臣・夫人・太子と與に外に出て遊觀す。時に王[一〇]疲懈れ小しく住まり休息す。其の王の三子共に林間に遊ぶ。一つの虎有り適二子を乳ふ、飢餓逼切し還りて之を食はむと欲するを見る。其の王の小子二兄に語りて曰く「今、此の虎は酸苦理を極め、[一一]羸痩して死に垂とす。復[一二]初乳を加ふ。我、其の志を觀るに自ら子を噉はむと欲す」と。二兄答へて言く「汝の云ふ所の如し」と。弟復兄に問ふらく「此の虎、今者、復、何をか食すべきや」と。二兄報じて曰く「若し新殺の熱き血肉を得ば乃ち其の意を可とせむ」と。又、復、問ふて曰く「今、頗だ人有り、能く斯の事を辦じ此の生命を救ひ存することを得しむるや不や」と。二兄答へて言く「是は難事と爲すなり」と。時に王の小子、内に自ら思惟ふやう「我、久遠生死の中に於て身を損てしこと無數なり。唐らに軀命を捨つ。或は貪欲の爲め、或は瞋恚の爲め、或は愚癡の爲め未だ曾つて法の爲めにせず。今、福田に遭ふ。此の身何か在らむ」と。計を設け已に定まる。復、共に前に行く。前に行き未だ遠からず二兄に白して言さく「兄等且く去れ、我、私緣有り、爾る比後に隨はむ」と。是の語を作し已り、疾く本徑より虎の所に至り、身を虎の前に投ず。餓虎口噤み食を得ること能はず。爾の時、太子、自ら利木を取り身を刺して血を出す。虎之を舐むるを

【八】摩訶羅檀那。西名(Çin-rta chen-po. Skt. mahāratha (大車)漢譯の註に大賓とあるから(Mahāratna)でなくてはならぬ。此の誤りは西譯者の用ひし漢譯寫本の不完全の爲に來れる西譯者の誤解と見るべし。註はなし。

【九】摩訶富那寧。西名(Sgra chen-po.(大聲)Mahāpranāda)。

【一〇】疲懈。つかれなまけること。

【一一】羸痩。つかれやせたること。

【一二】初乳。初産の意か。

爾の時、梵王、如來の前に於て合掌し讃嘆し、如來の先身の求法を說く。衆生の爲めに凡そ千首有り。世尊、爾の時、梵王の請を受け卽便ち波羅㮈國鹿野苑中に往詣き法輪を轉じ給ひぬ。[四五]三寶、是に因つて乃ち世に現はる。

時に、諸人、天・諸龍・鬼神[四六]八部の衆是の聞くことを聞き已り歡喜せざるは莫し。頂戴し奉行せり。

二、[一]摩訶薩埵、身を以て虎に施すの品　第二

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

爾の時、世尊、乞食の時到り衣を著け鉢を持ち獨り阿難を將ゐ城に入りて乞食す。時に一老母有り。唯二男のみ。偸盜度無し。財主、捕へ得て便ち將ゐて王に詣る。[二]平事律を案ず。其の罪死に應ず。卽ち[三]旃陀羅に付し將ゐて殺處に至る。遙に世尊を見て母子三人倶に共に佛に向ひ叩頭して哀を求む。唯だ、願くば天尊よ、苦厄を濟ふことを垂れ給ひ我が子の命を救へと誠心[四]欵篤なり、甚だ憐愍むべし。如來、慈矜み卽ち阿難を遣はし王に詣り命を請ひ給ふ。王、佛の敎を聞き卽便ち之を放ち、此の厄を脫するを得たり。佛恩を感戴し欣踊ぶること無量なり。尋いで佛の所に詣り頭面して足を禮し、合掌して白して言さく「佛の慈恩を蒙り餘命を濟ふを得たり。唯、願くば天尊よ、我等を慈愍し道次に在るを聽し給へ」と。佛、卽ち之を可とし告げて曰く「善く來りぬ。比丘よ」と。鬚髮自ら墮ち身著くる所の衣變じて袈裟と成る。敬の心內に發り、志信益固し。佛、說法を爲し給ひ、諸垢永く盡き[五]阿羅漢道を得たり。其の母法を聞き、[六]阿那含を得たり。

爾の時、阿難、目に此事を見て未だ曾つて有らざるところなりと歎じ如來の若干の德行を讃說す。又、復、[七]諮嗟するやう「母子三人、宿に何の慶有り世尊に値遇ひ奉りて重罪を免かるゝを得、

【四五】　三寶。一切の佛陀(Buddha)は佛寶なり。佛陀の說ける敎法は法寶(Dharma)なり。其の敎法に隨つて修業する者は僧寶(Saṅgha)なり。佛は覺知の義、法は法軌の義、僧は和合の義なり。

【四六】　八部衆。一、天衆(Deva)二、龍衆(Nāga)三、夜叉(Yakṣa)四、乾闥婆(Gandharva)五、阿修羅(Asura)六、迦樓羅(Garuḍa)七、緊那羅(Kiṁnara)八、摩睺羅迦(Mahoraga)を云ふ。

【一】　摩訶薩埵以身施虎品。西本、No. 2. Jātaka-mālā. i. 菩薩本生鬘論第一。

【二】　平事律。いつもの法律。

【三】　旃陀羅。印度四階級の一、奴隷階級なり。

【四】　欵篤。まことあつし。

【五】　阿羅漢。梵語(Arhān)。小乘の悟を極めたる位の名、譯一に殺賊、煩惱の賊を殺す意、二應供、人天の供養を受くべき意、三に不生、永く涅槃に入り再び生死の苦を受けざる意。

【六】　阿那含。梵語(Anāgāmin)、譯、不還・不來、欲界の煩惱を斷じつくしたる聖者の名。

【七】　諮嗟。ためいきつきてなげく。

に上らむと欲す。氣力接せず、跨ぐを失して地に墮ち、悶絶して覺ゆる無し。良久しくして乃ち蘇る。自ら其の心を責む。「我、久遠より汝の困む所と爲り三界に輪迴す。酸毒備に嘗め、未だ曾つて福を爲さず。今、是れ精進して行を立つるの時、懈怠の時に非ざるなり」と。種々に責め已り自ら強いて起立して稱盤に上るを得たり。心中歡喜し自ら以て善を爲せり。是の時、天地六種に震動し諸天の宮殿皆悉く傾搖しぬ。乃至色界の諸天同時に來り下り、虛空の中に於て菩薩の難行を行じ軀體を傷壞り心に大法を期して身命を顧みざるを見て各共に啼哭す。涙盛なる雨の如く又天華を雨らして以て供養せり。

爾の時、帝釋、本形に還復し住して王の前に在り、大王に語りて曰く「今、是の如き及び難きの行を作し、何等を欲求するや。汝今、轉輪聖王、帝釋、魔王を欲求するや。三界の中何等を欲求するや」と。菩薩、答へて言く「我が求むる所の者は三界の尊榮の樂みを期せず、所作の福業にて佛道を求めむと欲するなり」と。天帝、復言く「汝、今、身を壞り乃ち骨髓に徹す、寧ろ悔恨の意有る耶」と。王言はく「無きなり」と。天帝、復曰く「悔無しと言ふと雖も誰か能く之を知らむ。我、汝の身に觀るに戰掉きて停らず、言氣斷絶す。悔恨無しと言ふも何を以て證と爲すや」と。王、即ち誓を立つるやう「我、始より來今に至るまで悔恨の大なること毛髮の如きも有ること無し。我求むる所の願ひ必ず當に果を獲べし。至誠虛しからず我が言の如くならば吾が身體即ち平復すべし」と。誓を作し已訖る。身、便ち平復して勝ること前に倍せり。天、及び世人未だ曾つて有らざるところなりと歎じ、歡喜し踊躍して自ら勝ること能はず。

尸毘王とは今の佛の身是れなり。世尊、往昔、衆生の爲めに身命を顧みず、乃至是の如し。今者世尊、法海已に滿ち法幢已に立つ、法鼓已に建ち法炬已に照り潤益成立しぬ。今、正に時を得ぬ。云何が一切衆生を捨て涅槃に入りて說法せざらむと欲するや』と。

に先に之を試むべし。至誠に爲すや不や、汝化して鴿と爲り、我變じて鷹と作り急に汝の後を追はむ、相ひ逐うて彼の大王の坐所に詣り便ち擁護を求めむ。此を以て之を試み眞僞を知るに足らむ」と。毘首羯摩、復、天帝に答ふらく「菩薩は大人なり、宜しく苦を加ふべからず、正に供養すべし、此の難事を以て逼るべからざるなり」と。爾の時、帝釋、便ち偈を說きて言はく、

我、亦惡心に非ず、　眞金は試す應きが如く、　此を以て菩薩を試み、　至誠に爲すや、不やを知らんのみ。

是の偈を說き已り、毘首羯摩は自ら化して鴿と爲り、帝釋は鷹と作る。急に鴿の後を追ひ捉へ食はむと欲するに臨む。時に鴿惶怖れて飛びて大王に趣き王の腋下に入り王に歸命す。鷹尋いで後に至り、殿前に立つ。大王に語りて言く「是れは我が食なり、來りて王邊に在り、宜しく速に我に還すべし。我、飢ふること甚だ急なり」と。尸毘王言はく「吾が本誓願當に一切を度すべし、此れ來りて我に依る、終に汝に與へず」と。鷹復言して曰く「大王よ、今者一切を度すと云ふ、若し我が食を斷たば命濟ふことを得ず。汝、我の類一切に非ざる耶」と。王、時に報じて言く「若し餘の肉を與へなば汝能く食ふや不や」と。鷹、卽ち言ひて曰く「唯、新殺の熱肉を得ば我乃ち之を食はむ」と。王、復、念じて曰く「今、新殺の熱肉を求めなば一を害し一を救ふ、理に於て益無し」と。內に自ら思惟すらく「唯、我が身を除かば其の餘は命有り、皆自ら護り惜む。卽ち利刀を取り自ら股肉を割き持用つて鷹に與へ此の鴿の命に貿む」と。鷹王に報じて曰く「王、施主と爲り一切を等しく視る。我小鳥と雖も理と雖も偏枉無し。若し肉を以て此の鴿に貿むと欲せば宜しく稱りて停らしむべし」と。王、左右に勅し「疾く稱りを取り來れ」と。鉤を以て中を鈎り、兩頭に盤を施し、卽時鴿を取り一頭に安著し、割く所の身肉を以て一頭に著く。股肉を割き盡す。故に鴿よりも輕し。復、兩臂、兩脇を割く、身肉都て盡く。故に鴿と等しからず。爾の時、大王身を擧げ自ら起ち稱盤

法を得むと欲せば當に我が教に隨ふべし」と。仙人白して言さく「大師の勅する所敢て違逆せず」と。尋いで卽ち語りて曰く「汝、今若し能く皮を剝ぎて紙と作し骨を析きて筆と爲し血を用つて墨に和し吾が法を寫さば乃ち汝に與へて說かむ。是の時、欝多羅、是の語を聞き已り歡喜し踊躍す。如來の教を敬ひ卽ち身の皮を剝ぎ身の骨を析取り血を以て墨に和し仰ぎて之に白して曰く「今、正に是れ時なり。唯、願くば速に說けよ」と。時に婆羅門便ち此偈を說く、

常に當に身行を攝し　而も殺・盜・淫せず、　兩舌、惡口、妄語、　及び綺語もせざれ。　心、諸欲を貪らず　瞋恚の毒想無く、　諸の邪見を捨離すれば、　是を菩薩の行と爲す。

是の偈を說き已る。卽ち自ら書き取る。人をして宣寫に遣す。閻浮提內の一切の人民咸、讀誦して說の如く修行せしむ。

世尊よ、爾の時、是の如く法を求め衆生の爲めにして、心に悔恨無し、今者云何が一切を捨てゝ涅槃に入りて說法せざらむと欲するや。

又、復、世尊よ、過去久遠阿僧祇劫に閻浮提に於て大國王と作る、名を〔四二〕尸毘と曰ふ。王住む所の城を提婆拔提と號し、豐樂極り無し。時に尸毘王、閻浮提の八萬四千の諸小國土六萬の山川八千億の聚落に主たり。王に二萬の夫人婇女と五百の太子と一萬の大臣有り。大慈悲を行じ矜み一切に及ぼせり。時に天帝釋、五德身を離れ其の命將に終らむとす。〔四三〕愁憒し樂しまず。〔四四〕毘首羯摩其の是の如きを見て卽ち前みて白して言さく「何をか慷慨して愁色有るや」と。帝釋、報じて言く「吾、將に終らむとするなり、死の證已に現はる。今世間の如き佛法已に滅し亦復諸の大菩薩有ること無し。我が心何にか歸依する所を知らず。是を以て愁ふる耳」と。毘首羯摩天帝に白して言さく「今、閻浮提に大國王有り、菩薩道を行ず、名を尸毘と曰ふ。志固く精進し必ず佛道を成ぜむ。宜しく往きて投歸すべし、必ず能く覆護し危厄を解き救はむ」と。天帝復白すやう「若し是れ菩薩ならば當

【四二】尸毘。西名(Çi-byi)梵語(Çibi Çibi-jātaka pāli 499. Cariyā-piṭaka I. 8.; Skt. Jātaka-mālā ii.) 菩薩本生鬘論、第二。

【四三】愁憒。うれひみだること。

【四四】毘首羯摩。梵名(Viçva-karman)、帝釋の臣にして種々工巧物を化作し又建築を司る天神なり。

法身を施すべし」と。衆人默然たり。是の時、太子火坑の上に立ち婆羅門に白さく「唯、願くば大師よ、我が爲めに說法せよ。我が命儻終らば法を聞くに及ばず」と。時に、婆羅門卽便ち爲めに此の偈を說く、

常に慈心を行ひ　恚害の想を除去し　大悲衆生を愍み　矜傷、雨涙を爲せよ。　大喜の心を修行し　己が得るところの法と同じく　救護、道意を以てせば　乃ち菩薩の行に應ぜむ。

是の偈を說き已る。便ち火に投ぜむと欲す。爾の時、帝釋幷びに梵天王各一手を捉へ而も復之を難ずらく「閻浮提內一切の生類太子の恩を賴み所を得ざる莫し。今、火坑に投ぜば天下父を喪ふ。何が爲めに自ら沒し一切を孤棄するや」と。爾の時、太子、天王及び諸臣民に報謝し「何ぞ我が無上道心を遮らむと爲すや」と。天及び人衆卽ち各默然たり。輒ち自ら身を捨て火坑に投じぬ。天地大に動き虛空の諸天同時に號哭し、涙、盛なる雨の如し。卽時火坑變じて花池と成り。太子、中に於て蓮花の臺に坐し諸天華を雨らし乃ち膝に至る。

爾の時の太子曇摩鉗とは今の世尊是れなり。世尊よ、爾の時是の如く法を求めぬ。衆生を救はむが爲めなり。今已に成滿しぬ。宜しく當に彼の【四〇】枯槁の類を潤すべし。云何が便ち涅槃に至り肯て說法せざらむと欲するや。

又、復、世尊よ、過去無量阿僧祇劫に爾の時、波羅㮈國に五百の仙師有り。時に仙人師【四一】欝多羅と名づく。恒に正法を思ひ修學を得むと欲す。四方に推求し一切に宣告すらく「誰か正法有り、我が爲めに說かば其の所欲に隨つて悉く當に供給すべし」と。婆羅門有り來り之に應じて言く「吾に正法有り、誰が聞かむと欲するものぞ。我れ當に說くことを爲すべし」と。時に仙人師、合掌して白して言さく「唯、願くば矜愍し哀を垂れ說くことを爲せよ」と。婆羅門言く「學法の事難し久しく苦しみて獲たり。汝、今、云何が直爾に聞かむと欲するや、理に於て不可なり。汝、若し至誠に

【四〇】枯槁。枯れ乾くこと。

【四一】欝多羅。西名（U[illegible]-pa-la

ぶ事甚だ難し、師を追ひて積むこと久し、爾して乃ち之を得たり。云何が直爾ちに便ち聞くことを得むと欲するや、理として不可なり」と。太子復言く「大師、須ふる所願くば告勅せられよ、身と及び妻子と一として皆惜まず」と。婆羅門言く「汝、今、能く大火坑を作り深さをして十丈ならしめ、中に熾なる火を滿し自ら中に投じて以て供養せば吾乃ち法を與へむ」と。爾の時、太子卽ち其の言の如く大火坑を作る。王及び夫人・群臣・婇女、是の語を聞き已り自ら寧ずること能はず、咸悉く都て集り太子の宮に詣り太子を諫喩し婆羅門を曉すやう「唯、願くば慈愍し我等を以ての故に太子をして火坑に投ぜしむること勿れ、若し其れ其の須ゆるところをば國城、妻子及び我身とを以て當に給使を爲すべし」と。婆羅門言く「吾れ、相ひ逼ざるも太子の意に隨ふ。能く是の如きは我が說法の爲めすなり、不ならば說ず」と。其の志固を覩て各自默然たり。爾の時、大王、卽ち使者を遣はし八萬里を象に乘り一切の閻浮提内に宣告す。曇摩鉗太子法の爲めの故に却後七日身を火坑に投ず。其を見むと欲せば宜しく早く來り會すべし」と。時に諸の小王四遠の士民强弱相ひ扶けて悉く皆雲集す。太子の所に詣り長跪合掌し異口同音に太子に白して言さく「我等諸臣、仰ぎて太子を憑む。猶父母の如し、今若し火に投ぜば天下父を喪ふ。永く怙む所無けむ。願くば我曹を愍み一人の爲めに一切を孤棄すること莫れ」と。爾の時、太子衆人に語りて言く「我、久遠の生死の中に於て身を喪ふこと無數なり、人中に貪を爲し更に相ひ斬害す、天上の壽盡き欲を失して憂苦し、地獄の中に火に燒かれ、湯に煮らる。斧・鋸・刀・戟・灰河・劍樹、一日の中に身を喪ふこと計り難し。痛心髓に徹し具に陳ぶべからず。餓鬼の中にて百毒軀を鑽り、畜生の中に苦しみ身衆口に供へ重みを負ひ草を食す。苦亦數ふること難く空しく衆苦を荷ふ。唐しく身命を失ひ未だ曾つて善心にて法の爲めにせざるなり。吾、今、此の臭穢の身を以て法に供養するの故に、汝等、云何が復我が無上道心を却けむと欲するや。我れ此の身を捨てゝ佛道を求めむと欲す。後成佛の時當に汝等に[三九]五分

【三九】五分法身。五種の功德法を以て佛身を成ずれば五分法身と云ふ。一に戒、二に定、三に慧、四に解脫、五に解脫知見を云ふ。

一切は皆無常なり　生ある者皆苦有り、　諸法は空にして生あること無し　實に我の所有に非ず。

是の偈を說き已り、卽ち身の上に於て千の鐵釘を斲る。時に、諸の小王群臣の衆、一切大會身を以て地に投ず。大山の崩るゝが如し。宛轉し啼哭し諸方を識らず。是の時、天地六種に震動し欲・色の諸天其の所以を怪しみ、僉然倶に下る。菩薩困苦し法の爲めに其の身を傷壞するを見て同時に啼哭す。涙盛なる雨の如く、又天花を雨らして以て供養す。時に天帝釋王の前に來り到りて王に問ふて言く「大王よ、今者勇猛精進苦痛を憚らず。法の爲めの故に何の求むる所を欲する。帝釋、轉輪〔三五〕王と作らむと欲する乎、魔王、梵王〔三六〕と作らむと欲求を爲すや」と。王、之に答へて曰く「我の所爲〔三七〕三界受報の樂を求めず。所有功德を用つて佛道を求む」と。天帝復言く「王、今是の如く身を壞す、乃ち是の如く苦しむ、寧ろ悔恨の意あり耶」と。王、言く「無きなり」と。天帝、復言く「今、王の身を觀るに自ら持する能はずして悔恨無しと言ふ、何を以て證と爲すや」と。王、尋いで誓を立つるやう「若し我れ至誠にして心に悔恨無くば我、今身體還び復故の如し」と。是の語を作し已り、卽時、平復す。天、及び人民欣び勇むこと無量なり。世尊よ、今者法海已に滿ち功德悉く備る。云何が一切衆生を捨てゝ疾く涅槃に入りて說法せざらむと欲し給ふや。

又、復、世尊よ、過去久遠無量阿僧祇劫に此の閻浮提に大國王有り、名を梵天王と曰ふ。太子有り、〔三八〕曇摩鉗と字す。正法を好樂み使を遣はして推求む。四方周く遍り了りて得ること能はず。爾の時、太子法を求めて獲ず、愁悶・懊惱す。時に天帝釋、其の至誠を知り化して婆羅門と作り宮門に來詣りて言く「我れ法を知れり、誰か聞かむと欲せば吾當に說くことを爲すべし」と。太子之を聞き卽ち出でて奉迎す。足に接して禮を爲し將ゐて大殿に至り好き床座を敷き請じて座に就かしむ。合掌し白して言さく「唯、願くば大師よ、慈みを垂れ說くことを爲せよ」と。婆羅門言く「學

【三五】轉輪王。梵語(Cakra-vartti-rāja)、此王身に三十二相を具し位に卽く時天より輪寶を感得し其輪寶を轉じて四方を降伏すれば轉輪王といふ。
【三六】梵王。梵天王の略、色界の初禪天に梵衆・梵輔・大梵の三天あり。其の大梵天を梵天王と稱し尸棄と名く。
【三七】三界。欲界 色界・無色界の三。
【三八】曇摩鉗。西名(Dharma-gāma)、梵名(Dharma-kāma)。

くものぞ。當に其の意に隨つて所須を給足すべし」と。婆羅門有り、勞度差と名づく。宮門に來詣りて言く「大法有り、誰か聞かむと欲せば我れ當に爲めに說くべし」と。王、此の語を聞き喜び自ら勝へず、躬出でて奉迎し、足に接して禮を爲す。起居を問訊し將ゐて大殿に至り高座を敷施し請じて坐に就かしむ。合掌し白して言さく「唯、願くば大師よ、當に說法を爲すべし」と。勞度差曰く「我の知る所は四方に學を追ひ勞苦年を積む。云何んが大王よ、直爾に聞かむと欲するや」と。王、叉手して曰く「一切の所須幸に勅を垂れよ、大師の所に於て敢て惜むこと有らず」と。尋いで報じて曰く「若し能く汝の身の上に於て千の鐵釘を斲らば乃ち汝に法を與へむ」と。王、卽ち之を可とす。「却後七日當に斯の事を辦ずべし」と。爾の時、大王尋いで時に人を遣はし八萬里を象に乘り遍く一切の閻浮提内に告ぐるやう。「毘楞竭梨大王、却後七日當に身の上に於て千の鐵釘を斲るべし」と。臣民、之を聞き悉く來り雲集し大王に白して言さく「我等、[三二]四遠、王の恩德を承け各安樂を獲たり。唯、願くば大王よ。我等の爲めの故に身の上に於て千の鐵釘を斲ること莫れ」と。爾の時、宮中の夫人・婇女・太子・大臣、一切の衆會咸皆同時に王に向つて哀みを求むるやう「唯、願くば我等を以ての故に、一人の爲めに便ち命終を取り天下の一切衆生を孤棄すること莫れ」と。爾の時、國王、之に報謝して曰く「我れ久遠生死の中に於て身を殺すこと無數なり、或は貪欲・瞋恚・愚癡の爲めに其の白骨を計らば[三三]須彌よりも高く、首を斬り血を流すこと五江よりも過ぎ、啼哭の涙は四海よりも多し。是の如く種々唐く身命を捐つ。未だ曾つて法の爲めにせず。吾れ今釘を斲り以て佛道を求む。後成佛の時當に智慧の利劍を以て汝等の[三四]結使の病を斷除すべし、云何が乃ち我が道心を遮らむと欲するや」と。爾の時、衆會默然として言無し。時に、大王婆羅門に語るやう「願くば大師よ、恩を垂れて先に說け、然る後に釘を下せ、我命儻終らば法を聞くに及ばず」と。時に勞度差、便ち偈を說きて言く、

【三二】四遠。四隣といふに同じ。

【三三】須彌。梵語(Sumeru)、山の名、一小世界の中心なり。妙高・妙光・安明・善積・善高など譯す。

【三四】結使。煩惱といふに同じ。

是の時、衆人王の意正しきを見て啼哭懊惱し自ら地に投ず。王の意改まらず。婆羅門に語るらく「今、身を剜つて千燈を燃すべし。尋いで爲めに之を剜ぐる。各[二五]脂炷を著けぬ。衆會見已る。絕て而も復蘇へる。身を以て地に投ず。大山の崩るゝが如し。王復白して言さく「唯、願くば大師よ、哀みを垂れ矜愍し先に說法を爲せよ。然る後燈を燃せ、我が命儻斷たば聞法するに及ばず」と。時に勞度差、便ち法を唱へて言く、

常なる者皆盡き　高き者必ず墮つ　合會は離るゝ有り　生ある者は皆死す。

是の偈を說き已りて便ち火を燃す。此の時に當り王大いに歡喜び心に悔恨無く自ら誓願を立つ「我、今法を求め佛道を成ずることを爲さむ。後、佛と得たらむ時に當に智慧光明を以て衆生の結縛黑闇を照し悟らすべし」と。是の誓を作し已る。天地大に動き、乃至[二六]淨居諸天の宮殿動搖す。咸各下を視る。菩薩、法の供養を作し身體を毀壞し軀命を顧ざるを見る。[二七]僉然倶に下り虛空に[二八]側塞す。啼哭の涙猶し盛なる雨の如し。又天華を雨らす。而して以て供養す。時に[二九]天帝釋下りて王の前に至り種々に讚嘆す。復、之に問ふて曰く「大王よ、今者苦痛極めて理なり。心中頗る悔恨の事有るや不や」と。王、卽ち言く、無し。帝釋復、曰く「今、王身を觀るに[三〇]戰掉し寧かならず。自ら悔無しと言ふ。誰か當に之を知るべきや」と。王、復誓を立つ若し我始めより今に至るまで心悔いざれば身上の衆瘡卽ち當に平復すべし」と。是の語を作し已り尋いで時に平復しぬ。

時に彼の王とは今の佛是れなり。世尊よ、往昔、苦毒の法を求め皆衆生の爲めにし給ふ。今者滿足し云何が捨棄して涅槃に入り永く一切をして大法の明を失はしめむと欲し給ふや。

又、復、世尊よ、過去世の中、閻浮提に於て大國王と作り、[三一]毘楞竭梨と名く。諸國の八萬四千の聚落を典領し二萬の夫人婇女、五百の太子、一萬の大臣あり。王慈悲有りて民を視ること子の如し。爾の時、大王の心正法を好む。卽時、臣々を遣し一切に宣命すらく「誰か經法有りて、我が爲めに說

【二五】脂炷。あぶらの燈心。

【二六】淨居天。色界の第四禪に不還果を證せる聖者の生ずべき處なり。

【二七】僉然。みなこと〴〵く。

【二八】側塞。せまくふさぐこと。

【二九】天帝釋。梵名(Śakra devānāṁ indra)、忉利天の主なり、須彌山の頂喜見城に居て他の三十三天を統領す。

【三〇】戰掉。おのゝきふるふ。

【三一】毘楞竭梨。西名(Byi-lin-gi-ra-li)。

又、復、世尊よ、過去久遠[二〇]阿僧祇劫、閻浮提に大國王と作り※虔闍尼婆梨と名づく。諸國の八萬四千の聚落を典領し、二萬の夫人、婇女と一萬と大臣とあり、王慈悲有り矜一切に及び人民[二一]蒙賴す。穀米[二二]豐賤、王恩を咸佩し猶慈父を視るが如し。時に王、心に念ふやう「我、今最尊なり、位豪首に居り人民我に於て各各安樂す。復、是れ有りと雖も未だ我心を盡さず、今、當に妙寶法財を推求めて以て之を利益すべし」と。是を思惟し已り、臣を遣はして令を宣べ遍く一切に告ぐるやう「誰か妙法有りて我に與へ說く者は當に所須を給し其の欲する所に隨ふべし」と。時に婆羅門有り[二三]勞度差と名づく。宮門に來詣りて云く「我に法有り」と。王、之を聞きて喜び卽ち出でて奉迎す。前みて爲めに禮を作す。好き床褥を敷き請じて座に就かしむ。王、左右と與に合掌して白して言さく「唯、願くば大師よ、愚鄙を垂矜みて妙法を開闡し聞知を得しめよ」と。時に勞度差、復王に報じて曰く「我の智慧[二四]遐方に追求めて學を積むこと易からず。云何んが直爾ちに便ち聞くことを得むと欲すや」と。王、復報じて曰く「一切の所須悉く告勅せられよ、皆供給すべし」と。勞度差曰く「大王、今日能く身の上に於て剜り以て千燈を燃し用つて供養せば乃ち汝に與へ說かむ」と。王、此の語を聞き倍用つて歡喜び、卽時、人を遣はし八萬里を象に乘り一切の閻浮提内に告げ語るらく「虔闍婆梨大國王は却後七日法の爲めの故に當に其の身を剜り以て千燈を燃すべし」と。時に諸小王一切の人民此の語を聞き已り各愁毒を懷き悉く王に來詣り到り禮を作し畢り共に之に白して言さく「今、此の世界有命の類大王に依持す。盲の導きに依り、孩兒の母を仰ぐが如し、王薨るの後何をか怙む所とすべき。若し身の上に於て千燈を剜らば必ず全濟せず。云何が此の一婆羅門の爲めに此の世界の一切の衆生を棄つるや」と。是の時、宮中の二萬の夫人、五百の太子、一萬の大臣合掌して勸請すること亦皆是の如し。時に王報じて曰く「汝等諸人、愼みて我が無上の道心を却くること勿れ。吾、是の事の爲めに誓つて作佛を求む。後、成佛の時必ず先づ汝等を度せむ」と。

【二〇】阿僧祇劫。梵語(Asaṅkhya-kalpa)、阿僧祇は無數と譯し、劫とは年時の名算數の及ばざる長い年月のこと。

※虔闍尼婆梨。西名(Kan-na-pa-li)、梵名(Kañjani-pāli)。

【二一】蒙賴。利得をかうむること。

【二二】豐賤。豐にして價安きこと。

【二三】勞度差。西名(Lü-tu-cha)。

【二四】遐方。遠方に同じ。

て之を安立するは此れは是れ我が咎なり。何ぞ其れ苦しき哉、今、當に堅實の法財を推求し普く得脱せしむべしと。卽時、閻浮提内に宣令し、誰か能く法有りて我に與へ說く者は其の須ふる所を恣にし敢て違逆せずと。募り出でて周遍するも應ずる者有ること無し。時に王憂愁・〔一二〕酸切・〔一三〕懇惻す。

〔一四〕毘沙門王其の是の如きを見て往きて之を試みむと欲す。輒ち自ら身を變じて化して〔一五〕夜叉となる。色貌青黑、眼赤く血の如し。狗牙上に出で頭髮悉く竪ち火、口より出づ。宮門に來詣り口自ら宣言すらく、誰か法を聞かむと欲するものぞ。我れ當に爲めに說くべしと。王、是の語を聞き喜び自ら勝へず。躬自ら出でて迎ふ。前みて爲めに禮を作し高座を敷施け、請じて坐に就かしむ。卽ち群僚を集め前後圍遶し聽聞を得むと欲す。爾の時、夜叉、復王に告げて曰く、學法を學ぶ事難し、云何が直に爾聞知を得むと欲するやと。王、〔一六〕叉手して曰く、一切の所須敢て逆ふこと有らずと。夜叉報じて曰く、若し大王愛すべき妻子を以て我が食に與へなば乃ち汝に法を與へむと。爾の時、大王愛する所の夫人及び兒の中勝るゝ者を以て夜叉に供養す。夜叉得已り高座の上、衆會の中に於て取つて之を食ふ。爾の時、諸王・百官・群臣王の是の如きを見て啼哭し懊惱し、〔一七〕宛轉地に在り、大王を勸請して此の事を捨てしむ。王、法の爲めの故に心堅くして迴さず。時に夜叉鬼、妻子を食し盡き、爲めに一偈を說く。

一切の〔一八〕行は無常、　生ける者皆苦有り　〔一九〕五陰は空、無相なり、　我、我所有ること無し。

是の偈を說き已り、王、大いに歡喜び、心に悔恨の大なること毛髮の如きも無し。卽便ち書寫し使を遣はし閻浮提内に頒ち示し、咸誦習せしむ。時に毘沙門王本形に還復し讃えて言く、善き哉、甚だ奇なり、甚だ特なりと。夫人、太子猶存すること故の如し。

爾の時の王とは今の佛身是れなり。世尊よ、昔日法の爲めに倘爾なり。云何が今、便ち衆生を捨てゝ早く涅槃に入りて救濟せざらむと欲するや。

缺く。故に梵天請法六事品は漢譯にて六物語を出すも西本は五のみ。

〔一二〕酸切。かなしみいたむこと。

〔一三〕懇惻。ねんごろにいたはること。

〔一四〕毘沙門王。梵語(Vaiśravaṇa)、護法と施福の天神。

〔一五〕夜叉。梵語(Yakṣa)、能く人を傷害し食噉する惡鬼なり。

〔一六〕叉手。合掌のこと。

〔一七〕宛轉。玉などのころがる貌。

〔一八〕行。梵語(Saṃskāra)、存在する法の因緣に造作せられ三世に遷流することを行といふ。

〔一九〕五陰。梵語(Pañca skandha)、新に五蘊と譯す、色・受・想・行・識の五法をいふ。

賢愚經

元魏　涼州　沙門慧覺等在二高昌郡一譯

巻の第一

一、梵天、法を請ずる六事品　第一

是の如く我聞きぬ。一時、佛、摩竭國の善勝道場に在しき。初始めて佛を得、諸の衆生の迷網・邪倒にして教化す可きこと難く、若し我れ世に住すとも事に於て益無く、無餘涅槃に遷逝するに如かずと念じ給ひぬ。爾の時、梵天、佛の念じ給ふ所を知り、卽ち天より下り前みて佛の所に詣り頭面に足を禮し、長跪合掌して勸請すらく「世尊よ、法輪を轉じたまへ、般涅槃する莫れ」と。佛、梵天に答へ給ふやう、「衆生の類、塵垢に弊られ世の樂に樂著し慧心有ること無し、若し我れ世に住せば唐に其の功を勞す。吾が所念の如く唯滅すを快と爲す」と。

爾の時、梵天、復、更に傾倒して佛に白して言さく『今日法海已に滿ち、法幢已に立ちぬ。潤し濟ひ開導する今正に是の時なり。又諸の衆生の應に度す可き者甚だ多し。云何が世尊よ、涅槃に入り此の蒯類永く覆護するを失せしめむと欲す給ふや、世尊、往昔、無數劫の時恒に衆生の爲めに法藥を採集し給ふ。乃至一偈も、身と妻子とを以て用つて募求め給ひぬ。云何が念はず便ち孤棄せむと欲し給ふや。

過去久遠　閻浮提に於て大國王有り。修樓婆と號す。此の世界八萬四千の諸小國邑、六萬の山川、八千億の聚落を領し、王に二萬の夫人と一萬の大臣の有り。時に妙色王、德力比無く民物を覆育し豐樂極り無し。王、心に念じて曰く、「我の如く今唯財寶を以て一切を資給し、道教有ること無くし

【一】賢愚經。宋・元・明本、賢愚因緣經、西本、賢愚(Hdzangs-blun)といはるゝ經。

【二】梵天請法六事品。宋・元本、雜譬喩經、明本、雜譬喩品。西本、雜喩(dpe)教品。

【三】摩竭陀。梵名(Magadha)西名(Magata)とす中印度の國名、王舍城の在る所なり、持甘露・善勝・無惱・無害など譯す。

【四】善勝道場。西名(Dkyil-ḥkhor rnam-par-rgyal(Maṇḍala vijaya))。

【五】無餘涅槃。梵語(Anupadhiśeṣa-nirvāṇa)、新に無餘依涅槃といふ、身智共に灰滅する涅槃なり。

【六】遷逝。うつり逝くこと。

【七】梵天。梵語(Brahmadeva)、此の大梵天王、深く正法を信じ佛の出世毎に必ず最初に來り轉法輪を請ひ、又常に佛の右邊に在り手に白拂を持す。

【八】塵垢。煩惱といふに同じ。

【九】蒯類。衆生のこと。

【一〇】閻浮提。梵語(Jambu-dvīpa)。須彌山の南方に當れる大州の名、卽ち吾人の住處、此の州の中心に閻浮樹の林あれば因つて名とす。

【一一】修樓婆。西本、此譬喩

置であるが物語の數に於ては雜寶藏經の百二十一、撰集百緣經の一百に比すれば遙に及ぶべくもないがこの經ほどその分布區域を廣くし蒙古に於ては「譬喩の大海」の名のもとに民衆化され、支那に於て編纂なれし法苑珠林、經律異相等に影響を與へ日本に於てはその說話文學の一大巨塔なる今昔物語に直接或は間接にその影響を及ぼすこと大なるものがある。その分布區域の廣大なると人口に膾炙せる點では日本說話文學に於ける今昔物語の地位に相應するものといふも過言ではあるまい。

昭和五年一月二十日

譯者　赤沼智善
　　　西尾京雄　識

一聯は授記といはれるが、此の形が譬喩の特別なる場合として現はれてくる。

第四、混合譬喩或は譬喩授記(Avadāna-Vyākarana)これは、一つの行爲を中心として、その行爲を引き起した過去の物語とその行爲が未來に起すべき先越の行爲との二重の物語から成つてゐるもの。

第五、現在の譬喩、一つの行爲の結果が生ずる爲めには普通無數劫を數へるが、時には過去の物語も亦預言もない、たゞ僅かの時間中に果報が行爲に隨從して來る物語がある。それを現在の譬喩と名づける。

今、以上の分類に隨つて六十九品の內容を分別しこゝに表を示さう。

分類	品數	計
第一、過去の譬喩	五三	六九
第二、譬喩本生	一	
第三、授記	—	
第四、混合授記	五	
第五、現在の譬喩	一〇	

是等の內容を備へた賢愚經は撰集百緣經の如く十卷本として各卷別々なる品により統一し各卷の物語の主人公が共通な性格を有するやうにはなつて居らないがその正規の譬喩が殆んど大部分を占めてゐる程特徵あるものである。

その經の第一品、梵天請法六事は釋尊の本生を述べて梵天が法を說き給へと勸請するものであるが、此を經の初めに置きて次に譬喩を掲げることは極めて適切なる編輯方法であり、又百緣經・如意樹譬喩・寶石譬喩・阿育譬喩等に於てその重要な位置を占むる優波毱多に就ては此の經の第六十七番目にその譬喩を載せ——この事は賢愚經が單なる集錄でなく、ある一人の著作である時にはこの經の成立年代並に他の集錄に關係あることを物語るものと思はるゝ——第六十八、第六十九と正規の譬喩を以つて終つてゐる點など編輯に意を用ひたものなることが知れる。

五、撰集百緣經との關係並に其地位

撰集百緣經、雜寶藏經及び賢愚經とは譬喩文學中の三大部と稱し得らるゝ程其處に多くの物語を含むと共に餘他の譬喩文學集錄の根源をなしてゐるものである。詳細に其等の物語を研究するならば其等物語の系統並に分布區域等を想定し得られ興味深きものであると思はれるが、今は唯、撰集百緣經と賢愚經との物語の比定をするに止めやう。

賢愚經	No.3	6	8	9	26	36	60
撰集百緣經	No.59	98	99	83	73	88	60

右に示すが如く賢愚經、六十九品中七品卽ち $1/7$ 强が撰集百緣經中に見らるゝ。この外同巧異曲のものを數ふれば更にその數を增す。

最後に賢愚經が譬喩文學中に占むる位

(Asiatic Researches vol. XX. 1836.)中に於てゞある。その後七年を經てロシヤの佛教學者 Achimidt 氏によつてその西藏本文と獨逸譯とが出版された。これが漢譯より譯されたものであるといふことは既にチョーマ氏によりて唱導され高楠博士によつて "The journal of The Royal Asiatigue Society" 1901. p. 447 ff 中に發表せられてゐるからそれに讓れば足りる。その漢譯より譯されしものなることは經題名、經の後記（然しデリゲ・ナルタン兩版目錄には印度と支那との書より譯すとあり）及びその固有名詞の音譯——此については此處でも亦出來るだけ經註に出した——から類推し得られることで疑ふ餘地のないことである。然し現存漢譯とは異つた漢譯を底本として西藏譯をしたものであることを附言したい。

　蒙古譯、譬喩の大海(Üliger-ün talai)に就ては原典を手にし得ないので言ふ權利はないが高楠博士の少しく論じてゐられるところでは支那譯が本源だとは確認されぬらしい。その著者は十太子と考へられたらしいと云ふことである。

　獨逸譯、「賢と愚」("Der Weise und Der Thor") と題し西紀一八四三年 St. Peteroburg に於て I. J. Schmidt によつてその西藏原典と共に出版された。一八九一年フイーヤ氏が十年の歲月を費して譯した Avadāna-Çataka に先んずること約半世紀以前のことである。

　此の國譯に就ては大正藏經のそれを底本としたが間々ある誤植は縮刷本によりて註に出し、讀み難き個所の二、三は西譯によりて理解し得ゝ所もあるが共等は脚註により指示して置いた。

四、經の內容

　此の賢愚經、十三卷、六十九品は十二分教中譬喩經典である。譬喩經典の性質と定義とに就いては撰集百緣經の解題に於て稍精しく述べたからそれに讓り此處では要約することゝする。譬喩とは現在起きてゐる事實に就いて或る行爲とその避けがたき結果との間に存する緣を明に示す教訓である。而してフイーヤ氏に順ふと其等の物語に就いて五つの異種形をあげることが出來る。

　第一、本來の譬喩、或は過去の譬喩、これは最も普通な形のもので現在の出來事の物語とそれを決定した過去の出來事の物語から成つてゐるもの。

　第二、譬喩本生（Avadāna-Jātaka)、或は本生（Jātaka)、本生（Jātaka)が譬喩の一の特別なる場合として現はれ來る物語。

　第三、授記(Vyākarana)、現在を未來に結びつける教訓と過去の物語が一の豫言によつて取り替へられてゐる本文との

梁天監四年に洎び春秋八十有四、凡そ六十四臈、京師第一の上座也、唯、中國に經至しては則ち七十年なり。祐經藏を惣集し遐邇を訪訊す、躬往きて諮問し面り其の事を質す。宗・年耆・德峻、心直に據明なり、故に標講し錄と爲す、以て後學に示すなり。

以上が經記の全文であるが、之に依つて知らるゝ如く賢愚經の經名は河西の沙門慧朗が譬喩經なるものゝ性質を考へつつ、一方には前代に於て種々の譬喩集錄あり其等と區別する爲めに——例へば百緣經(Avadāna-Çataka)を他のAvadānaと區別せむ爲めに Pûrṇamuhha-Avadāna-Çataka とも呼むだ樣に——經名のなかつたものを命名したものであることが知られる。それ故にその經名の支那的であることの疑難が解ける。

第二には卷數の相違であるが、此の經の翻譯が西紀四百四十五年、初めて支那に印刷されたのが西紀九百七十二年であるから約五百二十七年の間寫本として漢土に傳つてゐたものであり、其の間同樣類似の譬喩が加へられて增廣もしたであらうし或は其等物語の二三が減ぜられたであらうことは容易に信じてよいことゝ思はれる、加ふるに正しい梵本のあつた經典ではないらしいしそれが殊に敎化方面に應用されたであらうから他の經典に比して著しく增廣、删除は行はれたことであらう。

此の經典は如何なる種類の經典か、それは經記にも示すが如く、本生と譬喩とを兼ねた經典であり、それは正しくは十二分敎中第十一位を占むる譬喩經典(Avadāna-sûtra)である。

三、現存の異本と傳譯

現存する賢愚經には漢譯に二種の異本あり、西藏譯・蒙古譯等がある。今、其等の卷數と品數と翻譯の年時とを左に表として掲げやう。

異本＼諸事項	卷數	品數	翻譯年時
漢譯(宋・元・明本)	13	69	西紀四四五
漢譯(高麗本)	13	62	西紀四四五
西藏譯	12	51	六三二以後
蒙古譯	12	52	一二六九以後

漢譯、二種の異本はあるけれども其等は同一譯者に依つたものである。即ち、經記にもいふが如く河西の沙門・曇覺・威德等が于闐(Khoten)に於て聽きたるを高昌(Karakhodjo)の大安寺に於て譯し一部となしたもので、それは宋元嘉二十二年(A. D. 445)のことである。

西藏譯、賢愚經(Hdsaṅs-blu mdo)は甘珠爾(Kanjur)經部第三十卷中にあり、その譯者は、デリゲ版、ナルタン版の目錄には共に法成(Chos-grub)と記されてある。此の西藏文を始めて紹介したのはチョーマ氏(Csoma)氏が「亞細亞研究」

賢愚經解題

一、賢愚經

此の經の題名は漢譯、麗本では賢愚經――南條目錄にて Damamūka-sūtra と梵語に還元されてゐる。――といはれ、宋・元・明諸本では賢愚因緣經と命名されて居り、西藏本に於て賢愚經（Hdsaṅs-blun mdo）或は賢愚種々喩敎經（Hdsaṅs-blun dpe sna-tshogs bstan-paḥi mdo）と譯され、蒙古本に於て譬喩の大海（Üliger-ün talai）と稱せられてゐるとのことであるが、この後者を別として前者の經名を見れば如何にも支那製作の題名の如く直感され印度的でないことが看取されて一の疑問となり、二には、經錄等を披見すると賢愚經、十三卷、或は十五卷、或は十六卷、或は十七卷（開元釋敎錄・結四）といひて各卷數の相違を見出し更に西本、蒙古本共に卷數の合致を見ない不審を發見して疑問を增すことであるが、是等の諸點は如何に解決されるか、

又、此經は如何なる種類の經典であらうか、此等の點に就いては僧祐撰の出三藏記集第九、賢愚經記（結・一・五三左）に、解決の鍵が見出されるのであつて、それを次に揭げて行くであらう。

二、賢愚經翻譯、編纂の因緣

十二部典、蓋し法門を區別す。既に事、本生に照さば智者解を得、亦理、譬喩を資とす。賢愚經とは謂ふ可し此二義を兼ぬるなり。

河西の沙門・釋曇覺・威德等凡そ八僧有り、志を結び方に遊び遠く經典を尋ぬ。于闐の大寺に於て般遮于瑟の會に遇ふ。般遮于瑟とは漢に言ふ五年一切大衆集なり。三藏の諸學各法寶を弘む。經を說き律を講じ業に依つて敎ふ。

覺等八僧、緣に隨つて分ち聽く。是に於て競ひて胡音を習ひ析ち漢義を以て精思通譯し各聞く所を書す。還び高昌に至り乃ち集めて一部と爲す。

既にして流沙を踰越し齎して凉州に到る。時に沙門釋、慧朗は河西の宗匠なり。道業、淵博方等を總持す。以爲く此の經記する所源譬喩に在り、譬喩明す所兼ねて善惡を載す。善惡相ひ翻ずれば則ち賢愚の分なり。前代經を傳ふる已に譬喩多し。故に事に因つて名を改め號して賢愚と曰ふ。元嘉二十二年歲乙酉に在り始めて此の經を集む。

京師、大安寺沙門・釋弘宗は戒力堅淨・志業純白なり。此の經初めて至り、師に河西に隨ふ、時に沙彌爲り、年始めて十四、親しく斯の集を預り躬其の事を覩る。

百喩經（終）

を六塵に極め情を五欲に恣にせよ、我が語の如くせば必ず解脫を得む」と。是の如く愚人、諦に思惟せず。便ち其の語を用ひ、身壞れ命終りて三惡道に墮つ。彼の小兒の龜を水中に擲つが如し。

此の論、我が造る所　喜笑の語を和合す、　多く、正實の說を損れば、　義の應、不應を觀よ。

苦毒の藥(を以て)　石蜜に和合する如似く、　藥は病を破壞る爲めなり　此の論も亦是の如し。

正法中の戲笑、　譬へば彼の狂藥の如し、　佛の正法は寂定にして　明に世間を照す。　下藥を服吐する如く、　酥を以て體中を潤す、　我、今此の義を以て、　寂定を顯發す。　阿伽陀藥の如く、　樹の葉をもつて而も之を裹む、　藥を取り毒を塗り竟れば、　樹葉還び之を棄つ。　戲笑、藥を裹むが如く、　實義其の中に在り、　智者、正義を取り　戲笑は便ち棄つべし。

尊者、僧伽斯那、癡花鬘を造作り竟る。

【三】六塵。色・聲・香・味・觸・法の六境をいふ、此六境眼等の六根を有して身に入り以て淨心を坌汚すれば塵と名く。

九十七、惡賊の爲に劫され氍を失ふ喩

昔、二人有り。伴と爲り共に曠野を行く。一人一領の氍を披く。中路に賊の爲めに剝がる。一人は逃避し走りて草の中に入る。其の氍を失ふ者先に氍の頭に於て一金錢を裹む。便ち、賊に語りて言く「此の衣適一枚の金錢に直す可し。我、今、求めて一枚の金錢を以用つて之を贖はむ」と。賊、言く「金錢今何處に在る」と。即便ち、氍の頭を解き取りて之を示す。而して賊に語りて言く「此は是、眞金なり。若し我が語を信ぜずば今此の草の中に、好金師有り、往きて之に問ふべし」と。賊、旣に之を見復其の衣を取る。是の如き愚人、氍と金錢とを一切都て失ふ。自ら其の利を失ひ復彼をして失はしむ。

凡夫の人も亦復是の如し。道品を修行し諸の功德を作す。煩惱の賊の劫掠する所と爲り其の善法を失ひ諸の功德を喪ふ。但、自ら其の利を失ふのみならず復餘人をして其の道業を失はしむ。身壞れ命終りて三惡道に墮つ。彼の愚人の彼と此と倶に失ふが如し。

九十八、小兒大龜を得る喩

昔、一人の小兒有り。陸地に遊戯す。一匹の大龜を得たり。意、之を殺さむと欲するも方便を知らず。而して人に問ふて言く「云何が殺すことを得むや」と。人有り語りて言く「汝、但、水中に擲置けよ。即時に殺しう可し」と。爾の時、小兒其の語を信ずるが故に即ち水の中に擲つ。龜水を得已り即便ち走り去る。

凡夫の人も亦復是の如し。[一]六根を守護し諸の功德を修せむと欲して方便を解せずして人に問ふて言く「何の因緣を作して解脫を得」と。邪見の外道、天魔[二]波旬及び惡知識之に語りて言く「但、意

【一】六根。眼・耳・鼻・舌・身・意の六官なり。根は能生の義なり、眼根は色境に對して眼識を生ずれば根となす。
【二】波旬。梵語(Pāpīman)、惡魔の名、殺者・惡者と譯す。

及び衆生の有我・無我を求め竟に中道の理を觀ずる能はず。忽然として命終り無常の殺害する所と爲り三惡道に墮つ。彼の愚人の摩尼を推求めて他の害する所と爲るが如し。

九十五、二鴿の喩

昔、雄雌二羽の鴿有り。一つの巣を共同す。秋、果熟する時果を取り巣に滿す。其の後の時に於て果乾き減少し唯半ば巣に在り。雄、雌を瞋りて言く「果を取るに勤苦す、汝、獨り之を食し唯半在る有り」と。雌の鴿、答へて言く「我獨り食せず。果自ら減少するなり」と。雄の鴿、信ぜず。瞋恚りて言く「汝、獨り食するに非ざれば何に由つて減少せむ」と。卽便ち觜を以て雌鴿を啄み殺す。未だ幾日も經ざるに天大雨を降らす。果濕潤を得て還び復故の如し。雄鴿見已り方に悔恨を生ず。彼れ實に食はず。我、妄に他を殺す。卽ち悲鳴し雌鴿を命喚ぶ。「汝、何處に去る」と。

凡夫の人も亦復是の如し。顚倒、懐に在り。妄に欲樂を取り無常を觀ぜず。重禁を犯し之を後に悔ゆ。竟に何の及ぶ所ぞ。後唯悲歎するは彼の愚の鴿の如し。

九十六、詐り眼盲と稱ふ喩

昔、工匠師有り。王の爲めに務を作す。其の苦に堪えず。詐りて言く「眼、盲たり」と。便ち苦を脱するを得たり。餘の作師有り、之を聞き便ち自ら其の目を壞り用つて苦役を避けむと欲す。人有り語りて言く「汝、何を以て自ら毀り徒に其の苦を受くるや」と。是の如きの愚人世人の笑ふ所と爲す。

凡夫の人も亦復是の如し。少しき名譽及び利養の爲めに便ち故に妄語し淨戒を毀壞る。身死し、命終り三惡道に墮つ。彼の愚人の少利の爲めの故に自ら其の目を壞るが如し。

九十三、老母、熊を捉へる喩

昔、一老母有り。樹下に在りて臥す。熊、來り搏たむと欲す。爾の時、老母樹を遶り走り避く。熊、尋いで後を逐ふ。一手樹を抱へ老母を捉へむと欲す。老母、急に即時に樹を合して熊の兩手を捺すを得たり。熊動くことを得ず、更に異人有り其の所に來至る。老母、語りて言く「汝、我と共に捉へ殺して其の肉を分たむ」と。時に彼の人、老母の語を信じ即時に共に捉へ既に之を捉へ已る。老母、卽便ち熊を捨てゝ走る。其の人、後に熊の爲に困む所となる。是の如きの愚人世の笑ふ所と爲る。

凡夫の人も亦復是の如し。諸の異論を作し既に善好らず。文辭、繁重多く諸病有り、竟に成らずして訖る。便ち捨てゝ終に亡ぐ。後人、之を捉へ爲めに解釋せむと欲し、其の意に達せず反つて其の爲めに困む。彼の愚人の他に代り熊を捉へ反つて自ら害を被るが如し。

九十四、摩尼【一】水竇の喩

昔、一人有り、他の婦と通ず。交通未だ竟らざるに夫外より來り、卽便ち之を覺り門外に住し、其の出づる時を伺ひ便ち殺害せむと欲す。婦、人に語りて言く「我が夫已に覺れり。更に出づる處無し。唯、摩尼有り、以つて出づるを得べし。(摩尼とは齊に云ふ水竇の孔なり)。其の人をして水竇より出でしめむと欲す。其人、錯り解し摩尼珠と謂へり。所在を求覓めて處を知らず。卽ち、是の言を作さく「摩尼珠を見ず。我、終に去らず」と。須臾の間に其の爲めに殺さる。

凡夫の人も亦復是の如し。人有り語りて言く「生死の中は無常・苦・空・無我なり、斷・常の二邊を離れ中道に處す。此の中に於て過ぎて解脫を得べし」と。凡夫、錯り解し便ち世界の有邊、無邊、

【一】水竇。みぞ。

説く所の如し。

今日、此の事を營み、　明日、彼事を造り　樂著して苦を觀ず　死の賊至るを覺らず。　怱々、衆務を營み、　凡人、爾らざる無し、　彼の錢を數ふる者の如く、　其の事も亦是の如し。

九十一、貧兒、富者と財物を等しくせむと欲する喩

昔、一人の貧人有り、少しく財物有り、大富者を見て意共に等しくせむと欲す。等しくする能はざるの故に少賊有りと雖も水中に棄てむと欲す。傍人、語りて言く「此の物、尠しと雖も君の性命を數日延ばすを得べし。何故に捨棄てゝ水中に擲著かんとするや」と。

世間の愚人も亦復是の如し。出家を得と雖も少しの利養を得、心に悕望有り、常に不足を懷く。高德者と等しく其の利養を得ること能はず。他の宿舊有德の人を見るに素り多聞、多衆の供養有り。意之と等しくせむと欲して等しくする能はざるの故に心に憂苦を懷く。便ち道を罷めむと欲す。彼の愚人富者に等しくせむと欲し自ら己の財を棄つるが如し。

九十二、小兒、歡喜丸を得る喩

昔、一人の乳母有り。兒を抱へて路を涉り。道を行き疲極る。睡眠りて覺らず。時に一人有り、歡喜丸を持ち小兒に授與ふ。小兒、得已り其の美味を貪ぼり身物を顧ず。此の人、即時其の鉗鏁、瓔珞の衣物を解き都て盡く持ち去る。

比丘も亦爾なり。衆務の[一]憒閙の處に樂在み少しき利養を貪り、煩惱の賊の爲めに其の功德戒寶の瓔珞を奪はる。彼の小兒の少味を貪ぼるが故に一切の所有、賊盡く持ち去るが如し。

【一】憒閙。さわがしきこと。

の一を覓めむと欲す。未だ一つの豆を得ずして先に捨てし所の者は、雞・鴨、食ひ盡す。

凡夫、出家も亦復、是の如し。初め一つの戒を毀りて悔ゆること能はず。悔ひざるを以ての故に放逸滋蔓り一切都て捨つ。彼獮猴の其の一つの豆を失うて一切都て失ふが如し。

八十九、金の鼠狼[1]を得る喩

昔、一人有り。路に在りて行く。道中に一つの金の鼠狼を得たり。心に喜踊を生じ持ちて懷中に置く。道中を渉りて進む。水に至り渡らむと欲す。衣を脱して地に置く。尋いで時に金鼠變じて毒蛇と爲る。此人、深く思ふやう「寧ろ毒蛇と爲り、螫し殺すも要ず當に懷に入れて去るべし」と。心の至冥に感じ還び化して金と爲る。傍邊の愚人、其の毒蛇變じて眞實(金)と成るを見て謂へらく「恒に爾なり」と爲す。復、毒蛇を取り懷の裏に內著く、卽ち、毒蛇の[2]螫螫す所と爲り身を喪ひ命を殞す。

世間の愚人も亦復是の如し。善く利を獲るを見て內に眞心無し。但利養の爲に法に來附く、命終の後惡處に墮し毒蛇を捉へ螫れて死するが如し。

九十、地に金錢を得る喩

昔、貧人有り。路に在りて行く。道中偶一つの囊の金錢を得たり。心大いに喜踊び、卽便ち之を數ふ。數へて周る能はざるに金主忽ち至る。盡く還錢を奪ふ。其人、時に當り悔ひて疾く去らず。懊惱の情甚だ極めて苦しと爲す。

佛法に遇ふ者も亦復是の如し。三寶の福田に値遇ふことを得と雖も勤めて方便し善業を修業せず。忽爾、命終し三惡に墮つ。彼の愚人の還び其の主の爲めに錢を奪はれ而して去るが如し。偈の

【一】鼠狼。いたちの異名。

【二】螫螫、蟲などのさして毒を出すこと。

昔、父子二人有り。事に縁りて共に行く。路に賊卒に起り來り之を剝がむと欲す。其の兒、耳の中に眞金の璫有り。其の父、賊卒に發るを見て耳璫を失ふを畏れ卽便ち手を以て之を挽く。耳、時に決けず。耳璫の爲めの故に、便ち兒の頭を斬る。須臾の間に賊便ち棄てゝ去る。還び兒の頭を以て肩の上に著くるも平復すべからず。是の如きの愚人世間笑ふ所と爲る。

凡夫の人も亦復是の如し。名利の爲めの故に戲論を造作す。二世有り、二世無し、中陰[1]有り、中陰無し。心數法[2]有り、心數法無しと言ふ。種々妄想し法の實を得ず。他人の如法論を以て其所論を破り便ち言く「我が論中都て是說無し」と。是の如きの愚人小名利の爲に便ち故に妄語し沙門の道果を喪ふ。身壞れ命終して三惡道に墮つ。彼の愚人、少利の爲めの故に其の兒の頭を斬るが如し。

八十七、劫盜し財を分つ喩

昔、群賊有り。共に劫盜に行き多く財物を取る。卽ち共に之を分つ。等しく以て分つことを爲せり。唯、鹿野欽婆羅[1]の色純好ならざる有り、以て下の分と爲し、最劣者に與ふ。下劣者之を得て恚恨し、謂く大失なりと呼び。城に至り之を賣る。諸の貴き長者多く其に價を與ふ。一人の得る所業件に倍す。方に乃ち歡喜し踊悅すること量り無し。猶。世人布施の報有るや報無きやを知らず。而して少施を行ひ天上に生るゝを得て無量の樂を受く。方に更に悔恨し廣く施さゞるを悔ゆるが如し。欽婆羅、後大價を得て乃ち歡喜を生ずるが如し。施も亦是の如し。少しく作すも多く得、爾れば乃ち自ら慶び恨むは益と爲さず。

八十八、獼猴、豆を把る喩

昔、一匹の獼猴有り。一把の豆を持ち誤つて一つの豆を落す。地に在り。便ち手中の豆を捨て其

【一】中陰。又中有といふ、此に死して彼に生ずる中間に於て受くる陰形を云ふ、陰は五陰の陰なり。

【二】心數法。心所法に同し、心のはたらきを一つの實體あるものと見て心所法となす。

【一】鹿野欽婆羅。梵語(Kambala)。欽婆羅とは毛衣を云ふ、此衣に二種有り、髮欽婆羅は人の髮を織つて作り、毛欽婆羅は犀牛の尾を織り作る、今は第二のもの。

昔、一獼猴有り、大人の打つ所と爲る。奈何ともする能はず。反つて小兒を怨む。
凡夫、愚人も亦復是の如し。先に瞋る所の人代謝して停まらず、滅して過去に在り。乃ち相續して後生するところの法に於て是を前者と謂へ、妄に瞋忿を生じ毒恚彌深し。彼の癡猴の大人の爲めに打たれて反つて小兒を瞋るが如し。

八十四、月蝕にて狗を打つ喩

昔、阿修羅王、日月の明淨を見て手を以て之を障ゆ。無智の常人、狗の罪咎無きに横に惡を加ふ。
凡夫も亦爾なり。貪瞋・愚癡にして横に其の身を苦め、蕀刺の上に臥し五熱身を炙く。彼の月蝕に枉げて横に狗を打つが如し。

八十五、婦女、眼痛を患ふ喩

昔、一人の女人有り。極めて眼痛を患ふ。知識の女人有り問ふて言く「汝の眼、痛むや」と。答へて言く「眼、痛む」と。彼女、復言く「眼有らば必ず痛む。我、痛まずと雖も並に眼を挑らむと欲す。其の後痛むを恐るゝなり」と。傍人、語りて言く「眼若し在らば或は痛み(或は)痛まず。眼若し無ければ終身長く痛む」と。
凡愚の人も亦復是の如し。富貴は衰患の本と聞き畏れて布施せず。後、報を得るを恐る。財物殷溢れて重ねて苦惱を受く。人有り語りて言く「汝、若し施さば或は苦、或は樂なり。若し施さずむば貧窮、大苦なり」と。彼の女人、近き痛を忍びず便ち眼を去らむと欲し、乃ち長き痛を爲すが如し。

八十六、父、兒の耳璫を取る喩

昔、父子有りて伴に共に行く。其の子林に入り熊の嚙む所と爲る。爪、身體を壞り困み急に林を出づ。還りて伴の邊に至る。父、其の子を見るに身體、傷壞る。怪みて之に問ふて言く「汝、今、何の故に此の瘡の害を被る」と。子、父に報じて言く「一種の物有り、身毛、[一]耽毿にして來りて我を毀害ふ」と。父、弓箭を執り往きて林間に到り、一人の仙人の毛髮深く長きを見て便ち之を射むと欲す。傍人、語りて言く「何故に之を射る。此の人害無し。當に過有るを治すべし」と。

世間の愚人も亦復是の如し。彼、法服を著ると雖も道行無き者の罵辱する所と爲りて濫に良善、有德の人を害す。喩へば彼の父、熊の其子を傷くるを而も枉げて神仙に加ふるが如し。

八十二、種を田に比ぶ喩

昔、野人有り。田里に來至するに好き麥苗生長し欝茂するを見る。麥主に問ふて言く「云何が能く是麥茂り好からしむ」と。其の主、答へて言く「其の地を平治し兼ねて糞水を加ふ。故に是の如きを得たり」と。彼の人卽便ち法に依つて之を用ふ。卽ち水糞を以て其の田に調和し種を地に下す。其の自の脚、地を蹈み堅からしめ其の麥を生ぜざるを畏れ、我、當に一つの床の上に坐し人をして之を輿はしめ上に於て種を散くべし。爾れば乃ち好き耳」と。卽ち四人の人をして一脚を擎げしめ田に至りて種を散く。地堅きこと逾甚し。人の嗤笑ふ所と爲る。己の二足を恐れ更に八足を增す。

凡夫の人も亦復是の如し。旣に戒田を修し善芽將に生ぜむとす。師の諮に應當じ教誡を受行し法芽を生ぜしむ。而して反つて違犯し多くの諸惡を作す。便ち、戒の芽を生ぜざらしむ。喩ば彼の人其の足を畏れて倒に其の八を加ふるが如し。

八十三、獮猴の喩

【一】耽毿。毛深く長きこと。

昔、一王有り。無憂園の中に入り歡娛し樂を受けむと欲す。一臣に勅して言く「汝一つの机を捉り持ちて彼の園に至り、我、用つて坐し息まむ」と。時に、彼の使人、羞て肯て捉らず。而して王に白して言く「我、捉ること能はず。我、願くば之を擔はむ」と。時に王、便ち三十六の机を以て其の背の上に置き驅けて之を擔はしめ、園中に至れり。是の如く愚人世の笑ふ所と爲る。

凡夫の人も亦復是の如し。若し女人の一髮地に在るを見て自ら言く「戒を持ち肯て之を捉へず」と。後、煩惱の惑さるゝ所と爲り、三十六物、卽ち髮毛・爪・齒・屎尿等の不淨以て醜と爲さず。三十六物、一時都て捉りて慚愧を生せず。死に至るも捨てず。彼の愚人の机を擔負ふが如し。

八十、倒に灌ぐ喩

昔、一人有り。下部の病を患ふ。醫言く「當に倒に灌ぎ須ふべし、乃ち差ゆ可き耳」と。便ち灌具を集め以て之を灌がむと欲す。醫、未だ至らざるの頃便ち取りて之を服む。腹、張り死せむと欲し自ら勝ふる能はず。醫、既に來至り其の所以を怪む。卽便ち之に問ふらく「何の故に是の如きや」と。卽ち、醫に答へて言く「向の時、我れ灌藥を取りて之を服む。是の故に死せむと欲す」と。醫、是の語を聞き深く之を責めて言く「汝、大愚人、方便を解せず」と。卽便ち餘藥を以て之を服まし方に吐き下せり。爾れば乃ち差ゆるを得たり。此の如き愚人世の笑ふ所と爲る。

凡夫の人も亦復是の如し。禪觀種種の方法を修學せむと欲し[一]不淨を觀ずべきを反つて[二]數息を觀ず。數息なるべき者を反つて[三]六界を觀ず。上下を顚倒し根本有ること無く徒に身命を喪ふ。其の困む所と爲る。良師に諮らず禪法を顚倒するは彼の愚人の不淨を飮服むが如し。

八十一、熊の嚙む所と爲る喩

【一】不淨(觀)。五停心觀の一、貪心を治する爲に身の不淨を觀ずるなり。
【二】數息(觀)。五停心觀の一、出入の息を數へて心想の散亂を停止する觀法。
【三】六界。又六大ともいふ。地・水・火・風・空・識の六法。

昔、邊國の人驢を識らず。他の說言を聞く「驢の乳甚だ美し」と。都て識る者無し。爾の時、諸人一匹の父の驢を得たり。其の乳を搾らむと欲す。諍ひて共に之を捉ふ。其の中に頭を捉る者有り、耳を捉る者有り、尾を捉る者有り、脚を捉る者有り。復、器を捉る者有り、各先に得て前に之を飲まむと欲す。中に驢の(男)根を捉へ謂うて是れ乳なりと呼ぶ。卽便ち之を搾り其の乳を得むと望む。衆人、疲れ厭きて都て得る所無し。徒に自ら勞苦して空しく獲る所無し。一切世人の嗤笑する所と爲る。

外道、凡夫も亦復是の如し。道に於て求むる處に應ぜざるを說くを聞き妄に想念を生じ種々の邪見を起す。裸形、自ら餓え、巖に投じ、火に赴く。是の邪見を以て惡道に墮つ。彼の愚人の妄に乳を求むるが如し。

七十八、兒と與に早く行くを期する喩

昔、一人有り、夜、兒と語りて言く「明、當に汝と共に彼の聚落に至り取り索むる所有るべし。」兒、語を聞き已り明旦に至り父に問はずして獨彼に往詣く。旣に彼に至り已る。身體疲れ極まり空しく獲る所無し。又、食を得ず、飢渴して死せむと欲す。尋いで復迴り還り、來りて其の父に見ゆ。父、子の來るを見て深く之を責めて言く「汝、大に愚癡にして智慧有ること無し。何ぞ我を待たずして空しく自ら往來するや」と。徒に其の苦を受け、一切世人の嗤笑する所と爲る。

凡夫の人も亦復是の如し。設ひ出家を得、卽ち鬚髮を剃り[一]三法衣を服るゝも明師を求め道法を諮受せざれば諸の禪定、道品の功德を失ひ沙門の妙果一切都て失ふなり。彼の愚人の虛く往返し徒に自ら疲勞するが如く形、沙門に似たりとも實に得る所無し。

七十九、王の爲に机を負ふ喩

【一】三法衣。一に僧伽梨、衆聚時衣と譯す、大衆集會して授戒說戒等の嚴議を爲す時又は外出の時に着るもの、二、鬱多羅僧、上衣と譯す、安陀會の上に着るもの、三、安陀會、中着衣と譯す、體に襯して着るもの。

ら之を出すを得べし」と。卽ち其語を用ひ刀を以て頭を斬る。既に復駝を殺して復甕を破る。此の如き癡人世間の笑ふ所なり。

凡夫愚人も亦復是の如し。心に菩提を悕ひ三乘を志求む。宜しく禁戒を持ち諸惡を防護すべし。然るに五欲の爲めに淨戒を毀破る。既に禁を犯し已り三乘を捨離す。心を縱にし意を極めて惡を造らざる無し。乘と及び淨戒と二つ乍ら倶に捐捨つ。彼の愚人の駝と甕と倶に失ふが如し。

七十六、田夫、王女を思ふ喩

昔、田夫有り。城邑を遊行し國王の女顏貌端正にして希有なる所を見て晝夜想念ひ情已むこと能はず。與に交通を思ふも遂ぐ可き由無し。顏色[一]瘀黃卽ち重病と成る。諸親の見る所となり。便ち其の人に問ふやう「何の故に是の如きや」と。親里に答へて言く「我、昨王女を見るに顏貌、端正なり、與に交通せむと思ふも得ること能はず。故に是を以て病む耳、我、若し得ざれば必ず死すこと疑無し」と。諸親語りて言く「我、當に汝の爲めに好方便を作し汝をして之を得せしむべし、愁を得る勿れ」と。後日之に見え便ち之に語りて言く「我等汝の爲めに便ち是を爲すを得たり。唯王女欲せざるなり」と。田夫之を聞き欣然として笑ひて謂く「必ず得たり」と呼へり。

世間の愚人も亦復是の如し。時節の春・秋・冬・夏を別たず。便ち冬時に於て種を土中に擲ち果實を得るを望むも徒に其の功を喪ひ空しく獲る所無し。芽・莖・枝葉一切都て失ふ。世間の愚人少福を修習し謂く「具足を爲せり」と。便ち謂らく菩提已に證得す可けむ」と。彼の田夫の王女を悕望むが如し。

七十七、驢の乳を搆る喩

【一】瘀黃。血の迴り惡く黃色くなること。

軍衆既に去り便ち家に還らむと欲す。即ち他人の白馬の尾を截り來り既に舍に到り已る。人有りて問ふて言く「汝、乘る所の馬今所在と爲す。何を以て乘らざる」と。答へて言く「我が馬已に死す。遂に尾を持ちて來れり」と。傍人語りて言く「汝の馬本黑尾なり、何を以て白きや」と。默然として對へ無し、人の笑ふ所と爲る。

世間の人も亦復是の如し。自ら言く「善好く修行し慈心にして酒肉を食せず」と。然れども衆生を殺害し諸の〔一〕楚毒を加ふ。妄りに自ら善と稱すも惡造らざる無し。彼の愚人の詐り馬死すと言ふが如し。

七十四、出家・凡夫利養を貪る喩

昔、國王有り。教法を設くるやう「諸の婆羅門等有り、我が國內に在りては制抑し不洗淨者を洗淨せよ」と。驅令・策使・種々に苦役す。婆羅門有り、空しき澡罐を捉り詐りて言く「人を洗淨す。其の爲めに水を著け卽ち瀉棄す」と。便ち是言を作さく「我、洗淨せざれば王自ら之を洗はむ。王意の爲の故に用つて王役を避く」と。妄りに洗淨と言ひ實は之を洗はず。

出家・凡夫も亦復是の如し。剃頭・染衣、內實は禁を毀る。詐りて持戒を現じ、利養を望み求む。復、王役を避け外は沙門に似て、內實は虛欺なり。空しく瓶を捉り但、外相有るが如し。

七十五、駝と甕と倶に失ふ喩

昔、一人有り。先に甕の中に穀を盛る。駱駝、頭を甕の中に入れ穀を食ひ又出すを得ず。既に出すことを得ざれば以て憂惱と爲す。一人の老人有り、來りて之に語りて言く「汝、愁ること莫れ、我、汝に出すことを敎ふ。汝、我が語を用ひなば必ず速に出すことを得む。汝、當に頭を斬らば自

〔一〕楚毒。苦しみ。

昔、一人有り。二婦を聘取る。若し其の一に近きなば一の瞋る所と爲り、裁斷すること能はず。便ち二婦の中間に在り正身仰臥す。天大に雨降り、屋舍に淋ぎ漏るに遇ふ。水土倶に下り、其の眼の中に墮つ、先の要有るを以て敢て起ちて避けず。遂に二目をして倶に其の明を失はしむ。

世間の凡夫も、亦復是の如し。邪友に親近し非法を習行ひ結業を造作り三惡道に墮つ。長く生死に處り智慧の眼を喪ふ。彼の愚夫其の二婦の爲めの故に二眼倶に失ふが如し。

七十二、米を唵み口を決く喩

昔、一人有り、婦の家舍に至り其の米を擣くを見る。便ち其の所に往き米を偸み之を唵む。婦來り夫を見て其と共に語らむと欲す。口中に滿つる米都て和す應らず。其婦に羞る故に肯て之を棄てず。是を以て語らず。婦、語らざるを怪しみ、手を以て摸り看、謂らく其の口腫れたりと。其の父に語りて言く「我夫、始めて來り卒に口腫れて都て語ること能はず」と。其の父、卽便ち醫を喚び之を治す。時に醫言曰く「此の病最も重し。刀を以て之を決かば差ゆるを得可き耳」と。卽便ち刀を以て其の口を決破る。米、中より出で其の事彰露る。

世間の人も亦復是の如し。諸の惡行を作し淨戒を犯す。其の過を覆藏し肯て發露かず。地獄・畜生・餓鬼に墮つ。彼の愚人小羞を以ての故に肯て米を吐かず。刀を以て口を決き乃ち其の過顯る」如し。

七十三、詐り馬死すと言ふ喩

昔、一人有り。一つの黑馬に騎り陣に入りて賊を撃つ。其の怖を以ての故に戰鬪すること能はず。便ち血を以て其の面目に汚塗し詐り死相を現じ死人の中に臥す、其の乘る所の馬他の爲めに奪はる。

食せざるや」と。夫、婦に答へて言く「好き密事有り、汝に語るを得ず」と。婦、其の言を聞き謂らく異法有りと。慇懃之を問ふ、良久しくして乃ち答ふらく「我が祖父以來の法常に速に食す、我、今之に効ふ。是故に疾き耳」と。

亦復是の如し。正理に達せず、善惡を知らず。諸の邪行を作し以て恥と爲さず、而して云く、「我が祖父已來是の如き法を作す」と。死に至るまで受行ひ終に捨離せず。彼の愚人の其の速食を習ひ以て好法と爲すが如し。

七十、菴婆羅果を嘗む喩

昔、一人の長者有り、人を遣はし錢を持ち他の園中に至り菴婆羅果を買ふて之を食せむと欲す。而して之に勅して言く「好き甜美き者汝當に買ひ來るべし」と。即便ち錢を持ち往きて其の果を買ふ。果主、言く「我が此の樹果悉く皆美好し一の惡き者無し。汝、一果を嘗めなば以て之を知るに足らむ」と。果を買ふ者言く「我、今、當に一々之を嘗むべし。然る後取るべし。若し但一を嘗むとも何を以て知る可き」と。尋いで卽ち果を取り一一皆嘗め持ち來り家に歸る。長者、見已り惡みて食はず。便ち一切都て棄てぬ。

世間の人も亦復是の如し。持戒と施は大富樂を得身常に安穩にして諸の患有ること無しと聞くも肯て之を信せず。便ち是の言を作さく「布施して福を得と、我自ら時に得て然る後信ず可し」と。目に現世の貴賤、貧窮皆是れ先業の獲る所の果報と視て一を推し以て因果を求むるを知らず、方に不信を懐く、已の自經を須ち一旦命終る。彼果を嘗め一切都て棄つるが如し。

七十一、二婦の爲の故に其の兩目を喪ふ喩

【一】菴婆羅果。梵語(Āmra)、マンゴー。

【二】自經。自頸に同じ、自らくびきること。

の餅の爲めの故に賊を見て喚ばざる」と。其の夫、手を拍ち笑ひて言く「咄！ 婢よ、我定むで餅を得たり、復爾に與へず」と。世人之を聞き嗤笑せざる無し。

凡夫の人も亦復是の如し。小名利の爲めの故に詐て靜默を現はす。虛假の煩惱、種々の惡賊の侵略する所と爲り其の善法を喪ひ三塗に墜墮つ。都て怖畏れて出世の道を求めず。方に五欲に於て耽著し嬉戲す。大苦に遭ふと雖も以て患と爲さず。彼の愚人の如く等く異り有ること無し。

六十八、共に相ひ怨害する喩

昔、一人有り。他と共に相ひ嗔る。愁憂し樂しまず。人有り問ふて言く「汝、今何の故に愁悴是の如きや」と。卽ち之を答へて言く「人有り我を毀る。力るも報ゆる能はず。何ぞ方に之に報ひ得べきかを知らず。是を以て愁る耳」と。唯、[一]毘陀羅呪有り以て彼を害す可し。「但し一患有らば未だ彼を害するに及ばざるに反つて自ら害せむ」と。其の人聞き已り便ち大に歡喜び「願くば但、我に敎へよ、自ら害すべしと雖も要ず彼を傷くるを望む」と。

世間の人も亦復是の如し。瞋恚の爲めの故に毘陀羅呪を求めて用つて彼を惱まさんと欲す。竟に未だ他を害せざるに先づ瞋恚の爲めに反つて自ら惱害し、地獄・畜生・餓鬼に墮つ。彼の愚人の如く等しくして差別無し。

六十九、其の祖先に效ひ急速に食ふ喩

昔、一人有り。北天竺より南天竺に至る。住止ること旣に久し。卽ち其の女を聘し共に夫婦と爲る。時に婦、夫の爲めに飲食を造り設けぬ。夫、得て急いで呑み其の熱を避けざるなり。婦、時に之を怪しみ其の夫に語りて言く「此の中賊、劫奪の人無ければ何の急事有り怱怱乃ち爾る。安徐に

【一】毘陀羅呪。梵語（Vetala）西土に呪法あり、死屍を起たしめ去て人を殺さしむる呪法。

卷の第四

六十六、口に乘船の法を誦へ而も用ふることを解せざる喩

昔、大長者の子有り。諸の商人と共に海に入りて寶を採る。此の長者の子善く海に入り船を捉る方法を誦す。若し海水の[一]漩洑・[二]洄流・磯激するの處に入らば當に是の如く捉り是の如く正しくし是の如く住すべし。衆人に語りて言く「海に入るの方法我悉く之を知る」と。衆人聞き已り深く其の語を信じ既に海中に至る。未だ幾時を經ざるに船師、病に遇ひ忽然として便ち死す。時に長者の子卽便ち處に代る。洄洑、駛流の中に至る。唱へて言く「當に是の如く捉り是の如く正しくすべし」と。船、盤迴し旋轉し前進して寶所に至ること能はず。船を擧て商人水に沒して死せり。

凡夫の人も亦復是の如し。少しく禪法の[三]安般、數息及び不淨觀を習ひ其文を誦すと雖も其の義を解せず。種種の方法も實には曉る所無くして自ら善く解すと言ひ、妄りに禪法を授け前人をして迷亂して心を失はしむ。法相を倒錯して終年、累歲、空しく獲る所無し。彼の愚人の他をして海に沒せしむるが如し。

六十七、夫婦餅を食ひ共に要を爲す喩

昔、夫婦有り、三番の餅有り。夫婦共に分ち各一つの餅を食す。餘の一番在り、共に要言を作すらく「若し語ることあらば要ず餅を與へず」と。旣に要を作し已り一つの餅の爲めの故に各敢て語らず。須臾にして賊有り、家に入りて偸盜み其の財物を取り一切の所有、賊手に盡し畢る。夫婦の二人先の要を以ての故に眼に看て語らず。賊、語らざるを見て卽ち其の夫の前にて其婦を侵略す。其の夫、眼に見て亦復語らず。婦、便ち賊を喚び其の夫に語りて言く「云何が癡人ぞ。一つ

【一】漩洑。波浪洄る貌。
【二】洄流。さかまく貌。
【三】安般。梵語(Ānāpāna)、譯、數息觀、出息・入息を數て心を鎭る觀法の名。

加へ大いに珍寶を賜ひ封ずるに聚落を以てす。彼の王の舊臣咸嫉妬を生じて王に白して言さく「彼は是、遠人なり。未だ服信すべからず、如何が卒に爾るや、寵遇厚きに過ぎ爵賞、舊臣に踰越ゆるに至る」と。遠人聞き已りて是の言を作さく「誰か勇健にして能く我と共に試むるもの有りや。請ふ平原に於て其の技能を校べむ」と。舊人愕然として敢て敵する者無し。後の時、彼の國の大曠野の中に惡師子有り。道を截ち人を殺し王の路を斷絕す。時に彼の舊臣詳に共に之を議するやう「彼の遠人は自ら勇健能く敵する者無しと謂ふ。今、復若し能く彼の師子を殺し國の爲めに害を除かば眞に奇特と爲す」と。是の議を作し已り便ち王に白す。王、是を聞き已り刀杖を給賜ひ尋いで即ち之を遣はす。爾の時、遠人既に勅を受け已り其の意を堅彊くし師子の所に向ふ。師子之を見て奮激し鳴吼・騰躍して前む。遠人驚怖し即便ち樹に上る。師子口を張り頭を仰ぎ樹に向ふ。其の人怖れて急に捉ふる所の刀を失ふに師子の口に値ふ。師子尋いで死す。爾の時、遠人歡喜・踴躍し來り王に白す。王、倍寵遇す。時に彼の國人卒に爾く敬服し咸皆讃嘆す。

其の婦人の歡喜丸とは不淨施に喩へ、王使に遣はすとは善知識に喩へ、他國に至るとは諸天に喩へ、群賊を殺すとは須陀洹を得强いて五欲并びに諸煩惱を斷つに喩ふ。彼の國王に遇ふとは賢聖に遭値ふに喩へ、國の舊人等嫉妬を生ずとは諸外道有智者の能く煩惱及び五欲とを斷つを見て便ち誹謗を生じ此の事無しと言ふに喩ふ。遠人、激厲して舊臣に言ふに能く我と共に敵と爲る者無しとは外道敢て抗衡する無きに喩ふ。師子を殺すとは魔を破し既に煩惱を斷ち又惡魔を伏し便ち無著の道果の封賞を得るに喩へ、每常に怖怯とは能く弱を以て彊を制するに喩ふるなり。其の初時に於て淨心無しと雖も然も彼の其の施善知識に遇はゞ便ち勝報を獲。不淨の施も猶尚此の如し。況んや復善心にて歡喜し布施するをや。是の故に應に福田の所に於て心を勸め施を修すべし。

ぞ。然れども諸の衆生横に是非を計し強いて諍訟を生ず。彼二人の如く等しくして差別無きなり。

六十五、五百の歡喜丸の喩

昔、一人の婦人有り。荒婬度無し。欲情既に盛にして其の夫を嫉惡む。毎に方策を思ひ頻に殘害はんことを欲す。種々に計を設くるも其の便を得ず。會其の夫聘せられて隣國に使するに値ふ。婦密に計を爲し毒の藥丸を造り用つて夫を害せむと欲す。詐り夫に語りて言く「爾、今遠く使す。慮るに乏短有り。今、我れ、五百の歡喜丸を造作り、以用つて資糧と爲し爾に送る。爾若し國を出で丶他の境界に至り飢困の時乃ち取りて食す可し」と。夫、其の言を用ひ他界に至り已に未だ食するに及ばず。夜の闇の中に於て林間に止宿る。惡獸を畏懼れ樹に上り之を避く。其の歡喜丸を忘れて樹の下に置く。卽ち其の夜、五百の偸賊の彼の國王の五百疋の馬と幷びに寶物とを盜み來りて樹の下に止るに遇ふ。其の逃突に由り盡く皆飢渴す。其の樹下に於て歡喜丸を見、諸賊取り已り各一丸を食す。藥の毒氣盛にして五百の群賊一時に倶に死す。時に樹の上の人天明に至り已に此の群賊死して樹下に在るを見る。詐りて刀と箭とを以て死屍を斫り射て其の鞍馬と幷びに財寶とを收め驅けて彼の國に向ふ。時に彼の國王多く人衆を將ゐ迹を案へ來り逐ふ。會中路に於て彼の王に値ふ。彼王、問ふて言く「爾は是れ何人ぞや、何處にて馬を得たるか」と。其の人答へて言く「我は是、某國の人なり。而して道路に於て此の群賊に値ふ。共に相ひ斫射す。五百の群賊今皆一處に死して樹の下に在り。是に由るが故に我れ此の馬と珍寶とを得、來り王の國に投ずなり。若し信ぜられずば遣はし往かしめ賊の瘡痍・殺害の處所を看るべし」と。王、時に卽ち親信を遣はし往きて看るに果して其の言の如し。王、時に欣然として未曾有と歎ず。既に國に還り已り厚く爵賞を

昔、[一]乾陀衞國に諸の伎兒有り。時の飢儉に因り遂に他土に食す。婆羅新山を經たり。而して此の山中素より惡鬼、食人、羅刹饒し。時に諸の伎兒會山中に宿る。山中風寒く火を然して臥す。伎人の中寒を患ふ者有り彼の戯(技)の羅刹の衣服を著、火に向つて坐す。時に行伴の中睡より寤る者卒に火邊を見るに一羅刹有り、竟に諦に觀ずして之を捨てゝ走る。遂に相ひ驚動し一切の伴侶悉く皆逃け奔る。時に彼の伴の中、羅刹の衣を著る者も亦復尋いで逐ひて奔馳し絕走す。諸の同行者其の後に(彼の)在るを見て謂らく「害を加へむと欲す」と。倍增惶怖れて山河を越度り[二]溝壑に投赴き身體、傷つき破れ疲極まり、[三]委頓す。乃ち天の明くるに至り鬼に非るを知る。

一切の凡夫も亦復是の如し。煩惱に處り善法に飢儉ゆ。而して遠く常・樂・我淨の無上の法食を求めむと欲し便ち五陰の中に於て橫に我を計す。我見を以ての故に生死に流馳り、煩惱の逐ふ所となり、自在を得ず。三塗惡趣の溝壑に墜墮つ。天の明に至るとは生死の夜盡き智慧の明曉に喩ふ。方に五陰に、眞我有ること無きを知る。

六十四、人謂らく、故屋中惡鬼有りとの喩

昔、故屋有り、人々、此の室に常に惡鬼有りと謂ひ皆悉く怖畏れて敢て寢息まず。時に一人有り自ら「大膽なり」と謂ひ、而して是の言を作さく「我、此の室の中に入り寄臥して一宿せむと欲す」と。卽ち入りて宿止る。後に一人有り、自ら謂ふやう「膽勇前の人に勝る」と。復、傍人の「此の室の中に恒に惡鬼有り」と言ふを聞き、卽ち中に入らむと欲し門を排して前まむとす。時に先に入る者是れ鬼なりと謂ひ、卽ち復門を推して、遮り前むことを聽さず。後に在りて來る者復謂へらく鬼有りと。二人鬪諍し遂に天明に至る。旣に相ひ覩已り方に鬼に非るを知る。

一切の世人も亦復是の如し。因緣暫く會ひ宰主有ること無し。一一推析せば誰か是れ我なる者

【一】乾陀衞國。梵名(Gandhāra)、印度カシュミールの西北、パンヂヤツブの北に在りし國名。
【二】溝壑。みぞ、たに。
【三】委頓。たふれること。

を作ること極めて小なり、脚を作ること極めて小にして、踵を作ること極めて大なり。毘舍闍鬼の似如し」と。

此の義を以ての故に當に知るべし。各各自の業の造る所にして梵天の能く造るに非ざるなり。諸佛の說法二邊著せず、亦斷に著せず亦常に著せず。八正道の說法の如似し。諸の外道、是れを斷と見、常事を見已り、便ち執著を生じ、世間を欺誑し法の形像を作る。說く所實に是れ非法なり。

六十二、病人、雉の肉を食ふ喩

昔、一人有り。病患委に篤し。良醫、之を占ふて云く「恒に一種の雉肉を食ふべし。病愈るを得べし」と。而して此の病者市に一羽の雉を得、之を食し已に盡く。更に復食せず。醫、後の時に於て見え、便ち之に問ふやう「汝の病、愈るや未なりや」と。病者答へて言く「醫、先に我に恒に雉の肉を食せよと敎ゆ。是の故に今一羽の雉を食し已に盡く。更に敢て食せず」と。「汝、今云何が一羽の雉を食するに止め病を愈すを得むと望むや」と。

一切の外道も亦復是の如し。佛、菩薩の無上良醫の說いて心識を解すべしと言ふを聞いて外道等常見を執す。便ち謂く過去・未來・現在は唯是れ一識にして遷謝有ること無しと。猶一羽の雉を食するがごとし。是の故に愚惑にして煩惱の病を療すこと能はず。大智の諸佛、諸の外道を敎へ其の常見を除き給ふ。一切の諸法は念念生滅す。何ぞ一識、常恒變らざること有らむ。彼の世(間)の醫の更に雉を食して病愈ることを得と敎ふるが如く、佛も亦是の如し。諸の衆生を敎へて諸法を解するを得せしむ。壞するが故に不常にして、續の故に不斷なり。卽ち常見の病を滅除するを得るなり。

六十三、伎兒、戲に羅刹の服を著て共に相ひ驚怖する喩

【三】毘舍闍。羅刹に類せる鬼神の一種、癲狂鬼・食血肉鬼・噉精鬼と譯す。

ふ。法の珍寶を得ず、常に惡道の窮に處る。正法を背き棄て、彼の事に緣り瓶を觀、終に常に覺已ること無し、是の故に法の利を失ひ、永く解脫の時無し。

六十、水底の金影を見る喩

昔、癡の人有り、大いなる池の所に往き水の底の影を見るに眞金の像有り。謂く金有りと呼ぶ。卽ち水の中に入り泥を撓し求覓む。疲極りて得ず。還び出でて復坐し、須臾にして水清み又金色を現ず。復更に裏に入り泥を撓し更に求覓めて、亦復得ず。其の父、子を覓め來りて子を見るを得、子に問ふて言く「汝、何の作す所ありて疲困是の如きや」と。子、父に白して言さく「水の底に、眞金有り。我、時に水に投じ泥を撓し取らむと欲す。疲極りて得ず」と。父、水の底の眞金の影を看て此の金の樹上に在るを知る。之を知る所以は影水底に現ずればなり。其の父言ひて曰く「必ず飛鳥の金を銜へて樹の上に著きしものあらん」と。卽ち父の語に隨ひ樹に上り求めて得たり。

凡夫、愚癡の人の無智も亦是の如し　無我の(五)陰の中に横に有我の想を生ず、彼の金の影を見るが如く、勤苦して求覓むるも、徒に勞し得る所無し。

六十一、梵天の弟子、物を造る喩

婆羅門の衆皆言く「大梵天王[1]は是れ世間の父なり、能く萬物を造る」と。造萬物主に弟子有り、言く「我も亦能く萬物を造らん」と。實に是れ愚癡にして自ら有智と謂へり。梵天に語りて言く「我、萬物を造らむと欲す」と。梵天王、語りて言く「此の意を作すこと莫れ、汝造ること能はず」と。天の語を用ひず便ち物を造らむと欲す。梵天、其の弟子の造る所の物を見、卽ち之に語りて言く「汝、頭を作ること太だ大にして、項を作ること極めて小なり。手を作ること太だ大にして、臂

【一】梵天。梵語 Brahma-deva)。

むることを教へん。現に所有る物を破りて二分と作せ」と。「云何が之を破らんか」と。「所謂、衣裳の中を割きて二分と作し、盤、瓶亦復破りて二分と作し、、所有瓮、瓨亦破りて二分と作し錢も亦破りて二分と作せ」と。是の如く一切の所有財物盡く皆之を破りて二分と作す。是の如く物を分ちて人の嗤笑すると所となる。

諸外道の偏に分別論を修するが如し。論門に四種有り、決定答論門有り、譬へば人には一切皆死有り、此は是れ決定答論門なり。死すれば必ず生有り、是應に分別して答ふべし。愛盡くれば生無く愛有らば必ず生有りと。是を分別答論門と名く。人を最勝と爲すや不やと問ふ者あらば、應に反問して言ふべし。汝【三】三悪道を問ふや諸天を問ふと爲すや。若し三悪道を問はば人を實に最勝と爲し、若し諸天を問はば人必ず如かずと爲す。是の如き等の義を反問答論門と名く。若し十四難を問ふ。世界と衆生との有邊・無邊・有終始・無終始是の如き等の義を問ふは置答論門と名づく。諸の外道愚癡にして自ら以て智慧ありと爲し四種の論を破し一分別論を作す。喩へば愚人の錢物を分つに錢を破り兩段と爲すが如し。

五十九、瓶を作るを觀る喩

譬へば二人ありて陶師の所に至り。其の輪を蹋みて瓦の瓶を作るを觀るが如し。看て厭足無し。一人は捨て去り大會に往至き極めて美饍を得又珍寶を獲たり。一人は瓶を觀て是の言を作さく「我が看訖るを待てよ」と。是の如く【一】漸冉として乃ち日沒に至り。瓶を觀て已まず、衣食を失ふ。愚人も亦爾なり、家務を修理し非常を覺らざるなり。

今日、此の事を營み、　明日、彼の業を造る、　諸佛、大龍出で丶、　雷音、世間に遍し。
法雨、障礙無きも、　事に緣り故に聞かず、　死の卒に至るを知らず、　此の諸佛の會を失

【三】三悪道。三悪趣ともいひ、地獄・餓鬼・畜生をいふ。

【一】漸冉。時の移りゆく貌。

て與へざるなり。何ぞ愁と爲すに足らむ」と。其の人答へて言く「我に無物を與ふと(云ふ)、必ず應に無物有るべし」と。

其の第一の人言はく「無物は二字共に合し是れ假名と爲す」と。世俗の凡夫、無物に著して便ち無所有處[一]を生ず。第二の人の無物と言ふは卽ち是れ[二]無相・無願・無作なり。

五十七、長者の口を蹋む喩[一]

昔、大富長者有り、左右の人其の意を取らむと欲し皆恭敬を盡す。長者唾せし時左右の侍人脚を以て(其の唾を)蹋却る。一人の愚者有り蹋むを得るに及ばず。而して是の言を作さく「若し地に唾せば諸人蹋却る。唾せむと欲するの時我當に先に蹋むべし」と。是に於て長者の正に咳唾せむと欲する時に此の愚人卽便ち脚を擧げ長者の口を蹋み、脣を破り齒を折る。長者、愚人に語りて言く「汝、何を以ての故に我が脣と、口を蹋むや」と。愚人答へて言く「若し長者の唾口より出でて地に落ちなば左右の諂者已に蹋み去るを得。我、蹋むことを欲すと雖も每常に及ばず。是を以ての故に唾、口より出でむと欲するに脚を擧げて先に蹋み汝の意を得るを望めり」と。

凡そ物は時を須ゆ。時未だ到るに及ばず彊て功力を設けなば返つて苦惱を得るなり。是を以ての故に世人時と非時とを知るべし。

五十八、二子、賊を分つ喩

昔、摩羅國[一]に一人の刹利[二]有り。病を得て極めて重く必ず定むで死するを知り、二子に誡勑すらく「我が死するの後善く財物を分てよ」と。二子、敎に隨ひ其の死後に於て分けて二分と作す。兄言く「弟の分平かならず」と。爾の時、一人の愚なる老人有りて言く「汝に物を分つて平等を得せし

【一】無所有處。無色四處の第三處、禪を修する人、初に空は無邊なりと觀じて空を破せし人、今は識の無邊を厭ひて所緣共に所有なしと觀じ、その無所有の解の處。

【二】無相・無願・無作。涅槃の衆相を絕するを無相といひ、涅槃の一切生死法中に於て願求し造作を欲する念の離れしをいひ、無作とは因緣の造作なき無爲涅槃界のこと。

【一】蹋长者口喩。雜譬喩經 No. 14

【一】摩羅國。梵名(Malla)、拘尸那城の人種の名、譯、力士。

【二】刹利。梵語(Kṣatriya)、印度四姓の第二、王種なり。

るべし」と。是の如きの年少、戒律[三]を閑らず多くの犯す所有り。因つて卽ち相ひ牽ひて地獄に入るなり。

五十五、願ふて王の爲めに鬚を剃る喩

昔、王有り、一親信有り。軍陣中に於て沒命[二]し王を救ひ安全を得せしめたり。王、大いに歡喜び其の所願を與す。卽便ち問ふて言く「汝、何をか求むる所ぞ、汝の欲する所を恣にせよ」と。臣、便ち答へて言く「王、鬚を剃るの時願くば我に剃ることを聽せよ」と。王、言く「此の事若し汝の意に適はば汝の願ふ所を聽さむ」と。此の如ぎの愚人世人の笑ふ所なり。半國の治、大臣、輔相悉く皆得可し、(然るに)乃ち賤業を求む。

愚人も亦爾なり。諸佛無量劫に於て難行苦行し自ら成佛を致せり。若し佛に遇ひ奉り及び遺法に値ひ得るも人身は得ること難し。譬へば盲龜浮木の孔に値ふが如し。此の二つ値ふこと難し。今已に遭遇す。然るに其の意劣り少戒を奉持し便ち以て足れりと爲す。涅槃の勝妙法を求めざるなり。心進み求むること無く自ら邪事を行じ便ち以て足れりと爲す。

五十六、無物を索む喩

昔、二人有り。道中共に行く。一人有り胡麻の車を將き嶮路の中に在り前むことを得る能はざるを見る。時に車を將く者彼の第二の人に語るらく「我を佐け車を推し此の嶮路を出でよ」と。第二の人答へて言く「我に何物を與ふるや」と。車を將く者言く「無物を汝に與へむ」と。時に此の第二の人卽ち佐けて車を推し平地に至り、車を將く人に語りて言く「我に物を與へよ、來れり」と。答へて言く「無物なり」と。又復語りて言く「我に無物を與へよ」と。其の第一の人笑を含みて言く「肯

【三】戒律。梵語(Vinaya)、佛徒のしてはならぬ規則と當になすべき規則、在家の信者ならば八戒、比丘ならば二百五十戒なり。

【二】沒命。いのちあらむ限りの意か。

譬ば伎兒の如し、王の前に樂を作す。王、千錢を許す。後王に從ひて索むるも、王、之を與へず。王、之に語りて言く「汝、向に樂を作すも空しく我を樂ます耳。我、汝に錢を與ふる（と云ふ）も亦汝を樂ます耳」と。

世間の果報も亦復是の如し。人中、天上少しき樂を受くと雖も亦實有ること無し。無常、敗滅し久しく住することを得ず。彼の空しき樂の如し。

五十三、師、脚を患ひ二弟子に付す喩

譬ば一人の師、二人の弟子有るが如し。其の師脚を患ふ。二弟子をして、各々一脚を取り時に隨つて按摩でしむ。其の二弟子常に相ひ憎嫉す。一弟子行けば其の一弟子の其の按摩する所の脚を捉へ石を以て打ち折る。彼既に來り已り忿ること共れ是の如し。復其の人の按づる所の脚を捉へ尋いで復打ち折る。

佛法の學徒も亦復是の如し、[一]方等の學者小乘を非斥し [二]小乘の學者復方等を非とす。故に大聖の法典の二途をして兼ね亡さしむ。

五十四、[一]蛇の頭と尾と共に前に在るを爭ふ喩

譬ば蛇有るが如し。尾、頭に語りて言く「我、應に前に在るべし」と。頭、尾に語りて言く「我、恒に前に在り、何を以て卒に爾る」と。頭果に前に在り。其の尾樹に纏つて去ることを得る能はず。尾、放ちて前に在り、即ち火坑に墮ち燒爛して死す。

師と徒弟子も亦復是くの如し。言く「師、[二]耆老にして毎恒に前に在り、我等諸年少應に導首と爲

[一] 方等。方は方正、等は平等、中道の理の方正にして生佛平等なるをいふ、大乘敎のこと。

[二] 小乘。梵語(Hīnayāna) 大乘に對する稱、佛果を求むるを大乘とし阿羅漢果、辟支佛果を求むるを小乘とす、小乘は灰身滅智の空寂の涅槃に歸する悟をいふ。

[一] 蛇頭尾共爭在前喩。雜譬喩經、No. 26 蛇頭尾共諍喩。

[二] 耆老。六十を耆といひ、七十を老といふ。即ち老人の義。

に一人の仙人有り。此の二小兒之を諍ひ已ます。彼の仙人の所に詣り其の疑ふ所を決せんとす。而して彼の仙人尋いで卽ち米と胡麻子を取り口の中に含み嚼む。吐きて掌中に著け小兒に語りて言く「我が掌中のものは孔雀の屎に似たり」と。而して此の仙人他の問に答へず。人皆之を知る。

世間の愚人も亦復是の如し。法を說くの時諸法を戲論し正理に答へず。彼の仙人の問ふ所に答へず、一切の人の嗤笑ふ所と爲るが如し。浮漫の虛說も亦復是くの如し。

五十、醫、脊僂を治す喩

譬ば人有り、卒に脊僂を患ひ醫を請じて之を療すが如し。醫、酥を以て塗り上下に板を著し、力を用つて痛壓するに覺えず雙目一時に倂出す。

世間の愚人も亦復是の如し。福を修せむ爲めの故に〔一〕治生し〔二〕估販し諸の非法を作す。其の事成ると雖も利、害を補はず。將來の世地獄に入る。雙目の出づるに喩ふるなり。

五十一、五人、婢を買ひ共に使ふ喩

譬へば五人共に一婢を買ふが如し。其の中の一人其婢に語りて言く「我が與に衣を浣へよ」と。次に一人有り復語るらく「衣を浣げ」と。婢、次の者に語るらく「先に與へなば(先に)其を浣がむ」と。後の者恚りて曰く「我、前人と共に同じく汝を買ふ。云何が獨り爾る」と。卽ち鞭こと十なり。是くの如く五人各打つこと十なり。

〔一〕五陰も亦爾なり。煩惱の因緣合して此の身を成ず。而して此の五陰恒に生・老・病・死無量の苦惱を以て衆生を〔二〕榜笞つ

五十二、伎兒、樂を作す喩

〔一〕治生。生活の道を立つること。
〔二〕估販。あきなふこと。

〔一〕五陰。梵語(Skandha)を舊には陰と譯し又衆と譯し新には蘊と譯す、陰は積集の義、衆は衆多和聚の義にて蘊の義と同じ、是れ數多積集する有爲法の自性を顯はす。之を大別せば、色・受・想・行・識の五陰なり。
〔二〕榜笞。むちうつこと。

若し得ること能はずんば我爾を捨てゝ去らむ」と。其の夫、先に來り常に善く能く鴛鴦の鳴を作す。卽ち王の池に入り鴛鴦の鳴を作し優鉢羅華を偸む。時に池を守る者而も是の問を作さく「池の中の者は誰ぞ」と。此の貧人口を失し答へて言く「我は是れ鴛鴦なり」と。守る者捉へ得て將ゐて王所に詣る。而して中道に於て復更に聲に和して鴛鴦の鳴を作す。池を守る者言く「爾、先に作さず、今作すも何の益ぞ」と。

世間の愚人も亦復是の如し。終身殘害し衆の惡業を作し、心行を習ひ善を調へしめず。命終の時に臨みて方に言く「今、我修善を得むと欲す」と。獄卒、將ゐ去り閻羅王に付す。善を修めむと欲すと雖も亦及ぶ所無きのみ。彼の愚人、王所に到らむと欲し鴛鴦の鳴を作すが如し。

四十八、野干折れし樹枝の爲めに打たるる喩

譬ば[一]野干樹の下に在り風吹きて枝折れ其の脊上に墮つるが如し。卽便ち目を閉ぢ樹を看るを欲せず。捨棄てゝ走り露地に到る、乃ち日暮るゝに至るも肯て來らず。遙に大樹、[二]枝柯上下に動搖するを見る。便ち言はく「我を喚はゞ尋いで樹の下に來らむ」と。

愚癡の弟子も亦復是の如し。已に出家を得て師長に近づくを得しも小しき呵責を以て卽便ち逃走す。復、後の時に於て惡知識に遇ひ惱亂して已まず。方に師の所に還へる。是の如きの去來は是れ愚惑と爲すなり。

四十九、小兒爭ひ毛を分別する喩

譬ば昔日二人の小兒有り。河に入り遊戲するが如し。此の水の底に於て一把毛を得たり。一人の小兒言く「此は是れ仙の鬚なり」と。一人の小兒言く「此は是れ羆の毛なり」と。爾の時、河の邊

【三】閻羅王。梵語(Yamarāja)、地獄の總司。

【一】野干。狐の異名。

【二】枝柯。枝は幹に對しえだの總稱、柯は大枝のこと。

生死の愚人、愛の奴僕と爲るも亦復是の如し。如來常に根門を護り[一]六塵に著する莫れ、無明の驅を守り愛の索を看よと敎誡し給ふ。而して諸の比丘佛の敎を奉ぜず利養を貪ぼり求め詐りて淸白を靜處に現じて坐し、心意、流馳し五欲を貪著す。色・聲・香・味の惑亂する所と爲り無明・心を覆し愛の索纏はり縛る。正念、覺意の道品の財寶悉く皆散失す。

四十六、犛牛を偸む喩

譬へば一村共に犛牛を偸みて共に之を食するが如し。其の牛を失ふ者跡を逐ふて村に至り、此の村人を喚び其の由狀を問ひて之に語りて言く「爾此の村に在るや不や」と。偸む者對へて曰く「我、實に村に無し」と。又問ふやう「爾村の中に池有り、此の池邊に在りて共に牛を食ふや不や」と。答へて言く「池無し」と。又問ふらく「池の傍に樹有るや不や」と。對へて言く「樹無し」と。又問ふやう「牛を偸むの時爾村の東に在りしや不や」と。對へて曰く「東、無し」と。又問ふらく「當に爾、牛を偸むは日中の時に非りし耶」と。對へて曰く「中(時)無し」と。又問ふらく「縱可、村無きと樹無きも何ぞ天下に東無く時無きこと有らむ。爾の妄語都て信ず可からざるを知る。爾、牛を偸み食するや不や」と。對へて言く「實に食す」と。

破戒の人も亦復是くの如し。罪過を覆藏し肯て發露せず死して地獄に入る。諸天善神、天眼を以て觀なば覆藏し得ず。彼の牛を食ひ欺拒き得ざるが如し。

四十七、貧人、鴛鴦の鳴を作す喩

昔、外國の[一]節法慶の日には、一切の婦女盡く優鉢羅華を持以て鬘飾と爲す。一人の貧人有り。其の婦語りて言く「爾若し能く優鉢羅華を得來り用つて我に與へなば爾の爲めに妻と作らむ。

【一】六塵。六境のこと。卽ち、色・聲・香・味・觸・法となり。

【一】節法慶。節會、おまつり。

四十四、半餅を食はむと欲する喩

譬ば人有り。其の飢うるに因つての故に七枚の煎餅を食し六枚半を食し已る。便ち飽滿を得たり。其の人恚り悔い手を以て自ら打ちて是の言を作さく「我、今飽足するは此の半餅に由る。然れば前の六餅唐に捐棄つ。設し半餅能く充足を知らば應に先に之を食すべし」と。

世間の人も亦復是の如し。本從り以來常に樂み有ること無し。然るに其の癡倒して横に樂想を生ず。彼の癡人の半番の餅に於て飽想を生ずるが如し。世人無知にして富貴を以て樂と爲す。夫れ富貴とは求むる時甚だ苦、既に獲得し已り守護するも亦苦なり、後還、之を失ひ憂念するも復苦なり。三時の中に於て都て樂み有ること無し。猶衣食の故きを遮して樂と名づくるが如し、辛苦の中に於て横に樂想を生ず。諸佛説きて言く「三界、安きこと無し。皆是れ大苦なり、凡夫倒惑し横に樂想を生ず」と。

四十五、奴、門を守る喩

譬ば人有り、將に遠く行かむと欲するに、其の奴に勅して言く「爾、好く門を守り幷びに驢の索を看よ」と。其の主行く。後の時、隣里の家に樂を作す者有り、此の奴、聽かむと欲して自ら安んずること能はず。尋いで索を以つて門に繋け驢の上に置き負きて戲處に至り其の作樂を聽く。奴、去るの後舍中の財物を賊盡く持ち去る。大家、行より還り其の奴に問ふて言く「財寶の在る所は」と。奴、便ち答へて言く「大家よ、先に門に驢と索とを付す。是より以外奴知る所に非ず」と。大家、復言く「爾を留らし門を守らしむるは正に財物の爲めなり。財物、既に失ふ。門を用ふる何の爲めに爲すものぞ」と。

卷の第三

四十二、估客の駝死す喩

譬ば估客遊行し商賈するが如し。會路中に於て駝卒に死す。駝の上に載する所の多くの珍寶、細軟の上氎、種々の雜物有り。駝既に死し已る。卽ち其皮を剝ぐ。商主捨てゝ行き、坐する二弟子を坐せしめて之に語りて言く「好く駝の皮を看て濕爛せしむる莫れ」と。其の後天雨る。二人頑癡にして盡く好氎を以て此の皮を覆ふ、上氎盡く爛壞す。皮と氎の價理として自ら[一]懸殊つも愚癡を以ての故に氎を以て皮を覆ふ、

世間の人も亦復是の如し。其の不殺は白氎に喩へ、其の駝皮とは卽ち財貨に喩ふ。天雨り濕爛すとは放逸にして善行を敗壞するに喩ふるなり。不殺戒は卽ち佛法身の最上妙因なり。然れども修する能はず、但財貨を以て諸の塔廟を造り衆僧を供養す。根を捨て末を取り其の本を求めず。五道に漂浪し能く自ら出づること莫し。是の故に行者應に精心し不殺戒を持つべし。

四十三、大石を磨く喩

譬へば人有り、一大石を磨き、勤めて功力を加へ、日月を經歷して小いさき戲牛を作るが如し。功を用ふること旣に重く期する所甚だ輕し。

世間の人も亦復是の如し。大石を磨くとは學問の精勤・勞苦に喩ふ。小牛を作るとは名聞（を以て）互に相ひ是非するに喩ふ。夫れ學を爲す者は研思し精微にして博通多識、宜しく應に履行して遠く勝果を求むべし、方に名譽を求め憍慢貢高ならば過患を增長せん。

【一】懸殊。隔絕の意。

と能はず。今、我若し能く汝をして得せしめば我も亦應に先に自ら得べし。汝をして亦得しめむ」と。彼の禿を患ふるの人徒に自ら疲勞し差ゆるを得る能はざるが如し。

四十一、毘舍闍鬼の喩

昔、二【一】毘舍闍鬼有り。共に一つの篋、一つの杖、一つの屐有り、二鬼共に諍ひ各各得むと欲す。二鬼、紛紜し竟日平かにせしむる能はず。時に一人有り來りて見已りて之に問ふて言く「此の篋・杖・屐、何の奇異有りて汝等共に諍ひ瞋忿て乃し爾る」と。二鬼答へて言く「我が此の篋は能く一切の衣服・飲食・床褥・臥具・資生の物を出し盡く中より出す。此の杖を執る者怨敵歸伏し敢て與に諍ふ者無し。此の屐を著くる者は能く人をして飛行し【二】罣礙無からしむ」と。此の人、聞き已り即ち鬼に語りて言く「汝等小しく遠かれ、我當に爾の爲に平等に之を分つべし」と。鬼、其の語を聞き諄いで即ち遠く避く。此の人、即時篋を抱へ杖を捉へ屐を躡みて飛ぶ。二鬼、愕然として竟に得る所無し。人、鬼に語りて言く「爾等の諍ふ所を我已に去るを得たり。今、爾等をして諍ふ所無からしむ」と。

毘舍闍とは衆魔と外道とに喩ふ。布施とは篋の如く人天五道資用の具皆中より出づ。禪定とは杖の如く魔怨、煩惱の賊を消伏す。持戒は屐の如く必ず人天に昇る。諸魔、外道篋を諍ふとは有漏の中に於て強いて果報を求め空しく得る所無きに喩ふ。若し能く善行及び布施・持戒・禪定とを修行せば便ち苦を離るゝを得、道果を獲得す。

【一】毘舍闍(Pisāca)。下等の神靈なり。

【二】罣礙。さへぎること。

昔、一人有り。他舍に往至き、他の屋舍の墻壁を塗治すを見る。其の地平正清淨にして甚だ好し。便ち之に問ふて言く「何を以て和し塗り是の如く好きを得たる」と。主人、答へて言く「稻穀の麩を用ひ水に浸し熟せしめ泥を和し壁に塗る。故に是の如きを得」と。愚人、卽便ち念言を作すやう「若し純ら稻麩を以て合せ、用つて之を作るに加かず、壁白淨にして泥始めて平に好かるべし」と。便ち稻穀を用ひ泥に和し用つて其の壁を塗る、平正を得るを望み返つて更に高下す。壁、都て劈裂す。稻穀を虛しく棄て丶都て利益無し。惠施て功德を得るに如かず。

凡夫の人も亦是の如し。聖人の法を說き諸善を修行し此の身を捨て已りて生天と解脫とを得可しと聞き便ち自ら身を殺す。生天と解脫とを得むと望み徒に自ら虛しく喪ひ空しく獲ること無きこと彼の愚人の如し。

四十、禿を治す喩

昔、一人有り。頭の上に毛無し。冬は則ち大いに寒く夏は則ち熱を患ふ。兼ねて蚊虻の唼食する所と爲る。晝夜惱を受け甚だ以て苦と爲す。一醫師有り、諸の方術多し。時に彼の禿人其の所に往至き其の醫に語りて言く「唯、願くば大師よ、我が爲めに之を治せよ」と。時に彼の醫師も亦復頭禿なり。卽便ち帽を脫ぎ之を示して之に語りて言く「我も亦之を患ふ。以て痛苦と爲す。若し我治して能く差ゆるを得しめなば應に先に自ら治し以て其の患を除くべし」と。

世間の人も亦復是の如し。生・老・病・死の侵惱する所と爲り長生不死の處を求めむと欲す。沙門・婆羅門等、世の良醫善く衆患を療す有りと聞き便ち其の所に往きて之に語りて言く「唯、願くば我が爲めに此無常生死の患を除き常に安樂に處し長く存して變らざらしめよ」と。時に婆羅門等卽便ち報いて言く「我も亦此の無常の生・老・病・死を患ひ種々に長く存へる處を求覓むるも終に得るこ

用つて(何等をか)爲さむや」と。卽便ち、驅けて深坑、高岸に至り、坑底に排著し盡く皆之を殺す。凡夫、愚人も亦復是の如し、如來の具足戒を受持し若し一戒を犯さば慚愧を生じ淸淨懺悔せず。便ち念言を作さく「我、已に一戒を破り旣に具足せず。何ぞ持するを用ひ爲さむ」と。一切都て破り一も在る者無し、彼の愚人の盡く群牛を殺し一も在る者無きが如し。

三十八、[一]木筩の水を飮む喩

昔、一人有り、行來し渇乏し、木筩の中に淸淨の流水有るを見、就きて之を飮む。水を飮み已り足る。卽便ち、手を擧げ木筩に語りて言く「我、已に飮み竟る。水、復來ること莫れ」と。是の語を作すと雖も水流るゝこと故の如し。便ち瞋恚りて言く「我、已に飮み竟り汝に來る莫れと語るに、何を以ての故に來るや」と。人有り、之を見て言く「汝、大に愚癡にして、智慧有ること無し、汝、何を以て去らずして、語りて來る莫れと言ふや」と。卽ち、爲めに挽き却け餘處に牽き去れり。

世間の人も亦復是の如し。生死渇愛の爲めに五欲の鹹水を飮む。旣に五欲の疲厭する所と爲ること彼の飮み足るが如し。便ち是の言を作さく「汝、色・聲・香・味・復更に來りて我をして見せしむる莫れ」と。然れども此の五欲相續して斷えず。旣に之を見已り便ち復瞋恚りて語るやう「汝、速に滅し復更に生ずること莫れ、何を以ての故に來りて我をして之を見せしむ」と。時に智人有りて之に語りて言く「汝、離るゝことを得むと欲せば當に汝の[二]六情を攝し其の心意を閉づべし。妄想生ぜざれば便ち解脫を得む。何ぞ必ずしも生ぜざらしめむと欲するを見ざるなり。彼の水を飮む愚人等の如く異り有ること無し。

三十九、他人の舍を塗るを見る喩

【一】木筩。きづゝ。

【二】六情。六根のこと。眼・耳・鼻・舌・身・意をいふ。

凡夫の人も亦復是の如し。無量の煩惱の窮困むる所と爲り而して生死の魔王、債主の纒著する所と爲る。生死を避け佛法の中に入り善法を修行し諸の功德を作さむと欲す。寶篋に値ひしが如く身見の鏡の惑亂する所と爲り妄に我有りと見て卽便ち封著す。是れ眞實なりと謂り。是に於て墮落し諸の功德・禪定・道品・無漏の諸善を失ひ三乘の道果一切都てを失ふ。彼の愚人、寶篋を棄てゝ、我見に著する者の如く、亦復是の如し。

三十六、五通仙の眼を破る喩

昔、一人、山に入り道を學び五通を得たる仙あり。天眼徹視し能く地中の一切伏藏、種種の珍寶を見る。國王、之を聞き心に大いに歡喜び、便ち、臣に語りて言く「云何が此の人常に我國に在りて、餘處に去らざらしむるを得て、我が藏中に多くの珍寶を得しめむか」と。一人の愚臣有り、輒便ち往至て仙人の雙眼を挑り、持ち來りて王に白すやう「臣以て眼を挑る。更に去ることを得ず常に是の國に住すべし」と。王、臣に語りて言く「仙人の住することを得むと貪る所以の者は能く地中の一切の伏藏を見るなり。汝、今眼を毀る。何ぞ復た任ゆる所ぞ」と。

世間の人も亦復是の如し。他の[一]頭陀し苦行し、山林・曠野・[二]塚間・樹下に四意止及び不淨觀を修するを見て便ち强いて將來し其の家の中に於て種々に供養し、他の善法を毀り道果を成ぜざらしむ。其の道服を喪ひ已り其の利を失ひ空しく獲る所無し。彼の愚臣の唐に他の目を毀るが如し。

三十七、群牛を殺す喩

昔、一人有り。二百五十頭の牛有り、常に水草を驅逐し時に隨つて餧食す。時に一つの虎有り一つの牛を噉食す。爾の時、牛の主、卽ち念言を作さく「已に一つの牛を失ふ。俱に全足らず、是の牛を

【一】頭陀。梵語(Dhūta)、抖擻・抖揀・浣洗などゝ譯し、衣服・飲食・住處の三種の貪著を抖擻ふ行法を云ふ。
【二】塚間。墓所。

く、復還び活さむと欲するも都て得可からず。破戒の人も亦復是の如し。

三十四、美水を送る喩

昔、一聚落有り、王城を去ること五由旬、村中好美の水有り。王、村人に勅し常に日日其の美水を送らしむ。村人疲苦し悉く移り避け此の村を遠く去らむと欲す。時に彼の村主、諸人に語りて言く「汝等去ること莫れ、我當に汝の爲めに王に白し五由旬を改め三由旬と作すべし。汝をして近く往來し疲れざるを得せしめむ」と。卽ち、往きて王に白す。王、爲めに之を改め三由旬と作す。衆人、聞き已り便ち大に歡喜ぶ。人有り語りて言く「此の故に是の本の五由旬と更に異り有ること無し」と。此の言を聞くと雖も王の語を信ずる故に終に肯て捨てず。

世間の人も亦復是くの如し。正法を修行し五道を度り涅槃の城に向ふ。心、厭倦を生じ便ち捨離を欲す。頓に生死に駕し復進むこと能はず。如來法王、大方便有り一乘の法に於て分別して三と說く。小乘の人之を聞き歡喜び以て易行と爲し善を修め德を進め生死を度せむと求む。後、人三乘有ること無し故に是れ一道なりと說くを聞くと雖も佛語を信ずるを以て終に肯て捨てず。彼の村人の如く亦復是の如し。

三十五、寶篋の鏡の喩

昔、一人有り。貧窮、困乏にして多く人に債を負ふ。以て償ふ可き無く卽便ち逃げ避けて空曠處に至る。篋の中に珍寶を滿たすに値ふ。一つの明鏡有り、珍寶の上に著け以て之を蓋覆ふ。貧人見已り心に大いに歡喜び、卽便ち之を發くに鏡の中に人を見る。便ち驚怖を生じ叉手し語りて言く、「我、空篋にして都て有る所無しと謂へり。君が此の篋中に在し有りしを知らず。瞋を見る莫れ」と。

癡、智慧有ること無し。此の驢、今は適能く破る可きも假使百年（を經るも）一を成ずること能はず」と。

世間の人も亦復是の如し。百年人の供養を受くと雖も都て報償無く常に損害を爲し終に益を爲さざる背恩の人も亦復是の如し。

三十二、估客金を偸む喩

昔、二估客有り。共に商賈に行く。一は眞金を賣り其の第二の者は[一]兜羅綿を賣る。他の眞金を買ふ者燒きて之を試る者有り。第二の估客卽便ち他の燒かれし金を偸み兜羅綿を用つて裹む。時に金熱する故に綿を燒き都て盡くす。情事既に露はれ二事倶に失ふ。

彼の外道、佛法を偸取り己の法中に著け妄に己が有と稱するも、是れ佛法に非ず是に由るの故に外典を燒き滅ぼし世に行はれざるが如し。彼の金を偸み事情都て現はるゝが如く、亦復是の如し。

三十三、樹を斫り果を取る喩

昔、國王有り。一つの好き樹有り高廣極めて大なり。常に好果有り香しくして甜美なり。時に一人有り王の所に來至る。王、之に語りて言く「此の樹の上に將に美果を生ぜむとす。汝、能く食するや不や」と。卽ち王に答へて言く「此の樹高廣なり。之を食せむと欲すと雖も何に由りて能く得む」と。卽便ち、樹を斷ちて、其果を得むと望む。既にして獲る所無く徒に自ら苦勞し、後還び竪てむと欲するも、樹已に枯死して都て生くる理無し。

世間の人も亦復是の如し。如來法王の持戒の樹有り能く勝果を生ず。心、願樂を生じ果を得て食はむと欲す。應に持戒に當り諸の功德を修し方便を解せず返つて其の禁を毀る。彼の樹を伐るが如

【一】兜羅綿（Tūla）。綿のことなり。

有るを知る。當に汝の爲めに求めて用つて婦と爲す可し」と。牧羊の人、之を聞き歡喜ぶ。便ち大いに羊と及び諸の財物を與ふ。其の人、復言く「汝の婦、今日已に一子を生む」と。牧羊の人未だ婦を見ざるも其の已に生るを聞き心大いに歡喜び重ねて彼に物を與ふ。其の人、後に復之に語りて言く「汝の兒生れて今死せり」と。牧羊の人、此の人の語を聞き便ち大いに啼泣、嘘欷して已まず。

世間の人も亦復是の如し。既に多聞を修め、其の名利の爲めに其の法を祕惜み肯て人の爲めに教化演說せず。此の〔一〕漏身の誑惑する所と爲りて妄りに世樂を期す。己の妻、息の如き其の爲めに欺かれ善法を喪失へ後身命と并びに財物とを失ふ。便ち大いに悲泣し其の憂苦を生ず。彼の牧羊の人の如きも亦復是の如し。

三十一、瓦師を雇借ふ喩

昔、婆羅門の師有り。大會を作さむと欲して弟子に語りて言く「我、瓦器を須ひ以て會の用に供せむ。汝、我が爲めに瓦師を雇借へ市に詣り之を覓むべし」と。時に彼の弟子瓦師の家に往く。時に一人有り。驢に瓦器を負はしめ市に至り賣らむと欲す。須臾の間に驢盡く之を破る。還び家の中に來り啼哭、懊惱す。弟子、見已りて之に問ふて言く「何を以て悲歎、懊惱是の如き」と。其の人、答へて言く「我、方便を爲し勤苦して年をかさね始めて器を成ずるを得、市に詣り賣らむと欲するに、此の弊惡の驢須臾の頃に盡く我が器を破る。是故に懊惱す。爾の時、弟子是を見聞し已り歡喜びて言く「此の驢は乃ち是れ佳物なり。久しき時作る所須臾して能く破る。我、今當に此の驢を買ふべし」と。瓦師、歡喜び即便ち賣り與ふ。乘り來り家に歸る。師、之に問ふて言く「汝、何を以て瓦師を得て將來らず是の驢を用て(何と)爲すや」と。弟子、答へて言く「此の驢、瓦師より勝る。瓦師、久しき時作る所の瓦器を少時にして能く破る」と。時に師、語りて言く「汝、大に愚

【一】漏身。有漏の身、煩惱ある身體。

妄りに有德と言ふ。既に其の利を失ひ復其の行を傷く。他の鼻を截り徒に自ら傷損くるが如し。世間の愚人も亦復是の如し。

二十九、貧人、麁褐の衣を燒く喩

昔、一人有り。貧窮、困乏他の與に客作き麁[一]褐衣を得たり。而して之を被著る。人有り之を見て之に語りて言く「汝の種姓は端正にして貴人の子なり。云何が麁弊の衣褐を著るや。我、今、汝に敎へて、當に汝をして上妙の衣服を得せしむべし。當に我が語に隨ふべし、終に汝を欺かず」と。貧人、歡喜び其の言に敬從ふ。其の人、即便ち前に在りて火を然す。貧人に語りて言く「今、此の麁褐の衣を脫ぎ火の中に著く可し。此の燒處に於て汝をして上妙の欽服を得せしむべし」と。貧人、即便ち脫して火の中に著く。既に之を燒くの後此の火處に於て欽服を求覓むれども、都て得る所無し。

世間の人も亦復是の如し。過去の身より諸の善法を修め此の人身を得たり。應に保護して德を進め業を修むべし。しかるに外道の邪惡、妖女の欺誑く所と爲る。「汝、今當に我が語を信じ諸の苦行を修むべし。巖に投じ火に赴き是の身を捨て已らば當に梵天に生れ長く快樂を受くべし」と。便ち、其の語を用ひ身命を捨て身死するの後地獄に墮つ、備に諸の苦を受け旣に人身を失ひ空しく獲る所無し。彼の貧人の如きも亦復是の如し。

三十、牧羊人の喩

昔、一人有り、牧羊に巧みなり、其の羊滋多く乃し千萬有り。極めて大慳貪にして肯て外に用さず。時に一人有り巧詐を善くす。便ち方便を作し往きて親友と共に之に語りて言はく「我、今汝と共に極めて親愛と成る。便ち一體と爲り更に異り有ること無からむ。我、彼の家に一人の好き女

【一】褐衣。けごろも。

て字句の不正有りと見、便ち譏毀を生じ其の是ならざるに効ふ。是に由るが故に佛法の中に於て永く其の善を失ひ三悪(道)に墮つ。彼の王に効ふが如きも亦復是の如し。

二十七、鞭の瘡を治す喩

昔、一人有り。王の鞭つ所と爲る。既に鞭たれ已つて、馬の屎を以て之に拊で速に差さしめむと欲す。愚人有り、之を見て心に歡喜を生じ便ち是の言を作さく、「我、快く是の瘡を治す方法を得たり」と。卽便ち、家に歸り其の兒に語りて言く「汝、我が脊を鞭てよ、我れ好き法を得たり、今、之を試みむと欲す」と。兒、爲めに脊を鞭つ、馬の屎を以て之を拊で、以て善巧と爲す。

世人も亦爾なり。人有り、[一]不淨觀を修め、卽ち[二]五陰の身瘡を除くを得むと言ふを聞き便ち是の言を作さく、「我、女色と五欲とを觀ぜんと欲すと、未だ不淨を見ず」と。反つて女色の惑亂する所と爲り生死に流轉し地獄に墮つ。世間の愚人も亦復是の如し。

二十八、婦の爲めに鼻を貿ふ喩

昔、一人有り、其の婦端正にして唯其の鼻醜し。其の人外に出づ。他の婦女の面貌端正にして其の鼻の甚だ好きを見て便ち念言を作さく「我、今寧ろ其の鼻を截取り我が婦の面上に著くべし。亦好からずや」と。卽ち、他の婦の鼻を截り持ち來り家に歸り急ぎ其の婦を喚ぶ「汝、速に出て來れ、汝に好き鼻を與へむ」と。其の婦出で來り卽ち其の鼻を割く。尋いで他の鼻を以て婦の面上に著く。既に相ひ著かず。復其の鼻を失ふ。唐に其の婦をして大苦痛を受けしむ。

世間の愚人も亦復是の如し。他の宿舊の沙門、婆羅門!大名德有りて世人の恭敬ふ所と爲り大利養を得と聞き便ち是の念言を作さく「我、今、彼と異らずと爲す」と。虛しくして自ら假りに稱し、

【一】不淨觀。五停心觀の一、貪心を治する爲に身の不淨を觀ずるなり。自身の不淨の九想、一に死相、二に脹想、三に靑瘀想、四に膿爛想、五に壞想、六に血塗想、七に蟲噉想、八に骨鎖想、九に分散想となり。他身不淨の五、一に種子不淨、二に住處不淨、三に自相不淨、四に自體不淨、五に終竟不淨となり。

【二】五陰。色・受・想・行・識の五蘊のこと、この身體を構成する要素に就て、この身體を指して云ふ。

世人も亦爾なり。菩薩の曠劫修行の因、難行苦行を以て樂しからずと爲し便ち念言を作さく「阿羅漢と作り速に生死を斷じ其の功の甚だ易きに如かず」と。後、佛果を求めむと欲するも終に得べからず。彼の焦りし種の復生ゆる理無きが如し。世間の愚人も亦復是の如し。

二十五、水火の喩

昔、一人火と冷水とを須ふる事あり、即便ち火を宿りて以て盥に澡ぎ、水を盛りて火上に置く。後、火を取らむと欲して火都て滅し、冷水を取らむと欲して水復熱す。火と冷水との二事倶に失ふ。

世間の人も亦復是の如し。佛法の中に入り出家して道を求め、既にして出家を得、還び復其の妻子眷屬世間の事、五欲の樂を念ふ。是に由つての故に其の功德の火、持戒の水を失ふ。欲を念ふ人も亦復是の如し。

二十六、人・王に效ひ眼を瞤す喩

昔、一人有り。王の意を得むと欲す。餘人に問ふて言はく、「云何が之を得む」と。人有り、語りて言く、「若し王の意を得むと欲せば王の形相、汝、當に之に効ふべし」と。此の人、即便ち王の所に往至り、王の眼瞤ふを見便ち王に効つて瞤す。王、之に問ふて言く「汝、病と爲すや、風に著くと爲すや、何を以て眼瞤ふ」と。其の人、王に答ふらく「我、眼を病まず、亦風に著かず。王意を得むと欲し王の眼瞤ふを見る故に王に効ふなり」と。王、是の語を聞き卽ち大に瞋恚り、人をして種々に害を加へしめ擯けて國を出さしむ。

世人も亦爾なり。佛の法王に於て親近を得、其の善法を求め以て自ら增長を欲す。既に親近を得て、如來法王が、衆生の爲めの故に種々に方便して其の闕短を現じ給ふを解せず或は其の法を聞い

卷の第二

二十二、海に入り[一]沈水を取る喩

昔、長者の子有り、海に入りて沈水を取る。積むこと[二]年載有り。方に一つの車を得て持ち來り家に歸る。市に詣り之を賣る。其の貴を以ての故に卒に買ふ者無し。多の日を經歷て售り得ること能はず。心に疲厭を生じ以つて苦惱と爲す。人の炭を賣る時速に售り得たるを見たり。便ち念言を生ずらく「之を燒き炭を作り速に售り得べきに如かず」と。卽ち、燒きて炭と爲し市に詣り之を賣る。半車の炭の價値をも得ず。

世間の愚人も亦復是の如し。無量に方便して、勤行精進し仰ぎて佛果を求む。其の得難きを以て便ち退心を生じ發心し聲聞果を求め速に生死を斷じ阿羅漢と作るに如かずと。

二十三、賊、錦繡を偸み用つて氎褐を裹む喩

昔、賊人有り。富家の舍に入り錦繡を偸み得たり。卽ち持用つて故弊の[一]氎褐と種種の財物を裹み智人の笑ふ所と爲る。

世間の愚人も亦復是の如し。既に信心有りて、佛法の中に入り善法及び諸の功德を修行す。利を貪ぼるを以ての故に淸淨戒と及び諸の功德を破り世の爲に笑はるゝも亦復是の如し。

二十四、熬胡麻の子を種へる喩

昔、愚人有り。生の胡麻子を食し以て不美と爲す。熬りて之を食し美しと爲す。便ち念言を生ずらく「熬りて之を種へ後美き者を得るに如かず」と。便ち熬りて種ゆ。永く生ゆる理無し。

【一】沈水。水は木の誤字か。

【二】年載。とし。載も年なり。

【一】氎褐。毛織物。

聞く[一]こと是の如し。一時、佛、王舍城、鵲封竹園に在し諸の大比丘、菩薩摩訶薩[二]及び諸の八部[三]三萬六千人と倶なりき。

是の時、會の中に、異學梵志五百人倶に有り。座より起つて佛に白して言さく「吾聞く。佛道洪深にして能く及ぶ者無しと。故に來歸し問ふなり、唯、願くば之を說き給へ」と。佛、言はく「甚だ善し」と。問ふて曰く「天下有りと爲すや無しと爲すや」と。答へて曰く「亦有り、亦無し」と。梵志曰く「今、有るが如くむば云何が無しと言ふ。今無きが如くむば云何が有と言ふや」と。答へて言く「生ならば有と言ひ死ならば無と言ふ。故に說きて或は有、或は無」と。問ふて言く「人は何より生ずるや」答へて曰く「人は穀より生ず」問ふて曰く「五穀は何より生ず」。答へて曰く「五穀は、四大[四]の火風より生ず」。問ふて曰く「四大の火風何從り生ず」。答へて曰く「四大火風は空より生ず」。問ふて曰く「空は何より生ずや」。答へて曰く「無所有より生ず」。問ふて曰く「無所有は何より生ず」。答へて曰く「自然より生ず」。問ふて曰く「自然は何より生ずるや」。答へて曰く「泥洹より生ず」。問ふて曰く「泥洹は何より生ずるや」。佛、言はく「汝、今、事を問ふ、何を以て爾く深きや、泥洹とは是れ不生不死の法なり」と。問ふて曰く「佛は泥洹するや未や」と。答へて曰く「我、未だ泥洹せざるなり」と。「若し未だ泥洹せざれば云何が泥洹の常樂を知るを得む」と。佛言く「我、今汝に問ふ、天下の衆生は苦と爲すや樂と爲すや」と。答へて曰く「衆生甚だ苦なり」と。佛、言はく「云何が苦と名づく」。答へて曰く「我、衆生を見るに死する時苦痛にして忍び難し。故に知る、死は苦なり」と。佛、言く「汝、今死せずして死の苦を知る。我、十方諸佛を見るに不生不死の故に泥洹の常樂を知る」と。五百の梵志、心開け意解け求めて五戒を受け須陀洹果[五]を悟りぬ。復、坐すること故の如し。佛、言く「汝等、善く聽け、今、汝の爲めに廣く衆喩を說かむ」と。

【一】聞如是乃至廣說衆喩の三百七十四字、宋・元・明本卷首に在り。

【二】摩訶薩。梵語(Mahāsattva)、大心・大有情・大衆生等譯し菩薩の通稱。

【三】八部。天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦の八部衆をいふ。

【四】四大。地・水・火・風をいふ。

【五】須陀洹果。梵語(Srotāpannaphala)、預流果と譯す。凡夫を去て初めて聖道の法流に入るを云ふ。三界の見惑を斷じ盡せる位なり。

王、是の語を聞き卽ち、大に瞋恚る。竟に悉く誰か此の語を作すかを究めず。傍の佞人〔一〕を信じ一人の賢臣を捉へ仰(臥せしめ)脊を剝ぎ百兩の肉を取る。人有り證明するに此の人是の語無しと。王の心便ち悔ひ千兩の肉を索め用つて爲めに脊に補ふ。夜中呻喚し甚だ大に苦惱む。王、其の聲を聞き問ふて言く「何を以て苦惱する。汝の百兩を取り十倍汝に與ふ。意足らざるや、何故に苦惱するや」と。傍人、答へて言く「大王よ、如し子の頭を截り千頭を得と雖も子の死を免かれず。十倍の肉を得と雖も苦痛を免かれず」と。

愚人も亦爾なり。後世を畏れず現の樂を貪渇り衆生を苦切む。百姓に調發し多くの財物を得て滅罪を得て福報を得むと望めり。譬へば彼の王の人の脊を割り人の肉を取り餘肉を以て補ふが如し。痛まざらしめむと望むも是の處有ること無し。

二十一、婦女、更に子を求めむと欲する喩

往昔の世の時、婦女人有り。始めて一の人の子有り更に子を求めむと欲す。餘の婦女に問ふらく「誰か能く我をして重ねて子有らしむること有らむ」と。一老母有り此の婦に語りて言く「我、能く爾をして子を求めなば得ること可ならしめむ。當に天を祀るべし」と。老母に問ふて言く「祀るに何物を須ふ」と。老母、語りて言く「汝の子を殺し血を取り天に祀らば必ず多くの子を得む」と。時に此の婦女便ち彼の語に隨ひ其の子を殺さむと欲す。傍らに智人有り嗤笑し罵詈すらく「愚癡、無智乃ち此の如きに至る。未だ生れざるの子は竟に得べきや不や(を解せず)、而も現の子を殺す」と。

愚人も亦爾なり。未生の樂の爲めに自ら火坑に投ず。種々に身を害ふは生天を得る爲めなりと。

【一】佞人。こびへつらふ人。

來して刀を磨く。後、轆勞苦して、憚り數上ること能はず。駝を上の樓に懸け石に就き刀を磨く。深く衆人の嗤笑する所と爲る。

猶し愚人、禁戒を毀破り多く錢財を取り以用つて福を修し生天を得むと望む。駝を上の樓に懸け刀を磨くに、功を用ふること甚だ多く得る所甚だ少きが如し。

十九、船に乘り釪[二]を失ふ喩

昔、人有り、船に乘り海を渡る。一つの銀釪を失ひ水の中に墮す。卽便ち、思念ひらく「我、今、水に畫き記を作さむ。之を捨て而して去り後當に之を取るべし」と行くこと二月を經て師子諸國に到る。一河水を見て便ち其の中に入り本失ふ釪を覓む。諸人、問ふて言く「何の作す所を欲す」と。答へて言く「我、先に釪を失ふ。今、覓め取らむと欲す」と。問ふて言く「何處に於て失ふ」と。答へて言く「初め、海に入りて失ふ」と。又復、問ふて言く「失ふて幾時を經たる」と。言く「失ふて來二月なり」と。問ふて言く「失ふて來二月、云何が此れを覓めむ」と。答へて言く「我、釪を失ひし時水に畫き記を作す。本畫く所の水此と異ること無し。是の故に之を覓む」と。又復問ふて言く「水別ならずと雖も汝昔失ふ時乃ち彼に在り。今、此に在り、覓むるも何に由り得可けむ」と。爾の時衆人、大笑せざるは無し。

亦、外道、正行を修せず相似の善中横に計り苦困し以て解脫を求むるが如きは猶し愚人釪を彼に失ひ此に於て覓むるが如し。

二十、人、王の縱暴を說く喩

昔、一人有り、王の過罪を說く。而して是の言を作さく「王、甚だ暴虐にして治政理無し」と。

【二】釪。僧家の飯器。

昔、二人有り。共に甘蔗を種へ而して誓言を作さく「好き者を種へなば賞し其の好らざる者は當に重く罰すべし」と。時に二人の中一者、念言へらく「甘蔗極めて甜し。若し壓し汁を取り還び甘蔗の樹に灌がば甘美必ず甚しく彼より勝ることを得む」と。即ち、甘蔗を壓し汁を取り用つて漑ぎ滋味を冀望し返つて種子を敗る。所有る甘蔗の一切都べて失へり。

世人も亦爾なり、善福を求めむと欲し己の豪貴を恃み專ら形勢を挾み下民を迫脅し財物を陵奪し用つて福と作す。本より善果を期するも將來反つて其の患殃を獲るを知らず。甘蔗を壓し彼此都て失ふが如し。

十七、債、半錢の喩

往、商人有り。他に半錢を貸す。久しく償ひを得ず。即便ち往きて債む、前に大河有り他に兩錢を雇り然る後渡ることを得たり。彼に到りかりて往きて債む。竟に見るを得ざりき。還り來り河を渡り復兩錢を雇る。半錢の債の爲めに而も四錢を失ふ。兼ねて道路の疲勞、乏困有り、債とする所甚だ少く失ふ所極めて多し。果して衆人の怪笑する所と被る。

世人も亦爾なり。要ず少なき名利にて、大行を毀るを致す。苟くも己身を容れて禮義を顧みざれば現に惡名を受け後、苦報を得。

十八、樓に就き刀を磨く喩

昔、一人有り。貧窮、困苦にして王の爲めに事を作す。日月經ること久しく身體羸瘦す。王、憐愍せられ一つの死せる駝を賜ふ。貧人得已り即便ち皮を剝ぐ。刀鈍きを嫌ふ。故に石を求めて磨かむと欲す。乃ち樓上に於て一磨石を得、刀を磨き利くならしむ。來り下りて剝ぐ。是の如く數々往

黨是れ親屬なり。如何が殺す可けむや。唯、此の導師のみ用つて天に祀るに中てむ」と。即ち、導師を殺し以用つて祭祀る。天に祀り已竟り、道路を迷失ひ趣く所を知らず窮困して死盡せり。

一切の世人も亦復是の如し。法海に入り其の珍寶を取らむと欲し當に善行を修め以て導師と爲すべし。善行を毀破し生死の曠野永く出期無し。[一]三塗を經歷りて苦を受くること長遠なり。彼の商賈の將に大海に入らむとし其の導者を殺し[二]津濟を迷失し終に困しみ死するを致すが如し。

十五、醫、王女に藥を與へ卒に長大せしむる喩

昔、國王有り。一人の女を産生む。醫を喚び語りて言く「我が爲めに藥を與へ立に長大せしめよ」と。醫師、答へて言く「我、良藥を與へ能く即ち大ならしめむ。但し、今、卒に無し。方に須く求索むべし。藥を得るの頃(まで)王、要ず看ること莫れ、藥を與へ已るを待ち然る後王に示さむ」と。是に於て即便ち遠方に藥を取り十二年を經て藥を得來り還る。女に與へ服せしむ。將ゐて王に示す。王見て歡喜び即ち自ら念言ひらく「實に是れ良醫なり。我が女に藥を與へ能く卒に長ぜしむ」と。便ち左右に勅し賜ふに珍寶を以てす。時に、諸人等王の無智を笑ふ。生れしより來の年月を[一]籌量するを曉らず其の長大を見て是れを藥の力と謂へりと。

世人も亦爾なり。善知識に詣りて之に啓して言く「我、道を求めむと欲す。願くば教授せられ我をして立に善知識を得しめよ」と。師、方便を以ての故に教へて坐禪し[二]十二緣起を觀ぜしむ。漸く衆德を積み阿羅漢位を獲たり。踊躍、歡喜して是の言を作さく「快き哉、大師、速に能く我をして最妙法を證らしめたり」と。

十六、甘蔗に灌ぐ喩

【一】三塗。一に火途地獄、趣の猛火に燒かるゝ處、二に血途、畜生趣の互に相食む處、三に刀途、餓鬼趣の刀劍杖を以て逼迫せらるゝ處。
【二】津濟。わたしば。

【一】籌量。かずとりはかること。

【二】十二緣起。梵語(Dvāda-śāṅga pratītyasamutpāda)、衆生の三世に渡りて六道に輪廻する次第緣起を說きしもの、無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死の十二支の緣起すること。

に置く。卽ち火上に於て扇を以て之を扇ぎ冷しむるを得むことを望む。傍人、語りて言く「下に火を止めず、之を扇ぐことを已めずむば云何が冷すを得む」と。爾の時、衆人、悉く皆嗤笑せり。
其れ、猶外道、煩惱熾然の火を滅せず少しく苦行を作し棘刺の上に臥し、五熱身を炙つて淸涼、寂靜の道を望むも終に是處無し。徒に智者の怪笑する所と爲り苦の現在を受け殃來劫に流る。

十三、人に喜瞋を說く喩

過去、人有り。多くの人衆と共に屋中に坐す。一外人の德行極めて好しと歎じ唯二過のみ有り一は喜と瞋、二には作す事倉卒なりと。爾の時、此の人遇、門外に在り、是の語を作すを聞き便ち瞋恚を生ず。卽ち、其の屋に入り彼の己の過惡を道ふの人を擒にし手を以て打撲す。傍人、問ふて言く「何の故に打つや」と。其の人、答へて言く「我、曾つて何時、喜びと、瞋とあり、倉卒なるや。而して此の人は我れ恒に喜び、瞋恚り、作す事倉卒なりと道ふ。是の故に之を打つ」と。傍人、語りて言く「汝、今、喜・瞋・倉卒の相、卽時に現に驗あり。云何が之を諱む、人、過惡を說けば而も怨責を起す」と。深く爲めに衆人共の愚惑を怪しむ。
譬ば世間の飮酒の夫の如し。耽荒・沈酒、諸の放逸を作す。人に呵責せられて返つて尤嫉[一]を生ず。苦の證佐を引くことを用つて自ら明白なり。此の愚人、己の過を聞くを諱み他の道を說くを見て返つて之を打撲せむと欲するが若し。

十四、商主を殺し天に祀る喩

昔、賈客有り。大海に入らむと欲す。大海に入るの法要ず導師を須ふ。然る後去る可し。卽ち共に求覓めて一導師を得たり。既に之を得たり。已に相ひ將ゐ發引して曠野の中に至る。一天祠有り、當に人を須ひ祀るべし。然る後過ぐることを得。是に於て衆賈共に思ひ量りて言く「我等の伴

【一】尤嫉。はなはだしきいかり。

譬へば世尊の[一]四輩の弟子の如し。精勤して三寶を修敬すること能はず、懶惰、懈怠にして、道果を求めむと欲して是の言を作さく「我、今、餘の下[二]三果を用ひず、唯、彼の阿羅漢果を得むと欲す」と。亦、時人の嗤笑する所と爲る。彼の愚者等の如く異り有ること無し。

十一、婆羅門、子を殺す喩

昔、婆羅門有り。自ら多智と謂ひ、諸の星術、種々の技藝に於て明達せざるは無しと。己を恃むこと此の如し。其の德を顯さむと欲し遂に他國に至る。兒を抱へて哭く。人有り婆羅門に問ふて言く「汝、何故に哭く」と。婆羅門言く「今、此の小兒七日當に死すべし。其の夭傷を愍れむ。是を以て哭く耳」と。時人、語りて言く「人命知り難く計算[一]喜錯す。設ひ七日の頭にも或は能く死せざらむ。何ぞ豫め哭くことを爲す」と。婆羅門、言く「日月闇なる可し、星宿落つ可し。我の記する所終に違失無し」と。名利の爲めの故に七日の頭に至り自ら其の子を殺し以て己の說を證す。時に諸の女人、却後七日其の兒の死を聞き咸皆歎じて言く「眞なり、是の智者の言ふ所錯らずと。心、信服を生じ悉く來り敬を致せり。

猶し佛の四輩の弟子、利養の爲めの故に自ら道を得たりと稱するが如し。愚人の法有り善男子を殺し詐りて慈德を現ず。故に將來苦を受くること窮り無からしむ。婆羅門、己の言を驗す爲めに子を殺し世を惑すが如し。

十二、黑石の蜜漿を煮る喩

昔、愚人有り、黑石の蜜を煮る。一富人有り、其の家に來至る。時に此の愚人、便ち是の念を作さく「我、今、當に黑石の蜜漿を取り此の富人に與ふべし」と。即ち、少しの水を著け用つて火中

【一】四輩。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆のことなり。

【二】三果。聲聞乘の聖果の差別に四を立つ。一は豫流果・一來果・不還果・阿羅漢果の四なり。

【一】喜錯。喜は妄の寫誤なるべし、あやまるの意。

ず盜まず直に實語を作し兼て布施を行ず」と。時に愚人有り、其の此の語を聞き便ち是の念を作して言く「我が父の德行復汝の父に過ぐ」と。諸人、問ふて言く「何の德行有るや。請ふ、其の事を道へ」と。愚人、答へて言く「我が父、小くして來り婬欲を斷絕し初より染汚無し」と。衆人、語りて言く「若し淫欲を斷ちなば云何が汝を生まむ」と。深く時人の怪笑する所と爲る。

猶し世間無智の流、人德を讃めむと欲するも其の實を識らず反つて毀呰を致すが如し。彼の愚者の如く意好く父を歎じ言過失を成ず、此れも亦復是の如し。

十、三重の樓の喩

往昔の世、富みて愚の人有り。癡にして知る所無し。餘の富家に到り三重の樓を見る。高廣、嚴麗、軒敞れ疎朗にして心に渴仰を生ず。卽ち是の念を作さく「我に、財錢有り彼より減ぜず。云何が頃來而も是の如きの樓を造作せざりしや」と。卽ち、木匠を喚び問ふて言つて曰く「彼の家の端正の舍を作るを解するや不や」と、木匠、答へて言く「是れ、我が作る所なり」と。卽便ち語りて言く「今、我が爲めに樓を造り彼の如くすべし」と。是の時、木匠卽便ち地を經り墼を壘ね樓を作る。愚人、其の墼を壘ね舍を作るを見て猶疑惑を懷き了知する能はず。而して之に問ふて言く「何等をか作らむと欲するや」と。木匠、答へて言く「三重の屋を作る」と。愚人、復言く「我、下の二重の屋を欲せず。先に我が爲めに最上の屋を作る可し」と。木匠、答へて言く「是の事有ること無し。何ぞ最下重屋を作らずして彼の第二の屋を造り得ること有らむ。第二を造らずして云何が第三重屋を造り得む」と。愚人、固く言ふらく「我、下の二重屋を用ひず。必ず我が爲めに最上の者を作る可し」と。時の人聞き已り便ち怪笑を生じ、咸、此の言を作さく「何ぞ下の第一屋を造らずして上者を得ること有らむ」と。

猶し外道のごとし。佛の善語を聞き盜竊して用ふ。以て己の有と爲す。乃ち傍人に至り敎へ、修行せしむ。肯て修行せずして而も是の言を作さく「利養の爲めの故に彼の佛語を取り衆生を化導す。而も實事無し」と。云何が修行せむ。猶し向に愚人、財を得る爲めの故に是を我が兄と言ひ負債の時に及び復兄に非ずと言ふが如し。此も亦是の如し。

八、山羌、官庫に偸む喩

過去の世、一[1]山羌有り、王庫の物を偸み遠く逃走す。爾の時、國王人を遣し四出し推し尋ぬ。捕へ得て將ゐ王の邊に至る。王、卽ち其の衣を得る所處を責む。山羌、答へて言く「我が衣、乃ち是れ祖父の物なり」と。王、衣を著けしむ。實に山羌の本の所有に非る故に之を著くるを知らず。應に手に在るべき者は脚の上に著け應に腰に在るべき者は返つて頭上に著けぬ。王、賊を見已り諸臣等を集め共に此の事を詳にす。而して之に語りて言く「若し是れ汝の祖父已來の所有の衣ならば應に著くるを解すべし。云何が顚倒し上に用ふるを下と爲さむ。解せざるを以ての故に定むで知る。汝の衣、必ず是れ偸み得たるなり。汝の舊物に非ざるなり」と。

借りて以て譬と爲さば、王とは佛の如く、寶藏とは法の如く、愚癡の羌者は猶し外道の如し。竊に佛法を聽き己の法中に著け以て自らの有と爲す。然るに解せざるの故に佛法を布置し上下を迷亂す。法相を知らざるは彼の山羌、王の寶衣を得て次第を識らず顚倒して著くるが如きも亦復是の如し。

九、父の德行を歎ずる喩

昔時、人有り。衆人の中に於て己の父の德を歎じて是の言を作さく「我が父、慈仁にして害せ

【一】山羌。山賊の意。

六、子死し家中に停置かむと欲する喩

昔、愚人有り。七子を養育す。一子先に死す。時に此の愚人子既に死せるを見て便ち其の家の中に停め置かむと欲し自ら棄て去るを欲せず。傍人、見已りて之に語りて言く「生と死の道異る。當に速に莊嚴し遠處に致して之を[一]殯葬すべし。云何が留むることを得て自ら棄て去るを欲せずや」と。爾の時、愚人此の語を聞き已り即ち自ら思念へらく「若し留むることを得ず要ず葬るべきならば須く更に其の一子を殺すべし。兩頭に停擔はゞ乃ち[二]勝致なるべし」と。是に於て便ち更に其の一子を殺す。而して之を擔負ひ遠く林野に葬る。時の人、之を見て深く嗤笑を生じ未曾有と怪しむ。譬ば比丘、私に一つの戒を犯し情改悔を憚り默然として覆藏し自ら清淨と說く。或は知者有らば即ち之に語りて言く「出家の人、[三]禁戒を守持すること明珠を護るが如くにして缺落さしめず。汝、今、云何が所受を違犯し懺悔せざらむと欲するや」と。犯戒者言く「苟くも懺を須ゆれば更に就きて之を犯し然る後當に出すべし」と。遂に便ち戒を破り多く不善を作す。爾して乃ち頓に出せり。彼の愚人、既に(子)死し又一子を殺す。今、此の比丘も亦復是の如し。

七、人を認め兄と爲す喩

昔、一人有り。形容、端正にして智慧具足す。復、錢財多く世を擧げて人間、稱歎せざるは無し。時に愚人有り其の此の如きを見て便ち我が兄と言ふ。爾る所以は彼錢財有り須ふれば則ち之を用ふ。是の故に兄と爲す。其の[一]還債を見て言く「我が兄に非ず」と。傍人、語りて言く「汝は是れ愚人、云何が財を須ふれば他を名けて兄と爲し、債を負ふに及ぶの時復兄に非ずと言ふ」と。愚人、答へて言く「我、彼の錢財を得むと欲するを以て之を認めて兄と爲す。實は是れ、兄に非ざるなり。若し負債の時ならば則ち兄に非ずと稱す」と。人、此の語を聞き之を笑はざる無し。

【一】殯葬。はうむること。

【二】勝致。すぐれたるおもむき。

【三】禁戒。佛の制定せる法律にて非を禁じ惡を戒めしもの、三藏中の律藏專ら之を明す。

【一】還債。借債をかへすこと。

「我、去るの後汝一死せる一人の婦女の屍を齎し屋の中に安著き我が夫に語りて言ふべし。云く、我已に死せり」と。老母、後に於て其の夫主不在の時を伺ひ一つの死屍を以て其の家の中に置く。其の夫、還るに及び老母、語りて言く「汝の婦已に死せり」と。夫、即ち往きて視是れ已の婦なりと信じ哀哭、懊惱す。大いに薪油を積み其の骨を燒き嚢を以て之を盛り晝夜懷き挾む。婦、後の時に於て心、傍夫を厭ひ便ち家に還歸る。其の夫に語りて言く「我、是汝の妻なり」と。夫、之に答へて言く「我婦、久しきに死せり。汝は是れ阿誰ぞや。妄に我が婦と言ふ」と。乃ち二・三に至る。猶故に信ぜず。

彼外道、他の邪説を聞き心に惑著を生じ謂うて眞實と爲す。永く、改むる可からず。正教を聞くと雖も信じ受持せざるが如し。

五、渴きて水を見る喩

過去に人有り。癡にして智慧無し。極めて渴き水を須ふ。熱時の焰を見て謂らく、是れ水と爲すと。即便ち、逐ひ走り[一]辛頭河に至る。既に河の所に至り對視て飲まず。傍人、語りて言く「汝、渴を患ひ水を逐ふ。今、水の所に至り何故に飲まざる」と。愚人、答へて言く「君飲み盡す可し。我、當に之を飲まんとするも、此の水、極めて多く倶に盡す可からず。是の故に飲まざるなり」と。爾の時、衆人、其の此の語を聞き皆大いに嗤笑せり。

譬へば外道、其の理を僻取するが如し、已、佛戒を具へ持つこと能はざるを以て遂に便ち受けず將來得道の分なく生死に流轉することを致す。若しくば彼の愚人、水を見て飲まず時に笑ふ所と爲るも亦復是の如し。

【一】辛頭河。梵に(Sindhu)。贍部州の阿耨達池より出づる四大河の一なり。池の南面より出で一匝して西南海に入る。

く。方に牛を索め來り乳を轂取らむと欲す。而も此の牛乳卽ち乾きて有ること無し。時に爲めに衆賓或は瞋り或は笑ひぬ。

愚人も亦爾なり。布施を修せむと欲し方に言く「我大いに有るの時を待ち然る後頓に施さむ。未だ聚むるに及ばざる頃或は縣官、水・火・盜賊の侵奪する所と爲り、或は卒に命終す。時の施に及ばざること彼も亦是の如し。

三、梨を以て頭を打ち破る喩

昔愚人有り、頭上毛無し。時に一人有り梨を以て頭を打つこと乃ち二・三に至る。悉く皆傷き破る。時に此の愚人、默然として忍受し避け去るを知らず。傍人、見已りて之に語りて言く「何ぞ避け去らざるや。乃ち往き打を受け頭をして破らしむるに致るや」と。愚人、答へて言く「彼の人の如きは憍慢にして力を恃み癡にして智慧無し。我頭上、髮毛有ること無きを見て謂へらく、是石と爲すと。梨を以て我を打ち頭破ること乃し爾なり」と。傍人、語りて言く「汝、自ら愚癡にして、云何が彼を名けて以て癡と爲すや。汝、若し癡ならざれば他の者に打たれて乃し頭破るに至るも逃避するを知らざるや」と

比丘も亦爾なり。信・戒・聞・慧を具修すること能はず。但威儀を整へ以て利養を招くは彼の愚人の他に頭を打たれ避くるを知らず乃し傷破るゝに至り反つて他の癡を謂ふが如し。此の比丘なる者も亦復是の如し。

四、婦、死を詐稱する喩

昔、愚人有り。其の婦端正にして、情甚だ愛重す。婦、眞信無し。後、中間に於て他と共に交往す。邪淫の心盛にして傍夫を逐ひ已の婦を捨離れむと欲す。是に於て密に一老母に語りて言く

百喩經

尊者、僧伽斯那撰
蕭齊、天竺三藏、求那毘地譯

卷の第一

一、愚人、鹽を食ふ喩

昔、愚人有り。他家に至る。主人、食を與ふるに淡くして味無きを嫌ふ。主人、聞き已り更に爲めに鹽を益す。既に鹽を得るに美し。便ち自ら念言へらく「美き所以は鹽有るに縁る故なり、少しく有るも尚爾なり、況んや復多きをや」と。愚人、智無く便ち空しく鹽を食ふ。食ひ已り口[一]爽返し其の患と爲りぬ。

譬ば彼[二]外道、飲食を節め以て道を得べきを聞き、即便ち斷食すること或は七日或は十五日を經て徒に自ら困餓するも道に益無し。彼の愚人鹽の美きを以ての故に而も空しく之を食ひ口をして爽はしむるを致すが如く、此れも亦復爾なり。

二、愚人[一]、牛乳を集むる喩

昔、愚人有り。將に賓客と會せむとす。牛乳を集め以て供設に俟たむと欲す。而して是の念を作さく「我、今若し豫め日々の中に於て牛乳を[二]轂取らば牛乳漸く多くして卒に安處無し。或は復酢敗せむ。如ず牛腹に就いて之を盛り、會の時を待ち（それに）臨みて當に頓に轂取るべし」と。是の念を作し已り牸牛を捉へ母子各々處を異にして繫ぐ。却後一月なり、爾乃ち會を設け賓客を迎へ置

【一】爽返。案に違うてびり〳〵すること。

【二】外道。佛教外に道を立つるもの、邪法にして眞理の外なるもの。

【一】衆經撰雜譬喩經　No.6

【二】轂取。しぼり取るの意。轂、搾の音、訓ち、しぼる。

34、草木皆藥と爲る可き喩
35、屠兒喩
36、王布施を好む喩
37、龍水を藏す喩
38、聖王輪を得る因緣喩
39、梵王長壽喩

等の三十九喩經である。

五は衆經撰雜譬喩であつて、これは比丘道略の集、姚秦三藏鳩摩羅什の譯である。一部全二卷の中に四十四の譬經が集錄され、前經と約十經の物語が一致してゐる。

是等の集錄以外單譯の喩經となれば獼狗經(一卷)、群牛譬經・大魚事經・譬喩經・灌頂王喩經・醫喩經等あり、又巴利中阿含にはその喩經(Opamma dhamma)が十經根本篇第三品に收められて居り、それに相當する漢譯中阿含の諸經又譬經と名付けられてゐる。又雜尼柯耶の緣品(Nidāna-vagga)中、第九の喩經の十二經はこれ亦喜笑譬話の興味多きものである。それに相當する漢譯では、雜阿含、第四十七卷の第十三經より第二十四經に至る十經がそれに當る。

五、著者と譯者

百喩經の著者は僧伽斯那(Saṅghasena.衆軍と譯す)といはれ天竺の僧である。開元釋敎錄は此經の譯者の師匠の如く記してある。

經の後記によれば、此經を編輯した意圖は癡人の爲に佛の敎を解せしめむがためである。樹の葉に裹むである阿伽陀藥の如く藥を取り塗り終れば樹の葉を捨てるであらう。戲笑の樹葉に佛法の實義を盛りそれを愚癡人に塗るにある。實義を塗れば戲笑を捨てよとある。一般世人に外道の人に或は出家の爲めに佛道の實義を明かならしめるのである。著者は又此百喩經をいみじくも癡花鬘を名けてゐる。愚癡人の爲の花鬘の義である。

譯者は中印度の人。求那毘地(Guṇavṛddhi 齊に德進といふ)であり、南齊、武帝の永明十年九月十日(西歷四九二年)飜譯したものである。

此處に國譯したのは大正藏經により、その字句の上に適宜に脚註なる宋・元・明の諸本を依用した。尙、二三の誤植は縮刷藏經により指示して置いた。

昭和五年一月十五日

譯者　赤沼智善
　　　西尾京雄　識

ぜる苦藥のつとめをこの喩經が果さむとしてゐるのである。

四、同種の集錄

漢譯の大藏經の中には百喩經と同じ目的を以て編纂されてゐる經典が五つある。

一は、雜譬喩經と題し、又新譬喩經ともいはれ後漢・月支沙門・支婁迦讖の譯であり、一部全一卷十二の物語が集錄されてゐる。

二は同じく雜譬喩經といはれ、又菩薩度人經とも稱し一部全二卷の中に三十二の譬經が輯められてゐる。後漢の時代に譯されたものであるが譯人を失してゐる。

三は舊雜譬喩經といはれ、又、雜譬喩集經・雜譬喩經・舊雜譬喩集經・集譬經とも稱せられて吳の康僧會の譯したるもので一部全二卷の中に六十一の喩話が集められてゐる。

四は雜譬喩經であり、譯人の名を出さずに撰號の所に比丘道略集となつてゐるから一定の梵本より譯したものでなく十二分經中より抄出したものであるらしい。一部全一卷の中に三十九の喩話が集錄されてゐる。その喩名を擧げると、

1、雀離寺の師沙彌を將ゐらる喩
2、聖王、九百九十九子を生む喩
3、兄弟二人共に沙門と作る喩
4、伎兒種々の伎を作す喩
5、比丘、擯けらるゝ喩
6、目連、弟子と耆闍崛山を下る喩
7、善根(菩薩)の喩
8、木師、畫師の喩
9、大迦葉婦の因緣喩
10、兄、禪を好み弟多聞を好む喩
11、羅云珠(尊者)喩
12、龍天に昇る喩
13、僧に於て淨地、大行の喩
14、貴人の與に唾を蹋む喩
15、佛弟子と舍衞に入り乞食する喩
16、醫師王の病を治す喩
17、惡雨の喩
18、阿修羅因緣喩
19、王子山に入る喩
20、鹿の林喩
21、尸利求多の喩
22、婆羅門從り食を乞ふ喩
23、田舍人の喩
24、呪龍の喩
25、石道に當る喩
26、蛇頭尾共に諍ふ喩
27、捕鳥師の喩
28、五百力士沙門と爲る喩
29、三堅要の喩
30、酪を賣り自存する喩
31、五百賈客海に入り寶を求むる喩
32、劫盡き燒くる因緣喩
33、貴人比丘尼と爲る因緣喩

る長者窮子の喩、同藥草品の中に說かれてある藥草の喩、同化城喩品の中に說かれてある化城喩の如きは世間周知の喩話である。

喩話である以上それは常に二つの部分からなつてゐる。即ち、正しく喩の話とその喩が言ひ現はしてゐるもの即ち道德的教訓の話か宗教的教誡の話かである。今、此處に述べる喩經も喩の話とその喩話が指示する佛教訓話との二部分から成り立つてゐる。然し多くの喩經中には前者の喩話のみ有し、後者の訓話の缺けてゐるものもある。百喩經に於ては、正規の形式を備へ必ず二部分から成り立つてゐる。隨つて是等二部分の中前者なる譬話にその說話の重心を置き、僧伽斯那の言葉を藉れば喜笑をその物語の中心に置く一つの部類と譬話を後者の教訓に專ら利用して教訓の理解の一方便に用ふるものとの二部類がある。此等、喜笑譬話と正規な譬話とは共に釋尊自身も話されたであらうし、又佛徒が盛むに創作して以て特に一般凡愚の人々に佛教の法話を話されたものである。これが佛教傳播の上に如何に益だつて來たかは想像に餘りある。

三、百喩經の組織と內容

百喩經は喜笑譬話の集錄であつて一々の喩話は戲笑を以て滿ちてゐる興味深いもののみである。四卷に分れ第一卷に二十一、第二卷に二十、第三卷に二十四、第四卷に三十三、計九十八譬話の大集である。各卷數量に一定の標準がない樣に說話の內容に就ても各卷統一がない。

今、此等九十八の喩經が何れの人々の爲に說かれたものであるか左にその表を揭げることゝしやう。

イ、一般大衆
No.2　9　13　14　15　16　17　18　21　22
23　24　25　26　27　28　29　30　31　33　34　35　36　37　38
39　40　41　42　43　44　46　47　49　50　55　56　57　59　60
63　64　66　67　68　69　70　71　72　73　75　76　78　79　80
81　82　83　84　85　86　89　90　91　93　94　95　96　97　98

ロ、王
No.20

ハ、出家
No.3　6　10　53　54　92

ニ、出家と大衆
No.45　48　74　88

ホ、外道
No.1　4　5　7　8　11　12　19　32　58　61　62　77

ヘ、教法
No.51　52　65　87

合計　九十八

以上に示さるゝ如く、一般に愚かなる世人の爲めに譬話がその大部分を占めて居り、次に外道の爲めに說かれたるものが多數を占めてゐる。是等の物語は先に興味ある戲笑の物語をなして民衆を笑殺し更に實義を以て甦らしめてゐる。重病の人に苦藥を服ます必要ある時方便の爲めに石蜜を混ずるであらう。戲笑の語は石蜜であり實義は苦藥である。石蜜を混

百喩經解題

一、百喩經の表題

百喩經は百句譬喩經・百句譬喩集經、又、百譬經とも名づけられ、百の喩の物語を編集した經典である。それを梵語に還元すれば Upamā-Çataka であり、それが譬喩と名づけられる邊より佛教の十二分經の第七位を占むる譬喩(Avadāna)と混合され易いものであるが、それとは全然別なる文學形式のものであつて十二分經中にはその位置を占めてゐない。然らばこの喩文學は如何なる組織と形式と内容とより成立してゐるのであるか。

二、Upamā の語の意味と性質

Upamā は喩と譯され、譬と譯され時にその二字を續けて譬喩と譯される。然し此の場合は撰集百緣經の解題に於て述べたが如く譬喩と譯する時には原語を Avadāna とし、それは十二分經の第七位を占めてゐるものであり、特異なる文學形式を持つて居り、佛教文學中廣大なる領域を占めてゐるものである。而してその性質は、譬喩とは現在世の出來事を前世に爲した行爲に結びつける所の――何んとなれば現在は過去の産物と考へられてゐるから――緣を明かならしめる運命的教訓である。Upamā は以上の譬喩とは別の形式の物語であり、それと區別する爲めに今玆では譬喩の譯語を用ひず、喩、若しくは譬の譯語を採ることゝする。西藏語に於ては Dpe と譯してゐる。

Upamā なる女性名詞は Upama なる形容詞の名詞になつた語であり、蓮華の如き眼、ビンバの如き唇、月の如き眉等の辭句に於て如きに相當する語が Upamā なる語である。それが名詞になれば譬話の意味になつてくる、それは一つの纏つた比喩物語を指すのであつて、佛教の十二分經中にはその地位を得てゐないが譬喩文學が占めてゐる如く特徴ある物語となつて佛教文學中相當なる領域を占めてゐるものである。

この喩物語は印度人の非常に得意とする所であつて有名なる文學作品には到る處發見せられるものである。又、釋尊自身も非常に巧みであり其の教説に應用せられ、了解し難き說法は理解を容易ならしめ面前の比喩物語によつて自然に解脫へと導かれたことであつた。阿含の諸經には多くの譬經が散說され、後の大乘諸經典に至りては巧に援引し來りて興味を唆り誘化導引のことに利用せられてゐる。かの法華經譬喩品の中に說かれてゐる火宅の喩、同信解品の中に說かれてあ

賢愚經解題（けんぐきやうかいだい）

賢愚經（けんぐきやう）

目次

本縁部 七

赤沼智善
西尾京雄
共譯

國譯一切經

大東出版社藏版